KAIZO

改造

十二月號

19

◇兒玉尊臣氏新著◇

《津々たる趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしむ》

好評激甚

趣味生活 和歌の作法

四六判最上表美本
全壹册四百餘頁

正價金貳圓
送料十二錢

本書は趣味に生き和歌道に入らんとする人々の爲に編述したものである。內容は和歌を作らんとする程の人々は和歌史の大要を知らざるべからずとして まづ日本和歌小史を述べ次に古來著名の歌學書を平易な現代文をもつて解釋し更に歌語斷片を叙して和歌を作らんとする氣分をそゝり最後に現代大家の名歌を歌題別に配し各歌題には作歌上に最も手引となる類語を羅列し 津々たる趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしめやうとするものである。三千年來の洗練を經た日本固有のもので而も我國民性に最も適はしい藝術である和歌の道を趣味生活を欲する人々に心からおすゝめする。――《大好評を博し注文殺到す》――

石川誠著 ●萬葉集 古今和歌集 新古今集 選釋
和歌入門者の讀物として參考書として好適のもの大好評增刷す
（七版） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

上田文學博士 山田武司著 ●參考 近世名家國文新釋
苟も近世文學を語る者の必讀すべき最良の伴侶たる書
（新刊） 金五圓八拾錢 送料廿七錢

吉澤文學博士 奥里將建著 ●最新國文學史辭典
嶄新な年表と系譜とは國文學研究者に絶好の師友たる物也
（新刊） 金三圓三拾錢 送料廿七錢

新屋敷幸繁 ●現代文學の鑑賞
獨特の論と實際と詩人的熱とを以て態度方法を描き出した鑑賞讀本
（新刊） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

山名正太郎 ●政談演說仕方と聽き方
際物でなく眞に有益な指導書手引草精讀の價値十分
（五版） 金壹圓五拾錢 送料金八錢

山名正太郎 ●思潮文献 日本自殺情死紀
珍らしく興味ある本と大好評を博し賣行激甚再版賣切增刷
（三版） 正價金貳圓 送料十八錢

日高瓊々彥 ●國家に及ぼす宗教の害毒
日蓮の如きも玆ではみぢめな馬脚を露出せるなり
（三版） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

春藤與市郎 ●古今世界大陸戰史
戰爭!!是れ何故に起る不戰條約の成否や如何先づ是れを戰爭史に觀よ本書は現代人の讀物として實に有益な書である
（新刊） 金參圓貳拾錢 送料十八錢

春藤與市郎 ●古今世界大海戰史
（新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區西小川町二ノ三 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

四版

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯

人生達觀

四六判總洋布製
定價 貳圓七拾錢
郵稅十二錢

『西洋では貴婦人が自動車に乗つて易者の處へやつて來る**文明の矛盾だ**』と云つた者がある。ところが、この事實はむしろ**人間性の眞實な缺陷と要求**とを物語つてゐる。眞實に知つて居り確めてゐる事の無限に少ない人間が占ひを求め豫言を欲するのは當然の事である。然るに**最高等の占ひ**であり、**豫言**であるのは**偉大な哲學者の人生觀**である、そこには運命の大きな底流れが示され、不可測な消息が明斷され、**人生の根本的**なからくり、仕掛けが解體され**現實と未來**に對してどう歩み、どう進むべきかゞ數へられ、失はれたもの捜されてゐるものの何處にあるかが指されてゐる。我々は實に、この**『人生達觀』が斯様な意味での秘錄**であることを信じて江湖にお薦めする。

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯

三版

宇宙及人生

原名『意志及心識としての世界』全譯

本書は獨逸の大哲學者ショ氏の主著「**意志及び心識としての世界**」の逐字的口語譯である。原著はニイチエも「**二週日の間、二時に寢ね六時に起て二千頁を讀破した**」といつた位世界的の名著。

上卷四圓五拾錢
中卷四圓
下卷四圓
郵稅各十八錢

印度マドラス大學
ナラス教授著
駒澤大學教授
立花俊道譯

七版

佛教の要諦

幽玄なる佛教々理の眞諦を何人にも解し易きやう手に取る如く明快に說破せる稀世の名著で、**佛教の知識を得んと欲する萬人の必ず一讀すべき名著である。**

四六判總布
參圓貳拾錢
郵稅十二錢

石龍子著

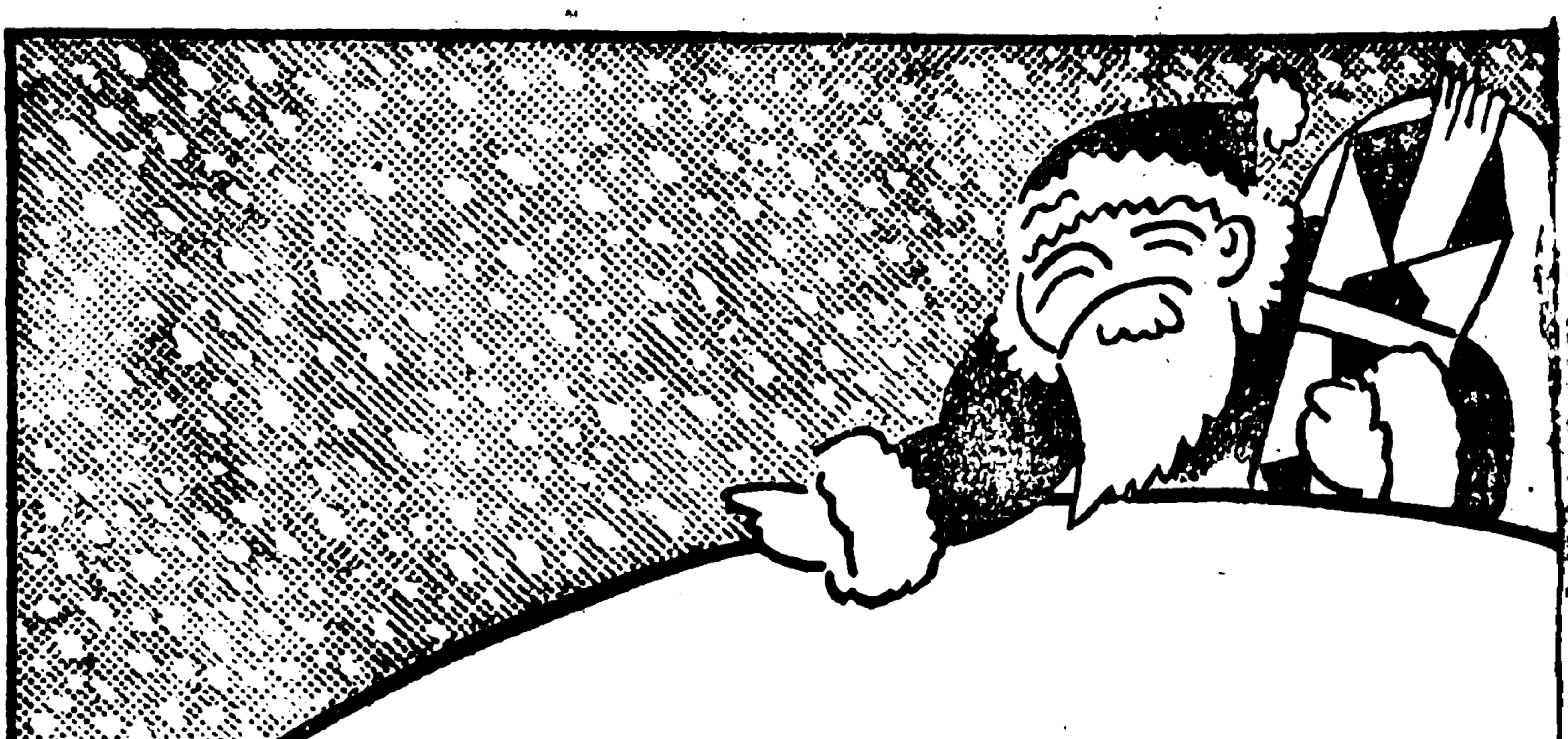
三版

性相講話

「**人は見かけに由らぬ**」とは其術を心得ないからで、「**人は見かけ通りのもの**」、人の正邪、賢愚、雅俗、生涯の運不運等は悉く其容貌肢體に顯はれてゐる、此書は斯界の權威石龍子先生の「種あかし」である。

四六判總布
貳圓
郵稅十錢

東京本郷西片町 玄黃社 電話小石川一三一九番 振替東京七九九五番



クリスマスのプレセント

歳末年始の御贈答品

價格	品名
壹圓	ウワークボックス
壹圓	コンサート
壹圓	シユガーウエフアース
壹圓	マリー
壹圓	モレット
壹圓	オールソーツ
壹圓	ミーチヨイス
壹圓	二種詰合ドロップス
貳圓	フレンチメキスト
貳圓	オールソーツ
壹圓五拾錢	モダンメキスト
壹圓五拾錢	クリームウエフアース
壹圓五拾錢	ショートケーキ
壹圓五拾錢	オールソーツ
壹圓五拾錢	三種詰合ドロップス
壹圓五拾錢	フレンチメキスト 一円六〇(錢)
貳圓五十錢	記念チヨコレート
貳圓五十錢	アソートメント
參圓	モダンメキスト
參圓	フレンチメキスト

平和と健康の贈物

森永の菓子



改造 十二月號 目次

御大典と我民族的使命

我々はここに御大典にあたりて虔みて祝禱の誠意を表したてまつると共に我々の民族的使命の奈邊にあるかを討究するの要緊切なるを念ふ。

もとより肇國の叡意はわれ〳〵のはかり知ることのできないほどの鴻圖が藏せられてをる。この鴻圖を達成する上に、わが民衆はどう動かなくてはならぬか。その第一は國民文化の躍進開展にあたりて勇敢に、そして自主的に中外の精髓を取りいれることにある。此點ではその選擇に斷じて偏狹愛憎があつてはならぬ。何れの文化にも如何なる思想にもその學ぶべきは自己を虚ふして學ぶべきである。第二には世界的に我國が進出し、そしてその指導的地位を一層鞏固にするため我民族の氣宇を大にし、偏武偏文の兩極政策をかたく排し、いたづらに大事な國務を靡せず、永く獨立強國として立つて行けるやうにすべての實力を蓄積するにある。すべて實力なき國家は權威を以つて樹つことができぬ。我々の是として進まなくてはならぬ正道と知りつつも實力なければ東強西翻を左眄右顧せねばならぬ。この意味に於て我々が大業を遂ぐる上に於て一にも實力、二にも實力の蓄積にあることを忘れてはならぬが、しかし雄國の弊としてややもすれば正義を蔑り、慈愛を回顧せぬことがあり得る。この一點――我々は先祖より惠まれた正義を貫く心――慈愛に生きる寛宏の德風――に於て列強に誇りうる歴史を有つている。この美點が實に我民族的使命を内に外に果す礎石となるのである。この點を蓄積擴充して我々は何れの地へ、如何なる形式を以つて延びて行くべきか。我國はどうしても近く支那と和せねばならない。そして經濟的足だまりを全支にしつかり植付けねばならぬのだ。いかに南洋、南米にのび易いといつても南支未だ定らずんばどうとも進出のしやうがない。その後に南洋南米濠洲の順を以つて市場を獲得すべきである。而してその獲得方法は今までの散彈的、個人的でなく、密集的、團體的陣形に出づるの要がある。全國民の意志力・經濟力を統一してかかるの要がある。ただ、近時の我邦人の狀勢を見るに、その多くが生活の小安定を中心として姑息偸安に一生を沒頭して、小じんまりなる人生觀を謳歌し、敢えて險難剛快の歩みを歩かうとしないのは大業を克服せよの聖旨に悖るの甚しきもの。我々はいま大規模の國家的行爲に出づべき準備行爲にある。そは實に國家として受くべき刻下すべての苦難を突破し、内にますます緊縮して經濟力財政力を涵ひ、外にのびる足どりを揃へてのしりのしり統制ある力を南支那へ！　南洋へ！　南米へ！



日本より南洋へ

井上準之助

私はこのごろ暇に任せて二ヶ月程で南洋を視察したが、非常に愉快な旅行であつて、なぜもう少し前に南洋を見なかつたらうかと悔んで居る處である。若し十五年も前に私が南洋を見て居つたならば、私の一生涯には非常に違つたことが出來たらうと思ふ位に感じて歸つたのである。加之、斯ういふ昔あつたことを思出した。以前私が高等學校に居つた時にワシントン・アービングの書いたジョージ・ワシントンの傳記を讀むと、ワシントンが二十を少し越えた頃に陸軍の工兵でありて測量師になつて居つたのだが、ワシントンがポトマツク河の[illegible]い青々とした森林があり、此れがだんだん開拓せられて農園となりつつある光景を眺めて深き感激に耽けつて居る處が書いてあつて、私は此を讀んでひどく氣に入つて高等學校の一年間は工科大學に入つて測量技師になることに決めて置いた。所が今度蘭領印度のスマトラに行つて非常に大きな深い森林を見、その中を流れて居る河を二日間遡つてもまだ盡きないような大きな森林を見て、昔のそのことを考へて私は愉快に感じたのである。それであるから私が南洋を見て非常に愉快を感じたことに共鳴して若いあなた方にも南洋に出勇けるようにお勧[illegible]

生涯を送るといふことが、如何に愉快であるかといふことを謳歌したいのである。私も十五年前に南洋を見たならば今日のやうに日歩勘定をしたり、休業銀行の事などに屈託したりするやうにならなかつたらうと考へて居るのであるが、これは悔いてもいたしかたがないことであるから、ぜひ若い貴方がたに奮發を願ふほかないのである。

私は南洋の中で蘭領印度と馬來半島だけを見たのであるが、南洋といつても、普通フィリピン、コーチンチヤイナ、暹羅、馬來、蘭領印度を入れるのであるが、私の見たのはその一部分である。そのことは豫め御承知おきを願ふことにする。しかしながら大體に於て同一な場所であるのと私が見た所が一番中心の場所であるから、大體私の目撃した蘭領印度を本にして書いて見る。

蘭領印度は、ジヤバ、ボルネオ、スマトラ、セレベス、ニユーギネヤ等の諸島であつて、大きさは日本の朝鮮、臺灣、樺太全部を入れた三倍ほどある。小さな和蘭が此の廣い國を占領して居る。さうして耕作に適したる地面は、日本の耕し得る地面の恐らく五倍以上あらうと考へられる。その中に人間が僅か五千百萬人しか住んで居ない。日本はその廣さは蘭領印度の三分の一であつて八千四五百萬の人間が居るのである。蘭領印度の住民のことを今ここに述べると、五千百萬人の中で四千九百萬人は土人である。土人といつても、先づ日本人と大差はない。只色が少しく黒いのと、痩せた者が多いと考へて居れば宜しい。[illegible]い。ただ裸で腰卷をして跣足で歩くことが違ふだけである。土人以外の歐羅巴人は主に和蘭人であるが、それと他の歐羅巴人全部を入れて二十萬以上であり、其の他の外國人で多いのは支那人で、これが五六十萬居る。日本人は二千人少し越す位である。蘭領印度といふところはどういふ所であるか、斯ういふことを抽象的に述べると、熱帶地方であるから、貴方がたも恐らくは私と同一に感ぜられるだらうと思ふが、熱帶地方と云へば、直ぐに印度や阿弗利加のことを考へて、日がかんかん朝から晩まで直射して何にも青い物を見ない、反射が強くて日中なんかは外に居つて、堪へられぬ場所だ、夜も暑くて堪へられぬところだと考へられるだらうと思ふ。所がそれは非常に違ふ。日本の八月のやうな時候はたゞの一日でもなく、海岸地方の最低地で八十度位である。八十度より上ることは殆どなく、正午から四時頃まではかなり暑いが、寒暖計で見ると八十度位で、朝から晩にかけて大體日本の七月の學校休みの始まる前位の時候である。決して堪へられないやうな時候ではない。ジヤバでも、スマトラでも、大陸は平つたい所で、其中央には大きな高い山があつて、そしてそれが三千尺、或は五千尺といふやうな山さへある。非常に道の良い所で三時間位自動車で上ると四千尺位の山に登れるので、暑さを避けるのには少しも差支ない。また日で見るもので青い物がないだらうと考へられるが、草の生えて居ない

ところ、森林でないところは一寸一分もない位で、到るところ森林ならば大森林があり、また耕作されて居るところは青々として穀物が豐かに出來て居るのである。誰でも阿弗利加の沙漠のやうな荒漠であらふことを想像してゐるのであるが、この蘭領印度は絶對にそれと違ふのである。それからもう一つ異つたところは非常に地味が宜しいことである。日本のやうな山の傾斜の甚しい所で耕作も出來ないやうな所は絶無といつていい位で、高い山の上にも平原地の非常に廣いところがあつて、三千尺、四千尺といふやうな所に行つても、それ相當の農園があり、そして非常に良い土地があるのである。それから蘭領印度は無風帶地である。年中を通して風の無い所である。從つて住宅は非常に簡單なものであつて、竹を柱にし簡素な床を作り、それに竹の簀を壁にしてそれで結構住んで居られる。日本のやうに年に幾回か暴風があつて、家屋を吹飛ばすようなことはないから、こんな簡單なもので充分であるのである。

大體蘭領印度は日本の三倍もあるところでジャバが一番開けて居るが、その次はボルネオ、スマトラの順である。ボルネオは可なりの山地であつて、或る部分は耕作に殆ど不適當で、セレベスもさうであるが、スマトラは日本の全體から朝鮮を除いただけの廣さの島であつて、人口は僅か六百萬人しかない。このスマトラが今後一番望みのある蘭[illegible]

あるが、日本で普通喬木大樹と稱せられるもの——その成長に二十年乃至三十年はかゝつて居ると思はれる木が、彼の地では大體五年で成長する。日本では茶は恐らくは三度位しか摘めないが、向うでは八日に一遍づつ摘める。一ヶ月に三度は茶を摘んで居るのである。摘んで八日目になると芽がすくすく七寸位になつて、それに一杯に葉が萌え出る。それから煙草の耕作は、八年に一度の輪作であるから、從つて耕作地は八倍の廣さを持つて居る。さうして休作中の七年の最初の一年は米を耕す、その次に土地を休まして置く間に、大きな周りが二尺以上もあるやうな木が生えて立派な森林になつて了ふ。さうして土地を休まして肥して、それを八年目に伐り倒して耕作するのであるが、熱帶地方では植物が上には能く伸びるから、自然下の方に深く根を張らないので、之を掘起して耕作するのに非常に便利である。蘭領各島の森林に入つて見るとどんな光景かといふと、大概の木が八十尺から百尺までは蔟々のびて、そして枝のないことである。周圍七八尺も一丈もある木がすつくと伸びて居つて、八十尺から百尺上の十尺位の間非常に枝が擴がつて居るのである。——こんな大木のある森林が涯て限りもなくつづいてゐる。護謨でも、油椰子でも、珈琲でも何でも、向うで植物といふものは三年目に皆收穫が出來る。お茶の如きは二年目から收穫が出來る。三年目には完全に[illegible]さうして[illegible]の茶は百年位の[illegible]
[illegible]

それならば[illegible]馬來半島は如何にして英吉利の手に歸したか、といふことを簡單に述べると、千四百四五十年頃にバスコダガマが喜望峰を廻る航路を發見して東洋にやつて來た以後のことであつて、ポルチユガール國のダルベクウルクなる勇士が波斯を征服し、印度のゴアを征服したのが歐羅巴人が東洋に手を伸した初めである。然らば、彼等の遠征の目的は何れにあつたかと云ふと、其の頃の東洋人の文明と富の程度はずうと歐羅巴人以上であつて生姜、胡椒、肉桂、大蒜(にんにく)や總ての香料は東洋にばかりあつて歐羅巴にはなかつたので、此等のものを商ふ爲に段々印度の方に來たのであつた。さうして喜望峰を廻つて來るやうになり、ポルチユガールが波斯印度を占領してから以後は、商賣よりも土地の占領が主となり、千六百年代に英吉利人がやつて來て印度を征服してから、東洋に於てポルチユガールと英國との間に戰は絶えなかつたのであるが、この兩者の爭の間に和蘭が今の蘭領印度を征服したのである。歐羅巴本國の爭亂の爲めに、蘭領印度や馬來半島は或は英吉利領となり、或は和蘭領となつたりして、今日の如き蘭領となりしは千八百十六年であつて、即ち今日の英領馬來が出來、蘭領印度が出來たのは百年前のことである。

次には蘭領印度の產業上の價値と云ふことについて述べると、一昨年度に於いて蘭領印度は十七億ギルダーの輸出をして居るのである。一ギルダーは一圓より少し安いけれども、今日は日本の爲替相場が安い[illegible]ルダー、砂糖が二億五六千萬ギルダー、石油が二億ギルダー、この以外には錫、珈琲、茶、煙草、油椰子といふやうなものが各七八十萬ギルダー宛ある。斯樣な主に農產物丈けで十七億ギルダーの輸出物を出すのは可なり大きな數字であつて、世界の有數の場所であるのである。加之、馬來半島が矢張七億ギルダー位の護謨を輸出して居る。又錫が一億四五千萬ギルダー出る。蘭領印度及馬來半島の兩方を加へると二十五六億ギルダーの輸出物になるのであるが、世界中で言つてもそれ位の物を出す所は他にはないのである。それから年々護謨でも石油でも砂糖でも非常な速力で以て殖えつゝあるのであるから、恐らくは今後五年經ち、十年經つ中には馬來と蘭領印度は世界中最も有力な農產物の產地になるといふことを私は信じて疑はぬのである。或る學者が今後熱帶地方を支配する國でなくては世界に雄飛することが出來ない――斯う言つたことがある。是は南洋へ行つて見れば誰でも直に感ぜらるゝことである。例へば、和蘭のことを考へてもよい。あれ程の小さな國で人口は僅かに五六百萬人しかないのであるが、若し蘭領印度の植民地がなかつたならば、恐らくは和蘭といふものは今日歐羅巴に立つて國家を成すことは出來ないであらうと思ふのである。それが十七億ギルダーに上る大きな農產物を自國の植民地で拵へて、それで利益を得て居るのである。和蘭が今日世界に立つて居る根據がその東洋の植民地にあることもよく解るのであつて、前に擧げた學者の言つたこと

は非常によく中つて居るのである。これほど世界的に重要な土地を英吉利や和蘭が三百年以前から占領して居ることを考へると中々に先見の明ありと云ふべきである。

蘭領印度英領馬來を今後の投資場所として考へて見たらばどうか、十七億ギルダーの農産物を出す蘭領印度を投資場所として見れば私は非常に望みがあると思ふ。何故ならば土地は今述べし如く廣漠たる土地ありて、その何れの土地と雖、相當に豐饒なる土地であり、大抵の植物はその栽培に適當するのである。そしてその土地は殆ど自由に無代で得られる。人の持つて居る地所を撰擇して取れば相當代價を拂はなければならぬが、政府の持てるものを拂下又は借受けるならば、殆ど無代で出來るのである。日本人でも四萬エーカー、又は五萬エーカーの土地を持てる人もある。一エーカーは四反歩であるから、五萬エーカーと云へば二萬町歩に當る。かかる農園を得ることは容易である。加之、得た權利は流石は和蘭や英吉利であるから、非常に確實な權利である。支那や滿洲では折角得た筈の權利が途中でオヂヤンになつたり、又は、得た權利が政府が潰れて無くなつたりする所とは違ふ。而英蘭の植民地のは非常に確實な權利が自由に得られるのである。而してかく廣漠たる土地がありながら、それを耕作する人手がなかつたなりに別莊を求すのであるが、こゝには世界中で一番理想的な勞働者[illegible]には土人が四千萬人以上居つて、それに對う[illegible]が、支那人は五十錢乃至七十錢出せば働く、さういふ場所に自由に勞働者が得られるといふことで、この土地の値段が非常に價値がある譯である。誰でも知らるる如く亞米利加に歐羅巴人が移住した場合に、亞米利加の南の熱帶の方には歐羅巴の人の勞働に堪へないので非常に困つた結果、今の亞米利加が迷惑をしてゐる黒人を買つて來たのである。その結果棉作物のプランテイションが出來たのだが、南北戰爭もその爲に起つた。今日最も亞米利加が迷惑してゐるのは黒人であるといふやうな大迷惑を起したのである。併しこゝでは土着の人間が非常に安い賃銀で雇へる、斯う云ふことゝ相俟つてこの土地が非常な價値が出て來るのである。

それならば、土人はどうしてそんな安い賃金で働くかと云ふと熱帶地方であるから食糧が非常に安い、亞米利加の總領事の調査によるとジャバ人一日の食糧はギルダーでの十錢掛からない、日本の金で八錢位で宜しいのだから四十五錢の金を取つても相當の餘裕があるのである。或る書物には嘘か本當か知らんが——貴方がたに大體の觀念を與へることはよく出來るのであるが——三百六十五日の中にたつた五日間働いて後は寢て居つて食へると書いてあるが、全くさう思はれる。家を拵へる土地は和蘭政府の保護で土人は勝手氣儘に得られる。家を拵へると言つて[illegible]竹の柱で[illegible]は竹の[illegible]で結構で、家屋敷の[illegible]りには[illegible]

[illegible]居つて食へるといふ。此話は噓のやうな話しだが、よくジヤバの狀況を現はしたものと信じる。然らば土人の勞働者の能率は如何と云ふに、第一一日の勞働時間は短かいし、又無理な勞働は出來ないのである。それは他の習慣、事情にもよるやうだが、マホメツダンの宗教の爲めに種々の迷信もあり、夕刻には早く切り上げて歸るのである。之れに好い例がある。琉球人は馬來蘭領等で魚漁に從事して居るのだが、新嘉坡にも七百人程行つて、一年に二百萬圓位の產額の魚を獲つて居るが、ジヤバに居る琉球人の漁夫に對して和蘭の官憲が土人の財を奪ふといふので、苦情があり、其の結果琉球人の漁夫の船に日本の領事と和蘭の官憲とジヤバの漁夫と同乘して實地見分の結果は、夜中大海で漁をしたり、琉球の漁夫のやうな無理なことは到底出來ないといふことを自白して居るのである。斯んな風に時間を長く働いたり、無理な勞働は出來ないが農村の勞働者としては理想的な勞働者である。ジヤバ人の常食は米であるが、米を耕作するには慣れて居るから、此の結果を來したものと考へらる。加之、非常に優しい性質であつて、プリツト怒るやうなことはないから、農村勞働者としては理想的の者である。日本人でジヤバ人を使つて行くには自分自身が非常にゆつくりした優しい氣分にならなければ彼等を使ふことが出來ぬと稱せられてをる。かくの如く非常に優しい從順な勞働者であるから、こちらが焦つて氣がいらいらしてものを言ふやうでは彼等は働けないのである。それが[illegible]あるから、その農產物が安く出來て和蘭の投資が利益を得るといふことは容易く想像の出來る次第である。

蘭領印度は農產物の耕作地としてはどの意味から考へても總てよく條件が備はつて居る。先年來大谷光瑞師がジヤバに於て農藝を研究して居つたが、結局うまく行かぬからやめたのであつたが、蔬菜の如きも年に十二月即ち月に一度にやれる。日本では春、夏、秋の三度であるが、それが年に十二度蔬菜が出來る。桑が切れば切つたあとから葉が幾らでも出て來ると云ふ狀態である。さう云ふ風な場所であるからどの途から考へても蘭領印度の如き、或は英領馬來の如きは農作物の產地としてはこの上もない場所であるのである。

馬來半島及び蘭領印度に於ける日本人の所有して居る農園の現狀に就て述べると、日本人所有の農園は一時時價一億圓になつたと稱せられて居つた。大體日本の農園は護謨園であるが、最近日本の經濟界の狀勢が惡いために向うに投資してみるものを賣らなければならぬといふやうなものが大分出て來て、最近數年間を通すと、二千萬圓位のものを賣拂つて了つた。こんな事情であるからその代金は多くは日本に取寄せて新規の農園に投資したのではない。それで今殘つて居る日本人の農園を評價したらば六七千萬圓位の價値のものがあつて、これは大體護謨園である。日本人の護謨園にどういふ狀態であるかと言ふ

私は人の仕事を批評することを好まないが、和蘭人や、英吉利

國人の農園の大部分を見て此れを日本人のものと比較すると、農園の規模から其の人の覺悟から、或は金の入高から殆ど比較にならないのである。日本人の農園の初めは、日本に於て金が非常に容易く得られる歐羅巴戰爭後に起つたことであつて、仕事本位で出來た農園にあらずして金を儲けやうといふ爲にのみ出來たのが多いのであるから、先に私の述べたやうなことがあるのも無理はないのであるが、それでは今後の投資はどういふやうにしたら宜いか、如何なる農園に投資すれば最も確實であるかといふ問題になるのだが、今日は既に一般に知る如く護謨は一封度英吉利の金で九ペンス半といふやうに下つて居る。左様に下つて居るが、今日の改良された耕作の方法に依れば決して差支ない。十分に儲けることが出來る。併ながら、その他に今日は段々農園の經營方針が變つて來て、昔は護謨なら護謨と一種類に限つて居つたのであるが、この頃はそれは非常に危險性を多く伴ふから色々な種類の農作物を混ぜて耕作するやうになつた。護謨、茶、煙草、珈琲、或は椰子の中二三種の農產物をそれぞれ適當の廣さの反別耕作して居る。それが今日の投資物の市價の變動から來る經濟上の危險を防ぐ方法として居るから、日本の農園も今後さういふ風に行かなければなるまいと思ふ。それから農園を持つには何處が一番宜しいか、蘭領印度でも、馬來半島でもたいして優劣はないのであるが、細かく議論すれば一方の物條が良いとか、惡いとかいふことがあるだらう。一方は租[illegible]又[illegible]多く[illegible]移民であつて、勞働者を得るには容易である代りに契約をしてゐたので怠け者が一層怠け者になるといふ傾向もある。併し自由移民の方である馬來半島では勞働者を得るに困難がある。各々短所長所はあるのであるから十分に研究しなければならぬと思ふのである。

土地を得ることが容易い、土地の權利が確實で、今日は農作物の研究は行屆いてその方法を守つてさへ行けば十分に安心が出來るといふ程度にまで進んで居るのであるから、私は非常に確實な方法と思つてをる。只だ併ながら斯ういふことを考へて置かなければならぬやうに思ふ。最近十年間日本人が陷つて居る第一の弊害と思はれる投機的の投資には向かない事。一躍して非常な金を儲けやうといふことは出來ない。金儲をしようといふことよりは、日本の人の頭と金の力といふものを蘭領印度に於て世界に示してやらう、仕事をしやう、仕事本位で行くだけの覺悟をしてゐなければ此土地では成功しないと思はれる。尙ほ一部の人は日本の移民問題と結びつけて考へる人もあるが、日本の人口問題に觸れた政策を執ることが出來るや否やと吟味すると、絶對的に出來ない。金を投資することは出來るが、人間を移す餘地はない。四十五錢で働くジャバ人が居る、斯ういふことを考へて見ると、今日の日本の一圓五十錢乃至二圓の給料を取つて物價が高いと歎く、それだけの生活に馴れてゐる人間が土人と共に働くといふことは絶對的に出來ないと思ふのである。

南洋貿易に從事して海外發展に充分の餘地のあることを一言云つて見たい。前に述べたやうに蘭領印度では十七億ギルダーの物を輸出する八億ギルダーを輸入をして居る。十七億ギルダーの輸出をしてそれが悉く農產物であつて、皆それがジヤバ人の勞働を要する仕事であるのである。從つて十七億ギルダーの中でどれだけの勞働賃銀が含まれて居るか知れないが、なかく少からざる金が蘭領印度に落ちるといふことが分るのである。更にこの十七億ギルダー——が每年增加しつゝあるといふことを考へて見ると、ジヤバ人の購買力が相當に殖えつゝあるといふことが明瞭になる。ジヤバ人は米を食ふ。熱帶地方であるから食料の輸入はないが、五千萬人の土人が皆綿布を着るのに一の紡績工場も、織物工場もない。皆な外國から輸入する。工場としては砂糖の工場、お茶の工場であるが、是は皆輸出物を拵へる工場であつて、土民の消費するものを作る工場は一ツもない。今その梗概をのぶれば、外國品で衣及住をして居つて外國の輸出品を皆拵へて居るといふ狀態である。從つてその輸入品は每年殖えて行く。八億ギルダーの中で日本から買ふものは多い年で八千萬圓、少い年でも六千五六百萬圓である。それが段々殖えつゝあるのである。一番主なるものは綿布であるが、綿布が四千萬圓を突破する。その次は陶器である。これが四百萬圓位、その次が臺灣のお茶、その以外には小さな雜貨であるが、その輸出はずんずん殖えて居るのである。

そこでまた私が茲にのべたいのは、この八千萬圓からの輸出をどうして取扱つて居るかと言ふと、大體日本人は卸賣である。その中間に立つて小賣をする者は悉く支那人であるのである。それで支那の如く國が亂れて非常に不安定なる所と違つて、和蘭領では非常に安定してゐる所で、輸出農作物が殖えれば勞働賃銀が殖えて每年購買力がふえる。この間に立つて日本が輸出を殖やすことについては十分に餘地があるのである。支那人の向うを張つて得意を奪うと云ふには骨が折れる。支那人は百年以上も掛つて土臺を築き上げたのであるから、日本人が素手で其の位地に代らんとしてもそれは出來ない。第一は土語を知らなければならない。向うの土地の習慣も知らなければならぬ。ジヤバの言葉は非常に簡單で、誰でも半年も習へば相當に土語が話せると言つて居る。然るに日本人がジヤバに二千人ばかり居るが、これらの人は皆な商賣人であつて、支那人はジヤバ丈けに五十萬人以上居る。寒村僻地まで入り込んで商賣をして居るのである。若し日本の若い人々で、日本の世智辛い土地に滿足できない人々はジヤバ語を少し習つて、さうして內地で商賣をする代りに向うに行つて商賣をするといふ覺悟をすれば、そこに十分の餘地があるのである。殊に二男以下の人々で多少の財產の相續はするが、農村で仕事がなくて困ると云ふ人なれば尙結構であらうと考へられる。土語を學び商賣が手に入つた頃に、多少の資本の出來る人なれば此上もない適當の人と考へる。さうして向ふに行くには十七八位の年頃がよろしからんと思はれる。年上になると懷鄕心が出でて故鄕忘じがたしと云ふやうな譯であるから

寧ろ十七八歳を適當と考へる。氣候に宜くて、土民は從順な心持の好い國民であり、決して望ましくない場所ではないのである。支那に行つて支那人と競爭するといふ苦惱を思ふとき、まるでその艱苦の程度に於て比較にはならないのである。今蘭領印度に渡航される人の參考の爲めにジャバの暑氣のことを、一回繰返して見る。成るほど非常に暑くはない、年中海岸の低地で八十度平均である。併しながら日本と違ふ所は寒い時がない、朝でも夜でも晝でも大した差はない。何故なれば日本は夏と冬の日の長短が三時間も違ふのであるが、向うでは四十五分しか違はない。お天道樣が始終同じ所をあつちこつちしてゐるのであつて、年中私の言ふやうな時候である。玆に非常に面白い話がある。新任のさる領事が何か調べものをして居るのに、余り暑いから涼しくなつたらやらうと言つて休むことがあるが、能く考へて見ると朝でも夜でも何程たつても同樣な氣候であるからいつまで經つても仕事のはかが行かぬと云つて居たが、これは蘭領印度住民の暑氣に對する狀況を能く言ひ現はしたものと考へる。在住日本人は皆な健康であり、馬來半島も蘭領印度も衞生施設も行屆いて、コレラもなければマラリヤもなく、氣候中和で住む地がよい。日本の若い人々が活動するに最も適當の土地と考へる。土語に通じ土人の風俗習慣を知り、努力をするならば支那人と競爭して彼等の利益を奪ひ得ることは疑のないことと考へらるる。[illegible]

る人は是非とも馬來や蘭領印度を視察せられんことを[illegible]の趣味を研究して彼等の好むものを輸出したならば、一層輸出を殖すことが出來ると思ふ。歐米人と違ひ土人の生活狀態は低いのであるから日本の品物は最も適する。歐米人に對しては日本品は低級扱をされるが瓜哇人には最も適當の品であつて、寧ろ日本で賣られるものより一層低級の品も澤山見られる位であるから、今少し製造家諸君が奮發すれば、乾度輸出を飛躍的に增殖し得ると考へる。

最近の問題で南洋と支那と日本の關係のことを一言して置くが、日本人は新嘉坡に五千人、蘭領印度に二千人居る。その同邦人が母國の人々にお話をして同情を得て呉れといふ問題がある、それは支那人のボイコットの問題である。支那人は濟南事件の結果日本品に對するボイコットをして居る。支那人のボイコットは此度が始めではないのであるが、今やつて居るのは七週目である、是ぐらゐ國としては卑劣極まることはないのである。國際間の問題であるから、政府と政府が談判をし得る事件でありながらボイコットをして罪も科もない商賣人を苦しむると云ふことは實に間違つたことゝ考へる。新嘉坡の日本商人の如きは非常に困つて店を支へることが出來なくなつて居る、實に不當極まる話ではないか。國として主張すべき理由があるならば國として主張すべきものであつて、濟南事件の結果が何等の關係もない新嘉坡の商賣人に向つて、斯うゆふ暴動をするといふことは實に卑劣極まるのであつて、[illegible]

れる。そして上海、香港の支那人の居る所には到る所にボイコツト[illegible]る。香港の如きはボイコツトの策源地に近い丈けあつて、日清汽船會社の汽船の如きは廣東や香港には定期航海をして居るが、更に一噸の荷物も積み手がない狀態である。支那本國であるなら已むを得ぬとして、新嘉坡に於てはボイコツトは一層ひどいのである。馬來半島に今では四百萬の人間が居る。その中で百五十萬人は支那人である。その支那人は最も有力なる住民である。三百年以前から玆に根據を定めて、今では一億弗とか五千萬弗といふやうな富豪も居る。又勞働者としても最も收入の多いものである。その支那人が日本品の主なる消費者であるのである。それを賣る商賣人は支那人である。新嘉坡在住の日本商人が日本から輸入をして此れを支那商人に賣り、最後の消費者たる支那人の手に渡るのであるから、ボイコツトが起ると非常な打擊を蒙るのである。支那人は馬來半島には既に三百年前位から段々移住して居つて、三代四代續いてゐて支那語一つ知らないやうな支那人が澤山居るから、日本人に對するボイコツトをするやうな敵愾心が何處から出て來るかといふことを疑つて居るのだが、今の南方政府は非常に金に困つて居る、金を拵へる必要があるのであるが、支那人の中で一番金持は馬來や蘭領印度の支那人であるから、今は國民黨の連中が澤山入り込んで居て苟も多少の金持と云ふ者は皆金を取られて居る。併し佛の顏も三度であつて同じ手段では金を出さないから、今度は日本人を相手に商賣をしてはいかぬとか、日本品を扱つてはならぬと言つて、それを口實にして[illegible]爲に日本人も困つて居るが支那人もまた困つて居る。日本の商人よりも或は支那人の日本品を取扱つて居る支那商人の方が余計に困つて居ると云ふ狀況である。支那人相手の日本の商店には一人の支那人も來ぬし、此れ迄の賣掛金は取れず非常に困憊してゐるのである。床屋には行き手がない、寫眞屋にも來ない、齒醫者の家にも支那人が來ないと言つて困つて居る。色々と私にも相談が有つて無い智慧を搾つてみたが、支那人が最後の消費者であつて、此れがボイコツトをして居るのだから、之に對する救濟策はないのである。しかし馬來には支那人の外に二百五十萬人の住民が居るから、その土人に日本品を賣るやうに方針を變へて行かうといふことで非常に奮發をして居る。ジヤバになると新嘉坡とは聊か違ふ。ジヤバには土人が四千萬人から居つて、此れが消費者である。それで唯日本の商品を扱ふ者が支那人である譯であるから、その救濟策は不可能とは思はれない。又今後度々斯う云ふ事態は繰りかへされるものと思はなければならぬ。來るべきボイコツトは覺悟をして置かなければならぬから、ジヤバの如きは支那人の取扱つて居るのを日本人の手でやるよりほか仕方がない。それには母國の若い人々がジヤバに行つてジヤバ語も知り、風俗習慣も知つて、支那人が百年以來打建てて居る仲買店を取つて代るよりほか仕方がないのであるが、今日直に日本人の手で取つて代らうと言つてもそれは到底出來ないものである。日本人には武器がない、土語に通じ土人の風俗を知るやう

な人がない。それであるから若い人が土語を研究し、商賣上の知識を得る必要があり又さういふものゝ來るのを歡迎もして居る。支那人が百年も掛つて出來たものであるから、さう簡單にはまゐるまいけれども、必ず相當の成功を爲すだらうことを信じてゐる。

南洋における支那人の狀態について簡單に說明する。南洋全體には支那人は千萬人位は居る。馬來半島丈に百五十萬人、蘭領印度には七十萬人斗り居る。此等を稱して華僑と稱する、さうして此等の華僑は每年一億弗以上の金を、母國支那に送りつける。勿論彼等の貯蓄丈けではなしに商品の代金も含まれて居ると思ふが、中々巨額な金ではないか。支那人は三百年以前から此等の地方に移住して活動して居るのである。それで馬來に於ては支那人は驚く可き巨額の護謨園の投資を持ち、斯界の大勢力となり、又錫の鑛山は支那人の手にあるもの多く、ジャバには砂糖園に巨大なる投資を有する支那人尠なからず、スマトラ、ボルネオ到る處支那人の農園を見ざる處なく、又前に述べたやうに此等地方の對土人の商權は殆ど支那人の手に歸し、馬來蘭領印度に於ては支那人は經濟的に大成功をなしつゝある。このことは我邦人の此後の海外發展の上に非常に參考となるべきことゝ考へる。

私はかく述べて來て見ると、日本人の投資、貿易の發展といふことについては、南洋は最も安全な場所である。又日本の若い人々が私が [illegible]

洋のことを忘れてはならない。私のやうに既に年が行[illegible]見たならばと云つて後悔してももう役に立たぬのである。さうした氣持で南洋のことを考へたならば、人間一生涯の中に非常に違つた考へを持つ事にならうと思はれる。併し乍ら世人が若し南洋は日本の人口政策から割出された良い場所といふのならば、私は玆に重ねてそれは絕對に贊成出來ぬのである。向うの國でもそれは好まないのであるといひたい。而かも日本の勞働者はあゝいふ所に行くことは好まない。又我々もそれ等の人があゝいふ所に行くことは望みはしない。それであるからどうか金と頭を資本として共に働かして海外發展をしようといふやうな志の人々があつたならば、是非とも第一に南洋といふことを考へてもらひたいと私は切に希望するのである。

政局の安定と選擧制度

河村又介

一

A、近頃、小選擧區還元論だの、比例代表だのいふ問題が、だいぶやかましくなつてきたやうだが、そのことに就ては何う思ふかね？

B、やはり政治論の一進歩だね。つまり今迄は、問題の中心が選擧權の擴張にあつた。だが、それも曲りなりに、普選で一段落着いたものだから、今度は關心の重點が、選擧制度の技術的方面に移つて來たのだ。

A、すると、それは外國でも起つた問題かね？

B、さうだ、外國では、疾くから、普選の方が片着いてゐるから、今では選擧法の問題といへば、專ら、技術的方面だけだといつても宜い位だ。

A、技術的方面では、何ういふことが主題になつてゐるのか？

B、主な問題が二つあると思ふ。一つは、如何にして、民意を成るべく公平に選擧の結果に表現せしむべきかであり、も一つは、如何にして議會政治の圓滑な運用を可能ならしめるやうな選擧の結果を得べきかの問題である。その他に職能代表の問題があるけれども、それは少くとも下院に就ては、まだ大きな實際問題とはなつてゐない。

A、その始めの二つの問題は、解決が着いてゐるのかい？

B、第一の方は、少くとも學理上は解決が着いてゐる、實際上も既にかなり多く實行せられてゐるし、今後どし／＼實行せられる勢にある。だが、第二の方は、まだ解決の緒にも就かないといふ状態にある。

A、その理由は？　問題に難易の差があるといふのかね？

B、さうだ。第一の問題は、民意をありのまゝに議會に反映させればよい、フランス革命以來云ひ古るされた言葉を藉れば、議會を國民の縮圖とすればよい、事實あるが儘を、選擧の結果に表せばよいので、その方法は比較的容易で、比例代表法を以て略ぼ解決が着いたと

云つてよい。現に、かなり以前から、スイスの諸州やベルジックに實施せられてゐたし、殊にドイツの新憲法が、之れを凡ゆる議會の選擧原則とすることを、明文で規定して以來、この例に倣ふものが益々增加しつゝある。ところが第二の問題は、之れとは反對に、社會の實際にないものを、選擧制度のからくりで、技巧的に議會に作り出さうといふのだから、解決は、それ程簡單にはゆかぬのだ。

A、といふ意味は？

B、君も知つてゐる通り、ヨーロッパの大陸諸國では小黨分立だ。ところが、議會政治の本場たるイギリスでは、二大政黨主義だものだから、だれでも、議會政治といへば、二大政黨主義でなければならぬやうに考へてゐる。又事實二大政黨對立の場合、少くともある一黨が議會の絕對多數を占める場合に、議會政治は最も圓滑に運用せられる。そこで選擧制度の技巧を以てこの分立する多くの小黨を整理し、人爲的に議會の絕對多數黨を捏ち上げようと考へるやうになつた。要するに實質のない影を映し出さうとする註文なのだ。

A、そんなことが出來さうも思へないけれど、そんなことを實行した國でもあるのかね？

B、大ありさ。最近數年間に於ける諸國の選擧制度の立法は、この點を中心として動いたとも云へる。先づイタリヤがあり次いでルーマニヤ[illegible]、チェコ、ベ[illegible]ー、エストニア[illegible]、これを主旨[illegible]

二

A、さう云へば、ムッソリニの選擧法の奇拔なことは、話には聞いたことがあるが、も一度說明してくれたまへ。

B、それぢや話すから、學校の講義みたいだなどと冷評かさずに聞いてゐたまへ。イタリヤも御多分に漏れず小黨分立に困つてゐた。仍でムッソリニは、自分が頤使し得るやうな絕對多數黨を作つて、その獨裁政治の基礎を固めようと考へて、案出したのが、有名な一九二三年の選擧法なのだ。之れに依れば、先づ議會の定員五百三十五名、全國は十五の選擧區に分たれる。

A、一寸待つてくれたまへ、全國の選擧區數がたつた十五だといふと、たいへん大きな選擧區となる譯だが、どの位の大きさかね？

B、例へば、ロムバルヂイ區の如きは、人口が五百二十二萬ある。人口七萬五千每に一人の議員を割宛てられるのだからこの選擧區の定員は、實に七十人といふ多數に上るわけだ。各政黨は候補者名簿を提出して、有權者は、これに對し投票する。選擧の結果は、各政黨政は各名簿の全國に亘る得票を通算し、比較多數を得た第一黨は、その得票が、全有效投票の二十五パーセント以上である限り、各選擧區に於て定員の三分の二宛の議席を割宛てられる。

A、然し全國的に第一黨となつたものの[illegible]選擧[illegible]實に[illegible]

のかね？

B、さうだ。そこがムッソリニ式の痛快なところだ。極端な場合を想像すれば、全國的には第一黨でも、ある特定の選擧區では第二第三黨どころか、得票の全然無いこともあり得る譯だ。そんな選擧區に於ても、第一黨は、その區の定員の三分二だけの分配を受ける。但だ、ある選擧區で、該第一黨が立てた候補者數が、その選擧區の代議士定員三分の二に足らぬ場合にのみは、議席の割宛ては、立候補者數を限度とする。そしてこの不足の議席數及び殘りの三分の一の議席は、各選擧區別々に第二黨以下の政黨に、その得票數に應じて、比例的に分配せられる。

A、さうすると、得票の上では、僅かに四分の一の勢力の政黨が、議會では三分の二の絶對多數黨となる譯だね。

B、その通り。五百三十五の三分の二、三百五十六の議席を占めるのだ。然し第一黨でも、その得票が、總投票數の二十五パーセントに達しない場合には、さういふプレミアムを與へられず、議席全部が、各政黨の得票數に應じて、按分せられる。

A、成程それで、ファシスト獨裁のからくりは分つた。それがもう永久的の制度になつてゐるのだね？

B、否やさうでもない。ムッソリニはこの選擧法の下に、一九二四年の總選擧で大勝を博したのだが、いろ／＼の事情で、早くもその年から再び選擧法の改正を企て、このプレミアム制度は一度實施せられただけで廢止となり、今では、改正法の方が行はれてゐるのだ。

A、その改正法といふのは？

B、再び小選擧區制に復歸した。即ち各選擧區で、比較的多數の投票を得た候補者が當選するのであるが、直前の議會の議員たつたものが立候補するのには、立候補の申告だけで足るに反して、新に候補に立つためには、當該選擧區有權者四百名以上五百名以下の署名推薦を要するために、ファシスト以外の者は、ファシスト獨裁の下では、この推薦を得るだけでも容易でないといふ話だ。

A、ルーマニヤの選擧法といふのは、何んなのかね？

B、ルーマニヤのも、ムッソリニのと同巧異曲だ。同國の憲法では、『代議院は、普通、平等、直接、秘密、強制の選擧權により、比例選擧に基いて、成年公民から選出せられた議員より成る』と規定してゐたが、新憲法では、その『比例選擧に基きて』とあるのを、『小數代表に基きて』と改めた。改正の理由は、比例選擧は、小數黨の代表を保障する一方法たるに止まつて、その最良の方法ではないといふ點にある。そんならその所謂最良の方法とは、何んなものかといふと、一九二六年の新選擧法によれば、全國は、行政區と一致した選擧區に分たれる、投票方法は、嚴正名簿式で、各名簿の間の組合せを許されない。選擧の結果は全國を通算して總投票數の四十パーセント以上を得た第一黨に、先づ全議席の半數を與へる。これだけは、第一黨の全然特別なプレミアムであつて、殘り半分の議席は、更らに第一黨以下各

黨の得票數に比例して分配せられる。

A、すると、投票の上では四割しか得ない第一黨が、議席では、プレミアムの五割と、更らに半數の四割と、合計九割の議席を得る譯だね。

B、原則としてさうだ、但だ多少の例外がある。先づ、全國的には第二黨第三黨であつても、ある特定の選擧區で絶對多數を占めたときには、その選擧區だけでは、その得票數に比例するだけの議席を與へられる。次ぎに、全國を通算した得票數が、總投票數の二パーセントに足らぬ政黨は、全然、議席を與へられない。又總投票數の四十パーセントに達する投票を得た政黨が一つもない場合には、議席は、プレミアムなしに最初から、凡て比例的に各黨に分配せられる。

A、だいぶこみ入つてゐるね。實例で示してくれないか。

B、恰度この雜誌に、一昨年五月の總選擧の結果が載つてゐるから見たまへ。この通りだ。

	萬票	
總投票數	二六二	一〇〇・〇%
第一黨得票	一三七	五二・一%
第二黨得票	七三	二七・七%
第三黨得票	一九	七・三%
第四黨得票	一二・五	四・八%
得票二%以下のもの合計	一五	五・七%
無效投票	六	二・四%

先づ第二黨は、八つの選擧區に於ては、絶對多數の得票があつたので、その各區に於て、之れに比例するだけの議席計二十三を割宛てられた。議席總數三百八十七から、この二十三を控除した三百六十四の半數百八十二は、第一黨のプレミアムである。そして殘り百八十二が、二%以上の得票あつた四黨に按分せられるのだが、その際、第二黨は、既に割宛てられた二十三の議席の根據となつた得票十五萬五千票を控除して、五十七萬票として計算せられる。

即ち	得票(萬)	割合	議席數
第一黨	一三七	六〇・六	一一〇
第二黨	五七	二五・四	四六
第三黨	一九	八・五	一六
第四黨	一二・五	五・五	一〇
合計	二二五・五	一〇〇・〇	一八二

だから第一黨は、百八十二と百十との合計二百九十二の議席を、第二黨は、二十三と四十六の計六十九の議席を得たのである。

A、この種の選擧法は、他にもあると云つたね。

B、此の二つの例に比べては、云ふに足らぬ程のもので、或は單に手心を加へたといふ程度に止まるかも知れないが、同じく小黨分立を防ぐことを目的とした制度は、外にもある。例へば、エストランドでも、選擧の原則は、[illegible]、普通、平等、直接、秘密、且つ比例選擧に依つて[illegible]、文

來無制限にヘーア法で按分せられてゐた規定に制限を設けて、その得票が、二議席分の投票に滿たないものは、議席の分配から絕對に除外することにした、

A、たつたそれだけの制限では、大した効果も無からうぢやないか？

B、ところがさうでない、同國の議會では、定員が僅か百人なのに政黨數は二十六もあつたのだが、此の規定の効能は忽ち現れて、それが十四に激減したといふ話だ。二議席分の投票を得る見込のないものは最初から引込んでしまつたのだね。

A、最初から引込んでしまつたのはそれでいゝとして、折角、一人だけは當選させる程の投票を得ながら、代表者を出し得ない政黨は、不服だらうね。

B、さうだ、おまけにさういふ政黨は、選擧の前に黨として納める五萬マークの保證金を沒收せられるのだから、全く浮ばれない、それ等の連中は、この改正選擧法が憲法違反だといふのを理由に、國事裁判所に訴へ出たけれども、敗訴に終つてしまつた。

A、この種の立法例がまだ外にもあるかい？

B、チエコ・スロバキアでも同じく比例代表の原則をとつてゐるけれども、全國の投票を通算する際に、ある種の制限を設けて、なるべく小黨分立を防ぐやうに規定してゐる。チエコは、民族關係からも、小黨分立を招く自然の事情にあるので、これを防止することに腐心してゐるらしいね。

三

A、話がだいぶ横道に外れたやうに思ふけれど、一たい、イタリヤやルーマニヤの選擧法の話と、日本の小選擧區還元論とに關係があるといふのだつたかね？

B、さうさ、それ等は何れも、強大な多數黨を作つて、基礎鞏固な多數黨政治を行はうといふ同じ目的から、考へ出されてゐるからだ。

A、それ等の可否に關する君の考へは？

B、僕は元來、民意を公平に議會に反映せしめねばならぬといふ立場から、選擧制度の技巧を以て、人爲的に多數黨を拵ち上げることには反對だ。けれども、イタリヤやルーマニヤの制度は、兎も角、その目的を達するためには、確實な手段だ。だからさういふ制度を主張するものとの爭に於ては、議論の要點が一點に集中してゐて、結論が簡單明瞭だ。けれども、我國の小選擧區還元論に於ては、その目的と手段との間に、かうした論理的必然の關係が無い、從つて先づその點から、明かにしてかゝらねばならぬ。

A、實は僕も床次氏の聲明書を讀んで、漠然成程と考へてゐたのだが。待ちたまへ、床次氏の聲明書を讀んで見る。……かくの如き政局の不安は、必ずしも議會の解散に因て一掃し、整理し得べきものに非ず、須らく基礎鞏固なる政黨政治を行はんと欲せば、宜しく現行選擧制

度を改正して、小選擧區制に還元するにあらずんば、到底政局の安定を期し能はざるを信ず』と云つてゐるね。

B、一寸注意しておくが、『その基礎鞏固なる政黨政治』といふのは、普通に政黨政治の典型と考へてゐるやうな『勢力相若ける二大政黨の對抗に因る』政治ではなくて、そこに『二大政黨對立して、交互に政權をとるは、固より政黨政治の理想なりといへども、實際に當りてその必ずしも然る能はざるは、現に、わが政界の實情の示すところの如し、政友會自身は、民政黨に比して僅少の優勢を持するも、一旦民政黨にして、少しく有利に局面を誘導せんか、政友會は立所に敗れん。然かも政民兩黨、その地を換ゆるも、又結果は同一のみ』と云つてあることからも分るやうに、ある一黨の絕對的優越にもとづく政治のことらしいよ。

A、成程、反對黨に一指をも觸れさせず、思うて意の如くならざるはなかつた原内閣當時の政友會の政治のやうなのが理想だといふのだね。それは兎も角、僕も、學校の講義で、小選擧區制と大選擧區連記制とは、多數黨を作り出す作用きを有つと聽いたし、理論上もさうだと考へてゐる。又世間でも結論として小選擧區制に賛成するか反對するかは別として、小選擧區制が、さうした效果を有つことだけは認めてゐるやうだ。その點床次氏の議論に於て、目的と手段との間にチグハグがあるとは思へないが、君がさうだといふ根據は？

B、小選擧區制には、成程、この一つの選擧區だけに就て觀れば、ある一黨の[illegible]

ては、一切か皆無かの他に途はない。た[illegible]比較的優勢な政[illegible]方的に偏頗なく、全國平均に分布してゐるとすれば、政局は黨は、全國に亘つて代表權を獨占し、議會は一黨だけで滿員、安定するであらう。然し勿論事實上はさういふことはあり得ないし、又何人もさういふ極端な效果を、小選擧區制に期待してゐるものはない。事實上は、甲選擧區では第一黨が優勢であり、乙選擧區では第二黨が、丙選擧區では第三黨が優勢であるといふやうに、政黨間の勢力關係は、地方的に異なつてゐるために、少數黨も亦全滅を免れるのである。だから小選擧區制は、全國的に觀る場合には、ある一つの選擧區だけに就て考へた場合とは異つて、必ずしも多數黨に絕對的優勢を與へるものでもなく、少數黨を絕滅せしめるものでもない。各政黨の勢力の地理的分布狀態と合せ考へて見ない限り、さうした作用きを有つか否かを斷ずることはできぬ。

A、さう云へば確にさうに違ひないが、小選擧區制が、多數黨に利益するといふことは、アプリオリになつてゐて頭から拔けない。それが少數黨の利益になるといふ實例があるかね？

B、例へば、床次氏一黨の金城鐵壁の地盤と稱せられてゐる鹿兒島縣からも、二三の政友會議員が選出せられてゐる。僕はこれが何ういふ事情にもとづくものであるかを知らないが、しかし、これ等の政友會議員諸君は小選擧區で床次黨と一騎打ちをして、[illegible]の見込のない

[illegible]

た效果を有つ議席制宛て法を立てたけれども、然しからして[illegible]は、この間に[illegible]

進歩黨との不自然な合同によつて生れ出た結果であつて、板閥內閣の瓦解と共に忽ち分裂してしまつた。そして皮肉千萬にも、政黨の發達を妨害するために官僚が案出したと稱せられてゐる大選擧區單記制が初めて實施せられた第七回總選擧の下に、初めて比較的鞏固な絶對多數黨が出現した。即ちその以後政友會は、大選擧區制度が廢止せられるまで、七回の中四回程、絶對多數を占めたのである。大正九年の總選擧は再び小選擧區制の下に行はれた。そしてこの度びは、政友會は、未曾有の壓倒的多數を占めた。

A、政友會では、この時代の小選擧區制の甘い夢を今尙忘れ兼ねてゐると見える。

B、けれども、その次ぎの大正十三年の選擧では、同じ區制の下にあり乍ら、床次氏一派の分立のために、政界は再び小黨分立にたちかへり、一黨を以て過半數を制し得るもの無きに至つた。之によつて之れを觀れば優越な絶對多數黨の出現と否とは、必ずしも區制の如何に拘はらないことが、明かであらう。

A、だいぶ切口上になつたね。君の云ふ通りだとすると、小選擧區制が、絶對多數黨を作るといふのは、全く迷信のやうに聞えるが、何か根據が無ければ、さういふ迷信だつて起り得ようが無いと思ふね。

四

B、小選擧區制が絶對多數黨をつくるといふ考へは、恐らくは、一つには、一選擧區に就て多數代表法であるといふことが[illegible]國的にも多數代表法であるかの如く考へられたためと、もう一つにはイギリスの實例に影響せられてゐるところが多い。成程、イギリスでは、小選擧區制であり、政局は概して安定してゐる、最近の例をとつて見ても、保守黨は常に半數以下の得票を以て、過半數の議席を占めることができた、殊に一九二四年の選擧に於ては、四十七パーセント餘の得票に對して六十七パーセント餘の議席を獲得した、此の表の通りだ。

一九二二年の總選擧

	得票數（萬）	當選議員數
保守黨	六一五	三四六
勞働黨	四二四	一四二
國民自由黨	一六七	五九
無所屬その他	三六	九

一九二四年の總選擧

保守黨	七八六	四一三
勞働黨	五五一	一五一
自由黨	二九三	四〇
憲政黨	一八	六
其の他	一六	五

この結果を見せられて、イギリスに於ける小選擧區制には、恰もイタリヤ又はルーマニヤに於けるプレミアム付の多數代表法と同樣の效果

を生んでゐるかのやうに思へる。然し、イギリスでも必ずしも常にかうした結果を生じたのではなかつた。例へば一九二三年の總選擧の結果は、

	得票數(萬)	當選議員數
保守黨	五六四	二五七
勞働黨	四三五	一九二
獨立自由黨	四二七	一五八
その他	二三	八

即ち流行のイギリスに於ても、議會の過半數を制するに足る黨はなく、三黨鼎立の勢を作り出したのである。このやうな結果が將來も出現するか否かは、豫斷の限りでないとしても、少くとも、小選擧區制が、必ずしも絶對多數黨を作り出すものでないといふことだけは明かに示された譯である。

A、その他の國では?

B、そのことはヨーロッパ大陸では殊に著しい。就中ドイツは建國以來、革命に至る迄、五十年の間、引き續いて小選擧區制を採つてゐたが、その間を通じて絶對多數黨が出現したことは曾て一度もなかつた。初期議會以來常に五六の小黨が分立してゐた。革命後は大選擧區制を採り、各區は人口二百五十萬乃至九十萬を包容する程大きなものとし、且つ比例代表の原則によつて、殆ど全國を一選擧區としたと同樣な效果を有つ議席割宛て法を立てたけれども、然しかうして區制が變つたゝめに小黨分立の勢が促進せられた樣子も見えない。尤も政黨數に、一九一二年には相當勢力あるもの六つだつたものが、現今では八黨に增してゐるけれども、これは、共產黨が社會民主黨から、又バイエルン人民黨が中央黨から分立したゝめで、區制の影響にもとづくものではない。それどころでなく、極小の政黨や無所屬の議員は、却て、絶滅又は激減して來てゐる。

A、然し、イギリスのこの前のやうな總選擧の結果は、少くとも功利的に見て國民のために利益だね。

B、僕は元來、ある政黨が國民の間に有する後援の割合以上の勢力を議會に有つことに反對なのだが、その點は別として、功利的に見ても、一九二四年のイギリスの總選擧は、必ずしもイギリス國民のために、利益では無かつたと思ふ。尤も何が眞に國民のために利益であるかは國民の最大多數が欲する所であつたか否かを標準として決する他に途はないが、その點から云へば、保守黨は、半數以下の得票を以て、三分の二以上の議席を占めたゝめに、小數の民意が多數の民意を壓倒する結果を招いたのである。例へば、シンガポールの軍港築造には、勞働黨は反對であつて、現に、マクドナルド內閣はこの計畫を中止した。自由黨も亦、築造反對論を唱へてゐた。そして、勞働黨と自由黨とを合せた得票は八百四十四萬で、保守黨の七百八十六萬よりも遙かに多かつたのであるから、若し民意が公平に議會に現れたとしたならば、この問題は、築造反對に決すべき筈であつた。だのに保守黨

然な多數を得たゝめに軍港築造は再び續行せられ、多數の民意を無視して、小數の民意が實現せられる結果となつたのである。僕はかういふ不公平な代表法に斷乎として反對する。然し、小選擧區制が、その性質上、論理的にかうした結果をもたらすものであつて、君がそれを主張するのであれば、君と僕との爭點は、絕對多數黨を作り出すことと民意を公平に議會に反映せしめることと、何れがより重要かといふ一點にかゝるので、各人その重しとするところに從つて孰れとも決することができよう。

五

A、さうすると小選擧區制に反對する理由は別にあるといふのかね？ 君は小數の代表權を尊重すべしといふ持論であり、そして君の論に從へば、小選擧區制は、必ずしも小數派に不利ならず、又必ずしも多數者を利せずといふのだから、君こそ正に、小選擧區制の同情者であるべき筈だと思へるのだが、何だか君は反對のために反對してゐるやうだね。

B、僕が小選擧區制を、斷じて不可なりとするも一つの主な理由は、小選擧區制の下では、政黨勢力の地理的分布といふ、一國の政治といふ立場から云へば極めて偶然的な素因によつて、その結果が、如何樣にも左右せられるからである。

甲黨五百萬票、乙黨四百萬票の味方をもち、全國が三百の小選擧區に分た[…]

若し甲乙兩黨の勢力が、地方的に同[…]には、何れの選擧區に於ても甲乙の勢力は五對四の割合で甲が全[…]し、甲黨は全國に亘つて三百の議席を獨占し、乙黨は、全然代表せられない。

甲黨を支持する有權者の中四百五十萬人は、百五十の選擧區に密集し、殘り五十萬及び乙黨の四百萬は、他の選擧區に萬遍なく散在してをるとすれば、前半の百五十の選擧區では、甲黨が全勝するけれども、後半百五十の選擧區では、四百對五十の割合で、乙黨が全勝するから、兩黨の勢力は半々となるであらう。

更らに、甲黨に贊する有權者の中、百二十萬だけは、四十の選擧區に密集し、殘り三百八十萬と乙黨の四百萬とは、他の二百六十の選擧區に平均的に分布するとすれば、さきの四十の選擧區では、甲黨が全勝するけれども、後の二百六十の選擧區では、悉く、四百對三百八十の割合を以て乙黨が全勝するであらう。その結果は、四百萬の後援を有する乙黨が二百六十の議席を占めるに反して、五百萬の支持を得た甲黨は、却てその六分の一にも足らぬ五十の議席をしか與へられないことゝなる。

かういふ風に政黨の勢力の地理的分布といふ一國の政治にとつては、無意義な原因の如何によつて、ある一黨が、或は全議席を獨占することもできるし、或は却て小數黨の六分の一の當選者をしか出さな

ことゝもあり得るし、或は又床次氏の最も嫌忌する勢力相若く兩黨を生ずることもあり得る。

A、さういふ極端な設例は、實際家からは、机上の空想的假定にもとづくものとして顧みられないよ。

B、もつと具體的な例をとる、現に全國に散在する水平社員が三百萬あるとして、それが政黨を形つたと假定する、現行選擧法に於けるが如く人口十二萬に就て一人の代議士を出すとすれば、それは、二十五人の代議士を選出するに値ひする。そしてドイツ式の比例代表法によれば、その地理的分布の如何に拘はらず、これに近い當選者を得ることは確實である。然し乍ら、小選擧區の下に於ては、全國的に散在してゐたのでは、殆ど一人の當選者を得ることもできない。之れに反し一選擧區に六七萬宛密集してゐれば、恐らく四五十名の當選者を擧げる可能性もある。然し密集の度が過ぎて、三百萬人でできるだけの選擧區を獨占すれば、その當選者はグット減じて又廿五名位に減ずる。一つたい、一國の政治といふ立場から見て、六萬人宛散在してゐれば、五十の代表者を與へる、然しもつと密集してゐれば、その半數をしか當選せしめない、又全然散在してゐれば、一人分だけの代表權をも許さないといふやうなことが、如何なる合理的根據をもつか？　到底解し得ないではないか？

六

B、かういふ風に小選擧區制が、政黨の勢力の地理的分布如何によつてその結果を著しく異にする、時には正反對の結果をすら生ずるといふ點こそ正に、ジエリーマンダーリングの魔の手が延びる隙きを與へるものである。

A、ジエリーマンダーリングといふと？　學校の講義で聞いた言葉ではあるが、何のことか忘れてしまつた。

B、話を益々講義にしてしまふね。君はいゝとしても傍たで聞かされる讀者は、かうした常識を長談義されては嘸迷惑だらうが、まア耳を塞いで我慢して貰ふことにしよう。マサチウセッツの州知事ジエリーが、自黨のために、自然の境界を無視した不公平極まる選擧區を作つたことから、かういふ言葉ができたのだ。それ以上の詳しいエピソードを話すことは、今日は勘辯してくれたまへ。小選擧區制度の下では、選擧の結果が、區劃如何によつて左右せられ得ることに乘じて、かうした不公平な立法か、行はれる弊害があるといふのだ。

A、けれども選擧區域は、郡だとか市だとか大凡そ、きまつてゐるだらうから、立法者でもさう〳〵自然の區域を無視して勝手に定める譯にはゆくまい。

B、ところがなか〳〵さうでない。日本では、小選擧區制の場合は、普通に郡と市とを單位として、一郡單獨に、又は二三の郡を以て選擧區を作る。この郡の組合せ方如何によつて、たいへんな結果の相違を來たす。又例へば、東京の隣接町村の如き場合[illegible]

行政區劃に從つて郡部と一しよにすることもできるし、又經濟的社會的生活を重んじて市部と合して一選擧區を作るといふ理窟も立つ。その何れに決するかによつて、結果が違ひ得るので、こゝに政府や立法者の恣意が作用く。

A、日本にさういふ實例でもあるといふのかね？

B、過去のことは別として、現に目下の問題になつてゐる九州の八幡市では、最近無産黨の進出を阻止するために小選擧區設定の市條例を議決した。新聞紙の傳へるやうに、『從來一市一選擧區であつたものを六の小選擧區に分割し、併も一選擧區の定員多きは九名、少きは三名となつてをり、その根據は餘りに地盤關係のみに執着し、選擧區の有權者數を無視してゐる嫌ひがあり』、『市役所一帶は警戒嚴重』の下に、『無産黨中立の五名の議員が猛烈に反對したが及ばず廿八對五の絶對多數をもつて原案を可決し』、內務省すら、之れを許可すべきか否かにつき議論が分れてゐるといふのが事實であるとすれば、それが如何に恣で不公平なものであるかは、想像がつく。

A、大選擧區制では、さういふ弊害は起らないかね？

B、元來、この弊害は、人爲的區分といふことに伴ふのであるから、區分の少ない大選擧區では、その弊害は少ない。又、そして選擧區が大きければ大きい程、その作用く餘地は少ない。殊に我が國で大選擧區といふのは、歴史的に、府縣のことにきまつてゐるのだから、この點に、立法者の人爲的技巧的な恣意の作用く餘地はなく、小選擧區制に比すれば、遙かに公平である。

A、そんなら君は、大選擧區還元論者なのか？

B、大選擧區は、小選擧區や、又現行の中選擧區制に比べても遙かに公平なものではあるが、それでも單にそれだけでは、尙、落選者に投せられた投票や、ある候補者の當選必要數以上に投せられた票が死んでしまふ。今春の總選擧で無産黨は、全國に亘つては四十七萬の投票を蒐め、從つて比例的に議員を出すとしたら、優に二十數名の當選者を議會に送り得た筈であるにも拘はらず、その大部分の得票が死んだために、僅かに八名をしか出し得なかつた。かうした死票や過剩投票を救ふためには、ドイツ式に、全國を打つて一丸とした選擧區を作るより外に方法はない。ドイツでは、全國を一應三十五の選擧區に分つてゐるけれども、政黨の申出によつて、二三の選擧區を連結して、連合選擧區を作ることも許されるし、全國を連結することもできる。そして各政黨は選擧區別に、得票六萬に就て一つの割合で議席を分配せられる外、選擧區連合でその端數を集めて六萬票に達すれば、更らに一つの議席を割宛てられる。全國に就ても同樣である。今春ストレーゼマンが、その選擧區で落選したにも拘はらず議席を得たといふのはこのためだ。通算して議席を割宛てるに就ては、多少の制限があるけれども、大體に於て、かういふ風にするならば、選擧の結果を地域的區分を以て人爲的に左右する餘地はなくなるのだらう。

A、さうするとドイツの制度に、定員といふものはないのだね。

B、さうだ、議員の數は、總選擧毎に、有效投票の總數により、又各政黨の得票の端數の工合によつて、毎回變動し得るわけだ。

七

A、ジエリーマンダーリングや死票救濟の理窟はそれで分つたが、かういふ議論もあるね、代議士は國家の機關であると同時に、ある特定の地方の代表者である。彼れをしてよく地方的利益を代表し、地方に對する責任を全うさせるためには、選擧區との間の關係を密接にさせておかねばならぬ。大選擧區の下に於ては、又殊に比例代表制の下に於ては、代議士と選擧區との人的關係は稀薄となり、代議士はその地方に對する責任を忘却するであらう、と。これも大に傾聽に値する議論と思ふが。

B、成程、過去に於ては、議會に代表せられるものは、人民でなくて、市や村や郡であると考へられてゐたこともあつた。人口何萬といふやうな大きな市も一寒村も等しく一人の代表者を選出したといふやうな事實は、かういふこともその一原因になつてゐると思ふ。今でも、聯邦制の第一院たる元老院若くは列邦院は、各支分國そのものを代表すると考へられ、從つてその代表權は、支分國の大小に拘らず平等であることを原則とする。アメリカの元老院に於けるが如き、人口一千萬のニユウヨーク州も僅か八萬のネバダ州も平等に二人の議員を出すのはこの故であるけれども、職業的乃至階級的利害が今日の如く分化對立してゐる時代に、ある一選擧區だけで代表せらるべき共通の利害なるものが果してあるだらうか？　縱し又これありとしたところが、その利害が階級的職業的利害に優つてゐるだらうか？　我々は同じ町内に住む資本家とは、顏さへ見知らぬけれども、却て遠く離れた九州の大學生に對しては、共通の利害と親しみとを感ずる。同じ市内の工場主とよりは、遙かに多くの利害を、北海道の坑夫と共にする。一方には、國民の大部分が農業を生業としてゐた時代を過ぎ去つて、商工業者や自由職業者が益々增加し、一方には、交通機關が發達して、兩者相俟つて居住移轉が益々自由になつた今日では、我々は、たえず轉々として住所を變へる。從つて土地に對する親みは益々薄くなり同時に職業的階級的利害は益々緊密に結びつく。かういふ時代に、機械的に區劃つた選擧區内でたつた一人の代表者を選び出すといふことは、全く無意義と云はねばならぬ。人民を青人草と稱して、地に生えついた草木と同一視した時代ならば兎も角、職能代表多元國家の主張さへ盛に唱へられてゐる今日、地緣をもつて強いて一國の選擧單位を作ることは、殆ど意義をなさぬのではないか？　我々は選擧區劃に、手續上の便宜手段といふこと以上の、作用きをもたせてはならぬ。考へても見たまへ、自分の選擧區から出た東京府第何區選出代議士何某といふよりも、サラリーメン代表何某、文筆勞働者選出何某といふ方を、遙かに自分の代表者らしく親しく感ずるではないか。

一たい議會政治を公明ならしめる第一の要諦は、選擧にあたり人的

情實を排して、主義政策による政黨本位の選擇をすることである。ただのに我が國の實情は、まさにその正反對である。將來選擧を爭はんとする野心あるもの、又は現に議員たるものが、その選擧區に於て、冠婚葬祭毎に如何に情實因緣を作らねばならぬかは、今爰で云ふまでもない。結婚の媒酌は云ふに及ばず、親族間の紛爭から就職の世話、身の上相談、東京見物の案內に至るまで立入つて、因緣關係をつけておかねば、その當選は確實でないといふ狀態だ。そしてその故に選擧に際しては、主義政策をはつきりさせずとも當選できる。毎回の總選擧毎に、五六十名、時には、七八十名といふが如き多數の旗幟不明な所謂中立議員の當選すること、又折角所屬政黨を明かにして當選したものが、何等政情の變化なきに、當選直後反對黨に鞍替へして何人も怪しまぬといふが如き珍現象は、恐らく外國にその例を見ないことであらう。これ皆、その選擧が、主義政策にもとづかず、情實因緣の人的關係によつて當選したことの自然の結果ではないか、そしてこの種の情實因緣は、選擧區の狹い程その作用く餘地が大きくなる譯である。この點から云つても、小選擧區制の還元は、同時に情實選擧の還元である。我々は斷乎として之れに反對せねばならぬ。

A、けれども大選擧區や中選擧區では、選擧費用が嵩む、同志討を免れ得ない、有權者に何人を選擧すべきかの選擇に迷ふ。これに對すべからざる事實だ。いくらなで……めるだらう。

B、成程之等の諸點は、今年最初の中選擧區で、各政黨共惱まされたところであるらしい。三土藏相の如きは、一回の總選擧に費される費用の總額を八千萬圓に上ると稱してゐる。素人目には、この額は幾分過大のやうに見えるが、それは措き、小選擧區制になつたからとて、その費用がどれだけ減ずるかは、疑問だ。何故ならかくの如き巨額の選擧費用は、實は大部分が買收費である。そして買收は、小選擧區の下には、益々盛に行はれる虞があるからである。けれども、假りに、我國で施行せられてゐる大選擧區制や所謂中選擧區制が、小選擧區制に於けるよりも多くの費用を要するとしても、それは、大選擧區制や中選擧區制そのものゝ性質上の缺點ではなくて、大選擧區單記非移讓式投票法に伴ふ缺陷なのだから、比例代表法を採用することによつて、矯正し得るのだ。同志討に就ても同様である。これ亦、小選擧區制の下には絕無になるとは考へられない。現に、今年の總選擧でも同一政黨から、同一選擧區に定員以上の候補者を立てたところが相當にある。政黨の統制が利かぬ土地では、かういふことは、小選擧區制でも起り得るに相違ないが、この點は別として、成程、從來の大又は中選擧區では、何れの政黨も激しい同志討をした。これは、投票が、政黨に對して行はれるのでなく、個人に對して投せられる結果、各候補者は、自己の當選の確實を圖るためには、或は又時には自己の當選

が相當安全であつても、尙最高點といふ名譽を得んがためには、敵味方の區別なく斬りまくつた。同一政黨の同一政綱を掲げた推薦狀が、候補者別に何枚も何枚も發せられた。同一政黨のビラが、相競うて張られ、同一政黨の演說會が、同一場所で幾回も〳〵繰り返へされた、これでは費用の嵩むのも當然ではないか。之れを個人本位から政黨本位の比例代表に改めたならば、この種の費用は恐らく、三分の一乃至五分の一以下に低減することができるであらう。

大選擧區制に於ては候補者亂立して、有權者が取捨の選擇に迷ふといふ非難に至つては、選擧民を愚視するも甚しい。成程、小選擧區に於ては、選擇は比較的簡單であり勝敗は一切か皆無かで、はつきりする。けれども、大選擧區制に於ても、比例代表で政黨本位の投票にすれば、有權者は、個々の人物を比較研究しなくとも、その選擇を容易にすることができる。否、小選擧區制に於ては、自分の好む政黨から立候補しなかつたり、或は立候補しても當選の見込が全然無いやうな場合があるに引きかへて、大選擧では、自己の欲する儘の政黨を擇び出すことが出來るし、且つ、殊に比例代表であれば、自分の投ずる一票も多くの場合全然死票となることなく、何かの役割を勤めるのであるから、有權者のためには遙かに好都合と曰はねばならぬ。

その上、小選擧區に於ては、互に一騎打ちで、敵を斃すか我れ斃るゝかの外に途がないために、勢ひ競爭激甚となり、而も結果は政界有用の材を落選せしめたりすることがあるけれども、大選擧區に於ては、この點大に緩和せられる。最近の例だけでも、金澤に於ける中橋、永井兩氏、盛岡に於ける高橋、田子兩氏の戰ひは、君も記憶してゐるであらう。今年の總選擧では、さういふ事例を殆ど聞かなかつたではないか、殊に比例代表制となれば、政界の長老が、不覺の落選するといふが如きことは、全くなくなるであらう。

A、あゝいふ花々しい一騎打ちも、たまにはないと、選擧氣分が出ないで面白くないよ。殊に大臣候補者などと威張つてゐる奴が、落選すると痛快だからな。

B、まアさう茶化すな、これでも僕の方は眞面目に議論してゐるのだから。その他官權の干渉や買收を容易にするといふやうな點から觀ても、小選擧區制に賛成する理由は、何うしても見つからない。

A、それで結論は?

B、之れを要するに、一二の大政黨ができるか多數の小黨が分立するかは、國民性や國情やによつて自然に決定せられる社會的事實である。この社會的事實を曲げ人爲の技巧を以て強ひて絕對多數黨を作り出さうとする制度に、僕は反對する。我々の力むべきところは、徒らにイギリスの政黨政治を機械的に模倣することではなくて、それとは違つた政情があれば、それに適應した議會政治の方法を作り出すことだからである。

A、さうすると君は、ドイツやフランスのやうな政黨のブロツクや

政策協定やで行かうといふのかね？　それなら僕に意見がある。

B、或はさういふことになるかも知れない。だがその點は今日の議論とは別問題だ。若し君が、絶對多數黨を政治に不可缺の條件として、それを作り出すために、その確實の手段たるイタリヤやルーマニヤのやうな選擧法を主張するのであれば、我々は又改めて議論しよう。

A、さうだ、政局の安定といふことの、功利的價値と、公平な民意代表といふことの價値との輕重は、今日の僕たちの議論ではまだ盡されてゐない。そして僕は、前者の方を重く考へてゐるのだから、君の議論にさう容易く服する譯にゆかぬ。この點に就ては、又改めて論じよう。

B、だが唯、小選擧區制度によつて、この目的を達しようとするのならば、僕の議論は、今日のをくりかへすだけだ。それは、その目的を達し得るか否かも頗る不確實なのみでなく、惡弊百出、議會政治を益々不公明にすることは、今迄云つた通りだから。

A、然し床次氏にしてもその他の小選擧區論者にしても、君が云ふ位の理窟は百も二百も承知してゐるに違ない。それにも拘はらず、それを主張するのは、我國の現狀に於ては、自分の黨で、イギリスの保守黨が今得てゐるやうな結果を僥倖し得るといふ相當確實な見込がついてゐるからだと思ふが何うだ？

B、勿論さうだらう。されればこそ我々は益々聲を大にして反對を唱へねばならぬ。猶[illegible]合のいゝやうな選擧法に改められては、迷惑千萬ぢやないか。偶然の結果や一時的の狀態に惑はされず、常に公平に作用らくやうな制度を擁護することこそ我々の任務ぢやないか？

A、少し惱つたやうだね、ぢやこれで今日は失敬する。

B、いや失敬。

大量生產と購買力過少

下田將美

一　大量生產と資本主義經濟の矛盾相

歐洲の大戰を一つの境として近年の產業界が大量生產の特長をいよ〳〵明白に發揮し出したことは爭はれぬ事實である。元來產業界が機械の進步に伴つて漸次に大量生產に赴つてゆかざるを得なくなつてゐるのは、自然の大勢ではあるけれども、大戰はこの自然的の傾向に更に加速度の拍車を驅つて、急速なる進步をとげさせてしまつた。物質的の生產力の發揮がこの期間にいかに目覺ましく發展して行つたか改めて述べるまでもないことではあるが、これと共に勞銀も上騰し、資本家の利潤も擴大して新らしい標準を築き上げてしまつたと云つても差支へない。人類の幸福といふ點から見ればかやうに人智の限りを盡して、物質的の生產力が目ざましく進展して行つたことは結構なことには相違ない。まして勞銀も戰前と戰時戰後では段の違つた新らしいレベルを造り上げ、それで資本家も申し分のない豐富な利潤が得られるのであつて見れば、どこから見たとて結構なことであつた。しかしかう云ふ狀態は無論永續すべきものではなかつた。戰爭といふ非常時の原因が去ると共に二三年にして早くも深酷な反動が現はれてきた。新らしい標準にまで引上げられた大量生產と、利潤と勞銀とは何れもそれ〳〵の轉換期の苦惱に面接しなければならない破目に陷つてきた。まづ現實に一番さきに苦惱を嘗めたのは資本家の利潤の減少であつた。この苦惱を緩和させるために勞銀の引下と勞働時間の延長とは筋書通りに、戰後の資本家對勞働者の大きな抗爭の題目となつて行つた。英國の炭坑夫大罷業をはじめとして近年の勞銀並に勞働時間の抗爭はどこでもかなりにしつつこく行はれて來たことは今更らしくに述べるまでもないことである。しかし大戰を一つの大きな轉換期として根强い力を張つた勞働階級の城は昔のやうにさう易々とは落ちなかつた。抗爭の結果は勞銀を勞働時間を戰前と同じやうな條件にまで引戾さうとする努力は決して酬いられるものではないことを、資本家に悟らせるだけに止まつた。殘るところは、すばらしく發展し、異常に膨脹した生產力をいかに轉換してゆくかゞ重大なる關心事となつて來さ

るを得ない。

元來資本主義經濟のもとにあつては、すべての根本をなすものは利潤の大なるを欲することにあるのは云ふまでもないことである。生産の基礎は利潤にあるのであるから、生産力の分配は利潤の少しでも多い方に振り向けられる。從つて限りある社會の生産力は、利潤の多い金持に賣られるものゝ方に振向けられて、社會一般の生活必需品の方面にはそれだけ生産力を減ぜられる。けれども生産費を安くして利潤を多からしめるために益ゝ利用の程度を高めて行つた機械の進歩は、いやでも大量生産をなさねばならぬやうになり、大量生産である限りいやでも多數者の必要に應ずるものを造り出さねばならなくなつた。こゝに資本主義經濟組織の下における機械使用の大量生産と、資本主義の根本觀念である利潤との間に大きな矛盾が横はつてゐる。この矛盾が比較的短い期間にすばらしい大飛躍をしてどうにも身動きの出來ぬやうな狀態に陷らしめてしまつたものが大戰に伴ふ生産力の大增加なのである。戰時中に擴張された工場、機械等今更どうしやうもない程度にまで大きなものになつてしまつてゐる。大量生産を目標として力一ぱいに押進んで來た生産力の激增は利潤が少くなつたからと云つて再び掌をかへすやうに昔に返らせるわけにはゆかなくなつてきてゐる。資本家は自ら造つた繩で金縛りになつた形になつてきたのである。この場合にとり得べき道に二つしかない。一つは生産制限であり、一つは大量生産をそのまゝに押通して他の方面に新らしい活路を見出すことにするかである。生産制限は無論行はれ

きる資本家にとつては生産制限が完全に嚴守されることは實に

である。云ふべくして行はれ難い場合が多い。行はれてもすぐに

れ易い。況して戰時中に極度にまで膨脹して多大の固定資本を投じてしまつたあとの生産制限は猶の事困難なことである。そこで思ひ切つて勇敢に大量生産をどこまでも徹底させて、生産費の遞減と多數の人々を對手に商品の單純化、標準化によつて大量販賣の道を見出さうとする努力が續けられた。勿論大量生産である限り金持階級だけを對手にしては居られぬので、民衆の中に買手を求め出した。これには民衆の所得が增して、その生活が向上し出したと云ふことゝ、一方には昔は金持だけを對手にした物が、民衆向きのものに形をかへて行つて兩者が相作用して新らしい大量生産の目的物を作り上げたものも少くはない。一例をあげて見れば、ハートレー、ウヰザースが曾て『貧困と浪費』の中で、限りある社會の生産力は金持の需要する贅澤な貨物の生産に奪はれて、社會一般人の生活必需品の生産が阻まれる例としてあげたものは自動車であつた。『貧困と浪費』が出版されたのは十數年前のことであるが今日では自動車を一がいに贅澤品とばかりは云へない狀態になつて來てしまつてゐる。とにかく近年の大量生産は利潤のもとを少數の金持だけに求めずに、社會一般から求めねばならぬやうにならざるを得なくなつたのは事實である。機械生産の當然の結果ではあるが、一面から云へば、資本主義の經濟が自ら造つた矛盾の穴に

安く落ちて行つたものに他ならない。

大量生産は止むに止まれぬ勢を以て進んで行つた。併し大量生産そのものは販賣量の増加ではない。大量生産の露拂ひをなしてゆく大量販賣がまづ以て試みられねばならない。近年の大量生産の廉化とも云ふべき企業家は何れもこの方面に最大の苦心と努力とを致してゐる。米國が目下頻りに大量生産から大量販賣への苦鬪をつゞけて居るのなども當然の推移であらう。けれどもこの資本主義經濟が當然に行きつくべき大量生産は、決してそれだけで最後の解決を見出すことは不可能な運命にあるものと云はねばならない。資本主義經濟が根本的に利潤を目的とするものである以上、消費がこれに伴はなければ最後には必ず行つまる時が來るに違ひないからである。そして大量生産がいかに高い勞銀と、安い生産費とに最大の努力を費して見たところで、利潤が加はらなければ資本主義經濟の下には生産が行はれない以上は、最後には生産過剩は免れない運命だからである。生産過剩は云ひかへればアンダー・コンサンプションである。アンダー・コンサンプションは消費過少ではあるけれども、單純なる消費の過少では少し意味が通じかねる。こゝに云ふ意味は寧ろ購買力の過少である。更にもう少し詳しく云へば資本主義經濟の組織にあつては、いかに大量生産によつて社會一般に安いものを供給しやうとしてもかうして生産されたものは社會一般の購買能力以上の價格にならざるを得ないと云ふことである。更に云ひかへれば、いかにぎりぎりの所まで安く大量に生産された場合を考へて見たところで。矢張り購買能力はその下位にある。單純なる消費の過少なのではなくしていくら消費したくとも消費することの出來ぬ絶對購買力過少を免れないと云ふことなのである。私は現代の産業界に於て大量生産に最も目ざましい發展をとげ、それによつて資本家に莫大な利潤を與へることを得た歴史をもち、更にその大量生産が又最も早く破綻を來して現に苦惱のさなかにある米國を例にとつて、少しばかり以下書き記して見たいと思ふのである。

二　米國の大量生産と大量販賣

大戰以後の米國がすばらしい産業界の大發展を來し、人間の物質的生産能力がいかに偉大なるものであるかを示したことについては今更こゝで數字などを擧げて述べる必要もないことであらう。恐らく歴史あつて以來の驚くべき生産界の大飛躍であると云つても過言ではないであらうと思ふ。戰爭によつて莫大な富を増した米國は、その廣大なる内地市場と外國に對しては保護關税を課しながら各州間には何等の障壁を設けずに自由に物資の流動を行つてゐる特長とによつて十二分に大量生産の手足をのばして來たのであつた。大量生産は米國繁榮の唯一の旗印となつたかの觀があつたのである。これによつて米國の勞銀が高く保たれ、生産費が低下し、久しい間失業者問題が論議されず資本家は利潤の増加を享樂することが出來たのは爭はれない事實に相違ないのである。戰後に米國を襲つた戰時景氣の反動は、米國が大量生

産に著しい發展を示しておつたゞけにその打撃も大きかつたのであるが、企業家は生産制限を選ばずして、大量生産をどこまでも押通してそれによつて局面を新たに永續性を帶びたものに代へやうと試み、その試みはたしかにある程度までは成功を收めることが出來た。戰時中に一變した勞働條件や利潤の新標準は兎も角も大なる變化なしに持續されうるものゝやうに見えた。しかし乍ら戰後の大量生産は、戰時中の大量生産とはその據つて立つべき基礎を異にしてゐる。戰時中には需要が豐富であつて生産はそれを追かけても追ひつき得ぬやうな幸福な時代であつた。戰後は需要の方面が値にかまはずに生産を要求する時代ではなく、大量生産はいやでも販路の擴張と併行して行かねばならぬやうに變つてきた。フォードは大量生産をまづ行へば消費はこれに伴つてゆくと云ふ見方ですゝんで行つた。しかしこれは明らかに因果の錯覺に他ならない。から云ふ見方で無限に生産を增加して行くことの出來ないのは明らかであつた。近年にいたつては特にこの錯覺は現實の打撃となつて思ひ上がつた大量生産者の上に落ちかゝつて來るにいたつたのである。大量生産から大量販賣への轉換の時代はいやでもやつて來ないわけにはゆかなくなつた。

この結果大量販賣の方法は近年著しく發達するやうになつてきた。賦拂販賣の制度などもその一つである。これは云ふまでもなく生産が著しく增加して、消費者の購買力以上に上つたところから發達して來たものであつて、消費者の一時的の購買力を大くして賣らうとするものに他ならない。米國の自働車の販賣がその六割までが賦拂販賣で総額四十五億弗に達しておるのなどを見ると、いかに極度にまで制度が發達したかに驚かれるばかりである。しかしこの制度は大産の上に貢獻した點は確かに認められるけれども賦拂はある程度まで不拂となりいろ／＼の弊害をも消費者の上に及ぼして來る。賦拂の他にチエーンストーアの發達もまた大量販賣の一つの手段として盛んに行はれて來てゐる。

すべてかやうな大量販賣の制度が發達してくると共に、市場を獲得し、消費者の購買慾を釣出さうとする方面に激烈なる競爭が行はれるやうになつて來た。大量生産は生産者が作り出す流行によつて販路を新たにしやうと云ふ傾向をもち出したのが目立つた現象である。單純化され、標準化された大量生産はやがて同一の型では消費者の注意もひかず、その需要にも限度があり、必要にも限度がある。けれども人間は限りなき慾望をもつておることは事實である。この無限の慾望を挑發し、新らしい流行によつて購買慾を刺戟してゆくことがやがて大量生産の一つの手段になつてゆくと云ふ考へが企業家によつてもたれた。かくして、大規模な廣告により、巨大なる宣傳費により新らしきを追ふ人々の慾望を刺戟するやうな手段がつぎ／＼に講ぜられるにいたつたのである。けれども流行を造り、次ぎ／＼に古いものをすてゝ新らしい型に移らせるといふことは一見非常に巧妙な策であるやうに見えるけれども實に轉換の早いと云ふこと自身の中に大量生産と賣

てゆくことはそれ自身大量生産に永續性を與へないことになる他はないからである。

かくして大量販賣による市場獲得はこれを實際の結果から見れば、大量生産の本質と矛盾する幾多の要素を含んでもおるし、更に新聞に、雜誌に、その他各方面の宣傳のために費す費用が巨大なものとなつてしまふために、大量生産によつて生産費は成程低下させることは出來るであらう。しかしそれに伴つて販賣費用は逆に著しく上騰する。この双方を差引きして見れば、大量生産の利益は失はれて資本家の根本目的である利潤は決して增加せず寧ろ大骨を折つて何にもならぬと云ふ結果にもなつてしまふのである。空景氣だけはいかにも堂々としてゐてすばらしいが實際の利潤は少い。實利無き商賣繁昌といふ妙な結果に陷つてしまふのである。

生産と販賣と相伴つてゆかねばならぬ狀態にありながら、生産と販賣とは利潤の上から相逆行する。こゝに極端にまで發達した機械生産の現實の悩みが横はる。今日の米國は現にこの悩みのために行詰つておるものと云つても差支へないのである。利潤がなければ今日の生産界は生産そのものが無意味になつてしまふのであつて、資本家は何のために生産してゐるのだかわからないのである。

利益のない商賣繁昌。大戰は人間の生産力のいかに偉大であるかを示してくれた。と同時に利潤を目的とする資本主義經濟の急速なる進たと云ふ事實をも示したのである。米國の大量生産が大量販賣に行かざるを得なくなつたのは自然の推移である。大量販賣が流行を、消費者の購買力刺戟を重大なる經濟政策上の要素として努力し出したのも當然の成行きである。たゞしかし乍ら、この間に於る最も大きな錯誤は購買力過少の絶對的事實を直視しないでおることである。人間の慾望には限りのないことは事實である。慾望に限りのないことは消費慾に限りのないことである。もし單に慾望だけを云ふのならば、今日の大量生産と雖も決して社會一般人の限りなき慾望を滿たすに足るものではないこともこれ亦事實である。しかも人がかやうに限りなき慾望をもつておりながら、今日大量生産が行詰りを嘆じておるのは何故であるかと云へば、要するに購買力過少に歸着する他はないのである。この點についてフォードは矢張りある程度まで大量生産は一般消費者に購買力を與へるやうにせねばならぬと云ふ見地に立つておることを認めざるを得ない。けれどもフォードは猶根本的に深く突込んだ點までは立入つてゐない。私は試みにフォードの事業についてこの見地から以下從來の政策を尋ねて見たい。

三　フォード主義の根本觀

近年の米國の物質的文明は自動車工業の偉大なる發達のおかげであると云つても過言ではないであらう。近代の工業に於て米國の自動車

位驚くべき異常なる進歩をとげたものは他に例がない。國家に於て人口六人當り一臺の自働車をもつやうになつた米國は、全世界の自働車生産額の八分の七を造りあげる。自働車工業に從事するものは三百五十萬人を算すると云はれてゐる。この偉大なる新興工業はひとり自働車製造に直接從事するものに貢献しておるばかりではない、間接にまたどれ程米國の産業界一般に貢献しておるかわからない。今日の米國の繁榮は一に自働車工業から生れたものであると云ふ見方も決して誤つたものとは云へぬであらう。大量生産は實に自働車工業に於て最もよき發達のあとを示した。人類の幸福の上に、社會の文化の上に米國の自働車工業のこの偉大なる發達が貢献した點は實に大きなものがあるのは誰人だつて否定することは出來ないであらう。その中に於てフォードは實に代表的の地位を占めてきてゐる。

フォードが最初の百萬臺に達するまでには實に二十年の永い歳月を費してきた。更にそれが四百萬臺に達するまでには六年かゝつてゐる。しかるに今日ではフォードは實に一年に二百萬臺以上の生産をするやうに變つてきておるのである。大量生産の力がいかに偉大なるものであるかは如實にフォードの事業に於て立證せられたと云つても差支へないものであらう。

しかもフォードが大量生産によつて米國産業界に覇を唱へるにいたつた經路を辿つて見ると從來の資本家がとつて來た所とは著しく異つ[illegible]がまだ勞働者の優遇について何等の根本觀念をも持つておらなかつた時代に、率先して一日八時間制と最低勞銀五弗とを發表してこれを實施してしまつた。更に一九二六年には一週五日間勞働の例を開いて世界の資本家を驚かせてしまつたのであつた。かやうな大膽なる政策は從來の資本家の考へも及ばない所であつて、勞働者は出來るだけ安い勞銀で出來るだけ長い時間、働らけるだけ働らかせることが第一の得策であるといふ考へのしみこんでゐる多數の資本家にとつては正に、青天の霹靂とも見るべき無暴なる政策に他ならなかつたのである。しかもフォードはあくまでも高い勞銀、低い賣價、大量の生産の三つの新目標の下に勇敢に突進して行つた。その結果、同時に多額の利潤といふことまでもこれによつて首尾よく受け入れることが出來たのである。事實に於てフォードの政策によつていかに多數の人々が有利なる勞働に從事することが出來たか。彼の工場に使用されるものは、約二十萬人であると云はれてゐるが、かやうな直接の工場勞働者ばかりではなく、フォードの自働車の生産増加に伴つて間接に良い影響を受けた工業の勞働者までを加へればその數は非常なものとなるであらう。すべてかやうな多數の人々がフォード政策によつていかに生活の向上を樂しむことが出來たか。健康を上進させることが出來たか。人生に光明を見出す安易さを求めうることが出來たか。かゝる點から見ればフォードはひとり米國の國家的發達[illegible]の上に大きな貢獻をしたば[illegible]

あるのは否み難いことであらうと信ずる。特にフォードが新らしい政策を採用するやうになつて以來、米國の企業家の中に、安い勞銀と勞働者の壓迫とが決して資本家經濟の上から見ても策の最上なるものではないことを教へたことだけでも重大なる役目を演じた功績を認めないわけにはゆかないのである。

しかしかやうな、高い勞銀と、安い賣價とによつて大量生産をなして來たフォードの政策はある程度までゆくと遂に利潤の減少となり行詰りの狀態に陷らざるを得ない結果になつてしまつたのである。一九二六年をフォードの大量生産の旺盛期の絕頂として翌一九二七年にはT型千五百萬臺の賣出しを最後の飛躍としてその後數ヶ月間は全く生産を停止し、販賣にも鳴りをしづめて新らしき活動の轉換期に入る試みをしなければならぬやうになつてしまつたのである。一九二六年にはフォードの政策は實に間然する所のない域にまで達しておつたのである。恐らくは現代の産業組織の上から見て、當時のフォード位いに生産方面に能率をあげ、極度まで無駄を排除して、完全なる大量生産の王者を占め得たものは他に例を求めることは出來ないであらう。かやうに大量の生産がその進歩の極點にまで達したやうに見えた時に何故に急速なる行詰りが襲つて來たのであるだらうか。こゝに考へねばならぬ點が横はつてゐる。一言で云へば生産の增加は極度にまで發達はしたけれども、これに伴ふ購買力が過少であることが明白になつたからのことに他ならない。

フォードは最初から他の短視眼的の資本家達とはいさゝかその選を異にして、資本主義經濟の當然の發達に伴つて機械力の利用が進むに連れ、いやでも生産は大量になるより他ないことを自覺し、しかも大量生産である限りは廣く社會一般を買手とせねばならぬことを心得てゐた。それ故社會の購買力を增加せしめるために勞銀も思ひ切つて高くし、勞働者に對して購買の時間を與へ、購買の機會を多からしめる意味を諒して勞働時間の思ひ切つた短縮をも實行したのである。かう云ふ點から見て彼が時代を見る目に明らかな聰明さをもつておつたことを否定することは出來ない。フォードは自ら云つた『産業がその能率を增進し技術の進歩をとげ生産費の引下げをなすことによつて消費者に與へる利益は非常に大きなものである。かりにある貨物が一弗だけ從前よりも安く生産することが出來、それだけ安く賣るとすれば消費者の支拂ふ金は一弗だけ減少して來るわけである。一弗の金が支拂はずにすめばそれが又他の貨物を買ふ方に振向けられる。同じものにしても一弗だけ餘計に買へるわけである。從つて買手が多くなれば生産は更に增加せざるを得ない。生産が增加すればそれだけ又生産費を安くすることが出來て事業は盛んになる』と、極めて巧妙なる論理であつて間然する所なきかの觀さへある。しかし乍らこゝに注意せねばならぬことはかゝる場合に於ても、同時に利潤もまた增加してゆくことになつておると云ふことである。而して利潤がなければ決して生産は資本主義經濟にあつては行はれるものではないことを思ふ時に、

この論理は根本的に永久性をもつものとは云へぬことが明白になつて來るのである。何故かと云へば利潤が有する限り生産品の賣價と、生産に費さるゝ勞銀の高さとの間にはきまつてあるマーヂンまでの差異が常に存しておるからである。たとへ勞銀がいかに高くなつたにした所で、かくして生産されるものは大量生産のおかげで原價は安くなつても矢張り利潤が加はるので賣價は勞働以上にあることは云はずして明かなのである。

大衆を相手にする大量生産がいかにその消費者を有利ならしめ、いかに消費者たる勞働者の購買力の増進に努力して勞銀を引上げて見たところで、それだけで解決は出來ない。勞銀を含めた生産費と賣價の間にはいつも利潤が存してそれだけのハンデキャップは永續した不斷の購買をゆるさないからである。大量生産と勞銀の上騰とが決して購買力をこれに伴つて將進させてゆくことの出來ない根本原因は實にこゝに存するのである。

フォードの大量生産は社會に貢獻した點に實に少からぬものがあり又この大量生産によつて從來難解決であつたいろ〳〵の問題がある程度まで解決せられた點も確かに認めることが出來る。しかしいかにフォードを以てしても遂に大量生産や勞銀上騰、生産費の低下だけで解決する道の見出せないところのものは絶對的に購買力過少と云ふ事實なのである。そしてこの根本的の要點こそ大量生産の癌化であるフォードの有りきつた弱點の原因に他ならないのである。

四　双對的購買力減少と一般的減少

私はこれまで主として米國の自動車工業について書き記して來た。しかし乍らこれは決して單に一工業について云はふとするものではなく、最も良い例としての大量生産を述べたまでで、この原則は勿論一般的のものとして云はふとするものなのである。即ち購買力過少は双對的のものではなく一般的、絶對的のものであることを云はふとするものなのである。云ふまでもないことなのであるが一國内に於てもある貨物に對しては消費は旺盛であつても、ある貨物に對しては消費が減退するといふやうな事は不斷に起つてゐる。さうした双對的のことはこゝでは問題ではないのである。私は世界的に購買力過少が絶對的の事實として現産業の根底に横はつてゐる事實を云ひたいのである。

この點から云へば米國は實は最も惠まれたる國だとも云ひうるのである。何分にも廣大なる國土をもつて、内地市場に於て十二分に生産と消費の大を賄ふことが出來、しかも莫大なる國富を擁する國としては米國自身だけで繁榮を續けうるやうにも見られる。けれどもこれはいつまでも永續すべき性質のものではない。一九二五年は米國の好景氣が理想的の條件のもとにおかれた年であつた。資本は莫大に蓄積され、生産は甚しく增大し、金利は安く、正貨準備はありあまる程に豐富であり、フェデラル・リザーブ・システムは完備し、購買力は高潮し、[illegible]

つてゐた。これ程理想的のよい條件の下におかれた好景氣はなかつたと云つても差支へなかつたのである。本來ならばかゝる條件の下にあつては米國は心から何の不安もなしに好景氣を樂しんで然るべきはずのものである。しかるにこの好條件が備はつてゐたにもかゝはらず米國の經濟學者も銀行家も頻りに警戒を口にした。からりと晴れ渡つた碧の空をながめながら、實は地平線のかなたに現はれて來るであらう黑雲の一點をじつと豫期してゐた形である。何故にこの不安なる警告が最上の好景氣の時に強く主張されたのであるかと云へば要するに、一般的の生産過剩を怖れたものに他ならない。ひとり米國の國內市場だけではなく、世界的の生産過剩がまぬかれ難い運命であることを豫知したからのことに他ならない。世界的の生産過剩は云ひかへれば世界的の一般購買力過少に他ならない。

米國の繁榮に今日どうにもならぬ一番大きな惱みの影を投じておるものは、ひとり米國のみ富んで歐洲が世界が、不況と疲弊の底に陷つておると云ふことである。極めて平易な言葉で大まかな見方をすれば米國はその巨大なる生産力を以て歐洲に輸出するものもその支拂はるゝ金のないために、歐洲に資金を貸して辻褄を合せておるものだと云つても、差支へなきものである。もしも全然モンロー主義を徹底させることが出來、米國保護關税の一つの基礎理由となつた所謂內地市場論をどこまでも徹底させてゆきうるものであるならば、一番手つ取り早いことにもなるであらう。けれどもこれは云ふべくして行はれ難いことである。原料、食料の農産物の供給國としての米國の惱みはいつもこゝにある。もう一度極めて平易な言葉で大まかな見方をすれば、歐洲の工業界が生産したゞけのものを賣ることが出來ないがために原料農産物を十分に消費することが出來ぬ。農業國はまたその農産物の賣行きが惡いために工業國のものを買ふことが減退する。これが又工業國の原料品消費減退を伴つてくる。かくして相循環し相關聯してどこまでも購買力減退の大勢を改めることが出來ないやうにしてゐるのが現狀だとも云へるのである。

これをもう一歩つつこんで考へて見れば、世界的の生産過剩、即ち一般的購買力過少は、米國の富の不均衡なる集積と云ふことにも起因するし、更に米國をはじめ各國の對外貿易關係を別にして國內經濟から見れば、資本主義經濟の當然の發達に伴つて起る所の購買力と生産力との矛盾にすべてが歸着してしまふ他はないのである。産業の合理化はこゝに於てか各國それ〴〵の立場から資本主義經濟の局面打開策として一般的に行はれ出してきてゐる。或るものは産業の合理化の名によつて生産の制限を行つてゐる。或るものは又生産費の遞減を旗印とする大量生産だけに進んでゐる。その何れにしてもどうにもならぬのは、生産力と購買力との矛盾である。この矛盾は經濟組織そのものゝ根柢に横はつてゐる矛盾だからである。

五　根本問題としての購買力過少

誠に歐洲の大戰を一つの轉機として近年の生産界の進歩には驚くばかりのものがある。しかもこれ程の大きな生産力の增加は人類の幸福の上に、社會の福祉の上に悅ぶべきことでありながら、しかも經濟界が永くその繁榮を樂しむことが出來ないと云ふ狀態に陷りつゝあるのは何故であるか。人間の力に於て、偉大なる資源に於て、機械の發達に於て、資本の蓄積に於て、缺くる所があるからでは決してない。生産が思ひ切つて增加する力に於ては何等の行詰りも見出すことは出來ない。たゞ行詰りつゝあるものはかくして作られた貨物が消費されぬからのことである。人間の慾望には限りなく、すべての人はもつと多くのものを自由に思ふまゝに消費しやうとしてもがき、あせつておりながらしかも一方に貨物の消費が行詰つておると云ふのは何故であるか。今日の經濟組織の下に於て利潤なくして永く販賣を續けてゆくことが出來ぬ以上、いかに生産しても、その生産を續けてゆくだけの價格で賣ることが出來ないやうになつて來ておるからのことである。絕對的の購買力過少、これがすべての行詰りの最後の一點と云ふべきである。

戰爭を一つの境として、過去に比較すれば勞銀は新らしい標準を造り上げるまでに上騰したのは事實である。勞働時間は短縮されて過去に於るやうに工場で働らいて疲れれば何の餘裕もないやうに疲れ果て勞働者が自由に時間を樂しむことが出來なかつたやうな狀態はすつかり改[illegible]勞働者の生活が向上し、購買力が上騰したのもこれまた事實である。しかし乍らいくらかやうな進[illegible]り向上が行はれたにして見ても、すべての商品は生産費の上に利潤を加へて賣られるものである以上は、勞銀の上騰は、生産に同程度にこれを消費しうるまでに上騰させられるものでないことは明らかである。又たとへその商品の賣價をいかに低下せしめて見たところで勞銀の上騰した最高點より常に上位にあるべきものであることはこれまた明らかな事實である。利潤がなくなれば賣られる筈もなし、生産を續けられる筈もない。大量生産が勞銀の上騰だけでは解決することの出來ない根本原因はこゝに存してゐる。

勞働者が時間の餘裕をもち、生活を樂しむ力を增大するやうになつたことは何よりも悅ぶべきことである。しかし乍ら時間の自由になつたことは決して購買力の增加ではない。フォードは一週の勞働を六日とした。しかしこの餘つた日を購買力の增加にふりむけらるものはたゞ收入の增加だけである。收入の增加がないならば自由の時間がいくらあつたとても決して購買力は增加しやうはずはない。勞働時間短縮だけで大量生産の解決は出來ぬ所以である。

生産費は低減され、賣價は安くなり、大量の生産が出來るやうになつたことは機械の利用が進み、科學的能率の上進によることは疑ひがない。しかし機械の利用は何と云つても勞働者の淘汰減少と云ふ結果になつて來ざるを得ない。現に一九二六年に米國の生産力に驚くべき大[illegible]

機械が人力を奪つたからのことに他ならぬであらう。機械は安價なる生産を可能ならしめつゝ、生産したものを消費するものの購買力を一面には減退せしめて行きつゝあるのである。これもまた大量生産だけが購買力問題を解決することの出來ぬ一つの所以である。

すべてを通して大量生産の免れ難き矛盾は購買力の過少と云ふ事である。たとへ消費は減退しても生産財に對する需要が無限に増加してゆく限り資本家的の生産の發達は行つまるものではないと云ふ見方もある。けれども要するにこれも程度問題であらう。つきつめた窮極の見地から云へば生産財の需要は結局消費資料の生産を増加させるのでなければ意味のないものになつてしまふ。消費なくして無限に生産財だけが需要されてゆくものとは考へられやうがない。つきつめた所は消費か購買力が、絶對に過少であることは生産を行つまらせる結果に陷らざるを得ないのである。今日の大量生産の惱みは正にその行詰りの門戸に入つたことを示すものだと見ても差支へないであらう。

然らば大量生産は何處へ往く。惱める米國の今後の進路は、大販賣時代をつきつめる所まで發達させて、新たに資本家の合同、集中の度を高めてもゆくであらう。けれどもいかに動き進んでゆくにしても、常に問題となるのは一般的購買力過少でなければならない。今後の經濟を眞に立直してゆくものは、たゞこの一般的購買力過少に適當なる解決の道を見出すところにのみ、一切の鍵が握られるであらう。

新勞農黨結成期への展望

新黨準備會全國代表者會議を基點として

大山郁夫

一　全國代表者會議をめぐる情勢の動き

新黨準備會は十月二十四、五日の兩日を期して全國代表者會議を招集した。該會議は、四月十日に於ける舊勞働農民黨解散以來着々進められて來た新勞農黨結成準備の最後の段階を劃するものとして企てられたものでもあり、そして、そこでは、結黨に關聯して、組織上および活働上の一切の方針が審議され確定されるべき豫定となつてゐたのである。

更らに結黨準備と結びついて、無産階級戰線統一問題に對する新黨準備會の態度方針が、同時にそこで討議決定さるべき一の重要なる案件とされてゐた。新黨準備會は、その成立の瞬間から、無產階級戰線統一の問題についても舊勞農黨の戰闘的傳統を固守して、益々強化してゆく[illegible]に對する[illegible]の清算[illegible]闘争[illegible]の過程に於て促進し完成することを以て、その當面の一の重大使命とし、それ自身の存立を意義づける一の中心的要因とさへしてゐた。かくて新黨準備會の立場に於ては、結黨準備の行動と勞農戰線統一への努力とが、對支配階級鬪爭の總括的題目の下に完全に結合統一されてゐたのであつた。從つてまた新黨準備會の結黨方針を討議すべく開かれるべき全國代表者會議に於て、勞農政治戰線統一の問題が、勞働組合および農民組合戰線統一の問題と共に、**中心的議題のうちに算へ**られるべきものとされたのは、當然すぎる當然であつた。

で、かかる重要諸問題解決の任務を帶びしめられた全國代表者會議開催の豫想が、新黨準備會の內外に於て一大センセーションを喚び起したこともまた、決して不思議とすべきことではなかつた。準備會は因より、[illegible]の下にあつて、早くから[illegible]なる用意を以て[illegible]

要議題となるべき諸案件を擧げて、豫じめ大衆の討議に附することに於て萬遺漏なきことを期してゐたが、そのことが恐らく、會議の開催に對する大衆の關心を異常に高まらしめて行つたことの最大原因の一つとなつたものであらうと考へられる。

だが、全國代表者會議の準備の進行ぶりを極度に緊張した注意を以て熱心に凝視してゐたものは、ひとり準備會の會員たちや支持者たちばかりには限らなかつた。支配階級の側に於ける各分子の該會議に對する態度がどうであつたかは別に取り立てていふまでもないことだが、しかし無產階級の陣營に於ても、それの成功不成功の成り行きが、各方面から樣々の意味に於て、嚴重に監視されてゐた。殊に日勞黨や無產大衆黨の內外に巢喰ふ例の左翼社會民主主義者たちの側からは最も鋭き視線がそれに向つて投げられてゐた。

しかし、それらの左翼社會民主主義者たちが該會議の運命を見詰めてゐた眼は、必ずしも常に祝福の光に充ちてはゐなかつた。それはしかし、彼等が豫てから新黨準備會に對して執り續けて來た態度の當然の歸結ではあつた。かつて舊勞農黨に於て極左分裂主義者の指導下におかれた小兒病患者の集團の幻影以外の何物をも見ることが出來なかつた彼等は、新黨準備會成立以來といへどもそれの上に依然として同じウルトラ・リンケンのレッテルを貼りつけ、それを徹底的に打倒することを以て、彼等の最高の使命かの如く揚言してゐたものである。、、、、、、、に於て驚くべき無氣力と怠慢とを示して來た彼等が、事一たび新黨準備會攻擊に及ぶと、如何に血眼になつて無中にのた打ち廻つてゐることか!

だが、彼等のさうした一切の努力も水泡に歸して、彼等が眼の敵にしてゐた新黨準備會そのものは、その周圍に荒れ狂ふ、、、、の眞ッただ中にも、不屈不撓の日常鬪爭によつて益々その基礎を固めて行き、爾來約半歲ばかりの期間內に、全國的に略々舊勞農黨の勢力を再組織し、更らにその間に獲得した相當の新勢力をも加へて、遂に結黨準備の最後の段階に突入すべく全國代表者會議を持つ段取りにまで漕ぎつけたのだ。それは確かに、支配階級に取つて一の驚異であつたに相違ないが、それと同時に左翼社會民主主義者たちに取つてもまた、――右翼社會民主主義者たちに取つても同樣だが、――決して意外でなかつた譯ではなかつたであらう。

それだけではない。全國代表者會議は、そこで審議されることに定められてあつた諸案件の重要性の故に各方面から熱心に注目される理由を持つてゐたといふこと以外に尙ほ、それは新黨準備會の內部的活動力の充實と、同會に對する大衆の支持信賴の熱度とのバロメーターとして見られるべき性質のものでもあつた。で、若し該會議が究極に於て何程かの成功を以て終るならば、新黨準備會はそれがために大衆の間に於て層一層その聲望を增すことになり、從つて現在の無產諸黨の列中に於て舊勞農黨が占めてゐたやうな輝ける地位を確立するとにもなり、延いては目指されたる結黨に向つて決然たる巨步を進めるが

如き實績を克ち取ることにもなるであらう、等々のことが、當然の事として考へられなければならなかつた。だが、さうした結果は、支配階級の極端に嫌がることであつたことは言ふまでもなく、更らに、右翼および左翼をこめての一切の社會民主主義者たちにしても、內心それを希望しなかつたに相違ない。もとより我々は濫りに彼等の心事を忖度してはならないが、それにも拘らず我々は、準備會に對する彼等の從來の惡意に充ちたる態度から推して、かかる結論を引き出さねばならなかつたことを、衷心の遺憾を以て率直に告白しなければならないのだ。

支配階級の憎惡と社會民主主義者たちの呪ひとを滿身に負ひ、しかも、時はかかる集會に最も不利と少くとも常識的には一應考へられたあの、、、、の時機に於て、新黨準備會の全國代表者會議は開催されるとになつたのだ。我々の間に於ても、かかる情勢の下に於て、該會議の運命が多かれ少かれ氣遣はれたことは事實である。だが、當面の事態は新黨の結黨期を、無限の彼方に押してやることを許さなかつた。從つて、結黨方針に關する大衆討議の成果を意味する全國代表者會議も無期限に遷延されてはならなかつた。否、鐵は熱した時に打たれなければならないと同じやうに、該會議の開催は大衆のそれに對する關心の最高潮に達した瞬間を外づしてはならなかつた。だとすれば該會議の前には假し不測の暗雲が密集してゐようとも、我々が我々を背後から支持應援する大衆と力を併せてそれを拂ひ除けるために奮起しなければ、舊勞働農民黨以來——更らに今春の、、、に於ける新黨準備會の出現以來——間斷なく鍛ひに鍛ひあげられた闘志と互腕とは、畢竟何の足しになるのだ！我々は最早遲疑することを許されなかつた。

二　全國代表者會議の收穫

かくて會議は的確に所定の日に開かれた。會場——牛込城西佛教會館——の內外は、早朝から多數の警官隊を以て、水も漏らさないやうに固められた。その黑服とサーベルとを押し分けて會場內へ續々と流れ込んだ全國各府縣からの代表者たちの面上には、それぞれに悲壯な決意が讀みとられた。彼等は口々に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、してそこに到着した迄の途中の苦難の經驗を、しめやかに語り合つた。或る者は藥屋に變裝し、或る者は口髭を剃り落して百姓姿に化け、或る者は着なれぬ商人服を纏ひ、或る者は山を越え海を渡り、或る者は幾つも鐵道線路を利用して大迂回をした後に、漸く會場に辿り着いたやうな有樣であつた。——代表者が送れなかつた各地の支部聯合會もしくは單獨支部からの、『ダイヒヨウ、、、、、』『、、、、デユケヌ』等々の悲痛な來電もあつたが。——全國の津々浦々から來集したそれらの同志たちが今春の、、以來絕えて久しく全國的に地方的に連絡を切斷されたまま相互間に消息を通ずることさへ叶はなかつた幾個月間の受難期を經た後に、漸く始めて無事な顏を合はせたとき、會場にとつて早くもそこに一層の感激の色が打つてゐた。

議場の正面には、『代表者會議を護れ！　大膽に細心に嚴肅に！』『新勞農黨結黨萬歲』『階級的政治戰線統一萬歲』のスローガンを大書した三枚の長いビラが或る間隔をおいて掲げられ、議長席の後方には當日の議事のプログラムが張り出され、更らに室の一側の壁には、全日本無產者藝術聯盟製作の疊大のポスター――健腕にハンマーを揮ふ頑丈な勞働者の偉軀の背後に大きな輝く星から燦爛たる光芒が滿紙に放射してゐるところを晴々しく描いた――が掛けられて、それらの道具立ての諸調が、その日の場面にふさはしい空氣を作つてゐた。代議員席には二十八の準備會支部府縣聯合會および十四の單獨支部の代表者七十餘名、並びに各勞働組合、地方政黨、全國農民組合聯合會等々の代表者が控え、委員席も傍聽者席も招待席も溢るるばかりの滿員の盛況を呈した。書記長の開會の辭が歡呼の聲と相呼應して述べられ、議長および書記の選任が滯りなく運ばれ、全國各地の支持團體および個人によつて發せられた無數の祝辭祝電が讀みあげられ、引續いて本部員および各地方代議員によつて述べられた本部活動報告および地方狀勢の報告が嵐の如き拍手に迎へられ、各種の議案が熱心に活潑に嚴肅に討議された。朗讀や演說やに對する『中止』も、型の如く連發された。だが、それは、、、、、になつたよりは寧ろ議場の緊張味を增す拍車となつた。かくて各方面から疑惧されてゐた『解散』を克服して、二日間の會議は、多大の收穫を擧げて無事に終了した。

會議の詳報は今それをなすべき場合ではない。それに關しては、會議直後の『勞働農民新聞』および『無產者新聞』――遺憾ながら兩方とも『發禁』を喰つたが――の關係記事が參照されるべきである。筆者は、茲では、ただ次の二三の要點を摘記するだけで滿足せねばならぬ。即ちこの全國代表者會議に於ては、全國各地方からそこに來り集つた九十餘名の代表者たちによつて、正式中央幹事會が確定的に選任され、舊勞農黨以來の戰鬪的傳統を發展せしめた綱領政策が新黨のために決定され、近き結黨の日を前に一路組織の確立に邁進すべき決意と方針とが明確に表示され、更らに全大衆の要望の的である戰線統一の方針が、無產大衆の堂々たる行進の前途に輝く一大標柱の如く打ちたてられたのであつた。

更らにまた、各議案の審議の合ひ間々々々々を縫うてなされた地方狀勢報告は、一つ々々聽衆の心魂に巨鐘の如き響を傳へた。演壇に立つた各報告者は、今春の、、の嵐のただ中に全國的および地方的連絡が切斷され、中央および地方に於て幾百の精銳が、、、、、、、、あとに殘された若干の鬪士たちが全然孤立無援の深淵に突き落されたやうな狀態の下にあつたにも拘らず、如何に彼等が大衆としかと手を握り合つて文字通りに血みどろの鬪爭によつて、絕え間なく迫り來る、、、、を強力に執拗に反撥し、かくて百方苦心慘憺の末漸く各地方に於て舊勞農黨の地盤を徐々に恢復し、また可能な場合に於ては相當の新勢力をさへも獲得しつゝ組織の再確立のために奮鬪しつづけて來たかを語つた。彼等の肺肝を迸り出た眞摯なる告白は言々句々聽衆の

幸ひした結果を齎んだ。即ちそれは、あくまで同黨を純化し強化して行つて、同黨をして後來の、、、、、に於て眞に驚嘆すべき無盡藏の活動力を發揮せしめる原動力となつた。のみならず、第四回中央執行委員會の時から年末にかけて續いた分裂時代の舊勞農黨の名狀しがたき苦難の經驗は他方に於て同黨をして、無産階級の陣營に地位を占めてゐて陰に、、、、、、、、、、、、と協調する社會民主主義そのものに對する認識を少からず深めた。しかもその認識は、殊に今日に於ては、かの口に左翼的言辭を弄しながら結果に於て右翼民主主義の流れに棹す左翼社會民主主義者への批判の上にまで及ぼされるやうになつて來てゐるのだ。今日新黨準備會が當面の政治的客觀狀勢に即し、舊勞農黨の戰鬪的傳統に據つて、無産階級戰線統一の促進のために必死に努力してゐる各瞬間に於ても、社會民主主義者をその行動によつて批判する自由を保留——勞農政黨合同の條件としてではなく、それへの態度の基準としてだが——するといふが如き、大衆的階級行動黨としての正しき立場をあくまで頑強に固守してゐるのは、その因つて來るところが究竟そこにあるのだ。一言にして盡くせば、それは實に、一昨年の第四回中央執行委員會での出來事に端を發して最後まで一貫した舊勞農黨の[illegible]を極めた過程の經驗によつて購はれた理論の發達を意味するものだ。

かかる觀点から、我々は一昨年の十月二十四日に發せられた舊勞農黨の第四回中央執行委員會の歷史的聲明を見てゐるのだ。これ故に、今回の全國代表者會議が、それから一年後の同[illegible]我々は單にその事實だけによつても、或る鋭き感激の湧き上るのを覺えた。「我々は渾身の努力によつてこの日をも歷史的のものとしなければならない。」——當日會場に參集した全國の同志たちは、言はず語らず、一樣にかうした決意を各自の胸裡に懷いて、「全國代表者會議を護れ！大膽に細心に嚴肅に！」のスローガンを大書したビラに面して着席したのであつた。

四　×××××の行進

だが私は、特に今年の十月二十四日を我々にとつて貴重なものとならしめたのには、別に今一つの原因があることを附け加へねばならぬ。それは上來の記述のうちに充分示唆されてゐることだが、尙ほ玆で今一應明確に再言することを許されたい。それはかうだ。——今回の全國代表者會議は、新黨準備會によつて代表されたる全國幾萬の勞農大衆が、今春三・四月の慘敗後の徹底的潰滅狀態の中から、最後の惡戰苦鬪によつて漸くのことで再び起き上り、破壞されたる組織を漸次に再結合し、消散せしめられたる活動力を徐々に恢復し、それに幾ばくかの新獲得の勢力をさへも加へて、再度の勇敢なる旗擧げの首途に於て立て直ほした堂々たる陣容を表示したものであつた。今にして思へば、今春三・四月の・・・に、この規模の嚴大さに於て、またこの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ないか

本の無產階級運動史上、よし滅後のものでないにもせよ、まさしく空前のものであつた。そしてその犧牲に供されて根こそぎ組織を破壞された數團體は、今後果して幾年の後になつて復活するであらうかの見込みが全然立たないもののやうにさへ見えた。少くとも一般にさう考へられてゐた。ところが、その觀測が必ずしも正しいものでなかつたことの證明が爾來の短き時日の經過につれて、次第に明かに示され始めた。少くとも新黨準備會の場合に於ては、今回の全國代表者會議の成績が端的にそれであつたのだ。

いかにも、現在の社會狀勢の進展の下に於て着々その、、、、、、、を失ひつつあるブルジョアジーおよび小ブルジョアジーの圏內の諸般の改革運動は、その進行の途上に於て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。だが、新世紀の必然不可抗の產物である無產階級運動は、かかるものとは根本的に性質を異にする。それは苟しくも廣大なる全被壓迫民衆の諸層の經濟的政治的、、、、、、、、、、——、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、——どこまで進展して行くとも知れぬ基礎を失ふ氣遣ひはない。それは無論、今日に於てこそ最も強大なる、、、、、、、、、、、、、、、、、、、によつて、又しても又しても、したたかに叩きのめされる經驗を重ねて行くであらう。だが、斷つても斷ち切れない存立の社會的根據を持つそれの根強さは、それをして、、、、、、、の行進を絕えず繰り返へさしめて、最後の成功を見るまでは、いつまでもその歩みを止めしめないであらう。新世紀の運命の最後の負擔者として登場してゐる無產階級の解放運動がまさしくさうしたものであることは、敵味方を問はず、誰れの胸にもあることでなければならぬ。

我々は茲で、かかる知れ切つた一般論をいつまでも續けて行かうとしてゐるものでないが、しかしただ一言、新黨準備會の全構成員たちが、最近の數個月間に於て、身を以てそれを部分的にもせよ實證したことに觸れないままでこの場を通り過ぎることは出來ない。今春の、、、から全國代表者會議まで約七ケ月の準備會の歷史は、受難と苦鬪の歷史でもあつたが、同時にまた奮起と躍進の歷史でもあつた。換言すれば、それは全準備會員が、大衆との協力の下に行はれた果敢執拗なる鬪爭によつて、絕望から希望を奪還し、、、、、、、鍛ひ出した歷史であつた。その勝利は縱し部分的で小さいものにもせよ、それは續くべき無限の將來の、、の道を指し示すものでなくて何だ！

だが、準備會が今日までに、小さいながらも、兎に角あれだけの成功を收めることが出來たのは、、、、、に於ける各種の鍛練に負ふことも決して少くはない。、、は單に全準備會員の意識を高めたり、鬪志を旺盛ならしめたり、相互的友誼と相互的信賴とを益々緊密にしたりなどしたといふやうなことの外に、一般にその政治的技術を可なり急速に向上せしめた。それは殊に、益々全準備會員の自己批判力を尖銳にし、その戰術上の柔軟操縱性を倍加し、その組織上および計畫上の

胸に深き感銘を打ち込み、屡々不可抗の流涕に彼等の眼をうるませさへした。更らに若干の報告者たちによつてなされた社會民主主義者たちの各地方における卑劣なる裏切り的行動に對する痛烈なる暴露は、滿場の會衆の頭髪を逆立たしめた。實際この種の會議に於ける地方狀勢報告がかくも潑剌たる生命を帶びて、ひしくと人の胸に迫つて來たことは、少くとも筆者自身の經驗に於ては、かつて類例のなかつたことであつた。

しかも全國代表者會議は、さうした日程進行の間にも、刻下飢餓にさらされてゐる勞働者農民無產市民の切實なる要求を諸般の議案中に織り込むことを怠らなかつたし、更らに當面の鬪爭題目として、勞働者の、、、、、、、、、、、、東京市會解散要求、八幡市および京都市に於ける小選擧區制反對、等々の諸問題を取り上げ、それらに對して適切緊要なる決議をしたことなども特に附記されねばならぬ。

かくして二日間に亘るこの會議は多大の成功を收めた後、堂を搖がす萬歳歡聲裡に散會して、出席代表者たちのすべては、倍加された鬪志と更新された希望に充ち、まツしぐらに次の鬪爭に突入すべく、各よ歸鄕の途についた。

全國代表者會議のかかる結末に對しては、おそらく、、、、は一層の憂色を濃はし、また裏切り者の群れは慄然として愧死したことであらう。しかもブルジョア諸新聞は、彼等の「懸覧」の豫想が實現されなかつたのを見て、それは一に當局が新黨準備會の諸成分子と[illegible]神とを精細に見窮めようとする配慮から出たものであり、從つて會の無事終了は、大衆によつて熱望されてゐる新勞農黨の圓滿なる誕生の前觸れと見られるものであるよりは、寧ろそれの成立と同時にそれの上に覆ひ掛らうとしてゐる一抹の暗雲を豫感せしむるものだ、と言つたやうなことを書き立てた。だが、それは明かに、例によつて當局の淺墓にも、、、、を狙つたところの、見え透いた逆宣傳を反映したものに外ならぬ。我々は確信する、會議が最後まで何等の故障なく順調に進行して豫想外に豐富な收穫を以て終了したのは、偏へにそれが、全國に散布されてゐる無數の支持大衆の熱烈なる期待を荷ひ、更らに當日の出席代表者たち及び傍聽者たちの手によつて『大膽に細心に嚴肅に』護られたためでなければならない、と。

いづれにもせよ、今回の全國代表者會議は勞働者農民無產市民その他全被壓民衆の利益の擁護と伸張のために、また全被壓迫民衆の政治的自由獲得のために、更らに無產階級戰線統一のために勇敢に戰ふことを高らかに中外に宣して近く出現しようとしてゐるところの、わが國唯一の戰鬪的傳統の上に立つ大衆的行動黨たる新勞農黨の性質と組織と活動方針とを明確に規定したと同時に、全國幾萬の獲勞農黨員たちと、獲勞農黨および新黨準備會を熱心に支持して來た無數の大衆とに向つて、待たるるその結黨に向つて大膽に堂々たる巨歩を進めるべきことを積極的に激勵する効果を擧げた。この意味に於て該會議は、[illegible]

展望を著るしく明確ならしめたものと言へる。そこにこそ、該會議の中心的重要意義が讀み取られるのだ。

三　輝ける我等の十月二十四日

新勞農黨結成期への一大躍進の跡を標識し、同時に無産階級戰線統一への一大拍車となつた全國代表者會議の如上の成功は、それが擧行された十月二十四・五の兩日を、永久に日本の無産階級運動史上に特筆されるべき輝ける記念日の一つとならしめるであらう。

といふことは、舊勞働農民黨およびその後繼者たる新黨準備會に於て極左分裂主義者の指導下におかれたる小兒病患者の集團以外の何物をも見ることが出來ないやうな幻覺的社會民主主義者たちの耳には、おそらく全然不可解の妄語として響くであらう。だが、舊勞農黨の果敢なる不斷の鬪爭の記錄の深き歷史的意義を正しく領得し、延いてその戰鬪的傳統を固守しつつ全被壓迫民衆の生活と自由とのために決然と戰つて來た新黨準備會の立場に同感共鳴することを躊躇しない全國無數の大衆には、それは當然のことを率直に述べた當然の言葉にすぎないものとして受け入れられるのだ。

更らにまた、この全國代表者會議の第一日が、今では舊勞農黨の歷史に於て劃期的出來事の一つとして記憶されてゐる一昨年の第四回中央執行委員會が開かれた日と同じ十月二十四日に持たれたことは、我々を多少の感慨に導き入れることを誤まらなかつた。それはもとより、ただ一過の偶然の廻り合せにすぎないものであつたが、しかもそれは我々の腦裡に於けるその日の印象を一層深めるに與つて大に力があつたことは確かだ。

このことは主として、舊勞農黨の第四回中央執行委員會に起つた一場の劇的光景およびその意義・影響、並にそれらに對する我々の追憶から來るのだ。顧みれば、その頃までに舊勞農黨の內部に於て、黨の構成に關する所謂『門戶開放』に對する態度の上に二つの流れがあつた。問題の中心は現實的には、當時の所謂左翼三團體の參加を受け入れるか否かの上に繫つてゐたのだ。ところが、第四回中央執行委員會の全般の形勢は、それに關して門戶開放に向つて傾いてゐたので、それを非とした日本勞働組合總同盟を主導力とする右翼系數團體は、會の劈頭に於て突如として脫黨を宣しつつ、勝ち誇れるものの如く昂然として連袂退場したのであつた。そして彼等の大部分は、その後間もなく別に社會民衆黨を組織して、舊勞農黨に對する排擊の陣を張つたのだ。それはまさに、口に統一を唱へて陰に分裂を策する社會民主主義の正體の、最初の赤裸々たる自己暴露であつた。それを契機として無産階級政治戰線上に次々と族出した複雜なる渦紋は寧ろ後日譚の領域に屬するものだが、とにかくそれ以來益々加重して行つた、、、、、、が主として舊勞農黨の上に集中されるやうになつたので、ために同黨は一時一般からその存立をさへ危ぶまれたやうな窮境に陷つたものであつた。だが、その際に同黨が受けた鐵火の試錬は、結局同黨に

幸ひした結果を産んだ。即ちそれは、あくまで同黨を純化し強化して行つて、同黨をして後來の、、、、、に於て眞に驚嘆すべき無盡藏の活動力を發揮せしめる原動力となつた。のみならず、第四回中央執行委員會の時から年末にかけて續いた分裂時代の舊勞農黨の名狀しがたき苦難の經驗は他方に於て同黨をして、無產階級の陣營に地位を占めてゐて陰に、、、、、、、、、、、、と協調する社會民主主義そのものに對する認識を少からず深めた。しかもその認識は、殊に今日に於ては、かの口に左翼的言辭を弄しながら結果に於て右翼民主主義の流れに棹す左翼社會民主主義者への批判の上にまで及ぼされるやうになつて來てゐるのだ。今日新黨準備會が當面の政治的客觀狀勢に即し、舊勞農黨の戰鬪的傳統に據つて、無產階級戰線統一の促進のために必死に努力してゐる各瞬間に於ても、社會民主主義者をその行動によつて批判する自由を保留──勞農政黨合同の條件としてではなく、それへの態度の基準としてだが──するといふが如き、大衆的階級行動黨としての正しき立場をあくまで頑强に固守してゐるのは、その因つて來るところが究竟そこにあるのだ。一言にして盡くせば、それは實に、一昨年の第四回中央執行委員會での出來事に端を發して最後まで一貫した舊勞農黨の複雜微妙を極めた受難の經驗によつて購はれた理論の發現を意味するものだ。

かかる議論から、我々は一昨年の十月二十四日に掲げられた舊勞農黨の第四回中央執行委員會の[illegible]を見[illegible]るのだ。これ故に、今回の全國代表者會議か、それから二年後の同日に[illegible]我々は單にその事實だけによつても、或る鋭き感激の湧き上がるのを覺えた。「我々は渾身の努力によつてこの日をも歷史的のものとしなければならない。」──當日會場に參集した全國の同志たちは、言はず語らず、一樣にさうした決意を各自の胸裡に懷いて、『全國代表者會議を護れ！　大膽に細心に嚴肅に！』のスローガンを大書したビラに面して着席したのであつた。

四　×××××の行進

だが私は、特に今年の十月二十四日を我々にとつて貴重なものとならしめたのには、別に今一つの原因があることを附け加へねばならぬ。それは上來の記述のうちに充分示唆されてゐることだが、尙ほ玆で今一應明確に再言することを許されたい。それはからだ。──今回の全國代表者會議は、新黨準備會によつて代表されたる全國幾萬の勞農大衆が、今春三・四月の慘敗後の徹底的潰滅狀態の中から、最後の惡戰苦鬪によつて漸くのことで再び起き上り、破壞されたる組織を順次に再結合し、消散せしめられたる活動力を徐々に恢復し、それに幾ばくかの新獲得の勢力をさへも加へて、再度の勇敢なる旗擧げの首途に於て立て直ほした堂々たる新陣容を表示したものであつた。今にして思へば、今春三・四月の、、、は、その規模の廣大さに於て、またその[illegible]に於て、[illegible]、、、、、を見たことの[illegible]

本の無産階級運動史上、よし前後のものでないにもせよ、まさしく空前のものであつた。そしてその犠牲に供されて根こそぎ組織を破壊された數團體は、今後果して幾年の後になつて復活するであらうかの見込みが全然立たないもののやうにさへ見えた。少くとも一般にさう考へられてゐた。ところが、その觀測が必ずしも正しいものでなかつたことの證明が爾來の短き時日の經過につれて、次第に明かに示され始めた。少くとも新黨準備會の場合に於ては、今回の全國代表者會議の成績が端的にそれであつたのだ。

いかにも、現在の社會狀勢の進展の下に於て着々その、、、、、、、を失ひつつあるブルジョアジーおよび小ブルジョアジーの圏内の諸般の改革運動は、その進行の途上に於て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、が。新世紀の必然不可抗の產物である無產階級運動は、、、、、、、、、、、。だは根本的に性質を異にする。それは苟しくも廣大なる全被壓迫民衆の諸層の經濟的政治的、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、──どこまで進展して行くとも知れぬ基礎を失ふ氣遣ひはない。それは無論、今日に於てこそ最も強大なる、、、、、、、、、、、、、によつて、又しても又しても、したたかに叩きのめされる經驗を重ねて行くであらう。だが、斷つても斷ち切れない存立の社會的根據を持つそれの根強さは、それをして、、、、、、の行進を絕えず繰り返へさしめて、最後の成功を見るまでは、いつまでもその歩みを止[illegible]後の負擔者として登場してゐる無產階級の解放運動がまさしくさうしたものであることは、敵味方を問はず、誰れの胸にもあることでなければならぬ。

我々は茲で、かかる知れ切つた一般論をいつまでも續けて行からとしてゐるものでないが、しかしただ一言、新黨準備會の全構成員たちが、最近の數個月間に於て、身を以てそれを部分的にもせよ實證したことに觸れないままでこの場を通り過ぎることは出來ない。今春の、、、から全國代表者會議まで約七ケ月の準備會の歷史は、受難と苦鬪の歷史でもあつたが、同時にまた奮起と躍進の歷史でもあつた。換言すれば、それは全準備會員が、大衆との協力の下に行はれた果敢執拗なる鬪爭によつて、絕望から希望を奪還し、、、、、、、、鍛ひ出した歷史であつた。その勝利は縱し部分的で小さいものにもせよ、それは續くべき無限の將來の、、の道を指し示すものでなくて何だ！

だが、準備會が今日までに、小さいながらも、兎に角あれだけの成功を收めることが出來たのは、、、、、、に於ける各種の鍛練に負ふことも決して少くはない。、、は單に全準備會員の意識を高めたり、志を旺盛ならしめたり、相互的友誼と相互的信賴とを益々緊密にしたりなどしたといふやうなことの外に、一般にその政治的技術を可なり急速に向上せしめた。それは殊に、益々全準備會員の自己批判力を尖銳にし、その戰術上の柔軟撓屈性を倍加し、その組織上および計畫上の

能力と經驗とを豐富にし、その行動力を敏活にし効果的にしたことは、疑ふべからざる事實で、しかもこれらは皆全準備會員の政治的技術の向上に合流したことも無論である。マルクスは、優秀なる政治的技術の所有者である支配階級に向つて無產階級は、より以上に優秀なる政治的技術を以て對抗しなければならないことを斷言した。我々は決して、全準備會員が現にさうした望ましき境地にまで到達したと妄信するものではないが、しかし漸次にそこに接近しつつあることだけは、斷言して憚らないものである。

もとより、現在の新黨準備會の如く一種特異な狀態の下におかれてゐる政治團體にとつては、單なる優秀なる政治的技術の所有だけでは不充分である。それは必然に、無產階級的純眞性を失はない旺盛なる鬪志に結びつけられねばならぬ。準備會が持つ政治的技術は、よし優秀無比だとはいへないとしても、確かにそれは、、、、、、、、に於て長足の進步を見せた。しかも、それの不足を補ふべく、純眞且つ旺盛なる鬪志がその上に加へられたのだ。そしてその結果は、今回の全國代表者會議に於て充分に表示された。それが、、、、、、への行進の跡をしるしづけたのも、決して理由のないことではなかつたのである。

五　解散前後の追憶

、、、、、、、への行進！　それまでにはしかし、必然に、途中の幾多の[illegible]なければならなかつた。

今や、新黨準備會の全會員は、久しく一回の[illegible]表者會議の重荷を卸して、よし部分的にもせよ或る程度の成功を收め得た餘勢を以て、勇氣百倍した勝利者として、久しく待たれた結黨期を眼前に望みつつ、直ちに鬪爭の次の段階に進み入らうとする地點にまで到達してゐる。しかし試みに頭を回ぐらして一たび來路を顧み、まだ生々しき鬪爭の跡を印する幾多の場面に眺め入るとき、我々はさすがに、よくも早く玆まで辿りつくことが出來たものだと、思はず溜息をつきたくなるのである。

かういふ氣持は、いま全準備會員の胸を往來してゐるものでなければならないが、しかし私は、差し詰め私自身の個人的經驗に基いて、その點を今すこし展開することを許されたく思ふ。

三・一五事件――三月十五日の日本共產黨檢擧事件――の當日、私は茨城縣から千葉縣への遊說の途上にあつたが、成田驛で下車して眞直にその地で開催の演說會に向はうとして、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、歸京の身を汽車に托した時、始めて一通信社員から、當時知られてゐた範圍內に於て事件の內容を說き聞かされ、愕然として暫しは言ふところを知らなかつた。

その夜遲く自宅に歸り、勞農黨本部に電話を通じて、そこでも一人の書記を殘した以外の本部員、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、[illegible]長、、、、、、、となつ[illegible]。私は事態の[illegible]。

ことを痛感した。

かくして私は不測の不安に襲はれたが、同時に深く決心の臍を固めて、ともかく當面身體の自由を奪はれてゐなかつた上村氏外二三名の常任中央執行委員およびかゝる異常の災厄の下に益々潑溂たる元氣を示した幾人かの青年闘士たちと協力し、渾身の精根の續く限り萬端の黨務を執り、最後まで、、、、、、、、、覺悟した。

『我々の運動も愈々無產階級運動らしく本舞臺に入りかけた！』

私は、その日の午後、、、、、、のうちに見出された上村氏宅に集つて來た同志たちに、かう語りかけた。そして、その際特に泰然自若として益々闘志を深めてゐたやうに見られた上村氏等と互に額を集めて當面應急の對策を講じ、聲明書を起草したり、地方支部との連絡を圖つたりなどして、多事なる一日をすごした。

慌しき數日が經過してゐた間に、事件の輪廓が次第に少しづつ明白になり始めた。一方、東京および地方に於て檢擧された前衞闘士が幾百を算へたことが知られるやうになつたと同時に、他方、拉し去られた本部員たちの若干名が一人々々相次いで歸還しはじめ、また本部外からも段々と多數の應援闘士たちが還つて來るやうにもなつた。本部の陣容も比較的急速に立て直りかけた。そのうち、一週間餘を經て、細迫書記長も歸つて來た。かくて我々は、最早平常の通りに執務を續けて行くことが出來るやうになつた。否、そればかりではなく、我々は全然豫想だもしなかつた、、、、、、、、、、從來かつて經驗しなかつたほどの緊張味を以て、火の出るやうな活動に入らないでゐられないやうな衝動を感じさへした。

やがて私は、再び遠近の各地への遊說を始めることになつた。どこへ行つても、わが黨に對する大衆の關心が最高潮に達してゐるのが私に見られた。『すぐる國會選擧以來、支配階級の陣營から間斷なく發射された、、、、、を超えて根かぎり戰ひ拔いたわが黨の本領が、益々明白に各地の勞働者・農民・無產市民に認識され始めたのだ。大衆の生活と自由とのために眞に戰ふもののみが、大衆の心からの信頼を集めることが出來るのだ。かくて、わが黨のすばらしき發展期が、今こそ我々の眼前に開始されたのだ！』——かう私は心に呟きながら行く先々の大衆に呼びかけることを喜んだものだ。

四月十日！、、、、、、、、、、が舊勞農黨および外二團體の、、、、られた昭和三年四月十日。その日よ、、、、、、、、、！——

その日私は鳥取市で黨の解散の報に接し、急遽旅程を變更して歸京の途に就かねばならなかつた。だが私は、汽車を待つ間に、その夜同市で開かれる演說會に臨んで大衆と訣別の辭を交はさうと試みた。ところが、演說會は開會の辭が始まつてから一分間にして解散を喰ひ、私はまた檢束に會つた。

所定の發車時間前に釋放されて、私は、停車場まで見送りに來てくれた幾百の黨員たちおよび農民組合員たちと熱涙を揮つて別れを告げ、翌朝京都で乘替の時間を利用して同市の同志たちと悲壯な會見を

終へた後、私と連れ立つて上京する筈になつてゐた同志水谷君および米原までといつて見送つてくれた同志奧村・神田の兩君と共に乘車した。

その夕東京驛へ着くまでの十數時間は、私にとつては可なり重苦しい瞑想の連續を意味した。私は黨の過去・現在・未來について、考へられるだけ考へ抜いた。殊に當面の黨の再起の方策に關する問題が、最も多く私の心を占領した。そしてそれについて反復熟慮してゐた間に、絶えず私を打つたものは、朝の新聞で讀んだ我等の書記長が新聞記者に向つて試みた談話中の、『當局が百度解散すれば我々は百度結黨するまでだ。斃れるまでやる。』といふ言葉であつた。それには、私は無条件同感であつたが、それよりも私には、それを言ひ放つた同志細迫の心持が嬉しかつた。好漢我等の書記長は、解散の日、警視廳に喚び出されて解散命令の諸書に署名を迫られたとき、、、にもそれを拒絶したと新聞紙は報じてゐる。私はその記事をも感涙を以て讀んだ。その書記長が發した『百度解散・百度結黨』の溌溂颯爽たる言葉こそ、彼にはふさはしい言葉だ。否、それは彼にふさはしいのでなく、彼によつて、代辯された勞農黨にふさはしいのだ。彼をしてそれを言はしめたものは、實に勞農黨の輝ける傳統的闘爭精神だ。そして同時に、暗き瞑想が動々もすれば私を誘ひ込まうとした底知れぬ絶望の淵から私を救ひ出して、未來の勝利の道への躍進を激勵したものもまた、同じくその勞農黨の傳統的闘爭精神と、これについ[illegible]ふ所の

先きまで[illegible]されてゐる全國數萬の同志への固き信頼とに外なら
のだ。——さう考へた時、私は心から、それらの同志たちに頭の下るのを覺えないでゐられなかつた。

東京驛では、出迎への二十名ばかりの本部員およびその他の黨員たちと、悲痛なる歎ひの言葉と固き握手とを交はした。それから歩廊を歩み出ようとして足を動かし始めたとき、私たちは突如としての群集の中から躍り出た暴力團の一群の襲撃を受けた。かうしたことは、私には既に前から豫感があつたことであり、また米原で別れた同志奧村・神田の兩君から『豫定を變更してはどうか？』との切なる警告を受けたことでもあつた。けれども、敢て事を好む譯ではないが、この際、よし一命を失ふ危險が身に迫つてゐようとも、意外の大災厄がわが黨の上に降りかかつて來たこの危機的瞬間に、東歸する私を迎へ待つてくれることになつてゐた敬愛する同志たちと暫くぶりで再び相見て、心と心の接觸を持つ貴重なる機會を犧牲にするが如きことは、私には何としても出來ないことであつた。のみならず、黨の解散そのものによつて證明された通りの、、、、、、、、、、、、、、に於て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、との現實は、今後どうせ我々には避けられないことだとも考へたので、私は遂に東京驛下車の豫定を變へなかつた。果して來るべきものは來た。だが、私は周圍の同志たち——恰も、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、私の身邊から[illegible]以外の[illegible]——の決

死的擁護の下に、鐵拳雨下の間に或る程度の傷害を受けただけで、そのまま本部に直行した。そしてそこで、留守を護つてゐた他の本部員たち及び各地方から解散後の對策を講ずべく來京してゐた支部員たちと、感激に滿ちた再會をしたのであつた。

以上敍述して來たことは、もとより唯私一己の小さき個人的經驗にすぎないものである。しかもそれは、前衞鬪士の一群は言ふに及ばず、全國幾多の勇敢なる黨員たちが、その前後に亘る頃から今日に至るまでに生ま身の上に受けて來た痛烈なる鐵火の試練に比ぶれば、眞に言ふにも足らぬほど些々たるものであることは確かだ。だがそれは、當時他の黨員たちの殆んどすべてが持つた經驗の一班を髣髴せしめるだけのことはあるであらう。更らにそれは、その後に於ける新黨準備會の激烈なる鬪爭の過程に於て全會員が潛り拔けねばならなかつた苦難の幾個月の前觸れでもあつたのだ。のみならず今日に於て我々が幾分でもそれを追憶することは、つい先頃開催したばかりの全國代表者會議が我々に對して持つ重大意義を一層切實に把握する媒介ともなるであらう。——といふ希望の下に、私は煩を厭はずに、その概要を茲に記しとどめたのだ。

六　鬪爭を通じて結黨へ

四月十日、私が鳥取市にゐて漸く黨解散の確報に接したばかりの頃には、東京の本部では早くも在京の中央委員および本部員が寄り集まつて、解散後の行動方針を協議し、斷乎たる決意と不屈不撓の努力とを以て再組織運動を進めることを決議し、さらにその場で緊急對策委員會を組織した。緊急對策委員會は、舊黨中央委員並に各地方代表者に、即刻上京するやう招電を發した。

翌十一日夜本部に參集した三十餘名の中央委員および地方代表者は、直ちに新たなる勞農政黨を結成することを滿場一致を以て議決し、一切の方針と計畫とを立て、八名の準備委員を擧げ、十二日午後一時から新黨樹立協議會を開いて即刻新黨の立黨式を擧げる手筈を定めた。だが、翌十二日の新黨樹立協議會は、議事に入らうとして解散を喰はされた。かくして、新黨準備會の爾來約七個月に亘る惡戰苦鬪の序曲は幕を切つて落した。

次いで新黨準備委員は、新黨準備會の運動方針や組織方針を協議決定した。新黨準備會によつて結成されるべき新黨は、無論舊勞農黨の戰鬪的、傳統を繼承し發展し、勞働者農民無産市民の生活上の利益を擁護伸張する立場から、帝國主義ブルジアジーを主導力とする資本家地主、、、、、、、、、、、更らに全被壓迫民衆の政治的自由の獲得のために戰ふことを使命とするものでなければならぬと規定された。それと同時に新黨運動は、對支配階級鬪爭の强大化を意味する階級的戰線統一促進の任務と關聯して遂行されるべきものとされた。

この根本原則に基いて、新黨準備委員は、新黨準備のための鬪爭過程の發端に於て、まづ第一に支配階級の攻勢が無産階級の戰鬪的組織

の、、に迄で向つた事に對する認識の下に結社の自由の獲得闘爭の必要を強調し、當面、、反對の強大なる大衆的抗議運動を開始し、特に黨解散の、、、、、、、、、、の打倒運動に努力を集中することに決定した。第二に、それと緊密に結びついて、全國的に益々頻繁なる日常闘爭を展開することを計畫した。第三に、以上のすべての運動に於て、諸他無産黨の大衆と益々果敢なる共同闘爭を遂行することによつて、大衆と大衆との提携の基礎の上に勞農政黨合同の機運を促進すること、等々の方針を確定した。

次に新黨準備會の組織方針としては、新黨準備會は舊勞農黨解散以後新黨の樹立に至るまでの舊黨の全勢力を保持し、全運動を一層強力に遂行する常置的組織として、中央にその本部を持ち、地方に於ては出來るだけ舊支部および支部聯合會の構成を崩さずに維持して、準備會の趣旨に贊成する諸無産團體の代表者をもその中に加へるべきものとの根本原則が決定された。

その頃は、、の嵐がその頂點に達してゐた時であり、新黨準備會が最も困難なる情況に下におかれてゐた時であつた。中央および地方に於ては、數百の精鋭なる闘士が奪ひ去られてゐた。、、、、、に續き、、、、、に次ぎ、全國的および地方的連絡は全然切斷され、集會の自由は徹底的に剥奪され、本部に於てさへも、壁と、、、が行はれ、時には僅かに二三人の書記が執務してゐたにすぎないやうな状態たる場合が見られた。にも拘らず、本部は如上の運動方針および組織方針に從つて必死的に活動した。かくて四月[illegible]對週間とし、更に二十三日から三十日までを田中內閣打倒[illegible]闘爭週間として運動を進めた。詳細はその頃の「勞働農民新聞」および「無産者新聞」參照。それは來るべきメーデーを契機として、勞働者農民大衆の、、、に對する抗議運動に拍車を加へるためであつた。そしてかかる闘爭の前面には、常に次の如きスローガンが掲げられた。

勞働農民黨を返せ!
治安維持法・治安警察法を即時撤廢せよ!
言論集會結社の自由!
食と仕事を與へろ!
全勞農政黨の合同實現!
勞働者農民の、、、、、、、、、、、、。

だが準備會は、この形勢の下に運動を全國的に結合統一して強力なる大衆的、、運動にまで發展せしめることが出來なかつた。この事は一般的見地からいへば、わが國の勞農大衆がかつてさうした深刻なる闘爭の經驗を持つたことが少なかつたことから來てゐるものでもあり、また特に準備會の立場からいへば、同會が既に述べたやうな極度に不利な形勢の下におかれてゐた事情から來たものでもある。だが、更に別個の原因としては、新勞農黨があれほど大衆の高まり行く關心の焦點となつてゐたにも拘らず、同黨が——諸他無産黨に於ても同樣に——まだ十分に[illegible]工場・農村に[illegible]

で新黨準備會は、爾來この事實から學び取つた貴重なる教訓を、向後の闘爭に於ける運動および組織の方針の中に導き入れることを怠らなかつた。今その點について二三の例を擧げれば、準備會はストライキや農村爭議に益々積極的に參加するやうになり、また階級戰線統一問題に關しては、同時に凄まじき勢を以て動きだしてゐた農民組合および勞働組合戰線統一運動の潮に緊密に協調し、殊に組織方針の方面に於ては、工場對策委員會の設置とか、また全國代表者會議の決議の上にも見られた通りの、支部、支部聯合會、および班の確立とか等々に關聯して、益々工場・農村に深く根を張り擴げる大衆的組織として成長することに一層努力するやうになつたことの如きがそれである。

それ以來新黨準備會が結黨準備の過程として全國的に地方的に展開した樣々の闘爭――たとへば五月の對第五十五議會闘爭・治安維持法反對・對支出兵反對闘爭、六月の東京神奈川の府縣議戰、行政裁判に對する闘爭、七月の工場安全週間に對する闘爭、立入禁止反對闘爭、更らに最近に及んでは富山縣から端を發して諸他諸方に擴がつて行つた電燈爭議への積極的參加、その他各地の工場・農村における勞働者農民の闘爭への敢然たる應援および參加、自治體に於ける活潑なる政治闘爭、等々――に關しての詳細なる敍述は、茲では省略されなければならぬ。だが、讀者諸君は既に今までに言はれて來たことによつて、新黨準備會が當初から、企圖されたる新黨の合法性をあくまで不撓不屈の闘爭によつて獲得することを、その不斷の努力の目標として來たものであることを、充分に領得されたであらう。我々にとつては、結黨準備の過程は、同時に闘爭の過程である。我々は最近の全國代表者會議開催の直前から『闘爭を通じて結黨へ』のスローガンを使ひ慣はして來たが、その根本精神は既に新黨準備會成立の時から儼として確定されてゐたのだ。

七　左翼社會民主主義者の陋態

、、、、、による舊勞農黨等々の解散の場合に於ても見られた通り、資本家・地主のブロックは、時に今日の、、、、に於て、、、に見える威力を發揮してゐる政治機關を通して、無產階級運動の上にはんの僅かばかりしか許されてゐない合法性の範圍をさへも、またこの上に層一層急速に狹ばめつつあるのだ。かかる情勢の下に於て、日勞黨や無產大衆黨の左翼社會民主主義的幹部諸君の如く、闘爭による合法性獲得・擴大の能働的努力をサボり、立黨と政黨的活動との合法性を單純に官憲默認の下に於てのみ辛くも保存しようとするやうな出方をしてゐた日には、殊に勞働者農民無產市民その他被壓迫民衆の日常利益と政治的自由とのために有力に闘爭を展開することが出來ないことは無論である。現にそれらの左翼社會民主主義的幹部諸君が、口でこそ左翼的言辭を連發してはゐるものの、例の嘗々藏々たる新黨準備會攻擊以外の實際闘爭には驚くべき無力怠慢狀態を示してゐるのはその活きた證據ではないか？　しかも若し彼等の指導下の兩黨が尙は幾

分かの活働をなし得る餘地が心細くも殘されてゐるとするならば、それは彼等の左端にあつて果敢に闘爭する新黨準備會が楯になつてゐるからではないか？

だが、さうした受働的合法性に後生大事に噛ぢりついてゐる彼等は口を揃へて『新黨準備會は合法的政黨でない』と侮蔑的態度を以ていきり立ち、更らにそれを口實として準備會を勞農政黨合同の流れの外へ押し遣らうとさへする。いかにも、準備會は形式上こそまだ合法的政黨になつてゐないが、しかしさうした形式上の問題を、、することが果して、、、、、、といへるであらうか？　無產階級的立場からは、寧ろ準備會が階級的闘爭組織としての實質を持つてゐるか否かが問題とされるべきではないか？　だが、敢然と支配階級に抗爭しつゝ「闘爭によつて結黨へ』の原則を强力に實踐に移しつゝ諸君の眼前に不斷の活働を續けて來た準備會が階級的闘爭組織であるかないなどは問題にもならないことではないか？　準備會は、單に合法的政黨だといふ一點を何よりの誇りとしてゐるかに見える兩黨とは、比較にもならぬほど果敢に日常闘爭を展開して來たではないか！　假りに飽くまで合法性の問題に拘はることが絕對的に必要だとしても、準備會はそれ自身として合法的存在ではないか？　しかるに左翼社會民主主義的幹部諸君は、『合法的政黨』のうちの『政黨』といふ言葉の上にだけ强ひて重點をおいて、準備會拔きの勞農政黨合同だけを日程に上ほせ、そしてそのテレ隱しに『極左分裂主義』の罵聲を安價に濫發してゐるのだ。だが、彼等のかかるブルジョア俗流法學者的形式主義の詭辯まさに彼等自身の內心の分裂主義をアケスケに暴露してゐるものでくして何であらう！

左翼社會民主主義的幹部諸君の或る者は、その詭辯を更らに溯つて舊勞農黨の上にまで及ぼして、同黨が解散の運命を見たのは偏へにその誤まれる極左的戰術のためだといふ。彼等はまづ第一に、無產階級運動の一回の蹉躓はその永久の破滅だと誤認して、勞農黨の解散は同黨を構成もしくは支持してゐた大衆の闘爭の終末でゞもあつたかのやうに考へてゐるらしく見える。しかし、新黨準備會の活働は完全に彼等のこの謬見を訂正し克服してゐる。だが、彼等の無產階級に對する、より大なる罪惡は、舊勞農黨を解散した、、、、、、を同黨そのものの上に轉嫁しようとした點にある。それは無產階級によつて徹底的に糺彈されなければならない根本的性質の階級的犯罪である。

彼等はそれを單に口舌の上で演じただけでなく、行動の上にまで移した。今その一例を示せば第五十五議會の當時舊勞農黨の解散に對する大衆の、、の潮の澎湃と高まつてゐた際に、無產黨共同統制委員會に於て、日勞黨の代表者は社會民衆黨の代表者と共に、舊勞農黨への、、、、に關して、議會に於ても街頭に於ても、新黨準備會と協力して共同抗議の聲を擧げることを約した。だが、その結果はどうであつたか？　議會に於ても街頭に於ても、抗議の聲は彼等の口から微かにも漏れ出なかつた。たゞしその代りに、間もなく新黨準備會攻擊の聲

が彼等によつて餘りにも自由に發せられだしたが。

無産大衆黨の成立前後に於ける同黨の指導者たちの態度も、矢張り同じ根據から無産階級的法廷に於て問罪されるべき價値がある。當時新黨準備會は、、、、の打撃から漸くのことで起き上がつて、結黨準備と階級戰線統一とのために全力的に惡戰苦鬪してゐた。ところへ突如として無産大衆黨が『單に勞農黨再現を企圖するものに非ず、より廣汎な範圍に亘る大衆の支持の下に鬪爭を押進めて』云々と宣言しながら、結局『勞農黨再現』を表面に匂はして結黨し、鄭重にも舊勞農黨員たちに宛てたアッピールを出してブル政黨式雛切りの戰術——罐詰めにされてゐるものが誰れも居ないところへ！——に出掛けた。同黨幹部諸君が新黨準備會をウルトラ扱ひにしたのは彼等の勝手だが、しかし新黨準備會が何よりも結束を要求してゐた時にそれへの攪亂策を試み、統一を要求してゐた時に現實に分裂の罠を掛けたのは、その手段の醜きコセツキ方を別としても、階級的裏切り行動の非難は當然それに下されるべきである。しかもこの點は、無産大衆黨の幹部諸君が『一方に於ては斷乎として左翼分裂主義者と戰ひ、他方に於ては、今や高まらんとする右翼分裂主義と鬪爭し』（傍點筆者）と宣言したにも拘らず、右翼に對しては單なる形式的排撃聲明を試みた外には別に何等の手出しをもしないでゐて、ひとり左翼の方にのみ向き直り、準備會をウルトラ色に塗り替へて、その陣營攪亂策に憂身を窶してゐるといふが如き事實と關聯して考へるとき、我々は一層明白にその眞意義を讀みとることが出來るのだ。

もとより、無産大衆黨幹部諸君による新黨準備會への極左呼ばはりや陣營攪亂策が何等實質上の効果を齎さなかつたことは事實である。そして、この當然の事實は、全國代表者會議の勝利的成功によつて徹底的に實證されもした。だが、準備會に對する、、、的口吻にさへ似通つた彼等の奸佞な——私はかかる形容詞を私の確信を表明するために用ひなければならないことを衷心から遺憾とする——裏ら切り的言動は、その結果からだけではなく、その動機からもまた同樣に、階級的に批判され糺彈されなければならないものだ。

私はまた同樣の根據から、左翼社會民主主義者たちの間に於て、現在戰鬪的勞農大衆が言ふに言はれぬ愛着と感激とを以て使ふやうになつて來てゐる若干の通用語を、意地わるき優越的態度を以て皮肉的意味に用ひる傾向のあるのを見て、一種の堪へがたき憤激を感じる。我々は屢々、たとへば『輝ける指導精神』とか『血みどろの鬪爭』とか等々の言葉が、反動團體によつてでなく、無産階級の陣營内に居る言論家たちによつて、現代ドンキホーテのスローガンとしてかのやうに嘲笑的に引用されてゐるのを見る。我々が彼等のさうした態度を批難しようとするのは、決して言葉そのものに一種の魔力を認めてそれへの冒涜を咎め立てするといふやうな、さうしたフェティシズム的見地から來てゐるのではない。否、我々は寧ろ、彼等がさうした態度を取るに至つた動機のうちに、言ひやうのない卑怯さを認める故に、ま

た彼等のさうした態度が戰鬪的勞農大衆に與へる一種不快な影響を顧慮するほどの階級的良心をさへ持ち合はせてゐないのを苦々しく思ふが故に、茲で特にそれを取り立てて言ふのだ。

それから今一つ、上述のものとは些か筋路を異にしてゐて、しかも階級的犯罪たる點に於ては寧ろそれ以上に重大性のある彼等常用の一種の論法が、それに附帶して注意されねばならぬ。即ち彼等は同様に屢々、左翼的文書──論文、聲明、指令、等々の如き──を漁りつくして、その中から或る言葉の端々を前後の行文から引き離して引ッ張り出して來るとか、或はまた、左翼の或る戰鬪的スローガンをそれが働き掛けた具體的客觀情勢との聯關を拔きにして取り上げるとか──等々──して、それらの上に樣々の歪曲的解釋を加へ、それの極左的である所以を得意げに喋々する。それは彼等が意識的にするにもせよ無意識的にするにもせよ、明かにスパイ的役割りに相當するものである。それは恰も、支配階級に向つて、『卿等が、求めるものがここにある』と敎唆するやうなものである。それは彼等の側の機關紙機關雜誌などが左翼に對するデマゴーギッシユな捏造記事を掲げるやうなことと同程度に卑怯險險な行き方で、しかもその結果に於てはそれ以上に階級的裏切りを意味するものである。我々は須く無產階級的見地から、左翼社會民主主義者のかかる言動を峻烈に裁斷しなければならぬ。

八　所謂『極左戰術の誤謬』

更らにまた、さきには舊勞農黨を、そして今では新黨準備會を眼の敵にして來た彼等左翼社會民主主義者の一群は、特に極左的戰術の誤謬なるものを強調する習はしを示して來た。もとよりそれは單に言葉の上だけのことであつて、實は彼等は『極左戰術の誤謬』を排撃するよりは、寧ろ彼等が勝手に『宗派的分裂主義者』と銘打つて異端者扱ひにしてゐる戰鬪的分子を內心忌避してゐることから來たものだ。ということは、たとへば彼等が、彼等の所謂『宗派的分裂主義者』が、いふことは、たとへば彼等が、彼等の所謂『宗派的分裂主義者』が、從來の一切の行き掛りを棄てて合同の協議に入らうと提議した際にも、樣々の『顧みて他をいふ』式の口實を構へて拒絕の一點張りで應酬して來たことによつても知られる。しかも最後に彼等が大衆の要求の壓力の前に遁辭に窮するに至つたとき、竟に彼等は新黨準備會に向つて『合法黨となつてから出直ほして來い』とほざくやうな非階級的返答を投げつけるまでになり下がつた。さうしたところに、彼等の眞意が明白に讀みとれる。

けれども、舊勞農黨にしても、新黨準備會にしても、その果敢にして堅忍不拔なる日常鬪爭の故に勞農大衆から最も熱烈なる支持を受けて來たといふことは、彼等獨特の宛轉滑脫なる詭辯を以てしても、竟にそれを實證的に否定することは出來ないのだ。そこで彼等は右翼社會民主主義者のやうに大衆率直に新勞農黨もしくは新黨準備會そのものを否定するよりは、寧ろ[illegible]もしくは新黨準備會に附隨して[illegible]

を集中するのだ。

『極左戰術』――彼等はさうだといひ、我々はさうでないといふ。言ふものをして言はしめよ！　我々は、さうした果てしのない言葉の爭ひに立ち入らないであらう。だが、我々はただ一言、明白にいふ――『舊勞農黨も新黨準備會も、彼等の指摘するまでもなく、幾多の戰術上の誤謬を犯して來たことは事實だ』と。

だが、我々は同時に附け加へる、――『舊勞農黨および新黨準備會によつて犯されて來た誤謬は、あくまでその現實の鬪爭に附隨して犯されて來たものだ』と。

いふ心は、舊勞農黨にしても、新黨準備會にしても、幾多の戰術上の誤謬を犯してこそ來たが、しかし決して鬪爭をしなかつたといふ誤謬とか、もしくは當然なすべき鬪爭を回避したといふ誤謬とか――それは階級的に言つて根本的の誤謬――を犯しては來なかつた。といふのだ。

舊勞農黨員であり新黨準備會員であることに誇りと責任とを感じてゐる我々は、いふまでもなく、超人的認識能力を持つてゐるものではない。我々は他のすべての行動に於て常に思はぬ過誤に陥る通りに、我々の過去の鬪爭に於ても幾度となく豫想だもしなかつた戰術上の誤謬を犯して來た。だが、それらは必然に、我々が鬪爭して來たからこそ犯して來た誤謬であつた。若し我々が毫も鬪爭しなかつたとしたら我々は如何なる戰術上の誤謬をも犯さなかつたであらう。のみならず若し我々が自ら鬪爭をサボり、他黨が階級的に生死の鬪爭をしてゐるのを拱手傍觀してゐて、しかもその他黨が一敗地に塗みれるのを見てさへ尚ほ泰然自若として動かないほどの消極的怠慢態度を取り得る度胸(？)を持ち合はせてゐたならば、我々は世間に向つて、その他黨を指して、『あれこそは極左的戰術の故に敗北したのだ』と高らかに言ひ放つことが出來たであらう。幸か不幸か、愚直な我々には、それだけの度胸がなかつた。

我々は無論我々自身を極左として意識してゐないが故に、若し何人かがあつて偶ま我々の眼に極左的に映ずる言動を取るやうなことがあるならば、我々は彼等に向つて嚴重に戒愼を促すのを常としてゐる。だが、我々は決して、彼等に極左の名を冠ぶせて世間に押し出すことによつて彼等を不測の危地に陥れるやうなことをするとは出來ない。この點に於て――然り、ただこの一點に於てのみ――左翼社會民主主義者たちの大膽不敵さは、あまりにも我々の驚嘆に値する。

更らにまた、我々は舊勞農黨なり新黨準備會なりの陣營に於て、幾多の戰術上の誤謬を犯して來たが、同時に我々は我々の自己批判により、次々の實踐の上に於て、それらを訂正し清算し克服することに努力して來た。それもまた、我々には不可避なことであつた。さうしなければ、我々の鬪爭の進展が止まつたであらうからだ。この間の機微は、現實に鬪爭するものには、疾くに「本能的に」感得されてゐる筈のことだ。

のみならず、我々が我々の戰術上の誤謬を公表することに階級的意義を認めたときには、我々は躊躇なくそれを斷行することを憚らなかつた。たとへば舊勞農黨は、同黨がかつて戰線統一問題に關して取つたところの『他黨の幹部を暴露してその大衆を戰ひ取る』方針がたとへ根本精神に於て正しかつたにもせよ、技術的には甚だ機械的でぎこちなかつたことを發見したとき、直ちにその趣旨を公言することを躊躇しなかつた。また他の一例を擧ぐれば、新黨準備會は、、、の高潮期に於ける惡戰苦鬪中に當り、『無產者新聞』の提唱に應じて勞農協議會を計畫し、それによつて勞働者農民の戰鬪的組織の擴大と、、、、、、、、、、、、、、五月三日にはその組織に關する指令をさへ發表したが、間もなく實踐に於てそれを淸算したばかりでなく、それが『明かに政治的誤謬を含んでゐたことは否まれなかつた』ことを、全國代表者會議に提出した本部活働報告に於て政治部から公表した。

また我々が自身にとつて必要であり不可避であるところの、戰術上の誤謬の淸算をするに當つて、自己批判を最後の據りどころとするのは、決して傍觀者の批評を一から十まで拒否するといふ意味ではない。善意の傍觀者の批評は、常に我々を啓發するとは限らないまでも、屢〻我々をして傾聽せしめる。だが、我々の生死の戰ひを遠方から皮肉な眼で眺めて、その上支配階級の耳目の前に我々を指して高慢に極左呼ばはりすることによつて、支配階級の彈壓政策に肯定の理由を與へる役割りを平氣で演ずるやうな傍觀者、——さうした種類の傍觀者が我々に投げつける批評の如きは、徹頭徹尾論外である。

九　社會民主主義者に對する我々の態度

舊勞働農民黨は幾多の戰術上の誤謬を犯しては實踐に於てそれを淸算しつつ間斷なく鬪爭を展開してゐたが、その鬪爭は結局階級的に見て失敗であつたらうか？　そして同黨の解散は、さうした失敗の連續の最終端にやつて來た總破滅であつたらうか？　斷じて否！　左翼——この點では右翼も引ッ括めて——社會民主主義者の　この問ひに對する答へはどうか知らないが、我々から見れば、舊勞農黨が勞働者農民無產市民の生活と自由との要求を提げて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、とに向つて敢然として行つた鬪爭——そして最後に潑剌颯爽たる政治的自由獲得鬪爭にまで高潮したその鬪爭——は、わが國の無產階級の鬪爭經驗を深化し、純化し、強化することによつて、その階級的自信と自賴の意氣込みとを固め、更らにその日常鬪爭の目標、組織、形態、運動方針、等々、幾多の戰術上の基準を確立し、かくて昨日の幾多の不可能を今日の可能にさへ轉化せしめた。舊勞農黨は、その急速なる成長の途上に於て、、、、、、、、、、、、、、、力の當然の關係から、儼然として瓦解した。だが、その廢墟の中から、舊勞農黨がその短き生存の間に蓄積した不滅の革命的力の結晶として、卽ち、新黨準備會が不死鳥の如く再生し、勞働者農民の鬪爭的傳統を繼承し發展せしめつつ

着々、戰鬪的勞農大衆の强固なる階級的結束を進めつゝある。これはまさしく、日本の無產階級の力强き內的成長の基礎の上に可能となつたものだが、かかる形勢をかくも急速に且つ確實に追出したことこそ舊勞農黨の最も實質的な史的貢献であらねばならぬ。

否、それだけではない。今日新黨準備會に對して頻りに惡罵を放つてゐる社會民主主義者たちと雖も、さすがに大衆環視の下に於て、よし形式的にもせよ、舊勞農黨の鬪爭態度および方法から、否、鬪爭的スローガンや或る特殊的用語などの端々からさへも、多かれ少かれ何物かを模倣しないでゐられなくなつて來た。ただ彼等は明かに當然なすべき鬪爭を回避しようとするが故に、舊勞農黨をその本然の價値によつて評價することを拒むのみならず、執拗にも『極左戰術の誤謬』を强調することによつて同黨を誣ひ、そしてその論理上の歸結として遂に同黨解散の責任を支配階級の手から解舒して同黨の肩上に轉嫁するまでに成り下つて、そのまゝだら〳〵と泥沼に頽落したのだ。

それ故に、社會民主主義者──特に左翼──の實際の裏切り行動の暴露は、全國代表者會議の議場に於ける各地方狀勢報告の特徵の一つとなつた。また會議で滿場一致で可決された『無產階級政治戰線統一の方針』の議案の中には、『統一を口に唱へつつ實際に於て統一を裏切る左翼社會民主主義者、或は支配階級との妥協を、より有力に行はんがため右翼結成を標榜する右翼社會民主主義に對しては、非階級的行動を暴露する』の言葉が霹靂の如く響いた。だが該決議に於て新黨準備會は、現在に於ける各黨大衆の合同欲求の大勢に對するその認識から、それを勞農政黨合同の條件とするといふやうな不可能事を强ひる結果になることをせずに、ただそれを合同に對する我々の態度の基準とするに止める立場を取つた。更らに同じ決議に於て新黨準備會は、それ自身が結成しようとしてゐる大衆的行動黨としての本質上、さうした暴露の方針に關しては、『それは原則的理論から彼等の主義主張を批判することでは斷じてない』と明示的に規定して、ただ彼等の非階級的實際行動を暴露し批判するに止める立場を取つた。

最後に、今一つ言ひ添へておくべきことがある。新黨準備會がその對支配階級鬪爭の過程に於て、同時に社會民主主義者──特にその左翼──に對して痛烈なる暴露の鋒先を向けてゐるのを見て、人は屢々、それは親近の間柄ほど仲が惡いものだからと言つたやうな、勝手な俗流解釋を加へる。だが、それは無論、左翼社會民主主義者の本質と、その左翼へのデマゴーギーの惡辣性とに對する無省察から來るものだ。右翼社會民主主義者の公然の對支配階級迎合の態度とは異つて、一層狡猾なる左翼社會民主主義者の一群は、表面上戰鬪的勞農大衆の耳にも誘惑的に響く左翼的言辭を縱横に驅使して、しかも實質上無產階級陣營の攪亂の効果を企圖する。かかる言動は、そのからくりが前者よりも遙かに複雜微妙であり、またその實害の程度も決して前者に讓るものではないのだ。

更らにまた、新黨準備會と左翼社會民主主義者との間のかかる經緯

を『眼にて眼を償ひ、歯にて歯を償ふ』の公式を以て律しようとするものもある。だが、それもまた、ブルジョア俗流法學者の蹤に追隨する安價な形式主義的解釋でなければ、例の御用學者連が得意に引き出す小ブルジョアジー向きの超階級的(!)至公至平の見地(!)から出た世迷ひ言であらねばならぬ。確乎たる階級的立場に立つものに取つては、相反する二つの主張について、『どちらにも理由がある』といふやうな判決はあり得ない。『一か若しくは他か』が、その裁斷の態度の基準となる。で、今の場合、新黨準備會による左翼社會民主主義者の行動の暴露は、決して彼等の攻撃に對する快心の應酬といふが如き贅澤沙汰ではなく、勞農階級の陣營の純化とその運動の沈滯一掃とのための必須的行動であり、從つて一の階級的必要である。のみならず、左翼社會民主主義者の一群の準備會に對する極左呼ばはりの逆宣傳と、準備會の彼等の裏切り行動に對する暴露とは、その結果から見ても全く反對の方向を指す。即ち前者は、左翼社會民主主義者たちが、支配階級の攻撃の前に立つことを回避しようがために、且つ彼等のさらした怯懦を無産大衆の前に隱蔽しようがために、支配階級が常に準備會の上に集中する彈壓政策を理由づける根據を作ることになる。それに反して後者は、準備會が『世上』の偏見的誤解を冒して堂々と階級的必要の命ずるところを敢行する態度を反映するものであつて、しかもその結果は寧ろ左翼社會民主主義者たちの上に支配階級の好意を招來し彼等を官憲庇護の下に立たしめることになる。だが我々は無論、彼等が一刻も早く彼等の裏切り的態度を一擲して準備會と緊密に把握して、資本家・地主の陣營に向つての行進を共にすることを衷心から待ち望むものだ。

一〇　結黨準備運動の成熟

『鬪爭を通じて結黨』への精神を以て終始一貫して運動を進めて來た新黨準備會にとつては、當然にも、その結黨準備の過程は、同時に鬪爭の過程であつた。かくて準備會は非常に不利な諸條件の下には、漸次に公然の鬪爭組織としての實質を戰ひ取り、更らに引續いて萬難を排して火の出るやうな猛活動を續けて來て、遂に新秋九月に入つて、愈ゝ結黨を具體化する段取りにさしかゝることになつた。

かくの如く、準備會が公然の鬪爭組織としての地位から、更らに進んで合法的政黨としての銘を打つて乘り出さうとするための具體的計畫を取り上げるやうになつたのは、大體次のやうな諸條件が熟して來たことが認められたからであつた。

（イ）準備會の全國的並に地方的組織が漸次確立に進み、略々大衆的共同戰線黨としての組織の實を具へ、大衆的に結黨運動を進め得る實力が充分に備はつて來たこと。また結黨によつて新黨員並に未組織の大衆をより容易に、より遙かに政治的に結成し、それによつて政黨の不活動の結果として動もすれば政黨的無關心に陷らうとする一般大衆の政黨的關心を高め、且つ勞農政黨の合同運動を一層容易に促進させ得ること。

（七）支配階級の戰鬪的勞働者農民の、、、、に步調を合はせた無產大衆黨や、日勞黨や、その他の右翼團體にある日和見主義的一幹部部の準備會に對する逆宣傳や、準備會拔きの合同等々の如き非階級的な陰謀を結黨實現によつて堂々と打ち破るべき事情が迫つて來てゐたこと。

（八）全國の黨員並に戰鬪的な勞働者農民大衆の果敢な鬪爭により、準備會の大衆政黨としての組織が着々築き上げられ、準備會が公然として政治的に活働してゐる以上、準備會を公黨として官許するか否かは、支配階級にとつて、ほんの形式的な問題となつてしまつて來てゐること。また、準備會としては、よし結黨後萬一解散されるやうなことがあらうとも、戰鬪組織としての準備會の實質が消滅せしめられ得るものでないばかりでなく、寧ろそれによつて、より斷乎たる勇氣と、より斷乎たる結束とを以て再擧を圖ることが出來るであらうこと。——

そこで新黨準備會は、その立黨態度を廣く大衆の前に表明して、全勞働者農民無產市民に向つて、その結黨運動への參加を訴へ、更らに大衆的共同戰線黨としての、よりふさはしい組織形態を備へるために中央機關並に支部組織の確立を圖つた。

同時に幹事會は、結黨方針の大衆的討議を進めると共に、創立大會の時日を略ゝ十二月初旬に定め（現在に於ては準備の都合上大體十二月下旬に延期されることになつてゐる）、そしてその結黨準備を完了するために十月下旬に全國代表者會議を開くことに決定した。（それは既述の通り、十月二十四・五の兩日に擧行された。）それから間もなく、全國代表者會議に上程されるべき新黨の綱領政策草案が決定發表（九月二十二日）されて、まづ大衆の討議に附託されることになつた。次いで結黨方針を全國的に徹底させ、また地方組織の確立を促進するために、全國遊說計畫が立てられ、時日の切迫のため完全な程度には遂行されなかつたが、それにしても可能な範圍內に於て相當の效果を擧げた。それと同時に、秋の農民鬪爭に對する對策が講ぜられ、全國に亘る小作料減免、立毛差押反對等の運動に於て全國農民組合と協力し、それを通じて全國農民團體の戰線統一と勞農政黨合同運動とを相關聯せしめつつ押し進め、更らに强力な青年運動を農村に發展させる方針が立てられ、直ちに實踐に移された。

かうした諸點を細敍することは、今はその場合ではないから省略するが、ただそれらが如何に『鬪爭を通して結黨へ』の根本精神の具體的表現であつたかは、一言注意しておかれなければならぬ。

次に我々は、全國代表者會議に到るまでの勞農政治戰線統一運動の進展の大勢およびそれに對する新黨準備會の態度方針に關してもまた時に一言附け加へておかねばならぬ。舊勞農黨は昨年末に近き頃から府縣議戰後に於ける支配階級の攻勢の急激なる增進を前にして全國勞農大衆の間に戰線統一への欲求が猛然として燃え上がり始めた情勢を看取し、諸無產黨に向つて、從來の相互間の行き掛りを果斷に一掃して、即時無條件に合同問題の協議に入るべきことを提議した。諸他無產黨も、大衆間の熾烈なる要望の壓力に押されて、否でも應でもその

問題を取り上げざるを得ざるに至つた。それ以來合同問題は、日勞黨の所謂單一絕對條件の提出や社民黨や日農黨の終始一貫した左翼排擊の態度のために、その實現に於てこそ樣々に行き惱んだが、しかもその機運は勞農大衆の間に益々廣汎に波及しつつ成熟して行つた。

舊勞農黨の解散後に直ちにその組織と戰鬪的傳統とを繼承して產れた新黨準備會は、この問題についても全然舊黨の確定方針を繼承したのみならず、更らに當面の客觀的狀勢に應じて、それを結黨準備の鬪爭に聯結せしめつゝ、益々その方面に積極的に進出した。けだし準備會成立當時に於ては一方に於て、、、、、、、、、、が全線に亘つて一段と、、、、しだしたのみならず、更らに無產階級の、、、、、、の新方向にも步みを進めはじめ、他方に於て勞農大衆の合同欲求もまたそれに對抗して刻一刻と廣さと深さ强さとを加へるに至つた。かうなると、我々にとつては舊勞農黨の再建といふことは、たゞその單なる再建を意味するのみでは益々不充分と見られるやうになつた。それは飽くまで無產階級鬪爭の强化のために無產階級の勢力を結束しようとする主要目的の下に進められるべきものであつたから、從つてそれは、必然的に、勞農政治戰線統一の大勢に――また延いては勞農組合戰線統一の大勢にも――合流せざるを得なかつた。かくて、新黨準備會にあつては、結黨準備のための鬪爭は同時に戰線統一のための鬪爭となり、兩者が緊密なる聯關に於て結びつけられて來た。

かういふ風に、新黨準備會には當初から、結黨準備過程に於て『鬪爭のための合同』の實現に努力して來た。準備會にあつては、結黨はもとより合同の拍車となるべきものであることを期してゐたから、一路その方向に邁進したが、他方に於てまた、合同の急速なる實現は固より望ましきことに相違なかつたから、たとへ結黨以前でも、それの可能なる機會が見出されさへすれば、躊躇なくそれに乘ずることを誤まらないだけでなく、更らに積極的にさうした機會を釀成することをも心掛けた。そこで準備會は、疾くより合同の可能性の最も多く見えた日勞黨に對して一再ならず合同を提議した。だが、日勞黨幹部は、例の『結黨してから出直ほして來い』一點張りの口實でそれを拒否した（後に結黨した無產大衆黨も、その點に於て日勞黨の口眞似をした。）かかる口實が如何に非階級的のものであるかは、私が既にその一端を指摘したことであり、でなくとも階級的良心のあるものには誰れにでも判り切つたことだが、それとは別に、そのことの當然の結果として新黨準備會は遂に所期の結黨を通じて合同へと猛進することとなつた。

全國代表者會議の直前に於て各無產黨の態度の上に反映された通りの戰線統一運動の大勢に關する新黨準備會の認識は、次の通りであつた。

（イ）社民黨中央部は大衆黨結成を標榜して、他黨との合同には常に拒否的態度を執つて來たが、ただ日農黨に對してだけ、常に手を差し延べてゐる。

（ロ）日勞黨には、その内部に社民黨との合同論と大衆黨との合

同說との二つの流れが見られる。だが、その中心勢力は現狀維持說を持し、合同問題研究委員會を設けて、僅かにその分裂主義を糊塗してゐる。

（ハ）日勞黨にあつては、その中央部があくまで新黨準備會に對して、所謂單一絕對條件の種々なる變形を振り翳して合同提議を拒否することと依然たるものがある。更らに最近同黨內に於て、無產大衆黨との合同說と社民黨との合同說との二つの流れが現はれたが、結局現狀維持說が優勢を占め、その結果同黨幹部は左右兩翼全部の合同――展望し得られる未來には容易に出來さうにもない――の機運の成熟を待つこととし、それを口實にして、無產政黨統一委員會の設置によつて、僅かに大衆の熾烈なる合同欲求に蓋をしてゐる。

（ニ）無產大衆黨は合同を一枚看板にしてゐるが、同黨が實現を期してゐる合同は、新黨準備會の完全なる排除を基調とする日勞黨との合同である。卽ち同黨の合同方針は、日勞黨の一派のそれと調子の合つたものである。

（ハ、他黨中央部の合同に對する態度は大體以上の如くであるが、特に日勞・無產大衆兩黨幹部の合同方針は、それらの黨の最近の決定に現はれた如く、何等の確乎たる決定をも示さず、完全にその無力と大衆の合同欲求に對する裏切りとを暴露してゐる。他方、各黨大衆間に於ける準備會との合同欲求は益々增進しつつある。これは苦難なる鬪爭經驗と共同鬪爭とによつて迫出された形勢である。卽ちたとへば青森、東京、島根、鳥取等の遠近の諸府縣に於て、到るところ大衆は準備會と諸他無產黨との卽時合同の實現を熱望して居り、また關西、宮城、その他の諸地方に於ては、社民黨の大衆が中央部に向つて全階級戰線の統一を要求してゐる。

新黨準備會は、戰線統一運動の現狀に關して如上の認識の上に立ち、全國代表者會議を前に控へて、それへの對策を巨細に規定した。今その概要を摘記すれば、まづ第一に準備會は、もとより全階級戰線統一を究極目標とはしてゐるものの、一足飛びにそれに到達しようとして却つてその時期を無限の彼方に押し遣る結果を導き出すが如き不誠實なこと――日勞黨が行つてゐるやうな――をせずに、まづ當面可能性の最も多き日勞黨との合同の實現のために努力し、且つ無力な無產大衆黨をも締めての他の諸黨の全階級戰線統一への參加のために盡瘁すべしといふ趣旨の既定方針を新たに裏書した。第二に準備會は舊勞農黨以來合同運動に於ける最大の梢杆としてその發展に努力して來た他の諸黨の大衆との共同鬪爭を一段と旺盛に進行せしめることに決め、そのために當面の客觀的情勢に卽して樣々の具體的方策を立てた。第三に、準備會は合同を單なる合同の爲の合同に終らせる危險を防止するために、或ひはまた合同を支配階級との協調の爲のそれに變質せしめるといふやうな一層重大な危險を防止するために、合同に關聯して社會民主主義批判の自由を保留した。だが、準備會はそれをして些かでも可能な合同を不可能にするやうなことにならしめないために、それを合同の條件とはしないで、ただ合同への態度の基準とするに止めた。また準備會は、企てられた新黨の大衆共同戰線黨としての本質に對する考慮から、それを左翼および右翼社會民主主義者の非階級的行動の暴露の範圍に止め、「それは原則的理論から彼等の主[illegible]

することでは斷してない』と規定したとは、既述の通りである。(この戰線統一方針も、全國代表者會議に於て、滿場一致で可決された。)

上來敍述したやうな經過を辿りつゝ、結黨具體化計畫は、大衆討議の下に着々進行して、愈々その最後の仕上げを見るためには、たゞ全國代表者會議を待つばかりとなつたのである。

二　一路結黨へ

私は最早、結末に急がねばならぬ。

全國代表者會議が如何に多大の收穫を我々に齎らしたかについては私は既に本篇の劈頭に於て充分に語つた。しかもかかる、、、、は、、、、、、、、益々その闘志と政治的技術とを鍛へ上げた中央および地方の全準備會員の堅忍不拔の努力に負ふものであることは無論だが、同時に我々はまた、その最深の原因が遠く舊勞農時代の果敢執拗なる闘爭にまで溯つて求められねばならぬことを明かに認めねばならぬ。さうだ！ それは根本に於ては、實に舊勞農黨以來不斷に連續せしめられて來た日常闘爭の、その時その時にはその全幅の意義が我々に充分讀みとれなかつたところの成果の累積を、今やその如實の姿に於て我々の眼前に反映したものに外ならないのだ。このことは、該會議で審議採決された綱領政策を始めとして、幾多の議案を再閲し、更らにそれに關する優秀なる討論の發展と進行とを仔細に跡づけるとき、我々に一點疑ひを容れる餘地のないことである。

更らに該會議は、左翼戰線が今日では、最早如何なる、、、、、とを以てしても、、、、、、、、、、、を築きあげたことを教へたことによつて、我々に異常の激勵を與へ、鞏固なる確信を深からしめた。またそれは特に新黨準備會が既に戰闘的勞農大衆の勢力の結束の上に立つ押しも押されもせぬ闘爭組織としての實質を、、、、したものであることをも證明した。今や形式上の結黨も一躍して到達し得られる距離の間に迫つた。それが戰線統一の推進となるべき豫想も我々には確實に立て得られるに至つた。我々はもとより將來に於てますます、、してゆくべき闘爭に備へねばならぬことは百も承知してゐる。從つて我々はこの際にも『百度解散・百度蹶起』の覺悟を少しでも崩ずしてはならないことをも心得てゐるが、しかも同時に我々は、今や結黨に向つて一路邁進して行くことこそ、當面喫緊の急務であることを確信してゐるのだ。

二日間に亘り極度の緊張を以て始終した全國代表者會議がまさに感激の最高潮に於て散會しようとした際に、私に閉會の辭を述ぶる機會が與へられた。私はそれに於て、その瞬間に於ける私の感想をありのままに述べ、それを、希望に輝き闘志に燃えて郷里に歸へつて行く同志たちへの別辭とした。今や私は、それはまた本篇を結ぶ言葉としても相應はしいものだと考へるが故に、茲にその速記が會議直後の『勞働農民新聞』に發表せられたのを、そのまま次に採錄する自由を許されたいと思ふ。

階級の喜

この二日に亘る全國代表者會議が全國からの代表者によつて豫期以上の收穫を得た事はお互に喜びに耐えません。殊に此の會議を期待し吾々の行動のひとつひとつを注目してゐる全國の勞働者農民が此の會議の成功の報告を得た喜びを想像した時に、吾々は感激にたへたいのであります……（拍手）

この會議の成功は代表者諸君並に傍聽者諸君が『大膽に、細心に、嚴肅に』といふスローガンの下に大會を護つたからであり、亦全國の同志諸君の力強き鬪爭の中に護られてゐたからであります……（拍手）

今回の會議に於ける如く、各地の代表の報告が我々の胸にかくの如くにヒシヒシと迫つたことは、曾てなかつたことであります…（拍手）

三月四月と引續くあのアラシの中で同志を奪はれ、連絡を斷たれ、暗い氣持に襲はれた事もあつたが、吾々は、、の中に大衆としつかり手を握つて惡戰苦鬪した。其の結果が今日の、、、、、、、、、たのであります……（拍手）

四月から今日に至る約半年の苦鬪と迫害との歷史は又、同時にわれわれの、、、、、であつたのであります……（拍手）

鬪爭によつて、絕望から希望を鬪ひ取り、、、、、、、を鬪ひ取つたのであります……（拍手やまず）

又あの報告を聞いて感動した事は、全國に亘つて社會民主主義者の正體が完膚なきまでに暴露された事であります……（拍手）

彼等は鬪爭を回避することによつて大きくならうとしたが、その空想は地にまみれた……（拍手）

彼等はこの會議の成功を見て愧死するであらうが、これは大衆を裏切つた當然のむくひであります……（拍手）

吾々の努力は大衆の利益擁護に終始一貫し、ここに大衆によつて洲ひられた。吾々のこの・、は部分的、、で小さいかも知れぬが、今日喜びを痛感せしむるに充分であります……（拍手）

諸君は、あの壁に掲げられた大ポスターの星を注目されたに違ひない。このポスターこそ吾々の、、の日の心からの喜びを意味するものであります……（拍手）

あれこそは藝術の無產階級への進出であり、同時に全無產階級藝術聯盟が吾々のためにの萬丈の氣焰を擧げたものであります……（拍手）

本會議に於ける議案の愼重なる審議決定は、まさに大衆的行動黨のゆるぎなき基礎を固め階級的結黨と戰鬪的合同の端緖を戰ひ取り得たことを示してゐるのであります……（拍手）

報告によつて明かな如く大衆が吾々を信賴したのは、吾々が先づ眞先に大衆を信賴したからであります……（拍手）

今日の喜びに滿ちた記錄をひつさげて諸君が地方に歸つた時、地方の同志は感極まつて泣くでありませう……（拍手やまず）

吾々は亦將來惡戰苦鬪を續けるであらうが、それは絕望的な惡戰苦鬪ではなくして、、、の希望に滿ちた戰ひである……（拍手）

吾々は今ここに散會せんとするのであるが、この希望を各地方に持ち歸つて大衆と手を握り、新黨準備會の旗を工場に農村に、更により高く翳して……（アラシの如き拍手）

ブル新聞や裏切者達は準備會の結黨は出來ぬだらう等と逆宣傳を飛ばしてゐるのであるが、本日の會議の成功は、結黨へ一躍したものであり、次に諸君に御目にかかる時は必ずや其の喜びを分つ日であらねばならぬ……（アラシの如き拍手）

別れるに臨み、玆に全國代表者會議の萬歲を三唱したい……（アラシの如き拍手）

全國代表者會議萬歲！　萬歲！　萬歲！

（時に午後七時二十分）

時評

中學教育の改善

山川均

今日、學校教育は、二つの主要な任務を負はしめられてゐる。第一には、現存の社會秩序に適合した、現存の社會秩序を維持し、鞏固にし、これを永久化するために必要な心理狀態と物事の考へ方――一言にすれば、かようなイデオロギーを養ふことである。第二には、現存の社會的生產の方法を維持し、さらにこれを擴大するために必要な能力を養ふことである。これは主要な二つの任務といふよりも、もつと精確にいへば、教育の主要な一つの任務の、二つの方面にほかならぬ。

近頃問題になつてゐる中學教育の改善も、同じくこの二つの方向への改善を指してゐる。

（一）

[illegible]ころは、より意識的に行はれてゐるか、より無意識的に行はれてゐるかの違ひである。從つてまた、それはより多く專門の機關によつて行はれてゐるか否かの違ひである。そして何らかの形と何らかの方法とで教育が行はれてゐる限りは、教育は現存社會秩序に適合した、これを維持し、鞏固にし、永久化するために必要な一定のイデオロギーを養ふ任務を行つてゐる。これはいかなる社會でも同じである。たとへばロシアの教育は、、、、のイデオロギーを叩きこむことを主要な一面としてゐるとしたならば、その他の諸國における教育が、、、、、のイデオロギーを叩きこむことを主要な任務としてゐることに、少しの不合理も不思議もない。たゞ問題はそれが如何に意識的に行はれてゐるか、そして何故にそれは意識的に行はなければならないか、といふ點に[illegible]

原始社會には、學校といふ特別の機關をこしらへて、共產生活のイデオロギーを子供の頭に叩きこむ必要があつたらうか？　もちろんその必要がなかつた。なぜならば社會生活のあらゆる場面は、原始的共產的なイデオロギー以外の如何なるイデオロギーをも生長せしめなかつたから。そこでロシアの學校が、、、、、のイデオロギーを意識的に叩きこむことをもつて、主要な任務の一つとすることは、ロシアの社會生活が、、、、、でないといふことを意味してゐる。いな反對にロシアにおいては、、、、、のイデオロギーは、却つて社會生活と闘つてゐる。

、、、、の場合もその通りであつて、、、、、の社會秩序が健全であつて、旺盛な生活力を示してをり、堅固に動搖なく、生長と擴大とを遂げてゐる時代には、社會生活全體が、人々をその社會秩序に適合したイデオロギーに教育した。特殊の機關によつて、意識的にこのイデオロギーを維持し、このイデオロギーに人間を教育する必要の感ぜられる度合に從つて、社會生活全體がかような教育上の作用を失つたことを意味してゐる。社會生活のうちに含まれてゐる、、、、、とが人々を異つたイデオロギー、ことに反對したイデオロギーに教育する必然が增大して來れば來るほど、現存秩序に適合したイデオロギーを維持し、人々をこのイデオロギーに教育する任務は、いよ／＼ます／＼特殊の機關に負はしめられる任務となり、その努力は、いよ／＼ます／＼意識的になつて來る。そして後にはこれが、狂熱的にさへもなつて來る。

〔　〕

中學教育の『改善』を具體的に現はした「學科の內容改善」を見ると、それは要するに『思想善導』の必要と、中學教育を實用的にする要求との、妥協によつて出來上がつてゐることが直ぐ分かる。

日本國民の思想を善導しなければならぬと主張することは、その反面に何を主張してゐることに歸着するか、また今日特に聲を大きくして思想善導の叫ばれる社會的な根據と背景とが何であるかは、しばらく問題とせぬ。ともかくも、思想善導は當面の合言葉であつて、今日の日本は思想善導の日本であつて、なかんづく政友會內閣は、思想善導の內閣である。いやしくもこの內閣の教育改善の獻立に、思想善導の藥味の缺くべからざることは、云ふまでもない。

では『改善案』は、いかにして思想を善導しようとしてゐるか？曰く、修身科を道德科と改稱することによつて、漢文の授業時間を增加することによつて、歷史の教授を改善することによつてゞある。

思想善導の上から見て、學校の修身科ないしは道德科が重要視されゝばされるほど、それは全體としての學校教育に、又は學校生活に、思想善導の作用の減少したことを、その反面において物語ることゝなる。すなはち思想善導の作用は、社會生活の全環境から、學校教育と名づける特殊な環境の內に追ひ込まれ、さらに學校教育全體から、さらに一週何時間かの修身科の時間に對して期待せられるにいたつた

とを意味してゐる。

思想善導の力を、漢學に仰がうとする點でも、『改善案』は、世間の多くの思想善導思想と共通の性質を持つてゐる。論語孟子が、『古來』はいかに國民思想と密接な關係があつたにしても、今日は、健全な思想は、ひとり現在の社會生活のうちに根を持つてゐなければならぬ。孔子が如何に曰ふとも、現實な社會生活は、もつと大きな聲で、他事をか曰ふてゐるとしたならどうだらう。現實な生活に訴へないで、孔子と孟子に訴へることは、現在の社會生活に對する、、、、、、いしは、、、、、にほかならぬ。

□

漢學の復興によつて、吾々は思想を善導した。そこでその次には、中學教育を實用的にしなければならぬ。これは英語と數學の授業時間を減少することによつて、作業科を設けて『勤勞愛好』の風を作ることによつて、學科と課程とに地方的の必要を加味することによつて行はれる。

今日、學校教育の第一の任務は、充分に意識的に行はれてゐるが、第二の任務は、大部分は自動作用で行はれる。現在の社會的生産が必要とするような能力をもつた個人を仕立てるといふ問題は、今日にこのまゝの問題としては答へられないで、生活の機會を得るに便利な人間、職業を得るに有利な資格をもつた人間・實用的な人間を作るといふことによつて、職業に[illegible]ゐる。

もとより『改善案』は、その一面において、かような効果を目的としてゐることは無論であるが、この『改善案』の提議してゐる改善が、實際にかような効果をもたらすかどうかは、おのづから別問題であつて、現に專門の教育家の間にも、この効果については、疑問を持つ人が少くない。

たとへば英語の授業時間を減少することは、從來の英語の教授が實用的でなかつたといふ問題を解決するものではなくて、却つて實用的でなかつた英語を、一そう非實用的なものとするに極まつてゐる。そこで英語の教授を實用的にするためには、たとへば漢學の教授を全廢して、英語の時間を増す方がむしろ辻褄が合つてゐる。けれどもこれでは思想の善導との辻褄が合はぬ。漢學は、國民思想の滋養分を含んでゐるが、英語は横書きの文字であつて、一切の、、、、、、、、物である！

今日は、最少の勤勞によつて、最大の生活をすることが、一般的な理想となつてゐる。そこで一週二時間の作業科によつて、勤勞愛好の風が幾ミリばかり助長せられるかは、何人も計算することができぬ。

そこでこの點でも專門教育家の間に異論がある。中學の上級を第一種第二種に區別したことは、改善の眼目の一つと見做されてゐる。ところがこの改善案、謂ゆる學校體系を緩和するためにに、恐らく何らの効果もないといふ點には、[illegible]專門家の[illegible]一致[illegible]ある。

『改善案』の、中學教育の實用化は、中學教育を少しばかり實業教育化したゞけではないか？　或る教育家はかう云つてゐる。もし少しばかり實業教育化したゝめに實用化せられるなら、大いに實業教育化することがどうしていけないだらうか？

そこで一そのことに中學を實業學校にしてしまひ、さらに高等な教育の準備のためには、新しい中學校をこしらへてはどうか―　この實際化ないしは實際化された舊中學校の門前は閑散になり、實用的でない新中學校が一杯になる。そして再びこの中學教育を實用化する必要が起つて來る。より高い學校教育を受けることが、大體において、最少の勤勞によつて最大の生活を享樂する機會を最も多く約束してゐる間は、そしてより高い教育を受ける機會は、すべての人々に同一に開放せられてゐない、特權的な機會である限りは勢ひこの機會に通じた道が雜沓することは、少しも不思議でない。

〔〕

一方では、中學校を漢學塾にして、徹底的に思想を善導することも出來ないし、他方では、中學校を實業學校にして、徹底的に實用化することも出來ないとしたならば、一體どうしたらよいのだらうか。そして一體どうしようとしてゐるのだらうか。

對支外交の好轉

二回の出兵と南北妥協に對する『警告』などで甚だしく緊張してゐた、對支關係は、最近の矢田、王正廷の交渉によつて、大に好轉したと云はれてゐる。或はこの好轉の結果が、矢田、王正廷の交渉であつたと云はれてゐる。

この南京交渉の內容と結果については、固より知る由もない。たゞ日本と支那との間の關係が『好轉』したとするならば、それは一體、誰れが好轉したのだらうか？

田中外交とは、通俗的には、支那の國民に對して、強硬な態度をもつて臨むことゝ一般に解せられてゐた。強硬なものといへば、、、、ほど強硬なものはない。そこで田中外交とは、、、、をもつて、日本の主張を支那に貫通することゝ理解せられてゐた。

たとへば田中內閣成立の數日後に發表せられた、對支聲明書を一讀してみても、この決心がよく分かる。『南方の勢力が山東に迫り、さらに北京の張作霖に迫つて來ると、前後二回の出兵を見た。濟南では、田中外交の、、、は、現實に、何ものかを、、、した。南方の形勢がもはや取り返へしのつかぬものとなり、さらにこの勢力が、軍事的に滿洲に及ぶ危險を生ずると、田中外交は支那本土と滿蒙とを『劃然』と區別し、その、、め紐の綴びを、本土滿洲の境界に立てた。そこで南方の勢力は道筋を變更し、今度は政治的に滿洲に進出しようとした。すなはち南北の妥協であつた。南北妥協に對して、田中外交が何を爲したかは、人々の記憶に新らしい。それは文字通りに、たゞ、、、を除

ぞく以外のあらゆる手段に訴へたと云つてよい。

條約問題についても、田中外交の『强硬』は、一貫して渝らない。條約廢棄の前非を後悔して、詫びるなら許してもやるが、さもなければ一切の相手にせぬ。濟南事件については、田中外交はその性質の上から當然にも最も、强硬な態度を取り來つたものと思はれてゐる。最近、或る新聞には、矢田、王正廷交渉について、次のような主張をしてゐる人があつた。

『…濟南事件解決に關し、日本側から致した死者に對する賠償要求に對し、支那側は支那人の死者に對する賠償を要求し、矢田總領事は之を承認したと云ふのである、果して此事が眞なりとせば、日本は我が同胞數十人に對する賠償に甘んじ、支那人數千人に對する賠償を諾した譯である。此事たるや、單なる數字上の計算からすれば、元より當然過きる樣ではあるが、殺された日本人（即ち數十人）は賠償に値するも、支那人の死者（即ち、前記の數千人）は賠償に値しない。何となれば日本人は、暴行支那兵の理由なき虐殺であるから賠償に値するも、支那人の死者は我が王師の膺懲の爲めに生じたる死者で賠償に値しないのである…。』

この主張の當否は別として、濟南事件に對する、、、、、、、、、、、、、、右の主張によつて、最もよく代表せられてゐると云つてよい。しかるに、支那は不幸にして一貫つた見解を持つてゐたら。いふまでもなく支那に、支那人の、、、、、、、、、するといふ[illegible]て

もない（恐らくは！）見解を持てゐた。そこで田中外交に取つては、濟南事件がすべての問題のうちの最も難問題だとされてゐたのであつた。

かうして田中外交が、對支强硬政策を强硬に固持してゐる間に、英米その他の國々と支那の關係は、しきりに好轉した。南北妥協の進行が、もはや阻止すべからざる勢ひであるといふことも、形勢を理解することの最も遲いものにも完全に明かとなつた。田中外交は、かつて强硬を宣傳する外交であつた。今日は『好轉』を宣傳する外交となつた。

田中內閣の外交は吾が黨の主張に追隨した！　そこで民政黨はかう主張する。田中外交が民政黨の外交方針に追隨したとするならば、民政黨にとつては、慥かに由々しき大事である。民政黨は財政上の謂ゆる消極政策をも、田中內閣のために借用された。そして今また大切な幣原外交をも借り取られたとするならば、民政黨は何をもつて政友會に對立することができるだらうか。

實際においても、田中外交自ら宣傳するように、日支關係が「好轉」したとするならば、田中外交は幣原外交以上の何ものでもないものに歸着する。その强硬な態度のために、日支間の問題の解決が數ヶ月または十數ヶ月おくれたことによつて、矢田、王正廷の交渉において、わが國がこの數ヶ月または十數ヶ月の利息に相當する有利な條件を獲得したとは思はれぬ。田中外交に比較するに、迂廻した幣原外交であり、[illegible]があまりに念の入つた幣原外交であり。幣原外交より[illegible]外交だつたといふことに歸着する。

しかし政友會の外交が、民政黨の外交に追隨したとのみ考へてはならぬ。滿蒙における謂ゆる既得權益に對する態度では、田中外交の口吻を眞似なければならなかつたものは、民政黨であつた。幣原外交はまづ民政黨によつて田中外交的性質に説明された。そしていま田中外交は政友會と政府によつて、幣原外交的に説明されてゐる。これは追隨せられたものが、民政黨でも政友會でもなくて、民政黨をも政友會をも追隨せしめる或るものだといふことを意味してゐる。反對の兩極を代表するかのように力んでゐた田中外交と幣原外交とは、この或る第三のものゝ必要において、目出度くも對支國論の統一に到達したのであつた。

大隈侯の政界乘出し

床次氏の分離に端を發した民政黨の動搖は、その後、豫期せられたほどの激動こそ見なかつたが、餘震はなほつゞいてゐると傳へられてゐる。そしてこの餘震の一つは、近來しきりに傳へられる大隈侯の政界乘り出しに關聯するものであつて、大隈侯は過般の或る會合で明白にその意志を表明せられたとも報ぜられてゐる。昭和三年の今日、もし大隈侯が、政界から退隱されるといふのであつたなら、何人もこの報道を聞いて、なるほどと首肯したにちがひない。大隈侯爵の政界乘り出しなるものが事實にせよ、事實でないにせよ、この報道は何ら一般國民の關心を惹かぬばかりでなく、一般國民をして、首肯せしめることさへもできぬ。

大隈侯が、この時代錯誤に對して幾分面はゆそうにしながらも、政界乘り出しの決意をされたのは、政界革新のためだといふことである。由來わが國の政界は、不斷に『革新』されてゐる。過去一年間の短かい期間を取つて見ても、わが國の政界は、明政會によつて革新され、床次黨によつて革新され、一新會によつて革新され、いままた大隈侯爵によつて革新されようとする。わが國の政界は大隈侯によつてどのように革新されようとし、大隈侯はわが國の政界を、どのように革新してやらうといふのだらうか。政界革新といふことが、政界人夫請負業の共通の屋號だとしたならば、日本の政界には、そして特にその季節に近づいてゐる今日は、この屋號を稱なへる餘地が幾らもあるだらう。これに反して、政界革新といふことが、今日政治上の一つのスローガンとなり、政治運動のプラットフォームとなり、獨立の一政黨の存在の理由となり、根據となり得るかの如く考へるなら、これほど思ひ切つた時代錯誤はない。

大隈侯が政界に乘り出されようが乘り入られようが、それは國民の政治的關心の上に、何らの波紋をも描かしめぬように、わが國の政治史の上にも、何らの波瀾をも起さない。たゞ大隈侯の謂ゆる「蹶起」に多少の興味があるとしたならば、現に進行してゐるブルジョア政黨の分解と再結合との作用は大隈侯においても、小さな道具の一つ[illegible]

したといふことにある。

ブルジョア政黨の動揺と分解とは、ブルジョア政治勢力そのもの丶動揺と分解とを表はしてゐるものではなくて、ブルジョア政黨の現在の分野が、ブルジョアジーの實際の分派とその勢力關係とを、精密に複寫してゐらぬことを意味してゐる。そこでブルジョア政黨の分解と再結合とは、大體において、現在のブルジョア分派に沿うて進行する。ところが今日は、ブルジョアジーのうちの異つた層、たとへば金融資本と工業資本との間の利害の相異は、この二つの資本に對する支配が漸次に統一され、金融資本の勢力が增大するにつれて、背景にかくされて系統を異にする金融資本の勢力の對立が前景に押出されてゐる。これはブルジョア政黨の分解と再結合との方向の上にも、勢ひ反映するにちがひない。かように相對した財閥系統に沿うて政黨の新分野が定まると同時に、政黨の分野に起こる變動は、財閥系統の上に反作用して、新たに財閥の勢力圏を定めてゆく。

ブルジョア政黨の動揺と新結合とか、大體において、かやうな方向を指して進行する作用であるにもせよ、これは必ずしも個々の『政治家』の去就と集散とか、直接にかつ精密に、さうだといふことを意味するものではない。かような進行の過程は、實際には幾多の迂廻をし、時としては全く正反對の方向を指した動きの緩和によつて、初めて[illegible]

實によつて、感情によつて、勢力慾によつて、名譽心によつて、、、、、、、、、、、、、、、不確實な未來の約束の代りに確實な、しかしながら割引された現前の現金によつて、對支外交の意見の相異によつて、政界の革新の感激によつて、蹶起し、進出し、脫黨し、聲明し、もしくは身を挺して國難に當たることをも、少しも妨げない。

大隈侯の蹶起は、立ち所に、議院における交渉團體たるに足る頭數を揃へ得ること間違なしと傳へられてゐる。かように代議士たる一個人の行動の直接の動機が、決して一樣であることを必要とせぬ限りは大隈侯の周圍に二十五名の代議士の集ることは、必ずしも考へ得られぬことではない。吾々はこの事實を、必ずしも、直接に財閥關係に結びつけて說明する必要はない。それと同時に、大隈侯の背後に、政界革新の熱誠が動いてゐるか、それともその他の如何なる勢力が動いてゐるかは、事態の究極の意味を少しも、變化するものではないのである。

（十一月五日）

無力な陪審法

瀧川幸辰

私は陪審法の考察といふ立場から、問題を刑事裁判に限定する。從つてこゝでいふ裁判官は公判判事と豫審判事のことになる。兩者のうち「比較的公平だ」とか「先づ信用してよい」といふ評判をとつて居るのは公判判事だけである。豫審判事の仕事は、實質において、檢事のそれと全く同一である。その秘密的な、しかも、、、による一方的取調は「公平」とか「信用」とかいふ批評とは、かなり緣の遠いものである。まちがひのないやうに斷つておくが、私は豫審判事の行動が、事實においてフェヤーでないといふのではない、豫審制度そのものが陰性的なので民衆に與へる感じが何となく暗いといふだけのことである。制度の罪であつて人の罪ではない。このことを明かにしておく。

一

民衆は司法制度に干與することを希望して居るか？　殊に陪審員として裁判所の高座に坐し、「自分も裁判の一部分を分擔して居るのだ」といふ氣持になるところの種類、程度、形式の干與を希望して居るか？　私は「否」と答へる、三度はおろか、百たび千たび「否」と答へる。

民衆が公務員の處置に對し不服を抱いて居るのは事實である。しかし、それは主として、、、、、、、、、、、、、、、、。裁判官に對しても不服はあるが、、、、、、、、、、、、、、行動に對するそれとは、質において、多少の趣を異にする。民衆は、、を感じて居る。しかし、裁判官に對する不滿の多くは、言葉遣ひが横柄であるとか、少しは親切に話を聞いてくれてもよからうといふ程度のものに過ぎない。「役人のうちで信用できるのは裁判官ぐらゐだ」といふ世評は、兎に角、裁判官の處置の利己的でないこと、を民衆が認めて居る證據である。

二

話は本筋にかへる。

民衆は現在の司法制度に對して不滿を感じ、從つてその改正を希望して居る。しかし、民衆の不滿は陪審員として裁判に干與することによつて、滿たされるものではない。不滿は全く別の方向に向けられて

ある。

第一は適法な犯罪捜査の手續が認められて居ない、といふ點である。犯罪捜査の手續として行はれる處置は身體・財産・名譽・住居・信書などの、、、、、、、、、として現れる。搜査を受ける者の苦痛は、、、、、、、、、、、、實質において異るところはない。刑事訴訟法において犯罪捜査のための行動を、嚴重に規定してある理由はこゝにある。法律に定めてない刑罰を科することの不法は、何人もこれを認める。この理由はそのまゝ、法律に定めてない方法によつて、犯罪捜査を行ふ場合にあてはまらねばならない。ところが、實際は行政執行法による、、を以て。犯罪捜査のための家宅捜索や物件の差押や嫌疑者の勾留に代へて居る。民衆が聲を嗄らして訴へて居るのは、この不法強制處分の排斥である。

第二は無責者に對する國家賠償責任が不完全、否、全く缺けて居るといふ點である。裁判・檢察・警察の職務に從事する者も人間である。人間である以上、過ちを犯すのは當然である。國家は嫌疑者の蒙つた有形・無形の損害を賠償せねばならない、時宜によつては責任者の處分（懲戒及び刑事訴追）も必要である。民衆が熱望し要求して居るのは、國家賠償責任制度の樹立である。

私は斷言する。民衆は陪審制度を熱望しては居ないと。民衆が陪審法について殆ど無關心の態度をとつて居るのは、動かすべからざる證據[illegible]陪審法は[illegible]年前に公布せられ、本年十月一日から實施せられて居る。陪審法の必要乃至利益は、これまで[illegible]論ぜられて居る。「司法に關しても——既に立法のためには議會制度、行政のためには議會の監督制度や地方自治制度が認められて居るに對し——民衆の參與を認めることは立憲政治の精神を擴充し、併せて司法に對する民衆の信頼を厚くすることになる。」陪審制度を謳歌する幾多の議論は、その表現が鋭いか鈍いかの相違こそあれ、凡てはこの一點に凝集されて居る。陪審法は果してこの讃美に價するか？ この問題は陪審法の内容を細かに批評して行けば自ら明かになる。私もこの小文でその一端に觸れて見る。

三

わが陪審法の特殊性を一つ二つ擧げる。

先づわが陪審法における陪審の權限及び評決の效力の點が問題となる。陪審法の根本精神は第一條と第九十五條とに規定してある。（一）裁判所は刑事事件を陪審の評議に附して事實の判斷をすることができる（一條）。裁判所は陪審事件につき陪審に對し事實の有無を諮問し陪審は評議の結果を「然り」「然らず」の形式で答申する。裁判所は陪審事件を陪審の評議に附さねばならないが、陪審の答申に拘束せられるものではない。裁判所が肯定の意見であれば、たとひ陪審が否定の答申をしたところで、この答申に從つて裁判をする義務はない。この反對の場合も同じである（二）裁判所は陪審の答申を不當と認めるときは、訴訟の如何なる程度にあるを問はず、決定を以て事件を更に他の陪[illegible]

審の評議に附することができる（九五條）。この規定から出て来る論理的結論は、陪審の答申を無視して裁判する權限が裁判所にあるといふ意見か、裁判所は結局いづれかの答申に基いて——裁判所の意志に反しながらも——裁判せねばならぬといふ意見である。第一の意見は陪審を單純な裝飾物と見るものであつて、陪審を設けた趣旨に合はない。第二の意見は陪審が裁判所を拘束することになつて、わが陪審法の精神に反する。そこで第三の意見として裁判所または陪審が感情や情實にとらはれない限り、大概は意見の一致を見るから、陪審更新の規定は拔かずの太刀に過ぎないといふものが出て來る。法律の解釋は非常識な結末ばかりを眼中において居るものではない。しかし、第三の意見は法律解釋として、あまりに樂觀的である。法律は鬪爭的條理である。意見が一致するに定まつて居れば、法律解釋の大部分は無用になる。陪審の意見と裁判所の意見と一致しないときは——これは決して机上の空論ではない——裁判所が陪審の答申を無視して裁判するの外はない。陪審法第一條及び第九十五條は憲法違反論の攻撃に備へるためにできた規定である。この立場に立つ限り、陪審は事實の有無を評議し、その結果を裁判所に答申する機關に過ぎないと同時に、裁判所は裁判の前提として事件を陪審の評議に附する義務を負うが、その答申に拘束せられるものではないと解することを以て、正當な解釋と私は考へる。

わが陪審法における陪審の權限及び評決の效力は、上に述べた如く、極めて慘めなものであるといふ結論になる。

四

わが陪審法の特殊性をもう一つ擧げて見る。

如何なる事件を陪審事件とすべきかにつき、各國の法律は一定の標準を設けて居る。標準そのものには多少の相違はあるが、標準を設けて居る點では各國の法律は全く同一である。ところが、わが陪審法は陪審事件と非陪審事件とを區別するの外、更に陪審事件を二分して法定陪審事件と請求陪審事件とに區別する。法定陪審事件は法律上、當然に陪審に附せられる事件である。死刑または無期の懲役・禁錮にあたる罪がこれである（二條）。その範圍は極めて狹い。請求陪審事件は被告人の請求によつて陪審に附せられる事件である。長期三年を超える懲役・禁錮にあたる罪であつて、第一審が地方裁判所の管轄に屬するものがこれである（三條）。その範圍は頗る廣い。請求陪審事件はわが陪審法に獨特のもので、刑事訴訟法や裁判所構成法との關係上、わが刑事裁判に重大な影響を與へて居る。

第一審が地方裁判所に屬する事件は、短期一年以上の懲役・禁錮にあたる罪か、檢事の公訴提起が豫審請求の形式で行はれる事件である（構成法一六條、二七條、二一條。訴訟法二八八條）。短期一年以上の懲役・禁錮にあたる罪はあまり多くないが、豫審請求によつて地方裁判所に屬すべき罪はかなり多い。例へば犯罪數の最高位にある竊盜罪の長期は十年である。故に竊盜罪に對する公訴提起が豫審請求の形式

で行はれるときには、地方裁判所の管轄に屬し、從つて請求陪審事件となる。ところが、公訴提起の權限は檢事に專屬する（訴訟法二七八條）そこでこの種の犯罪は檢事の意見一つで、或は地方裁判所に屬することになつて陪審事件ともなり或は區裁判所に屬することになつて陪審事件の範圍から除かれる結果ともなる。

請求陪審事件は陪審に附すべきか否かの決定を被告人に一任してあるといふ意味である。しかし、上に述べた如く、これは名ばかりのことで、實は檢事が全權を握つて居るのである。請求陪審の範圍は極めて廣い。請求陪審の全權を握つて居ることは、考方によつては、わが陪審法の運命を制して居るともいひ得る。即ち陪審法はその第一歩において、檢事といふ行政官に左右せらるべき仕組にでき上つて居る。

檢事は統一的組織體を成し、一體として活動する。その職務を行ふにあたり上官の命令に從はねばならない（構成法八二條）。故に請求陪審事件は窮極において、擔當の檢事から檢事正へ、檢事正から檢事長へ、檢事長から檢事總長へ、檢事總長から司法大臣へ、順送りに送られることによつて、その運命が定まる。[illegible]

司法に對する民衆の信[illegible]する[illegible]目的とする陪審制度が、[illegible]

結局、[illegible]の手に最後の[illegible]人もこれに期待をかけることはできない。[illegible]

五

陪審法の實施にあたり「双手を擧げて慶祝」したり、「國家正義の維持伸張を國民の光榮なる責任として、其の双肩に委ぬるところのもの」と感ずる人達の多くは司法當局、殊に陪審法に何等かの意味で關係を有する人達か、在野法曹界の人達である。その人達が陪審法の實施を腹の底から喜んで居るかどうか、私は知らないが、陪審法の普及乃至は宣傳に努力して居ることは事實である。それも惡くはない。たゞ私の感心しないのは、往々、模擬裁判といふ芝居がゝりの宣傳方法を、その人達が利用することである。模擬裁判は裁判の眞似ごとを實演するのである。陪審制度の準備ともなり、思想の普及ともなると考へて居るらしい。舞臺に上せる事件は殺人、放火といふたものが多い。被告人か證人かには必ず女が出て來て哀れな場面を描出す。事件の筋は有罪無罪の區別のつきにくいものに限られて居る。判決は無罪か、執行猶豫か、そうでなければ陪審の答申を不當と認めて陪審更新を行ふかの三つを出でない。

模擬裁判の弊害は眞劍味を伴はない點にある。裁判は遊戲でも見世物でもない。人の運命が決定されるところの極めて嚴肅たものであ

る。この最も眞面目であるべき事柄を、現職の判檢事や知名の辯護士が出演して興味半分の裁判ごつこをすることは、百の害あつて一の益もない。模擬裁判によつて裁判の型を示すことはできるかも知れない。しかし、型は末のことである、精神を打込んでおけば型なんかどうでもよい。裁判の信用は事件が淀みなく片付くところにあるのではない。裁判官や檢事や陪審員や辯護人が心から被告人に同情して任務に從ふところに、はじめて眞に民衆の心を心とした裁判が生れる。眞の裁判は技術によつて作られるものではなく、同情心の發露として自ら生れるのである。模擬裁判に眞劍味がないのは役者の心得が惡いからである。最も眞面目であるべき事柄を、人氣で押切らうとするところに誤謬がある。模擬裁判によつて陪審裁判を敎へることができると信じて居る人達よ！　私は差當り諸君にトルストイの『復活』だけでも一讀することを希望する。若い美しいマースロワに對してシベリヤ徒刑を言渡した誤判の原因は――、、、、、、、、が凡ての罪惡の原因であるといひ得るが――裁判官や檢事や陪審員や辯護人に、人間としての同情心が缺けて居た點にある。その人達の利己心が裁判を誤らしたのである。

田舍芝居以上に出でない模擬裁判によつて民衆に陪審裁判の型を會得せしめて何になる、まごつきながらも眞實にぶつかつて、徐々に人間味を體驗する日を待つ方が遙かに有意義である。陪審法は既に實施せられ、各地で陪審裁判が開かれかけた。法律運用の第一線に立つて居る人達の任務は、民衆に陪審裁判の「技術」を敎へることであつてはならない、陪審「裁判」を敎へることによつて、裁判の精神を吹込むことでなければならない。

新刊紹介

◆**高山幽谷を尋ねて**（武市雄圖著・鑛業日本文化史なり・定價一圓八拾錢・東京市日本橋區數寄屋町・六合館）

◆**詩劇集戀の黃昏**（田中淸一著・定價一圓二拾錢・東京市外世田ケ谷下北澤九二五・詩神社出版部）

◆**政黨の表裏**（加藤正造著・定價一圓・東京市本郷區菊坂町一六紅葉閣内・批評社）

◆**新敎育學**（バアトランド・ラスセル著・塚越菊治譯・定價二圓五十錢・東京牛込・早稻田大學出版部）

經濟時評

讓税に姦せられたる財政計畫

太田正孝

一

御大禮關係で、例年より早く十月三十日に、明年度の概算閣議が終つた。かうして田中首相は、南殿のきざはしに立つて、聖壽の萬歳をことほがんとしてゐる。さりながら經濟眼より明年度豫算案を批評せんとする本文の筆者は、果して彼に獨我的政欲を滿足する以外に何ものゝあるかを疑はざるを得ない。問題は、御大典を記念すべき國家と國民にとりての最高の數字が豫算案にまのあたり表現されてゐるかにある。また、行き詰れる現時の經濟事象を展開すべく最も好き機會に面して、金解禁の準備を豫算案に表現してゐるかにある。——秋深し。散る一葉二葉のしづかなきものあるや否や。

二

圓滿に閣議を纏めたといはれてゐる明年度の豫算總額は、十七億五千二百餘萬圓である。それは、多いのか、少ないのか。與黨と當局者とは、豫算編成の進むにつれて、これまで大小の選擧戰に高調し國民に公約して來た積極政策實行の口を拭ぐつて、財政の緊縮すべきことを主張すべく餘儀なくされた。反對黨は、これを以て變節であるといふ。與黨は、これを强辯して、伸びんがための緊縮——緊縮的積極政策であるといふ。筆者を以て見れば、共に當つてゐない。さきに消極政策を主張しながら、僅に二年に滿たずして當時未曾有の豫算を作つたのは、記憶に新しき前内閣の末期であつたからである。さらに當局者が緊縮的積極政策といふが如きは、あたかも北極と南極とに國民を立

てゝ身をつなぎ得るかといふに等しいからである。いづれは、女郎の根性にも比すべき政黨者流の口説である。その云ふところと行ふところと當てにならずといへば、それまでゝあらう。それにしても、双方とも本當に豫算は緊縮されたものと思つてゐるのか。――事實は、兎も角豫算は非常に増額してゐる。現在實行しつゝある昭和三年度の豫算よりも約五千萬圓も多い。また、昭和四年度が幾何に落ち着くべきかを計上されてゐた――いはゆる財政計畫上の標準豫算たる十六億五千餘萬圓とくらべてみれば、正しく一億餘圓の増加となつてゐる。

さらに、いま例に擧げた前內閣末期の放漫豫算とくらべてみても、千數百萬圓も多い。不景氣は當時より深刻となつたにかゝはらず、國の財政は膨脹せんとしてゐる。これこそ、未曾有の大豫算である。『ウドンの延びたやうな豫算は作らない』と抽象的言辭を弄した首相は、豫算の緊縮を香はす積りで國民を釣つたのか。むしろ內心は、たゞ閣員の途方もない要求を抑へるため、概算上の復活を制限さすための宣傳にすぎなかつたと見るのが正しい。正直な筆者もはじめは對議會策上、眞實の緊縮をするであらうとおもつてゐたが、――それが彼等の政黨良心として正しいかは別として――結局はウドンの延びたのはをろか、國家財政の玉の緒を危からしめんとする延び方である。笑止や。腹立たしや。

さても時務に職に在るものは、いまの世を何と見る。不景氣は大正九年以來指折り數へて九年になる。內に失業あり、會社の解散減資巨額に上る。對外貿易に入超を重ね、爲替は動搖常なくして平價に近づかず。金利と物價と相重なつて、産業を壓迫し、生活を苦しむ。それが對案は、上下を通じて、經濟の緊縮を行ふにある。とくにその費額の多く、國民經濟に響くことの強い國家財政の緊縮にある。問題となつてゐる金解禁の常道に入るためにも、解禁後の用意のためにも、財政の緊縮を要件とする。保守的色彩の濃い金融業者の解禁卽行の註文も、そこにある。國難を賣りものにした第十五議會における政治家の建議中にも、經濟國難の決議だけは、筆者もその實現されることを望んで已まなかつた。しかるに當局者は、これら上下の聲に耳を傾けず、玆に未曾有の豫算を仕出來したのである。剩へ藏相の如きは、多少の豫算の増加は財界に響かずと囁く。何たる囈言ぞ。問題は緊縮線を一歩にても踏み出すことを非とするにある。をろかや。淺ましや。

三

それにしても、未曾有の豫算中に、筆者の首肯するに足るやうな費目があるか。新規事業として數ふるものがあるか。産業立國策として形示されたものがあるか。――顧つて從來彼等の主張して來たものは、自作農創定もしくは農地金庫法案とか、肥料管理案とか、輸出補償案とか、教育基金繰入とか、北海道拓殖計畫の増額などである。なかに教育基金問題の如き筆者としても賛成するものもあるが、その是非の論は兎も角として、見渡すところ、豫算案中には

められてゐない。北海道拓殖案の如きは、型の如き政黨芝居まで演じたが、結局認められない。農地金融法案や、社會政策的施設としての救貧制度案の如きも、追加豫算に計上するといつて濁してゐるが、その財源の幾何もない場合に、その實現を見ることは難かるべく、たとひ計上され得るとしも、形ばかりのものにすぎない。かやうにして産業上の新規事業として拾ひ得るのは、わづかに肥料改善費（六十五萬餘圓）と、開墾奬勵費（四十餘萬圓）と、何等系統を立てざる部分的地方本位の道路港灣修築の幾筋と、綿羊試驗所新設（四十三萬餘圓）と、産業教育費（四十八萬餘圓）の若干とがあるにすぎない。しかも、かゝる乏しきうちにあつて拓殖省を新設し、貿易局を設置せんとするが如きは、筆者の諒解に苦しむところである。これらは、たとひその費額は少なくとも、精神上ゆるさるべきでない。かゝる經費は年とともに增すべく（拓殖省の初年度費は九十四萬圓）、我等の主張たる經費節減の本體は、眼にあまる役人の減少と、無駄の多く不急なる事務事業の整理にあるからである。要するに、明年度豫算案中には、何等目星しい新規事業は、一つもない。たゞゴタ〳〵と列べられたる各省の要求は一億三千萬圓の多きに達し、内に産業費六千五百萬圓を含むといつても、何等印象的な緊急費目を見出すことが出來ないのである。

それは、また何故であるか。つまるところは、財源が乏しいからである。直言すれば、實業同志會との協定に基づく減税方針に禁ぜられたからである。それにし…

は、政策の是非は別として、近頃殊勝のことのやうにあお…

それともまた、來るべき議會を見渡し、それを乗り切るべく、さい

他の小黨の賣り物を買ふべく信用づけねばならぬ立場におかれてゐるからでもあらうか。それはさておき、地租および營業收益税は昭和六年度から委讓を實施するとして、その前提として昭和四年度五年度にわたり、暫定的に地租は田畑につき五厘（内地は四分に北海道は二分七厘に）を減じ、營業收益税は免税點四百圓を千圓に引上げんとするにある。そして、前者において五百二十萬圓、後者において七百八十萬圓、合計千二百萬圓見當の財源を奪はれることになつたのである。

いまの時局に關する限りにおいては、苟くも租税の輕減が實際に行はれることであれば、何人といへども贊辭を吝むものはなからう。しかし地方財政との關聯において、國民負擔の輕減されないにおいては、たゞ國の財布より地方の財布に移したといふにすぎない結果となる。この意味において營業收益税の免税が府縣營業税として徴收せられ地租の付加税は制限率を府縣について百分の八十三を九十四として市町村について百分の六十六を七十二とするにおいては、そこに實質的輕減の實は擧らないことになる。──更に角委讓關係については、形式上は、政實協定の實現を見んとしてゐる。當局者は、そのために苦しんだのである。尤もその以外の協定については、行政財政の整理には、不充分にして實業同志會の滿足するほどでなかるべく、下士卒俸

週は僅かを引上げたるにすぎず、錫の關税引上には中止したが、木村の方はやめようとしない。煙草も値下げせず、救貧制度問題は、追加豫算といふ望み少ない綱にかゝつてゐる始末である。

四

上述するやうに、明年度豫算案は財源の乏しいために苦しみ、しかも無理をして作りあげたものである。收入の基幹となる租税は、實行豫算よりも九百三十五萬圓も減じてゐる。いふまでもなく、景氣が惡いからである。所得税も營業收益税も酒税も取引所税も減じてゐる。そのうへに地租と營業收益税とに輕減を行はねばならぬ。たゞ相續税と砂糖消費税と織物消費税と關税とが增してゐるだけである。それとても生活の向上に基くものは格別として、關税の如き爲替相場の恢復見越に基くといふに至つては、如何にも心細い次第ではないか。それにしても、名のないとはいひながら、一億三千萬圓の新規事業をすることが出來るのか。税の見積りに無理をしたといつても、限度がある。各省に既定經費の節約を迫つたといつても、僅かに七百萬圓にすぎない。さらぬだに査定に對する復活要求は鋭どい。突き放す力も乏しい。かやうにして途は、一方に剩余金に食ひ込み、他方に公債に賴らざるべからざることゝして、辻褄を合せたのである。

昭和二年度の剩余金は、二億五千六百余萬圓ある。そのうちすでに計畫上費途が定まつており、もしくは責任支出のために費消したものを除くと、一億五百余萬圓になる。不景氣に如實に剩余金の減少の上にも現はれてゐる。歳入出見積りの相違が少なくて、決算上の剩余金が少なくなつたといふのならば結構でもあらうが、年來豫算編成の財源とされてゐたものが少ないといふことは、積極政策を行はんとする當局者にとつては、氣の毒千萬である。しかし當局者は、大膽にもそのうち二千四百二十余萬圓を三年度と四年度との追加豫算の財源として保留する以外の八千百五十二萬圓を全部明年度豫算の財源としてしまつたのである。從來は後年度に對する財源を保留するをもつて例としてゐたが、此度は一文も殘さない。辯じて、剩余金を殘して死藏するのは民の利を減ずることになるからといふ。なるほど日本銀行に預けると七千萬圓まで無利子であり、その以上も二分の低利をつけるにすぎない。しかし彼等は、たゞ明年度豫算の編成難なるがため、筆者よりすれば無用と思はれる經費の調達のため剩余金を殘すことなきまでに手をつけたのである。なほ本格論をもつてすれば、剩余金は過去における税を取りすぎた結果とも見るべく、從つて減税なり減債なり國民負擔の輕減に充つべき筋合ひである。しかるを國費調達に振り向けて常道論の如く唱ふるのは、言語同斷である。また、追加豫算は從來六七千萬圓を要するものとせられてゐたが、二千四百余萬圓にて事足るや。一朝事あらば臨時議會を召集して訴ふるといふ便宜主義の常道論をもつてする考へにや。しかもかゝる乏しき財源をもつて農地金庫法案や救貧制度案を行はんといふごときは、人を欺くべく余りに無智である。

五

つぎに公債は如何。當局者は、募債額を二億圓にとゞめたことを手柄としてゐる。しかし、それは閣議における亂暴なる要求を縮めさしたにすぎない。もしそれ帝都復興事業關係（四年度限りのもの）のみを公債とすれば一般會計は四千七百萬圓で事足り、特別會計と合するも一億五千萬圓見當に落ち着かせ得るではないか。しかるを積極政策のための財源に、一般經費で支辨して來た震災復舊費を公債としたではないか。いはゞその意味の公債増額である。また後述するやうに、讓税のためにする減税財源を得んとして公債に侵入したものとも見られ得る。なほ償還關係よりすれば、剰餘金による四分の一繰込額も減少したのであるから、それだけ償還が少なく、それだけ消極的に公債の負擔は増したものとも見られ得る。しかも明年度の歳入見積りが過大であるとすれば、將來にも繋がる問題でもある。財政問題中に重點をおかれてゐる公債整理が斯くの如くであつて、果して財界一般の期待に添ひ得るであらうか。

要するに明年度の財政に、さしたる新規事業もなく、しかもその財源の不足を繰越金たる剰餘金と將來に負擔を貽す公債とによつて適合せしめたといふにすぎない。行政整理も充分に行ひ得ず、歳入も出來るだけ多くを見積り、辛ふじて辻褄を合せてゆく如きことは、平凡な財務家によつても爲し得るところである。筆者の期待に背くことも甚

六

しかも問題は、かゝる財政策によつて將來の國家財政の發展を期し得るかにある。財政の眼目は、末廣がりに伸びて行くことにある。未だ政府の後年度にわたる財政計畫表を手にしてゐないが、讓税の實行を發表してゐる點に論難の緒を出してゐる。否筆者をもつてすれば、これこそ明年度の豫算を禍ひし、後年度に累をおよぼすものではなからうかとおもふ。

こゝに讓税の本質上よりする是非の論は措く。問題は、讓税による補塡財源の如何が財政計畫として適當なるかにある。この點については新聞紙の報ずるところが區々であるが、大體において、當局者の意向は、地租（六千八百萬圓）營業收益税（六千二百萬圓）および鑛産税（百四十萬圓）の讓税總額一億三千百五十萬圓を、財政整理により一千萬圓、新税もしくは増税により四千七百萬圓、震災復舊費を公債に振替へることにより二千八百萬圓、鐵道製鐵所および臺灣各特別會計より國債償還金を繰入れせしむることにより二千萬圓、各特別會計をして恩給を負擔せしむることにより六百萬圓、電話收入中の保留千萬圓、これに地方への交付金を一千萬圓削除することによつて辻褄を合せんとするにあるらしい。しかもこのうち財政整理と新税もしくは増税ならびに地方交付金以外の財源に、仔細にこれを點檢するにおいては當局者

債に化せんとするものにすぎない。震災復舊費についてはいふまでもないことゝして、各特別會計の狀態は上述の負擔を加ふることがないならば公債を減じ得る勘定であり、電話收入も震災前の公債財源に振替へるの下心であると讀まれ得るからである。これらの合計は六千四百五十萬圓となる。かやうな將來の負擔を犧牲として讓税する必要があるのか。それはまた、恐く税制の整理と行政財政の整理によつて讓税すべしといふ同志會の意向にも副ふ所以ではないと信ずる。しかも、新税とするか增税とするかの問題に至つても、未だ大藏省と與黨との間に意見がまとまつてゐないといふではないか。かゝる租税の體系に關する大問題をそのまゝにしておいて、これに關聯をもつてゐる明年度の豫算案だけを纏めて得意となつてゐる如きは、無責任極まるものといはねばならぬ。かやうにして突き詰めて來ると、筆者は、そゞろに明年度豫算案が讓税によつて姦せられてしまつたといふことを悲しまねばならぬ。また、徒らに益なき積極政策によつて經濟更新の道を閉かんともせず、空しく金解禁の好機を逸してしまふことを嘆かざるを得ない。もとより飽くまで積極政策を採つてゆかうとする當局者に向つて、解禁の意向ありやと問ふが如きことは、野暮の骨頂でもあらう。政黨者流が政欲のために經濟を策することも久しい。かやうな經濟を弄ぶ政治はいつまで續くのであらうか。

――昭和三年十一月六日稿――

爲替投機に蠹まれる財界

和田六灘子

昨今の我爲替相場の變動は全く狂氣じみてゐる。言ふまでもなく、最近金解禁に對する國內の輿論の昂まつたのをきつかけに、紐育あたりの投機者の策動が一層猛烈になつたからで、所詮金解禁の問題が解決されぬ限り、どの道免れ得ない運命である。殊に今日世界の主要國中日本だけがなほ未解禁國として取殘されてゐる以上、圓貨に對する世界的投機の集中が今後ます〳〵その傾向を顯著ならしめるだらうことはこれを想像するに難くない。

◇

試みに大正六年九月に金の輸出を禁止して以來、今日に至るまで爲替相場の變動がどの位あつたかを見るに、平價四十九弗八分の七の米日爲替が、最高五十二弗八分の一、最低三十八弗二分の一と所謂正價現送點を無視しての亂高下を演じ、隨つてその回數もまた正金銀行の

建値だけでも次のやうに頻繁に變更されてゐる。

	回數		回數
大正六年	四	同 七年	九
同 八年	一二	同 九年	二七
同 十年	九	同 十一年	七
同 十二年	四	同 十三年	二六
同 十四年	二三	同 十五年	二一
昭和二年	六八	同 三年(十月二十九日まで)	七六

もしそれ市場相場の變動に至つては、到底計算の煩に堪えぬと云ふのが本當で、時によつては一日に十數回の變動を見たことさへ珍しくない。

◇

爲替騰落の原因は一にして足らぬ。しかし或國に於て金の輸出が禁止され金本位制が事實上停止されてゐる場合には、將來に於けるその解禁を豫想して爲替に對する投機が行はれ、それが騰落を支配するといふのが普通の狀態である。今日爲替の世界的投機者といへば米國人にその止めをさすが、是等の投機者が將來に於ける爲替相場の恢復を目ざして一度大規模の投機を開始すると、その結果は殆どその國の財政的信用に甚く實際經濟とは無關係に、彼等の欲するまゝに爲替相場を變動さしめ得るといつても過言でなく、ためにその國の財界に至つては、外國投機者の掌中に翻弄され、[illegible]途を眞暗らにする。しかも一旦斯くの如くにして爲替の暴騰に甚大な打撃を蒙つた國は、今度は爲替の暴落による第二の打撃な[illegible]んがために、勢ひ爲替の維持に努力せざるを得なくなるので、こゝにおそくも彼等投機者のためにその利益を擁護するといふ馬鹿氣た結果に陥るのである。

◇

即ち投機者の立場からいへば、その投機が成功するや否やは、一に懸つて或國が戰前の幣制を恢復する意思と能力とを有するや否や、而してなほ爲替相場を暴騰せしむる餘地を存するや否やにある。これを過去の實例に徵しても、英國、丁抹、諾威等の諸國に於て投機が成功し、革命または戰敗によつて戰前の幣制を恢復し得なかつた露國及び獨逸等に於て失敗の記錄を留めてゐる。我國の財界が爲替投機によつて如何なる運命に逢着すべきかは、自らそこに示されてゐるではないか。

◇

英國の例を見よ。英國に於ける金輸出禁止は、一九二五年十二月末を以て滿了することになつてゐたに拘らず、英國はこの法定期限に先立つこと八ヶ月、同年四月末に早くも金本位の復活を斷行した。もとよりこの期間繰上げの理由については各方面から色々な說明が與へられてゐるが、吾人は寧ろ一般に餘り問題にされなかつた爲替投機に基

く原因こそ最も重大視さるべき性質のものだと考へる。何となれば當時爲替相場は强行的な投機のために平價近くまで暴騰し、もしそこで解禁しなければ英國の財界はその反落の打擊に堪え得ないものがあつたからである。つまり英國は米國人を主力とする爲替投機のために、法定期間以前に於て、その思意に拘らず、金の解禁を餘儀なくされたのである。また丁抹、諾威の諸國に於ては、相當長期に亘つて爲替の恢復が計畫され、殊に諾威の財務當局の如きは、向ふ十ヶ年に亘つて平價まで徐々に恢復を圖るべき旨を聲明した程であつたが、この計畫はいづれも傍若無人な米國筋の投機者のために攪亂され、遂に爲替暴落による第二の打擊を恐るゝの餘り、急遽資金の借入信用の設定により、その投機相場を維持せざるべからざる破目に陷つてしまつた。更に當時英、諾諸國の中央銀行が利上を敢行したのも、産業資金の需要が激增した結果ではなくして、主として爲替の急反落に原因する財界打擊の防衞手段に外ならなかつたのだから、結果からいへば、何のことはない、たゞ是等の諸國が米國の資金に高い利息をつけたまでのことであつた。

◇

そこで今日我國が爲替投機を對象として如何なる地位に立つてゐるかを考へて見る。最後まで道連れであつた佛國もいよいよ多大の犧牲を拂つて最近金の解禁を斷行し、今や世界の主要國中我國の圓貨のみが世界の賭博者の金的として殘されてゐるので、その目標が集中されただけこれに稱される機會も程度も著しく增加したわけである。現に我財界は是等の投機業者の魔手にその活動を封ぜられ、全く去勢されたものゝ悲哀を感じてゐる。しかも彼等投機者の態度は恰も猫が鼠に最後の宣告を與へる前の蹂弄にも似て如何にも面憎いが、何分我爲替が彼等の投機に最も必要な條件を完備してゐるのだから、何とも致方のない話である。

◇

何故ならば、誰が見ても我國に於ける金の解禁がたゞ時期の問題であり、早晩完全に戰前の金本位制を恢復するに至るべきは些の疑のないところであるし、しかも爲替相場が騰り切りに上つてしまはぬところに投機者としての多大の興味が繫がれてゐるからである。随つて三土藏相の主張するやうに、たゞ漫然と爲替の自然的恢復を待つてゐては、我財界はこの先きさらに幾十百回投機者の鑑にかけられることか全く想像もつかない。要するに今日財界に解禁卽行の聲が昂まり、それが强硬に支持されてゐるのは、今日までの苦がい經驗から、爲替の動搖による打擊の反覆を恐れる氣分の漸く濃厚になつて來たことを示すもので懲よこゝで、投機の機會を絕滅してしまはねば、我財界は結局何時までも變態のまゝで投機に搾り取られるばかりであることに氣付いた結果であると見てよからう。最近民間に於ける解禁準備が着々進捗しつゝあるのは、つまりこの國民の最後の覺悟を反映するもので、爲政者としては最も留意せねばならぬ所の變化であるのだ。英國

のグレゴリー教授はその著「金への復活」中に、投機業者は少くとも過去五ヶ年の間、喘ぐ各國の產業を尻目にかけて爲替相場を喰ひ物にして來たと述べてゐる。即ち各國の產業は一日も早く彼等の手からその利益を奪還せねばならぬので、少くとも各國は投機業者の本場たる米國から手厚い返禮を受けても好いはずである。

◇

ところが悲しいことには、我國は今日まだその時機に達してをらぬ。金の輸出が解禁されて爲替投機の根源が杜絶されぬ限り、何時その時機に達するかさへも解らない。しかも一方米國の側に於ては、今後ますます海外の投機を刺戟すべき事情が發生しつゝあり、彼れこれ想ひ合すと、我爲替相場の前途眞に憂慮に堪えざるものがある。

◇

普通なれば大統領選擧のある年には一般に米國の財界は活氣の衰へるのが例であるのに、今度は商勢不振どころかますます旺盛の度を高めんとしてをり、しかもこの景氣はなほ當分持續するといふことに財界有力者の意見が一致してゐる。果して然るか、吾人もとよりそれを否定しやうとするものではないが、今日米國の財界に一大矛盾の存してゐることだけは蔽ふべからざる事實であつて、それが今後如何やうに處置され、如何なる方向を取るとしても少くとも現在に於ては吾々はその儘にこれを受取るより外に仕方がない。

◇

米國財界の近情として特筆すべき[illegible]る。同行は今春以來、二月に三分半から四分へ、五月に四分から四分半へ、そして七月には四分半から五分へと三回の利上を矢繼早やに決行してゐるが、そもそも紐育準備銀行に於ける五分の再割利率といふのは一九二一年の下半期米國が空前の不況に沈淪してゐた時代の記錄で、同年末に四分半に引下げられて以來、再び出現しなかつたところの高金利である。然るにその不況時代に於てすら稀に見る高金利が今日の好景氣時代に出現し、しかも今日のところ一寸引下げの機運さへ見出されぬ情勢にあるのだ。それが變態でなくて何であらう。殊にこの利上は準備銀行の十二行中八行だけの出來事であつて、他の四行は西部農業地帶にあり、これ等の地方に於てはその高利に堪えぬ關係上、今日に至るもなほこの利上に追隨して來ないといふ特殊の狀態の下に行はれてゐるのである。

◇

吾人思ふに米國の財界を今日の繁榮に導き來つた原動力はいふまでもなくその低金利にあつた。然るに今や米國はその急激な證券景氣を抑制し、投機熱を驅逐するために、右のやうな變態的金利上をさへ[illegible]行するの已むなきに至つてゐるのである。即ちたとへそれが變態であるとしても、現狀に則してこれを判斷すれば、米國内に於ける投機は今日それがために著しくその範圍を制限され狹められてゐるわけで、彼等の投機熱は勢ひその捌け口を國外に見出さんとする機運を醸成せ

しめつゝある。そこで彼等の投機資金が、解禁するでもなく、せぬでもなく、國際金融界の一角に依然として愚圖ついてゐる日本の金輸出禁止を見逃しさうなはずがない。投機者には恐らく時にとつての好餌であるに相違ない。投機業者の捲土重來、それこそ有り得ることの最も確かなものゝ一つであらう。

我財界が爲替投機のために最近如何に蠹まれつゝあるかは、正金の建値變更が、財界大反動のあつた大正九年に二十七回、大震災後の十二年に二十三回であつたものが、昨年は六十八回、そして本年は十月までにすでに七十六回の多きを數へてゐるといふ事實に徴しても十分推測出來るはず、然るにこの機に臨んでもなほ我大藏大臣はその投機の原因除去の根本問題には觸れやうとせず、金の解禁に對しては全くその態度をボカしてゐる。尤も藏相は十一月十三日の關西銀行大會で金解禁に對する所見を述べるとのことであるが、もしその聲明にして解禁即行そのものでなかつた日には投機に基く今後の爲替動搖は恐らく應接の遑なきまでに一層頻繁に繰返されるに相違なく、その度每に我產業は國を擧げて海外の投機者に御奉公申上げねばならぬことになる。吾人は今日內外の情勢甚だ爲替投機に誂へ向きに出來上つてゐるのを見、我財界のために深憂措く能はざるものがある。今や我財界は確かに爲替投機を中心に一大危機を孕んでゐる。せめてこれ以上投機に引ずられぬ前に、金の解禁を斷行したいものである。瘦せ行く自分の體を見てゐるのは不愉快極まる。(十月三十日稿)

大衆講座

金輸解禁問題と無産階級

高橋龜吉

金の輸出は現に禁止せられ居ります。其禁止を解いたが宜いか悪いかと云ふことが、いま、日本經濟界の重大な問題になつて居りますことは、諸君が既に新聞で御承知の通りでございます。かく、所謂金解禁をしたら宜いか悪いかと云ふことが今日、再び問題になりましたことについてはそれ〳〵色々の理由もある譯でありますが、其現在の金解禁問題に入ります前に、一つ今迄の成來りと、斯く金の輸出を禁止して居ると云ふことは、どう云ふことを經濟的に意味して居、之を解くと云ふことはどう云ふことを意味して居るのであるかと云ふことを先づお話致して、さうして現在の金解禁問題に觸れて見たいと思ひます。

普通の經濟狀態に於きましては、金の輸出を禁じて居ると云ふやうなことは無論ないのでありまして、金の輸出入は自由であるのが、是が資本主義經濟の原則であります。所が歐洲戰爭が勃發しまして、各國共に金の輸出を禁じ、さうして愈々アメリカもあの歐洲戰爭に參加致しまして金の輸出を禁止しました大正六年の九月に、日本も金の輸出を禁止しました。一體、歐米が金の輸出を禁止したと云ふ理由は戰爭が始まつた、さうして色々の戰時軍需品の需要が澤山ある。さう云ふ場合でありますから、軍需以外の國民の消費を極力制限せねばならないのでありますが、若しも金の輸出入を自由にして置いたならば國民が外國から品物を買ふことを制限することは出來ない。又、左樣な結果又は金持が自己の資産を安全にせんがため、外國に金を保管する等々の理由で、金が皆出てしまふと云ふと、國內の幣制の信用は破綻して、非常な恐慌を起して來る。卽ち經濟界が滅茶〳〵になつて來ると云ふ虞があつたので、金の輸出を禁じたのであります。併し大正六年の九月に於ける日本の狀勢は、さう云ふ虞はチョットもなかつた。金が尙日本にも四億何千萬圓からあり、外國にも五六億圓と云ふ金を持つて居る。それから戰爭の最中でありまして、日本は輸出がどん〳〵盛で、外國から金を取ると云ふ狀態にあつたのでありますから……。にも拘らず、其時アメリカの金輸出禁止と同時に、日本も金の輸出を禁止してしまつたと云ふことは、如何なる譯であるかと云ふと

ますと、其當時日本は、――今日もさうですが――、印度から少からぬ棉花を仕入れてゐたのであるが、平常の場合にはその代價を支拂ふに、倫敦に於ける受取手形で以て之を拂つた。然るに、戰爭の結果英國が金の輸出を禁止したので、倫敦を經由して、印度に拂ふと云ふことが出來なくなつたので、アメリカが金の輸出を禁止しない以前に於ては、其金をアメリカから取寄せて印度に拂つて居つた。所が其アメリカが大正六年の九月に、あの歐洲戰爭に參加して、金の輸出を禁止してしまつたので、若し、日本の金の輸出を自由にしておくと、日本の金を出して、印度に送るようになる。さうすると、日本の持つて居る金が皆出てしまつて、財界に大波瀾を起す惧があると、云ふ理由から禁止したわけであります。扨て、一體金の輸出を禁止したと云ふことは如何なることを、經濟的に意味してゐるかと云ひますと、一體今日の資本主義經濟の仕組みに依れば、其國の物價、其國の人が色々の物を外國から買ひ取り得る量を如何にしてウマク調節するか、卽ち、日本では、例へば一億圓の金しきや、外國から買つてそれを消費する力しかない。さう云ふ場合に二億圓も外國から買ふと云ふ風なことがあると、日本が外國に拂ふ金がなくなつてしまつて、非常な破産狀態に陷らなければならぬが、さう云ふ風な調節をどうしてやるか。

我々お互は外國の物が廉いと云へば、其外國の物を買ふ。日本のより外國の方が便宜であれば買ふ。鐵がない。仕方がないから外國から買ふ。斯う云ふ風にして、外國から買ふ力がどれだけ日本にあるかと云ふことは、我々個人には分らない。資本家個人にも分らない。而もそれを調節しなければ、外國から買ひ過して、その代價を支拂ふ力が日本になくなつてしまふ。それをどうして調節して居るかと云ふと、それは資本主義經濟の仕組みに依りますと、金に依つて調節されて居つた。金の輸出入を自由にして居ると云ふことに依つて調節して居つた。例へば外國から一億圓だけ買ふことが出來る場合に、一億圓以上の物を買ふと云ふと、それだけ日本から外國へ金で以て支拂はねばならぬ。其の金は日本銀行に持て居る金を輸出して、而して外國へ拂ふことになる。かく日本銀行の金が出てしまふと、日本の金が少くなるから、日本の金利は上つて來る。而して銀行や何かも貸出を控へ、利子を上げるから、物價が下落して來る。何となれば、例へば今迄利子が五分の場合に、六分儲かれば、五分の利子で借りても、尙利益があるので商賣になるが、此の際利子が七分になれば仕事を止めてしまはなければならない。なる程、利子が上つたと云ふこと丈けでは、お互の國民の日常生活に消費する量と云ふものは減りませぬけれども、併し資本家的な商品生產的な消費と云ふものは非常に減つて來ると云ふことに依つて消費が減る。さうして物價は下落すると、斯う云ふ傾向を取りまして、今迄外國から輸入して居た物は輸入しなくなつて來る。さうして之を調節する、斯う云ふ機能を持つて居るのであります。又日本の物價が餘り廉く、お互の消費節約が餘りひどいと云ふと日本の輸出がだん／＼と增大して、外國から金が日本に入つて來て、

而して日本の事業を刺戟して、物資の需要が増して來る。物價を上げて行く。而して國際的平準を保つ。斯う云ふ調節をやつて居た。即ち資本主義經濟に於ては、國際間の物資の調節と云ふものは、今迄に於ては、金の輸出入を自由にして居ると云ふことに依つて其調節が取れて居たのであります。大正六年九月、日本が金の輸出を禁止したと云ふことは、さう云ふ調節の方法を捨てたことを意味して居る。而してさう云ふ調節を他の力に依頼しなければならなくなる。則ち政治的力に依頼しなければならなくなつた譯である。詰り金の力に依つて調節されて居つた國際間の調節と云ふものが、今度は金の輸出禁止に依つて、改めて政治的に調節せねばならなくなつたと云ふことを意味して居る。

扨さう云ふ風なことが戰時中は臨時的の考へで行はれて居たのでありましたけれども、併しながら今日の此資本家的な仕組み、而して其資本家的な政府の下に於てはさう云ふ調節を政治的に永く續け得る能力はないのであります。政治的に調節をやらうとするには資本家的政府ぢや出來ない。資本家的な經濟原則を遵奉したのでは、政治的に經濟の活動を調節すると云ふことは出來ない。しかし若しも、、、、、、、、に依つて調節しやうとするならば、假に政治的に此經濟界は調節することも出來るのであるけれども、資本家的な政府ではそれは出來ない。そこで、アメリカは先づ戰爭が終ると、直ぐ金の輸出禁止を解いてしまつた。それは大正八年六月のことであります。アメリカに一番先に輸出の禁止を解いた、其一つの理由としては調節を資本主義の本筋に戻すと云ふ、さう云ふ意味が含まつて居た外に、もう一つはイギリスと金融上の覇權を競ふ、倫敦と紐育とが世界の金融中心市場としての位地を競爭すると云ふ意味に於て、イギリスが未だ金解禁をなし得ない時に、アメリカが先づ金の輸出の禁止を解いたと云ふことを含んで居たのであります。

兎に角アメリカは戰爭が終ると、直ぐ金の輸出禁止を解いたのであります。此時に日本も亦經濟的には、金の輸出禁止を解いて元に戻すと云ふ力を持つて居つた。其時は日本は內國には四億何千萬圓と云ふ沢山な金を持ち、外國には十二億何千萬圓の正貨を保有し、その上に、爲替銀行も亦數億の金を外國に持つて居つたのでありまして、金の輸出禁止を解いた所が日本から金が出て行くと云ふ憂は經濟的には無かつたのです。でありますから日本も其時に金の輸出の禁止を解けば宜かつた筈なのであります。所が此時に何故金の輸出を日本は解かなかつたかと言ひますと、其當時には其理由がはつきり我々には分りませぬでしたが、近頃元の日銀總裁であつた井上準之助氏の著はされた本に出りますと、其時の理由は斯う云ふのであります。（井上準之助氏著「戰後に於ける我國の經濟及金融」）「併しながら、此所に斯う云ふ問題があつたのであります。世界の狀態は未だ安定して居らぬ、殊に歐羅巴の戰爭は漸く濟んだけれども未だ安定して居らぬ。就中ヴェルサイユ會議中の途中、[illegible]の事變がどう變つて來るかと云ふこと、若し

世界に事があるならば必ず東洋にある。東洋に必ず事があると考へなくちやならぬ。さう考へて見ると、今申しまする如く、手許に四億圓の正貨があり、外國には十三億圓の金がありますが、此時の狀態から考へて見ると、手許にある金貨は金として十分の役を爲すけれども、外國に置いてある金は用を爲さぬのだ。若し一旦世界に事が起れば海外の市場に置いてある金は、金として當にならぬのである。從て海外に在る金は使つても宜いが、手許に在る正貨と云ふものは使ひたくないと云ふ考、即ち是は私に言はせますると、政治上の考からして此輸出解禁は其時はしない。斯う云ふことの狀態であつたのであります。』

斯う云ふ風に述べてあります。即ち其當時日本が金の輸出を解禁しなかつた理由は、經濟的な理由ではなかつた。どう云ふやうなことがあるかも知れない、戰爭が勃發するかも知れないさう云ふ時は金が手許になくちや困る。斯う云ふ軍事的な理由が政府部内に於て勝利を占めて、それで金の解禁をしないのだと云ふことをはつきり述べて居られるのであります。一體權力者と云ふ者は、國民の富を出來るだけ自分の統制の屆く形に置きたがるものです。例へば、德川封建時代の支配者は、そのために、如何なる行動を執つたかと云へば、出來るだけ國の生產を米に集中さした。封建時代に於ける權力者が國民の富をコントロールするとが出來るのは主として米に限られてゐたからです。然らば今日に於ける權力者が國民の富を直接自由に支配し得る形は何であるかと言ふと、それは金で持つて居ると云ふことである。國民が其金で或は工場を建てる。家を建てる。或は田を耕す。斯う云ふ風に金以外の形の富に之を變へてしまふと云ふと、權力者の支配は最早それ等には仲々屆かない極めて間接になつて來る。それで權力者は國民の生活の爲にそれが宜いことか、惡いことかと云ふことを考へる前に、先づ自分に都合が宜いか惡いかを考へる。而して若しも戰爭があると、金であるならば、直ぐ自由に使へるけれども、それを出して外の品物、外の富と云ふ形に變へられては大變だ。斯う云ふことが常に彼等の頭にあるのであります。而して又彼等は戰爭の場合に――例へば日露戰爭當時――日本に金が少かつたと云ふので、隨分心配し苦心した經驗を持つて居る。さう云ふことが大正八年にアメリカが金解禁をした時に、日本は金の解禁をしなかつた理由であります。

而して爾後大正八九十十一年と、彼等は何をしたか。日本はそれ迄に金解禁をしやうとすれば、幾度か其機會はあつた。現に御承知のやうに、震災前には四十九弗何ぼの所に上つて來たのであります。一體日本の百圓はアメリカ四十九弗八十五仙と云ふのが、所謂爲替相場の平價であります。所が日本からアメリカへ金を送ると云ふと、百圓に付て四十九仙運賃利子保險料がかゝりますから、結局に於て四十九弗三十何仙と云ふ所まで來れば、金解禁したと同じ相場になつて來る。然るに其近くまで來たにも拘らず、當時、日本の政府の人達は今言つたやうな理由から、金解禁をやらなかつた。而して其當時の大臣が誰であつたかと言ひますと、御承知のやうに、多く軍閥から出て居

つた。さう云ふ人達が金解禁をやらずに置いて、而して爲替を自分の支配の下に置く爲にどうしたかと云ふと、日本の政府が外國に持つて居る金、即ち在外正貨を拂下げると云ふことに由つて爲替を支配して居た。是はどうするのかと言へば、所謂、在外正貨の拂下と云ふのは、誰が行つても拂下げると云ふのでなくて、どう云ふ品物を買ひたいから、是だけの金が要るから拂下げて吳れと云ふと、それが政府の同意し得るものであれば宜しいと云ふので拂下げる。いかなければ、さう云ふものに對しては金は拂下げない、斯う云ふのであります。即ち、斯う云ふ形に於て、我々が外國から買ふ物は間接に政府に依つて調節される。コントロールされて來たのであります。

然るに、御承知のやうに大正十二年九月に震災が勃發して、その復舊復興の爲に、澤山の物資を外國から買入れねばならぬと云ふので、實際に何億と云ふ品物をドン／＼買入れて、それを支拂はねばならぬ。斯う云ふことを動機にして、政府は在外正貨の拂下を中止し、ために、爲替は四十九弗以上であつたものが、十三年の始には四十弗に落ちた。而して十三年の秋から暮にかけて、三十八弗と云ふ所まで落ちて來た。一體、此の爲替の暴落と云ふことは、經濟的にどう云ふことを意味して居つたかと云ふと、例へば我々は今迄日給一圓を貰つて居つた。所が、何時の間にかそれが七十何錢に落ちてしまつたことを意味して居る。日本の金高から言へば、貨幣の計算から言へば、如何にも一圓は依然一圓であるけれども實質に七十何錢に落ちてゐるのである。丁度一尺は一尺であるけれども、今迄は鯨尺の一尺の物を買つて居たのが、何時の間にかそれは曲尺の一尺に變つてしまつたと同じである。等しく一尺と云ふことには變りはなかつたけれども、實質上は非常にそれが少くなつたと同じである。

なる程、當時の政府や學者や資本家は、當時、此の爲替の下落をさう云ふ風には說明してゐなかつた。當時、爲替が斯樣に下落するに放任した表面の理由はかうであつた。即ち、外國から澤山品物を買入れたのを、日本の金を以て拂出すことは出來ない。若し日本の金を以て全部拂出すと云ふと、日本の財界は、金に缺乏する結果、紙幣に對する信用が地に墜ちてしまふ。それで、爲替の下落するのに放任した、斯う云ふ風に言つて居ります。併し事實は、爲替の下落すると云ふことはどう云ふことを經濟上意味して居たかと言ひますと、是は斯う云ふ働きを持つて居る。

一體震災があつて、あれだけの物が破壞されてしまつたのであるから、之を復舊するには、先づ資本家は大きな損失を塡す必要がある。それから國民全體としても、あれだけの物が破壞されたのであるから之を復舊する爲には今迄よりは澤山働いて、而も今迄よりは少く消費する、節約する、さうしない限りあの復舊は出來ない筈である。所が爲替の下落と云ふことは、どう云ふことを意味したかと、先にも言つたやうに、今迄我々が一圓貰つて居たと思つて居た日給が、何時の間にかそれが七十何錢かに下落してしまつたことである。[illegible]如何によつてし

まつて、暮しは元の七十何錢しか出來ない。自然我々は今迄よりは節約をせざるを得ない。無理矢理に强制的に全體が節約をさせられると云ふことになる。

　他方、爲替の暴落と云ふことは前にも述べたやうに、物價の騰貴を意味してゐる。いま迄一圓のものが一圓二十錢も一圓三十錢もするわけだ。それだけ資本家は儲かるわけです。儲かれば、資本家は、時間外作業だ、夜業だ何だと言つて皆に働かす、之れが資本主義の仕組であります。斯う云ふ譯で、爲替の下落は、一方にはドン〳〵働かす作用を持つて居り、一方には民衆全體に對して非常な節約を强制する働きも持つて居る。而してさうすることに依つて、餘され、蓄積され、儉約された物は何處に集まつて來るかと云ふと、資本家の利益増大すると云ふ形に於て資本家の手に入つて來て、その損失が癒される。斯う云ふ働きを持つて居つた。震災の後にあれだけ爲替が下落しなかつたならば、資本家は今少し多く倒產したに違ひない。而して、資本主義經濟には、さう云ふ場合に節約を强制し得ると云ふ計畫的な强制方法は他にない爲に節約は出來ずに、可成り大きな全般の民衆の方面には依然として消費が行はれ、震災の復舊は可なり阻まれたであつたらう。

　しかし乍ら、爲替の下落に由る節約作用は、實際上最も節約の餘地ある方面、卽ち今迄豐な生活をして居る有產階級の方面に對する節約は殆ど出來ない。何故なれば、資本家階級は儲かるので、却つて大きな消費をするやうになつたと云ふ傾向は至る所で發見されたのである。さう云ふ譯で、爲替の下落は一體であるならば、普通の常識から言へば、最も節約の餘地のある有產階級の節約を强ひる代りに、始終働いて居る無產階級に節約を强制して、而して彼等を今迄よりはウンと働かして、而して其餘剩を資本家の懷に入れる、而して有產階級は節約をしないで濟ますと云ふ、さう云ふ作用を持つて居る。此爲に、震災に由る資本家階級の打擊は非常に緩和されたのであります。現に爲替の下落した大正十三年から大正十四年になると、景氣が段々よくなつて來た。而して十五年の秋には、日本の經濟界は少からぬ景氣に見舞はれたのである。之れは卽ち以上に述べたやうな結果に外ならぬのであります。

　斯樣な作用のために、震災後爲替は暴落させられた。ところが其後になつて、金解禁問題が起きて來た。又今日も金解禁問題は盛である。さう云ふ風な利益があるにも拘らず、何故に資本家階級の多くの人々は金の輸出を解かねばならぬと主張するか。さう云ふ作用の利益を受けて居たものを、皆吐き出さなければならぬやうな金の輸出解禁と云ふやうなことを何故必要と考へるか。それは斯う云ふ譯である。卽ち、爲替相場が下つたら、下つたなりでをれば、資本家階級は以上の如き利益があるのであるが、事實は、常に上つたり下つたりして動搖常がない。それは資本家階級としては非常に厄介なことである。例へば爲替が上ると、輸入業者は或點まで一度は儲かるやうである。例へば今一萬圓で誰かに約束して、而してそれを外國へ直ぐ注文して、

而して騰貴すれば、輸入業者は儲かる。一割爲替が騰貴すれば一割儲かると云ふことになる。併し乍ら手持品はさうは行かぬ。例へば輸入業者は今迄四十弗の時に仕入れた奴が四十五弗になると、四十弗の時にはそれは百圓の原價だが四十五弗になると、それは九十圓の原價にしか付かないと云ふので、持つて居る品物が損すると云ふ譯で、爲替が上つても損をする。又、輸出品は爲替が騰貴すると物價が下落するので損をする。更に爲替が下つた場合には、先約した輸入業者は損をする。現に例へば大正十三年から十四年にかけての下落の時には、高田商會が倒れてしまつた。其外其爲に非常に損害を受けた大きな資本家階級は澤山あつたが、兎に角倒れるまでの痛手を受けたのは高田商會である。それから大正十五年の時に爲替が上つて來た結果として、日本の生糸業者は非常に打撃を被つた。而して生糸に貸出して居た銀行の金が手に入らないので、銀行が困る。而してそれは昭和二年の金融大恐慌の動因を作つた。詰り大正十五年に爲替が急に上つた爲に、日本の輸出業者はウンと損した。其損したのが銀行に又皆重つて、銀行が二進も三進もいけなくなつたと云ふのが、昭和二年にあの金融恐慌をもたらした動機を造つた。さう云ふ譯で爲替が上つたり下つたりすることは、直接資本家に對しては、非常な危險を包藏して居ることでやりにくい。

資本家階級が、金解禁を要望する第二の理由は、いま日本の貨幣に依りますと、日本は金を解禁して、爲替相場を四十九弗八十五仙、所謂平價と申しますが、普通の所へ返さなければならぬ、返すと云ふ氣構へでありますから、資本家は何時それがさう云ふ風になるかと云ふことが不安でならない。來年かどうか分らぬ。今日は四十五弗か何ぼして居りますか、是が解禁されて、四十九弗八十八仙になりますと、其間に四弗何仙、約五弗の差がある。百圓に付て十圓の差があるが、今事業を興さうとしても、外國から色々の物を買入れねばならぬ。それが若し來年の春に金解禁があるとすれば、今買入れると、百圓に付十圓の損になるが、其損が何時來るかも知れないと云ふ風に考へて居る。而して又金解禁をすれば、日本の物價は下落する。下落すれば勞働賃金も下らねばならぬ。今事業を興して高い賃銀で勞働者を雇つて又下げるのは厄介だ、斯う云ふ風に皆考へて居る。大きな事業をしやうとする資本家はさう考へざるを得ない。尤も今日に於ても大きな事業が色々起きて居る。併し乍ら其事業は爲替と云ふものに無關係のものばかり、爲替が上らうが下らうが構はない事業が主である。例へば電氣鐵道、ビルデング等々の如きである。斯う云ふ者は爲替に關係なしに仕事をやることが出來るが、外國へ品物を出さなければならぬ或は外國の品物と競爭しなければならぬと云ふものは、愈々金解禁をされて、日本の物價は何處へ落着くか、勞働賃銀が何處へ落着くか、その見當がついて、果して引合ふか引合はぬか、さう云ふ見きわめが付かねば手が出せない、手を出すことを控へて居る。現に三菱や三井でも、今日[illegible]

さうである。さう云ふ理由が復金解禁問題を此際解決さしてしまはふ。斯う云ふ要求を呼んで居る。

最後に、最近に於て金解禁問題が又起つて來た有力な理由がある。一體最近の金解禁問題は寧ろ銀行業者が中心になつて居る。一體、斯銀行業者を中心にして、金解禁問題が起つた理由は何處にあるかと云ふと、御承知のやうに昭和二年の金融恐慌以來、利子が非常に廉く、今迄は一年に八分九分から一割幾らと云ふ利子が取れたのに、今日は銀行は何億圓と云ふ金を遊ばして居る上に、金を貸すには非常に廉い利子で貸さねばならぬ。それでは銀行業者は困る。それから金を持つて居る資本家も、かう利子が廉ければ今迄のやうな收入にアリツケない。だから金の輸出を解いてしまつて、日本に餘つて居る金を外國に出してしまへば、金利が高くなつて儲かる。斯う考へて居る。事實銀行業者が金解禁を要求して居る理由には、今日金融が非常に緩漫で金は遊んで居るか、是は損だ、何とか有利に利用する方法を作らなければならぬ。金が自由に流れて行くと云ふ狀態にしなければならぬと云ふ理由で、金解禁を彼等は叫ぶに至つて居る。

然らば、金解禁を此際やつたらどうなるであらう。先づ、金解禁をやると、どう云ふ打擊があるか、どう云ふ結果が起るかと言ひますと今言つたやうに金解禁をやると、日本の爲替が約五十弗に戻りますから、百圓について約十圓違ふ。百圓に付て是だけ物價が下落する。金解禁をやると物價が下落して來るのであります。此物價が下落すると云ふことは、資本主義社會に於ては最も是を嫌つて居る。第一に物價が下落すれば、資本家は儲からない。それで不景氣になる。彼等は仕事を止めてしまふ。工場を閉す。或は事業を縮少する。而して勞働賃銀を下げる。或は馘首する。斯う云ふやうなことで、其損は結局之を無產階級の負擔に轉嫁してしまふ。

しかし、それ迄に於て、物價は下落したので、資本家の持つて居る商品はそれだけ下落するので、非常に損をする。現に大正十五年に爲替が非常に上つた時に、非常な損害を受けたやうに、さう云ふ損害を受ける。今日の爲替の有樣であれば、外國と何とか競爭が出來ると云ふ所にまで物價が落ち付くには、百圓の所で約十圓廉くなるから、今度はそれと競爭が出來る狀態を、新に日本の經濟は作らねばならぬ。其力があるかないか。それから其處に行くまでに少からぬ不景氣があつて、而してそれは急には無くならないで、それをやる爲には一年二年の時期を要する。斯う云ふ打擊があるのであります。

なる程、我々無產階級から言へば、今迄例へば一日一圓と云ふ約束で締結した賃銀が何時の間にか、其値段は七八十錢に下落してしまつて居る。現在はさうなつて居る。現在謂ふ所の金解禁は、之を元に歸してしまふと云ふのでありますから、我々無產階級の立場からは、金解禁は表面上は大いに宜いわけであります。併し乍ら金解禁をやつて不景氣になると、其爲に經濟界に非常な摩擦が起きる。非常な不景氣が來て、少からぬ損害を資本家が受ける。それが又無產階級に轉嫁さ

れて來る。結局に於て、或は失業者となり、或は賃銀の引下げとなるのでありますから、一面から言へば金解禁は我々の日給を元に歸すと云ふ運動でありますけれども、併し實質上はそれ以上の損失の負擔を轉嫁されて來る。而してそれを今日の有樣では、無産階級は、恐らく防ぎ得ない。此上に不景氣が續いたら之を防ぐことは出來ない。金解禁問題が如何に不景氣をもたらすか。今日のやうに爲替が下落した場合に之を引上げたら如何に不景氣をもたらすかと言ふならば、それは明治十四年以降十八年に至る大不景氣を顧るのが一番よいと思ひます。則ち、不換紙幣の整理と云ふ名で明治十四年に丁度今日の金解禁政策と同じやうなことをやつたのでありますが、其時にそれをやつたのは松方正義公でありましたが、其時に松方公は、さう云ふことをやれば日本の經濟は非常に不景氣になる。さうすれば四方八方から非難の聲が起る。其非難の聲に恐れて中途で止めるならば、始からやらない方が宜い。愈々最後までやると云ふ決心があるかないかと云ふことを確める爲に、態々御前會議まで奏請して、而して天皇陛下からさう云ふことは最後迄やるからやれと云ふ御言葉を頂戴して、漸く之を決行したと云ふやうなことを松方氏は自分で書いて居る。それ程大きな苦痛を民衆に與へることになるのであります。これも、日本經濟の資力が尙ほ非常に強い時であるならば百步をゆづつて尙ほ宜いとしましても、大正九年の反動と、十二年の震災と、あの昭和二年の金融恐慌とで日本の經濟界は非常に今義的窮乏に陷つて居る。而も其の上に、いま金解禁に由る大不景氣の打擊を加へて果して日本の經濟界は之に堪え得るか堪え得ないかと、云ふと斷じて堪え得ないと言はざるを得ません。

斯樣なわけでありますから、一方に已述の如き金解禁の要求があり而して政治論としても、資本家階級の政治家は何れも金解禁はせなければいけない。斯う云ふ風に言つて居り乍ら事實は、之を斷行し得ないのであります。然らば、一體、金解禁問題は之をどう始末すればよいのだ。今日のまゝに放つて置いても已述の樣な弊害があり、金解禁を斷行せば右に述べたやうな苦痛がある。どちらに行つても困らなければならぬ。どうしたら宜いのだ。外に方法がないのかと云ふと、無いのではありません。それは今日の爲替の相場で金解禁をやれば宜い。併しそのわけを詳はしくお話すると、少かならず專門的になる上に、時間もありませぬから、唯今日の爲替相場で金解禁をやれば宜い。さうすれば金解禁に依つては打擊を受けることは少い。その上に、金輸出禁止のやうな弊害もなくなる。斯う云ふ方法がある。而もそれをやらないと云ふことを御話しするに止めます。

にも拘らず、何故之をやらないかと云ふと、これをやることには、今日の資本主義社會の基礎を成して居る、根本を成して居る所の契約の神聖を破ると考へられるからである。則ち、今日本の貨幣は一匁五圓と云ふことを法律が定めて居る。斯く約束してあることを、今度は金一匁を六圓にすると云ふ風に、[illegible]の改革をやると云ふ

ことは契約の神聖を破ることになる。さう云ふことでは資本主義經濟は立つて行かない。さう云ふ風に動揺したのでは困る。斯う云ふのがその理由であります。併し、では日本は今迄さう云ふ契約を破つたことはないかと云ふと、無いことはない、あるのです。例へば明治の初には、日本の五圓は金二匁（今日は金一匁が五圓です）でありました。それでありますから今の一圓と云ふものは明治初の一圓の半分しかない。明治初の一圓と云ふのは今の二圓の値打ちがあつた。それが何時の間にか、日本が銀貨本位の國になつて、銀貨の下落で段々爲替が下落し、遂に明治三十年に日本を金貨本位にする時には、丁度金一匁が五圓と云ふ所にまで下落してゐたのです。今までの法律では金二匁が五圓であつたのを今度は一匁を五圓にした。詰り半分にしてしまつた。さう云ふ約束を破つたことを現にやつて居る。でありますから、今日、アメリカの約五十弗が日本の百圓と云ふ風に決つて居るのを、アメリカの金の四十五弗の金の量と同じ量を日本の百圓にする（それが今日の爲替相場）と云ふことにすれば、問題は解決するのであります。しかしそれは法律で約束したことを破ると云ふことになるといふ理由でそれをやらないのであります。併し乍ら前にも申します通り、日本の政府は僅か五十年前に之を現にやつてゐるのです。外國でも現在獨佛伊その他が之をやつてゐるのです。さうすることが民衆の利益であれば破つても差支へない筈です。それが進歩の原則です。然るに今日の資本家政府はそれをやり得ないのです。

而も今日の位に措いたのではどうも仕方がない。と云つて、爲替相場を平價に戻しての金解禁は打撃が恐くて之を斷行することが出來ない。今日日本の資本家政府のやつて居ることは、丁度幕閣がアメリカのペルリが來朝した時執つた態度によく似て居る。開港するより仕方がないと言ひ乍ら、而も攘夷論に正面から反對する事が出來ずに、之に引きづられて、開港することが出來ない。と云つても、然らば攘夷論を徹底的にやるのかと云ふと之もやり得ない。彼等は心では開港しなければならぬと言ひ乍ら、攘夷論を否定する勇斷も自信もなくて精神的に困つて居る。今日の資本家政府が金解禁問題に對してやつてることは之によく似て居るのであります。金解禁は日本は出來るだけ早くやる積りだと言ひ乍ら、之を決行する自信なくて、段々延して居ると云ふ狀態である。

以上が金解禁問題に絡まる全體の經緯、而してその意味の概略でありますが、然らば今日金解禁問題に付て、日本はいま金解禁（爲替を平價に戻してのそれ、以下同じ）斷行し得る位地にあるか。否か。我々はどう云ふ風に之について判斷したら宜いかといふと、假りに政府が、今言つたやうな經濟界に與へる少からぬ打撃を覺悟して金解禁をやらうとしてもやり得られるか否かと云ふと、是は經濟上から見ますと、殆ど金解禁をやり得る餘地がないと云ふのが本統ではないかと思ひます。と申すのはそれは昭和二年の金融恐慌の後に、御承知のやうに二億圓の臺灣銀行の救濟、五億の日銀の特別融通金、一億二百萬圓

の震災手形善後處理法案等を基礎にして、約十億圓の金を日本銀行から貸出して居る。其損害に對して、國民が其負擔を背負はされて居ることは御承知の通りであります。此結果として日本は昭和二年の去年から約十億圓の購買力が突如として殖えて來たのです。それで此十億圓の金が日本銀行から貸出された結果として、どう云ふことを起したかと云ふと、それ迄至つて金融が逼迫で、利子が高かつた。何か仕事をしやうとしても金がなかつた。所が、日本銀行から十億圓の紙幣を出した――單に紙幣を出した、、、、、、、、、紙幣を出した――結果として、金利は非常に下つて來た。それから金が過剩だと云ふが如き外觀を呈して來た。其金が餘つて居るかに見へるのは、實は紙幣が餘つて居るのである、――、でありますから十億圓でも二十億圓でも出すことが出來る。、、の金が餘つて居る。しかし、外國に支拂ひ得る金は少しも殖えて居らぬから、外國から物を買ふと云ふと、日本は直に之を支拂ふに困難して來る。にも拘らず、紙幣十億圓の貸出の結果として國内には色々な事業が興きて居る。電車であるとか何とか云ふ事業が起きて來た。かうして購買力は少からず殖えて來て、金利が下つた。有價證券も上つて來た。公債であるとか、社債であるとか云ふ物が上つて來た。

一體今日の資本主義社會は何等の統制のない無秩序の社會であると言はれて居りますけれども、今日の資本主義社會をさう云ふ無秩序に置いて居たのでは直ぐと恐慌や何かを引き起すので、是を統制する爲として各國共に中央銀行がその責任をとつてゐます。中央銀行が資本主義社會の無秩序を或點まで統制してゐます。それは通貨を統制することに由つて間接に行はれてゐます。日本銀行亦、我國の通貨を統制することに依つて、その資本主義社會を或點まで統制して居たが、此十億圓を貸出した結果として、日本銀行の統制力と云ふものが全部なくなつてしまつたのです。一體、日本銀行に何故通貨の統制力があるかと云ふと、日本銀行は金を貸すのであるが、貸すべき時でないと思ふ時には高い利子にし、貸したら宜いと思ふときは利子を低くする。斯う云ふ風にして通貨を統制して居るのであります。所が、十億圓の金を貸してしまつた。而も其利子は一年三分と云ふ廉い利率で且つ年期も長いのです。私でも玆に一億圓の金でも構はない、年三分の利子で貸さうと言ふと直ぐ借りる。此の三分利子の金を五分に廻し一年に二百萬圓儲けることは世話はない。それこそ寢てゐて出來る。さう云ふ廉い金で日本銀行は金を貸して居るから、銀行は返しやしない。普通であるならば、日本銀行は利子を上げたり下げたりするから、貸して居つても利子を上げてしまふ。銀行に金を借りて居ても、日本銀行の金利が高くなれば、餘つて居る金を返してしまふと云ふ風にして、日本銀行は貸して居る金を何時でも返さすと云ふ力を持つてゐる。が今度はさうは行かない。金利に廉い上に而も例へば十年期限で年賦だと云ふのでありますから返しやしない。其上に今度の救濟に非常に、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、。第一に其銀行を潰してまでも日本銀行は貸出を取入れることが出來るかと云ふと、それは取れない。又震災手形に於ても正直に稼いで日本銀行に返した奴は損をした。色々運動してズルク返さずにゐた奴は何千萬圓と云ふ金を、、、、、、、、、、、で棒引きにしてもらつたと云ふ、惡い先例がある。之を見せつけられてゐる盲者共が、ハイ〳〵と言つて返す筈がない。決して返す筈がない。返らぬ金を十億圓も出して居るから、利子を上げたいと云つても三分と云ふ利子を上げることは出來ない。日本銀行は之を統制する力が全くないのです。扨て、一體、金解禁を出來るだけ打擊の少い方法でやらうとするには、どうする外仕方がないかと言へば、一度に爲替を上げずに、漸次に之を上げて行くと云ふ方法しかない。例へば同じ一割爲替が上るにしても、五弗爲替が上るにしても、之を例へば三ヶ月の中に上れば非常に急激な上り方でありますけれども、一年半に上れば非常に穩かに上るのでありますから是で非常に打擊が少くなる。然らば、穩かに爲替を漸次に回復して行かうと云ふ方法はどう云ふ方策があるかと云ふと、外國から來る偶然的出來事を姑く外にすれば、日本の通貨を縮少する。金利を高くすると云ふ方法以外に方法はない。放つて置けば、今日の爲替相場と云ふものは今の儘で續くものでありますから、どうしても通貨を縮少する必要がある。金利は上げねばならぬ。さう云ふ政策を採る以外に解禁に至る準備をやる方法はない。さう云ふ力は、しかし、已述のやうに日本銀行からなくなつてしまつてゐる。これでは準備をする方法がないわけであります。斯う云ふ場合に於て、政府は來年の貿易轉換期（日本では貿易が六七月頃から輸出が多くなる、其輸出期に向つた頃に、）詰り六七月頃に至つて、金の輸出を解禁するであらうと云ふ樣なことが云はれ居るが、若し果してそれが事實だとなると、爲替は投機的に急激に上つて來る。是は詰り爲替を政治的に上げて行くことになる。經濟的に上げて行かうとすれば、どうしても金利を引上げて漸次にやらなければならぬが、是は今日の日本銀行には其力がない。若しそれを放つて置いて、政治的の力で金解禁を講じて行つたと云ふのであるならば、さうすると云ふと急激に爲替を回復させることである。即ち急激に物價を下落さして行くので、日本の經濟に對する打擊は非常に大きくて、大正十五年の爲替暴騰が、昭和二年の金融恐慌の動因を造つた如く、さうすれば可成り倒れる銀行が現れて來るかも知れない。今日の銀行は約三十億圓の有價證券を持つて居る。去年の金融恐慌以來、資金が餘つたと云ふので、銀行はそれを公債であるとか社債であるとか云ふのに皆投じて居るが、それが約十何億殖えて居る。約倍になつて居る。今日三十億圓になつて居ります。若し是が一割下落しても三億圓の金を銀行が損をしなければならぬ。若し一割五分であれば四億五千萬圓と云ふ損を銀行が負はなければならぬ。斯う云ふ損失は銀行が有價證券を持つてゐることに由つて、さう云ふ損失を受ける上に、又得意先が損すれば、それが又銀行の損に入つて來ると云ふことになるから、相重つて銀行

に非常な打撃を受ける。斯う云ふ風に私は考へて居るのであります。

で私の持論としては今日の爲替相場で解禁する。日本の貨幣法を改正して民衆に打撃を與へないと云ふ方法に於てやるべきものである。日本全體に打撃を與へどう云ふ方法が最も民衆に打撃を與へないか。それが最善の方法であるかないかの標準である。他の色々の理由と云ふものは理由になつて居らないものであると云ふ風に考へて居るが、併し今日の處資本家政府にはそれをやる勇氣はない。尤も、今後斯う云ふ風な状態を二三年もやつていよ〳〵困つたと云ふことであれば、或はやるかも知らない。しかし若しも來年の貿易轉換期六七月頃に平價で金解禁をやるやうなことがあれば、經濟界は急激な變化に襲はれ、財界は一大打撃を蒙り、世の中は此上、更に非常な不景氣に苦しめられるであらう。而して、利益を受くるものは、債權者や貨幣資本家であらう。（終）

無智識階級

――凡愚列傳のうち――

長谷川如是閑

法學部長の大里教授が決して悪い人間でないことは、彼れが十何年か前に學校を出て間もなく、始めて教壇に立つた當時、いつも講義を終て教室を出やうとしながら、學生達の一時にざわつき出す騒音を、自分の講義を認識してゐる聲であるかの如く感じて、上氣したやうな上わの空で控室へ戻つた氣持を、彼れの頭と講義とがもういゝ加減灰色になつてしまつた今日も、依然として失はずにゐることによつても明かである。

で、ある日彼れは、その年をとつた處女の戀のやうな純な陶醉を、ふくらんだ折鞄と一緒に大事に抱へて教室から控室へ戻つて來ると、一寸學長の部室に來るやうにといふ傳言のあつたことを同僚からきいた。彼れは、まだ彼れの社會政策の講義から蒸發した湯氣が彼れの顔と頭腦とをジメ〳〵させてゐることを感じながら、學長の室に入つて行つた。

いつもなら彼れは、特に學長の室に呼ばれる時は、その用件が何であるかを考へる所だが、今日はそれを全く忘れてしまつた程、講義の快感が、なほ彼れから消え失せなかつた。のみならず、一歩を進めて學長の用件は、彼れの講義の出來榮に關することではないかとさへ考へた。學長は時々教授の講義を、直接に又は間接に盗み聽きをするといふのは、一般教授間の噂であつた。無論、その時はそれを怖れる意味で傳へられてゐるのだが、今の彼れは、それを怖れる理由を少しも持たぬから、同じことを裏腹材料として、學長の室に入つて行くのであつた。それは彼れは罪惡から超越した人物であつたからだ。

それにも拘らず、彼れが入つて行つた時の學長は、いつものそれとは違つてゐた。

元來、學長といふのは、誠に何のこだわりもない、全くの好々爺で、胴は四斗樽の如く、頭は擂鉢の如く、胴足に二つのビール樽を附

張つた如く、兩手は一升樽を二つ宛ブラ下げてゐるが如し、といふので學生から『ツー・モアー』といふ綽名をつけられてゐる、醬油樽其物の如き老人である。ツー・モアーとは六孫王——六孫王——に二つ多いといふ意味で、學生等は學長の『能尻』などゝいふ變手古な名を呼ばずに、皆、ツー・モアーといふ變手古でない名を呼んでゐるのである。

樽から成立した學長の醬油樽の部分即ち彼れの顔も、さういへば、山形や菱形をかいた醬油の商標のどれかに似てゐないこともない。殊に兩方へ入の字に垂れ下つた眉毛の兩端の、長い濃い毛が三角形を爲してゐる具合などは、醬油の商標以外の何物をも聯想せしめるものではない。從つて學長の顔は、決して人に恐怖や威嚴や輕蔑やを感じさせるものではなく、學生のいふ通り、單に醬油を廣告してゐるに過ぎないのだが、大里教授の入つて行つた時の學長の顔は、少しも醬油を廣告してはゐなかつた。もしそれが醬油を廣告してゐたとすれば、甚だ苦い醬油を廣告してゐるかの如くであつた。

のみならず、學長は、大里部長の入つて來たのに氣がつくと、急にその四つの一升樽のうちの右側の二つを、彼れのデスクの上に鈎形にオッ立てた——といふのが一番適した形で隆起させ、右側の二つの一升樽を彼れの肱と膝の間にくの字形に突つ張つた。さうして二つのビール樽は、[illegible]したやうに、[illegible]の西と東とに轉ろがされてゐた。[illegible]れも濃多[illegible]れてゐる恰好であつた。平生、彼れの多數の樽は、[illegible]重ねられたやうに、彼方此方に傾いてゐるのであつて、それらの樽がだらしなく轉ろがつて行くのが、即ち彼れの歩行であつた。その時は左右の四つの一升樽は酩酊つた花見客の手拭によつてブラ下げられたそれの如くに彼れの兩脇にブラン〳〵してゐるのだが、今日は、その一升樽が、魂の入つたやうにピンとしてゐる。

それに應じて、彼れの醬油樽のトレード・マークも、ある場合にはこんな風にも見えるぞ、といつた工合に、同じ形象が全く違つた感じを與へてゐた。さうして、小使に對しても、必ずして見せる、いつもの謙遜なお世辭笑ひは、拭いて取られたやうに、學長の醬油樽から綺麗に消えてゐた。

大里教授は、でもそれらの變化を見出すのに暇がかゝつた。何となれば、彼れは、學長に『變化』なんてことの起り得ることを、今まで少しも考へたことがなかつたからである。學長は、『變化』なんてことと全く没交渉の人間であつたゝめに、今日の地位にまで上つた人であることは誰れでも知つてゐる。彼れの『能尻』といふ變な綽名は、此の大學内でこそ誰れも口にするものはないが——教授や職員は、彼れを學長と呼び、學生はツー・モアーと呼ぶ——世間では相當な實業家として通つてゐるのである。勿論その變な名は、所謂何々系に屬したもので、[illegible]して其の名[illegible]、これを[illegible][illegible]に

無智識階級

―凡愚列傳のうち―

長谷川如是閑

法學部長の大里教授が決して惡い人間でないことは、彼れが十何年か前に學校を出て間もなく、始めて教壇に立つた當時、いつも講義を終て教室を出やうとしながら、學生達の一時にざわつき出す騒音を、自分の講義を禮讃してゐる聲であるかの如く感じて、上氣したやうな上わの空で控室へ戻つた氣持を、彼れの頭と講義とがもういゝ加減灰色になつてしまつた今日も、依然として失はずにゐることによつても明かである。

で、ある日彼れは、その年をとつた處女の戀のやうな純な陶醉を、ふくらんだ折鞄と一緒に大事に抱へて教室から控室へ戻つて來ると、一寸學長の部室に來るやうにといふ傳言のあつたことを同僚からきいた。彼れは、まだ彼れの社會政策の講義から蒸發した湯氣が彼れの顱頂と兩腋とをジメ〳〵させてゐることを感じながら、學長の室に入つて行つた。

いつもなら彼れは、特に學長の室に呼ばれる時は、その用件が何であるかを考へる所だが、今日はそれを全く忘れてしまつた程、講義の快感が、なほ彼れから消え失せなかつた。のみならず、一歩を進めて學長の用件は、彼れの講義の出來榮に關することではないかとさへ考へた。學長は時々教授の講義を、直接に又は間接に盜み聽きをするといふのは、一般教授間の噂であつた。無論、その噂はそれを怖れる意味で傳へられてゐるのだが、今の彼れは、それを怖れる理由を少しも持たぬから、同じことを樂觀材料として、學長の室に入つて行くのであつた。それは彼れは罪惡から超越した人物であつたからだ。

それにも拘らず、彼れが入つて行つた時の學長は、いつものそれとは違つてゐた。

元來、學長といふのは、誠に何のこだわりもない、全くの好々爺で、胴は四斗樽の如く、頭は[illegible]の如く、兩足は二つのビール樽を踏ん

貼り出された『瓦斯使用拒絶同盟會』といふ會の宣言書の下書きであつた。村の連中が、瓦斯會社と料金問題や、瓦斯の壓力の不足や、その他拒絶税のやうな減法高い工事料の問題やで會社と爭つて、つひに拒絶同盟なるものを作るに至つた際に、大里氏がその宣言書の起草を頼まれて書いたものであつた。それは同君が、社會政策の專門家であり、平生から公共の事業について、侃々諤々の意見を、村の人の間に皷吹してゐるからであつた。無論、同君は自分の屬する學校の性質や此頃の世間の形勢やに鑑みて、決して、意見らしい意見を公に發表することはしないが、それらの物足りなさも加つて、朋友や學生や村の人達には、可なり痛烈な口吻で氣焰をあげるのであつた。その手前からも、彼れの村に起つた瓦斯問題では、知らぬ顏をしてゐる譯には行かなかつたし、又自分の經濟から云つて默つてゐられない理由もあつたし、旁々始めから村々の相談にも與つてゐた。さうして彼れの意見は中々有力に行はれ、拒絶同盟の成立にまでなつて見ると、その宣言書の起草を頼まれて、あとへ引く譯には行かなかつた。署名をする譯でもなく、新聞雜誌に出る譯でもなく、高々村々の掲示板に同盟會の名で貼り出される位のものだから、平生注意深い彼れも、多少氣をゆるして、それを起草したのが、半年も經つてから、こんな所へ持ち出されやうとは思ひもつかなかつた。

大里君は、その紙片を見せつけられても、それが問題となると否認へないので、恥辱感をもつて、それが自分の書いたものであることを否認して、再びその紙片をデスクの上に置いたのである。

『やつぱり君だつたのですねへ。』

學長は、困つたやうな顏をして、その紙片を見つめてゐる。大里君は尋ねて見た。

『何かそれが問題になりましたか？』

『君はこの間の維持員會の選擧の結果を知つてゐるでせう？』

學長はつけもなくそんなことをいひました。

『知つてゐます。』

『それなら君、これが聊か困つたことになるのはわかるでせう？』

大里教授は漸く氣がついた。この大學は元來、熊尻學長が屬する系統の資本家一派の資力を背景として成立してゐるものであつた。大里君はそれが大學の權威といふやうなものを少しでも増減するものとは考へなかつた。日本の大學で、さういふ背景を持たないものが何處にある。國家の大學でも、それが如何なる勢力を背景とするかは、その各大學に於ける大講堂につけられた名稱によつても明かである。況んや私立の大學は、元來、ある社會的勢力の必要を感じて出來たものでないものが何處にある。最高の教育の必要を感ずるものは、その當時の社會に於て一定の、、、、、、、、、、、、。さういふ勢力をもつてゐるものが大學を作らないで、何がそれを作るのだ。日本ばかりでない。世界の大學は皆さうだ。日本ではその勢力がまだしみつたれてゐるから、日本の大學はしみつたれてゐるのだ。[illegible]

相當する名であるが、それでもその名を私立大學にもつて來れば、學長の地位に相當するのであるから、以て實業界と大學界――そんな『界』があるなら――との釣り合ひを知るに足るのである。

とにかく熊尻氏は、その實業界に於ける中等の地位によつて學界に於ける最高の地位をかち得たものだが、その聯絡は、當のA大學と、實業界のある系統との聯絡によるもので、決して熊尻氏自身の學界に於ける關係からではない。熊尻氏は、その昔小學校の教員を、それも代用教員を鄕里の山村で勤めた事のあつた外、學界とは何の聯絡もあつた人ではない。學界とのみならず、學問そのものとも何の交渉をもつた人でもない。熊尻氏の學問は、氏が學校で口癖のやうにいふ『實學』なるもので、大學で教へるやうな學問――恐らく氏はそれを『虚學』と呼ぶつもりだらうが、まだその呼び方は發表されてゐない――ではない。尤もA大學のモットーの第一條として『實學主義』といふことが揭げられ『本學は、社會實地の學』を何うとかするといふ文句もあるので、學長の學問は、彼れ自身の大學の學問のやうな學問かとも思はれるが、全くさうではなく、決してどこの大學でも教へられない學問で、然し、教授などが、幾分實際に行つてゐるには相違ない學問である。だからそれは大學教授にとつてさへも必要な學問で、たゞ大きな聲で教へられないことを遺憾とする學問である。

話が戻つて、『變化』の起らない事、といふのも、この實學の教へることの一つで、それは學術語即ちラテン語では [illegible] といふことは熊尻氏自身は知らないにしても、教授諸君はよ[illegible]大里部長も、熊尻氏の樽の積み方やトレード・マークに變化が起らうとは思ひもつかぬから、學長室に入つて、いつもするやうに、學長のデスクの傍に斜めに置かれてある椅子に腰をかけても、まだ變化には氣がつかなかつたのである。大里部長が漸くそれに氣づいたのは、學長はいつも相手がその椅子に腰をかけると直ぐと何か話し出すのに、今日は一向何もいひ出さないためであつた。

大里君は多少變に思つて、更めて學長を見直すと、成る程その四つの一升樽の位置も變である。醤油樽のトレード・マークも變である。けれども、まだ大里部長は『學長に變化が起つた。たゞ事ではない』といふ所まで考へはしなかつた。

『何か御用で？』

で彼れは何の氣なしにさういふと、學長は、大里君の鼻の先きに置かれてゐる、皺だらけの紙片を指の先きで大里君の方へ押しやつて、

『これは君が書いたのではないですか？』

それは學校の名の入つた原稿紙に、何か鉛筆で走り書きをしてゐるのであつた。大里君はそれを手にとつて見たが、確かに自分の筆蹟であつた。が、何時そんなものを何處で書いたか一寸思ひ出せなかつた。で消えかゝつた文句を讀んで見て始めて思ひ出した。

それは半年も前に、大里君の住んでゐる郊外の村の住民が、近隣の村々と共同で瓦斯會社をボイコットするといふ騒ぎのあつた際に、村に

貼り出された『瓦斯使用拒絶同盟會』といふ會の宣言書の下書きであつた。村の連中が、瓦斯會社と料金問題や、瓦斯の壓力の不足や、その他拒絶税のやうな滅法高い工事料の問題やで會社と爭つて、つひに拒絶同盟なるものを作るに至つた際に、大里氏がその宣言書の起草を頼まれて書いたものであつた。それは同君が、社會政策の專門家であり、平生から公共の事業について、侃々諤々の意見を、村の人の間に鼓吹してゐるからであつた。無論、同君は自分の屬する學校の性質や此頃の世間の形勢やに鑑みて、決して、意見らしい意見を公に發表することはしないが、それらの物足りなさも加つて、朋友や學生や村の人達には、可なり痛烈な口吻で氣焔をあげるのであつた。その手前からも、彼れの村に起つた瓦斯問題では、知らぬ顔をしてゐる譯には行かなかつたし、又自分の經濟から云つて默つてゐられない理由もあつたし、勢々始めから村々の相談にも與つてゐた。さうして彼れの意見は中々有力に行はれ、拒絶同盟の成立にまでなつて見ると、その宣言書の起草を頼まれて、あとへ引く譯には行かなかつた。署名をする譯でもなく、新聞雜誌に出る譯でもなく、高々村々の掲示板に同盟會の名で貼り出される位のものだから、平生從容しい彼れも、多少氣をゆるして、それを起草したのが、半年も經つてから、こんな所へ持ち出されやうとは思ひもつかなかつた。

大里君は、その紙片を見せつけられても、それが別に問題となるとは思へないので、比較的落ついて、それが自分の書いたものであることを承認して、再びその紙片をデスクの上に置いたのである。

『やつぱり君だつたのですねへ。』

學長は、困つたやうな顔をして、その紙片を見つめてゐる。大里君は尋ねて見た。

『何かそれが問題になりましたか？』

『君はこの間の村の維持會の選擧の結果を知つてゐるでせう？』

學長はつけもなくそんなことをいひました。

『知つてゐます。』

『それなら君、これが聊か困つたことになるのはわかるでせう？』

大里教授は漸く氣がついた。この大學は元來、能尻學長が屬する系統の資本家一派の勢力を背景として成立してゐるものであつた。大里君はそれが大學の權威といふやうなものを少しでも毀滅するものとは考へなかつた。日本の大學で、さういふ背景を持たないものが何處にある。國家の大學でも、それが如何なる勢力を背景とするかは、その各大學に於ける大講座につけられた名稱によつても明かである。況んや私立の大學は、元來、ある社會的勢力の必要を感じて出來たものでないものが何處にある。最高の教育の必要を感ずるものは、その當時の社會に於て一定の、、、、、、、、、、、。さういふ勢力をもつてゐるものが大學を作らないで、何處でそれを作るのだ。日本ばかりでない、外國の大學に於ても[illegible]はその勢力が、まだしみつたれてゐるから、日本の[illegible]當時大學

と稱する堂々たる日本第一の國立大學でさへ、アメリカの大學を作つてゐる勢力の援助をうけてゐるではないか。大學自身も以前は、自分がそんな勢力から獨立してゐると考へてゐたのだ。だからアメリカの大學でさへ、いつも富豪の寄附金を受けるか受けないかゞ問題にされて、時には立派に拒絶した例もあつた。けれども、その當時の社會の、、、、、、、、、、、、のための大學でなくて、何處に大學の必要があるのだ。中世紀の大學のやうな國際的のギルドであつた大學はすべてのギルドが國家のためにぶつつぶされ、すべての機關は國家を、、、、、、、、、、、、した今日に成立しやう筈がない。だからわがA大學が××系の背景をもつてゐるのに何の不思議もなく、又それでいゝことなのだ。

大里教授は、いつもそんな風に考へて、それが彼れの大學教授たる地位を輕重せしめる問題ではないと思つてゐるのだが、然し、最も實際的にいふと、A大學は××系といふやうな大きな背景をもつてゐるのでも何でもなく、その系統に屬する某々實業家等の設立してゐる二三の會社に密接の關係があるだけで、それも階級的利害といふやうな大きな目的からよりは、寧ろ、その會社の現前の利害を目的としてゐるのであつた。××土地會社、××電鐵、××瓦斯、××銀行、××商事といふやうな會社は、それぐ\その事業の關係やら、抵當物件の關係やらで、A大學と聯絡をもち、それの資金を負擔するのであつた。

けれども大里教授は、何といつても學者だけに、さうした事なども、ありのまゝには見ないで、それらの背景を『現在の社會に支配的勢力をもつ階級』のそれといふ風に、抽象的に見て、さうした性質をもつ點に於ては、國家の大學でも變りはない、といふ風に理論づけるのであつた。いかにも理論的にはそれに違ひないので、從つてA大學を『××電大學』などといふのは、確かに學理的の云ひ方ではなかつた。

大里教授の理解が、そんな風に餘りに抽象的であつたゝめに、同教授は、實際の問題として、瓦斯會社と村民との紛擾の起つた時にも、A大學の背景は『階級』といふやうな抽象的存在ではなく——何となれば、『階級』なんてものからは一文だつて金などは出やしない——必ず、具體的の何々會社か然らざれば何の誰某といふ人間であらねばならぬことを忘れて、現に學長その人が、その何某のうちの一人であることさへも打ち忘れて、いゝ氣もちになつて『××瓦斯會社の横暴を懲せ』などゝ村民の寄り合ひで演説までしたのであつた。彼れの理論を今一歩正しく進めれば、彼れ自身が、その瓦斯會社の雇人でもあるのだが、それは然し、彼れ自身そのことに氣付いてゐても、丁度、職工がその會社の横暴を懲らせといひ得るやうに、彼れも亦××瓦斯の横暴を懲らせといひ得る譯で、決して彼れをしてその演説を遠慮せしめる理由とはならなかつた。で瓦斯會社征伐當時には彼れは甚だしく乘氣になつてゐて、學校の控室に來てまで、その經過を辯じ立てることを憚らなかつた。

此運動は、瓦斯會社には相當の打擊を與へて、先づ村民の勝利となつたのだが、その時も、彼れは、その勝利が大部分、彼れ自身の作戰によるものであつたことを同僚などに語つて、自分が賣名的の人間だつたら、新聞に肖像の一つも揭げさせて、公共事業について、高慢らしい長講でも連載させる所だが、それをしない所に、自分の學者氣質があり、Ａ大學の質實な特色があると云はぬ計りのことをいつたのであつた。

然るに、その「質實」な功名手柄が、今とゝに一枚の皺くちやの反古となつて學長の卓子の上に乘かつてゐるのを見せられたので、大里教授は、多少氣が重くなることを免れなかつた。而かもその反古紙を、人の好い學長が凝つと見つめて、爪を嚙ながら醬油樽を傾けてゐるのを見ると、老人といふものは愚にもつかぬことを心配するものだと氣の毒にもなるのであつた。で強いて快濶に、

『それで御困りでしたか。何か問題でも起つたのでしたら、責任は一切私が負ひます。實際學校は關係したことではないのですから。』

といつたが、それは、恰も學長に向つて、『貴下には決して責任を負はせないから安心おしなさい』と云つてゐるやうに聞えた。

學長は、それをきくと、點つたやうな顏を、一層點つたやうにして、

『それがね、貴下に御氣の毒なので心配してゐるのですよ。』

と、私の教授のいふやうなことをいつて、

[illegible]

といひながら、學長はその反古をとつて丁寧に折つてポケットに入れて、もう用は濟んだといふやうな顏を大里君に見せた。

大里君は、何も事情をはなしもしないのに、事情がわかつたといふ學長の言葉の意味がわからないで、椅子から立ち上つたが、そのまゝ出て行つていゝのだか、そこにゐていゝのだかと、進退に迷つた。

その時、活潑に後ろの扉をあけて、西洋人のやうな足音をさせて入つて來たものがあつた。大里君はふり返つて見たが、つひぞ會つたことのない中老の紳士であつた。學長は、その紳士の姿を見るや否や、恐るべき彼れの全重量を、驚くべき動力をもつて、輕々と持ち上げて室の中央に來て大きい卓子の傍に立つてゐる紳士に挨拶をしたが、紳士は碌々それに答へやうともしないで、いきなり、澁味のある莊重な聲で、

『何うでした、やはり大里といふ教授でしたか？』

といつて、そこの椅子によつた。

學長は、迷惑相に、大里教授の方へ、樽がはぢけたやうな大きい掌を見せて、紳士に向つていつた。

『この方があれをかいたその大里法學部長です。』

『さうですか、私がつのきです。』

と紳士はいつたが、大里教授は、そのつのきが一寸呑み込めなかつた。それは紳士の謎であらうが、『私がつのきです』といふ口調は、恰も分此方がそのつのきなる者を聞き知つてゐることを推測した語り方だ

[illegible]

た、それが紳士の從であるや否やについてさへも確信が持てないほど、そのつのきなるものについて無知であつた。

紳士はしかしそんなことにはお構ひなく、

『まあ伺うです。そこへかけては。』と大里君を椅子につかせて『貴下が問題になつて居つたことは、既に學長から御聞きのことゝ思ふが、維持員會はお氣の毒だが貴下に已めて貰ふことを決議しました。』

と何か外國の話をしてゐるやうな客觀的の口吻でさういつて、マッチを擦つて葉卷に火をつけた。

『それは然し、……』

學長はさういつたが、一寸言葉が途切れた隙に、つのきなる紳士は、應揚に學長に向つて、

『熊尻君は、異議のないわけではなかつたかね？』

『それが實際大里君の所爲であるとすればです、然し、まだ問題が……』

と熊尻君は口籠つた。紳士は笠にかゝつて、

『而してそれは大里君の所爲だつたと今いはれたではないか？』

と紳士は煙を吹いた。

大里君は憤然とした。が同君はかういふ場合比較的落着きを失はない性質であつた。それに、かういふ大學にゐて年よりの實業家などから、教授が子供のやうに扱はれるのには馴れてゐるので、憤然としても己れを失ひはしなかつた。で彼れは、學長を顧みて、態とらしい小屈て、

『つのきとは何ういふ字を書くのですか？』

と尋ねた。學長は變な顔をして、

『カタキ……と書きます。』

『カタキとは……？』

大里君は愈々わからなくなつた。

『「つの起る」と書くのです。』

『ハ、ア「つの起る」。なるほど角起。珍らしい苗字ですな。』

そんな人を馬鹿にしてゐる會話――然し双方とも決して紳士を馬鹿にしてゐるつもりではなかつた――を聞かされて、紳士は大に腹が立つたらしく、莊重な調子を幾分狂はせて、荒々しく、

『問題は簡單だ。熊尻君先達 豫め云つて置いた通り、大里君にさう云つてくれ給へ。』

學長が躊躇してゐるので、紳士はいら〱して、

『君が困るといふなら、僕が代つて云渡してもいゝ。大里君。』

と紳士は、大里教授をまるで囚人でも呼び出すやうな、番號で呼ばぬのを感謝しろといはぬばかりの聲と調子とで呼びかけて

『理由は「學校の都合」だ。すぐと辭表を出して下さい。學校の關係者は、今後は、學校の性質と、社會の機關としてのこの大學の使命をよく理解してゐる人に限りたいと思つてゐる。それが維持員會の意向だ。お氣の毒だが、君はこの資格を缺いてゐると認められた。いろい

ろ研究もしたが、もう餘地はない。誠に御氣の毒だが……』

『私が何うして、この大學の性質や使命やを理解しないのですか？』

大里君は紳士の言葉を遮つた。

『維持員會の決議については、同會は外部に對して、說明の義務をとらぬことになつてゐる。意見の相違については維持員會の意見を絕對と認める。實行機關が、實行を怠る時は、維持員會が自らそれに當ることを得る。教授の任命は、學長の專權だが、維持員會の人事に關する決議に對しては、學長はたゞ實行機關たるに止まる。教授會は、人事や學校行政に關して何の權限もない。……』

そんな風のことを、素人がいかにも法律通らしく見せかけやうとする場合に用ゐるやうな切口上で述べ立てて、

『さういふ此の大學の憲法の下では、君の今の質問に對して、答辯の義務を感じてゐるものは何處にもゐない。辭表が出せなければ、學校の方から解職するまでだ。……用事はそれだけです、もういゝから引取つて下さい。』

大里君は、いつもの落ち着きが半分程失はれたことを自分に感じた。事情が許せば、この角起なる人物の横面を張つてやりたいと思つた。何うせ學校にゐられないとなれば、それもやつても惡いことではないと考へられた。でも默りつけるやうに云つた。

『何をいはれてゐたのかよく聽いてもゐませんでしたが、意味がちつともわかりませんでした。然し、要するに大學の性質や使命がわからないとは、貴下のことです。それがわからん人のいはれることだ。私には一言半句もわからなかつたのです。けれども、何度、繰り返されたつて解る筈はないから、もう一度くり返して下さいとはいひません。たゞ何だかちつともわからなかつたことを御斷りして置きます。あとで、あの時にかういつた筈だ、などゝいはぬやうに御願ひします。私は依然として部長の職をとります、教場へも出ます。誰れもそれをしてはいけないといつたものがあつたことを感じません。貴下の今いつたことは、それが日本語らしかつたといふ事の外、私には少しもわからなかつた。貴下は少くとも大學へ來て講義をする資格のある方ではない。威張りたいなら、貴下の會社へ行つてお威張りなさい。貴下は多分どこかの會社の重役でせう。……』

大里君は、角起なる紳士がきつと遮つて呉れるだらうと思つて頻りに猛烈なことをいひつゞけてゐるのだが、一向遮つてくれないので、聊か種切れになりかけて、段々勢ひが弱つて來たことを感じた。それが先方の策戰だつたのかと大里君は思つたが、實はさうではなく、角起といふ紳士は、その甚だ重も味のある年齢に相應した莊重な顏の造作をすつかり崩して——といつても樂觀的に崩したのではなく、悲觀的に崩したので——ブルドツクが『お預け』をくつたやうな恰好をして、への字に結んでゐた口を半分ほど開けて、拔け目のなかつた眼付きを拔け目だらけにして、不思議なものでも發見したやうに、ぢつと大里君の顏を見詰めてゐるのであつた。

といつたのは能尻學長だつた。
『ちつとも狼狽しちやゐません。先方のいつたことが少しもわからないのに、狼狽する譯はないぢやありませんか。』
『それが狼狽してゐるのですよ。』
角野紳士は、漸く我れに返つたやうに、顔の雑作を立て直して、おほめのやうな鄭重な、然しながら、せき立つた口吻でいつた。
『君は、同僚や學生を煽動して我々に反抗させやうといふ気だな。怪しからん。』
『貴下のやうなものを相手にはしないから安心をして下さい。』
角野がまた何か云はうとするのを學長は抑へて、
『角野さん、とにかく一應私に御任せ下さい。話がこんな風になるのは何處かに行き違ひがあるからで、まあ後刻によくなんどりと話をすることにしませう。』
と幾分角野をたしなめるやうに、さういふのであつた。
『それは任かせんといふのではないが、然し、能尻君も若い人達を指敎するのはいゝが、程度を誤らんやうにして貰はんと困る。』
『學校は、會社や銀行とは少し違ふのでな。』
能尻君は、今しがた、學校を自分の會社同様に心得て見事に失敗した角野に當てつけるやうにさういつて笑つた。
『然しだ。』
を取り[illegible]
『然しだね。若い學者諸君は確に誤解[illegible]
資本家階級の没落だなんてことを[illegible]
話だ。資本家階級といつたつて[illegible]
[illegible]

ろ研究もしたが、もう餘地はない。誠に御氣の毒だが……」

「私が何うして、この大學の性質や使命やを理解しないのですか？」

大里君は紳士の言葉を遮つた。

「維持員會の決議については、同會は外部に對して、說明の義務をとらぬことになつてゐる。意見の相違については維持員會の意見を絕對と認める。實行機關が、實行を怠る時は、維持員會が自らそれに當ることを得る。教授の[illegible]

ないとは、貴下のことです。それがわからん人のいはれることだ[illegible]私には一言半句もわからなかつたのです。けれども、何度、繰り返されたつて解る筈はないから、もう一度くり返して下さいとはいひません。たゞ何だかちつともわからなかつたことを御斷りして置きます。あとで、あの時にかういつた筈だ、などゝいはぬやうに御願ひします。私は依然として御說の[illegible]

[illegible]我に今も失職した『時の內』なので、友人等に厄介をかけることにしてゐるのである。

『君だつて、失職を十年も繰り返してゐるぢやないか？』

大里は元氣のない聲でさういつた。

『失職は no call 即ちアンコールで、何度でも繰返す筈だ。‥‥で僕の意見では、プロフェッサーといふものは、學生と同じく二三年で學校を卒業してしまふといふ制度にするがいゝと思ふね。學生はずん〳〵學校を出て社會に活動したり、失職したりしてゐるのに、先生だけがいつまでたつても、社會に出もせず、活動もしなければ失職もしないといふのは甚だ不都合だよ。活動が出來ないなら、責めて失職だけもするがいゝ、さうしたら少しは社會がわかるだらう。僕の大先輩のあるプロフェッサーは、社會に活動したり失職したりしてゐる人間は皆何も知らない人間で、學校の教壇で喋舌つてゐる自分達は何でも知つてゐる人間だと考へてゐたが、とう〳〵終ひに、往來や電車があんなに混雜して常に事故の絶えないのは、畢竟公衆や交通當局者が無智なためだといふので、「交通思想何とか會」といふ會を起したものだ。此の先生、交通を思想と心得てゐるのだから始末に終へない。さうなると[illegible]を始めたも[illegible]のゝ講釋をすれば社會のことは何でも思ふやうになると考へてゐるところは、自分の賣り出す賣藥は決して利かないことを知つてゐる藥屋より餘つ程人が好いには違ひない。所でその講釋といふのが驚いたね。

「交通とは、空間的には、物の、與へられた空間に於ける關係の變化の直線的概念であり、時間的には、物の空間に於ける關係の、永久に對する瞬間の比に於ての變化の概念である。」

といふのだよ。何うだい、プロフェッサー、解るかね。少しは覺え違ひもあるだらうが、然し、違つてゐなかつたらもつと六かしいのだよ。何しろ交通といふものも學者の手にかゝるとそんなものになつてしまふのだが、そいつを聽かされた交通關係者なるものは驚いたらうね。これを最も善意に解しても、まるで燒芋を喰ひたい奴に『甘藷之賦』といふ漢詩を「たんと喰ひな」と盆にのせて出したやうなものだ。それで交通狀態を改善しやうといふのだから、何のことはない、肺病患者に『牧場の歌』を讀ませて、大に營養狀態を改善させやうとしてゐるやうなものさ。‥‥時に僕の話の問題は何だつたつけね？‥‥さう〳〵。だから、君も十年二十年社會政策なんてものを講釋したつて、間的には、與へられた月給の變化も碌すつぽありやしまいし、

金も出さんで、道具にだけ使はうといふのだから、資本家階級よりも圖々しい。それが墮落でなくて、個々資本家階級に利益なやうなことをすれば墮落？　妙なロジックもあつたものだ。今の社會の責任者は資本家階級だ、それに利益なやうな大學が何んで墮落だ。今日の社會制度を維持する大學が墮落で、それを打ち壞すのは墮落でない？　何處からそんなロジックが出て來る？　我々は、大學の勢力が、社會の安寧秩序を亂すことに利用されるのを、社會人として許すことは出來ない。自分の大學だらうが、人の大學だらうが容赦はせん。』

『瓦斯會社の暴利を貪るのに制裁を加へるのは、社會の安寧秩序を亂すのではなくて維持するのだ。「てんでロジックも何もありやせん。』

大里君は、さういつて席を立つて學長室を出てしまつた。

無論彼れは、依然として部長の職をとる氣も教壇に出る氣もあつたのではない。行掛の始めの一言に、子供のやうに腹を立てて、そんな氣を失つてしまつたので、愛憎づかしをいつたのだから、彼れは學長の室を出ると、すぐと自分の研究室に入つて辭表を認めて、封筒に入れて、小使を呼んで、それを學長の許に持たせてやつた。さうして彼れはテーブルの抽出しの整理をしながら、まるで監房のやうに狹くてがらんとしてゐる名ばかりの研究室を見廻はした。先輩のある教授が大學をやめた時に、教室を失ふことよりも研究室を失ふのが悲しかつた、といつたのを思ひ出して、[illegible]。彼れ自身の場合[illegible]

そこへ扉をノックして返事も待たずに入つて來たのは、彼れの親友の山内といふ男だ。

『とう〳〵やめたな。上出來々々。』

いきなりそんなことをいつて、その男は大里の肩をつかまへてダンスの足ぶみをしてゐる。

『もう知つてゐるのか？』

大里は驚いて尋ねた。

『知つてゐるかつて、とうから問題になつてゐたんぢやないか。鵜飼たね。知らぬは當人ばかりなりだ。…然し、とにかくよかつた。一體、人間十年も一つことを繰り返してゐられるものぢやないんだよ。君のやうに、自分の首の飛ぶのも知らずにゐる人間は別だらうがね。考へて見給へ、いかにダーウキンの「種の起原」がエポック・メーキングの學說だからつて、「おいダーウキン、あいつを十年間繰り返してゐてくれ」といはれたら、流石のダーウキンもあの偉大なる禿頭を掻へて御免を蒙るだらう。尤も君の學說は、エポック・メーキングでなく、サラリー・メーキングだから、月給さへくれゝばいくらでも繰り返すことを敢て辭せないといふだらうが、一體、學說は觀客などゝ違つて、いかに名說を吐いても、誰れもアンコールをされたためしはないだらう。教授と學說はそれほど繰り返されることを恐れなければならないものだよ。これを機に、[illegible]

此男は、十年間に、職業の種類を變へること十何種、地位を變へること二十何度といふことをもつて誇りとしてゐる男で、口癖のやうに「俺は失職した時の外は、決して友人等に厄介をかけないことにしてゐる」といつて、忠實にそれを守つてゐるために、始終友人等に厄介をかけてゐる男である。現に今も失職した「時の內」なので、友人等に厄介をかけることにしてゐるのである。

「君だつて、失職を十年も繰り返してゐるぢやないか？」

大里は元氣のない聲でさういつた。

「失職は no call 即ちアンコールで、何度でも繰返す筈だ。……で僕の意見では、プロフエッサーといふものは、學生と同じく二三年で學校を卒業してしまふといふ制度にするがいゝと思ふね。學生はずんずん學校を出て社會に活動したり、失職したりしてゐるのに、先生だけがいつまでたつても、社會に出もせず、活動もしなければ失職もしないといふのは甚だ不都合だよ。活動が出來ないなら、責めて失職だけもするがいゝ、さうしたら少しは社會がわかるだらう。僕の大先輩のあるプロフエッサーは、社會に活動したり失職したりしてゐる人間は皆何も知らない人間で、學校の敎壇で喋舌つてゐる自分達は何でも知つてゐる人間だと考へてゐたが、とうとう終ひに、往來や電車があんなに混雜して常に事故の絕えないのは、畢竟公衆や交通當局者が無智なためだといふので、「交通思想何とか會」といふ會を起したものだ。此の先生、交通を思想と心得てゐるのだから始末に終へない。さうなると[illegible]田町などに物騒な「危險思想」だね。その危險思想の頂小に軍神が突立つてゐるのなぞは皮肉だよ。さうしてその交通プロフエッサーの威光で交通關係者とかいふ人達を集めて講義を始めたものだ。自分の商賣ものゝ講釋をすれば社會のことは何でも思ふやうになると考へてゐるところは、自分の賣り出す賣藥は決して利かないことを知つてゐる藥屋より餘つ程人が好いには違ひない。所でその講義といふのが驚いたね。

「交通とは、空間的には、物の、與へられた空間に於ける關係の變化の直線的概念であり、時間的には、物の空間に於ける關係の、永久に對する瞬間の比に於ての變化の概念である。」

といふのだよ。何うだい、プロフエッサー、解るかね。少しは覺え違ひもあるだらうが、然し、違つてゐなかつたらもつと六かしいのだよ。何しろ交通といふものも學者の手にかゝるとそんなものになつてしまふのだが、そいつを聽かされた交通關係者なるものは驚いたらうね。これを最も善意に解しても、まるで燒芋を喰ひたい奴に『甘藷之賦』といふ漢詩を「たんと喰ひな」と盆にのせて出したやうなものだ。それで交通狀態を改善しやうといふのだから、何のことはない、肺病患者に『牧場の歌』を讀ませて、大に營養狀態を改善させやうとしてゐるやうなものさ。……時に僕の話の問題は何だつたつけね？……さうさう。だから、君も十年二十年社會政策なんてものを講釋したつて、空間的には、與へられた月給の變化も碌すつぽありやしまいし、時間的

には、永久に對する瞬間の比に於て頭が禿て行く位のところだ。社會の政策どころか、自分の命策の足しにもなりはしないよ。一日も早く——といつても、もう十年も損をしてゐるのだから、これからその取り返しだ。さうして一體何をする氣だい？』

『たつた今やめたばかりで、何をする氣もあるものか。』

『それだから駄目なのだよ。僕なんかは、新しい職業を得た時に、ちやんと次ぎの職業を考へて置くのだ。治に居て亂を忘れず、就職に於て失職を忘れず。その點は我々の社會も軍國社會も一つだよ。どつちも命がけだからね。「、、、、」と「、、、、」との違ひはあるが、「イザ鎌倉」が何時來るかわからないことに變りはない。君も、現に、「イザ鎌倉」のお見舞ひをうけてゐるのに、これからそろ〳〵仕度をしやうなんて、「、、、、」にも妻君のためにも忠なるものとはいへないね。そんなことだらうと思つて、我輩はもう、君の職業を探して置いたよ。失職した時だけは友人の厄介になる、といふのが僕の流儀だから「己れの好むところこれを人に施せ、」で、君のために一擧手一投足の勞をとるんだが、實は君には最上の口があるんだ。……いやまあ聽き給へ……僕の二三年前にゐた××フロの聯盟からの話なんだが、何とかいふフランスの興行師が、今、こつちに來てゐて、日本の能か歌舞伎か、とにかく古典的のものを向うへもつて行つて興行したいといふのをその連中を作つてゐる最中なんだが、それにくつ付いて、その興行[illegible]として戴く[illegible]といふのさ。[illegible]一で、

英佛獨の話の達者にいける奴といふのだから、僕は無論落第だが、君が部長になつたのは、社會政策の故ぢやなくて、語學の故なのだから確かに適任だよ。日本のプロフエッサーが、その興行師について歩いて日本の古典的藝術の講釋をするといふ看板を掲げるのだが、やはりA大學の社會政策同然、實はプロフエッサーが外國語をしやべるだけでいゝのだよ。ヨーロッパの田舍で、日本の古典藝術の講義をするのだから、東京の大學でヨーロッパの社會政策の講義をするのと同じく、どんな出鱈目をいつたつて何處からも尻は來やしないよ。必要なのは語學とプロフエッサーの看板だ。君は、免職になつたつてプロフエッサーはプロフエッサーだ。向うの奴がぐづ〳〵いつたら、日本には「腐つても鯛」といふことがあるといつてやり給へ。講釋の内容かい？それは能でも歌舞伎でも、此頃さらに出る全集本の頭にくッついてゐる「解題」といふ奴でも切りぬいて行つて飜譯して聞かせればよからう。向うの奴が解らないなんていつたら、今まで、お前の方のもの〻飜譯のわからないのに閉口させられてゐたから、その仇討をするんだつていつてやればいゝ。……ぢや、「大里に話したら、喜んで承諾して、早速大學へ辭表を出した」といつてやつていゝだらうね。僕だつていゝ加減な嘘ではないさ。たゞ承諾と辭表とを前後させただけだ。……」

それから約一年ほど經つて、此度は、ヨーロッパにゐる大學から更い[illegible]つたよ、その[illegible]

てゐたが、今度巴里に戻つて見ると、いつのまにか歌舞伎の[illegible]て來てゐるのだ。それは一層大膽不敵に、市川團十郎だの岩井半四郎だのと名乘つてゐるのだが、少し役者が足りないで、寶生、觀世のうちから早變りをして、尾上菊五郎、澤村訥子などといふのを急造して、やがて出發といふことになつてゐるのだ。で僕も早速ノー・プレーの講義から、オペラ・カブキに早變りを餘儀なくされて大に面喰ひつゝある所だ。君は、社會政策並でよろしいなどゝいゝ加減なことをいつたが、どうして中々さう手輕には片附けられない。いつかも、イギリスの田舍だと思つて與太を飛ばしたら、誰れかその地方の新聞に投書して、あのプロフェッサーのノーに關する講演は、云ひ足りない所や云ひ過ぎた所だらけで、折角の日本人の解釋としては遺憾千萬だ。あんな平凡で、間違ひだらけの講釋を日本人がするやうでは、能樂といふものは、もう日本の現代人には理解されないやうになつてゐるのではないか、云云と、堂々たるプロフェッサーが無理解の見本にされたのには驚いた。何とか反駁してやりたかつたが、先方は、「解題」に書いてないやうなことを盛に列べ立てゝゐるので、薄氣味惡くてとても手がつけられなかつた。此の調子だと、歌舞伎の講釋もうつかり出來ない。うつかりにも何にもてんで種がない。で仕方なしにそれこそ社會政策並に、ヨーロッパものので間に合せるべく二三の本を集めて見たが、豫備知識の缺乏で困つちはちつとも知らないので、このハクエン[illegible]してこの有樣であるや否や全く鑑定がつかない。隨分呆れたプロフェッサーだ。尤もこつちのプロフェッサーにもピンからキリまである。いつかローマでフォーラムの見物にいつたら、乞食のやうな男が案内をしやうといつてうるさくついてきて、名刺を出したのを見たら、プロフェッサー何某と書いてあつた、然し、そのプロフェッサーの方が、このプロフェッサーよりも專門的なのだから助からない。君は飛んでもないものに僕を世話してくれた。前にいつた、イギリスの新聞に惡口が出た時にも、これがロンドンやパリの新聞に出たのだつたら、契約條項にある「忠實に義務を履行する」ポッシビリティーを失つたのだから、解約するのだが、田舍の新聞だから此度だけは我慢してやると、ジューの奴が吐かしやがつた。此の次ぎには愈々そのポッシビリティーがけんのんになつて來た。いかに失職專門の君でも、ヨーロッパ三界での失職は喰つたことが無からう。それを思ふと氣が遠くなり想だ。僕は石に噛りついてもカブキ學者にならなければならない。大至急專門家にきいて參考書を出來るだけ多くサイベリア便で送つてくれたまへ。我が團十郎や菊五郎等は、もう勸進帳の稽古にとりかゝつた。彼等の稽古は滑稽を極めたものだが、僕の覺悟は悲壯を極めたものだ、カブキか、然らざれば死だ!」

それからまた一年程經つて、山西は大里からハガキを受取つた。

「僕は、あのジューと喧嘩別れをした。然しそれはもう失職が僕を牽制する力を失つたからだ。僕は來月またイギリスに渡る。今度はオツクスフオードやケンブリッヂの有志にカブキに關する講演をするのが目的だ。近々妻もこつちへ招ぶつもりだ。何よりも角起や興行人やと沒交渉の生活が嬉しい。君には叱られるが、今後はこの生活を十年でも二十年でも續けて行くつもりだ。」

山西は、それに對して同じくハガキで返事を出した。

「カブキ學者よ。君がよく喧嘩をしたがる角起や興行人も、君と同じく日本のものを西洋へ、西洋のものを日本へ、即ち、與へられた商品の、與へられた空間に於ける關係の變化によつて生活してゐる人間どもだ。しかも君の取扱ふ物資は、やつぱり彼等角起やジューやの手によつて始めて商品たり得るものであることは、君の社會政策が商品たるにはA大學が必要であり、カブキが商品たるには何々興行部が必要であつたことによつても明かだ。それがお互に喧嘩するのは、蛙は蛙とのみ合戰するやうなものだ。」（終）

初めて經驗した病院生活

安部磯雄

六十四歳の今日まで私は一度も入院したことがなかつた。つまり今までこれといふ程の重病に罹つた經驗がなかつたのである。然るに此度は去る四月十九日に發病し、同廿五日に帝國大學病院分院に入院し、六月廿九日に退院するまで約二ヶ月の病院生活を初めて經驗したのである。チフスと肺炎の併發であつたから、入院後六日間は四十度以上の熱、更に其後の九日間は三十九度以上の熱が持續した。これがため私は殆んど三週間以上も無意識狀態に陷つた。自宅から病院に運ばれた當時のことも、其後三週間内に起つたことも一として私の記憶の中に在るものはない。私の二男が記錄して置いた日記に據ると五月十八日に私は初めて意識を回復したようである。五月廿一日の夜半に激しき地震があつたことは確に記憶して居る。チフスのため私のように腦を侵された患者は隨分珍らしいと主治醫が後に話して居た位だから、私が稍意識を回復するようになつても、私は尚ほ半醒半醉の狀態に在つた。私が今日の如く健康を回復したのは全く不思議だと家人は今でも屢 私に語るのである。

約三週間は無意識の間に過ぎてしまつたのであるが、其間私は絶えず夢を見て居た。他のことは一切忘れて居るが、夢だけは今日でも明に記憶して居る。其一つは私が郷里の福岡縣から立候補して毎日演説をして居たといふことである。この夢は數日間續いたものらしい。後に家人から聽けば入院後數日間は幾回も熱にうなされて政談をやつたさうである。次の夢は私が伊豆の大島で靜養して居るといふことであつた。後に私が病院に居ることを自覺するようになつても、矢張病院附屬の船で毎日大島に通ふて居るのだと考へて居た。大分意識が明瞭になつた時でも私は看護婦に此病院は海邊に在るのではないかといふ奇問を發したこともあつた。大島の夢は念が入り過ぎて滑稽に思はれる位であるが、私が青年時代に馬琴の弓張月を讀んだことや、今から約廿五六年前に自ら大島見物に出かけたことなどから聯想となつてこんな夢を見たのではないかと思はれる。要するに無意識といふことは何も考へないといふことではなく、反對に私は夢を見ることに忙しかつたのである。

私の妻は幾度も私にどんな氣持であるかと尋ねた

そうであるが、私は何時も本當によい氣持だと答へたといふことである。勿論大島などで遊んで居ることを夢みて居る位だから氣持の惡からう筈はない。最も熱の高かつた時期には殆んど何の苦痛もなかつたようであるが、熱が降つて意識が明瞭となるに從ひ私は殆んど死んだ方がましだと考へる程の苦痛を感じた。

それはどういふ譯ですかといふに、三四週間もベッドに横臥して居た私は何とも言へぬ體の倦怠を覺ゆるようになつた。意識が明瞭になればなる程體は益々ダルクなつて來た。柔かな綿蒲團や羽蒲團が積み重ねてあつても、私は恰も板の上に寢て居るかのような苦痛を感じた。手や足の先きは少しづゝ動かすことが出來ても體は全く麻痺して居るかのように少しも動かすことが出來ない。いよいよ堪らなくなると私は看護婦を呼んで體の位地を變へたり、或は枕を取替へてもらつた。私の瘦せ衰へた體も一人で動かすには餘り[illegible]



安部磯雄氏（昭和三年八月箱根靜養中）

た。これは看護婦にも氣の毒であるから、私は出來るだけ我慢をしたにはしたけれども、時には我慢がしきれないで看護婦に申譯がないような迷惑をかけたこともあつた。

夜勤の看護婦が病氣のため二晩休むことになつたので臨時に新しい看護婦を賴むことになつた。其第一夜が私の苦痛の絶頂であつた。よくは記憶しないが一時間に十五回乃至二十回位看護婦に私の體の位地を變へてもらつた。看護婦は五分と休息する譯にゆかない。私は苦悶の餘り眼を開いて見ると看護婦は寢臺の側に立ちづめであつた。私が少しでも動くと『位地を變へましようか』と先方から催促する。こんな狀態が二三時間も續いて私は最後に眠りに就いた。今でも其看護婦のことを思ふと感謝の念が滾々として湧いて來る。かくて私の苦悶は約二三週間も續いた。私は全く衰弱に沈んで居るのだから、一日も早く椅子に腰かける[illegible]

る唯一の途は坐するにあるから、唯の一分でも椅子にかけさせてもらひたいと懇願したことがある然しそんなことが許される筈はなかつた。

體の倦怠以外に私を苦めたのは腦の惱みであつた。頭の下に在る氷嚢が取り去られるようになつた所が今度は枕が邪魔なように感ぜられ出した。枕が高過ぎるとか低く過ぎるとか、或は大き過ぎるとか小さすぎるとか苦情が一時も絕えない。稱門倶樂部からは猶蒲團と大きな柔い枕が贈られたので早速其枕を用ゐることにしたが、一時間も過ぎぬ前に最早それが厭になつた。私の用ゐる枕には電線の樣なものが連結されて、何かいやな力が傳はつて來るのではないかと夢現に考へたこともあつた位である。

其頃の苦痛といつたら全くお話にならない。若し自殺の手段が手近に在つたなら私は自殺しかねまじき所まで沈んで行つた。然し私は此苦痛に打勝つ外はなかつた。私は生涯にまだ經驗したことのない程の努力を以て此苦痛に抵抗した。今日までの生命は全く親から讓られた財產の如きもので、私はそれがどの位貴いものであるかを知らなかつた。然し今後の生命は全く自分の努力で築き上げたものだ。此多大の犧牲を拂ふて獲得した生命は決して無造作に消費し盡すべきものではない。これが苦惱中に私の痛感した所であつた。勿論私が九死に一生を得たことが神明の加護と大方諸君の厚き同情に因ることは今更これを述べる必要はないと思ふ。唯私が自分の努力で生命を繋ぎ留めたと考へる程に其當時に於ける私の苦惱は甚しかつたのである。

苦惱が激しければ激しい程私は一日も速く退院する日の來らんことを切望した。其時分私はまだ流動物のみを攝取して居た。牛乳、重湯、スープ、重湯、肉汁等の外に鷄卵二箇であつて、牛乳の外は全部自宅から運ぶことになつて居た。看護婦の言ふ所に據ると熱度が或點まで降り且つ相當の時日を經過することになればお混り（重湯の中に少し粥の混じて居るもの）が食べられることになる。二三日の後には粥に更に數日後には普通食といふ順序となる。それからベットの上に坐したり、ベットの周圍を步行する。此順序を經ていよく退院といふことになる。私は此退院の日が實に待遠しかつた。幾度私は退院のことを夢みたか知れない。然しそれよりも尙ほ私に取りて願はしいことはベットの上に坐したり、ベットにつかまつて步行することであつた。これが出來るようになれば私は全く現在の苦惱を逃れることが出來ると信じて居た。

五月十八日に稍意識が回復すると同時に極度の苦腦を經驗したのであるが、六月四日には待ちに待つたお混りが日に一回だけ許されることになつた。更に六月十四日から普通の食事が出來るようになつたので、退院の日も遠くはないと考へて少からず希望に滿ちた。從つて以前のように苦痛を感ずることも少なくなつた。然し六月十日頃から寢る間に寢て夜間に眠れぬといふ惡い癖が出來た。午後は斷然眠らぬといふことにしても矢張夜は眠れない。或時は醫師から睡眠藥をもらつて

飲んだけれども矢張駄目であつた。仕方がないから私は毎晩徹夜する決心をした。看護婦は私と同縣の人で共通の話題を澤山持て居たから毎夜私の話相手になつて呉れた。私が意識を回復した後自分でも氣の附いたことは凡ゆる機會を捕へて私が誰にでも話しかけることであつた。家人や看護婦はこれを恐れてなるべく訪問者を病室内に入れぬやうにしたけれども、私は親戚の者や稻門倶樂部の人々には會ひたくてたまらなかつた。チフス患者は其回復期に於て食慾の猛烈なるに苦むといふことを兼て聽かされて居たけれども、幸にして私には其經驗がなかつた。其代りに私は談話慾のために可なり多く惱まされた。看護婦は少からず迷惑を感じたに相違ない。毎晩十一時乃至十二時頃から翌朝の四時頃まで私の話相手となつて呉れるのだから隨分疲れたであらうと思ふ。或晩は私の甥が十時頃から翌朝まで相手となつて呉れたこともあつた。其頃は四時になると夜が明けるので、私の看護婦は誰よりも早く湯を沸し、タオルを以て私の全身を拭いて呉れるのが毎日の務めの一つであつた。患者にとつてはアルコールとか温き湯とかで全身を拭いてもらふ位心持のよいことはない。頭から足の爪先きまで拭いてもらふのであるが、それがまた終らない中に私は何時も熟睡[illegible]で心地よく眠つたそうだ。朝飯の前後に四五時間も熟睡するのだから夜分が自然に眠れなくなる。此狀態は退院の時まで、[illegible]二週間以上續いたのであるが、自宅に歸ると[illegible]

[illegible]

大隈さんが逝去された時であつたと記憶するが、私の先輩浮田和民博士は大隈さんに關する記事で各新聞紙が賑ふて居るのを見て「自分は假りに死んだものとして新聞紙がドンな記事を掲げるかを見たいものだ」と言つたことがある。人が死んで再び蘇生するといふことは不可能であるから、浮田博士の希望は容易に實現さるべくもないが、幸か不幸か私は幾分かこれを經驗することが出來たと思ふ。私はよし今後數年ならずして死ぬるやうなことがあつても、決して今度の如く大なる同情を得ることは出來ないだらうと考へる。私は殆んど死んだと同樣の危險狀態に陷つて居たのであるから、言はゞ蘇生したようなものである。私の病中に知人や未知の人から受けた同情は一々家人からこれを聞くことが出來た。私は本當に勿體ないと思ふた。或知人は言ふた。東京の新聞紙は一週間乃至十日間も私の病狀を毎日報告して呉れた。通信社は全國の新聞紙にこれを通信して呉れた。これは全く珍らしいことではないかと。私はまだ其當時の新聞を讀まないけれども、兎に角それが私に取りて大なる感激であつたことは言ふまでもない。

私が發病すると同時に私の親戚や友人は第一流の醫師を送つて呉れ[illegible]手當には[illegible]たのであるから、私がよし回復し得なかつたとしても、私は[illegible]

[illegible]

らは藤井博士が送られたのであるが、博士は同じくチフス病であるとの診斷をなし、一時も早く入院することを勸告された。家人は決して藤井博士の診斷に疑ひを懷いたのではないけれども、主治醫と協議の結果親戚の厚意により更に島薗博士の來診を乞ふことになつた。診察の結果は矢張同樣であつたから、いよ〳〵私は四月廿五日に帝國大學病院分院に入院したのである。二十八日には民衆黨から稻田博士を送つて與れた。三十日には又親戚の厚意により三浦博士の診察を受けることが出來た。私は藤井博士の診察を受けたことを明瞭に記憶して居るけれども、島薗、稻田、三浦の三博士に診察された時は全く夢中であつた。私のような無產者が一流の名醫に診察してもらふといふことは全く過分といふべきであるが、これも友人や親戚の好意に因るものと思へば唯感謝の外ないのである。

私は少年時代から基督教信者となつて居たけれども、宗教に有りがちな排他的精神は極めて少なかつた。今でも基督教の中心思想を宣傳することには熱心であるけれども、他の宗教を非難攻擊するが如きは全く私に出來ないことである。私の病氣中に受けた各方面からの同情は全く宗派心を超越したものであつた。各地の同情者から送られた神社の御守りは可なりの數に達したのであるが、私の妻は一々これを私の枕の下におさめて與れた。基督信者の中に私のため祈つて與れた人の多くあつたことは申すまでもないが、四谷と關口台町の天主教會堂で私のため祈禱が捧げられたといふことは私に非常な感激を與へた。

私の二男の日記に據れば、私が入院した日から四日目即ち四月廿八日に年の頃三十許りと思はれる婦人が私の病氣を見舞ふて與れたそうだ。其人は天理教の信者であつて、翌日から毎日私の居る傳染病室の入口で熱心に祈りをした。初めの間は何人も不思議そうにこの婦人を見て居たそうだが、其態度が餘りに眞面目であつたので、後には看護婦達も相當敬意を表するようになつたそうだ。兎に角これが四五十日も繼續したのであるから、何人も其誠意に感動せざるを得ない。私は退院する少し前に此婦人を部屋に招き、長い間の親切を感謝した。

今一つ二男の日記に據りて知り得たことを述べることにする。社會民衆黨の一員であり、且つ總選擧の時神田下谷の方面で大に私を助けて與れ、選擧後は私と共に福井縣の遊說に出かけて與れたM君は人一倍に私の病氣を心配したのであつた。四月中に私の熱が下がらないと生命に危險が及ぶかも知れぬといふことを聽き、私に鯉の生血を飲ませることを決心した。四月廿八日の午後M君は自ら二匹の鯉を入れたバケツを病院に運んで來た。M君自ら出刃庖丁を以て鯉の頭を刎ね、鮮血を器に受けて、これを看護婦に渡した。私は苦もなくこれを飲んだが、約束の三十分が過ぎても私の熱は少しも降らなかつた。M君は非常に失望したが、何事か決心したもの丶如く急に病院を出て行つた。其後M君の姿が病院に現はれないので、彼を知れる人々は不思議に思ふて居た。やがて三週間も過ぎて、五月十八日の午後にM君は再び病院にやつて來た。鯉の生血が失敗に終つたのを見てM君は最後

の手段を取ることにしたらしい。即ち御禊にお籠りして私のために祈つたといふのである。五月十八日頃は少しく意識を回復しかけたのであるけれども、まだM君に面會して親しく禮を述べる程にはなつて居なかつた。然し熱も下り、最早危險時期を確實に脱して居ることを聽き、M君は『それはよかつたです』と言ふて喜んで呉れたそうである。

見舞品が諸方面から贈られた。鷄卵、菓子、果實の如きは餘り澤山であつたから、家族だけで其厚意を獨占せずに、親戚や知人や看護婦達にもこれを分配したそうだ。折花とか盆栽とかも隨分多數に上つたようであるが、其中保存の出來るものは自宅の小さき庭園に移し植ゑられた。私が退院した時妻は一々それを示して知人諸君の厚意を語つて呉れた。こんな盆栽だけでも約二十に達して居るが、來年の春には何れも美しき花を開いて私共を喜ばせて呉れることであらう。私が初めて意識を回復した時家人が私に示して呉れた二つの立派な盆栽は東京朝日新聞社からの花と脈滿會からの蘭であつた。久しい眠から醒めた私の眼には此上もなく美しい盆栽として映じた。

前に述べたように入院直後の食物は單に流動物のみであつたが、數日後からは流動物の外に毎日鷄卵二個づゝを攝取することになつた。然し其鷄卵が本當に新鮮のものでなくてはならぬことは言ふまでもない。これがため私の家は少からず苦心したそうである。[illegible]といふ[illegible]ことは言ふても、それで[illegible]なかなか[illegible]よし素人の手から買ふにしても、矢張不安の點がある。病人に產みたての卵を與へることは此際重要なることではあるが、さてどうすれば其卵が得られるかと妻は頻りに煩悶して居た。恰も其時私の近所に住んで居るT夫人が病氣見舞のため私の宅を訪問して呉れた。此夫人は總選擧の時分から初めて知り合となり、私の當選に對しても心から喜んで呉れたのであるから其後は益々親しくなつた。T夫人は卵の話を聽き且つ毎日の要求は單に二個に過ぎないことを知り、幸ひ自分の家には數羽の鷄を飼ふて居るから毎日二個だけは必ずお屆けすると快よく引受けて呉れた。其後毎日送り屆けられた卵は本當の產みたてで、まだ溫味をもつて居たそうである。T夫人は約五十日間一日も間違なくこれを繼續して呉れた。こんな嬉しいことはなかつたと妻は感激に滿ちて度々私に此事を話したのである。

病後の靜養につきても私は知人からのみでなく、未知の人からも身に餘る同情を受けたのである。私の退院も最早時日の問題となつた頃から私は時々家人と病後の靜養につき語り合つたことがある。私は夢現のように或時は伊香保や信州の溫泉のことを思つたり、或時は伊豆や箱根に遊んで居ることを想像したりした。然るに意外にも溫泉地から二つの別莊が提供されたのである。一は[illegible]の[illegible]、他は六月五日に[illegible]からの[illegible]を[illegible]し、[illegible]強羅の別莊を[illegible]のため貸與するといふのであつた。[illegible]に一も二もなく其厚意を[illegible]

それは同地に於て一流のホテルを經營して居るA君から來たのであるが、A君は全く未知の人である。手紙の內容は大體次の如きことであつた。別府溫泉は決して靜養の地ではないけれども、自分は別府から四五里離れた山地に別莊を所有して居る。溫泉がある上に夏期に於ける氣候も頗る凉しい。これを提供するから是非其處で靜養されては如何といふのであつた。未知の人から斯樣な厚意を聽くだけに私は一層感謝の念に打たれたけれども、既にN君の厚意を受くることに決したのであるから、A君には感謝の手紙を贈つて其厚意を謝絕することにした。

病後の靜養地も決定し、六月十九日からはベッドにつかまりながら其周圍を步行するようになつてから、退院の日も最早遠くはないと考へられた。然し意外の故障が生じて私の退院は未決の問題となつた。其頃から足に浮腫が現はれたので、醫師は私の尿を試驗したのであるが、チフスの餘病として生じ易い腎臟病のためであることが判つた。私はそれを聽いて少からず失望した。絕對安靜を要するといふので室內の運動は禁ぜられ、食物も雞卵、魚類、肉類は一切喰べることが出來なくなつた。折角回復しかけた私の健康も全く一頓挫を來したのである。

病院に止まることは何とも言へぬ苦痛となつて來た。相變らず夜が眠れない。病院には蚊帳を釣る設備が出來て居ないので蚊嫌ひの私は最早堪へられなくなつた。腎臟病ならば私に治療の經驗もあるから、自宅でも病院でも大した差異はない。斯く考へると病院生活が全く厭になつた。六月廿九日の午後院長の診察があつた時私は上記の理由を述べて退院の許可を請ふたのであるが、院長は案外容易にこれを容れて吳れた。其時は既に五時を過ぎてゐたけれども私は妻や二男を督促して歸宅の準備を整へたのである。

腎臟病が治らない限り私共は箱根に行くことが出來ない。四日每位に尿の試驗を行ふたが、蛋白が容易になくならないので私は又焦り氣味になつた。私共は兎に角七月廿五日に箱根に行くことを決定したのであるが、幸にして其前日に於ける試驗の結果蛋白が全くなくなつたことを醫師が報告して吳れた。

七月廿五日から九月廿日に至る約二ヶ月の箱根生活は充分に私の健康を回復した。九月二十日東京に歸つてから私は一層丈夫になつた。此頃は每日平氣で一里半位散步して居るけれども、立つたり坐つたりする時には腰がフラついて、また健康が充分でないことを示して居る。今一つ不充分と思はれるのは音聲である。これは咽喉がまだ舊態に復して居ない證據である。腦もまだ平常の如くでないから、單に新聞を讀むだけで、雜誌や書物には手を觸れて居ない。少くとも本年中は尙ほ靜養の情態を繼續したいと思ふて居る。

同情して下さつた諸君に私の近狀を報告するため、一切執筆や談話を謝絕して居るに拘はらず、特に改造社の要求に應じて此文を草することにした。

漱石の思ひ出（十四）

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

十月號の讀者へ

本誌十月號布施辰治氏の『陪審裁判と共産黨事件』の一篇が其筋の忌諱に觸れ削除いたしましたため、『漱石の思ひ出』の最後の頁も切り取るやうになり讀者諸氏に御迷惑をかけました。それで切り取つた部分を次に掲載します。（編者）

この年の十一月に、中村是公さんに誘はれて、一週間程湯ヶ原へまゐりました。かへつて來てからの話に駕で箱根へ越したなどゝ申して居りました。

此頃には、以前からおいでになつた所謂漱石門下といはれた人達の外に、若い人達が大分お見えになりまして、一時一寸さびれたかと思はれた客間も賑かになりました。[illegible]たでせうが、ちよい〳〵おいでになつて居たやうです。中でも賑かなのは赤木桁平さんで、家中にとほるやうな甲高い聲で、始終喧嘩でもしてゐるやうに一人でしやべつてらつしやいました。姿を見たのは餘程後のことで、私は聲だけ聞いてるのですが、あの聲はどなたですと尋ねますと、夏目が、あれは赤木桁平といつて、あの字をケタヘイと讀むと怒るんだよ。あれのいふことはよくきいてると片側町でね、裏は田甫なんだよなどゝ冗談を言つてゐたことがありました。それから來ては殆んど商賣のやうに字や繪をおかゝせになる中央公論社の瀧田樗陰さん、この方も風變りな常連のお一人でした。少しおくれて芥川龍之介さん久米正雄さん、それから松岡など、まだ此外にも若い方々がよくお見えになりました。しかし大半は私名前や聲や、時には隣の部屋で聞く聲位のもので、お會ひして顏をおぼえたのは、夏目が亡くなる時から[illegible]

六十　溫泉行

大正五年の正月には夏目も數へ年の五十を迎へました。大患以來每年引き續いての病氣に、此頃ではすつかり老け込んで、髮といはず鬚と言はず、隨分白くなつて居りました。

この正月元日の夜のこと、例年夕方から夜へかけて澤山の若い方々がおいでになります。そのお相手をして、御屠蘇氣分の氣焰を聞いたりして居るのでしたが、此年も愉快さうに御相手をして居りまして、皆さんがおかへりになりますと、こん度は小宮さんだつたと思ひますがお一人だけお殘りになつた方と一緒に離れへ參りまして、子供たちのお仲間に入つて歌留多を取つて遊んで居りました。此頃私どものところは家が狹くて間數が少ないので、同じ屋敷内にある小い家を一緒に借りまして、そこを子供たちの勉强部屋にしておいたのですが、そんなところへは何年にも足踏みしたこともない癖に、此日はどうしたものか大變上機嫌で遲く迄遊んで居りました。が札の方はからきし取れないので、小宮さんあたりが少し取れる口で、あとはみんなだめなのですが、其のへぼ連中の中でさへ、それそこにあるとか何とかばかり言つて居て皆目取れないのだから滑稽なのです。「天津風」なんかを前においてにらまへて居るのですが、その札さへ子供達にぬかれたりして參つて居りました。

正月のうちに片方の手が痛いと申しまして、按摩をしたりお湯に入つたりして居ましたが、いつまでたつても同じやうな痛みで埒があきません。神經痛かリョーマチスのやうなものらしいのですが、さりとて痛んで痛んで仕方がないといふ程でもなく、とにかくそれを氣にして不便がつて居りました。そこで溫泉へでも行つてはといふので、湯ヶ原へ行くことになりました。

とにかく利き腕が痛いといふのですから何かにつけて不便でせうと思ひまして、行きます前に、私がついてつて上げられゝば一番いゝのですが、一寸家をあけて子供達ばかり殘すといふわけにも參りませんから、代りに看護婦でもお連れになつてはと申しますと、考へて居ましたが、まあ、よさうよと申します。何故ですかと尋ねますと、とかく男一人女一人なんてのはいけないからといふことに、ではなるべく年寄りの看護婦をお連れになつたらと言ひますと、自分ではこの齡さん間違はないとは思ふが、しかし人間にははづみといふ奴があつて、いつどんなことをしないものでもないからだといつて、とうとう一人で行つて了ひました。

亡くなつた後で何かのきつかけでこの話を森田草平さんに致しますと、先生といふ人はいつもこれだ、先へ先へと用心して世を渡る人だが、實際妙な癖だと、さもさも行き當りばつたりのことをしないのが惜しいつてな口調でしたが、やがて、しかし先生はうまいことをいふ、はづみが怖いといふが、實際男と女との間なんてものは、其時々のはづみだからなと感慨深さうに言つてゐられたことがありました。

何でも參りましたのが一月の二十日過ぎのことで、それから二月に入りまして、どんな工合だか一度見舞に參りませうと思ひまして出掛けました。一人のことで淋しいだらう位に思つて行きますと、湯ヶ原の天野屋の玄關へ立ちますと、番頭さんが、中村さんたちと御一緒でございますがおよろしうございますかと尋ねます。それぢや中村是公さんたちも見えてらつしやるのだなと初めて知りまして部屋へ案内して貰ひますと、丁度皆さん御一緒でおひるの御飯をたべてらつしやるところでしたが、見ると夏目と中村さん、それに同じ年輩位の男の方が一人、外に例の新橋あたりの阿婦者が一人。なる程、皆さまと御一緒でよろしうございますかと言つた番頭の言葉が讀めたわけです。私が入りますと、それを見て中村さんが奥さんですかと言つて挨拶をなさいます。と、それをきつかけに男の方と阿婦者とがつと立つて姿をかくして了ゐました。聞いて見ると、夏目が一人で淋しいので呼んだものか、中村さんの方で見舞がてら遊びにいらつしたものか、かうやつてしばらく一緒にいらつしやるといふお話でした。もう一人の方は滿鐵の田中さんといふ方でしたが、田中の奴どこへ行つたんだらう、飯を食ひ散らしてなど、夏目が言つて居りましたが、後で外の部屋へ避難してらつしやる田中さんのところへ中村さんがいらして聞いてらした話に、夏目の醜態なら逃げるんぢやなかつた、私も識つてるならその事で遠慮してくれゝばいゝのに、側に[illegible]さんいらつしやい[illegible]と[illegible]いふお話に、成程、言はれて見れば夏目も夏目で、僕の家内ですとも言はず仙人氣取りなのですから、私といふものゝ正體が何であるかはわからなかつたものと見えます。女の方は田中さんのお連れの方でした。

湯ヶ原でも療養に行つたのですから呑氣の樣子でした。どこへ行つてもつきものゝ字なんかを書かされて、二月の半頃歸つて參りました。かへり際に鎌倉の中村さんの別莊に二晩ばかりとまつて來たやうでございます。

一體、若い時から神經痛だのリョーマチスだのといふ氣がない人で、按摩なんぞでも揉ったいと言つて嫌つてゐたものでしたし……第一頭が重いの體が重いのといふことを自體知らないと言つてゝ人でした。それに引きかへ私と來たら、年中肩がこるの頭がいたいのと言つて、氣候の變り目などにはよく神經痛をおこしたりしたものでした。それがこの年になつて珍らしく夏目がそんなことを言ひ出したのでしたが、それといふのも後でわかりましたが、其時すでに糖尿病がおつからでございませう。

六十一　糖尿病

四月の初め頃のことでしたか、又も胃を惡くしてゐましたが、これも大したことはなくいゝ鹽梅にすぐに癒りました。この前にこの病の[illegible]

[illegible]

りまして、年百年中藥をもらつて居るので、一寸惡いといへばすぐに來て手當をして下さるといふ風でした。ところが此方がたしか四月だつたと思ひますが、一寸十日ばかりおわづらひになつて亡くなつてお了ひになりました。藥のことはそれでも殘つた方にずつと調合して頂いて居りましたが、いつ何時どういふことがないとも限らない病人をかかへてゐるも同然なのですから、かういふよく病狀をお存知の方でお心安い方がいらつしやらないと困ります。さあ、どうしたものだらうかと不安に思つて居りますと、いゝ工合にそれ切り胃の方を惡くしません。

この須賀さんが亡くなられる前後に、昔松山中學で英語を教へたといふ因緣で、今の大學の物療の眞鍋嘉一郎さんと何かの機會にお會ひしたところ、自分の健康のことが話に上り、それでは一度診て上げやうといふことであつたさうですが、診て頂いて、檢尿をして頂くと糖尿病だといふことで、それからといふもの、始終尿の檢査をして貰つては、專ら食へ物などの指圖をうけて、その方の療養を續けて居りました。それで糖も日に增し少くなつて、自然手の痛いのなども忘れるやうになりました。

其後ともずつと眞鍋さんの仰言るとほりに、日をきめては大學の物療へ尿をお屆けして檢査して頂いて居りましたが、こんなことは隨分几帳面で、自分から病氣をしに世の中へ生まれて出たのだなどゝ言つた位、食前食後の服藥、食餌療法、その他なんのかんのといふことをさ程面倒臭いといつた顏もせずきちんと續けて居たものでした。

こんな工合で糖尿病も大分いゝといふので喜んで居りましたが、例の胃がいつ何時やつて來ないものでもないところへ、かゝりつけのお醫者さんが居られないので、いざといふ時にはどうしたものかしらと内々案じて居りますと、毎年夏にはきまつて床につくのが、此年に限つては至極健全で、秋になつてもどうといふことはございません。不安がつて居た私は、その爲めにかへつて二倍にも安心致しまして、此分ならば家のことを片付けて、一週間や十日家をあけても大丈夫と思ひまして、十一月にもなりましたら、年來の望みだつた伊勢詣りでもしたいものだと、名古屋の妹のところへ手紙をやつたりして、そのつもりで居たのでした。この二月夏目が湯ケ原へ療養に行つてる間に、この妹の長女が、丁度私の長女と同年で仲のいゝ間柄でしたが、ふと惡性のチブスにかゝつて亡くなりました。妹がそれを悲んで居たりしたので、慰め旁々一緒にお伊勢様へ案内でもして貰ふ積りだつたのです。ところがそれどころでなく、十一月の二十二日に死病の床について了つたのです。これは後でお話いたします。

全體此夏頃から、後で考へれば何となく生氣がなく、背中へアセモらしいものが出來てお湯から上るとはそれに粉の藥をすり込むやうに塗つてやるのでしたが、藥を擦り込みながら背をさすつて居りますと、氣のせいか背中の肉が一日增しに落ちてく氣勢がします。最初はそれ程にも氣がつかなかつたのですが、氣がついて見ると氣のせいか

それが大變ひどいやうで、指の尖で一日一日とやせて行くのがわかるのでした。どうも不氣味なとだ。夏まけかしら。それとも糖尿病の食餌療法で食べ物が違つたのでからも目に見えて痩せるのかしらと、何にしてもいやなとだと思つて居りました。が、自分で氣になる丈にかへつて夏目には話もしませんでしたが、それが十一月頃になると、めつきり痩せ衰へて居りました。今から思へば此頃からもう死の前兆があつたのでございませう。

ところが肉體の方はそのやうに段々衰へてまゐりますのに、創作の方は大變油が乘つてる樣子で、六月頃から朝日新聞の爲めに書き出した長編小說『明暗』を、きちんと一回分づゝに前に書き上げて、出來上るとそれをポストへ出しにまゐります。それから小說ばかり書いてると頭が俗になつて堪らないとか申しまして、小說がすむと午後から夜へかけて漢詩を作るのが、この夏あたりからの日課のやうでございました。私などにはそんなとは申しませんが若い門下の方々などには以前大學の敎職にあつて講義した『文學論』なんてものは仕方のないものだから、今漸く自分の文學觀といつたものが出來たから、それによつてもう一度前の名譽恢復に講壇に立つて見たいなどゝ申したり、『明暗』の批評などもー顧だに値しない點で、まあ出來上りを見てくれといつた自負の呼吸を洩らしたり、賦氣熱などゝいふと、悟りとか諦[illegible]いふやうなことなどをしきりにお話しして、[illegible]

[illegible]ます。

この新らしく作りました詩なども、『明暗』を書き上げて了つてからゆつくりお淸書をする積りだつたのでせう、書きよごしの原稿紙にいつもその作つた詩などの手習ひをして居りました。それから小說を書き畢つたら大幅の三幅對の繪を描くなどゝも申して居たさうですが、『明暗』を書いてるうちは、むづ〳〵しながらも、邪魔になると思つてか、さうしたものに手を出さうとしなかつたやうです。それだけに又『明暗』には打ち込んでも居たのでせうが、半途で病に斃れたのは本當に殘念なとでございます。自分でもこればかりは心殘りだつたでございませう。

六十二　書かせ上手の瀧田さん

この亡くなる前の丁度一年間といふもの、たしか前年の十一月頃からだつたさうですが、毎木曜の面會日となるとは、正午過ぎ早々中央公論の瀧田樗陰さんが俥でいらつしやいました。さうして紙をどつさり持ち込んで來て、自分で墨をおすりになり、毛氈を敷き、紙をのべて、一切の準備をとゝのへて、さあ、先生お書き下さいといつた工合に、殆んど手を持たんばかりにして詩や繪をお書かせになつたものです。それも少し遲く來ると殺い方達が次々にお見えになつて話がはずむ。さうなると邪魔だといふので、暫く、皆さんがお見えにならない間に、[illegible]

の太つた金太郎さんみたいな格好で、紙とか手紙とか筆洗とかいふものを一抱え抱えて上つていらつしやるのです。さうして二三時間の間といふもの殆んど休みなしに、何かとお書かせになるのでした。

一體瀧田さんといふ方は遠慮のない方で、どうも人の迷惑などゝいふことには餘り氣を使はない質の人だつたやうですが、もう一たん來てつかまへたとなると最後、後から訪問客があらうとそんなことにはお構ひなしに、どん／＼御自分の計畫を運ばせになるとしか見えません。だもんですから皆さんで、瀧田の奴は失敬だ、不遠慮に先生を占領してなどゝいふ不平もあつたやうです。しかしそんなことにかけては瀧法千萬な人で、何んと言はれやうとかんと言はれやうと、どし／＼自分の流儀を實行してられたやうでした。

その又何かとお書かせになるのが、瀧田さんにはこん度はかういふのをかいて下さいといつた注文があるので、『我輩は猫である』と書いて下さいとか、『時鳥厠半ばに出かねたり』と書いて下さいとかいふのを初めとして、屏風にするからとか、いや、何をかういふ風に書いて下さいとか、この繪に贊を入れて下さいとかいつて中々注文があるのです。それを氣むづかし屋の夏目が文句も言はず、言はれる儘に書いてやつて居たのだから、余程書かせる呼吸がうまかつたのでせう。或る若い方などは、先生はおとなし過ぎる、瀧田は橫暴だなどゝこれを見て憤慨して居た人もありましたが、そこが瀧田さんのうまいところで、とにかくその日書かせたものは、次の木曜日迄には大急ぎで表裝をさせて持つて來られ、さうしてそれに箱書きをさせて一々共箱になさるのですから、書く方でも惡い氣持がしないのでせう。俺のそんな下手なものなんかをどし／＼表裝する奴が居る、無駄なことだなんて言つてゝも、そこはやつぱりさう迄されて見れば滿更でもないでせうし、それにどうせ木曜日は一日面會日につぶして居るのですから、紙から一切持つて來て、好きな手習ひをさせてくれる位に片方では考へて居るのでせうから、そこはすなほにいくらでも御稽古の積りで書いたものと見えます。書畫には大分氣が有つたやうですから、かうやつて大に稽古して居て、いづれいゝものを書く位の氣で居たものと見えます。

しかし、いくらお稽古の積りでも、人にやるのだから餘り見ともないものはやりたくない位の氣はあるのに、默つて居ると書き損じでも何でも持つて行かれるので、そこで出來の惡いもの氣に喰はないものは絕對にやらないといふので、さういふものは書いた後から見てる前で引き千切つたりなんかして了ゐます。又素人のことですから、繪なんかも面白半分描いてるうちに段々あゝでもない、かうでもないと慾が出て來て、いぢくつてゐると、そのうちに氣に入らなくなります。とびりびりと破つて了ふので、繪がいい加減に出來かけて形をなして來ると、あゝ、面白い、よく出來ました、もうそれでいゝですなんかと、書いて貰ふ方ではひや／＼しながら早くよさせようよさせようとしたものです。しかし夏目の方では中々これでいゝと自分の得心の行

く迄は人手に渡しやしません。さうしては引き千切るやうなことによるのでした。

何でもかんでも持つてかへらうとするといふのでせう、瀧田さんのことをぼろつかひだなどと申して居りましたが、そのぼろつかひの手をのがれたものを一纏めにしておいて、暮の二十八九日頃になると庭へ出て、私の末の弟や植木屋などに火をつけて燒かせます。燒きながら一つ欲しいなと思つても、側について監視してるのだからどうにもなりません。亡くなつた時、丁度年末近くだつたので、この書きくづしが一抱え書齋にございまして、燒かれる運命をまぬがれたのでしたが、手直しのいゝのは別として、誰しもまださう急に亡くなるとも思はず、普段は何時でも書いて貰へると思つて何にも書いて貰はずにおかれた方々が澤山おありになつたので、生きて居りますれば勿論日の目を拜むものぢやなかつたのですが、これをかたみにお存知の方々へお上げ致しました。

當時は瀧田さんが一人で書かして一人で占領するといふので恥ら非難もあつたのですが、しかし今から考へて見れば、若し瀧田さんのやうな熱心な有志家がなければ、假令どういふ動機が瀧田さんの頭の中に働いて居たにせよ、とにかくあれだけ澤山のものを遺こすことはとても出來なかつたことで、この點は幾重にも瀧田さんに感謝してもいゝことだらうと存じます。殊に不平不滿を言つてくれた方々などが、それでも一點二點手に入れられたのなども、大體瀧田さんの搾つて來られた紙に書いてるのを貰つたものが多く、書き損じの消品の消息などでも、さういふ意味からは大體瀧田さんの餘慶といつていゝかも知れません。生前、そんな不平が洩らされると、貴樣達は自分のものをもつて來もしない癖になどゝ夏目が言つて居たものですが、誰が何を持つといつたやうな小い考を離れて大きな目で見れば、とにかく或る意味に於ては恩人だといつていゝかも知れません。瀧田さんの前には森次太郎さんがあつて、この方は瀧田さん程圖々しくはなかつたやうですが、大分早くから目をつけて、何かとお書かせになつたやうでした。

何しろこの年に書いたものは夥しい數に上りませう。大正九年の漱石遺墨展覽會といふものをやりました時に、瀧田さんから出陳して頂いたものゝうちで、掛軸ばかりが五十點位、それに屏風などもあり、色紙短冊などは各々帖をなしてる外に、またお持ちの樣子で、とにかく大變な數でした。が、この蒐集も二三年前、瀧田さんが亡くなられて日本俱樂部あたりで入札されて散つて了つたやうです。しかし、この澤山のものも、書は歸去來辭の全卷などゝいふ長さ四間もあるといふ横卷の大作は別としまして、あとは半折程度のものが多く、繪も前に描きました細々した南畫風のものはなく、全く南畫式のもので、簡單な墨繪に彩をしたものや、あつさりした淡彩のものでした。自分に打ち込んだものは、描くと人にやるのが惜しくなると見えて、お藏させて自分の手元におくのでした。

瀧田さんはこれが[illegible]

つしやいまして、何かと持つて來て下さる樣子ですが、夏目も瀧田が入つて來ると今日は何をもつて來てくれたかしらと小脇を見るなど丶笑つて居たとがあります。しかし瀧田さんも中々考へて居られて、硯や墨などを持つて來て下さる時には、墨は自分で書いて貰ふのだから飛び切り上等のものをもつて來、硯は置いて行くのだからといふのであんまり上等でない安物を持つておいでになる。それを夏目が彼奴考へで慾張つてゐるなど丶看破しまして、その硯はどこから買つた逆、の晩翠軒ですとわかると、晩翠軒へ電話をかけて、自分で電話口に立つて、瀧田さんの買つて來た硯は惡いから、もう少しい丶硯をもつて來てくれ、餘分の代は自分が拂ふからなど丶言つて居たとがありました。こんな風にして前年の十一月頃から死ぬ年の十一月頃迄、瀧田さんは根氣よく木曜日には通ひつめて來てお書かせになつたのでございます。

夏目の古い親類で田中といふ質屋が牛込にありまして、そこで字を書いてくれといふので紙を二枚屆けてよこしました。日ならずして一枚書いて屆けてやりましたが、受け取つたとも有難うとも申しません。夏目も田中て奴は物を知らない男だ。人に賴んで字を書かせておいて、一言も挨拶をしないと何かの時に申しましたので、それを矢來の兄さんに傳へますと、兄さんの方から又田中へ言つたものと見えます。すると田中の方では商賣人のことだもんですから、二枚紙をやつたのに一枚しか屆かない、いづれ又二枚目のが屆くだらうから、其時にたつたら挨拶をしやうと思つてゐたと、一枚の時に何とかしたら損でも行くといつた話を聞きましたので、其事を夏目に話しますと、人に一枚字を書かせやうと思つたら二枚持つて來るのが禮儀のものだ。一枚は此方で取つておいてい丶ものになつてるのに、どうも物を知らない慾張りには困ると言つて居たとがあります。

人樣のものはいくらでも賴まれ丶ばお書きするのに、私も一枚書いておいて貰ひませうと存じまして、私にも一枚何か書いて下さいと賴みますと、どうするんだと尋ねます。いづれ家でも建てたら、自分の部屋へかけておくのに書いて下さいと申します。と、その家の建つのはいつのことかなど丶笑つて居りましたが、お前なんかいつだつて貰へるぢやないかなど丶言つてそれでも書いてくれました。私は見ずに卷いたまま簞笥の中に入れて置きました。

すると床へつくほんの數日前のことでございましたが、いつぞやお前にやつたあの書を出しなさい、あれは出來が惡いから書きなほしてやると申します。しかし出したら其場で引き千切られるにきまつて居りますので、いやです、出すとやぶかれるんですものと否みますと大丈夫、きつと約束した。すぐに書きかへてやるからと申します。仕方がないので出しますと、それを持つて行つて直き代りに書いてくれました。それをそのまゝ元の簞笥にしまひ込んでおきました。亡くな

つてからそれを思ひ出して、ひろげて見ますと、一枚かと思つたら二枚で、自分の詩を全紙に書いておいてくれたのでした。

やはり此頃のこと、つまり虫が知らせたとでもいふのでせうか、同じく中村是公さんのところへいきなり賴みもしない字が屆いたさうです。どうしたんだらう、夏目の奴、書けたつて中々書きもしない癖に、賴みもしないものを氣まぐれに、これが出來たからやらうなどゝわざ／＼送つて來たのはどういふ氣だらうと、中村さんが奥さんにお話しになつてたさうですが、丁度欲しがつてる人があつてそれを見てしきりに所望するので、夏目のゝならいつでも書いて貰へると思つてらしたので、それをすぐ人にやつておしまひになつたさうです。が私ののと言ひ中村さんの場合と言ひ、かれこれ思ひ合はせると一寸妙な氣が致します。

六十三　二人の雲水

二年程前から、神戸の祥福寺といふ禪宗の僧堂に居られる雲水の鬼村さんといふ方から、ちよい／＼手紙を寄こされ、それが無邪氣で眞面目でいゝ氣持だつたのでせう、ずつと手紙の來る度に返事を出すといふ工合で手紙の上の交際を續けて居りましたところ、後にはそのお友達のやはり雲水で富澤さんといふ方からも手紙が來て、つまり同じ僧堂の雲水さんから二通づゝ手紙を貰ふといふ順でありました。鬼村さんの方が年下で、[illegible]と思ひます。[illegible]富澤さ[illegible]崇拜といふのでせう、お寺の裏の竹藪の中に入つて「猫」を耽[illegible]て、和尚さんの惡口なんかを「猫」の口調で書いて來るといつた調子頗る愛嬌があり、やにつこい小說や七面倒臭い讀物などに飽いてる頭には、それが大變氣持よく受け入れられたものと見えます。先方でも乏しい財布の中から名物などを送つてよこす、此方も新らしい自分の本が出たり、又坊さんが讀みたいといふ哲學の本なんぞを送つてやつたりして居りました。

するとこの年の十月にお二人から手紙が參りまして、年來の宿願で東京見物がしたい、しかし元より雲水のことで金のある道理もないのだから、どうか泊めてくれないかといふのでした。手紙を見せまして私にどうだ、泊めてやれるかとのことに、私も折角のことではあり、手もかゝらぬ人達のことでせうから、それでは何とかしませう、若しどうしても不便のやうだつたら、近くに同じ臨濟宗の大きなお寺なんぞもあるのだから、何とかなるでせうといふのでお宿をするとに致しました。さうして離れの子供たちの勉強部屋をあけて、ともかくそこへ迎へるとに致しました。

さて二人の若い雲水が、あの雲水の法衣のなりでチビ下駄を穿いてやつて來ました。頭がきれいに丸いので、家の子供たちがくす／＼笑ひます。しかし二人ともにいゝ人達で、少しも氣が置けず、それにいつも書齋へ出入りされる小說家や小說家志願の若い方などと違つてこと[illegible]

ぬうつとしてゐるのか、とにかく一向氣づまりないらく〳〵したところがございません。それが大層夏目の氣に入つた樣子で、自分は案内は出來ないが、今日はどこへ行くといゝとか相談相手になつて、行く先やら電車やらを敎へてやり、かへつて來ると其日の行程を聞いて笑ひ興じるといふわけでございました。とにかく毎日朝道を聞いて出かけると、夕方になつて飄然とかへつて來ます。おひるに何をたべたのと尋ねますと、蕎麥屋へ入つてもりをたべたといふ。大たべな人達のとですからいくつたべたのと聞くと八つづゝたべたが、東京のもりは內味が少くてまだ足りなかつたといふ。しかもその八つを一度に頼むのは恥しいから一つづゝ〳〵と註文してぺろりとたべるのだといふので又も大笑ひをします。

どこか芝居を見せて上げやうといふので、一度歌舞伎座へ案內し、一度は活動寫眞を觀に帝劇へ案內しました。洋食堂で一緒に御飯を食べますと、一人の坊さんがビフテキを半分卓の下に落して了ゐました。するとそれをいかにも當り前だといつた平氣な顏をして、拾ひ上げると何の氣なしに食べて了ふのでした。それからどこでゝも御飯の度には手を合せて禮拜します。食べ物に文句はなし、何を出しても氣持よくどつさりたべるといふ風なので、その僞りのない、あけすけとした、しかも單純のうちに儀禮と感謝の念のこもつてるのが痛く夏目を感心させた樣子でした。

この帝劇へ行く時でしたか、電車に乘りますと大變混雜して居ます。私たちは眞中の方に入つたのですが、坊さんの一人は戸口に立つて居ました。すると一人の婦人が同じく隣りに立つてゐるのですが、どうしたのかその人が人形を抱いて居まして、ふと坊さんの姿を見ると、何と思つたのか、一寸人形を抱いてゝ下さいませんかといつて差し出しました。坊さんも頼まれたので抱いて居りますと、其うちに降りるところへ來たと見えて、どうも有難うございましたといつて人形を受け取つて降りて參ゐります。何が何やらさつぱりわからないのですが、かへつて來ての話に、東京の女てみんなあんなものですかねと感心して居ます。さうしたとぼけたところが又も氣に入るといふ風でした。一體かうした單純生活には前々から憧憬をもつて居たのでせうし、自分も若い頃一寸鎌倉の圓覺寺で坐はりに行つたとかいふ程でしたのですが、かうした生活を、特別な禪堂といつた場所でなく、自分の家で一緒に居てまのあたり見て、いよ〳〵好きになつたといふところがあつたやうでした。さうして禪堂の實際の生活狀態の話などに大變興がつて居りました。臘八接心の後で甘酒の接待がある、それもたつた一杯切りといふので、せい〳〵大きな丼を買ひに行くなどゝいふ無邪氣な話や、お湯に入ると五人ばかりも輪になつて、てんでに背中の洗つこするなどゝいふ話や、それから自分のものは一切自分で洗濯をするなどゝ一人がいへば、だつて貴公は褌のきたないのをどつさりためとくぢやないかなどゝやり返す滑稽や、一人の坊さんといふのがごく簡單な寄せ算しか出來ない、つまり數の觀念といふものが

ないのに會計方をやつた可笑い話など、みんな夏目を喜ばせ、何かかう懐いといつた感じさへ起こさせたものと見えます。

實際かういふ素朴な生活を見るにつけ夏目に思はれるのは、自分の間近にひろがつてる周圍の若い方々の生活であつたらしいのです。みんなそれ相當にお出來になる世間なみには立派な方々ではありますが、どうも話がやゝこしい、誰がどうしたの彼がかうしたのと年がら年中夏目の耳に聞こえて來るのは、大して愉快な話といふものがありません。其上みんな神經質でいらく／＼して、頭ばかりが發達して七面倒くさい事が煩しい。つく／＼それとこれとの比較をしたものと見えまして、此雲水さんたちが神戸へかへつてからやつた手紙に、貴方々は私のところへ集まつて來る若い人達より余程尊い人達です、有難い人達です。私のところへ集まる人達も、私さへもうちつとえらければどうにかなるだらうがなど、感じの一斑を洩らして居りますが、余程さうした感慨は深かつたものと見えます。

日光へ行く旅費をやつて日光見物をさせましてから、二人の雲水さんはかへります。かへつてからしきりに手紙をよこします。かへりぎはに一人には杉の畫に讃を書き、一人には竹の畫に自讃をつけててんでに贈りました。さうして自分からもしきりに返事をやつたりして居りましたが、余程氣に入つたものと見えまして、亡くなつて後で見ますと、机のわきの手文庫の中に、その二人の若い雲水の手紙ばかり纏[illegible]

雲水さんたちがかへつて一月もたゝないうちに病床につくのですが、丁度夏目が危篤になつた頃には、禪學の方では大事な臘八接心の眞最中で、接心に入つては新聞も讀むことが出來ないので、そんなことは何も知らずに居たさうですが、八日に臘八があけて、晩には例の甘酒の接待があるといふので、大きな丼を樂しみにして神戸の町へ買ひに出たのが若い方の雲水さん。町でふと新聞を見ると夏目が危篤だといふそにびつくりして、甘酒の樂しみなんぞどこへやら、大きな丼を抱いたまゝ、ぼろ／＼大粒な淚を流し乍ら、神戸の町をところかまはず歩いたさうです。夏目は翌日の九日に亡くなりました。時を移さず二人から弔電が來ました。一人から『始隨芳草去又逐落花回』一人からは『野花燒不盡春風吹又生』といふのでしたが、前のゝは夏目が好んで書いた句なので一層感じの深いものがございました。

六十四　死床につく

十一月二十日前のことでした。山田三良さんの奥さんがお見えになつて、その二十一日に御自分のお妹さんが辰野隆さんと結婚され、その披露が築地の精養軒であるから、是非出席して頂きたい、辰野の方でも、是非にと望んで居りますからといふお頼みなのですが、相變らず夏目の方では、自分はのつぴきならない義理のある席の外はどこへも出ないことにして居るし、又そんな席へ出るのが[illegible]

折角私がかうやつて上がつて、こんなにもお願ひするのですから、そんな因業なことを仰言らずに來て頂きたいと涙を流してのお頼みです。夏目もそれに動かされて、私を呼びまして、どうだいと申します。そこで私も奧さんの身になつても考へて上げると、さう迄仰言つて下さるのにと存じまして、折角なんですから參りましてはとすゝめましたが、ふと考へてどうしてもおいやなのですかと念を押しますと、いや、どうしてもといふわけではないが、どうも面倒臭いものだといふ例のとほりの曖昧な返事です。ではとにかく其時になつて行けないやうだつたら其時として、一旦おうけしておいたがよからうといふので、奧さんも大層お喜びになつておかへりになりました。

　さてお請合はして見たものゝ、奧さんがお歸へりになつてから考へて見ると、私の被服がないのです。といふといかさま不樣のやうですが、實は何年か前に昔妹が結婚する時かにこさへた物で、其上自分がめつきり此程肥えて來てゐるのでどうにも着られさうにない代物なのです。どうしたものかと夏目の耳に入れますと、そりやこさへたがいゝだらうと言つてくれましたので、三日のうちに間に合うかどうか、間に合はなかつたら失禮するとして、ともかくすぐと三越でしたか白木屋でしたかへ走りました。行きますと、下足札から註文をうける番頭の番號から、どれもこれも重ね重ね四十二とか何とかいふいやな番號なので縁起でもないと顏をしかめました。

　さて當日の二十一日になりますと、心配して居た紋付もいゝ工合に間に合ひました。着て見て氣のついたことですが、下駄から帯から何から何迄すつかり新らしものづくめなのです。變なことになつたものだなどそれが又氣になりましたが、ともかく出かける時刻も迫まつたので書齋に參ゐりますと、胃が痛いといつて、面白くない顏をしてぼんやりして居ります。無理に連れ出しても惡いし、後で又床につかれるやうなことがあつてはと存じまして、そんならどうなさいます、おやめにしませうかと尋ねますと、行けないことはないから、行かうと申しまして、それから大儀さうにして仕度をしました。精養軒へ行つて見ますと、どういふのか食堂の席が、男女別々になつて居ります。出がけに胃が痛いといつてゐたので内々心配して居りますと、食卓へ南京豆が出て居ります。惡いものが出てる、自分が側に居たらとめるのだが、ひよつとしたら誰も小言をいふものが居ないのをいゝことに食べてるかも知れない、と申しますのは、夏目が又この南京豆が大の好物で、散歩をしたりしますと、どこで見付けるものやら、砂糖のついた南京豆を一袋かつて參ゐりまして、机のわきにおいて一人でぽつ〳〵たべたり、時には子供達にもいゝものをやらうなどといつて一緒に食べたりするのですので、なるべくそんなものは胃の爲めに食べてくれない方がいゝと思つて、見るとは沒收したりして居たものなのです。どうも此日は遙かに樣子を見てるとつまんで居るらしいので、後でやられなければいゝがと案じて居たものなのです。

　それで氣になつてゐたので、かへりに一緒になつた時、貴方、豆を

たべましたかと尋ねますと、食べたと申します。胃が痛いなんかといつてゝいやな人ねと言ひますと、なあに、もうすつかりなほつたよと、來た時とは違つて大分氣分もよろしいらしく平氣で言つて居りました。其晩は何事もなく安眠致しました。

ところが翌日になりますと、通じがなくつてお腹が變だから浣腸をしてくれと申します。これも始終のとですから浣腸をしてやりまして、しばらくしてから通じがありましたかと尋ねますと、あゝといふやうな生返事でした。がそれ切り書齋へ引つ込んでひつそりして居りました。いつも午前中は『明暗』一回分を書くのが日課なので、てつきりそれをやつてるとだらうと思つて居りますと、おひる近くなつて食前の藥をもつて行つた女中が、旦那樣がお机に打つ伏せになつてらつしやいまして大分お苦しい樣子ですと申します。驚いて行つて見ますと、189と小説の回數を書いた原稿紙に打伏せになつて、一枚も書いて居りません。余程氣分が惡いらしいのです。さつきからからしてらしたのですか、工合が惡いやうでしたら床をとりませうかと申しますと、あゝと言つて、それから申しますのは

「人間も何だな、死ぬなんてことは何でもないもんだな。おれは今かうやつて苦しんで居ながら辭世を考へたよ」

と突嗟にいふのです。緣起でもない。から思ひましたので、その話には乘らず、すぐに床をのべて寢かせてやりました。もう着のみ着のまゝの姿で床へ入りまして、それ切り明暗を書かゝるひまもなかつたのでございます。

夜になつて何か食べたいと申しますから、トーストの薄いのを二切れ持つて參りますと、お前はずるい、こんなに薄くちやいやだと駄駄を捏ねます。でもいけません、そんな勝手を仰言ると、惡くなつても知りませんよといふと、なあに、死にやしないから大丈夫だよと申します。しかし大事を取るにしくはないと存じまして用心して居りますと、間もなくそれを嘔いて了ゐました。どうも病勢が面白くないやうです。

そこでお醫者さんから來て貰はうと存じましたが、ではどなたにといふ見當がありません。ともかく山田さんの識つた方で近くに或る醫學士がおいでになるといふので、その方に來て頂きました。嘔いたものゝ中に何だか赤いものが交つてるので、てつきり吐血だと私は思ひましたが、以前からの病狀を御存知ないので、どつか咽喉のあたりから出たのぢやないでせうかといつたお話ですが、私には安心が行きません。そこでどうしたものだらうかといつて居りますと、夏目が眞鍋さんを呼んでくれ。眞鍋さんとは惡くなつた時來て診て貰ふ約束があるんだからと申します。

それからといふもの眞鍋さんがずうと來て下さいましたが、どうも病氣の方はかんばしくございません。ところで眞鍋さんは大學の方と傳染病研究所の方と兩方でお忙しいといふので、安部さんといふ駒込で開業してこられる醫學士をお連れになつて診察して下されました

山田さんも前に胃腸病院に居られた杉本博士をお連れになつて見舞に來て下さいます。が、とにかくお醫者さんばかりさう澤山あつても仕方がないので、眞鍋さんを主治醫といふことにお願ひ致しました。

この二十二日から二十七日迄といふもの、胃がちく／＼痛いとか何とか特別にひどいといふのではないさうですが、たゞ何となく工合が悪いといつたわけで、この間といふもの夜といはず晝といはず、殆ど安眠したことがございません。初めは若しものことがあつてはと存じまして、私が看護しまして、萬一の用心に私の弟や甥を頼んで交代に夜番して貰らつて居たのですが、長くなつては私も疲れますし、それに病状がどことなく不安でもありましたので看護婦を頼みました。すると來たのがまだ若いので、病人の背中をさすりながら、自分の方でうと／＼して了ふといつた工合です。それに夏目が病氣になると物を言はない質で、一寸顎でしやくつて用を辨じさせやうといふのですから、慣れないものにはそれ位ではどうともすることが出來ないのです。それを一寸見て、それ今度は水だ、今度は紙だ、それ毛布をずつとかけるのだと一々氣轉を利かせるのは私でないと出來ないので、やつぱり看護婦が來ても私の方は休まれません。で背中などをさすつて居りますと、すや／＼眠ります。いゝ案配だと思ひまして、此の間に一寸私も休みませうと手を離すと、はつと目を開けてゐます。そこで私も氣になるので、……

と訊ねます。

「いゝや、苦しかない。」

「ぢや、いたむんですか。」

「いゝや、別にいたみもしない。」

といつて、又うと／＼して了ゐます。鐺に様子が變です。眞鍋さんもおいでになつて頭をひねつて居られます。

六十五　内出血

さうかうして居る間にしきりに物をたべたがります。發病以來殆んど食べ物らしい食べ物を攝らないのですから、食べたいのは無理もないことなのですが、かといつてさう／＼言はれるとほりにやるわけにも行かず、そこで醫者と相談の上私の考で、藥やアイスクリームや果物の汁などを、一度にやらずに二十分間位づゝおきにちよび／＼やることにしました。さうするとちよつぴり一匙づゝでも口に入ればそれでいくらかづゝ氣が紛れるのでした。

ところが二十七日にはこの食べ物を求めるのが急で、二十分間が十五分間になり、十分になりして、やたらにたべたがります。だから段々時間も繰り上がつて、今日中にやらうと思つて居るのが、豫定よりも早くなくなりますので、もつと求めるのでしたが、もういけません、十時になつたからお眠みなさいと申しますと、そんなら食べ物な

らしけないかも知れないが、茶ならいゝだらうと理窟を言つて中々きゝません。しかし又明日こさへて上げますからといつて、側に居るとねだられて困るので、一時病室を出て了ゐました。そのうちに諦めたと見えて、いゝ按配にうと／＼眠る樣子に、この分なら今夜も大丈夫と存じまして、看護婦をねかせ、女中たちも早く休ませて、自分一人側で夜番をしやうと思ひまして、書齋の机の上でこつそり雜誌をひろげて讀んで居りました。いゝ工合に夏目はすや／＼眠つて居ります。家の中もみんな寢靜まつた樣子でひつそりして居ります。

と、かれこれ十二時頃のことでしたでせう、今迄すや／＼眠つて居た夏目がむつくり床の上に起き上がりました。びつくりしまして、どうなすつたのと問ひもあへず、頭を掻きむしるやうにして、

「頭がどうかして居る。水をかけてくれ、水をかけてくれ。」

と叫るやうにせきたてます。只事でないと思ひましたが、頭々といふので、ふと時々この人の癖で頭が變になつたりする時の事を思ひ出しましたので、變に上氣せてゐるのではないかしら、ともかくこのままではと大急ぎで横に寢かせますと、そのまゝ「うむ」と言つた切り見る見る目を白くして了ゐました。びつくりしましてこれは大變と、看護婦をよぶやら女中を呼ぶやら、すぐ隣りの部屋に寢て居る娘たちを呼ぶやらするのでしたが、丁度眠入りばなだと見えて誰も目を覺ましません。氣はせきます、けれども人手がなくてはどうすることも出來ません。ともかく[illegible]をおいても醫者を[illegible]おい

たなり、かけ出して行つて看護婦をおこし、とまつて居る植木屋をおこして醫者をよびにやり、女中をおこして湯をわかしてもつておいでといつて、それからすぐに病人のところへかけてかへつて參りました。まだ目を白くして居ます。ともかくも水をと思ひまして、側の藥罐から水をふくんで口移しに移してやりまして、

「貴方しつかりなさいよ、しつかりなさいよ。」

と叫びますと、いゝ案配にぽかつと目をあけました。それに力を得て植木鉢に水をやるやうに、じやあ／＼頭へ水を打つかけてやりました。

其うちに方々の醫者へ電話をかけます。お湯をもつて來て熱いタオルで方々をあたゝめてます。脈を見れば平常の半分も打つて居ない始末です。が、何にしても一寸も猶豫して居る時でありませんとは思ふものゝ、少しも醫者が來てくれません。もうとてもじつと待つてるわけに行かなくなつて、私自身すぐ前に中山さんといふ開業醫の方がおありなるので、そこへかけつけますと、先生はお留守だといふ、仕方がない、書生さんにカンフルの注射器はありますかと尋ねると、あるといふので、それぢや看護婦にでもさせてやらうと存じまして、注射器を引つたくつてかけてかへりました。ところへ折よく中山さんが來てくれられました。そこでカンフルの注射をしやうとしますと、それを見て居た夏目が、

「そんなものをする必要はありません[illegible]」

[illegible]

つて居りますと、いゝ按配に、とにかくおやりになつておいた方がいゝと思ひます。」

「しかし害になるものぢやないのですから、

とお醫者さんが言つて下さいました。

「さうですか、それぢや……」

と腕を出すあたりあくまでも冷靜なものです。そこへ眞鍋さんがいらつしやいます、安部さんがいらつしやいます。しきりに注射をして様子を見てられるのですが、どうしたのだらう／＼で不安はのぞかれません。かうして此夜はみんなまんじりともせず、一晩有耶無耶のうちに送つて了ゐました。

さて翌朝になつて朝の光で見ますといふと、病人の胃部が瓢箪のやうにふくつとふくれ上がつてゐるではありませんか。それで漸く大きな内出血があつたとわかりました。容態愈々險惡なので、眞鍋さんも自分の相談相手にその道の先輩を呼んで招きたいと仰言り、そこで宮本博士からお出でを願ひ、更に南博士からもお越しを願ふことになりました。いらした先生方も皆内出血といふことに異論はありませんでしたが、その瀦つてゐる血を出すのにどうしやうかといふので大變でございました。

皆がこんな大騒ぎをしてゐるのに、當の病人は一向平氣で體を持ち上げたりするのですから厄介です。さうして禁じられてる話をしきりにするのです。

「お前さつきおれの顏に水をかけてくれたね」

「だつてかけろと仰言つたから……」

「さうだつたかい。いゝ氣持だつたよ。」

とこんなことを申します。それから又

「眞鍋は學校があるのにどうして行かないんだ。」

とか、

「お前昨夜から一向眠らないやうだが、眠ちやどうだ。」

などゝいらぬ世話ばかりやいて居ります。それから新聞に乘つてる『明暗』の切り拔きをスクラップ・ブックへ貼つてくれと申します。といふのはこれにはわけのあることなので、いつも自分で毎日切り拔つて、自分の手で貼つて居たものなのです。といふのは一時私が貼つたとがあるのですけれども、べつたり一面に糊をつけて貼るので皺が出來る、それがぞんざいでいやだといふので、ずつと自分で貼つて居たのでした。この病氣になつてからも、私はたゞ毎日の新聞を切りぬいてブックにはさんで丈けおいたのですが、それが氣になつたものと見えて頼んだのです。

それからやはり執筆中の『明暗』のことが氣掛りになると見えて、まだ二十回分位は先へ書いて送つてあるが、もう一週間も書かずに寝てゐるから、一寸阪崎さんを呼んで、今病氣で寝てゐるが、まだ二十日も間のあることだから、そのうちには起きて書けやうと思ふけれどもといつて、用心に話だけしておいてくれと尤も醫者はとめるだらうけれ

ど、今でも書かうと思へば書けるのだがと申します、今頃書かれちや堪らないので、まあ、それだけためにあれば大丈夫でせうから、よくなつてからゆつくり書いて下さいと言ひますと、ぢやとにかく阪崎に一應傳へておいてくれといふのです。阪崎さんといふのは美術批評家の阪崎坦氏のことで、其頃から朝日に居られて、しかもすぐ御近所だつたものですから、何かとこんな言傳なんかもちよいく\お願ひして居たものなのでした。一體この二十七日の内出血のある迄は、病氣だなどと世間へ洩らすと、方々から見舞に來て下さつたりして困るので、どちらへも聞かせずにおいたのですが、容態が面白くないので、此上は默つて居るわけにも行かず發表することにしましたのです。社から見舞が來ます。森田さんとか小宮さんとか見えます。それから方々へお聞かせもして、この二十八日の夜から、門下の方々が交代で夜番をして下さることになりました。お醫者さんの方も三人になつて、其うちのどなたかお一人づつ交代で附き切りで居られました。

看護婦もかうなつては若い人では仕方がないので、昔から識つてゐる老練な人から來て貰ひます。すると看護婦が私に、どうも變でございますよ、前の修善寺の時とは大分違つて居りますと申します。夜なんぞ熟睡はいつも六度以下で、さうして佛の如く安眠しません。そこで催眠藥を服用して居ると受けつけないといふ風で、實際呼吸も常の呼吸とは違つて[illegible]るので、皆さんでお困りになつて座を外づされたりしたものです。自分ではそれ程の重態だとは少しも知らない様子でございました。

それから早耳でしてうかく\したと言つて居られません。で、電話を離れに移しますやら、家の中ではみんな小さな聲で話してゐるのですが、それでも或る晩などには、丁度鈴木三重吉さんの夜番の時で、お酒が欲しい、櫻正宗がいゝとか何とか言つてるのをちやんと聞き込んで、おいく\と私を呼びますので傍へ參りますと、皆が居るのに酒なんだ出すことはないよと申します。何でもないんですよといゝ加減の挨拶をして其場は濁して居りましたが、萬事此の調子で、余程眞鍋さんの姿がちらつくのが氣になると見えて、學校があるのに眞鍋は何して居るんだと幾度も幾度も世話をやいてゐたものです。

其眞鍋さん、大學で今夏目漱石が重態なのでその方へ行かなければならない當分休講すると言はれると、學生さんたちが夏目の爲めなら僕達の講義などいくら休んでも構はない、どうかなほしてやつて下さいと言はれたとかで、傍の見る目にも實に一生懸命なもので、御自分の身が細る程盡くして下さいました。それ程ですから、病人が少しいゝといへば喜び、悪いといへば顔の色を悪くしてらつしやるのですから、私としてはその神經質なお顔を見るのが寧ろ憐らしい位でした。

かうして十二月に入りました。[illegible]

合はせまして、目をつぶつたまゝ一心に何か念じ居りました。私は何となく暗い氣持で見て居りましたが、病人はいたくしい程やつれた顔に、本當に靜かなものを漂はせながら、いつまでもくじつとして居るのでございました。

前の修善寺の大患の時には、それ程惡くても便器にかゝらないで弱らせたものですが、今度は始めからこれで用を足して居りました。すると二日の夕でした。丁度眞鍋さんがいらした時に、便器にかゝりながらうんといきむ氣勢なので、見て居られた眞鍋さんが勢ひでとめやうとされるうちに、それ切り又もや目を白くして昏睡狀態に陥つて了ゐました。其のいきんだので、又もや第二回の大内出血をしたのでございます。それから周章てゝ注射をするやら大騷動でしたが、これが殆んど致命的なものであつたらしいのです。それからといふものは二日に一度は食鹽注射をします。胃を癒着させるのだといつてゲラチンの注射をします。それ程ですから何も食べ物をやらなければ胃の癒着は早いのでせうが、さうして居れば榮養がつかず、榮養をつけやうとすれば胃の爲めによくないといつた工合でした。浣腸をするとはずつと血便がございました。

それで自分では實にたしかなもので、食鹽注射をする度に、じつと注射針のところを見て居りまして、看護婦なんぞが見るに邪魔になると、おい、君、そこをどきよなどゝ言つては、おいつと自分の肉體を突きとほす針を見つめ、或はあの章魚見たいな怪物の器械の液の減るのを見てるといつた工合でした。

それから食鹽注射の外にゲラチンの注射をやたらにします。それを見ながら、何故そんなに注射をするのですなどと醫者に聞いて居ります。お醫者さんも仕方がないもんですから、血管を丈夫にするのですと答へられると、そんな糊みたいなものをいく本も注射して、さぞかたくすることでせうなどゝ申して居ります。何しろ面會謝絶で醫者以外誰がいらしても面會させませんので、自分の容態がそれ程險惡で、今にも死にさうだなどゝは思つて居なかつたでありませう。たゞいつでしたか、かうした面會謝絶のうちに中村是公さんがいらつしやいまして、是非會はせてくれと仰言るのですが、しかし今お會ひ下さると興奮したりしないものでもないから、たゞ頭の方からそれとなく見て丈け頂きたいといふので、さう御願ひしたことがありますが、其時には足などもすつかり細つて怖ろしく氣味が惡くなつて居りました。

それから又時々、今晩は誰がとまつてるなどゝ尋ねることもありまして、野上さんですよと答へると、一寸會つて見たいなどゝ申したこともございました。

こんな工合で一日一日と過ぎますうち、たしか六日頃であつたと思ひますが、ふと病室に入つてつくぐ病人の顏を見ますと、その衰弱の仕方がひどくて、何と申しますか、つまり死相とでも申すのでございませうが、さういふ感じが現はれて居りまして、これはとても助か

りつこない、もう諦らめるより仕方がないとから思はせられましたので、眞鍋さんにそのことを申しまして、とても助からないとなれば、こんな狀態でひぼしにして死なすのも氣の毒ですから、何かもう少しやつて下さいませんかとお賴み致しました。すると眞鍋さんも一寸變な顏をなさいましたが、それから少し考をかへられたやうで、アイスクリームとか果物の汁などを前より少しづゝ澤山おやりになるやうになりました。そんなものとか水みたいに薄い葛湯をおやりになるのでも、お醫者さんたちがみんなよつてたかつて毒味をなすつて、それから評議一決した上でおやりになるのですから大變です。すると夏目が私に申します。

「眞鍋が何かくれるが一向美味くないんだよ。」

しかし答へる言葉もないので、

「いまになほれば段々美味くなるでせう。」

位のことしか言へないのです。

かうしてもうとてもだめだらうと諦らめかけました時に、子供たちがどこから聞いて來たのか、死にさうな人の寫眞をとるとなほるといふからどうしてもとつてくれと申します。そんなことでこの病氣がなほらうとも思へませんが、成る程これで亡くなるものとすればとつておくのもいゝ記念だと存じまして、折ふし來てられた朝日新聞の寫眞班の方にお願ひすることに致しました。するとその寫眞班の方がたも[illegible]をとら[illegible]な[illegible]、なほつて[illegible]たのですが、とにかくとつておきたいからと申しまして、隣りの部屋からレンズを向けましてとつて頂きました。勿論フラッシュを焚いたり、頭の方へ器械をもつて行つたりすることが出來ないので、そつと本人にはわからないやうにしてとつたのでした。暗いのでどうかと思ひましたが、後で見ますとよくとれて居りました。これが死ぬ二日ばかり前のことでございました。

六十六　臨終

人様の御見舞にいらつしやる度も繁くなります。容態は日に增し面白くない一方です。そこへ其頃鵠沼に居られた和辻哲郎さんが同じく御見舞にお見えになつて、此頃御自分の奧さんの御父さんかゞ病氣にやられて、自分も絕望し皆のものも諦めてゐたのが、ふと人のすゝめで氣合術をうけてからといふもの、今迄食べられなかつた食事も攝るやうになり、大變いゝ工合だ。自分なども最初そんなことがあるものかと話を聞いた時施術にむしろ反對した位なのだが、かうやつて目の前に奇蹟的なことが行はれゝばこれを疑ふわけには行かない。勿論病氣がなほつたとは思はないが、假令一時でも小康を得るやうなことがあればそれに越したことはないと思ふ。現代の醫學だつて萬能といふわけではないのだから、だまされたと思つて一つそれにかゝつて一見てはどうかと、しきりにすゝめになります。[illegible]

しかしその話を伺つても、病人は大概死ぬ前には一寸よくなつて、この分ならと傍のものが氣を休めてゐるとぽくりと逝くといつた所謂仲なほりといふ奴のあるものですから、和辻さんのお父さんの奇蹟といふのもそれだらうといふ肚が私にあります。それにこれ丈手を盡くしていけないのに、精神病的なものなら知らぬこと、なんでこんな病氣に氣合術位がきくとも思へず、旁々隣室で御祈禱でもするといふならきくきかないに係りがありませんが、いづれ病人の體に手をかけて施術をしなければならないものである以上、今の場合御醫者さんの方をおいてそんなことのやれる義理合でもなし、又病人の平常から推して見ても、そんなことを嫌ふことは勿論ですので、常人の意志にそむいて迄するともないと思ひまして、和辻さんが此方を思つて下さる一心の程もわかり、又有難い御好意の程もわかるのですが、流石迷信家の私自身どうしても承服し切れず、それではその氣合術の方をお連れ下さいとは申し兼ねたのであります。けれども生き死にの境のことですから、これを聞いて外の方などでも、かうなつた以上やつて見てはどうかなどゝいふ方もあつて、中々やかましくなつて參りました。

そこで私は、折角ですけれども今度のことは私の思ひ通りにやりますと申しまして、とう／＼それをお斷りしました。といふのは、前に一度かういふことがあつたのです。或る時ふと何かのきつかけで（まだ夏目がこんなになつて床につかない前のことですが）一體家には澤山門下の方々などもおありになつて、何のかんのと言つて口のやかましい人達ばかりです、勿論良人が丈夫でいらつしやるうちは何事もないが、萬一のことがあつた場合、書齋のことなんかで私と門下の方々皆さんとが對抗するといふやうなことが出來ては困りますから、又そんなことがないとも限りませんから、今のうちにちやんと良人がいらつしやらなくてもわかるやうにしておいて下さいと、かう私が申しますと、そんな事は構はないぢやないか。俺に萬一のことがあつた場合、あとは一切お前のいゝやうにしたらいゝぢやないかと申したことがあつたのです。そこで此の時も話が面倒になつて來たので、これを楯にとつて從はなかつたのでした。

そこへ和辻さんのところへ電報が參りました。御病人が危篤だといふお知らせに、和辻さんも色をかへて早々におかへりになりました。後であの時は失禮しましたなどゝいふ御手紙を頂いたことがあります。

こんなことがあるやら、方々から來てゐる看護婦同士が反目しますやらして居りますうち、急に氣候が寒くなりまして、衰弱してゐるところへ肺炎でもやられちや一ぺんだといふので、窓に布をかけるやら何やら大騷ぎをしましたが、さうした甲斐もなく、余病は發しませんでしたが、もう八日の晩にはこれはとても駄目だと眞鍋さんも言はれるやうになりました。それでも此夜のうちには變化もなく九日の朝になりました。

朝子供達が學校へ行くといふのを、お醫者さんにどうでせう、休ま

せませうかと尋ねますと、さあ、土曜日だからいゝでせうといふことに、みんな出掛けて參りました。ところが出た後で正午頃迄だらうといふことになつて、それ〴〵迎へにやることになりました。そのうちで二番目の娘は長女と同じく女子大學の附屬女學校に行つてゐたのですが、どうしても氣が氣でないと言つて早くかへつて參りました。その子と近所の小學校へ行つてる四番目の娘とがまづ會ひに行きました。するとあんまり面變りがして居るので悲しくなつたものでせう。愛子といふその四番目の娘が堪らなくなつて泣き出しました。で私がそんなところで泣くんぢやないとなだめますと、それが聞こえたと見えて、目をつぶつたまゝ、

「いゝよ〳〵、泣いてもいゝよ。」

と申しました。其うちに長女は迎へに行つた俥が途中で引つくりかへつたとて、中から這ひ出して、いゝ案配に怪我もしてなかつたので、そのまゝ近所で帳場を見つけて別の俥にのつてかけつけます。男の子たちもかへつて來ます。その前にどうせ絶望ときまつた以上、此上注射注射で無理に長いよ苦しい思ひをさせることもないから、安樂に死なしてやりたいと私から醫者に申出まして、宮崎さんあたりもそれではといふので注射を控へて居られたのでした。みんな揃ひましたので、正午頃打ち揃つて會ひに參りましたら、すると[illegible]の診察を濟ました[illegible]が、パタン〳〵枕元に坐わりましたと、ふと目をあけまして、子供の顔を見ながらにつこりと笑ひました。

さうかうして居るうちに中村是公さんがおいでになつて會ひたいと仰言います。お通しゝまして、

「貴夫、中村さんですよ。」

と申しますと、もう目を開けたりする氣力もないらしく、目をつぶつたまゝ、

「中村誰れ」

と尋ねます。で、

「中村是公さんですよ。」

と重ねて申しますと、

「あゝ、よし〳〵。」

と言つた切りでございました。

さうして居るところへ宮本博士がゐらつしやいまして、今から絶望してこんなに放つておいてはいけない。先の大患の時にも注射で助かつたのだから、醫者としては命のあるうちはもう一度闘つて見て、それでもいよ〳〵いけなかつたら諦めやうと仰言るので、そこで又もや皆さん氣を取りなほしになつて食鹽注射をなさいました。それで夕方の六時頃迄もつたのでございませう。

この暮れ方、非常に苦しがりまして、私が一寸座を外づしましたうちに、胸をあけて、こゝへ水をかけてくれと申しますので、看護婦が霧を吹きかけてやりますと、「わたしは死にやしませんよ」とか言つて、そのまゝ[illegible]して[illegible]つて、全く[illegible]を失つて了ひました。

を聞いて私もすぐにかけつけます。茶の間や離れに集まつてられた方もつゞいてかけつけられます。もう全く死の狀態です。私は水筆を取つて、次々にわかれを惜しむ方々へお渡ししました。しかし皆さんの顏や子供達の顏を見ると、今にも泣き出しさうになるので、私がこゝで泣いてはいけない、飽く迄も氣をたしかに持たうと思ひまして、石のやうになつてぢいつと遠くの方を見つめ誰をも見まいとしました。津田青楓さんが水筆で口をぬらしたまゝ、そこへ泣き伏して了はれました。それをなだめて、今度は白い布れで目をつぶらせるやうにして上から撫でました。かうしてとう〳〵日が暮れて間もなく息を引き取りました。大正五年十二月九日の六時一寸前のことでございました。

息を引き取る一時間も前のことでございましたでせう。高濱虚子さんがいらつしやいまして、

「夏目さん」

と仰言ると、

「ハイ」

と返事をしました。それに力を得て、

「僕高濱ですが……」

と仰言ると、

「有難う」

と申して居た位で、ほんの死ぬ十分位前迄は、時々昏睡狀態に陷つても居たでせうが、中々はつきりして居たものでございます。

臨終の時いらした方々は、隨分澤山でございまして、混雜の際のこととて一々よくおぼえても居りませんが、狩野さん大塚さん中村さん、諸さんなどのお友達の方々や、朝日新聞の方々、それから所謂門下の方々などで、これらの方々に護られながら、丁度五十年の生涯を終つたのでございます。

愈々息を引き取りましたので、一旦皆さまから引いて頂いて、さて私から眞鍋さんに申し上げますには、

「いろ〳〵御骨折り下さいましたのに、とう〳〵こんなことになつて、先生もさぞかし殘念でございませう。が何にしてもこれが定命だとすれば仕方がありません。私としましてはこれ丈に盡くして頂けば全く御禮の申上げやうもないのでございます。たゞこゝで一つ御願ひがございます。といふのは外でもございませんが、どうか私どもの御禮心迄に、この死體をおあづけ致しますから、大學で解剖して下さいませんか。」

眞鍋さんも意外な面持でしたが、それでも流石に喜びは包み切れず、折かへしお尋ねになります。

「さうして頂ければ、私たちの方では願つてもない幸で、いろ〳〵醫術上の參考にもなり、私もこれ迄に盡くしてとう〳〵こんな破目になつた以上その理由がつきとめたいと思ひますのですが、解剖させて頂いてよろしうございますか。」

私は前の雛子の時の話を思ひ出し、かういふことは當人の遺志でもあ

ると思ひますので、大體一人の肚できめて居たのでした。丁度そこに松根東洋城さんがおゐでになつたので、

「ねえ、松根さん。今もおききになつたやうに解剖して頂くつもりですが、どうでせう、あなた殘酷だと思ひますか。私は夏目の平常から推して、當人もかうした研究の材料になることを喜ぶだらうと思ひますが。」

とお尋ねしますと、

「誰も殘酷だなんて思はないでせう。奧さんさへ御承知なら無論結構です。僕達にも異存はありません。」

といふ話でしたので、松根さんも門下の代表としてあゝ仰言るのだからといふわけで、そこで速座に解剖のことはきまりました。さうして翌日大學の病理學教室で、長與又郎博士執刀のもとに剖檢されまして、大學の御希望によつて、腦と胃とを寄附致しました。

この亡くなつた夜、どなたかの發議で死面を取ることになり、大塚さんのお識り合ひの新海竹太郎さんを煩はして原型をとつて頂きました。

天界現象の豫報

關口鯉吉

一 自然現象の豫報

豫報といふのは、讀んで字の如く、一つの事象が發生する可能性を事前に考察して、其の生起の時と場所と及び經過とを公衆に豫告することである。

豫報にも種々ある。神秘の世界に住む人達が第六感とかいふものに依つて、理窟なしにすぽりと的てるのがある。此の流義は正しい意義に於ける「科學」を有たなかつた古への社會に專ら行はれて居たもので、當今の社會でもなか〳〵廣く信賴を得て居るやうに思はれるが、其の大多數は的るも八卦的らぬも八卦式のあやふやなものである。此の流義に對する信者は「良く的中する」と言ふけれども、非常に多くの場合に就いて正確な統計をとつて其の適中率を檢考して見ると、大抵は五分五分程度のものである。尤も之等神秘主義者の中には或種の統計成績に基いて的中率の優越さを主張する向も見受けられる。併し統計といふものは言ふまでもなく、材料の撰擇及び取扱の仕方に依つてはいくらでも自己の說に都合の好い結論を導き出せるものであつて、一つの豫報に對して眞に價値ある批判を下すには、統計法の原理にかなつた依怙のない統計を行つて、愼重論議した上でなければならない。

豫報的中率の統計に依る批判といふものが如何に愼重を要するものであるかといふことは、日々の天氣豫報に就いて容易に其の一例を見出すことが出來よう。一、二月の候關東地方で晴五日に雨一日位の割合で出鱈目に晴雨を割り振つて豫告したものとし、又六、七月の候雨五日に晴一日位の割で同樣の出鱈目豫報をやつたとしたら、恐らく八割位の的中度を確保し得るだらう。けれども之れは單に年々の經驗乃至は吾々の常識に依つて分つて居るところの當該季節の平均狀態を、別の言葉を以つて尤もらしく言ひ換へたに過ぎぬもので、豫報の技能として特に賞讃すべき性質のものでないことは多言を要しない。ところが吾々は往々之れにばかされて、「なるほど良く的中する」と感じたがる。冬季に稀れな雨天を豫報した全回數の中で、果して雨天となつ

た場合が幾割あるか、或は梅雨期に期待し難い晴天を豫告した場合全部の中で、其の通りになつたことが何割あつたか、其の歩合が批判の的となるべきものである。

斯くの如く神秘豫報なるものは、多くは吾々の常識で知れきつて居る「平均狀態」を有意的若しくは無意識に箇々の場合に割り振つたもので、大數平均の法に依つて統計的に的中率を出して見た結果「果して的る」と見えるのは、箇々の場合を復び「平均狀態」に還元して、分りきつた事柄が別の衣裝を被つて眼の前に現はれたに過ぎないのである。

二　科學的豫報と統計

眞に價値ある豫報といふものは、其の事象の因つて起る源を探求し、純正な理路に從つて一歩一歩其の結果を追尋し行く底のものでなければならない。即ち先づ其事象の成立を支配すべき法則を歸納的に發見し、之れに基いて箇々の場合を演繹して行くものでなければならない。斯樣な行方でなければ眞の成功を贏ち得ないといふことは古今の「豫報」を嚴正な批判にかけた結果明らかなことである。

此種の豫斷にも種々ある。單なる統計の結果として現はれて來る「週期」であるとか、他のより簡單な、若しくはより豫知し易い事象との聯に依する「相互關係」等も一種の豫斷には相違ない。併しながら單獨な豫斷のみに立脚してなされた豫報は決して正確を期することが出來ない。又多くは吾々の常識として知れきつた事柄を尤もらしい表現を用ゐて發表したに過ぎぬものとなる。其の最も簡單な例は一年を週期とする四季氣候の循環や、一日を週期とする朝夕の寒暖の變化等である。又稍、複雜したものとしては、氣候の週期的循環の如きものを擧げることができる。太陽黑點の增減に伴ふ氣壓や氣溫の變化の如きも這般の相互關係の一例である。

總じて自然界の現象といふものは單一の原因で起るものでないことは自明の理であつて、澤山の原因が錯綜して居るもので、各因の齎らすべき結果の複合として其現象の發現を見るものである。歸納的に見出されたる週期性なるものは、當該現象の因をなす他の多數の現象が有する週期性の何れか一つが統計の結果として現はれて來たもので、餘の週期性は削り去られてしまつて居る。實は餘の週期性を打ち消して、單に一つの週期性だけを現前せしむる樣に統計の際特別の操作を施したものなのである。別の操作を施せば他の週期性をいくらでも摘出し得るわけであつて、其等を不問に附し單に一つの週期性のみに着眼して豫報を行つた結果が的確にゆかないのは當然のことである。「相互關係」に於ても同樣である。要するに吾々の統計的に見出し得た「法則」なるものは「ならし」であつて、其の裏には豫知されぬ他の「因子」が潛んで居つて、我々の豫斷を攪亂し若しくは之れに助ひを與へる結果、所謂「番狂はせ」を起して豫報が外れるのである。

職一の週期性を有するか、若しくは之れを狂はせる第二第三の原因が存在して居ても、其れが極めて輕微なものである場合には、單なる統計的法則でも十分の効果を奏することが出來る。併し斯様な場合といふものは一般自然界には稀有な事柄であつて、唯太陽の引力で統御されて居る惑星及び其の仲間の天體の行動や、之れと同一轍に考へ得る恒星の或種の運動に限つて、其の豫報が可なりの程度まで此の流儀で押し通せるのである。西洋に於てはエジプト、グリークの古代、又東洋に於ては堯舜の時代より、純統計的の方法で可なりの正確度を以て日月星辰の運行を豫報し、相當信頼すべき編暦の術が開けて居たのは之れがためである。

三　力學的豫報術

さりながら單なる統計術では、豫報の正確度に超ゆべからざる限度があつて、實際問題に於て社會の要求を滿足することが出來ぬことが多いのである。しかのみならず、理論に導かれざる盲統計の弊として、とかく何等實在せざる無意義の「週期性」や「相關」の現出に騙され勝ちのものである。多大の勞力に依つて發見した統計的法則が果して眞に意義ある因果關係の現はれであつて、之れに基いて行つた豫報が優れた成績を示すであらうか、或は其れが單にこみ入つた數字の取扱に際して偶然現はれたところの似而非法則であつて、豫報の基礎としては全く價値のない八卦式のものであるかを判斷するのは、殆ど不可能事に屬する難事である場合が多いのである。

發見された法則が安心して信頼されるためには、其れが因果の法則に依つて當に然かあるべきものと釋明し得るか、或は又因果の理法から見て斯くあるべきものと推斷されたる「相關」や「週期性」が過去の事實の統計に依つて實證され、若くは其の不備の點を補正された場合でなければならない。自然界に於て一般に公認された因果の理法には種々ある。又種々の形に於て表現せられて居る。が之れを豫報といふ方面に利用して過ちなからしむるには、數字に依つて的確に表はされたものでなければならない。而して其れは五感に依り直接間接に測定し得る數量の間の關係を概括したものでなければならない。でないと、どの程度まで其れが事實と合致するか、如何に完全に實際現象を支配するかを嚴正に檢察することが出來ない。

尚又這の理法は自然界の最も根本的な原則と矛盾せぬものであり、這の根本原則から演繹し得るものでなければならない。斯様な條件を具備する理法は物理學の上で一般に認められた各種の法則の外にない。近代の物理學に於ては自然現象を支配する法則をば「力」と「エネルギー」といふ根本觀念の上に組立て、總ての現象をば物と物との間に働く力の作用とし、或は物から物へとエネルギーの轉移する經過とし、又は一ツのエネルギー形態より他の形のエネルギーに轉化する過程として說明せんと努めるもので、其の最も嚴正な行方としては、其の現象に參與する各々の物體若しくは物質の各部分の間に働くところの「力」と其の効果とを結びつ

ける關係をば一系の方程式を以て表はし、其の式を解いて、刹那々々に於ける各物體の位置を追跡するのである。斯くして物質の行方を尋ぬると同時に、エネルギーに就いても、一連の方程式に依つて其の行へ方を解決する。これで其事象の豫報が完全に行はれるわけであるが、現今の數學の力を以てしては以上の如き方程式が嚴密に解き得る場合は甚だ少ないので、實際問題で此種の方法を應用し得る範圍は極めて限局されて居るのである。唯太陽と惑星の如く虚空の中に孤立して萬有引力の作用で互に引き合ふ二個の物體、而も其距離が大いさに比して桁違ひの遠さに在る場合に就てのみ、方程式が完全に解き得るのである。三個の物體となるともう始末に負へない。四個五個となつては尚更である。唯通路としては、第三者を度外して解き得たる結果に對し、第三、第四等の物體の及ぼす作用をば補正項として取り入れる手段あるのみである。距離が近い場合や形狀の不規則の場合は益々困難が加はる。況や液體瓦斯體の如く無數の微分子より成るものゝ各部の運動並に各部の間に出入するエネルギー（熱）の行方や轉變を數理的に追跡するといふことは、極めて簡單な模型に就いての外は殆と不可能に近い難事と稱して差支ない。之れを實際の問題例へば氣象の豫報などに應用するに當つては、問題に極端な單純化を施して方程式を解き、後から實驗に應じた補正を加へるの外ないのである。

斯くの如く數學の問題としては最も簡單な惑星の運動でさへも、旣 [illegible]

らぬのであるからして、物理學や數學の發達しなかつた中世以前の天文家の豫報といふものは往々少からぬ誤りを起したものであつた。學的の方法が採用さるゝに及んでは實に格段な進境を示し、其の一半を語るだけでも、人をして近代科學の方法が如何に堅實にして有力なものであるかを首肯せしむるに足るであらう。私は以下二三の實例に就いて、這の「力學的天文學の勝利」を物語ることに依つて先賢の成功を稱讃し、併せて彼等の苦心に對して感謝の意を表し度いと思ふ。

四　古代に於ける日月及び惑星關係の豫報

上に述べたやうに、純統計的の法則は、之れを豫報の上に應用した場合、其れに絕對の信賴を置くといふことはでき得ないものではあるが、統計が數百年にも亘る長期の材料に依つてなされたものであるときは、可なり立派に役立つものである。東西兩洋共二千年以上も昔から、日月惑星の運行法則が一部有識者の間に知られ、之れに依つて、其等天體の日々の視かけ上の位置を推算して、曆日を正したり日食月食の生起までも豫報し得たのは、旣に統計的法則の有難い效果だと言はなければならない。

曆といふものは、要するに季節の豫報である。季節に就て [illegible] 件に於ける太陽の高度に [illegible] ものである故に、[illegible]

[illegible]

に依つて、季節循環の法則が分るのである。古へは太陽の正午高度が最小の時、即ち冬至の日時をきめ、一つの冬至より次の冬至に至る日數、即ち回歸年の長さをば、長年の統計から精確に算定し、其の間を適宜に區分すれば各區の季節は自らきまるわけであつて、各の區に順次「月」の番號を配して行くことに依つて、平均に於ては一定の季節が一定の月日に循り來るやうにすることが出來たのである。之れが太陽暦組立ての原則で、斯樣な組立てが完全に出來れば、季節の豫報といふものが少しも齟齬せずに行はれ、人間社會の年中行事を律する上に些の不便を感ぜぬわけであるが、古へ定めた回歸年の長さ即ち季節循環の週期には僅か計りの誤差があつたので、年々暦日と季節の食違ひが積もつて遂に數十日の齟齬を來すに至つたので、編暦法の改正を餘儀なくされたことが再三あつたのである。

東洋方面で最も盛んに用ゐられた太陰暦なるものは、各月の日次を太陰の盈缺に伴はせて、日を數へるに便ならしめたものであるが、盈缺の循環期即ち朔から朔までの日數（朔望月と稱す）二九・五三〇六日の端數〇・五三〇六日の處置に困つて、最初は一月の日數二九日のもの（小の月）と三〇日のもの（大の月）とを交互に置き、それでも十分に行かないので、適當な規則の下に大小をつきまぜることゝし、遂には「朔」の日を月の初日とするといふ規定に依つて月の大小が自然にきまるやうな組織にしてしまつたものである。處が、此の「朔」といふものは太陽と太陰の天球上に於ける經度が丁度等しくなる日時であつて、之れを正確に知るためには、兩者の位置を正確に豫測することが必要なのであるが、古へ天體の觀測や運行の理論が進まなかつた時代には、斯樣な豫報が正確には出來なかつたので、止むを得ず週期法に依つて「朔」を推算したのである。

朔を週期法で推算するといふことは、週期が十分正確に知られて居さへすれば、平均に於て月の盈缺と日次とが全く相伴ひ、實際上少しも差支ないのであるが、日月の運動は全々週期的には行かぬものである故に、時によると朔望が一日くるひ日食や月食を豫知する上に不便を感ぜしめるのである。日食は「朔」に起り、月食は「望」に起ると相場がきまつて居るので、日食が月の二日にあつたりしては世間が承知しない。そこで、どうしても太陽太陰の時々刻々の位置を推算して其の交會の時刻をきめなければならなくなつたのである。

太陰暦に於ても、季節の豫報をなし得るためには、毎年同じ名稱の月の同じ日次には平均に於て同じ季節になるやうにする必要がある。處が回歸年といふものが「朔望月」で整除し得ないために、一年の「月」の數をきめて動かさないと、季節と月とが忽ちに伴はなくなつてしまふ。即ち一年を十二ヶ月としては少し足りないし、十三ヶ月では多過ぎるのである。そこで一種のやりくりを考へて、十二ヶ月の年が二度續いた後に十三ヶ月の年即ち潤年を一度置くといふやうにして、這の不足を修正することにしたのである。斯樣にしてもなほ長い間には季節と「月」の間に可なり食違ひが積つて來るので、潤年の置

き方に更に複雑巧妙な規則を設けるに至つたものであるが、近代になつてからは、冬至と冬至の間に十二個の區切りを置いて之れに番號を附し、或る番號の區切りを含むところの「月」には其の番號を附することゝし、之等の區切りの何れをも含まぬ「月」が出來た場合には之れを潤月として名稱なしの月とするか、假りに前月の名を借りて之れに冠することゝし、斯くして月日と季節の平行を永久に確保せしむることが出來たのである。

以上の如くにして季節の豫報は編曆法の發達に依つて年々の平均に於ては頗るうまく行くやうになつたのであるが、昔から最も人心を騷がせたところの日食や月食の豫報は、純統計的の手段ではさう易々とは行はれなかつたのである。第一に必要な朔望の生起日時の推算が正しくは行かなかつた。又假りに朔望は正確に分つたとしても、それが天球上に於ける日と月の視經路即ち黄道と白道との交點に可なり近い所に太陰が廻つて來たときでなければ食にはならないので、交點との關係的位置をも正確に推算しなければならない。此の兩方の推算を誤りなくやるといふことは、往時の天文學者の手の負へぬ仕事であつた。彼等はこゝにも統計法則を利用するの外なかつた。過去何百年かの經驗によつて、同樣な經過の下に生起する日食が六五八五日毎に繰り返さるゝといふこと、即ち所謂サロス週期なるものを發見した。蓋し[illegible]の交點は[illegible]十度づつ月の[illegible]とは反對の向きに移動するものであるから、[illegible]交點から交點に[illegible]する時日は三四六・六二[illegible]〇三一日、月は二七・二一二二〇日であり、又朔から次の朔までは二九・五三〇五八八日であるから、此の三者の公倍數（凡その）たる六五八五日を週期として太陽、太陰、交點の三者の相對的位置が一定になるのであつて、從つて、丁度これだけの週期で同樣な日食が繰り返へさるゝことになるのである。

無論斯樣な純統計的の方法の的中率があまり良いものではなかつたのは言ふまでもないが、それでも往々うまく豫報が的つて術者の誇りを縦にしたものであつた。支那上代に於て、天文家が日月食の豫報をしくじつた場合は大きな手落ちとして處罰されたものであつた。有名な「夏書胤征」の記事はよく這般の消息を物語つて居る。即ち

乃季秋月朔。辰弗集于房。瞽奏鼓。嗇夫馳。庶人走。
羲和尸厥官。罔聞知。昏迷于天象。以干先王之誅。

とあるのは、當時の天文家羲和氏が酒色に耽つて、[illegible]の推算をやらなかつた結果仲康五年の日食の豫報をやりそくなつて、人心の動搖を起したのを、天子が怒つて、之れを誅罰したことを記したのだと解釋されて居る。又西洋では紀元前五八五年リデアンとメデスの交戰中起つた日食は、豫報の的中に於ける最初の記錄として傳へられて居る[illegible]

五　太陽系天體の豫報

[illegible]

發見し（十七世紀の初、約百年の後ニユートンが之れに力學的の解釋を與へたときに端を發して居る。ケプラーは、古代の觀測資料に據つて、地球に對する太陽の相對的運動の軌道は、地球を焦點とする楕圓でなければならない。而して兩者の連結線の一日間に畫く面積は四季を通じて一定であると結論したのである。此の法則に依つて角運動の速度が分かるのであつて、地球太陽の相對的位置を推算する基礎が出來たわけである。ニユートンは此の法則は日月星辰が萬有引力のために動く當然の結果であるとし、引力法則の最强の實證材料として之れを用ゐたのであつた。併し、ケプラー、ニユートンの法則が十分の果を結んで、地球や諸惑星の位置の力學的豫報術が實地に而して有効に行はれるやうになつたのは、ラプラース（一七四九乃至一八二七年）オルバース（一七五八乃至一八四〇年）等を經て、ガウス（一七七七――一八五五年）に及び、天體軌道學の大成された賜に外ならない。更らにベツセル、エンケ、ハンゼン、エアリー、ルベリエー、アダムス、クリンケルフオイス、オツボルツアー、チツセラン等を經てニユーカム、ボアンカレー等の研究に依つて天體位置の力學的豫報術は顯著な伸展を示し、今日では第三第四體の引力をも加算して運動の狂ひを推算し、日月惑星の時々刻々の位置は角度の數秒を出でぬ僅少の誤差を以て豫報し得るやうになつて居る。從つて日食や月食の豫報も百發百中の域に達し、其の終始の時刻の如きも分秒を爭ふ精確度を保ち得ることゝなつた。

六　彗星及流星の出現

斯くの如き進歩の跡は夫々の時代のエポツクを成すところの顯著な二三の發見を物語ることに依つて歷々と眼前に髣髴せしむることが出來る。順序として先づ統計的方法の顯著な成功を物語るところの、ハレー彗星出現の最初の豫報に關して一言し度い。ハレーは一六八二年北天に出現した大彗星の軌道を推算して其の形が一六〇七年に現はれた彗星の軌道に酷似せるに據つて、同一彗星が七五年を經て再來したものと考へ、更に實測に基いて推算した楕圓形軌道の一週期が丁度七五年となるに據つて自信を強めることが出來たのみならず、遡つて過去の記錄を調べた處、七五年を置いて再三大彗星の出現した事實あるを確むることが出來たので、同一彗星の週期的出現なることは疑ふ餘地がなくなり、次回の出現を一七五八年と豫報して、亡くなつたのであつた。ハレーの推算は該彗星が太陽の引力のみで完全な楕圓軌道を畫いて動くものとしてのものであつたが、實際に於ては同彗星の行動は木星及び土星の引力に依つて可なりの狂ひを生ずるのであつて、クレイロウは此作用をも考へに入れて數理的の勘定を行つた結果、彗星が近日天に達する日が六一八日遲れて一七五九年四月中頃になると豫測し、一ケ月内外の不確さあるものと附言したのであつたが、果して一七五八年の末に出現して、翌年三月十二日に近日天を通過したのである。爾後每回出現の豫報と實測とが行はれ、數理的方法の進步に

從つて彗星の軌道中には點々隕石となり、最近一九一〇年に於ける出現の如きは、コーウエル、クロムメリン兩氏の推算した日時と位置にはぴつたりと觀測に合致し、一九〇九年九月十一日の觀測では豫報された點から數分の角度内に其の姿を認むることが出來たので、力學的方法の偉大な勝利として讃嘆の的となつたものである。勿論之れは七六年間の時々刻々に於ける各惑星の引力を計算して軌道の狂ひを考定したもので、三ケ年に亙る勞力の結晶である。

ハレー彗星の外にも、週期的に出現する彗星が多數發見され、夫々力學的の推算を施して出現の日時や位置を豫報して良結果を收めて居る。例へば三・三年週期のエンケ彗星、昨年出現した六年週期のウインネッケ彗星等、十年以下の週期を有つたものが二十二個もある。

彗星と離るべからざる關係を有する流星の出現も豫報の可能な事象の中に數へることが出來る。一晩に飛び流れる流星の視經路を天球上に於て延ばして見ると、一點から放射狀に射出して居るもので、斯樣な輻射點が所々に散在して夫々系統を異にする流星群を形成して居るものである。これは其の輻射點の方向から此方に向つて多數の流星が平行に假想的に進來するのを、透視畫的に見るために輻射狀を成すもので、之れに基いて各流星群の軌道を規定することが出來るのである。かくて流星なる現象は無數の微小天體が群がつて、夫々の群が楕圓[illegible]に交會すると、彼等は地球の引力に引寄せられて空氣中に突入し[illegible]ものであるといふことが明かにされた。斯樣な理で流星は其の軌道の位置次第で種々異る季節に地球と交會するし、又輻射點も夫々其の位置を異にするもので、其の最も有名なものは八月十日から十二日頃までペルセウス星座から輻射するもの、十一月十四乃至十六日獅子座から輻射するもの等で、顯著な流星群だけでも數十群を數へ、總數は幾何あるか知れない。

流星群もやはり軌道の算定と各惑星の引力の加算によつて其出現の日時や位置を可なりまで豫報することが出來る。同一流星群でも其の出現度は出現の年によつて異るもので、中には週期的に一定の年數を隔て、增減するものがある。其著しい例としては十一月の獅子座流星群で、記錄に依ると三十三年毎に『雨の如く降り注いだ』ものである。處が近年には絶えて斯くの如き顯著な出現を見ないので、恐らく軌道が惑星の攪亂作用で幾らか外れたか、若しくは曾ては濃密な流星であつたものが全軌道に沿うて次第に散漫になつてしまつたものであらうと考へられて居る。此種の理論が十分にきまらぬために、今の所では流星の出現度合を正確に豫報することは未だ出來ないのである。

流星群の軌道には彗星と同じ軌道を[illegible]

運轉三十三年）と獅子座流星の關係、一八六二年の第三彗星とペルセイ流星の關係等で、ハレー彗星の如きも五月初頭に見らるゝ水瓶座流星及び十月十八日前後に現はるゝオリオン座流星と密接なる關係を有つて居る。斯樣な事實に基いて一派の天文家は彗星が崩れて流星になるのではないかといふ見解をさへ有つに至つた。斯くの如き關係に着目して夫々の流星群の活躍程度を豫報するといふことは有望な方法には相違ないが、未だ研究が不十分なので其確實性は甚だ薄いものと言はねばならない。

七　海王星の發見

海王星の發見は化學的豫報の成功に關した逸話を遺した點で天文史家の書き漏らせぬ事柄である。一八四五年佛蘭西の若い天文學者ルベリエーは天王星の運動が單に太陽や木星土星等の引力に依つて支配されて居るものとしては解釋出來ない一種の狂ひを示すことに着目して、其の原因を未知の惑星の作用に歸する外ないものと考へ、其の惑星の軌道や惑星のあるべき位置を推算し、一八四七年の初めに黄經三二五度の所に來るべきを發表し、ベルリンのガレはルベリエーの懇望によつて一八四六年九月二十三日の夜豫報された方向に望遠鏡を向けて之れを捜索した處、角度で一度も誤らぬ所に未見の星あるを發見し、其の逐日恒星の間を縫うて移動することからして、惑星に相違ないことを確め得たのであつた。這の豫報はルベリエーに少しく先立つて（殆ど同時）英國のアダムスも之れを行つて、エマリーに報告して居たし、其の豫報した所も後の觀測と對比するも、其の確度に於てルベリエーのより勝るとも劣りはせぬ見事なものであつたが、觀測法の手違ひからして發見の功を他に譲らねばならなかつたのである。

此の樣な事柄は單にうまく一事實を言ひあてたといふことに依つて價値つけられるのではない。誰れもが承服するやうな合理的の方法に依り、而かも其方法を理解することに依つて誰れにも行ひ得るやうにフォーミュレートされた方法に依つて豫報し得たといふ點に科學としての價値が存する。でなければ易卜者流の「第六感」と撰ぶ所はない。ルベリエーの成功に刺戟せられて、海王星や天王星の運動の狂ひから海王星よりも更らに外側に未知の惑星を發見しようと試みたり、而して水星の軌道の變化からして、更らに太陽に近い惑星の存在を豫想して其の捜索に熱中する觀測家が續出したが、未だ酬ゐらるゝ時が來ない。

萬有引力の法則は太陽と惑星の關係を完全に解決し得るのみならず、之れを惑星と其の衞星の關係にも及ぼすことが出來るのは言ふまでもないことで、之れに據つて、衞星が其の屬する惑星の周圍を運行する際の時々刻々の位置を精確に豫報し得るわけである。從つて、衞星が惑星と地球との丁度中間に入つて其の面上に自己の影を投ずるところの所謂衞星の惑星面通過の現象や、太陽から衞星を照らす光線を惑星が遮つて衞星の光輝を奪ふところの所謂衞星の「食」なる現象な

ども、可なり正確に豫報さるゝものである。

以上述べた如き太陽系内の出來事の日々の豫報は「天體暦」として各國の國立天文臺で刊行し、誰れも之れを利用し得るので、志ある者は、試みに其正確度を檢考して、先輩の苦心の跡を窺ふのも有益であらう。

八　連星運動の豫報

望遠鏡の發達に伴ひ恒星界の事柄が明かになるに從つて、上記の如き太陽系内に用ゐられた豫報術は更らに汎く全宇宙の各體にまで及ぼさるゝこととなつた。天球に散布さるゝ幾百萬の星辰は、其の光りを分析して一々其の性狀を檢考した結果、夫々一個の太陽であることが明瞭となつた。而してやはり吾が太陽と同樣に子星を率ゐて其の運動を統御して居るものが多いのである。所謂連星なるものが其れである。

一般に二つの星が數秒の間隔をおいて見掛上著しく接近して見えるものを雙星と稱へて居るが、其れが果して實際相互に近い距離にあるものであるか、又は單に見かけ上殆ど同一方向に見えるといふだけのことで、實は非常に遠近の差があるのであるかといふことは、特別の檢討を經て決すべき問題であるし、又雙星相互の間に[illegible]

[illegible]待つて後決せらるゝ問題である。雙星の兩員の間が太陽に對する[illegible]の如く萬有引力の作用に依つて連結さるゝものであることを始めて觀測で實證したのは、彼の有名なハーシエルである。ハーシエルは天體觀測の神樣とでもいふべき程の熟練家で、數々の貴重な發見を後世に遺して居る中で、特筆大書しなければならんのは、一八〇三年發表した連星カストールの運動に關する論文である。即ち此の雙星の相對位置を長年觀測して居る間に、子星が親星の周圍を廻轉して居ることが明かになり、其の週期を三四二年と推算したのである。其他三七五年、一二〇〇年の週期で廻はる連星のあること及び二三同樣の實例を擧げて學界の注目をひいたのであつたが、一八二七年に及び、サヴアリーは北斗星中のグザイ星が亦連星であつて、其の伴星は六十年の週期で、楕圓形の軌道を畫いて主星の周圍を運行し、而かも其の運動法則はケプラーの面積律に從ひ、萬有引力の下に行はるゝものであることを證據立てることが出來たのである。此の發見は力學の發達上重要な意義を有するもので、地球上あらゆる自然現象の根據をなし、而して大陽系内各員の行動を律して誤らなかつたところの力學の原則が、大に宇宙の總ての部分に擴充し得らるゝことを事實に依つて立證したものである。

[illegible]

九　天狼星と其の伴星

連星には望遠鏡に依つて伴星の存在を認め得ぬ場合がある。例へばあまり接近して居るために現代の望遠鏡の力では二個に分離して見られぬ場合もあり、又伴星の光輝が微弱であるために、強力な望遠鏡を以てしても吾々の視力が及ばない場合もあるが、斯樣な場合でも引力の法則を適用するときは的確に其の位置や大さを突きとめ得ることが往々ある。其の最も興味ある一例として天狼星の伴星を擧げ度い。此の星は冬季宵の中に東天に昇る全天一の明星で、大犬といふ星座のα星とも呼ばれ、種々の點から著名な星である。丁度アダムスやルベリエーが天王星の運動の狂ひから海王星の存在を探り當てたのと同樣に、天狼星の振動に據つて、其の傍らに見えぬ星が在つて、兩者は相互引力に依り其の共同重心のまはりに楕圓運動をなしつゝあるものと推定したのは彼の有名なベッセルであつた（一八四四年）。ベッセルの豫報は當時の望遠鏡の力を以てしては遂に其の適否を實證する術がなかつたのであつたが、ベッセルの沒後、米國の有名なレンズ製作家のアルバン・クラークが十八吋のレンズを作つた際、其の性能を試みるために天狼星を觀測した處、忽ちにベッセルの豫言通り一つの伴星の在ることを確めることが出來たのである（一八六二年）。此の伴星が其時まで見つからなかつたのは、其の光りが九等星といふ小さなものであるために、主星の光輝に眩惑されて見分けられなかつた次第である。此の伴星が天狼と一系をなした連星であるといふことは、其の後アウエルス等の觀測に依つて確められた。

天狼星の伴星に關しては、天體物理學に於ける豫報の見事に的中した一例としても特記せねばならない。距離の分つて居る連星系の質量は其の運動から分るもので、天狼の場合は主星が太陽の二倍半、伴星が太陽より稍輕い程度と知られて居る。其上に若し體積が分れば密度を計算することが出來る。星の大きさはスペクトル型式から算定した表面溫度に基いて推算さるゝところの單位面積の發光量と、別に測定して知らるゝ所の發光總量とに據つて知ることが出來るので、天狼の主星は太陽の約二倍と分つて居るので其の平均密度は太陽と同程度即ち水の一倍半位のものとなる。處が伴星の方になると其の直徑は太陽の三十分の一に過ぎず、而も質量が前記の如く太陽と同じ位なのだからして、密度は水の數萬倍、白金の數千倍といふ意想外な結論に達するのである。そんな馬鹿な事があり得るだらうか。恐らく其は推理の誤りであらうとは誰しも先づ疑を置くところである。

英國ケンブリッヂのエヂントンは星の内部構造を數理的に研究した結果、恒星は其の究局の運命として斯くの如き極小な高密度の狀態に達せねばならぬと豫言して居る。而も其れが瓦斯體として可能な事柄であると說いて居る。恒星内部の溫度は數百萬度といふ極端な熱さであるために、物質の原子は其の骨組をばらばらに崩された單一微細の存在となり、白金の數千倍といふやうな極度の壓縮を受けながら、更

らに壓縮の可能性を保有し、瓦斯體として行動し得るものだといふのである。

這の豫言が前記推算の誤りないことを信ぜしむるには、他に全く獨立の證據を吾々の眼前に突きつけてくれるものが欲しいのである。此の證明にアインシュタインの相對原理を用ゐ見事な成功を遂げたのは米國ウイルソン山天文台のアダムスである。アインシュタイン原則は光りのスペクトル中に現はるゝ闇線又は輝線は重力の作用で赤色の方に偏移するものであることを主張する。而して普通の場合其偏移は甚だ小なるが故に檢出し難きも、太陽や恒星の表面に於けるが如き強力な重力の作用する所に發した光線に於ては偏移が可なりの程度に達する理なる故、之れを檢出し得る望みがあると豫言して居る。此の豫言の檢證は相對原則の死活に關する重要な問題として、此の十年程の間太陽スペクトルの研究者が熱心に續行し、ウイルソン山のセント・ジョンやコダイカナル天文台のエバーシエッド等は觀測の結果がアインシュタインの豫報に合致することを發表してゐるが、何分にも偏移が可なり微小なもので、測定誤差の範圍を出でぬものとして、之れに異論を立つる者も少くはなかつたのである。

スペクトル線の相對性偏移を十分に確證するには、太陽よりも更に [illegible]

のスペクトル線の觀測に依つて、這の相對原理の正確さを十分に檢し得る望みがある。處が前にも述べた通り伴星は光りが甚だ弱い上に強光の主星に接近して居るために、其の光りだけを取り分けて分光器にかけるといふことが甚だ困難なので、太氣の動亂の特に少い場所に於て、強大な望遠鏡を用ゐて觀測するのでなければ到底其の目的を達することは出來ないのである。アダムスが這の觀測に成功して偉大な發見を遂げたのは、第一に彼れの卓拔な觀測に依ることは勿論であるが、彼れに與へられた各種の條件が全く注文通りであつたといふことが亦大きな強味であつたことは否むことが出來ない。

太陽の光りに對して豫想されたスペクトル線の偏移は中位の色に就て〇・〇〇八波長單位（一千萬分の一粍）といふ僅少なものであるが、天狼の伴星では、密度を上記の如く斷定すると、スペクトル線が凡そ〇・四單位のずれを示すべき勘定になつて居るが、アダムスの實測した結果は殆どぴつたりと此の豫想の通りになつて現はれたのである。此の成績は相對原則の實證と同時に、エヂントンの豫言したやうな途方もない高密度の星が、實際に存在するものであることの半面の實證にもなり、非常に意義深い發見と言ふべきである。

十　見えぬ連星の發見

撮影する外に、主星のスペクトル線の偏移を測定して兩星の行動を探知することも出來るのである。其は發光物體が非常な速度で吾々に近寄り若しくは遠ざかりつゝあるときは其の速度に應じてスペクトル線がずれるといふ所謂ドップラー效果に依るのであつて、若し連星の兩員が其の共同重心の周圍を楕圓軌道で運行して居るならば、たとひ一方が暗くて見えなくとも、スペクトル線の週期的偏移からして其れが分かり、又兩方共明るくても、あまり接近して居るために望遠鏡で分離し兼ねる場合には、線が週期的に分裂するので兩者の相對運動が分かるので、從つて伴星と主星の位置關係や質量までも勘定することが出來るわけである。此の方法は無論伴星の見える普通の連星にも適用されるので、双方からの勘定が全然一致するといふことからして其の効力と確實さは十二分に證據立てられて居る。

十一　變光星

之れに關連して變光星の變光豫報に就て一言しなければならない。澄み渡つた空に、落ちついた光りを放つて、永恆變らぬやうに見える大小無數の恆星も、仔細に之れを點檢するときは、光力に於ても光質に於ても可なり著しい變化を呈するものが少くないのである。茲に變化と言ふのは大氣の動搖に基く閃きとは異り、又大氣の混濁度や地平線上に昇つた高度に應じて空氣が光りを遮る作用に強弱ある結果として起る變光とは別に、星其自體に現存する變化なのであつて、變光の形式に依つて種々に分類されて居るが、特に目立つた型のものとして第一に擧ぐべきは所謂「食變光星」なる部類である。連星の軌道の平面が觀測者の視線に一致して居る場合には、見掛けには主星も伴星も楕圓的の運動を示さず、たゞ左右に一直線の上を往復振動するのであつて、一方が他の一方の前に來て兩者が地球と一直線をなすやうな位置になると、互に重り合つてしまふために光輝が削がれる道理である。これは日食の際に於ける月の太陽と地球とに對する關係を、其の儘連星に於ける主星伴星の關係に移した場合の現象であつて、一種の「食」なのである。此の種の星で代表的のものはパーセーと稱する北方の星座のβ星であつて、昔から不思議な變光現象を以て知られ、アルゴール（惡魔の意）とも呼ばれて居る。平常は二、三等（星の等級は一番明るいのを一等とし、肉眼で見える最微星を六等として階級を分かち、中間等級には端數を附し、又此の割合を以て六等以下のずつと微かな星にまで等級附をされて居る）の明るさであるが、食の際は數時間の内に三等半まで光が弱り、又數時間のうちに元光にもどるので、其の食の週期は二日二〇時四八分五四・八秒ときまつて居る。此の種の變光星は多くは變光週期がきちんと一定して居るので、一度光輝最小になつてから、次の最小が何月何日に再來するかといふことは、秒を爭ふほどの正確度を以て豫報することが出來るので、天界の時計と稱するも過言ではない。食變光星は分光器的連星としても研究が出來るし、又變光經過からして、主星伴星の大いさの關係まで

も或る程度の推算を行ふことが出來るので、兩者の行動は餘程確かに知ることが出來、豫報の正確を期し得らるゝのである。

變光星には伴星の掩蔽としては解釋しかねる變光經過を示すものが少くない。其の代表的のものとしては鯨座のο星がある。此の星はミラ（不思議の意）とも呼ばれ一年足らずの週期を以て二等乃至九等の光度範圍をなだらかな經過を以て往復して居る。之れと多少趣を異にして、増光は急に減光は緩かに、而かも概してなだらかな變光を繰り返へすところのもの、セフアイ型といふのもある。之等の型はどうしても星の内部に於けるエネルギーの發生、消耗、放射といふ事を土臺にして變光の機巧を考へて行かねばならないのであるが、此の種の問題は數理的の取扱が非常に困難なので、觀測した事實をうまく説明することのできるやうな理論は未だ確立されないので、たゞ光りの強さと同時に色やスペクトルの態様にも週期的の變化を認められるの故を以て、温度や密度の變化を伴ふものであり、從つてエネルギーの生産消費の關係が主軸をなして起る現象だらうといふ大體觀に於て諸學説の一致を認むるのみである。斯くの如く理論がきまらないので、變光經過の豫報も甚だ不確かたらざるを得ない。殊にミラ型のものに到つては、週期が甚だ不齊一たる上に、變光範圍も可成り變化があるので、統計的に光度極大期を豫報したのでは、往々數ヶ月の誤りを來すに至るものである。

十二　太陽活動の豫報

終りに復び太陽系内の問題に立歸つて考へて見やう。以上の如く兩種の變光星の豫報が、一つは的確に出來、一つは甚だ不確實であるといふ差異の生ずるのは、要するに一方では二個乃至數個の天體間の引力關係で殆ど總てが解決する單純な問題であるのに、他は連續物體內の各部の相對運動に關する問題で、無數の微粒子間の關係となり、而かもエネルギーの消耗といふ面倒な事柄が伴ふ點である。一般にかういふ事情の下に起る現象の豫報は非常にむつかしいので、我が太陽系內の現象中其の範疇に入るべきものとしては第一に太陽黑點を擧げなければならない。黑點の正體は近年の研究に依り漸く明るみに出され、灼熱の太陽大氣中に暴れ狂ふ一大旋風であるといふに略ぼ一般の見解が落ち着いた次第であるが、如何にして斯様な渦卷が發生するか、而して如何にして黑點の活動旺盛なる年と甚だ微細なる年との循環[illegible]來するのであるかといふ問題に從つては、甚だ心もとない。從つて太陽活動が何時如何なる程度に達するかといふ豫報を正確に[illegible]の下に行ふといふことは、たゞの[illegible]

或る學者は是の複雜性をば多種の週期變化の複合に依るものと見做して、所謂調和分析の法に依つて各個の週期を採り出し、其の綜合効果として年々の黑點數を表現した處、過去數百年間の觀測結果とは甚だうまく合ふが、將來の豫報に之れを用ふると、まるでいけないのである。黑點の豫報も、やはり變光星の場合の如く、現象の根本原因をしつかりと攫んだ後でなくば勞して功なき業であらう。太陽活動といふ現象の原因を大觀するに、太陽内部の熱の分布が消費と生産の關係に依つて異狀を來し、其が嵩じると極度の不安定狀態に達し、何等かの誘因機會を得て爆發的の變動に轉ずる。斯くして積もり積もつた不安定が一擧にして削り取られ安定に復歸する。此の爆發過程が黑點其他の現象として認識されるもので、不安定の嵩じて極點に達するには、大體週期があつて爆發現象の回歸が行はれさうなものであるが、其週期は種々の事情に左右されるので、可なりの伸縮があり、又不安定の崩れは誘引を要し、而かも次ぎの不安定狀態の成立には前の不安定釣合の崩れ方が影響して來るといふやうな次第であるから、一つの波動をば千波萬波の複合として解析するが如き原理に據り、個々の作用の算術的組合はせとして表現し得べき代物ではない。今迄の力學は斯樣な不安定現象、不連續現象の取扱には甚だ無力である。根本の解決は力學に於ける一段の發展を必要とする。

以上私は天界に於ける現象の豫報の可能性をば各種代表的現象に就いて簡單に叙説したが、此の題目の下に今一段と筆を推めたら、更らに幾多の興味ある現象に觸れることが出來よう。幽玄の境に立ち入ることを望むならば、星辰進化論の如き、星辰分布論の如き、何れも豫報といふ眼で論じられぬこともない。今はたゞ成るべく現實に近き問題のみを撰んで豫報眼に獲へたまでのことである

村山龍平と本山彦一

青野季吉

村山龍平と本山彦一、この二人は、いまさら吹聽するまでもなく、二大新聞王國の、前者は大朝・東朝の、後者は大毎・東日の總大將であり、帝王である。この二人は天上に相爭ふ二つの星の下に生れて來たものか、その出發の最初から、對立し、抗爭すべき運命の下におかれてある。大朝日か、大毎日か、村山か、本山か、これがいさゝかでも日本の新聞支局に關心をもつてゐる俗流の、興味の中心である。恐く村山と本山は、新聞大地にその標高を爭ふ可く、運命づけられてゐるのである。

兩新聞王の人物について云々するまへに、先づその新聞に現はれた差異について、少しく解剖して見やう。昔領主の人物、政治を知るがためには、その領土に[illegible]を[illegible]つにしかずとされたが、それは封建時代のことである。今、新聞王國の領土は、その大部分が一般に公開されてゐる。こゝでは[illegible]をもち[illegible]ないで、[illegible]らかとなるの[illegible]がある[illegible]

極く一般的に言つてゐる、誰でもが認めることは、新聞全體の與へる印象において、朝日はいかにも整然として、一定の格を守つて動かないかに見える。それに反して日日(以下これに毎日も含める)は、とにかく動いてゐる。まだ形が定まらないか、乃至は形が定つても、どこか安定を得ないところがある。二つとも同じく舊い歴史を持ちながら、朝日が老舗らしい風格をもつてゐるに反して、日日が、どこか成金的、虎大盡的の氣味を發散してゐるのは、この爲めであらう。

だが、これは全體の蒸し出す空氣と、それが與へる一般的の印象だが、一度びその世界の内部へ入つて見ると、かへつて反對の現象にぶつかる。と言ふのは、こゝでは日日の方が、固まつてしまつて、朝日の方が、とにかくも流動してゐるからである。記事の質を調べて見ても、いまの[illegible]の[illegible]におよそ[illegible]的記事の[illegible]のないものはないが、[illegible]

[illegible]

れを最高度に持つてゐる新聞だと言つてよいであらう。

たとへば、政治批判の方面でも、文化現象の取扱ひの方面でも、或はまた社會的事實の報道上の取捨にしても、朝日は、比較的自由主義の立場をとつてゐる。ところが日日は、意識的であるかにさへ見ゆるほどに、保守的であり、反自由主義的である。これらのうち極く特殊な一例をとつて見ても、勞働運動、社會運動にたいする兩紙の態度は如何。朝日はとにかく、その事象の輪廓の社會的大いさに應じて、報道すべきは報道するの正直さを見せてゐる。だが、日日は事象の輪廓の社會的大いさなどは問題にせず、否、その大いさを意識的に少化することを欲するかの如く、報道すべきことも報道しない、或る自己拘束を見せてゐるのである。

朝日は、かく、新聞の內容において自由主義を包攝しながら、その形式において定型化し、或は固定化してゐるが、日日は新聞の內容において反自由主義、保守主義を頑强に守りながら、その形式において多少とも流動してゐる。尠くとも固定化してゐない。その對照は兩新聞を觀る上にも興味があるが、それ〳〵の王國の帝王、村山龍平と本山彦一をならべ觀る上にも興味がある。と言ふのは、この現象は、それ〳〵兩帝王の性格を多かれ尠かれ反映してゐるからである。

村山龍平には、自由主義の心境がある。尠くとも本山彦一に比べると、そうである。先年、村山龍平の陣營には、鳥居素川、長谷川如是閑、大山郁夫等の自由主義者が、陣營をとつて屯してゐた。彼が、これらの自由主義者を麾下に擁したについては、自由主義的要素が、今日の段階において、讀者大衆に媚びるための新聞の重要な素であるといふ理由も、勿論大いに作用してゐるが、他方には村山その人の自由主義的心境が作用してゐると見ても、差支へないであらう。だが、彼の自由主義は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、飽までもこれを死守すると言つた底力の强さを持つたそれではない。だから彼は、後藤新平を頭目とする政治的K・K・Kの一擊にあつて、麾下の自由主義を手つ取り早く仕末してしまつた。尤も當時、その政治的K・K・Kは、鳥居以下の自由主義者を放逐するか、それとも大朝の大看板を淀川へ埋めてしまふか、二つに一つだ！ イザと言つて詰めよつたとのことであるが、それは最初から腰が定まつてゐない村山を吞んでかゝつての話である。

本山彦一と雖も、村山に優るとも劣らないヂヤーナリズムのセンスも持つておれば、ニユー・センスも持つてゐる。今の世に自由主義の立場を採ることが、讀者大衆に媚びる所以であることも、悉皆承知してゐる。だが、それだからと言つて、彼は村山のやうに正直に、或は機械的に、世に時めく自由主義者を抱へこむやうな眞似はしない。否、彼の陣營に永く功を積んだ相島虚吼でさへ、その人に附隨する多少の自由主義の陰影を嫌忌して、事に寄せて詰腹を切らせると言つた風である。彼は實に、性格的に、運命的に反自由主義者であり、保守

主義者である。

ところで村山龍平の自由主義的心境も、決して彼の保守的心境と矛盾するものではない。爵位をもらつて平民の衣をぬぎすて、華族に列して一代を飾ることが、彼の終生の目的だと言はれてゐる。いかにも村山龍平らしく、而して朝日のそれらしく、きまり切つており、定形化し、固定化してゐる。彼にある自由主義は、大新聞王國の帝王の徳を飾るための一要素にすぎないのである。

そこへ行くと本山彦一の「終生の目的」は、村山のそれのやうにきまり切つてゐない。定形化してゐない。恰かも日日のそれのやうに。本心はとにかくとして、彼は、ともかく口に、、、、、、、、、、、、、新聞報國を念佛してゐる。それだけロマンチックである、或はまた山師的である。尠くとも村山流に露骨に、、、、、、、、、、、、。彼が、極端に反自由主義的であり、保守的でありながら、一面、粗野な、荒削りな流動性を見せてゐるのは、そのためである。

村山は、美を祝賞するといふ文化的名目の下に、定り切つた書畫骨董を蒐集して、ひそかにその財貨的希望を樂しんでゐる。

本山は、小穢ならしい貝塚を掘つたり、譯のわからない石器時代の遺物をひねくつたりして、薄暗な夢を満足させてゐる。

新聞と石器時代の遺物とは、それ〳〵二大新聞王國の帝王の表徴であり

自由[illegible]

けば分ることだが、朝日にしても、日日にしても、その他の新聞にしても、その最初は極端に自由主義的であつたと言つてよからう。と言ふのは、日本の新聞の誕生と自由主義思想の擡頭とは、浅からぬ關聯をもつてゐたからである。村山龍平の如きも、その傳統の中に育つて來た一人である。しかしその新聞の自由主義は、日本國が帝國主義の階制を漸次に固めて行くにしたがつて、次第に失はれて行つた。そして反自由主義、保守主義が、自由主義に代つて世の新聞の指導意識となつて來た。その推移に乗じて、前景に歩み出たものは、大阪・東日王國であり、本山彦一である。村山には自由主義がこびりついてをり、御體裁があるだけ、本山との競爭には、幾分の損があると言はれてゐるが、この俗評は、蓋し當つてゐる。

新聞にこそ、いまだに影の如く自由主義が殘つてゐるが――新聞における自由主義の要素は、次第に稀薄になると説く論者があるが、私はさうは觀察しない――新聞經營者には、自由主義的心境を多少とも抱いたものは、今は、殆んど無くなつたと言つてよいであらう。その點では村山龍平は[illegible]と言つてよい。いまから十何年前には、また生粋の自由主義者が[illegible]

[illegible]

家兄本野一郎子との間には、甚だ明白な帝國主義者であるの話もあつて、不和が醸されてゐたとさへ傳へられてゐる。當時英吉郎は正義正義と口にしてゐたが、社の經濟的實權はすでに金融ブルジョアジーに握られてをり、それは英吉郎の死と共に暴露された。これは新聞界における自由主義者の悲劇であるが、村山龍平の自由主義には、かうした悲劇は伴はない。彼のは言はゞ、本山の保守的帝國主義と對立して、自由主義的帝國主義とも言ふべきもので、そこに立派な去勢が施されてゐる。

更に餘談になるやうだが、近時、村山の朝日は、、、、、、、、、、、、、一種の武裝狀態にあると、喧傳されてゐる。恐らくこれは朝日の表面に現はれた些かの自由主義の影を捉へられてのことであると想像するが、それならば、、、、、の見透しは間違つてゐる。村山の自由主義は、本山のやうに、、、、、などと言ふ仰々しい飾りは施されてゐないが、爵位が欲しく、勳章をぶら下げたい自由主義である。、、、、、、、、、對象であるよりも、寧ろその保護の對象でなければならない。

右は新聞面に表はれたところに關聯して述べたのであるが、こんどは新聞内部の社員統率――それも主として編輯部の――の方面に關聯して、村山龍平と本山彦一とを比較して見やう。

び手腕に光らす限は、必らずしも欲くなしとはしないのであるが、官僚的に社員を統率し、乃至は社内の人物評價を官僚的に構成することは、本山のそれに比較すると、よほどその程度が薄いと言つてよい。こゝにも彼に殘存してゐる自由主義が、その片影を現はしてゐる。それであるから從つて、ずゐぶん進歩的な、尠くとも反保守的な人物が、『いまでも』彼の幕僚として、仕事をしてゐる。下村海南や、柳田國男などが、それである。

それに比べると本山彦一は、專制君主である。重役とか、秘書とか、部長とか言つたものは、文字通りに、彼の靴紐を解くにしか役立たない。事實、旅行の際など、秘書はその白い手をのばして、彼の靴の紐を解かねばならぬとのことである。本山の社員統率の上の關係はそうだが、更に社員の人物評價を見ても、官僚的、軍國的である。

これは關係社會に有名な話だが、京阪電車の中に、本山彦一の『雄姿』を認めた大毎記者は、その誰なるやを問はず、直立不動の姿態をもつて、『大阪毎日の記者何某です』と大聲に名乘つて、敬禮をすべき義務が課せられてゐる。これは元よりこの新聞主の虚榮に滿足を與へることに最大の意義があることだが、新聞主はこの動作をもつて、社外を一般に廣告するの利益があり、その記者の愛社心を標識するものだと言つてゐる。一事が萬事である。筆者は曾つて『本山彦一論』なる

社内撒布用のリーフレットを見たことがある。こゝには世の進歩的知識分子のとうてい想像にも及ばないことか、書かれてある。大新聞と言ふ文化的機關の封建的内容を知るために、又とない文書だと考へられるので、その一部分を抜きとつて、世の文化謳歌者に呈しておかう。

『……近來社員たるもの、轉職又は休職等につき、或は自己に不便なるため、又は自分の意志に叶はざる故を以つて、或は之を辭し、或は不平を唱ふるものあるが如きは、その心事果して如何ぞや。初め入社の時には、多く窮困を訴へ、懇願哀願してその志望を達し、數年の後に之を忘るゝは、社員の義務を解せざる譏りを免かれざるのみならず、惹いては自己の品位を墜し、信用を害するに至るといふの外なかるべく、余は友誼上よりするも、之を勸告警戒せざる可からず。この時に方り或は世間の流行を眞似勞働者の團體の如く不平を唱へ、同盟罷業、増給運動など夢みつゝありとせんか、これ精神勞働者が筋肉勞働者の仲間入りをなし、紳士的が壯士的となり、學者が仲仕を學ぶものにして、實に慨嘆に堪へざるなり。云々』

隨分露骨に文を綴つてあるが、これを更に露骨に、中味をさらけ出して見ると、お前達は、職へ口を頼みに來た時は、飯が食へないとへい〳〵してゐたくせに、少しお腹が[illegible]まると、不平を言ひ出すとは怪しからん[illegible]こゝにおいて[illegible]

[illegible]日は官僚式一と皮肉られるほど、酷く官僚的ではあるけれども、[illegible]がにまだ『本山告諭』に似た『村山告諭』の發せられたのを聞いたことがないのである。恐らく村山の些少の自由主義は、それを許さないのであらう。

ところでこゝに面白い事實がある。村山の朝日の社員には、そうした理由から、多少とも進歩的、自由主義的、而して今日『一種の傾向』（ラッセル）となつてゐる社會主義的の分子が介在してゐるが、介在を許してゐるが、その分子が何れも申合せたやうに、朝日の統制の下に、一絲亂れずと言つた氣味を見せて、默々として服從して居り、いづれもその取澄した態度から、『朝日』らしい空氣を發散してゐることである。一口に言つて見ればそこには横紙破りが、一人もない。まことに整然としたものである。ところで、本山の日日になると必らずしもそうでない。本山の專制的支配には、鐵の如きものがある。その人物配備の段階組織は、巖の如きものがある。それでゐて社員の或る分子は、必らずしもその凡ての行動が、大日日の建設へ、と向つて、整然と動いてゐない。横紙破りがある。蓋し無産大衆黨の書記長鈴木茂三郎君の如きは、その中の目立つた一人であらう。もしこゝに一人の[illegible]無能無政府主義者があつて、生活のためのみで新聞社に籍をおくとすれば、新聞にはその人間を容れる余地は、全然ないが、頭から官僚[illegible]

用してゐるであらうが、やはりその一つには村山と本山の性格、仕事振りの差異に、その因があらう。村山は本山ほどに、露骨、粗野でなく、猛進的、進擊的でない。尠くとも君子人的風格を保たうとしてゐる。したがつて寛容の德について、薄い關心をもつてゐる。彼が本山ほどに、專制的に振舞へないのは、否、振舞はないのは、そのためである。だが、彼が『大朝日』の面目を尊重する度合は、本山が『大每日』の體面を尊重する度合に、優るとも劣つてゐない。而して彼の若干の寛容の德と、それから發した社員待遇上の些少の手心とは、社員をして期せずして、その統制に服せしむるに足るものがある。これは一種の懷柔であり、村山の人物をよく反映してゐる。一度び朝日の記者となるや、青年の頃のラヂカリストが何時の間にか、去勢されたリベラリストと化して仕舞ふの秘密は、たしかにこゝにある。そこへ行くと本山は、さういふ薄い心境に纏綿してゐない。その遣り口は曩にも言つた通りに、徹底的に封建的、官僚的ではあるが、その指導意識は、飽までも資本主義的であり、帝國主義的である。強制である。克服である。排除である。この下から表面は、その強制に強制され、その克服に克服されたやうに裝ひ乍ら、多くは隱然の、偶には公然の横紙破りの出るのは、寧ろ自然である。生きた人間關係における、皮肉な自然である。村山のところでは、すべてが完成されてゐる。、、、、、、骨董品の如く、固定してゐる。本山のところでは、一部はたしかに未完成である。本山王國の建設と、石器時代の遺物の如く、それは定つた形を成してゐない。

兩者の社員の動向における以上の相違は、主として社員の待遇の如何にその端を發してゐるものだと、横槍を入れる人があるかも知れない。勿論それも一因ではあらう。だが今日、朝日と日日とに、社員の待遇上に大した相違があるとは思はれない。ばかりでなく、それが實狀であると言はれてゐる。して見るとそれの依つて來るところは、兩王國の内部に醞釀されてゐる空氣である。而してその空氣醞釀の杜氏が、それ〴〵その王國の主その人であることは、言ふまでもないであらう。

村山の朝日と、本山の日日との差異、したがつて、村山と本山との遣り口の差異は、その背後の資本閥の關係からも之を照し出すことが出來やう。

村山は尠くとも本山のやうに、その背後に壓倒的な金融ブルジョアジーの勢力を背負つてゐないと見てよい。或は三井、或は鄕、又或は閥の勢力が云々すれども、それも決して壓倒的なものではない。そこへ行くと本山の背後には尠くとも、久原、藤田等の金融勢力を控へてゐる。この相違は、兩者の行動の上に鮮やかに表現されないではおかない。村山はさう言ふ理由から、比較的、自由な立場を執り易い位置にゐる。資本の壓迫がそれほど強くないからである。『社會の木鐸』とか『不偏不黨』とか『公平』とか言つたことを看板にもし、その實を裝

予て取入れもするのに、比較的便宜な立場に在る。彼の今日の大をもつてしては、寧ろ背後の數多の結合的の資本家に、若干の媚を呈するよりも讀者大衆の心意、要求に媚びた方が、有利でもある。それが朝日に表はれた自由主義の一つの大きな根柢であると見てよいであらう。我々は先般の總選擧にあたつての、朝日の思ひ切つた選り口を記憶してゐる。『買收に乘るな』とか、『脅迫を恐るゝな』とか言つた赤字の膈出しは、いかにも朝日の『社會の木鐸』振りを發揮し、反政府的、民衆的心意を浮出してゐた。が、それと共に、その朝日がそうした『買收』や『脅迫』を、、、、、、、それと飽まで戰つた事實を知らないのである。こゝに朝日の自由の限界がある。彼は、反政府的であること、民衆的であることが、その事業にとつて有利であるのを知つてゐる。しかもその有利な武器を或る場合には、充分に利用するのに、比較的自由な立場にある。だが、それは讀者大衆を惹きつけるがための武器であつて、政治的不正、社會的不正義と飽までも抗爭するの武器ではないのである。民衆の朝日であれば、その自由主義は當然そこまで徹底するに相違ないし、徹底させねばならないが、それは村山の朝日である故に、そこまで徹底する譯はないし、徹底され得るものでもないのである。

村山は、嚴に言つた朝日、大衆とは觀念の論據[illegible]である。そして朝日、大衆と結合してゐる資本力の前に立つ村山は相當に[illegible]を感じな[illegible]
[illegible]日の政府與黨が相當に鮮かになつて來たの[illegible]は村山に比して不自由な立場にあると言つてよい。だが、これは大[illegible]日建設のためには、必らずしも障害となるものではなし、反つてその助けとさへなるものだと觀てよい。

村山の朝日は、その比較的自由な立場を發揮し、その讀者大衆本位を發揮するところから、やゝもすると政府や反動勢力から仇敵のやうに憎まれることがある。鳥居、長谷川の筆禍事件の時にもそうであり、吉野作造博士の時もそうであり、現在もそうした事件が朝日を脅威してゐると聞いてゐる。そこへ行くと本山の大每・日日には、そんなことは無い。彼は、曾つて讀者大衆本位になつたことはなく、常に大資本閥、引いて政府の、露骨に言へば、鼻息を窺つて、仕事をしてゐる。それだけ安全である。

朝日の村山の自由主義には、その小資本綜合の性質が反映してをり、同じく日日の本山の保守主義、反自由主義には、その寡頭的大資本の性質が反映してゐる。

近年、大每は大朝を、、、、、、、、、、、、、、、と言はれてゐる。それには今も言つた政府や、、、、、、、、、朝日攻撃が大いに影響してゐる。言はゞ火事場泥棒であるけれども、、、はやはり、、、であらう。[illegible]村山は先年、政府の彈壓に[illegible]するや、この[illegible]を敢行し、大阪[illegible]
[illegible]

くヒドイ打撃を蒙つたことは事實であらう。本山は、その朝日の退却に乘じて進出したのであつた。――それならば、今後、この勢力關係がどうなつて行くであらうか？

村山龍平と本山彦一と、その何れが日本のハーストと成るであらうか？　これは可成りに興味のある問題である。村山も本山も、共に主觀的の新聞王たらんと、夢みてゐる。たとへその新聞王としての儀容において、前者は爵位をつけ勳章をぶら下げた新聞王であり、後者は新聞界に力の支配を敷く新聞王であるの差異があつたにしても、とにかく日本新聞王たり、日本のハーストたらんとする欲望においては一である。

先づその資本力の關係から見ると、新聞王の榮冠は、どうやら本山に落ちそうである。彼は、現在、よく大金融資本の勢力を十分な意味においてその背後にしてゐないとは言へ、それを楯として進出し得るコンネクションがおぼろげ乍ら出來上つてゐる。この意味において彼は、村山よりは新らしい時代の新聞界の舵手である。村山の背後にしてゐる資本は、その大において現代決して本山のそれに劣つてはゐないが、本山が背後し得る資本に比べると、その性質が、平和的、保守的である。本山のそれは、その性質上、戰鬪的であり、進撃的である。

次に仕事を進めて行く上で見ても、新聞王の榮冠は、やはり本山のものであるらしい。前にも述べたやうに、村山のそれには、表面的にせよ上品であり、怪しげに風格を嚴守してゐるところがあるが、本山のそれは思ひ切つて、前進的であり、不作法である。有名な話であるが、本山は旅行する時に、必らず驛々で大毎を買占めてしまふ。その底意は、それだけその地方における大毎の配給數を増加させんがためであると言ふ。凡てがこの遣り口である。新らしい時代の新聞王は、村山式でなく、本山式でなければイケないのではないかと思ふ。

將來の新聞王が歩み出るための、最も大きな條件は、政治的勢力との關係である。この點で見ても、村山には若干のハンデイキャップがある。村山に殘存する自由主義、乃至朝日の傳統の一つたる自由主義が、村山及び朝日と政府との間に、一種の溝をつくつてゐる。この溝を埋めることは、必らずしも容易ではない。ところが本山の場合には、最初からこの溝がない。本山の日和見主義は、いかなる政府とも、この溝をつくらない。したがつて彼の新聞王への歩みは、政府の援助を得ないまでも尠くとも政治的權力の妨害を蒙らないのである。

だが、以上の觀察は、讀者大衆、即ち民衆の支持を計算の外においての觀察である。いま民衆の支持を、一つの有力な規準として考へて見ると、將來、新聞王の榮冠は、村山龍平の頭上に落ちるのではないかと考へられる。即ちそれへの強い觸手は、彼のところにある『社會の木鐸』意識、自由主義的心意である。村山及び朝日は、もし現在の姿を發展させて行けば、或は支配階級の支持は之を失ふかも知れない

が、廣い意味の民衆の支持は、本山及び大毎のそれの比べものにならない位、得るに相違ないのである。村山及び朝日は、大朝日王國建設に當つて、明らかにそれを意識してやつてゐるが如くに思はれる。先頃の第一回普選、即ち民衆が始めて政治的舞臺に登場するに際しての、朝日と日日の態度の相違が、それを明瞭に證據立ててゐる。朝日は、明らかに民衆の政治的勢力の昇揚のために、政府の直接間接の壓迫と抗爭するの身構へを示した。それに反して、否、それに比較すると、日日は民衆の政治的勢力の發揚にたいして冷淡であつたと言つてよい。

さて、新聞の大を爲す所以は、主として資本力と、主宰者の機械的努力に存するものならば、日本の新聞王の榮冠は、必然本山の手に歸するであらう。だが、それが資本力の大と相俟つて、廣汎な民衆の支持に存するものならば、この榮冠は、當然村山の頭上に來るであらう。

こゝでまた少し餘談になるが、日本の新聞界には、アメリカのハーストの如き意味の新聞王が、而してその形成してゐるが如き新聞王國が、遠い將來に現はれる可能があるだらうかと云ふ問題がある。人も知るが如く、ハーストの新聞王國は、全米の新聞の大中小過半の新聞を聯絡し、それ自身の一大通信社さへ持つところの、一大新聞トラスト、一大新聞王國であつて、新聞王ハーストはその上に君臨してゐるのである。

地方の中小新聞、東京の第二流以下の大新聞すらが、支配の下に、今日非常に苦しんでゐることは事實である。朝日と日日とが存在し、發展して行つてゐる以上、最早他の新聞の羽翼を延す餘地はない、とは常に耳にするところである。而も朝日と日日とは、自己にとつて強敵と見れば、一種の休戰條約を結んで、その強敵を仆すために邁進する。この聯合軍に蹂躪され乃至は深手を負はされたのは、曩に大正日日新聞があり、近くは時事新報がある。

それならば、それらの都會及び地方の中小新聞は、村山の下乃至は本山の下に、一大新聞トラストに結合されるであらうか？ これはいさゝか疑心であると言つてよい。相當に遠い將來について見れば、それは一種の經濟的必然であるが故に、そう成ることは明らかであるけれども、それ以前に中小新聞に、もつと自然的整理が行はれるであらう。勿論その整理を行はしめる外的力は、朝日、日日の進攻であることは言ふまでもない。その自然的整理が或る程度まで進捗して、而して後に一大新聞トラストが形成されるであらう。新聞トラストの形成は、銀行の合同のやうな簡單な經路をとつては行はれないが、しかし相當に遠い將來において、ハースト王國式の一大トラストが日本にも形成され、日本の民衆の耳と眼が、ほとんど完全に一新聞王によつて占領されることは、可能なことであり、且つ必然でもある。

而しここの萬能の新聞王に、本山乃至村山其の人物であるとより

[illegible]

るところである。

日本の新聞人物界の歷史を見ると、いまは正に一つの轉回期に立つてゐる。而して村山龍平は、實に前期的型の人物の『大いなる終り』であり、本山彦一は、新らしい時期の型の『大いなる初め』であると言つてよいであらう。自由主義的心意と深い關聯をもつて生れた日本の新聞界の人物史は、村山龍平をもつて、大きな終りとなるであらう。而して帝國主義日本と深い關聯をもつて生長して行く可き新聞界の新人物史は、本山彦一をもつて、大きな初めとするであらう。

前期的型からは、決して帝國主義日本の直接の前衛となるやうな新聞舵手は生れない。時既に帝國主義日本の時代に入つて、その內部の經濟的機構がすつかり資本主義的組織となつてゐる朝日においてすら、『大いなる終り』はやはり『大いなる終り』である。村山には決して、帝國主義日本の直接の新聞舵手、金融ブルジョアジーの放送になれる資格はない。だが、本山は、進んで帝國主義日本の直接の前衛の役をつとめ得るであらうし、甘んじて金融ブルジョアジーの放送器となるであらう。それが彼の新聞界の新人物史の『大いなる初め』たる所以である。

一個の人間としての村山龍平、本山彦一については、ほとんど何等言ふ可きことはない。一方が穏和で、他方が猪突であらうと、一方が洒落をひねくり、他方が貝塚を掘らうと、大新聞の基礎をつくるために、一方が水の中をくゞるやうな辛酸をなめ、他方が火の中を行くやうな苦勞をしやうと、そんなことはどうでもよい。彼等もまた歷史と、而して資本の子である。歷史の示すところ、資本の指すところにしたがつて、彼等は動いて行くであらう。（一一・七）

最近農民運動の傾向

杉山元治郎

一　退嬰的氣分の原因

燎原に火を放つた様な勢を以つて全國に燃え擴がつた農民運動は、昨年の半過ぎより漸次地主資本家の逆襲により稍々沈退期に入つたかの如き觀があつたが、普選に於ける暴壓を初めとして三月十五日事件後、政府は、、、、、、、、、、、、、、、地主資本家は時を得顔に追擊のツルベ打を開始したから流石の農民運動も昔日の勢ひなく、遺憾ながら最近に於ける傾向はいさゝか萎微退嬰の氣分が漲つてゐるかの様である。

其は單に地主資本家の攻勢と政府の彈壓のみによるのでない、其よりもより重大なる原因は三月十五日事件により主なる活動分子を殆んど戰線上より除去せられたとである。彼等の戰術には或は少々の間違があつたであらう、併し其の活動は實に目覺ましいものであつた。所謂何物をも焼き盡さずんば已まぬでいの宗教的熱情を以つて働いてゐた。今日の運動に其の熱情と其の氣分が缺けたとである。

今一つの原因は若い指導者達が農民と農村社會に於ける認識を誤つたことである、農民には模倣と、、、、、はあるが、本來保守的鈍重なものでそう簡單に動くものでない、また農村社會は主に一つの氏族を中心として發達し、親類縁者を以つて結合され、傳統的に社會紐帶が緊密であつて一寸やそつとでは動かない情勢にあるのである。然るに若い人達が感興の餘り短兵急に仕事をなさんとしたことゝ或は都會同様否な都市プロレタリヤにすら習易に服用し難い高度の闘爭意識及び戰術を農民に適用したことである、純朴なる農民は或は云はるゝまゝに一時[illegible]したであらう、併し其が却つて一旦の[illegible]を及ぼし更には[illegible]會に於ける支部の脱退、或は消極的サボタージユ、組合費不納等の事實となつて現はれて來たのである。農民の解放には勿論都市プロレタリヤと協力する必要があるであらう、或は又都市勞働者の力を大に借らればならぬであらう、併し農民を全く同一列に置くことに間違が生ずるのである。即ち今日の衰頽の一半の責任は少なくとも其の認識の誤りが負はればならぬのである。

二　政治運動より組合運動へ

最近農民運動内に盛に聞ゆる聲は『農民運動に專心せよ』と云ふことである。無產農民の解放には政治行動を放れてなし得るものでない。小作料輕減の一歩後には立毛差押あり立入禁止が控へてゐる。是が爲に農民組合は率先して無產政黨の提唱をなし其の組織に最全の努力を盡したのである。

非常な期待を以つて生れた無產政黨成立後農民組合其れ自體の勢力は何うなつたか、疲勞、衰弱となつて現はれたのである、其は何ことによるか、運動の初期であつた必然の結果[illegible]合法政黨の形となつた。組合の[illegible]は政黨の[illegible]であり、組合費[illegible]政黨の[illegible]の負擔

をせねばならぬ、特に選擧でもあると組合は人間的に、經濟的に負擔がなか〳〵重いのである。夫で一二回の選擧と日常の政治運動の結果先づ地方の幹部が經濟的に生理的に疲勞を覺え戰線より退却を初めたのである。何時の時代でも民衆凡てが自發して動いてゐるものでない。僅かの指導者により引率されてゐるものである。殊に農民に於て然りである、其の指導者階級が衰頽疲勞を覺えては其の運動推して知るべしである。

政治運動は單に組合の幹部を肉體的に、經濟的に疲弊せしめた計りでない、政黨内に於ける主義主張の相違は政黨の對立となり引いて組合の分裂となつたのである。『分れ爭ふ者の榮えたる例しがない。』即ち對立抗爭に精力を消費し肝心の本業をおろそかにしたことである、爲めに組合の未組織地は發展せず組合内にあるものも右せんか、左せんか去就に迷ひ、其が自然運動不活潑となつたのみならず組合費不納となつて現はれ、其の惡習慣は連續していよ〳〵組合運動の衰頽を來したものである。又一つの者が精力を二分して滿足に行ける筈のものでない、政黨を一生懸命にやれば自然と組合運動がおろそかになる。昨今組合内の疲弊を痛切に感ずるに及んで『組合は組合本來の任務へ』と云ふ聲が高まり、從來の組合卽政黨の狀態を放れ、組合は何處までも本來の任務である經濟的鬪爭に邁進すべきであると云ふ傾向が强くなつて來たのである。全國農民組合の新運動方針は其の鉾先きを示すものであつて、爾後其の傾向はいよいよ盛んの樣である。

三　協同組合運動の勃興

前述の如く農民運動が本來の經濟的運動へと舞戾つて來た結果、今一つは退嬰期にある農民運動を如何にして盛ならしめるかの方策として協同組合運動が採用されかけた樣である。現今の農民運動には從前の如き小作料三割減と云ふ樣な實質的な、而して非常な吸引力を持つてゐるスローガンはない。耕作權の確立と云ふても現在土地を爭ふてゐる農民以外にはピンと來ない。最早小作料は或程度まで輕減されるし、此上經濟的なお利益が一寸見えねば組合を一時脫退さして貰ふ。僅かの組合費でも出して置くのは惜しい樣な氣持になるのが、敎育の少ないまだ〳〵階級意識に目醒めてゐない農民に取つて當然なことである。其で是を防止し徐々に敎育して行くの道は協同組合の外に一寸適當なものはない。それかあらぬか最近に於いて協同組合に關する質問は日一日と多く、又設立される支部聯合部もぼつ〳〵ある樣である。

協同組合を初めると利益が覿面現はれ實利的な農民の心にピツタリと適合するから『協同組合をやれば其の利益の一部分で組合費が間に合ふから農民運動には何うしても協同組合をやらねばならぬ』と、協同組合を初めた支部の人々が云ふてゐる。利益があれば組合から脫退せよと云ふも脫退せないのである。理論も必要だ、理論がなくては運動の根據がない。併し利益の伴はない純理論では農民が從いて來ないのである。指導者間に斯る情勢を觀取したか最近農民組合内に協同組合運動の熱は膨湃として起つてゐるのである。今や地主の搾取に對する鬪爭は稍々困難になつた。此際商工資本家に對する鬪爭として著しく協同組合運動は展開されるであらう、是は最近に於ける農民運動の傾向である。

無產黨合同問題の裏

山內　忍

（一）

合同問題といふと、何だか無產陣營の年中行事の一つのやうになつてしまつた。秋に入つて無產政黨各派の大會が近づいて來る頃、きまつて無產陣營の一角から合同論が捲き起つて來る。が、それも一揉みした揚句の果にやがて依然たる昔の對立の姿に還へる。

しかし無產政黨合同問題も時と共に其の客觀的情勢の變化に應じ內容が動いて行く。ただいつも合同問題の中心に立つて左右兩翼からの風の當りを強く受けるのは中間黨の日勞黨だ。それは善くも惡くも中間黨そのものゝ必然的な運命であらう。

理屈は拔きにする。こゝでは今度の合同運動の表面の動きに表はれない樂屋裏をまくつて見て、突如として風雲を捲き起したかに見える『合同問題』の其の內幕を暴露して見やうといふのである。殊に今度の合同問題に、今までの合同運動といふものが、實に各黨何れもの對內策から割り出された口先だけの論戰に過ぎなかつたのに比べると、先づ日勞黨は黨分裂の一步前といふ際どいところまで揉み合つたし、無產黨合同には常に馬耳東風といつた態度を示してゐた社會民衆黨までが、兎に角一步も二步も（腹の中は判らぬが）乘り出して來たといふところに、事實としての興味も繫がつた。

ところで合同問題の樂屋裏を叩いて見ると、そこには既成政黨の諸君とあまり變らない策士の策動があつたり、また流石に待合ではなかつたが、溫泉だの公園の料亭だのが秘密會議の場所に使はれたりしてゐる。一膳めし屋の二階で一黨の合同方針を決める中央執行委員會が開かれたとも書けぬので、新聞では『〇〇日、本部に於て中央執行委員會を開會した』などと書いたものだ。

（二）

先づ七月二十八日のことであつた。奈良縣生駒郡生駒の瓜溫泉にポツリ〳〵と、たゞの溫泉客のやうにして集つて來たのが、日勞黨の中央執行委員山名義鶴、吉田賢一、河野密。社會民衆黨の田萬清臣、古野周藏。新黨準備會（舊勞農黨）の細迫兼光、水谷長三郎といふ顔觸。それに奈良水平社の米田富、坂本清、泉野利喜藏の諸君であつた。主人役は水平社の連中で、ゆつくり溫泉につかつて、鮎料理でも喰つてさてそこで戰線統一についての意見を交換しやうといふのであつた。

たゞ無產大衆黨の大道憲二君だけは招待は受けたが遲れて別の日に水平社の門を叩いてゐる。そして其の日の經過報告を受けて歸つたといふ話。

そこで瓜溫泉の秘密會合の顛末だが、これに集つた連中が、秘し隱しに隱してゐたものだ。それは一切外部に洩さぬことといふ申合せをしてゐたからでもあるが、ある一人などは記者から質問を浴びせられて、ハツと顔色をさへ變へたものである。事實、ノメノメ警察當局すら、此の日の會合を知らずに、後で某方面から[illegible]たさうである。これ

ほど祕中の祕としてゐたものであつた。で其の祕密會議の内容をザツと書いて見やう。

先づ初め主人役の水平社側から現下の情勢を說いて

『各黨の腹藏のない意見を聞いた上、此際合同が出來るなら盡力して見たい。』

と產婆役を買つて出た。

それで各派から夫々合同問題に對する意見を吐いたが、日勞黨は問題なく無條件で合同に贊成。社會民衆黨も殆ど無條件に合同意見(尤も社民黨からの出席者は前から日勞黨との合同を主張してゐた關西方面の人のみであつた。)であつたが、新黨準備會側は細迫君が例の通り『社會民主々義の批判』といふ條件を持ち出したので、水平社側から『君達はまだそれを問題にしてゐるのか』と突つ込まれ押し問答の末、一先づ細迫君がそれを澁々取消して納まつた。

ただ水平社の現勢力が無產黨合同問題にどれだけの役割を演じ得るか、どうかであるが、近く今度は公開で合同の斡旋をするといふ話である。しかし旭溫泉の會合は結局、各派有志の意見を聞いたといふだけで、その結果は合同運動の上に具體的には現はれなかつた。

そして其の間に、關西に於ける日勞黨と社會民衆黨との合同熱が、それまでの兩派の有志の個人的接觸を越えて表面の問題となつて來た。關西總同盟の中央委員會では東京から出席した會長鈴木文治、松岡駒吉、赤松克麿の諸君が『まあ〳〵』と抑えた形になつたが、兩派の交渉は次第に深刻になつて來た。そして、それが大阪府箕面公園の料亭『里乃屋』の會見となつたのである。

八月十五日のことである。

出席者は日勞黨が河上丈太郎、山名義鶴、吉田賢一、安藝盛。社會民衆黨の西尾末廣、山内鐵吉。それから大矢、本山、鈴木(悦)の諸君であつた。

この會見もやはり極秘に附せられてゐたが、兩黨關西方面の中心人物が集つての懇談の内容――その祕中の祕を洩らして見ると、先づ社會民衆黨側から

『われ〳〵は兩黨合同の指導精神は社會民主々義の上に立つこと、それから、われ〳〵と指導精神を異にする現日勞黨の左翼幹部麻生久、坂本孝三郎、河野密、田所輝明の諸君を除外することを合同の條件としたい。』

と强硬な意見を持ち出した。それに對して日勞黨側は

『われ〳〵に合同に對する條件はない。しかし指導精神や人事の問題を決定しなければ合同が不可能であるとは思はない。人事問題の如きは合同後に清算することにした方が妥當ではないか。』

と應酬した。殊に河上代議士は

『社會民衆黨が今、指導精神や人事の問題にこだはつてゐては無產戰線の統一は到底實現出來ない。此際、虛心坦懷、萬難を排して一路合同の促進に邁進されたい。』

と熱心に說きつけたが、此の會見もまた結局、社會民衆黨側の合同條件が引つかゝつてそれ以上に進展せずに物別れとなつた。しかし、日勞黨の關西側の諸君は合同を斷念せず山名君などは社會民衆黨の關西總同盟の少壯分子とカフエーで會つたり、自宅に招いて說得したりしたものであつた。

(三)

大阪箕面の『里乃屋』の會見が、それから約十日あまりを過ぎて今度は東京の吉野作造博士邸の會合となつて現はれた。

先づ吉野博士と昵懇な日勞黨の山名君が、吉野博士に向つて

『關西側の社民黨の諸君といろ〳〵話し合つて見たし、大阪の總同盟中央委員會の光景を

見ても、日勞黨と社民黨だけの合同は出來さうに思ふが、更に關東側の社會民衆黨の諸君の意見をよく聞いて見たいから、博士の肝入りで會見の機會をつくつて戴きたい。』

と持ちかけた。吉野博士は人も知る社會民衆黨立黨の産婆役の一人だ。そこで博士が、

『それはいゝことだ。一つ骨を折つてやらう。』

といふので、兩黨の代表者を自邸に招いて會見させたのが八月二十七日の午後であつた。

其の日出席したのは日勞黨では河上丈太郎、山名義鶴の兩人。社會民衆黨は松岡駒吉赤松克麿の兩君であつたが、山名君から

『社民黨の關西側の諸君とは度々會見して合同に對する意見を聽いたが、關東側は日勞黨との合同についてどう考へてゐるか、意見を聞きたい。』

と切り出すのを松岡君、例の調子で

『われ／＼は社會民主々義の上に立つ合同なら何時でも賛成する。しかし今の日勞黨は社會民主々義ではない。[illegible]綱領を見ればそれが判る。だから今、日勞黨との合同は絶對に出來ない。それに[illegible]

だ。』

とキツパリはねつけてしまつた。

關西を中心とする日勞黨内の社會民衆黨との合同を促進しやうとする運動は、だがしかし愈よ強くなつて來た。尤も關西の日勞黨の人々は、關東とは違つて常に社民黨の人々と相接觸してゐる。共同鬪爭もやるし、個人的にも親しい。そこに自から合同促進の運動が起るわけだ。ところが關東に來ると事情がまるで違つてゐる。對立的關係である。しかも關東の日勞黨の幹部には左翼の無産大衆黨と接近してゐる人が多く、其の主張も左翼結成に傾いてゐる。殊に農民組合の連中は組合の方が一體になつてゐるので當然無産大衆黨との合同を主張する。かうして日勞黨内の二つの潮流は次第に其の分野をハツキリさせて來た。そして關西側の右翼合同運動が進展すると共に、日勞黨は右か左か、黨としての態度をどつちにか決めねばならぬ羽目に追ひ立てられた。それが九月二十三日から二十五日に亘る中央執行委員會の大逆潮となつたのだ。

（圖）

さ[illegible]黨としての態度を決める爲の二十二日

り午後、[illegible]

團體である日本勞働組合同盟の中央委員會の[illegible]芝青年會館に開かれた。そして會長の棚橋小虎君等十八名の委員が出席し、傍聽を一切禁じて討論した結果、菊川忠雄君（泉月源治君病氣缺席一人が棄權したゞけで、大多數で『無産大衆黨との單獨合同反對、社會民衆黨との合同促進』の決議をした。此の組合同盟の右翼化に對して日勞黨に屬する全國農民組合の有志の協議が二十四日の夜、四谷の細野三千雄君宅で開かれ、高橋龜吉、須永好、三宅正一、淺沼稻次郎、荏原達、吉田賢一、川俣清音、林宜、細野三千雄の諸君が出席したが、大多數は依然として左翼合同論で、唯一人關西の吉田君を除いては何れも社民黨との合同に反對した。吉田君の賴みにしてゐたらしい高橋君も、現段階では農民運動は寧ろ左翼にとるべきだといふ意見を吐いて右翼合同に反對した。そんなわけで結局『日勞黨立黨の精神に基いて無産大衆黨を含めた統一政黨の實現を期す。』といふ穩やかではあるが、社民黨との合同に反對の申合せをしたのであつた。尤も吉田君だけは一足早く十時頃歸つて行つたが、といつても當然席を蹴つて去つたのではなかつたさうな。

そこで問題の中央執行委員會であるが、二

十三日は正式な委員會とせずに、芝愛宕町の『あづまや』といふめし屋の二階で、先づ懇談をすることになつて、集つたのが書記長の麻生久君を始めとして中央執行委員の河上丈太郎、山名義鶴、吉田賢一、三輪壽壯、加藤勘十、河野密、淺沼稻次郎。組合同盟の棚橋小虎、上條愛一　菊川忠雄、安藝盛。全國農民組合の須永好、細野三千雄、川俣淸音。總聯合の坂本孝三郎、の諸君に本部の田所輝明君其他合せて三十何名。狹い室にギツシリと詰つて、先づ組合同盟、農民組合、總聯合の各支持團體から情勢報告を聞き、晩飯を喰ひながら膝つき合せて仲好く話し合ふことにしたのが、やがて左翼右翼の論爭となり、農民組合の淺沼君と組合同盟の棚橋君の間に激論が初まるといふ有樣で形勢早くも穩やかならざるものがあつた。そして『あづまや』を出ると其の一團が其儘、關西側の連中の泊つてゐる三田の旅館旭館にドヤ〳〵と流れ込んだからたまらない。兩方ともに尻を落ちつけてまた論戰が始まつた。

ところが關西側の社會民衆黨との合同主張はなか〳〵强硬で、棚橋、安藝君等が急先鋒でまくし立てる。これに對して加藤、河野、淺沼君等が反對論を主張し、殊に淺沼君などは『社會民衆黨と合同するなんて組合へかへつて云へるものではない。』と頑張つた。

『僕には意見がないから諸君のいゝやうにしてくれ』と背水の陣を張つたのが策士の田所君。麻生君、三輪君は現狀維持論を唱へた。

が兎も角も關西側の鼻息が頗る强いので關東側も遂に

『關西の諸君がそれ程社民黨と合同したいなら自由に合同するがよからう。しかしさうなればわれ〳〵もまた自由行動をとる外はない分裂あるのみだ。』

と旗を卷く氣勢を見せ、田所君(?)は

『諸君は日勞黨の分裂を賭してまで社民黨との合同を主張するつもりなのか。ハツキリ云つて貰ひたい。』

とつめよつた。麻生君はまた麻生君で

『社民黨と合同すれば加藤、田所、河野の諸君が苦境に立つことは眼に見えてゐる。それを同志として見殺しに出來ないから自分としても考へなければならぬ。』

と悲痛の言を吐いた。こゝまで形勢が惡化して來ると棚橋君等も流石に狼狽した。そして其の夜は徹宵論じ合つて一先づ別れたが、黨分裂の危機に直面して現狀維持論が大分起つて來た。

翌二十四日は前夜の旭館の一幕が無届宿泊だとあつて、殘つてゐた河上、山名、加藤、河野、田所、棚橋、淺沼、吉田、安藝の諸君が一時檢束されるといふ悲喜劇などが起り、また流石の闘士諸君も疲れたとあつて休會となつたが、其夜、形勢の切迫に驚いた棚橋君等が組合同盟本部で緊急中央執行委員會を開いて『無產大衆黨との單獨合同には反對だが社民黨との合同を固執しない。』といふ申合せをして態度を緩和するやら、農民組合の三宅川俣君と棚橋、安藝君が會見するやら、大勢はトン〳〵と現狀維持に落ちて行つた。そして二十五日御成門のソバ屋東壽庵の二階で開いた執行委員會では司厨同盟の久留弘三君も出席して、當分現狀維持。『日勞黨立黨の精神に基き』といふトツトキの看板を擔ぎ出して一先づ分裂を喰ひとめた。しかしそれは要するに當分の話である。十二月の大會がどうなるか。なか〳〵まだ低氣壓は去つてゐない。

（一〇、一）

國民政府の新組織と中心人物

長　野　朗

北伐成功後五頭會議、第五次中央執監全體會議と漸次建設の步を進めて來た國民黨は、愈々國民政府の組織を完成し、五權憲法による五院を設けてそれ〳〵院長、副院長を任命し、行政院内の各部長の任命を終つて一通り形だけは造り上げた。今度の組織で特に目立つて居るのは右派の勝利である。

第五次の全體會議ではかなり左右兩派の爭鬪が行はれた。其爭鬪の中心となつたのは政治分會の存廢問題、黨と政府の權限問題、民衆運動の三つであつた。政治分會は軍閥割據の弊を造るもので、軍閥全盛時代にあつた大軍閥の巡閲使制度がハイカラな名前を付けて再現したものであるから、右派は之を廢止しやうとし、左派は之を[illegible]やり、會議は將に決裂しそうになつたが、今年一杯存置すると云ふ妥協論が現はれて漸く納つた。黨と政府の權限問題では、左派は黨の權限を大にして政府を抑へやうとし、右派は黨の權限を縮少して之を有名無實のものたらしめんとした。黨は上層こそ右派に占められて居るが、中下層は左派が優勢であると云ふのは、黨の仕事は多く民衆運動であつて、其組織も赤農民部、工人部（勞働部）、商民部、青年部、婦女部、組織部、海外部等に分れて居るから、自然左派は之に盤り、其一部には共產黨員も潜入して居る。所が政府の方には官僚系のもの中新軍閥一派が多く、所謂實力派が之れに盤つて居るので、黨と政府の權限[illegible]

建設では全體を三期に分ち、第一期軍政期、第二期訓政期、第三期憲政期となつて居る。第一の軍政期は北伐の完成で終つたし、今は第二の訓政期に入つて居る。この訓政期では人民を憲政に適するやうに訓練し、それが出來た所で政權を大衆の手に渡しこゝに最後の憲政期が始まる。この訓政期では人民を未丁年の小供と見做し、國民黨が其後見人として人民の政權を預つて置くのである。そこで左派の言ひ分では、五院制度は憲政期になつて始めて完成すべきもので、今日では先づ行政、司法考試の三院だけ設け、立法院の仕事は國民黨中央執行委員會に委ね、監察院の仕事は中央監察委員會の手に委するのが當然である。この事は又國民政府の政策を國民黨の指導精神と一致さするためにも必要であると。然るに實際は始めから五院を設け、立法院の委員も國民政府が任命し、一つの法制局見たやうなものになつた。國民黨の中央執行委員會は國民政府最高政策の指導監督と云ふ空名を與へられたに過ぎない。次に民衆運動は左右兩派爭鬪の重要點であるから、右派は民衆運動を[illegible]

[illegible]生運動の停止と學生會の解散を提議し、或は勞働組合の解散を斷行したりした。この問題は性質が重大であるのと、右派にしても原則としては反對は出來ないのだから、今にいづれとも決定せず、今後も兩派爭鬪の中心となるだらう。

今回の國民政府の組織は上に述べたやうに右傾派色彩が濃厚だが、更に政治委員長を設けて蔣介石を之に任命して國民政府の對外的代表者とした所は大總統制に似た點があるし、形は異つて居るが、從來の北方政府と餘程似て來たやうに思ふ。それに國民政府の各幹部は悉く右傾派で占めて居る感がある。

現在國民政府の中心をなして居るのは譚延闓、胡漢民、蔣介石の三人である。蔣介石は表面中心人物となつては居るが、蔣介石では内部の押へが利かない。その方の役割をやつて居るのは譚延闓である。この譚と蔣とで内外を有つて居る所に右派の胡漢民が入り込んで右派の政權が確立したのである。本來から云へば譚延闓は孫文とは同輩であつて、[illegible]孫文の後繼者としては長男はどうしても汪兆銘(汪精衞)で、二男胡漢民、三男蔣介石であらう。所が長男の汪は少々左にかぶれて家出し、二男の胡は温順しいので、三男の蔣が才氣があり人氣も好いので家を繼いで居る形である。この三人の外に張靜江が居るが、之れは浙江派の財方として蔣が頭を擡げるに從ひ出て來た男である。右派の理論方面の孫文の後繼者には日本人にお馴染みの戴天仇(戴季陶)君が居る。又表面に立つて華々しい役割を引受けて居るのは財政部長の宋子文と外交部長の王正廷である。宋子文は蔣介石の義兄で少壯政治家、仕事は之れからである。王正廷は國民黨員としては餘り重きをなして居ない。彼れは列國を相手に大見榮を切る反面には商賣も仲々巧く多面的な男で手取りの名人だから、カラハンも彼にしてやられ、パリや北京の特別關税會議では日本全權は彼れには餘程惱められた。從て矢田さん等では角力になるまい。彼れは世間から馮玉祥派に見られて居るが、今では馮派五分、蔣派五分位[illegible]

今の國民政府は右派で堅めては居るものゝそれは上層だけで、黨内の中以下には依然として左傾的勢力が優勢である。國民黨はこの二つの流れを調和しやうとしたが、全體會議は之の企てに失敗し、國民政府が右傾したために、左派の連中との間に開きを生じ、政府が右に行く程一方は左へ行き、兩者の間隙は次第に廣くなりつゝある。最近上海方面には打倒國民黨のビラが見え始めた。蔣介石はさすがにこの空氣を感知し、彼れは絶えず左右兩派の中間にあつて七分から三分位の所を右へ行つたり左へ行つたりして居る。國民黨全般から見た人氣は、中間派の蔣よりは左派の汪兆銘に多いかも知れない。この下層空氣が漸次濃厚になれば國民政府部内に一大變化が起りはしないかと思はれるし、その時が汪兆銘が歸朝する時だらう。現在の所國民政府の要路にあるものは皆右派だし、左派は下層の位置を占めたものに多く、其中心人物は汪兆銘だらう。其他には陳公博等が國内で策

て居る。軍閥各巨頭が右派に屬することは勿論、南方軍人は純國民黨員だが、北方の馮玉祥は多少別派をなし、主義色彩に於ても曖昧である。閻錫山は黨員とは名ばかりだらうし、左右の派別からすれば最も右に屬するものだらう。

かうした左右の派別の外に、國民黨内には地方的黨派別があつて、之れが又政局を動かすに重大な役割を演じて居る。南方で主なる黨派は浙江派、廣西派、廣東派である。浙江派は蔣介石を中心とし、軍人には蔣介石、何應欽、文人には張靜江、戴天仇、蔡元培等があり、廣西派は李宗仁を中心に白崇禧、李濟琛を兩翼として武漢及廣東を領有して中南支那に覇を稱へて居るだけでなく、遙かに北支那にまで其勢力を延して居る。廣東派は廣東を廣西派に取られて居るので今日甚だ振はないが、左傾派に最も勢力あり、政治分會の存廢問題も左右兩派の爭ひの外に廣東から廣西派を追出さんとする廣東派の策動も加はつて居た。其他湖南派は唐生智の沒落後振はず、元老系閥は居るが老士觀念を固守して居るのでかうした爭ひには手を出さない。又南方にも三大勢力の對立がある。黃河沿岸に據つて居る馮玉祥、山西を中心に西北を地盤とする閻錫山、東三省の張學良である。この地方的軍閥勢力も急に支那から姿を消しさうにも思はれない。

そこで其後の問題であるが、國民政府は右傾するに從ひ新軍閥、新官僚化し、同時に地方的黨派の爭鬪が次第に甚だしくなつて行くだらう。今日では黨の節制により表面に現はれないが、一度黨による節制が行はれなくなつた場合、暗鬪は明鬪となり再び干戈相見ゆるに至るであらう。之れを國民黨が抑へながら次第に統一と建設に向つて進み得るかどうか、一方左傾する勢力は次第に共產黨と接近してこゝに一大爭亂を惹起する虞れがある。共產黨は昨年初夏國民黨と分離した以後は全く秘密結社となり、主として農村に入り込んで農民暴動を計畫して居たが、其手段は次第に過激化し、最下層の農民、浮浪者、無頼漢、土匪を結合して一大勢力をなし、軍隊が一年以上討伐に從事して居るけれども一向效果がなく、依然として湖南、廣東を中心として中南支那一帯に最も强く根ざす勢力となつて居る。更に其一部は都會の勞働組合の中に潜り込み、國民黨部の中にさへ國民黨員と稱して入り込み、高級樞要な位置を占めたものさへあるから、左右兩派の間に間隙が生じ、左派が左へ行く場合、そこで共產黨と結び付く可能性は多分にあるやうに思はれる。國民政府の組織は成つたもの〻、外面の壁塗りだけで、其前途は甚だ多難なりと云ふべしである。

新刊紹介

◇朝鮮風土記　難波專太郎著
定價一圓三十錢・京城本町一ノ二八
大阪屋號書店

◇人體の趣味と神秘　高田義一郎著
定價壹圓六十錢・東京日本橋博文館

◇（小説集）施療室にて　平林たい子著
定價壹圓・東京府外[illegible]六一一　文藝戰線出版部



京の晩秋の人と自然と

西川百子

夜半の書齋にさらさらと板戸うつ音を雨かと思つた。閨にゆく廊下傳ひ、櫺子窓から空を仰ぐと、後の月さやかに斷雲を射て、冷々としたひかりは庭一杯に流れてゐた。庭の外は竹籔である。吹く風に竹のかげは黑く搖れ、そのたびに庭の塀にそふた柿の木の、落葉するのがありありと眺められた。

私はこのとき、つひこの程まで、其處此處の叢から湧きしきつてゐた蟲の聲が、ばつたり止んでしまつてゐるのに心づいた。さうして無理もない、明日からもう十一月になるのだと思つた。

山國の都である京の秋のおとづれは早い。ひとたび秋が訪れると、山國特有の「底冷」を伴つて、びつくりするほど早く晩秋のすがたを露してくる。

まして私の寓居は、京都といつても市外れの、むかしから深草のさとと呼ばれてゐる土地である。市の街路樹のまだ黄ばまない前から、裏山を渡る風の聲が、既に秋思を惹くに十分であること謂ふまでもない。

翌くる日、私は京都へ出た。

一たい私は人の雜踏するところへ出ることを好まない。米塩の資をうるためであれば、火事場の人足にも雇はれなければならないけれど、少々の辛抱で濟むことなら、なるべく閑寂な處でくらしたいと希つてきた。その希ひが叶つて昨年の五月から病を養ふために職務から放たれ、かういふ佗しい寓居が出來るやうになつたことを、私はこころから喜んでゐる。深草の里の月影さびしくも住みこしままの野への秋かぜ。これは新古今に撰しられた誰かの歌だが、都市膨張でその深草の里の幾分は既に京都市に編入され、新古今の、いとど來たかりにも人の跡絶えて積れば雪の深草の里、の荒涼また永久に尋ねべくはなくとも、稲荷の山ふもと、茶畑に隣りし竹籔の、いまの此の家を離れて京都へ出ることはあまりうれしくない。

だから、よくよくの用事でもなければ、私は蟄居するにきめてゐたが、この日偶ま出て、十一月の京都を見、まつたく度膽を拔かれてし

まつた。

まづ京都驛につくと、驛前の廣場には高さ七十尺におよぶ大奉迎門の建設。その頂きには金色眩き鳳凰を舞はせ、丹塗の脇門に添へて、極彩色の櫓、上に日像さんとして輝き渡るといふ大規模の工事が着々進行しつゝある。そこから眞つ直ぐに北、京都御所へ御途の御道筋である烏丸通りは、歩道に電車のセンターポールを片寄せ、電柱を紅白の布に卷きあげて、街路樹の前方にも柱を立て、それらの柱から柱へ、彩色板を懸け、極めて濃厚な染料を塗つて、瑞雲揺曳の趣を表現し、其の他國旗、萬歳旗、八咫烏、奉祝提灯等。紅に、黄に、青に、紫に、紺に、白に、金に、銀に、電飾裝置に、とても下界の人工を超越した莊嚴、華麗の極致を競ふてゐる。

然かもこれは行幸道路ばかりでない。京都全市目貫の各道路は悉皆雅に優るとも、おとるまじき盛飾振で、加之、銀行、會社、個人經營の大商店等が、傳統の誠意にあふれた裝飾は、舗道を照して瓦に櫛比し、一方博物館や市民の運動場までも取り入れた市民の奉祝記念大博覽會の張りぼて[illegible]、傍らには、丸太町、二條、三條、四條、五條、七條、およそ市を貫流する[illegible]に架けた[illegible] [illegible]ペンキ[illegible] [illegible]

片側通行[illegible]

兩側の人道に、ナマコ張り紺色のアーチさへ建て列られ、で、數多きそのアーチの下を歩かねばならぬやうになつてしまつた。變らぬものは川の流れの水ばかり。それさへ、夜間は滿都の電飾、照明燈の光を湛え、天にも地にも、金龍躍り銀蛇奔つて、いかに今年の京の秋の美觀壯觀を極むるかを想像せしむる。

市内の旅館は津々浦々より盛儀拜觀の民庶黎庶で鮨詰めとなる。有司階級の邸宅や別荘、第一流のホテル等は、夥しい參列有資格者であるところの、有位有勳有爵者、元老、大臣、將軍連。世界の有らゆる友邦を代表する外國使臣等。むかしで謂へば、私達が仰ぐことも出來ないやうな偉い階級の代表者のお宿を承はつて、その準備に忙しい。

政府が移轉してくる。各省の出張所はおのおの嚴かしい大看板を[illegible]内の目ぼしい建物の前にぶらさげる。各町には一齊に自身番を置く。各戸に掲げた日章旗には夜もすがら風にはためき鈴の音がりんりんと聞えてくる。青年團や消防組や在郷軍人會や、其の他有らゆる公私の團體が、いづれも忠君愛國の赤誠にもえたつて活動を始める。

[illegible]に[illegible]する京都府下の警官はその數、一千何百名と計上される[illegible]、之に[illegible]の爲めに[illegible]

軍隊式に五大隊に編成、各府縣別に[illegible]立中隊、皇族、使節、縣官等の警衞隊、および騎馬隊やサイドカー隊が添へられ、各隊ごとに服装、姿勢、拔刀動作などの點検をうけ、勇氣凛々、同夜より全員部署に就いたと傳へられる。

七日御着輦當日の御道筋の交通遮斷は、最初六時間前と内定されてゐたのが、京都府大禮警衞本部では八時間前に行ふことにした。伊勢行幸の十九日、伊勢から還幸の廿二日、畝傍行幸の廿三日、泉山行幸の廿四日、桃山行幸の廿五日の各御道筋も、通御四時間前に交通は遮斷せられる。なほ御道筋を横斷する場合は、御着輦及び還幸當日は通御三時間前としてゐたのを五時間前といふに改められた。それゆゑに、御着輦當日の鹵簿を奉拜するには、その日の午前六時には、ぜひとも御道筋に出てゐねばならない。

午前六時でもまだおそい。多分、敬虔な奉拜者は前晩から、あるひは前日から、御道筋の土にうづくまつて、身にしみわたる北山颪は寒くとも、行幸を待ち奉ることであらう。または舗道の石を枕にして、薄い毛布に五體を冷えあがらせながらも、夜の白らむを今か今かと待ち望むであらう。

私はそこに、いかにも京都の行く秋らしい、沁々とした感じを覺える。いかにも京都の秋の夜にふさはしい、寥々とした風情を覺える。

まい。これらはすべて、現代人の[illegible]り飾らうとする彼等の奉祝の心のあらはれとして、私達は何も申すことはない。あれもいい、これもいいのである。唯然かし、御即位の大典を桓武天皇以來の京都に定められたといふ由來から考へてみて、若し京都の奉祝設備や装飾が、本當の純日本式のものであり、醇乎たる舊るき都そのままのものであらうならば、どんなに結構なことであらうかと思ふ。

純白な高張提灯に墨痕鮮やかな奉祝の二字。みるかぎり御道筋の兩側の軒先に續いてゐる。鯨幕は家々一様にうちわたされ、ゆるく絞りあげた幕の下から、祇園會にみるやうな美しい屛風、敷物の模樣が窺はれる。

家々の前には清楚な席を敷いて、御通路に奉拜者が溢れ出ぬやう竹の垣を結ひ、席の上には十重廿重に庶民が畏まつて通御をお待ち[illegible]上げる。しめやかに悦ばしげな雜音。刻經るにつれ、それに混つて[illegible]きしめた香のかをりが漂つてくる——といふやうだと、いかにそ[illegible]京都らしい趣があるであらうかと私は思ふ。

然かし私の稚い思索は、殷々として響きわたる皇禮砲の音によつて、たちどころに破られねばならぬ。

七日午後二時。京都驛に着御。肉簾は肅々として烏丸通を北へ、丸太町通を東へ、御進發遊される。前驅、騎馬隊、次いで今回新たに制定せられた赤の肋骨に金釦の儀仗隊、その儀仗隊が持つ紅白の槍旗、式部官式部長官宮内大臣等の儀裝馬車、濃き水色の袍を着た掌典補の乘馬姿、緋の袍の掌典が藁沓を穿いた別當に轡をとらせて馬上參進。濃い橙色の裲襠をかけ白袴、白衣に黄色の半布衣を着けた八瀬童子十六人の奉舁する賢所御羽車。——大嘗旗。六頭立の壯麗無比の鳳輦。皇后宮の四頭立御料車。各宮殿下の御馬車。——三角帽に駝鳥の白毛を靡かせた馭者が振る金色の鞭。近衞の儀仗兵、五町半にわたる御行列——。

すべてが神秘といふことばに盡きてゐる。否、神秘以上の壯麗さ、森厳さであるが、私の貧しい語彙のうちから選りだしたことばの範圍では、唯々神秘と形容するの外はない。かくてこの日より、相次いで、賢所春興殿に遷御の儀、即位禮當日賢所大前の儀に[illegible]の儀をはじめ、即位禮當日紫宸殿の儀、大嘗祭の[illegible]、大饗、[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]され、[illegible]

[illegible]き起り、湧き溢つるであらう。

殊に十五日、大嘗祭の御儀が芽出度く終らせられたこの日の夜から、市民に奉祝踊や屋台曳が始めて許可される。奉祝花電車は七日より運轉し、その夜市民一般の提灯行列は既に行はれて全市を火の海につつむのであるが、天下晴れての踊りは十五日の夜を待たねばならない。

踊りの衣裳は、概ね長襦袢ふうのもの。柄は鳳凰に瑞雲、あるひは段々染、櫻や橘を描いたのもあつて、老若男女は組を作つて踊り出す。京都の人々は、平常は温順しく、極めて控え目に、行儀よく暮してゐるだけに、「踊り」となれば、反動的におそろしくハシヤギ、狂氣のやうに踊りぬくのを常とする。

可憐なる市民達よ。踊つて、踊つて、あくまで踊り狂ふがよい。この都の市民達は、むかしから、おかみの許しがなければ何ひとつ勝手な振舞ひをしたことはない。同時に、若しおかみのお達しがあれば何ひとつそれを守らなかつたことはない。さうして今度の踊りこそ、祝のためにおかみから許された公然な催しの一つではないか。

[illegible]

を見せる。

由來、十一月の景勝には、菊と紅葉とが代表的に擧げられるが、けふまで不思議に京都にはこれぞといふ菊の名所がない。その代りに紅葉にかけては京洛の山々、到るところに錦繍の眺めを展開する。

寛政五年京都の書肆吉野屋爲八の上梓した「都花月名所」を繙いても、紅葉の名所はなかなかに多い。高雄山、通天橋(東福寺)正傳寺(西賀茂)八瀬岡(洛北長谷邑)小倉山(上嵯峨二尊院)長岡(洛西)稻荷山(洛東)戸無瀬(嵐山)貴布禰(洛北)眞如堂(洛東)巖墻丹楓(洛東永觀堂)御製紅葉(修學寺邑林丘寺)九重丹楓(歌中山清閑寺)御室九所社前(仁和寺)笠置山(南山城)羽束師杜(城南久我)即ちこれである。

私は生來、二月の花よりも紅だといふ楓葉のほこりかな眺めよりも、櫟林のいろづいた野趣に愛着を感ずる。渥丹のやうな紅葉の濃厚さよりも、公孫樹の黄ばんだ彩りに心を惹かれる。それゆえに少年の頃から、あまりそれらの名所に出かけたことは少なかつたが、しかし誘はれて行けば、行くごとに高雄山の紅葉は實に美しいと思ふ。

滿山これ紅楓とは眞に高雄山の謂ひであらう、栂尾槇尾の二山をあはせ、世に高雄のもみぢとしてうたはれてゐるが、濃く、淡く、織りなされた蜀江の錦は、峽谷より峽谷へうちわたり、ほのかに湧く晝靄をまとふて、織りひろげられた自然の大緞には、恍としてわれを忘れざるを得ない。前年、私はこの高雄の奥の地藏院にて、同好の人々とともに酒筵を張り、欄に凭つて美しい山谷を俯瞰しつつ

いちやうに楓はそよぎ何處ゆか聞こゆるものの山水の音

雄の月楓の上にほの澄むを伏してぞ見つる山峽の水面に

と詠ひ、またこゝの名物である土器投げを試みては

矢の如く飛べる土器風をうけ斜めになりぬ楓の上を

君が名を染めし土器つゝと飛びぬ楓の上の百尺の空を

などゝ興じた。その興會いまもなほ幻のやうに目に浮ぶのである。

私はまた高雄から雨にあふて、紅葉とともに濡れそぼちながら、嵯峨野へ出た少年の頃の記憶を呼び起す。いままで眞紅に映えた楓の樹々を潜つてきた目から、蕭條として雨に暮れ行く嵯峨野の風情が、どんなに寂しく望まれたことであらう。

今より二十余年前の嵯峨には、電車もなくペンキ塗の住宅もなく、活動寫眞の撮影場もなかつた。藁葺と瓦の屋根との相交つたささやかな街には、燈火のあかりが家々の障子や板戸を漏れ、殘んの炊烟さへ仄かに低う漂うてゐた。私は草鞋や干柿を吊した街角の家で燒芋を買ひ、それを頬張りながら釋迦堂の前を南へ折れて嵯峨驛に辿りついたことを覺えてゐる。

平語や、源平盛衰記や、太平記や、本朝文粋や、さうしたものを讀みふけつてゐた私の頭には、嵯峨といへば秋。殊に行く秋のあはれ深い趣が、いつまでも沁み込んでゐるらしい。「一樹の蔭にやどりあひ、同じ流れを結ぶだに別れはかなしきならひぞかし。いはんや是は三年があひだ住み馴れしところなれば名残りもおしく悲しくて、かひなき涙」にかきくれつゝ世を棄てた祇王寺。その祇王寺の隣に隣つて瀧口入道の出家せし三鈷寺。瀧口を慕うて相見るをさへ許されぬ悲しさに横笛の入水した大堰川。川のほとりなる小督の塚。琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ　と詠める齋宮女御の歌に知らるる野々宮。二尊院龍女池のかたはらなる辨財天の社など、嵯峨の秋としきけば　世に双びなき麗人が淺茅が原にうち倒れて、宿世の縁をさめざめと泣いてゐるやうな姿が、私には何となう偲ばれてならない。

しかし、斯様な聯想は私にとつては強ち空想とばかり云ひ退けてしまふことは出來ない。私は、現實に、確かに、さうした薄命の麗人をみた。それは以前の——即ち、大正天皇の御大典の年の、その前後であつたやうに思ふ。

[illegible]

峰は北へ折れた竹林の中にある草庵で、またの名を瀧口庵と呼ばれてゐる、その庵にその人は、その頃住まつてゐた。祇王や、祇女や、佛のやうに、その人もまた尼僧となつてゐた。私はたづねあてて、やうやくその人に逢ふた。

黒髪を剃り落したあと、少し伸びてはゐたが指で摘めるほどでなかつた。しばらく剃刀をあてないかして頭はうす汚れはしてゐたが、面長の色の白い明眸の持ち主であつた。痩せぎすの身に緇衣をまとふて、うそ寒い庵の中に坐つてゐる姿が、痛々しう思はれてならなかつた。年は三十をいくつか越してゐた。

「わたしに何の御用なんです」

癇走つた早口で、その人は、眞つ正面から突ツかかるやうに私に訊ねた。嵯峨の寂しい尼僧だとは聞いてゐたが、この刹那の印象で、私は成程と肯いた。

この美しい尼僧こそ、[illegible]の[illegible]、[illegible]太郎氏の[illegible]の娘であつたのである。

[illegible]

となるのを、幼い姫の將來の幸福だと山岡家の者達も信じ[illegible]めた結果であらう。

姫は、かうして頑是ないうちから周圍の人々によつて、おのれの行くべき道を運命づけられてしまつた。經を教へられ、戒を授けられ、佛に仕ふる作法を覺えさせられてゐるうちに、稚顏の花はいくたびか落ち、いくたびか開いた。妙齡の尼僧は、鏡面に對して頭に剃刀をあてるごとに、伸びるに委しなばこの髮、いかに房々と波うつべきかを思ふやうになつた。落飾してゐてさへ、美しい面差に覺えずわれから見惚れて、涙含む日がなかつたと誰がうけあはれよう。

しかし尼僧として、生きる外に、姫の若いいのちの生きる術を、何人も教へるものはなかつた。門跡となるといふ念願以外は、すべて姫の身にとつては毫ほども望むまじき罪障であり、煩惱であるとせられてゐた。

「ああ、あたしは何のために女に堕み落されてきたのであらう」

姫の齡髮は、漸次に人生に對する深い懷疑を孕んできた。男をみれば羨ましく、妬ましかつた。氣儘放埒に立ち振舞ふ異性の所作に憎惡を感じ、美しい尼僧姿を振返つてみる多くの男に、侮蔑の眼をあびせかけた。暖かな血が身うちを漲るなへに、姫の頰には冷かな笑が上るやうになつた。

姫は斯かて易行道と呼ばるゝ他力念佛の沙門を疎んじ、自力苦行の

「わたしは鐵拐の姫さまぢや」

といふ心の底から頭を擡げる強い自我の一念であつた。おのれを滅除する禪の工夫は、却つて一圖に姫の我を募らせる方便としかならなかつた。鋭い才智と辯舌とは生鈍い禪家を、眞つ向から叩きつけるに十分であつても、嚴峻な師家は容易に姫の我慢を通さなかつた。

「角を折りなさい、角をぶち折らんと佛にはなれんぞ」師家から大喝を浴びせられると、姫も負けずに柳眉を逆立てた。嘗ての他力欣求の尼僧生活がまた繰返された。姫の齡もいつのまにか二十を越え、二十五を過ぎ、三十をも出て、花のやうな美しい姿さへ、いまは滑らかな眉目に名殘を止めるばかりとなつた。

厭離庵にうつるまでに、姫は洛中の門跡寺を三たびも、四たびも渡り歩いた。その強情と我慢とは、いづれの寺の師の尼とも折れあはなかつた。山岡家の不遇に同情を寄せる人達や、縁者の人々の志によつて、格式の高い寺院や禪門に世話せられても、姫は[illegible]しても落着くことが出來なかつた。厭離庵に姫を入れたのには、姫の[illegible]をあはれにおもふ檀家の有志達が、[illegible]なこの庵でも、[illegible]、小倉山麓の名高い由緒をもつことでもあり、[illegible]とこれを[illegible]する者もあつたくて、少しは姫の氣も和まうかと考へた結果だといふ話を、當時

事情を知る人から聞いてゐたのである。

私はこの世に反き、また世に反かれた尼僧とは、小半時間も對座してはゐなかつた。他力安心の次第や見性成佛の境界やを早口に叩みかけこ辯じるのをきゝながら、私は云ひしれぬ哀愁が胸を衝いて起るのを抑へられなかつた。西山の麓はくれはやみ、みるみる對座してゐる人の顏も、ほの暗う黄昏れゆくのに、一しほ侘びしさを增して私は庵を辭し去つた。

それからもう約十年經つてしまつた。

あの人は、私が逢つてから間もなく厭離庵をも去つたと噂にきいた。折角、檀徒が骨折つて庵主に据ゑたものゝ、その檀家の法要の日にさへ氣がむかねば出て來ない。普通の家から誦經を頼みに來ても一錢丹の蠟か、そんなところに經を讀みに行くかーと、一言のもとに跳ねつけるので、法施する者も少なくなり、世話した人さへ愛想をつかしてしまつたからたとのことであつた。

其の後、私は寂として、あの愛せざれた寂しい尼僧の消息をきかない。生きてゐるのだらうか。あるひは亡くなつてしまはれたのではないだらうか。[illegible]何處かで[illegible]の中[illegible]

私は京都の奉祝の賑ひがおさまつたころ、深草のさとを出て、晩秋の嵯峨にあそびたい。さうして時雨に濡るゝ竹蔭の小徑を辿つて、久方振に厭離庵の扉を敲いてみたいやうな氣がしてならない。

（一一、四）

ラヂオ・ピクチュア

森　岩　雄

映畫が生れた。
ラヂオが生れた。

人間生活は此の二つの發見によつていかなる文化的收穫を得たか、これは云ふまでもない。更にトオキイ（發聲活動寫眞）が流行し初め、映畫は新しい分野を開拓しつゝある。

此の時早くも其の次に生れ出づべきものの曙光が見え初めた。それはテレヴィジョンの放送、俗に砕けて云へば「ラヂオ・ピクチュア」の出現である。

活動寫眞映寫機を最初に公開した人物として著名なC・F・ヂェンキンスが、映畫技師協會席上に於て、無線装置による活動寫眞映寫放送の可能を發表したのは、一九二五年のことで、彼は尙それにつけ加へて、映寫放送と同時に音樂をもそれに同調させることが出來得るから、將來の映畫事業は大變革を來すであらうと豫言してゐる。

此の電送活動寫眞の實用化は未だ十分ではないが電送寫眞は今日立派に成功して來た。かやうな狀態から考へると、我々は居ながらにして、我々の家庭のスクリンに、有名な劇、面白い映畫、血を湧かす競技、名士の演說、各地の催しなどを、同時に電送して來る伴奏音樂や、言葉や、叫び聲等と共に接することが出來るのも決して夢のやうな話ではないかも知れない。

ないかも知れないどころか、既に我々はそれらの實驗の幾つかの報道をも受けて居る。即ち、本年九月、紐育マヂソン・ガアデンのラヂオ世界博覽會で、世界最初の公開的實驗が行はれた。專門家の意見によると、これは恰も二十五年以前の自働車と同じく、發展の可能性は十分にあるが、いかにも幼稚な狀態である。その主要なる缺點は、電送された畫面のディテイルが判然とせず、粗雜に過ぎることであるといふ。それに、畫面も大きくは望むことが出來ず、技術的にも種々な制限があつて、自由自在、思ひ存分に電送出來るといふには幾多の階程があるらしい。

最近、紐育で、一幕物の劇がラヂオによつて樂詞を、テレヴィジョンによつて舞臺面を再生させる企てが行はれ、相當の成功を納めたといふことである。此の時は、俳優の演技並に樂詞を電波にして、四哩先きへ送電し、受信したところでは、更に是を俳優達の演じてゐる場所の研究室なる受信機に放送し、「ラヂオ・ピクチュア」として、スクリンに映出したのである。

維納に於ても、此の種の成功が報ぜられ、英國倫敦では、此の權利を買收し、二百萬圓の資本金を以て、無線映畫會社を設立中であるといふ。此の「ラヂオ・ピクチュア」はフルトグラフ、テレヴィジョン式と呼ばれてゐる。

噂はすれども姿が見えなかつた「ラヂオ」が、姿と共に見られ、聞かれる「ラヂオ・ピクチュア」となる時代、それも最早、來る來ないの問題でなく、たゞ日數の問題となつて來たやうである。

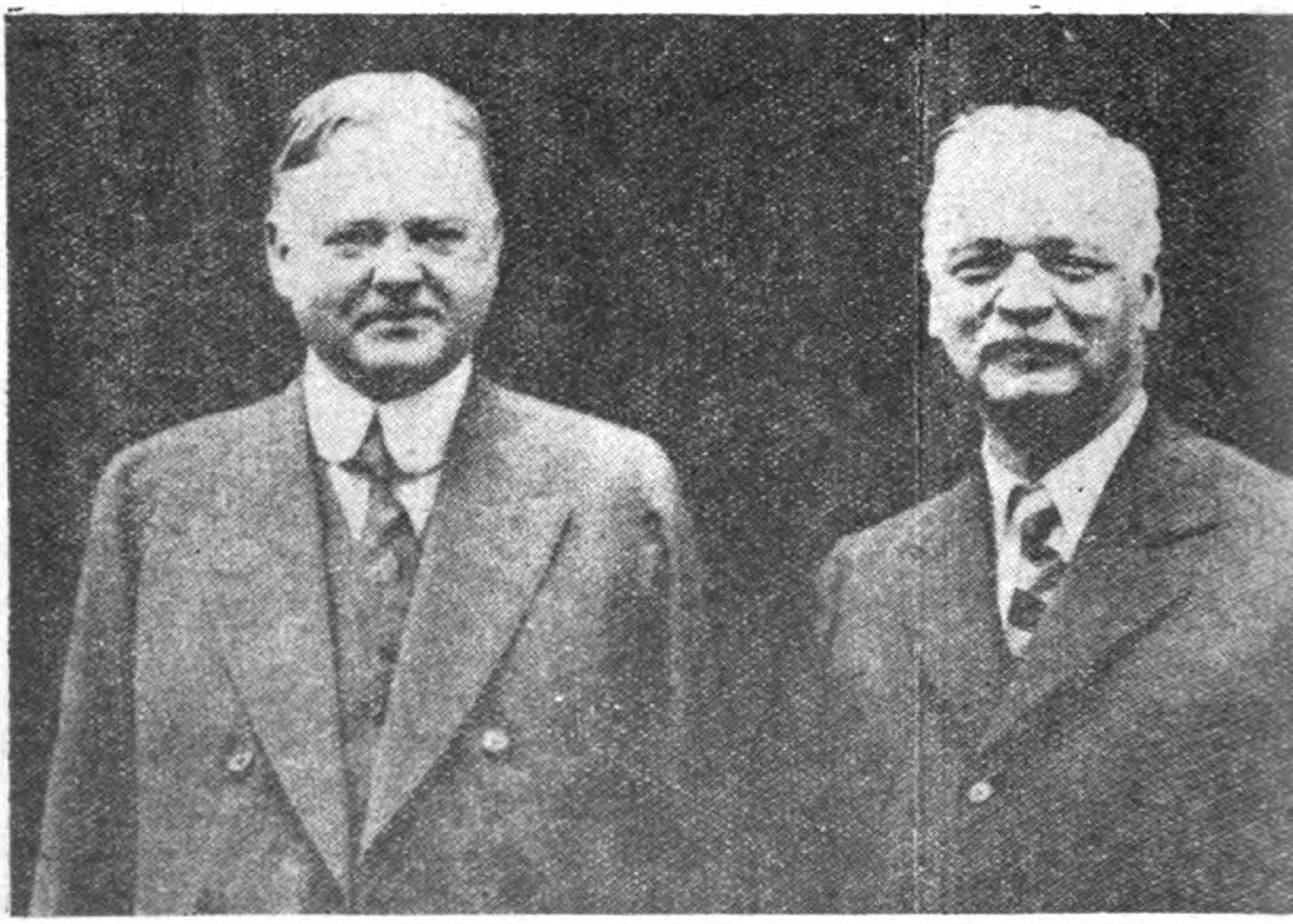
大統領フーヴアー

古莊國雄

フーヴアー及びフーヴアリズムは豫期以上の大勝利を獲た。理由は簡明である。アメリカに『弗』が渦巻いてゐるからだ。『弗の管理者』として、或は『弗の增殖者』としてフーヴアーが適任者と信ぜられるからだ。スミスは才氣縱橫である。異常な經歷、颯爽たる風貌、ホワイトハウスの主人公に祭り上げて見れば充分に潑剌たる芝居を演じさうであるが、何となく危い。弗の偉力をもつて世界を風靡するアメリカには危險を伴ふ大政治家よりも堅實なる政務家が好もしい。といふのが今次の選擧に現はされた民衆の總意であつた。民衆の總意は要するに金であつた。余りにも無殘なスミスの敗退ではあつたが、一にも金、二にも金、三にも金。[illegible]歸結と言ふべきであらう。共和黨が民主黨に勝つたのではない。ドライがウエツトに勝つたのではない。クエーカーがカソリツクに勝つたのではない。フーヴアー夫人がスミス夫人よりも端麗な容姿を持つてゐるからではない。根本は實に金である。世界のスミス・フアンは失望した。番狂せを密かに期待する見物人は呆然となつた。そして如何にもアメリカの大番頭らしい落付いたフーヴアーの口から『アメリカ大統領に當選する事は現代世界の與へ得る最高の名譽である』といふ得意の言葉が吐かれ、敗軍のスミスは『今後一切の公職を辭し、一切の選擧戰に出場しない』と悲痛な聲明をすることになる。[illegible]

[illegible]オア州の貧乏な鍛冶屋に生れた。ムツソリーニやポーランドのピルスヅキーや現代の立志傳中の人物で鍛冶屋の息子の多いのは興味がある。若くして兩親を失つた彼は、苦學してスタンフオード大學に學んだ。專攻は地質學であつた。卒業期になつて文學の點數が不足な爲め、危ふく落第の憂目をみやうとしたが、再試驗の結果卒業免狀は貰へたといふ插話も既に卅年の昔語りである。當時彼と相識つた女學生ロー・ヘンリー(現フーヴアー夫人)が、密かに彼に助太刀をして漸く試驗をパスさしたとも傳へられてゐる。卒業後の彼は一二年カリフオルニアの鑛山で自らハムマーを持つて働いたが、後濠洲の金鑛に技師として招かれ、更に支那の鑛山顧問となつた。團匪事件で支那を去つてからは再び濠洲に赴任し、續いてロシア、ビルマ、歐洲諸國と轉々して長い間鑛山技師及機械貿易業者としての生活を營つてゐた。そして彼の名が初めて廣く知れ渡つたのは、歐洲大戰の[illegible]である。[illegible]

初めた。彼は米人救濟委員長となり、急速に巨額の寄附金を募集して、二ケ月の間に十六萬人餘の米人を本國に送還した。米人救濟に成功を収めた彼は更に一千萬人のベルギー人を救つた。『卅六時間後にはブラッセルに一片のパンも無くなるであらう』と言はれてゐた危機一髪の時に、同じくペーヂ大使からその救濟を相談された彼は、數分の間默考して直ちに電報でニューヨーク取引所に小麥を注文した。取引所の閉場時刻まで僅かに一時間であつたが彼の果斷と、迅速な行動によつて大量の小麥がベルギーに運ばれる事になつた。彼の才幹を識つた大統領ウイルソンは彼を米國食糧管理委員長の重職に任じた。彼に對する内外の人氣は日を逐うて高まつた。そして一九二〇年の大統領選擧には民主黨の色彩濃厚と



新大統領フーヴアー氏(左)と副大統領カーチス氏(右)

漢と呼ばれるのであるが、彼にとつては黨派の異同は問題でない。すべては能率本位である。アメリカの繁榮がその念願である。國も人も富める上に富まねばならぬといふ信條の下に、彼は商務長官としてハーデイングからクーリッヂまで七年の間、あらゆる努力を拂つたものである。中にもミシシッピ大洪水の善後處置などには殆んど人間以上の卓越した手腕を發揮した。東京大震災の救恤にアメリカが敏速な極めて効果的な方法を採つた事も彼の働きに依るものである。彼れは模範的な事務家であると同時に、人道的な精神に燃えてゐる。

彼のモットーは"Elimination of National Waste."である。彼は商務長官就任の直後に言つた。

『國家的收入の三十パーセントは消費されてゐる。標準的な自動車を使はねばならぬ。優秀な電話機を使はねばならぬ。優秀な浴槽優秀な電燈、優秀なラヂオ、そして一日平均一時間半の勞働の節約、それ等はすべて人間の生活を豐富にし、人間の幸福を增すものである。』

この見地から彼れは商務省にある從來のミルク罎四十九種を僅か九種にした。七十八種の毛布の型を十二にした。何ものも優秀な標準的品物を撰び、能率增進の一助とする。彼は午前八時には必ず出勤して長官の椅子に坐つてゐた。時によれば八時以前に登廳する事もあつた。そしてすら〳〵と、眞に小氣味よく事務を處理する。

『予は如何にして金を作るべきかを知つた。然し今はそれに對する興味はない。予は政府が如何にすれば人民に對して最も滿足を與ふるかと言ふ事を充分には知らない。しかし、この事は予の第一の興味である。』と彼は政府家として立つ時に親友に語つた事がある。『人民の幸福の爲に』立つた彼は從來の政府家臭味を離れた議論を示した。民國のあらゆる[illegible]ワシントンに[illegible]遠慮ない意見を吐いて呉れ給へ』と告げた。そして商務省の仕事の外に政府の各機關に對しても熱心に助言し、助力するので、政府部內では彼を商務長官。各省次官などと呼ぶ者もあつた位である。これ等も彼の能率主義と、國家に對する奉仕的心情の發露である。

『予は酒を飲まぬ。予は遊戯もしない。また社交の爲に時間を空費しない。予の娛樂はただ釣魚のみである』

彼の性格を如實に表はした言葉である。鳴物好きなヤンキー氣質に相反する人物と思へるが、クーリッヂといひ彼といひ、地味な性格の持主が民衆の支持を受くるといふ事に我々は無限の妙味を感ずる。

『フーヴァー氏は何時かは大統領となるであらう。しかしそれは彼が政治家であるからではない。彼は無造作にパイプを啣へて、無格好な帽子を冠つて、ワシントンに忠實な事務を執るであらう。』

と選擧戰の頭初に當つて評した者がある。大統領に當選した彼に、ワシントンにおける最も多忙な人物となるであらうが、歷代の大統領中、いはゆる政治家術の臭味が最も稀薄な人物として人氣を博する事と思はれる。

[illegible]もに相當な變化を來すものとして、アメリカ政情の變化を望んだ國も多かつたが、フーヴァーの當選によつて更始一新の期待は全く裏切られて了つた。彼は既にクーリッヂの政策を踏襲すると言明してゐる。共和黨の政策は本年六月の共和黨全國大會に可決されたもので、重なるものは

一、米國大繁榮政策の遂行 一、內國債の減却 一、租稅の輕減 一、國內產業保護の爲の關稅の改正 一、禁酒法の勵行

外交政策の大綱としては、對外債權の棒引に絕對反對、國際聯盟の加入を拒絕し、支那に對する內政干涉を避け、對支穩健政策をもつて各國を導かんとするものである。要するに現共和黨政府の繼續であるが、明年の正式就任後において、フーヴァー自身の眞面目は徐々に發揮されるであらう。人事方面においても可なりの人材拔擢が行はれるであらう。共和黨の穩健政策と、フーヴァーの過去の實績に信賴して米國經濟界は早くも目覺しい『フーヴァー景氣』を現出してゐる。『[illegible]の王國』は『[illegible]主義の大統領』によつて更に[illegible]であらう。

父よ悲む勿れ（前篇終り）

麻生久

六六

その日の午後になつてから、悲雄がゐなくなつたあとを、佐多と多榮子とは、たゞ二人切り二階に向ひ合ひに坐つた。最早、二人は大分馴れたとは云ひながら、こんなにして二人切り向ひ合つて坐ると云ふ事は、若い二人にとつては何となくぎこちない事であつた。

鑛山に生れて、坑夫生活の中に生ひ立つて來た佐多にとつては、若い女は別に珍らしい譯ではなかつた。

長屋で密集した生活を營んでゐる坑夫生活は、たとへば、男女混浴の風呂場のやうなものであつた。若い男と娘達とは、朝も晩も、顏の合せ通し、冗談の交し通しであつた。殊に坑内に働いてゐる女達と來ては、その姿を明るみに持つて來れば、それ自體が直ちに風俗壞亂の代物であつた。こんな具合で坑夫生活に於ける男女關係は、隨分出鱈目至極なもので、佐多も幼い時からそんな生活の中に育つて來たのであるからして、別に女に對して羞かしがり屋と云ふわけではなかつた。けれ共、今までどちらかと云へば、眞面目な父母の許に育つて、早くから勞働運動の中に首を突つ込んで來た關係上、未だ惡遊びに觸れた事もなければ、娘達の袖を引つ張つた經驗も持ち合せぬ生ぶな青年であつた。彼は女と云ふものに對しては、今まで母以外には極め あつさりした關心しか持ち合さなかつたのである。

そんな彼の生活の中に、今偶然にも、彼と全く育ちの違つた美しい女性が不意に現はれて來たのである。而も、その美しい女性は、一切の過去を振り棄てゝ、勞働運動の中に飛び込んで來やうとしてゐる。彼は多榮子に對して、前にも云つたやうに彼の朴訥な純な心から、說明し難い悦びと親しみとを感じながらも、坑夫長屋の娘達に對すると同じやうな氣安さで相對するわけには行かなかつた。そればかりではなく、彼女に對する、何か知ら侵し難い尊敬の念は、何となく二人の間をぎこちなくさせなければおかなかつた。

それでも、彼は、二人の長い沈默の對座の後に、思ひ切つて、これもさつきから何となくぎこちなさ相に坐つて机の上の本を無意味に眺めてゐる多榮子の方を眺めながら、笑ひ聲で口を切つた。彼は其時に、悲雄の一番困難な壁を打ち破るには、眞正面から大膽に相手にぶつかるに

限る」と云つた言葉を思ひ出したのであつた。

「多榮子さん、僕等はさつきから何だか變ですねえ。船に乗つたり、兄さんがゐたりしてた時には、別に何でもなかつたんだけど、二人きりになつたら何だかぎこちなくなつちやつたやうですねえハ、、、」

佐多の率直開け放げた言葉を聞くと、多榮子も何だか釣り込まれたやうに、今まで無意味に眺めてゐた本を閉ぢて、佐多の方を見やりながら思はず笑ひ出した。

「ホ、、、ほんとに變ですわねえ。二人きりなんてものはいけないものねえ。でも私達はもう馴れて、二人きりになつても何でもなくならなければいけませんわねえ。これからはいつでも一緒に仕事をしなければならないんですもの……」

「さうです。もうこれからは馴れて遠慮なくならなけりやいけない。ただ僕は今まで坑夫の娘達となら平氣で冗談も云つたんだけれど、貴方のやうな人と二人切りで話したりした事がないから、どうもぎこちないんです。」

「まあそんな事が……どうしてでせう」

佐多の言葉を聞くと多榮子は意外と云つたやうな表情をして強く夫れを打ち消すやうに云つた。

「坑夫の娘さん達と私と何處に相違があるんでせう。同じですわ。同な[illegible]じと云つて……私の[illegible]……」

「いや、それでもさうは行かないんですよ……[illegible]」佐多の方が強くそれを打ち消すやうに云つた。

「[illegible]」

「どうしてつて……實際に何處か違つてゐるんですもの……」

「さうでしやうか。どうしてでしやう」

突き詰めたやうな多榮子の問ひに、佐多は幾分たぢたぢしながらも、暫時く考へてから今度はしんみりした調子で答へた。

「夫れは、生れも違ふし、教育も違ふからでしやう」

さう云つた佐多の言葉の中には、惨めな坑夫長屋に生れて、碌な教育も受けずに、しまひには父坑夫の屍になつて、生活の不安と窮乏と放浪の中に老い朽ちて行く、坑夫の娘達の惨めな運命に對する悲しみがこもつてゐるやうに思はれた。

六七

それを聞くと、多榮子の顏には、何となく遣瀬ないやうな悲しみの表情が浮んだ。

彼女は幾分絶望的な調子で、投出すやうに云つた。

「それぢやあ、私たんか、これから幾ら努力しても、心の底から皆と打ち解ける事なんか出來ないでしやうねえ」

「そんな事はないですよ……」

今度は又、佐多が何だか[illegible]

[illegible]

じやう。ほんとに千人力でも得たかのやうな氣になるでしやう』

『ほんとにさうでしやうか』

多榮子も佐多の勵ますやうな眞劍な態度に釣り込まれて、淋しく微笑しながら靜かに云つた。

『ほんとですとも。それに僕等の運動も長屋の女達が自覺して來なければ、ストライキ一つだつて勝利に導かれる事は出來ないんです。ストライキの破れるのは何時だつて臺所からですよ。組合には何と云つても婦人部の確立と云ふ事が必要なんです。これからはその仕事を一つの當面の使命として貴女にやつて貰ひたいんです。どうか助けて下さい』

『まあ、そんな事が私に出來るでしやうか。私には何にも經驗がないんですもの。勿論私はどんな事だつて、運動の上の命令がある以上やる覺悟なんですけれど』

『出來ますとも。何だつてやる覺悟さへつけば出來ますよ。ほら貴女のよく知つてゐるあの娘……兄さんの手紙を持つて行つたでしやう。あの娘なんかは、最初貴女を眞實の姉か何かのやうに思つて、頼り切つてゐるんですよ。あの娘は立派な確かりした信念を持つてゐますねえ』

『えゝ、えゝ、ほんとに立派な信念を持つた娘さんですわ。氣の毒な事情で、私も何とかしなければならないと思ふんですけれど、思ふやうにならないで濟まないと思つてゐますわ。でも、あの娘さんも、長い間、心からは私に打ち解けて呉れなかつたのですよ。併し今でも心の中では矢張りさうぢやないでしやうか。私には何よりもそれが一番つらい事なんです。味方として信じられないつて事がねえ』

『そりや何と云つても身分が違ふし、眞實のところが分らないからでしやう。でも、今は何も彼も棄てゝ我々の仲間に飛び込んで、一人の同志となつたんですから、皆は心から悦こぶ筈でしやう。坑夫達は世間慣れてゐないから、心の中でどんなに思つたつて口に出しては云へないんですよ。夫れだからつて信頼してゐないわけぢやない。たゞ、長い間會社から騙し通しに騙されて血を絞られて來てゐるんだから、どうしても疑ひ深い處があつて容易に信じない代りに、一度信じ出したらそれこそ絶對ですよ。ちやうど僕等が兄さんに對するやうに』

『ほんとにねえ。私も早く兄のやうにならなければ駄目ですわねえ。私もこれからは勇敢に何でもやりますわ。遠慮なしに、どしどし命令したり敎へたりして下さい。私もこれからは一切を斷ち切つて進む決心をして家を飛び出したんですもの』

彼女はさう云ふと、やつと心の曇りが晴れたやうに、はれやかに微笑しながら佐多の方を眺めやつた。そして其微笑した黑い深い瞳は、強く美しい輝きに燃えるやうに見え、その白い頬には薄紅の色がさした。

温たかな、同情に滿ちた二人の瞳は、もう何の蟠りもなく、何のぎこちなさもなく、柔らかに相抱くやうに思はれた。

佐多はそれでも、何となくこれからの多榮子の未來を思ひやるかのやうに、しんみりした口調で云つた。

『でも、貴女はこれから大變ですねえ。僕等の生活は外で見てるやうな生まやさしいものぢやないですよ。時には食ふ物もなくなるし、間違へば、、、、、、されるし……』

『けれ共、それは當然な事ぢやないでしやうか。どうせ、、の運動ですもの……』

『勿論それは當然です。けれ共、そんな事は當然としても、時には、自分のしてゐる事そのものに絶望する事がありますよ』
『例へばどんな事でしやう』
多榮子は、喰ひ入るやうに美しく澄み切つた瞳を輝かして佐多の顏を見つめながら、何かを探し求めるかのやうに熱心に質問を續けた。

六八

『例へば、未だ無自覺な多くの坑夫達は、どうかすると自分で自分の首をしめるのです……』
『それはどんな意味なんでしやう……』
『夫れはストライキのうまく行かなかつた時なぞは乾度あとで僕等が會社から金をとつたとか取らぬとか云ふ問題が起るんです』
『まあ、隨分くだらない事ですねえ』
『勿論くだらない事なんだが、それが現實の問題なんです。會社は組合を切り崩す目的で乾度それをやるんです。長い間、會社側の云ふ事より以外に何も聞いた事のない坑夫達は悲しい事には味方の僕等の云ふ事より矢張り、、、會社側の云ふ事を信ずるんです。或る會社にストライキが起つて、それが片附いて僕が歸つた後に、會社は、僕に金をやつたと云ふ宣傳をして、佐多が停車場で汽車に乗る時、あの掴へてゐた鞄がふくれてゐるのを見なかつたか[illegible]と云ひふらしたんで、坑夫達はうまく其宣傳にのつて組合はぐらつく、その隙に會社は組合の幹部を[illegible]する。又ストライキになつても今度は、、、、、、[illegible]は[illegible]に[illegible]されたので、そして[illegible]、坑夫達は、僕を[illegible]、、、、[illegible]を見れば、矢張り金は取らなかつたんだと残念がつたんですよハ、、』
『まあ、そんな馬鹿な事があるでしやうか』
『ところがそんな事は始終ですよ。そんな馬鹿氣た疑ひをはらして眞實に信用を得るのはたゞ一つ僕等が飽くまで戰つて、、、、事丈けです。そんな事に憤慨したり短氣を起したりしたんではこの運動は不可能ですよ。無限の忍耐のみが最後の目的を達する唯一の道なんです。僕等の此大きな仕事は、目前の結果のみに執着しては駄目だ。僕等の一生は永遠の埋め草だと云ふ信念がなければ出來ないですよ。それでないと直ぐに運動に對する幻滅を感じて絶望しなくちやならない。何より強い意志と無限の犠牲が必要なんです。勞働階級の解放つて事は、一つの夢ぢやなくつて現實の仕事なんですからねえ。そして其現實の仕事は果てしのない永遠の道を歩いてゐるやうなもんですよ。だから僕は、貴女がこんなにして僕等の仲間に這入つて來て下すつた事は非常に嬉しいんだが、併し、これから先きの困難を考へると、何だか、たまらなく濟まないやうな傷ましいやうな氣がするんですハ、、、』
佐多はその素朴な如何にも勞働者らしい樣子のなかに、多榮子の顏を見つめながら同情するやうに云つて笑つた。
けれ共、多榮子は、佐多の言葉を強く刎ね返して決然とした態度で云つた。彼女は、さう云つた自分に對する同情や思ひやりが何となく好ましくなかつた。
『そんな事はないですわ。私にとつては[illegible]する[illegible][illegible]なしに[illegible]る事は何だつてあるで[illegible]大きな仕事[illegible]

ほんとに、私達は永遠に對する墳墓の覺悟なしには一歩だつて前に進めはしませんわ。けれ共、今までの生活よりもその方がどんなにか生き甲斐があるでしやう。この仕事こそ、人類の進んで行く大きな……歩みの中に、自分の小さい全生命を投げ入れて、其歩みと歩調を合せて進むのですもの。それでこそ生れた甲斐もあり、又生き甲斐もあるのですわ。そんな樂しい事をするに同情なんかして貰つたりしては罰があたりますわホヽヽヽヽ』

『ハヽヽヽ貴女のやうに徹底した考へを持つてゐれば、もう何も云ふ事はないんです。とに角全力を擧げて一緒にやりましやう。それに、もう激しい戰ひは今目前に迫つてゐるんですからねえ』

『今度の事をきつかけにストライキが起るでしやう』

『勿論起りますよ。今ではM炭坑會社の持山のあちこちに組合が出來たんですからねえ。坑夫側の方も、長年の無茶苦茶な壓迫に對して組合の力を試さなければ承知しないし、會社側の方も機を狙つて一擧に組合を屠らうと待ち構えてゐるし、どつちにしたつて早晩の間に一大決戰が近づいてゐるんです』

『さうなれば、私も初陣に加はつて生命がけで働きましやう。どんな事でも私に出來る事ならやりますわ。若し止むを得なければ、ヽヽだつて勇敢に飛び込みますわ。そしたらほんとに腹がすわつて來るでしやう。人間は何時だつて、絶對のところまで落ちて仕舞つてそこから立ち上らなければ、ほんとの力が出て來ないんですものねえ』

『是非初陣に出て下さい。ストライキは僕等の運動の生命であり實際の戰場ですよ。でも今度は黒田君もゐるしほんとに安心なんだ』

多榮子は、佐多のその言葉に、も一つ……貴方も一緒だから……と附け加へたかつたのであつたが、たゞ默つて、決意の微笑をたゝへて夫れに應へた。

六九

その日の夕方になつてから、佐多も決定された通りに、父の炭坑の方に戰備を整へるために出掛けて行つた。

『ぢやあ僕は行つて來ますよ。馴れないところに一人で淋しいでしようが待つてゐて下さい』

佐多は、すつかり用意をとゝのへて、階段を降りやうとする時に、多榮子の方を振り返つて元氣よく云つた。

『鐵のやうに堅い城を築いて下さい。そして一日も早く私を呼びに來て下さい。私も一兵卒として勇敢に戰ひますわ』

多榮子も階段を降りて行く佐多の後ろに從ひながら、決然とした聲で云つた。

『貴女にも直ぐに來て貰ひますよ。待つてゐて下さい』

佐多はも一度階段の上を振り返りながら微笑して夫れに應へた。

何かしら云ひがたい悲壯な氣持ちが若い二人の胸から胸へ通ひ合ふやうに思はれた。

佐多は、元氣よく、薄暗い家の中から、薄暮の迫つて來た街道の中に飛び出した。

其夜多榮子は、下の圍爐裏ばたに坐つて、長い間島田夫婦と雜談を交して坑夫生活の内輪話しを聞く事に時を過ごした。

もう夜が更けてから、お休みなさいをして彼女は一人二階に上つて行つた。

室の中はがらんとして寂寥そのものゝやうに思はれた。

彼女は暫時く室の眞中に、たゞ一人立つた儘あたりを見廻した。皆と一緒にゐる時には明るい氣持ちであつたが、さて、こんなにして只一人殘されて見ると、何となく不馴れな生活に對する厭ひがたい不安と寂寥とを禁ずる事は出來なかつた。

彼女は急いで寢床を敷いて、其中に身を横たへ、迫つて來る不安と寂寥とから一刻も早く遁れやうと思つて固く兩眼を閉ぢた。

けれ共、此數日間の生活の激動に昂奮し切つた彼女の神經は、極端に疲勞を感じながらも、愈々鋭どく磨き澄まされて、どうしても彼女を安らかな眠りの中に誘つては行かなかつた。種々な雜念は、とりとめもなく彼女の疲れ尖つた神經を刺戟して、止まる所を知らぬやうに思はれた。

彼女の心は、今、恰かも闇と光の十字路の上を、さまよつてゐるのであつた。彼女が脱け出して來た過去は其闇であつた。けれ共其脱け出した闇は未だ色濃く彼女の心の上を蔽ふてゐるのである。今彼女が立つてゐる一歩は光りに向つた一歩であつた。けれ共、其光りは未だ極めて微かであつて彼女の心を明か明かと照してはゐない。而は光に面してゐるけれ共彼女の身體は未だ闇に蔽はれてゐるのである。

見よ、彼女の深く閉した兩眼の網膜の上に、ひつきりなしに映じては消え、消えては映じて行くものは、彼女が後ろに振り捨てゝ來た父の姿ではないか。[illegible]る。その窪んだ鋭どい眼は底知れぬ絶望に沈んで、凝乎と親に反逆し行く娘の顏を憤りと悲しみとで見つめてゐるではないか。精も根も盡き果てゝ、ぐつたりと安樂椅子に全身をうづめた姿は、もう、再び立ち上る力も消え失せた死人のやうにさへ見える。

彼女は、其悲痛な光景に堪へ兼ねて、急いで幻影を拂ひのけざるを得なかつた。

「お前丈けはしつかりしてお呉れだらうねえ。兄さんもあてにならないんだからねえ」

母の悲しげな優しい聲がきこえる。と又しても深い沈默そのものゝやうな沈母の顏が浮び上る。底知れぬ深い靜かな愛を湛へた優しい母の顏も、げつそりとして見える。その唇は靜かに開いて氣遣はしげに彼女に呼びかけるのである。

「お前までそんな事をして、これから先きどうなつて行くのだえ。親を見棄てゝ……」

彼女は其聲に堪へ兼ねて、其悲痛な聲を幻を追ひ拂ふやうにパチリと兩眼を見開いた。

薄暗い電燈の光りは依然として、靜寂そのまゝのやうな室の中を薄ぼんやりと照してゐる。彼女は、眤つと其光りを見詰めながら自分の弱い心を叱咤した。

「私はどうしてこんなに弱いのだらう」

けれ共、眠りも襲らず、彼女の胸に[illegible]來るに、[illegible]たい寂寥は不斷[illegible]であつた。[illegible]

彼女は、とう〳〵堪へられなくなつて、むつくと布團の上に起き上つて其上にきちんと坐つた。

彼女の理性は、激しくその弱い心に鞭をあてた。

「今こそ、ほんとに私の心が試されてゐるのだ。私はどんなにしても夫れに打ち克つて強くならなければいけない。こんな事で負けてどうなるものか。こんな事は要するに贅澤な煩悶に過ぎないではないか」

彼女は激しく自分の心に鞭をあてながら、もう一度兩眼をはつきりと見開いて何と云ふ事なしに床の間の方を眺めやつた。

と、床の間の壁にかけられてゐる、マルクスの厳然とした肖像が、薄暗い電燈の光りに照し出されて、何かしら云ひがたい力と信仰の表徴のやうに彼女の兩眼に映じ出した。

七〇

彼女は、その肖像の中に、何かの強い力を探し求めるやうに、長い間凝つと夫れを見つめてゐた。

すると、何か知ら強い力がぐい〳〵と彼女の心を明るみの方に引き出して行くやうに思はれた。

彼女は心の中に激しく叫んだ。そして其叫び聲を自分の胸に激しくぶちあけた。

「何でもない。何でもない。一切の事は皆必然の流れの外にゐる事は出來ないのだもの。父の炭坑が沒落して行くのも、私達がこんな運動の中に這入るのも、人類の社會の必然の流れに過ぎないのだもの。進んで行く人間の歴史の流れには色んな悲劇や喜劇が絶え間なく織りなされて行くけれど、夫れは皆一つの出來事に過ぎないではないか。人間は戰ひだ。その激しい眞理に對する戰ひの中にこそ、人生があり、生命があり、社會の進歩が生れるのだ。父の炭坑が亡びて行く。M炭坑會社が凱歌を擧げる。だが其凱歌を擧げるその瞬間にM炭坑會社の亡びて行く第一歩が始まつてゐるぢやないか。そして最早其亡びるべき第一歩が始められてゐるのだ。さうだ、坑夫達が起ち上り始めた。勞働運動が始まつた。資本主義が倒れ始めた。足もとから白蟻が柱を食ひ始めた……」

そこまで考へて來ると、ほんとに彼女の暗く蔽はれた胸がすつと晴れて、自分の行くてには明るい光と力とが、すつきりと見出されて來たやうに思はれるのであつた。

と、彼女の眼の前に、陰慘な家庭をその可弱い肩に背負つて、限りない困苦と窮乏の道を男々しく戰ひ進んでゐる、あの坑夫の娘の毅然とした力強い姿があり〳〵と浮び出て來た。

彼女の胸の中には、もう一度自分を叱咤する激しい叫び聲があがつた。

「何でもない！何でもない！ほんとに何でもない。あの娘の家の悲劇に比べたら、自分の家の事なんぞは未だ贅澤な悲劇に過ぎないぢやないか。あの娘の困苦に比べたら自分の困難なぞ爪の垢ほどにもあたらない困苦ぢやないか」

彼女は、決然と心の中でさう叫ぶと、もう寢床の上にじつとしてゐられないやうな衝動にかられて、いきなり立ち上つて、もう一度確然と、不屈な力を求めるやうに、づかづかと床の間の方に歩いて行つて、ぼんやりした電燈の光りに照されながらも、儼然とした力強さを以て、こちらを見下してゐるマルクスの肖像と、長い間向ひ合つて立つたのであつた。

奉祝歌

佐佐木信綱

日の大皇子あもりいませり永久に若くとはに榮ゆくこの大地に

君の心民の心と相あひて大天地に滿ちさかえなむ

わが帝もちきこし、をせ常若にすすみひろごる國の詞を

喜びの淚せきあへずかたぶけるわら屋の軒の日の旗みれば

家内きよめ小床の瓶に菊の花の[illegible]きをいけて御代ほぎまつる

畏こきや大みたからの一人なるやまと歌人歌ほぎまつる

瑞日抄

與謝野晶子

美くしき初めのありて終りなきこの大御代のたのまるるかな

高御座輝く秋のめでたけれ即せ給ふは妙齢の君

民こぞり心の目もて見てありぬ威儀の宮人錦の袍も

菊咲くや乾坤ここに新しき大日の本の開秋にして

國の民[illegible]めでたくましませばよろこびの聲九天に上ぐ

大君の秋をたたへてあなかしこわがなしつるに三十一字

御大禮繪卷歌

尾上柴舟

行幸

かゞやかに朝日出でます御車の光に照らぬ隈なかりけり

承明門

大庭の御輿にあたる風もなしいま大御言たまはすらしも

大嘗宮

御手づから祭らせませば神はみな夜はの齋庭に下りますらむ

暁になりゆくまゝに燃えまさる御火にしるしも神の心は

五節舞

そのかみの天つ少女もかくばかりかへしやしつる雲の袂を

萬歳樂

ひるがへす舞の袂もゆたかなる御代にし逢ひぬ何をか思はむ

御大典間近に

土屋文明

百穗畫伯ゑがける行幸の繪を見れば駒もとどろに踏み並めてゆく

大御行ありのままなる繪を待ちつつ街にいでて新聞を買ふ

無產派の議員行幸を拜みてかしこみたりといふ記事をも讀めり

萬歲旛に少しく降りて神々しゆふべの町は子供等とゆく

かがやける菊の二花値をききておどろく妻も惜からなくに

十一月十日吾が家はいかにことほがむ兒等の喜びかねて著しも

政局展望台

馬場恒吾

大隈信常侯の政界進出

御即位大典に際して日本の大小政治家が殆んど全部京都に行つたとき、東京の大新聞は筆を揃へて一つの警告を發した。それは御大典は朗らかな氣持ちで祝福すべきものだから、醜惡な政治的策動を謹めと云ふ事であつた。同時に彼等はかうした警告を發しても、政治家が矢張種々なる劃策を行ふであらう事を否定しなかつた。其劃策の一つとして大隈信常侯の政界乘出しの運動を擧げた。

現に大隈侯が京都に於て新聞記者に語つた所によると、彼れ自身も其劃策のある事を否定しなかつた。否定しないのみならず、御大典後には二十名以上の代議士を結束する可能性がある事を匂はした。

彼れの政界乘出しが果して成功するか否かは固より豫言出來ないけれども、彼れのさうした企てが如何なる價値を有するものなるかは、研究に値する。

大隈侯に[illegible]一層[illegible]るか。それは局外者の吾々には殆んど了解出來ない。成程彼れは早稲田老侯の嗣子である。併し政治家の地位が世襲であることは世襲議員たる外は徳川幕府と共に廢止になつた。親が大政治家であつたが故に其子を大政治家として取扱へと云ふ事は、現代に於ては夢物語以上の何物でもない。

憲政會は大隈老公に依つて創立された。其憲政會が老公の嗣子を路傍の人の如く取扱ふのは怪しからんと云ふ者もある樣子だ。まさかに信常侯自身がそんな事は考へはせぬであらうけれども、若しそれに似寄りの考へを抱いてゐるとしたならば、吾々は侯が現代の政治を理解して居らぬ事に呆れる許りだ。假りに憲政會が老侯一人の力で出來たとしても、政黨は一個人の私有財産でない。それを私有財産視することは、藩閥政治家、專制政治家の通弊であつて、老侯自身が終生其思想に向つて戰つて來たのである。[illegible]あつて、天下萬人の所有するものだ。[illegible]

る重要なる地位を占めんと欲するならば、それを實現する方法は只一つしかない。それは政治家として黨の爲めに大いに働らく。只これのみだ。

大隈侯は自分は大隈内閣時代に外務省の副參政官を勤めて、已に政界に乘出してゐると云ふ。それは事實だ。併し大隈内閣が倒れて以後の十何年間、彼れは政治家として果して何をしたか。我等は寡聞にして何一つ聞いた事がない。彼れは侯爵なるが故に貴族院議員である。それは公侯爵の特權として何等の努力なしに得る議席である。其議席に坐はる事が、政治的に何かの功勞であると考へるのは、考へ方それ自身が如何に非デモクラチックなる事よ。

併しこれらのすべての合理性を超越して、彼れが政界乘出しに焦つてゐる事は事實である。彼自身は云ふ。自分は副參政官になつた時よりして已に政界に乘出してゐる。今更それを問題にすることはないと。

吾々は彼れが政界に出る事を非難しない。彼れが若し一身を犧牲にして、政治に活動するならば、國民は何日でも之を歡迎する。前に副參政官であらうがあるまいが、或は大隈老侯の嗣子であらうが、あるまいが、そんな事は問題でない。只問題となるは、彼れが果して一身を捨てゝ國家に盡くさんとするか、否かである。吾々は信常侯がさうした決心を起す事を希望する。只、今迄の經過では侯がさうした心持ちで政治的に活動するか否かは明白でない。

何となれば、日本にはまだ因襲的な考へが根強く存在する。信常侯が大隈家の嗣子であるが故に、大隈黨たりし憲政會、其後の民政黨でも、信常侯を重用せざるは怪しからぬといふ者がある。例へば憲政會内閣の農林大臣故早速整爾氏が大藏大臣に轉任したとき、何故に信常侯を後任大臣に推薦しなかつたかと早速氏に文句を付けた事を聞く。或は同じ時代に、信常侯を大使に推薦するものがあつたが、内閣がそれを顧みないが爲めに憤慨するものがあつた。世間には常識以外の考へを抱く者が多いのに驚く。

今年春の總選擧に際して、大谷尊由、其他の本願寺派は茲に總選擧に對して佛教の進出を企てた。そして只佛教と云ふのみでは心細いが故に、大隈信常侯と結び、早稲田派の力を借りて政治的勢力を結成せん事を希望した。併し之れは早稲田出身の有力なる代議士が信常侯を諫めたが故に、世間の問題にならずに濟んだ。

床次竹二郎氏が民政黨を脱したとき、床次氏は大隈侯を誘つた。それは床次氏は已に世間に知られてゐる如く田中内閣は遠からず瓦解する。民政黨は西園寺公が幣原外交を好まざる爲めに政權を取ることは出來ぬ。此際自分が第三黨を作れば政權は必ず自分の處へ來る。大地を打つ槌は外れるとも、此豫想は外れないと、確信して民政黨を脱したのである。それ故に大隈侯に早稲田系代議士を率ひて、新黨に來ることを勸誘したとき、床次内閣の一椅子を提供する事を包はした。

信常侯の意志が動いた事は、侯が山本達雄男に相談した事で判る。床次がから云つて來た。果して政權は床次に來るものであらうかと云

ふのが相談の趣旨であつた。之を山本男に相談したのは山本男が元老西園寺公の意中を能く知つてゐると思つたからであらう。山本男は床次の政權獲得を夢みる根據は多くは是れ錯覺であらうことを說明すると共に、大隈侯に對しては、侯は已に早稲田大學の名譽總長、報知新聞社長と云ふ如き、國家の爲めに盡くすべき最高の地位を占めてゐるのだから、之に專心に努力されて居れば、侯の方から求めずとも、國家が侯の政界に出づる事を求めるであらう。然るに今焦つて、政界の有象無象の中に身を投ずる事は、政界の現狀から見て、却つて侯の現在の地位を汚かす事になりはせぬかと、さうした趣旨を懇切に說いたのである。

信常侯は山本男の忠告に從つて、床次黨に參加することを見合せてゐる。併し大隈侯の周圍には、山本男の忠告を評して、山本男は餘りに眞面目過ぎた。色氣の付いた娘に色氣を出すなと云つても無理な事だ。それよりは今少しく粹な忠告をして欲しかつたと云ふ者がある。大隈侯が其後も政界進出を思つてゐることから見れば此批評が中つてゐる。

侯は今の遞相久原房之助とに樺太油田の共同經營者であつた事がある。それ故に今でも侯の名は屢々久原氏のそれと結び付けられる。侯は田中內閣の作つた經濟審議會の委員である。大谷尊由一家と久原房之助氏とは財政的に密接な關係である。これも世間周知の事實である。だから、世間は政府[illegible]

る。私は信常侯が顚倒に田中內閣の忠僕にならうとは信ぜぬ。だが、若し大隈侯の政治的進出の動機に、民政黨の冷淡を恨むと云ふ心があつて、彼れの活動が民政黨攪亂の形式を採るならば、彼れに田中內閣の御用を勤める意思はなくとも、結果に於て御用を勤めた事になる。公人の進退は私の感情に依つて左右さるべきものでない。大隈老侯は曾つて憲政本黨の總理を無理に罷めさせられた事がある。併し其後になつても陰に陽に憲政本黨を助けてゐた。世間は信常侯が老侯のやうな大政治家になることを衷心から祈つてゐるのである。

殊に侯の政界進出が本願寺派と關聯して考へられるとき、世人は眉を顰める。宗教が政治に活躍するやうになれば世も末だ。多くの國は其爲めに潰れた。早稲田老人の椅子がさうした傾向の運動に、片棒を擔ぐことは、幾萬の早稲田出身者をして憤慨せしめる。だから、侯が政界に出るならば、飽く迄謙虚な心で、政界の一陣笠から初めて、粒々辛苦の功を樹てる事を念とすべきだ。さうすれば世間も、友人も、早稲田出身者も、皆んなが喜ぶ。

二大政黨と少數黨

來るべき第五十六議會に於ては政府の與黨として多數を占める[illegible]あらうと云ふ事が、政界の一致した觀測になつてゐる。

[illegible]

散は突發の事態が起らざる限り、先づないものとしなければならぬ。

今年春の總選擧に於ては政友會二一八、民政黨二一七、合計四三五、即ち四六六の總數の中で、大部分を二大政黨が占めた。日本も英米の如く二大政黨の對立を原則とする國になるかと思はれた。其形勢が特別議會の終りまで續いた。

其後の半ケ年足らずの間に、床次黨（二八名）、憲政一新會（七名）が出來、以前から存在した實業同志會、明政會、革新黨、無產四黨と加へて少數黨簇出の形勢を呈した。大隈侯が新黨を組織すれば益々其勢が促進される。

茲に於て、少數黨簇出は政治の進歩か退歩かと云ふ疑問に突き當る。

× × ×

少數黨の簇出は必ずしも政治の退歩でない。英國に於ける保守黨自由黨の二大政黨對立の間に勞働黨が進出し來つて、今は保守、勞働、自由の三大政黨が鼎立する姿になつたのは、政治の退歩でなく、却つて進歩である。社會生活が複雜になり、數多き社會群の要求が、二大政黨の政綱に分類することが出來なくなるとき、其所に第三黨乃至幾多の少數黨が發生するは免れ難い事になる。否寧ろ望ましき事になる。

然らば目下の日本に於ける少數黨簇出も、此理論の範疇に入れて、望ましき事として承認すべきかと云へば、それは容易にさうとは云へない。

特別議會後に起れる少數黨は民政黨からの分離に依つてのみ出來上つたのである。床次黨然り、憲政一新會然り。彼等は總選擧に際して、選擧民の贊成を得て成立した黨派でない。總選擧の時は、彼等の大多數は民政黨を名乘つて、民政黨として選擧されたのである。新たに出來た黨派は代議士の個人の黨派であつて、選擧民の黨派ではない。從つて、彼等の黨派を、選擧民の要求が二大政黨の政綱に含まれないが爲めに、必然的に發生する少數黨を以て律する事は出來ない。

鶴見祐輔氏等の團體である所の明政會も、總選擧の後に代議士が勝手に作つた團體である事に於て、床次黨、憲政一新會と異る所はない。

實業同志會と無產政黨は總選擧に訴へて作られた黨派である事に於て、代議士の私黨とは云へない。

× × ×

選擧民の要求に基かずして、代議士は何故に小黨分立の擧に出でるか。其心理狀態を見出すことが、政局觀測の爲めに必要である。

床次竹二郎氏の新黨樹立は、彼れがそれに依つて近く總理大臣となり得ると云ふ錯覺を起したからである。最近に元老西園寺公が上京した後、彼れは西園寺公に會つた。それで彼れの錯覺は錯覺であると判つたらしい。それ故に彼れの周圍には悲觀と焦慮と煩悶の空氣が漂つてゐる。

大隈侯が新黨を組織すれば、彼れは何かの大臣を以て任ずるであらう。大臣病患者は過去に於て少數黨を作つた如く、將來も亦其跡を絕

たないであらう。

政治家が政權を取り度がる、若しくは大臣になり度がることを、私は世間が云ふ程嘲笑し度くない。政權を握つて天下國家の爲めに働らく。日本の政治はまた之を理想とする程度にしか進歩してゐない。そうした考への政治家はまた上等の部類に屬する。

憲政一新會には今直ちに總理大臣となり得ると思ふ人もなく、又大臣の椅子を窺がはれる人も見當らない。然らば彼等は何故に民政黨と分離したか。

彼等の聲明には民政黨の幹部が專横であるとか、外交を政爭の具に供するのはいけないとかある。又同時に、一新會に入黨を勸告された者は、會には五十萬圓の金がある。其預金帳を見せられたと云つて居る。

一新會は今日は必ずしも政友會內閣を援助するとは言はない。併しあのやうに感情疎隔のあつた事情で民政黨を脱黨した其黨員が今後民政黨と共同して政府に反對するとは思はれない。それ故に、來るべき議會に於ては政府側に立つものとして計算されてゐる。

田中內閣は特別議會の際、衆議院の多數を制せざる爲めに必死の苦しみを嘗めた。其間に反對黨及中立議員に對する壓迫、誘惑、買收が問題になつた。數名の議員が在野黨を裏切つた。明政會と中立議員の或者は態度を曖昧にした。其結果田中內閣は助かつた。

政府は第五十六議會を目前に扣へて、其議會を切拔けるべく、苦し[illegible]。若し政界に地震學者が居たならば、現在の政界の動搖に、特別議會の議員の動搖と同じ地震の延長と見るであらう。

だから、日本の政治の發展過程に於ける現在の狀勢から云へば、選擧に依らざる少數黨の發生は、政治に暗黑な手が動いてゐることを意味する。政治が今少しく進歩した時には吾々は少數黨の出現を歡迎し得る。現在の狀態では、二大政黨の對立を可とする。それでなければ、議會政治の基準となるべき、最も初步の道德律さへ行はれないからである。

現に特別議會に於て、政府黨と反對黨の差か一名か二名と云はれた時、悪辣な政治的取引か話題に上つた。或中立議員は五十萬圓儲けたと噂された。噂は事實を誇大にしてゐる。併し其噂を聞いた者の中には、中立議員、若しくは中立黨の議員たる事を志願するに到つたものもあらう。其志願者が需要を超過すれば、賣らんかなの議員の濫出を見ないとも限らぬ。

それを豫想するとき、政府は喜色滿面、天下泰平を唱へ得る。恰かも失業者の大群を眺める資本家の如くに。

政府の立場から第五十六議會を展望すれば、右の如く春色洋々だ。

併し解散なき議會には三ヶ月の會期だ。三ヶ月は相當永い時間だ。其間に田中首相、久原遞相(其時には外相となつてゐるかも知れぬ)等は議會に於ける初めての試錬に直面する。時代は躍る。誰れが明日の事を豫言出來やうぞ。

『二』光妙寺の遺孤吾妻三郎

酒井と西園寺公との關係のハッキリと窺はれるのは、西園寺公がその初めての入閣に先って明治二十七年八月二十[illegible]日、[illegible]に[illegible]せられた時、酒井が隨員の中に加へられて居ることである。是より先、酒井は[illegible]十七年朝鮮京城に[illegible]變のあった時、在留邦人[illegible]に接し、[illegible]所を知らず、奔走して[illegible]を唱道し、[illegible]る。今西園寺公に隨って[illegible]に入り、京城[illegible]も止めざるを見て如何に感慨の深かったことであらう[illegible]が文部大臣に任じてからは、內[illegible]殆どなく、夜晩くまで[illegible]て居ったものだからである。酒井は[illegible]物事に頓着せぬ方であったから[illegible]月たんばに[illegible]いて居ったりした。[illegible]が、公はあれ[illegible]好きの人であり[illegible]

[illegible]

盛にその外交通を示して居る。梅、本野などが交互に顏を出し、外部からは内村鑑三氏が毎號のやうに書き、添田壽一、大西祝、平田久、小松緑、寺尾亨、清野勉などいふ人々の顏も見える。文壇方面では、高山林次郎、後藤宙外、武島羽衣、内田魯庵、戸川殘花などが交互に顏を見せ、殊に魯庵の飜譯小說『椿夫人』連載は、論說欄を橫流する同人の佛蘭西思想に合唱したものに相違なからう。全體を通じて社說にも、論說にも、雜錄にも外交に關する記事が多く、殊に外交を中心とする海外時事の報道には、力を注いで居る。それで此雜誌の計畫された大體の目的も分る。

初め竹越氏が此雜誌の計畫を同人の間に持出すと、其席に居られた西園寺公が、それは「世界之日本」と命名したがよいとのいふので、一同それに賛成し、直に題名が決つた。ツマリ『世界之日本』は西園寺公を名づけ親として生れ出たわけである。

此雜誌は明治二十九年の十二月十日號まで續いて、相當の部數を發行して居たが、明治三十年一月から日刊「世界之日本」と題する小型の新聞紙に改め、月刊『世界之日本』は毎月一回發行として尚ほ之を持續することとなり、其廣告に「其材料を精選し、高尚なる所より立論し、敢



西園寺公

て佛國に於ける「レヴウ・デ・ドウモンド」若くは英國に於ける「コンテンポラリー・レヴウ」の資格を具へしめ、之に「モンセー」若くは「コスモポリタン」の趣味を兼ねたるものたらしめんことを期す。」と云つて居る。西園寺公の世界癖が竹越氏によつて遺憾なく吹奏せられ、竹越氏は當時世間から所謂ハイカラの代表的なるものとされ、西園寺公が少しもそれに累せられなかつた所に面白味がある。

『二』國木田獨歩の『巡査』

竹越氏が國木田獨歩と相識つたのは、明治二十八年三月、獨歩が「國民新聞」の從軍記者として乘込んで居た軍艦千代田を棄て、東京に歸り、「國民之友」の編輯に從事した頃からであらう。獨歩が佐々木本支といふ醫師の娘信子と戀愛に落ちてさまざまな葛藤を續けた告白（歎かざるの記）の中にチョイ〳〵竹越氏の名が見える。竹越氏は彼とその子との結婚式にも保證人として立會つて居る。獨歩は「世界之日本」の前期（月二回時代）には一度も其名を出して居ぬ。但し彼は竹越氏を通じて西園寺公に深き敬意と興味を持つて居たものに相違ない。殊に二十……

氏の世話で『報知新聞』に入社した時には、「人物と其半生」と題し、二十七回に亘つて公の人物を品隲した。此隨筆風の批評は後に小冊子として出版されたといふ人もあるが、僕はまだ、一度も見て居ぬ。新潮社の獨歩叢書にも、春陽堂の『明治大正文學全集』にも、改造社の『現代日本文學全集』にも收められて居ぬ。そんなことが縁となつて、公の邸宅が駿河臺に出來ると、獨歩は竹越氏あたりの世話もあつたであらう。公の邸内の長屋を借りて護衛兼帶に置いてあつた警部さんと棟割りで住込むこととなつた。之が明治三十四年十二月のことである。長屋と云つてもそれは西園寺邸の左の木戸口を這入つた所にあつた離居で、六疊に八疊の小サッパリとした部屋であつた。是より先、獨歩は同棲半年足らずで初めの戀女房信子に逃出され、悲歎やるかたなかつたが、明治三十年には早くも後の夫人治子と相戀し、明治三十二年に結婚して長女貞子をまうけたが、西園寺邸に入る時には妻子をその生家（榎本氏）に託し、寡居して文筆にいそしんだ。彼が自分で傑作と信じて居た「牛肉と馬鈴薯」「巡査」の二篇は西園寺公の邸内で書かれたもので、殊に「巡査」は同じ長屋に住んで居た警部さんをモデルとしたものである。「巡査」を讀んで面白く感じるのは、「夫れ警察の法たる、事無きを以て至れりと爲す。事を治むる之に次ぐ。功無きを以て盡すと爲す。功を立つる之に次ぐ。故に日夜奔走して而して事を治め、千辛萬苦して而して功を立つる者は、上の上なる者に非ざる也。」といふ文章が若しホントにその警部さんの作であつたとすれば、その警部さんこそ眞によく警察の精神を體得したもので、公の自然主義的哲學はその邸内に置いた警部さんにまで徹底して居たといふことが出來る。「牛肉と馬鈴薯」「巡査」ともに大阪の「小天地」に掲載せられた。

獨歩は自炊せず、食事は母屋の方で常に家人と共にして居たらしい。夜は時々公に呼ばれて酒を吞み、晩くまで政治や、宗教や、文學の話をし、時には夜を徹して曉に及ぶやうなこともあつた。議論が熱して來ると互に聲高になり、何か喧嘩でも始まつたのではないかと、巡査が心配して警戒したりしたこともあつたさうである。そんな風で公の方では大へんに獨歩を愛して居たが、家人の中に困るといふものが出來、到頭竹越氏に話があつて、竹越氏から獨歩にその意を傳へ翌年の二月獨歩は西園寺家を去つたものださうである。そんなことがあつてから獨歩は竹越氏をよく思はず、自然竹越氏と遠ざかつて行つた。

『三』 西園寺公と尾崎行雄氏

話が少し後戻りして第三次伊藤内閣の時のこととなる。

第三次伊藤内閣は前にも述べた如く、松隈内閣瓦解の後を承けて明治三十一年一月に成立したもので、半ケ年に足らぬ極めて短命な内閣であつた。此内閣の閣員は殆ど伊藤の一門と云つてよく、西徳二郎の外務、曾禰荒助の司法、末松謙澄の遞信、伊東巳代治の農商務、而して我が西園寺公の文部などはその色彩の最も鮮明なるものであつた。殊に此内閣に陸軍大臣として初めて政治の舞臺に乗出した桂太郎は、日露戰爭を經て一躍政界の大立物となり、西園寺公と相對峙して、所謂大正の政變を惹起するに至つたものであるが、此時はまだ呉越同舟で、伊藤の操る舵のまに〳〵その運命を任せたものであつた。

此時西園寺公が文部大臣として計畫したことで、未だ實現の運びに至ら

らず、内閣の總辭職を見る一ケ月ほど前に病氣でその職を辭された位であるに、否・世に現はれなかつた注目すべき政策がある。それは明治二十七年に陸奥が各國と改締した新條約の實行期が眼前に迫つて居り、所謂外人の内地雜居に對する朝野の杞憂が甚だ大きかつたことにつき、公が明治天皇に申上げて第二の教育勅語を降されんことを御願ひし、大體に於いて御承諾を得て居たことである。想ふに公の考へでは、維新以來、五箇條の御誓文といひ、教育勅語といひ、歐米の先進國に就いて廣く新知識を求め、新日本の開發に資すべきことは御奬勵になつて居り、それは固より此上もなく結構なことであるに相違ないけれども、今や時勢は進展して日本も歐米各國と對等の條約を結び、外人を内地に迎へて對等の交際をしなければならぬ日が眼前に迫つて居るのであるから、第二の教育勅語を奏請して、國民教育の方針に國際人としての資格を養成すべき項目を加へようといふにあつたのであらう。明治天皇も之をきこして御嘉納あり、已にその運びに及ばうとした處で内閣が總辭職となり、事が中止した。

第三次伊藤内閣の後には、伊藤が閥族どもの烈猛な反對を排して奏請した我國最初の政黨（憲政會）内閣が成り、尾崎行雄氏が入つて文部大臣となつた。尾崎氏が文部大臣となつた時、明治天皇から德大寺侍從長を以て、新時代に應ずる教育上の方針並に施設に關して、如何なる經綸があるかといふことを御下問になつた。尤も西園寺公は明治三十一年四月腦病でその職を辭し、後には外山正一が入つて文部大臣となつたけれども、それは僅に一ケ月ばかりのことで尾崎氏が之に代つた。尾崎氏は御下問に對したけれども、西園寺公に[illegible]經驗があつたといふことは誰からもきいて居なかつたので、御下問に對し、天皇の御滿足を得るほどの御答を申上げることが出來なかつたなどいふ話もある。

竹越與三郎氏が文部省の勅任參事官として取立てられたのは此時であるが、その時公は内幸町の邸宅で竹越氏に、あなたも是から役人になつて平素の抱負を行はれるのであるが、世には隨分頑迷固陋な輩もあることであるから、お互に覺悟は必要であると、それとなく森有禮の事を諷して、竹越氏にその邊の覺悟を促されたといふことである。之は『世界之日本』の同人達がその頃世間から受けて居た所謂ハイカラの批難嘲笑を知つた上でないとチョット受取れぬ話である。それかと云つて現在『世界之日本』をひろげて見ても、何處に所謂ハイカラの氣分があるのか少しも分らぬ位のものである。

『四』 政界に於ける三菱派と伊藤

第三次伊藤内閣の時には、公も薩長其他の老人どもから、まだ幾分若輩扱ひをされ、貫祿の足らぬものとして目されて居たのであるが、此頃からメキメキとその人物識見を認められ、伊藤博文の一門では伊藤已代治と竝んで將來最も有望なものとして、政界に重きをなすやうになつた。

明治三十三年十月、第四次伊藤内閣、即ち最初の政友會内閣が成立すると同時に、公は樞密院議長に任じ閣員の列には加はらなかつたが、元老伊藤に從ふ意見があつたので初めから總理大臣の代理を命ぜられ、[illegible]して居た。

のであつたが、三菱の第二世　岩崎彌[illegible]立提携を以て畢生の政治的理想として居た處から、彌之助の外舅で政界第一の縦横家であつた後藤象二郎が先づ動き、伊藤と大隈との提携を策する第一歩として板垣と大隈との意思を疎通させ、板垣を通じて伊藤と大隈との聯立を策した。人も知る如く、板垣と大隈とは、明治十四年自由黨と改進黨との對抗以來、犬猿も啻ならぬ間柄であつたが、板垣と藩閥との間には初めから、一道の氣脈の相通ずるものがあり、自由、改進兩系の提携に較べると、自由黨と政府との提携には尙ほ多大の可能性があつた。其處で後藤は先づ板垣と大隈との意志を疎通させ、板垣を通じて大隈と伊藤との間に斡旋した結果、伊藤は井上が條約改正に蹉跌して辭職した跡に、閣僚一致の反對を排して大隈を入閣させた。併し伊藤は、それが爲に山縣以下閣僚の猛烈な攻撃を一身に引受け、遂に居堪らずして逃出し、跡には大隈を外務とし、後藤を遞信とする黑田內閣が出現した。併し此事があつてから伊藤と山縣との間には、自然に一つの大きい溝渠が出來、伊藤は一歩々々三菱と因緣の深い後藤、板垣の兩星を楔子とする自由、改進兩黨の勢力に引つけられて行つた。明治二十五年八月、第二次伊藤內閣が成立した時に、伊藤が陸奥宗光を拔擢して外務大臣の要位に置き、條約改正の難事業に當らせたのは伊藤が陸奥の人物、手腕を識るの久しきにも由るが、陸奥が後藤象二郎と關係深く、土佐派の背景を有するにも由ることが大きかつた。陸奥は人も知る如く紀州の藩士であつたが、父宗廣の廢謫から脱藩し、坂本龍馬の感化

相照し、陸奥の入獄中も常にその庇護者であつた。陸奥の入閣は第一次山縣內閣の時に農商務大臣となつたのが初めであるが、その推薦者は無論伊藤と後藤とである。山縣は米國から、招命に接して歸朝した陸奥の入閣を拒まうとさへしたものである。第二次伊藤內閣に於ける後藤と陸奥とは少くとも土佐派（三菱系）を代表するものであつたといへよう。第二次伊藤內閣が倒れて明治二十九年九月松隈內閣が成り、彌之助の政治的理想はまだ實現されなかつたにしても松隈內閣の三菱內閣たる色彩は最早疑ふことの出來ぬほどに濃厚なものとなつて居た。松隈內閣の成立するまでには後藤象二郎がその病軀を推して大隈と松方公の間に働いた所が多く、後藤は當然入閣して重要の地位を占むべきであつたが、內閣の成立した時にはモウ病氣で起つことが出來なかつた。後藤が死んで間もなく、陸奥も逝き、政界は轉た落莫を加へたが、後藤の後繼者には大石があり、犬養があり、彌之助の爲に畫策して藩閥聯立の大理想を實現すべき役者には決して事を缺かなかつた。明治三十一年一月に成立した第三次伊藤內閣は初めに大隈を入閣させようとし、大隈には十分色氣があつたけれども、事に妨げられて果さず、次に板垣と提携しようとした。此時板垣を說いたものは伊東巳代治であり、板垣は承諾して旣に入閣するばかりとなつたが、三井の大番頭である井上の反對で事が破れ、伊東巳代治はその爲に內閣を去つた。但し自由黨はより、進步黨（改進黨の後身）とても山縣一派の長閥をこそ敵とす

藤に對しては色氣タップリである。平岡浩太郎あたりが楔子となつて此兩黨を結合させ憲政黨を組織したが、伊藤さへ承知であれば迎へて黨首とする積りであつた。伊藤は憲政黨の總裁を承諾する代りに内閣を明渡して、我國最初の政黨内閣を出現させた。

『五』 西園寺公の總理大臣豫習

憲政黨内閣が僅々四ケ月ほどの命脈で倒れると、其跡には當然の附書で第二次山縣内閣が成立した。伊藤は此間に決する所あり明治三十三年八月、西園寺公以下の直參に、憲政黨の領袖（是より先進步系は分裂して憲政本黨と稱す）を加へて骨子とし、立憲政友會を組織してその總裁に任じた。政友會に創立委員として名を列した人は西園寺公を筆頭として、末松謙澄、渡邊國武、金子堅太郎、渡邊洪基、都築馨六、長谷場純孝、本多政以、星亨、尾崎行雄、松田正久、鶴原定吉、林有造等で、原敬は委員には選ばれて居なかつたが、委員と同格に取扱はれ、常に委員會に出席して居た。

政友會の組織が成ると、山縣は出し拔けにその内閣を投げだし、伊藤を後繼者として奏薦した爲に、第四次伊藤内閣は新に三菱の女婿である加藤高明を外務大臣として末松を内務に、渡邊を大藏に、金子を司法に、松田を文部に、林（有造）を農商務に、星を遞信に置き、桂の陸軍、山本の海軍を元の儘として十月十九日其成立を告げた。

然るに此内閣は元來山縣の不埒行によつて幾分早產を余儀なくされた感があり、閣僚の中でも、大藏大臣渡邊國武は始めから伊藤の[illegible]ならざるものがあり、[illegible]閣議に[illegible]する猛烈な攻撃があり、此增税案は政友會の支持によつて難なく下院を通過したが、上院に蟠屈した山縣派の策士は盛に飛躍して反對の結束を固くし、頑としてその通過を拒んだので、政府は二回まで議會の停會を奏請し、三月十二日、詔勅の降下によりて纔にその難關を切拔けることが出來たが、その爲に被つた創痍は淺からず、議會後三十四年度の豫算編成となつて、渡邊が他の閣僚の立場を無視した極端な緊縮案を閣議に持出して協調を破つた爲に破綻が大きくなり、五月二日には伊藤が先づ辭表を呈出し、他の閣員も直に之に從はうとした。然るに渡邊一人は頑として辭表を提出しなかつたので、五月十日に至り、主上から御沙汰があり、渡邊も始めて辭表を捧呈したやうな始末であつた。

五月二日に伊藤が闕下に伏して辭表を捧呈すると同時に西園寺公は樞密院議長の儀、内閣總理大臣臨時代理を命ぜられ、五月十日に至つて閣員の辭表が出揃ふと、更めて臨時内閣總理大臣兼任を命ぜられ、五月十四日には臨時に大藏大臣の兼任をも命ぜられた。此前後二回の首相代理で、伊藤の後繼者たる西園寺公の地位が全く決定した。明治三十四年六月二日には第一次桂内閣が成立したので、公も同日首相並に藏相の兼任を解かれ、樞密院議長專任となつた。（公が[illegible]をその駿河臺の邸宅の長屋に置いたのは此年の暮であつた。）第一次桂内閣の成立した時、公は既に五十三歳であつた。此時から翁の生涯は自然に、一轉換して、愈伊藤の後繼者となり、大政黨政友會の大舞臺に乘出されることとなるのであるが、既に與へられた紙數も盡きたから、公の[illegible]に就ては[illegible]記述する事とする。

畫房斷感

川端龍子

繪のことでの諸作に就いては、自分は可なりに臆りとしてゐる方なのだが、その以外のことに成ると餘り首を横に振ることの出來ない性分なので、つい引受けては後で悔むといふ順序を繰返してゐる譯だ。この原稿にした處で斷れば宜いものを――それからこの文筆に無縁の自分に、雜誌改造ともあらうものが何故に持つてきたかといふ位のことも分らない事も無い譯でありながら、いつもの調子で又うつかりと引受けさしてしまつて、偖それからのこの半月許りの間は、何を書かうの問題が頭を去來して日々の畫心に禍ひするや夥しい。とう〱この間に琵琶仙峽の陰岩の頂上でも考へさせられ、裏富士の五湖の水色、樹海の紅葉を眺めても考へさせられたが、結局それから歸つての後今日までも祟つてゐた譯だ。

何か抱懷してゐる藝術に關する論議をとでもといふ註文であつたが、その方のことも多少の持合はせは無いではないが、然しそれは不充分ながらも自分の畫業の上では發表してゐることであつて、それ以上の名論卓説は遺憾ながら他人の所説に聽聞したい側である。處で東洋畫の傳統は上下千年、幾多の巨匠に依つて既にその畫業畫論の上に說かれ盡されてゐるところ。これ以上は余程の天才が獨自の畫境を拓いての上の教示たればのこと、さうで無い限りは所詮は說かんが爲めの說くところ、要するに枝葉の問題を云々する以上に出るものとは思はれない。以て已みなんかたである――ところが又日本畫家にとつての宜い逃避所となつてゐるとも云へる處、從つて又今の洋畫の人々に比べて、日本畫の人々の口數の少いことの原因とも成つてゐる譯でもあらうか。

だが新しい珍らしいと云はれても、畫技の方はともすると黴の生へたがるものだが、古い畫論の方はいくら古くとも黴が生へれば、褪色も爲ないし、剝落も無ければ、骨董的な臭もしないで、說かれたまゝに今日の吾々に理解されるのが有難い――と云つてゐながらも、今日吾々は隨分とその教示からの外れた仕事もやつてゐることだ。

然しそこで考へることは、如何に名論とあつてもそれに照合して傑作が出來る譯のものでも無いことで、假りに謝赫の六法論に合致する

やうなものを捕らうとした處で、それこそ宜くいつてソツプ、惡くするとソツプの出殼のやうなものが出來るに違ひないことだ。要するに何んなことをやらうと、やつたその畫業が、やがてに畫論の要點に一致爲るやうにありさへすれば、その藝術の高い所以、又古い畫論も藝術の上に更に生彩がある所以たらうではなからうか。

でこれをもう一歩自惚れると（僕が自惚れるのでは無いし、要するに其の本末を考へれば藝術有つての藝論であることだ。偉大な藝術さへ生まれゝば、論議は後から隨いてくる——と。嘗てこれを逃避所とするのでは無いが、吾々の面目は、半端な論議や所說にするよりも、まづ以て畫業第一義であるといふこと——。

□

大典の翌上東京御發輦の日の夕刊に、その鹵簿の寫眞を見ながらに、それと繪畫の上に考へがめぐる。

まさに昭和畫人の畫材としての好題目がさて誰れに依つて手を染められるか——などと人事のやうに考へずに、先づ自分としては描く氣が有るのか無いのかの問題。だがこの事になると今の自分には自信が無い。この自信が無いは、描いて描けないと云ふ意味では無しに、描くにしても描寫に展開して來る時代の矛盾をどう解決して行かうかの問題が、自分の畫想の上では未だ解き得さうにも無いことに[illegible]

[illegible]古式と現代式との二つの儀禮、和鞍の馬上に衣冠束帶[illegible]裝の儀仗兵。御料車と鳳輦。宮城と丸ビル建築。この二つの様式、[illegible]も嚴としてそれが一つの様式として展開されたこの盛儀を、單なる說明的描寫以上に、自分の畫業にピッタリと、昭和三年十一月六日を織込んで描くことは猶し容易の事では無い。

その容易で無いことを、人に被ける譯でも無いが、大和繪復興の氣運の隆な今日、この方面で誰れかこの畫業を纏める人は無いだらうか。傳統から云へば本來この畑の畫業として意義のあることゝも考へられる事でもある。尤も自分が衣冠束帶の人物に困るといふやうに、軍服の武人や、大禮服の文官や丸ビル建築に避られるに違ひの無いことであるが、この何れを缺いては昭和の世相と何の關連も無いことに成る。そこに現代を描寫するに大なる困難が附隨してゐる譯である。

だが然しこれの矛盾は何時の時代にでも起きてゐることで、今でこそ古い風俗畫を見て油然と統一されたかのやうに、さても和風の如何にも繪に成る世俗と、昔を禮讃する氣持に成るものゝ、矢張り時代時代の遊ひが隨所にあつたに違ひの無いこと、矢張り今とも五十步百步の類で、そこに繪に成りかれる對象が必ず有つたことと思はれる。近代の例にしても彼の浮世繪の内に現はれてくる和服人の服飾など、その當時にあつては實に臨機と異様であつたに相違の無いことだ。[illegible]

[illegible]

絵には成りたい位、あの時代の婦人の服装は畫面に描いたまゝで絵に成るなど〻いふ考へでゐては、いつまで經つても昭和の容貌が吹き込めない譯だ。

古い繪卷などに見ても、その描寫の素張らしいのは別として、その畫裡に生々として血脈の響きの聞かれることは。その時代或はそれを距ることの遠くもない時代に即しての根據に依つての制作であるといふことが、即ちその結果と成つて表現されてゐるところ。從つて登場人物や四周の物象は、無論それの現代に於ての印象であることが、後代へも深い意義を殘してゐる所以。

この意味では今の銀座の夜の行進曲でもを、その儘そつくり繪卷に描いて殘いて見れても、昭和風俗としては後代に意義のあること――に違ひの無いことだが、嫁入間近の娘を持つ親の一人としての自分、やがて又調子外れの今のモダーンな服飾に對しては、些か二の足を踏む畫人の一人としての自分――この點からは兎てもこれを自分の畫題の上に殘さうなどの考へはたじ〳〵たるもの。或は既にそれだけでも昭和の新風潮において、けぼりを喰つてゐるのかも分らない。

解釋こそ異ふものゝ、何時の時代でも所謂今日のモダーンなるものが有つたに違ひない。衣冠をし、束帶をするにしても其の間に必ずや時代の氣分が溢ふれてゐたもの、それを又敏感な畫人の眼は捉へずには措くまいもの。やがて月卿雲客のそのモダーン振りが畫上に躍動してゐる所以である。

そこらから考へると――同時に當時の寫眞などに見ても、古代に於けるとは云ふものゝ今日にしての平素には用の無い衣冠束帶の装束は正直の虚飾り描寫然をそゝつて見れるものでも無い。寧ろ正装の禮服の方が流行にぴたりと板に付いて、唐人らしさのモダーン振りもその間に見られることだ。

併今の服飾にしてもこの矛盾の上に、拜觀者の千差萬別、何の意義も無い丸ビル建築にしてもこれ又厳然とある昭和の市街觀とあるからは、これ又畫中に於ての一役目とある次第だから、兎に角にこの大儀を繪に纏めるだけでも容易なことでは無い。

尤も描いて不調和な部分は霞で胡麻かす手段もある。だがこの手段がともすると畫面構成の上での避難所とも成つてゐることであつて、始めから其の積りでかゝられては、益々時代の空氣が稀薄になる所以。意味が異ふが今の大和繪に新傾向を圖つてゐる人々も、兎角に人物を避けて風景に即してゐることも物足りないことだ。要するに其れを避けるといふことは、必然的で無い以上には、其の目的を骨抜きにするものだ。

◇

帝展の陳列換の後の作品はまだ見てゐないが、後期を出いたものは同じ入選ながらに隨分と分の惡いことだ。來年は美術館の増築が利用されるとしても、壁面の増すよりも先きに、畫人の卵の方がより多く

生まれる昨今の時勢としては、幾年後にはまたこの狀態が繰返へされるものと豫想が出來る。

そこで一部の批難は畫面を無意味に擴げて云々。それを云ひかへると會場藝術なる言葉がそれ等の作品の上に被せられてくる。

處で自分にはこの會場藝術なる言葉ほど厭なものは無い。誰れが言ひ出した新語かは知らないが、無論その一面に侮蔑の意を含まれてゐることは分り切つた事であるが、然らば又その反語として床間藝術なる文字を使ふとしたら、之れは上乘の藝術を指すかと云ふとなると、これも又必ずしもさうとは成らない事に想はれる。

何れにしても然うした言葉——惡意の方での然うした文字は、素人ならば兎に角として、作家の口に爲すべき言葉としては、完全にその意を果たし得るものとは思はれない。

假りに會場藝術なる言葉を是認するとしてこの方の傑たるものは、矢張り藝術の上に於いて別個にある筈のものでも無い。昔は會場なるものが無かつたにしても、殿堂藝術はあつた。唱へる處の宗教は別としても、會場とは或る程度までは同意である。野外のことは兎に角として、法隆寺の壁畫に就いて考ふるが宜い。或は又京都の古刹の障壁畫——これ皆殿堂藝術——今日の會場藝術である。無論これには批難の意味の殿堂藝術、或は會場藝術の[illegible]

[illegible]

永德、山樂、光琳にしてからがその方の雄たるもの、これ等の人々に殿堂藝術家或は會場藝術家なる言葉を冠するも、必ずや歡んで受けるだらう。

既に藝術といふ以上、これに侮意の會場の文字を冠するとしても、これ又必然にそこに一種の藝術の存在を意味すること。これを以てして藝業批難の文字として使用してゐること、これ程の矛盾も鳥渡珍らしい。無論徒な大畫面や不純な動機での畫面を批難する言葉には當らない。

嘗て雅邦先生の言葉に、屏風は四十代にうんと描いて置かなければ——とあつたさうだが、その修業がある處から晩年にしても彼の龍虎の大作もある所以である。無論雅邦先生の時代には會場藝術なる言葉は無かつた事と思ふが、其の意に於ては合致するものがあると思はれる。要するに指環に成らないが、屏環に何時でも指環に直し得られるのである。會場藝術を自分の目的とするも爲ないも、修業時代は出來るだけの仕事が必要である。徒らな大畫面を排斥する事もそれは宜からう。その結果の意想に作者自らが陥ることであつて、侮意の文字に恐れを成して、畫面的に出ることは畫家の上では危いことである。

[illegible]

柁樓底歌

釋迢空

さかりつゝ 晝となり來ぬ。飯にはむ敦賀のすしの　とればくづるゝ

煤まぜに すぐ風とほる汽車のまど。寝つゝ思へば、遠のきにけり

さかり來て、いよく\ さびしとぞ思ふ。能登のみ崎のおほ海の色

夏海の荒れぐせなほる晝の空。われのあゆみは、音ひゞくなり

ことしも來て、この家の前場に向ひ居り。あるじのやまひ　こぞのまゝなる（一の宮）

聲ふえて鳴くなる蟬か。わかれ行く屋敷林は、杣あかりつゝ

いとまつげていなむと思ふ。晝ふけて あるじの臥處は、ひそまりて居り

朝の飯　湯氣立ちてゐるのどけさを　人とむかひ居　言へばさびしさ

日ならべて、旅のくるしさ。汗ぬぐふ　われの心は、泣かむとするも

たぶの杜　木群ことく\ 空に向き、青雲は、今日も雨なかりけり



月

高濱虛子

古里の月の港をよぎるのみ

月遅く出でたる山のたゝずまひ

大いなる月の暈あり隅田川

川中にもやひて一つ月見船

せはしなく橋行く人や今日の月

苫の上の船頭月に棹さしぬ

川船の舳揃へて月を待つ

出る月に向つて橋をわたりけり

家近く汐滿ちくれど無月かな

枝豆をうでゝ無月の女房かな

枝豆を食へば雨月の情あり

濃き霧にうつり重なる月二つ

子を負ふて妻と歸るや月の道

大典奉祝

新村出

はらはらと氣をもんだ後の喜びの情はまた一しほである。十一月七日の午後二時鳳輦の着御を待ち、俟るまでの緊張は、私ばかりではなく、何十萬人の心も同じであつたに違ひない。前夜の深更から降り始めた小雨は、當日の朝までには止みきらなかつた。六日の夕がたから詰めかけて烏丸の大路の兩わきに土下坐して一夜半日を二十時間のあひだすわりつゞければならない民衆は、ほんとにいたはしい。それも老幼男女おしなべてのことである。私の老母の七十八歳になるのも、さすがに徹宵の野天でこそなかつたけれども、やはり夕がたから烏丸蛸薬師の西がはのS商店に泊めてもらつて、はや曉まへの三時ごろから店頭にすわらせられたさうである。同僚の一教授の家の女中も、模様の一張羅を着飾つて深更から街頭にすわりこみ、七日の夕がた歸つて來て、着物の濡れたり汚れたりしたのにも全く無頓着で、龍顔を拜し得た嬉しさを聲高々と語つてゐたといふ。こんな話は決して珍しくも何ともない、當日在りふれた例に違ひないであらう。

私が家を出たのは午前十一時半であつた。氣短かな私は十一時に出かけると主張したのであつたが、悠長な家内は、零時半までに驛に到着なさるのなら十二時でも大丈夫でせうと、こんな場合にも至極のんきなものである。娘は娘で、學校で習つた修身そのまゝで、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、とでも思つたか、父母の間に立つて、そいぢや父さん十一時半になさいなと折衷案を提出し、自分で自動車屋に電話をかけて、半時間延期を通牒することとなつた。同乘してゆく約束のF教授にもその旨を報告ずみで私は大禮服の着用にかゝる。十三年まへの大正天皇御即位のをりと、その後一二回ほど着た覺えもあつて、多少自信はあつたものの、二三日前、大學の食堂で、同僚のK君とH君とから、大禮服の帽子は、飾りが右へゆくのか左へゆくのかと問はれて、なに右へゆくのさ、まあ俺

君のかぶつてゐる山折帽を見たとき、飾りが右へついてゐるではないかと、何でも頰搾法でかたづけてしまはうとした。K君は僕の大禮服の帽子の飾りは左にあるやうだといひ、H君は自分のは確かに右にあると言ひはる。私は例の右左尊卑論などをかつぎ出して、問題を考證にそらしてしまつた。現在の問題を過去に轉じて收まつてゐた私は、七日の午前十一時十五分すぎ、大禮服を麗々と着用めされて、いざ帽子を被るとなると、やつぱり飾りが右に附いてゐる。これはしまつたと少々てれたが、そんなことは敢にはあらはさず至つて落着拂ひ、この日は自動車が玄關先や門前に横附けにならぬ身じめさを、日頃よりも倚一層しみじみと味はひながら、ともかくも女房子供から、勢よく何とか言はれて出かけた。東京の先輩のS老博士は、本郷森川町一番地の宮裏の舊居の門前が、やつと車一臺くらゐしか通らず、老博士百歳の後や勅使が自動車でおん入りのをりに失禮があつては恐入るとかいつて、暗を戀々とした大和村の文化區域に移されたと承はつたが、かういふ用意周到な先輩も世間にはあるのだ。それはさておいて、[illegible]はいつも我が家の門前に自動車のつきかねるについては、枕草子にも出て來、[illegible]がいた所の[illegible]公の故事が思ひ出さる[illegible]に[illegible]つて[illegible]身に思ひ[illegible]られけると[illegible]

車隊は何といふ名かは知らないが、[illegible]折々乘用する[illegible]れである。たゞヘッドに小さな國旗が交叉してあるのと、[illegible]々ンの御服の樣な服をして、運轉手の右方には席を占めて私に陪乘して來たのと、これだけが平素との違である。とにもかくにも、私の自動車は威風堂々と、我が學高の鞍馬口を通過して右へ烏丸の大路に曲つて眞ツしぐらに南下しはじめた。この邊の烏丸通りは却て平素よりも人通りもさびしく、電車の乘客も最早すくなくなつて、例年の元旦のやうな沈靜と靜粛とが支配してゐる。國旗のひらめきが、わづかに今日の行幸を表現してゐるにすぎず閑寂な氣分がみなぎつてゐる。私の車が京都工藝學校の前にさしかゝると、車の輪が電車のレールに觸れて爆發的な音を出した。言ふまでもなくパンクである。乘主は泰然自若として居たが、運轉手らは、すぐさま下りて修繕に着手し、タイヤに活を入れはじめた。監督者は、どうもすみまへんを連呼した。私は、なアに時間はまだたつぷりあるから大丈夫だよ、と落附い[illegible]せは見せたが、心中すこし不安にならざるを得なかつた。これから[illegible]町へはひつてP君が乘つて、それから先き烏丸をデウッと七條まで通はつてゆけるかどうか覺束ないから、人込みのする狹い通りを縫つていつて、[illegible]指定の[illegible]に[illegible]自動車で[illegible]

縮の晴れがましい大道の眞ン中で起らないで、幸ひこの人げの少い場處で發したればこそ、ほんの少しばかりの人だかり位で濟んだのだ。これはせめてもの仕合せである。それでも後から後からと正裝した人々の乘つた自動車が馳けぬけつゝ、路傍にたゝずんでタイヤの修繕をしてゐる自動車と憐むべき乘客とを尻目にかけて疾驅し去るのを見送つて、私は氣が氣でなかつた。周圍の人だかりの中には、大學圖書館のKもゐて、先生お困りですな、どうかなるでせうか、などと心配してくれる。なにまだ時間の餘裕はありますがね、と落附さぶりを示しつゝ、だから時間の餘裕はゆつたり取つておくべきものさと、腹のうちで稍得意げな態度で、家の方を睥睨したいやうな氣分でもあつた。

十五分も經つたかと思ふころ、目出たく修繕がとゝのつて車はひた走りに烏丸を走つて今出川から室町へとかゝつて、F邸の前に着くと、待つてたとばかりに、F君が乘つた。實は今途中でこれこれだと話してゐるうちに、車は同じ通りを一條か中立賣あたりまで走つて、いざ室町を左に回轉して再び烏丸へと思ふ頃、F君手を拍つて、これはしまつた、待つてくれ〳〵、入場劵を忘れて來た、もう一ぺん還つてくれといふ。F大人けふは奉拜のため早朝から一大隊を引率して烏丸五條の某大家の店頭にお出向きでお留守とある。御主人の着附けは臨時囑託の御衣紋に命ぜられて首尾よく出來上り、あとは何人かの侍女に御一任であつたので、天晴れ御ン大將、肝心の入場劵をおン忘れとある。かういふ御難がわれら兩人の上にふりかゝつたにはふりかゝつたが、兩人とも漸く危急を脱して再び今出川から烏丸通りを御苑の西に沿うて疾走するの榮を得た。今出川以南の烏丸は、並々の車や人をとほさぬところを、こゝあたりはまだ警備の薄い地帶といはゞいへ、それでも二三間四五間に一人くらゐの割で警官が左にも右にも見守りつゝあるらしかつた中を、私らの車はさきほど來の時間の空費をいくらかづゝ取返へすべく疾走したが、下立賣あたりから下は通過を許されず、再び横へそれ衖にまがつて室町をさがり、二條から烏丸へ辛うじて拔け得て、ほんとにほつと一息ついたのであつた。

烏丸の中央には、白砂が幅三間ほどにわたつて南北に敷きつめてある。左右の人道といはず店頭といはず、人で埋まりきつてしまひ、それが寂として一語を發しないやうに窺はれる。職務の執行に誠實を失はぬらしい所の警官たちの黒色、兵卒たちのカーキー色、幸ひ雨は止んだがどんよりとした日和で日の光はみえない。あまりに陰鬱な氣分がたゞよひはしないかと私かに感ぜざるを得なかつた。それも一つには天候の加減であつたであらう。日本語には、お天氣のせゐ、時候のかげん、重寶なことばがある。然しこの場合はほんとに天氣のせゐであ

り後の宮様方、あれは秩父さま、あれは何様と、眼のよく利く人々は見上げ得た傍に私語してゐたが、私は先程の感激で眼がくらんでしまつたか、一々これをお見わけ申すことが出來なかつたのは遺憾でもあつた。けれども私はあれだけで充分ありがたいと思つた。ぼうッとしてゐる間に鹵簿は御通過になつてしまつて、印象された感銘がいつまでもつゞく。萬歳が叫びたい、萬歳が叫びたい。十日の午後三時の即位式の際の萬歳のまへに、先づ御安着の萬歳が叫びたい。十日の午後三時、紫宸殿の大前に於て、十三年前の如く萬歳を叫ぶことを得ない今度は、せめてこの場合心ゆくばかりの萬歳を叫ばさせて戴きたくてたまらなかつた。色々の理由あるひは儀禮の上から、かゝる場合の臣民の歓呼の聲は禁止されてゐるとはいへ、私は一様に萬歳を叫びたかつた。多くの人々も亦同感であつたらう。萬歳の聲が、あの刹那に喉まで出かゝつたのを押へた情は、何人も同じことであつた筈である。

十一月七日は如何なる日か、知る人ぞ知るである。時節また私どもの喜にするに堪へない所である。この時に方つて、われらの京都は、われらの天皇陛下を[illegible]あらせられずしてお迎へ申すことが出來た。昨夜來の小雨は一時晴れて、雨も今しも降下せんとして止んだ。私たちの前に一齣の雨下もなくして、われらの天皇陛下は御機嫌うるはしく、御[illegible]

だ、大丈夫だ、さあ何方でも來て見よ、いかなる魔の字でも近づいて見ろ、いかなる悪魔でもよいから北方よりも來い西方よりも來い。天の神々、地の民草、大丈夫だ大丈夫だ。かやうに狂喜するばかりに私は氣がはづんだのであつた。私のみか、口にこそ出さね、心ある誰しもかういふ歓喜の情を抱かないものはなかつたことと思ふ。

はらはらと氣をもんだ後の喜悦は更に一層切なものである。まづ雨も降らずに濟んだ。「實に天佑だね」と誰しもいつた。私たちが驛前の東の奉迎所から出て、今しがた通御のあつたその砂地を横ぎつて、さくさくと心地よく踏みしめ踏みしめ、場外へ出て、F君と共にほつと息をつぎ、二行長く列を成した所の自動車群のうちに、私たちの乘るのを探しあてゝ、がつくりと重いからだをその中に推込んだときは、微雨がふりだして來た。雨は斜に輕く自動車の硝子をかすめた。「まあ好かつたね、雲行からすると、雨はこちらの驛の方から御所の方へ段々及ぶらしいから、大概あちらは大丈夫だね」と私はからF君に言つた。平素でも天氣を気にする性分の自分は、何處までもこれを苦に病むのであつた。

[illegible]い[illegible]装に疲れをおぼえ始めた私は、[illegible]に身を[illegible]つかゝつて[illegible]

ゐたのであつたが、こんな結果が肩に來たのであつた。F君と話しあひながら、自動車の發するのを待つうちに雨は少しづゝ加はつて來た。西洞院通の四條までは自動車の堵列が一進一止で隨分長くかゝつたが、それから四條を東へ、河原町を北へ、今出川を西へ、と大迂回して歸路に就いた時分は、降雨がかなりになつて、家々に還る人々の行き惱む姿はみじめに見えた。F君は室町の曲り角で北へ歸つてくる學生の多數にさゝへられて、そこで禮裝のまゝ降車せねばならなかつた。氣の毒であつた。

私は家の玄關を入るや否や、出迎へた妻から「お目出たうございました」と言はれたが、肩と頭とが痛くてたまらず、すぐさま大禮服をぬがせてもらひ「お腹がおすきでしたらう」といふ聲にも耳を假さず、いきなり次男を呼びたてた。自分の書齋で晏然と樂譜を按じてゐた次男は、のつそりと出て來て、何ですといふ。「肩をたゝくなり押すなりしてくれ、早く早く」と私がいふと、だんまりでそろそろやり始める。私はひとり双肩に重しとした禮服を脱いだ儘のシャツ姿で、肩をたゝかせ推させして一浚き浚いだが、まだ頭がしんしんと痛い。歸つたのが四時半、これから一時間休むと、東京から來た人々の歡迎のために、六時までには大學へゆかなくてはならない。大宮人ならぬ宮仕への辛さもこの邊であらうと、肩の凝りも頭の痛さも胸の惡るさも、けふの目出度さに一切我慢して出かけた。狩織衣の盛裝に、よくぞ日本に生れけると難有みを感じながら再び元の車に身を投じて出かけた。眼をつぶつてゐたから、何處の小路か知らなかつたけれど、自動車の通過の異常に頻々たるを見守つて興じてゐたらしい一群の小兒が、私の乘つてゐるやつを指さしてか、あれは閣タクのだよと叫んだ。京童の此の一評語こそ下して妙となさゞるを得ない。私は獨り微苦笑した。

八日も九日も雨がちであつて容は霽れさうにもない。私は天を仰いで十日の天氣を氣にしたことは相變らずであつた。暖氣がまだ去らずにゐる。われらの愁眉は容易にひらけない。所が天なるかな、九日の夕がたから陽氣が直つて來て、雲は薄らいでくる、星も隱見する、私をして明朝は必ず晴れるにちがひないことを豫感せしめた。

十日の朝は果して晴天であつた。麗らかな小春日向とは言へないが、微風に肌がひやひやする位の稍寒の上天氣。六時半に起きて庭を見ると、常磐木の緑も新鮮味が復活したかのやうで、薄らかな朝日を浴びてをる。まがきをまばらにまとふサネカヅラの色の濃さ。わかい山茶花の花が四五ひら雨じめりの土に今朝がた散つたらしいのも見すごしがたい。書齋の窓にからんでゐるツタがほんのりまだらに紅葉したのも可愛らしい。我が家の小さな庭の草木もいつになく今朝はなつ

かしく見える。恐い所から[illegible]ところ。[illegible]一切が骨にしみ、私のめいりかける調子を刺戟する。日本晴だ、日本晴だ。これでこそ天子様の御践祚だ。かうなくてはならぬ筈だ。から私は朝ツぱらから感激したのであつた。

恩師の恩師T先生は、七時半に綱ツぴきの人力車で參入を急がれていつた。綱は紅白によりわけた綱である。京都の常の曳子の顔も[illegible]の凱旋姿で勇ましげだ。國旗は出したかと私がどなる。もう疾うに出ましたよと妻が應へる。雲はをりをり日をかすめて一時暗くなつては又明るくなる。曇ると私の心も暗くなり、晴れると私の心も明るくなる。或時は時雨がぱらぱらと來る。ナアに時雨だアと安心する。

出でましの春興殿にしくれかな

と口吟みながら、今ごろは天皇陛下が純白なすがすがしい帛の御袍で春興殿の賢所の大前に出御ではないか、今度はまた皇后陛下が同じやうなおん裝ひで其の後に御參拜ではなからうか、などと私は御幼年の御儀の情景を回憶した。御幼年にはなかつた所の皇后陛下のおんいでましを感激申上げつゝ、それと同時に御幼年には、今上陛下が未だ成年にお達しにならず、攝政の後におかせられて、御幼色に見上げた所の、御姿の[illegible]を拜して、[illegible]りになつて、[illegible]今度の御儀式と對照申上げて、私は何ともかとも言へぬ歡喜の情にたるのである。

もう十二時だ、そらもう一時だ。私は禮裝して宮内省出張所に參賀し、ひきつゞいて大學の祝賀場に急がなければならない。雲はあるが、雨は大丈夫だ、傘も要らない、おいてゆけ。雲は瑞雲だ、雨は喜雲だ。濡れるなら濡れろ。かくの如くして私は意氣揚々と他から見えたにちがひない所の感激的態度を以て、物古りて平和な我家の門を、母や妻に送られて、例の自動車に乗せて烏丸大路を南走していつた。目ざすのは第一に參賀の場所だ。

然し幕府の衰亡と共に、風俗の頽落、民衆の頽廢し行くことに目を瞑いてゐたのでは無いから「六諭衍義」などを印行せしめたのであるが、上から爲ることは政府はつらだけに受けらるゝものであるから、下「六諭衍義」の左にも、近年板行仰付られた六諭衍義に長下嘗然とあるが、六だと記された通り、民間に添い[illegible]は無かったのらしい。教訓類の上から下さるゝものは、其の教示なり教訓なりを下す者と下さるる者との間の關係が緊密な場合には功もあるが、間隔になっては功も少い、[illegible]

[illegible]

質上からか、しきりと上へ諂らはず、御代を謳歌するやうな態度に出て、士常以下に向つて梅巖の本旨は少し傍へ下らせて、單に俗的教訓をするに傾いてゐる。今こゝで心學一派の後々までを概談して仕舞はう。堵庵の「目なし草」は一休の「目なしの草紙」と世に傳ふるものを訂したので、「目なし」の事は梅巖と了雲との問答からして、心學の方では關係があるから此書も出たのであらう。心學の方の本體に就いての談であるが、さして深いものとも云へぬ。同人の「ありべかゝり」二巻は、そろそろ小説がゝつてゐる。金持の醜夫、美男の貧者、二者の何れを婿にするや、富者を好まば右の肩をぬげ、美男を好まば左の肩をぬげ、と云はれたる娘の、左右の肩をぬぎ、晝は富める方へ行き、夜は美男の方へ行かん、と云へる古き談などを擧げてゐるが、此談が明治から今日までも時々蒸返されるから面白く、如何に心學者が人情の微を捉へて話材にしてゐたかゞ思はれる。大阪へ下りし時、水を撒いて商ふ人あり、同伴者之を見て、嗚呼繁華の津なり、渡世の易き地なり、水まで錢になるといふ。今一人の同伴者、渡世の仕にくき地なり、水にも錢を出せば、といふ。」かういふ一寸した處に面白味を見出してゐるところが長所であるが、堵庵はまだ[illegible]よりは滑稽が少いのは、[illegible]に近いからであらう。「[illegible]」二巻に至つては、男女兒童[illegible]とし、[illegible]もこゝら

は弊少く益有り、梅巖以來の本旨を存してゐるものである。[illegible]「[illegible]訓」「[illegible]とり」許まで好書である。堵庵「[illegible]約」は心學組合の約であり、濫りにならぬやうにしたものである。「我津衛」三巻は金錢の上にかゝる談が多い。梅巖の「齊家論」に儉約を主張してゐるから、心學者流の儉を伺ふはもつともだが、此書の如きは少し甚だしく、如何にもケチ臭くて、人を手堅くするかは知らぬが、同時に矮小にし萎縮せしむる氣味が多い。周防由房と堵庵の合著「身體柱立」二巻も同様で、算數的に儉約の利を說いてゐる、ケチな書である。「爲學玉箒」六巻、例の如く問答體で、心學一般にわたり、聖教賢語を引いて、所謂お道歌交りに說法してゐるが、有難いやらで捉へどころが明らかでない。その明らかで無いところを社中に入りて修行して明らむるのが心學であるから致方は無いが、此六巻は堵庵を覗ふべきもので、眞面目である。然し眞面目なだけに興は少い。堵庵が跋をしてゐて、虚白齋の名で出てゐる「寶卜先生糠俵」前後篇三巻、寶卜先生の言に假りて占を乞ふ者にそれぞれの教を與へる其中に教訓の明なものもあり、小理屈なのもある、蛙、田螺などに對しての言もあり、守宮、蚯蚓、蚊などに對する說、獅子の寓言を[illegible]作意は少い、獅子を弾き[illegible]から高くし、得る所ある如くにし、其論は[illegible]に[illegible]、[illegible]
[illegible]に[illegible]は[illegible]れたもの[illegible]二

もない、たゞ道は目の前に在りといふに止まる。「雨やどり」二巻 富 [illegible]
訓的で、蛤と蜆、白鷺と烏との問答の類である。すべて處世訓の諺を指南せる人、好き家へ [illegible]
著、小說寓言の色は淺いし、時々おもしろい處もあるが、印象人をして [illegible]
て手を拍たしむるところは少い。といふのもまだ心學の臭を去ること遠くなくて、眞面目が多いからであらう。 [illegible]

慈音尼の「道得問答」四巻も江州吉田村生れの尼で、慈雲門に入つ [illegible] たものゝ撰だが、「都鄙問答」等について敷衍せるもので、眞面目な落 [illegible] 話笑話の風は少い。が、脇坂義堂が出づるに及んで、塔庵の者にも時 [illegible] 々見ゆる文學的分子は大に増加して、其著「[illegible]傳授」一巻、「御代の [illegible] 榮澤」五巻、「長命傳授」二巻、「福相傳授」一巻、「五用心[illegible]」二巻、 [illegible] 「世の繁榮」五巻「命のなる木傳授」一巻、「安業傳授」二巻、「開運出 [illegible] 世傳授」二巻、「和合長久傳授」一巻は、[illegible]

[illegible] も、[illegible] ものに小說、寓話、[illegible] 々の分子を [illegible]
[illegible] のであらう [illegible]、教訓を [illegible] にして [illegible]
か、もとより [illegible] 訓 [illegible] の [illegible] は [illegible]
何れも [illegible] といふもの [illegible] あり、[illegible]
古 [illegible] い、[illegible] から、[illegible] [illegible]

出してゐる。御高札に就いて説いたものであるが、道二は機屋の龜屋久兵衛といふもので、堵庵の弟子である。「春は花咲き、秋は實のり、雀はチウ／＼、烏はカア／＼」といふ心學の常套談は此人から愈々廣まつて、寛政六年「道二翁道話」十二卷が出でて、心學も益々悟りくさいものとなり、全篇「おれが／＼」を捨てさせ、心性の端的を悟らしむるを力め、大に禪宗めきたる方へ傾き、妙法を言ひ、一貫を言ひ、チウ／＼カア／＼當相これなりといふやうなことを言つてゐる。で、此書には堵庵の養子の上河正揚が序を書いてゐるが、其正揚は寛政五年に「聖賢證語國字解」をあらはし、梅巖堵庵の學が程朱に本づき性理に發してゐることを記し、石田手島の學が偶に出でて、釋氏老莊に出でざるを明かしてゐる。が、性理の學からしてが必ずしも純粹に孔子の學ともし難い疑があるのであり、まして了雲の啓發によつた心學が佛老の氣あるは梅巖堵庵の著からして現はれることであるから如何ともし難い。道二の後に布施松翁があつて、これも堵庵門人であるが、其の「松翁道話」十五卷は中々好く出來てゐる。第一編あたり、一條の談を綴つては、[illegible]／＼「御工夫」／＼と結んで、人をして自ら[illegible]させんとする行き方は[illegible]である。[illegible]所[illegible]

[illegible]

談と俗諭とを織交せて諄々と説くところ、人を導くに足るものがあるのは感服で、鳩翁と共に心學の雙璧とすべきである。鳩翁は柴田[illegible]といひ、布施伊右衛門よりは後の人であるが、京都の人で、心學者薩埵德軒に學んだとある。中年盲人になつたが心眼[illegible]といふのであらう、「鳩翁道話」十八卷は其の講話が筆記されて世に出たものである。もとより道話の常であるから、有觸れた笑話や又は聞込んだ話を織交せて面白く説いてあるのだが、たとへ新鮮奇拔のところは少いにせよ、世俗の當時の讀みものとしては[illegible]少なくて[illegible]有るところの價とされたことであらう。附卷第一「はくらん病」の談は德川初期からの談で、天保の頃になつて之を聞くのなぞは有難くもないが、同卷に取入れられてゐる京の蛙と大阪の蛙と天王山で出會つた話は、明治の小學讀本にさへ載せられてゐる位だから、何も古いことを非難するにも當らない。鳩翁松翁道話・[illegible]と並んで心學の[illegible]に[illegible]した人に[illegible]杖があつて、鈍杖の「心學[illegible]の話」八編が天保年間に出てゐる。[illegible]等の書と、同じ行き方、同じ[illegible]で、[illegible]ある。一枚起請文[illegible]に[illegible]

[illegible]

て居て、其中には母が命じた足駄と父の命じた草鞋とを片方づつ穿いたといふ孝子の談や、名妓花扇の指を五人ながら自惚男の所持してゐた談や、永代橋の落ちた時陰徳によつて命の助かつた談や、夫におくれた女が、長かれと思ふ命の短くてといふ歌を詠んだ若話や、隨分聞古した談も多いが、牛溲馬勃敗鼓の皮もさらひ込んで來て、話材とするのを常とする心學の事であるから一向差支は無く、大旨心を正し行を篤くせしむるを期するのであるから、此編も佳撰とせらるゝに不都合はあるまい。以上の人々のほかに、柳泓は文化に「道のこだま」三卷、文政に「心の花實」三卷をあらはしてゐる。心學を唱ふる者の中にも、宜しからぬがあつたと見え、道のこだまには「今の心學多くは如是ならず、徒に己を慎む心は薄く物識顔になり、人に言勝つことを樂とし、針程の見識を棒ほどに振廻し、高慢の心前に十倍し、然も行跡は心學せざる以前と差して變りたる事なし、如是なれば人の厭嫌ふもことわりなるべし」と云つてゐる。流行の反面に心學者の弊ありしことと見るべしである。もつとも梅巖堵庵より行はれ、幕末かけて今日まで心學は存してゐるが、既に寛政頃には心學は黄表紙に取込まれ、同七年の十返舎一九の「心學時計草」などゝいふのに至つては、心學を愚弄するといふのでも無いが、芳原の遊女の拍手が心學を説くといふ趣向で、作者が一九と來てゐるから、不届千萬で、石田も手島も頭へ手を上げさうなことである。「女郎に誠があるから、玉子焼にも四角や三角がおざんすハナ」といふ諺子、「ぬしたちも嘘を買に來なんした事だから思入れ嘘をまけて賣つて上げんした」といふ契約だから敵はない。床の掛軸を示すと、曰く「まことは嘘の皮、嘘は誠の骨、迷ふもよし原、悟るもよし原、傾城のうそもまことも有磯海の濱のまさごの客の數々」などと乙にすましてゐるのは笑はせる。心學大流行の天保十四年の「心學悶會」は誰の作だか、古賀兵藏の序があつて、これは挿畫の中の書入れなど、多く人を愚弄してゐる。心學者の常套談の「關取も親にはまけて見事なり」といふ語があれば、すぐ其下に「すまふまゝにはならぬ世の中」と駄洒落を飛ばし、「團扇の丸きは物に角無き數、扇は涼風を胸にたゝみて心の要をしむる、身は節儉を守りて孝行を力め父母をあをぎ賞むべきの二品なり」といふ下に、「扇に團扇お茶でもあがれと云ふべからず」と冷かし、「孝行のしたい時分に親は無し」とあれば、「孝子のおもむき餘の義にあらず」といひ、「無二膏や萬能膏の奇特より親孝行は何につけても」の歌の下に「一うからにならんす下心」（猥々にならんす下心といふ町の洒落）といひ、「陰徳あれば陽報あり」といへば「縁づくたれば女房有り」と地口體洒落の數を盡してゐる。心學も此に至つて世に茶にされてゐた一面が窺知られる。京傳馬琴あたりも心學を扱はぬでは無いが、大體心學

を恣にせず、却つて心學に相應じてゐる。名高い「雨瀟」なども徹に心學的である。樸談塔庵以來、世俗の教訓書の一作は心學が領してゐるの勢を成したのは、何と云つても偉なことであつた。文化の丹羽氏頼の「鴨武問答」、安永の森之が「鬼は外」、同じ頃の指月が「勸談小話」、天明の脇坂弘道が「やしたひ草」、寛政の同第二篇、寛政の紀興信が「あすも見よ」、文化の大島有隣が「和合談」、同じ頃の「手島堵庵事蹟」「手島和庵事蹟」、大口子容の「心學辞草」、文政の久世廣英が一暖か談」、天保の中村一匡が「心得草」、嘉應の平野橘翁か「心學老行種」等、其他心學と俗訓とを交へたる教訓書類は甚だ少くないが、此中橘翁のは、松翁道話の後に出たゞけ、其調子ではあるが、孝女孝子の教訓談の人を感ぜしむるものがある。要するに心學が行はれた一部分の因由には、古い笑話や小説俚談を其談話の中に織込んで俗耳の悦びを誘つた嫌もあるが、又心學の教訓談から出て、後の笑話家や小説雑譚の材となつたものもあらうし、特に明治の話術家の「枕」とか「前話」とかに其影響を與へてゐる。其の卑近な教話が多少俚俗を薫導したらうことも爭へない。

心學説が最盛であつた。心學説を中心にして、俗を教へたものに、寛延二[illegible]一二巻の如きがある。是れ一冊目中に[illegible]て言くは[illegible]すべし」とか「駄に乗りたらば十分ほどにはよく駄の脈に心を留むべし」とか、「大將棊盤の脚の形はくちなしの實を象のであるから助言をつゝしむべし」とか云ふ類の些細の事を記したのだが、生學問小理窟の者よりは却て勝つてゐるかも知れぬ。此類の書、節用集の頭書めいたものも隨分世に多いが、教訓といふほどでは無い日常心得の雜智を與へるもので、家庭雜書とも云ふべく、此の一ト品は教訓書といふ中の砂礫飛塵である。

寶曆六年の飛雄子の「義理道中獨案内」は人の一生を道中に比擬して、「妹背山、二恩えの木あり、」「乳母がふところ、左の方に乳のみ井あり、髪お木まで三里、袴木まで五里、左にわんぱく堂あり、人形天皇の御宇、藤原の弄胡臣の建立、本尊は手足もげ王ふといへり」などゝ記し、「願替り坂、是より六道の辻、善悪邪正染替沈の訳所へ別路あり」などゝ云つてゐるが、人生の行路を旅行に比し、地理書もどきに喩したものは、我邦では誰の何の書を最初とする歟、此の仕方は隨分行はれたもので、寛政五年の山東京傳の「捨語道中記」の「渡るり坂、十二段に陥りて醉陥く、二の桐三の桐などゝて桐の木數多し、右にかとう(河東)たどのぶの塚あり、枕にしやうてん(聖天)の社あり、ぶんご(豊後)節おひしげり、其前に色々なる駈あり、向の山には[illegible](しるし)の名稱なり、もう一つと下れば[illegible]などゝ記してゐるのもある。[illegible]

[illegible] 前の古画の傑 [illegible]

[illegible] の如きも [illegible]

[illegible] するに [illegible]

[illegible]

でないことをあらはしてゐるもので、狂歌は人も知つた通者、文章は狂歌に揮洒の出來る男で、風來に序をさせてゐるが、又是一個の風來山人で、出處も根性も相應に持つてゐた人だから、文章はすらくと流麗であり、説くところも面白く、少し何處やらに世をそげたり駡倒にしたりしてゐるところもあるが、「下手談義」「差出口」一系のもので、社會描寫、世相批判の意味も相應にあり、中々おもしろい。隱れ話の談など、求林齋の百姓讓の記事に本づいたことなどもあるが、要するに風來山人と鎬を削つて戦ひ轡を並べて馳せるに足りる才氣の文章、それで居て教訓へ落すところの手際、感心なものと稱美してこい。こゝにも大山石尊のことをいへる條、一關八州の民、我もくと參詣し、六月末より上るを初山といひ、盆を盆山と唱へて、其群集夥しき事、あまねく世の人の知れる所なり、或は運を守り[illegible]ひて、信ある人は負くべき事にも勝つと云ひてより、ひよんな事の守り神のやうに覺え、江戸中の鳶の者、諸職人の弟子、魚賣、天窓に血の氣持つたものは、なまくさけんたはなさら殊に大の木太刀かたげて、五箇時雨に富士、行場へ切込んだる[illegible]、[illegible]の聲を[illegible]に[illegible]、[illegible]

りと浴びてからにといふやうな筆つかひ、娘師冊林の下には立たぬ談で、龜山丈人出世の一條、龜山の長話、[illegible]長右衞門たる[illegible]のところなどは、殊に筆も利き氣も働いてゐる。抄出も面倒だから止めるが、書の性質が教訓と云はれるところから多く人に讀まれずにおんだので餘り時にも上らなかつたらしいけれど、跡へは退けぬものである。書中の取替兵衞先生は實際に存在したものであるから、其他の人人も或は少しづゝのモデルがあつて作略を加へ潤飾したものかとも思はれるが、其等の事は今詳しく識れない。此書が出てから、同じ七年に青二齋能樂の「興談浮世袋」五卷が出てゐる。自序に「教訓ではなくて興談浮世袋と名づけしに」と云つてゐるが、流行に教訓と打出すには似合はないと作者も思つたものか、其記するところは全く世相描寫と社會批評とであり、下手談義以來の一系に屬するものである。卷一は學風醫風畫風を云ひ、卷二には、[illegible]の煙火山物に[illegible]家[illegible]女房達の集まつた河内屋で、花火に間のある中、其女中とあた[illegible]で、各々の主人の惡口か噂をする、全く後の三馬の浮世床や浮世風呂の趣向といふものであつて、これも一口[illegible]や一[illegible]細かい[illegible]になつて、[illegible]

[illegible]い、[illegible]しによつて
[illegible]へ入ると云ふのさ、[illegible]それ夕立のした日が
[illegible]、晴天続の[illegible]たとて[illegible]のおかみさま方五
[illegible]とやつ、町人に似合は[illegible]いたり[illegible]、
[illegible]い[illegible]するには[illegible]とも、[illegible]には札[illegible]はか
[illegible]となり、[illegible]の[illegible]を見るやうに[illegible]ひて
[illegible]はよいの、[illegible]は[illegible]の、[illegible]の時
[illegible]ましたのよ、[illegible]々の[illegible]、[illegible]りといふ
[illegible]、[illegible]八ツ時[illegible]
[illegible]

[illegible]
て、これは親父様の大分な[illegible]
さ、人が止めれば、[illegible]
しくてなりやせん、[illegible]
様の[illegible]には、[illegible]
殺にあ[illegible]れ[illegible]
く、[illegible]
いふ[illegible]
[illegible]

もんなりとやらいふこと諸方往來にあるげな、といへば、それならばおらがおかみ様も似たものだはへ、先づ歌の好きといふは好きといふは、朝から晩まで歌を詠んでばかり、歌の本といふものも大分あるものサ、先づ似せものがたり返事物語枕草紙、あの枕草紙も紹のあるのではないよ、それを毎日毎日見てばつかり、日が暮れても庭を詠めながら、私に蚊を逐はせて、夏の夜はまだ宵ながら明けぬるをとは寳に名歌じやなんのと、手前は蚊を逐はせてござるから宜からうが、わたしは股のいづくに蚤やどるらんで、せつなくてなりやせん、それに針といふは手にお取なされた事もござりやせん、歌道に心を寄せるものが着物など縫ふては歌のさまいやしく譬へば商人のよき絹着たるが如し、とて手にもお取りなされぬ、假令旦那様が針ぶらみでないからの事、袖口が五分ほど出やうが、上前が引込まうが、なんにもお構ひなされませぬ云云」といふ調子で、大分に碎けて來て、文章體の内に會話が多くなり、三馬あたりへ漸くに近づいてゐる。さらかと思へば卷四の泥江八景江戸名所「[illegible]」の條の如きは、殆ど洒落本の書出しに似て、一地上にりの路、香の圖にそゝり、生酔の足、淵に歩く一といひ、一客[illegible]合[illegible]辰前、人影掻動蹤飛翼一といひ、一[illegible]に入つて一、[illegible]、古[illegible]坤つて女郎をたらす一[illegible]を[illegible]

といふ、旅せず[illegible]ぬといふ、然様いふふうに書つたら[illegible]た、といふ談など、古くよりありし談か知らず、京傳も此を使つてゐる。義理をかく、事をかく、恥をかくの三かくの法を行へば金持となるといふ話も此書が用ゐてゐる。すべて浮世の雜談、教訓書の體に出て、もう聞らかに教訓書からは變化してゐる

一「[illegible]手箱」五卷、安永三年、池田遊觀の著、古い教訓書の型を踏く守つてゐる是の如き興なき者もまた出てゐる。同四年の「[illegible]玉倭庭訓」五卷、內記懲止、これも下らぬ一分限者の礎一に倣つては教訓書だが、他書の剽竊である、教訓書の剽竊などはをかしい。同五年に源無識の「功過日知錄」一卷は袁了凡が雲谷禪師より傳へた功過格によつて書いたもので、此頃の前後に斯樣いふことも傳へられたのである。功過格の教は所謂[illegible]の所謂格子の教で、飾り聚めた事でも無く、人を窮屈にし小さくするが、然し又惡い教とも云へがたい。八年の[illegible]相輔が「[illegible]心[illegible]」一卷は俚俗の勸教、[illegible]の事をのみ云ひ、田中友水の「教訓[illegible]」四卷は[illegible]人を[illegible]を作つてあるが、此方は[illegible]

[illegible]

いてゐるが、此書の方は、例の教訓書中の、社會批評的の側である。卷三に幕永亘が、芝居作者の力が無く、役者の誇ることなどを大に論じてゐる。演劇の愚劣なるを笑評して、「まだ語らぬのは梶原平三安西の彌七などゝいふ大名が烏帽子大紋の出立、たつた今しらばやして大勢の奴が水打つた往來を長袴の股立も取らで、のッさ〳〵と入來る、後から姫君樣御參詣と呼はつて乘物より綾錦よそほひたまひ、二タ間持に使はれる禿がさすやうな櫛笄をひらめかし動き出させ玉へば、お供のこしもと小姓たちが晴を盡した衣裳で六尺や鑓持が踏荒した大地へ惜氣も無く坐り。又は惡人が差向ひに計は密なるを以て善しとすなどゝ云ひて四國を見廻し一大事を云合す其際破鐘のやうに聲いて鼠木戸をも通すなれば、なか〳〵密事とは思はれず。今身を投げに行くおぬいが、女夫の約束すればとの手をとり。そのほか心中に行きながら、對の肌着で三下りの所作事は中々死に行く元氣ならず。或は書かと思へば忽ち行燈持出し、大雨ふり來ると思へば中ぬき草履をはいて出る侍もあり、見物の徒はとんと狐にばかされたも同然」云々と云つてゐる。後の「忠臣藏へんちき論」はこれから案を得てゐること明らかである。卷五の邯鄲家の翁、少年を諭す條は教訓といへば教訓だが、女郎を罵る段などは篤實の口調で無いこと勿論作者も蕩樂者なることを現はしてゐるとも云へる「ハテ行けば家内の賑かも金銀の工面も宜しからぬは知れた事、それを構はずに、うぬが賣りさへすれば好いと、いとしいの可愛いのと、うそ八百の引札で買人を呼ぶは女郎の商上手、おもひまゐらせぬといふ文も書かれず、かはりませうと誓く誓紙も無い筈、四海皆吾が亭主、十方旦那と心得て、どなたへも斯樣してあげますは女郎の習を、たゞわしにばかりは實情と思ひ、はまり易きがこけの淵、懷金を出して貪ひつかれたり抓られたりして其揚の紫立つたを嬉しがるたわけも少からず」など、記するに至つては教訓書が洒落本になつてゐる。餘り佳作では無い此書に目立つのは、字遣ひ道樂で、「鴆藥」と書いて「どくやく」と振がなし、「風動幡動」と書いて「みづかけろん」と傍訓したるなど、間違つて居るのでも無いが妙な洒落である。南方と書いて「けぬき」と訓ませた紅葉の戯も思ひ出され、變な字を使ふ「漢和連句」洒流の事も思ひ合されて、文筆の世界には乙な横町に巣を食ひたがる好みもあるものだと感じさせられる。

天明になつて其二年に河久保宿の「教訓噺草」四卷、笄と下駄とが論をしたり、九官鳥と白鷗が談をしたり、犬と虎と問答したりの類の寓言を以て教訓してゐる。先づ教訓の二字にはそむかぬが、其代りに面白い方でも無い。たゞ卷四に「むかし樵夫漁夫の類は皆槐ぎせるなり。其後大津坂本横錯すと高上と思ひしに當時は浪花四ツ橋と

名乘り、銅張、射準距上なし」とあるので、プライヤのパイプよりも早く既に昔は煙管パイプが用ひられてゐた事を知る。煙草談の次に、同七年の春芽が「當世我が身の爲」四卷、これも教訓書に無いことは無いが取るところの少い取留めなしのものである、其中に、一條煙の餘りにそろ／＼日本の細工ありふれて、阿彌陀細工の長きせるにて呑む煙草の不自由さは先以て岐阜の煙草は煙があたゝかし、大和は舌をさし、新田は香が薄く、郡里は煙薄く、加賀たばこは火がおもし、せうことなしの國分煙草にも小言無きにしもあらず」と煙草論が出てゐる。此中感心なのは煙が暖かしと難をしてゐることで、煙の冷暖は西洋人は論ずるが日本人は餘り言はず、日本の人の煙草論はまだ[illegible]つてゐないと思つたら、天明の昔に斯樣いふ議論があつたので、春芽さんといふ人に一寸恐入らせられた。前に擧げた功過擧の[illegible]人と同じやうなものに、田中書の「勸善篇」は二卷に意解されて、自信居士の[illegible]で出されてゐる。おほよそ天明比かと思はれるが、文章も宜しい方であり、趣意も勿論善悪からうことは無いし[illegible]

教訓書に違ひ無いが、別格のものに、安政元年の[illegible]白蛾の一[illegible]隣一二卷があつて、これは[illegible]

[illegible]

どはず道具あらまし左の如し」と云つて、家相、人相、墨色、宅地の占、金神、佛神のたゝり、劍相、日取、願懸り、つきもの、呪禁、祈禱、成就日、辻占、死靈、生靈等を擧げ、これを論破したもので、實に痛快な書であり、然樣いふ種類の事にすべて通じてゐた白蛾の撰であるから、恰も敵國の情僞に精通せる軍師が隙を窺し兵を出して敵を攻めるやうに、ぐい／＼と攻破つて行くところ、小氣味がよい。白蛾は不幸にして普通の人からは普通の易者のやうに思はれてゐるが、決して然樣ではない。上卷に「當時賣卜の傍に出て占する者の自ら易者などといふは誠に猿に金の烏帽子よりも猶おかし」と罵つてゐるし、又「近世俗家禪學と稱して何やら胡亂なる説を云ひ、性道の、心性の[illegible]と沙汰し、悦び迷ふもの多し。又一種のまぎれ者有り、佛にもならず、もとより儒にもあらず、釋宗に似たるやうにて小兒の口論する如きくなる取るにも足らぬ説をいひて、[illegible]もわかぬ[illegible]を惑はす者あり、此等を信じて寄り集ひ悦びあふ人品を見るに、皆文盲にして[illegible]

[illegible]

もしろみもあり、迷信破りの佳書である。
水竹居の「心筋立」壹巻はたゞ眞面目な簡單な女訓、前年の美年遠の「世和多利草」一巻が商人訓なると似たり寄つたり、たゞ其の奇ならざるを取るべきのみで、斯樣いふ書は一々擧げて語られない。
天明三年に「夜話莊治」四巻が出駒子によつて出てゐる。莊子をもぢつたやうなものは、名高い「和莊兵衛」が佳作であり、其行文も輕妙で、其構想もおもしろく、もとよりそれは徳川期文學の中で一顧せずには置かれぬものである。男女の苦樂が同等であるべきとせられた國で、女が産をするに當り、男がいきみ苦むやうになつて居るので、女房が亭主に對して、お前の苦みやうが足らぬからまだ産れぬ、と罵るところなどは實に人を噴飯せしめて奇々妙々、今日のモダンガール諸孃に一讀を推薦したい位のものである。和莊兵衛あつてより彼の曲亭馬琴の「夢想兵衛胡蝶物語」前後編は出來てゐるのだが、馬琴が和莊兵衛の噂を同書で爲して居らぬやうである。諸國めぐりの趣向は全く和莊兵衛より起つて居る。此の「夜話莊治」は諸國めぐりでは無くて、長き夜のとほの眠りの皆目ざましに番頭の莊治兵衛が咄を求められて、どらの鐘八、庄屋經藏の教によりて滿に歸する等、種々の談を爲すことを記してゐるのだが、小說めきて、輕口、かけ詞など多く、達者に書いてゐる。一瓢子といふものゝ序があるが、瓢箪から駒の出るといふ諺があるから作者出駒子卽ち一瓢子である。其序に、「或人予に問ふ、出駒子の夜話莊治は何の爲にか作れる、頤の鏁を解さん爲歟、心の餅を焼さん爲歟、答へて師の曰く、三人踊る時は必ず我師あり、其惡身なるをば之を改め、其ちやりなるをば之を笑ふ、其身振の善きを擇みてこれに從はゞ何のくゞりにくき柵かこれあらんとしかいふ」とある。不足をいふまじきことを說ける條に、「我等前方東國へ三人連にて往きし時、餘りの難儀に處はどこやら覺えねど、三人共に甚だ空腹になり、足はふらつく、身はへり腹、道は野原で樹の實さへ無く、三里往かねば人家無ければ、とやせんかくやもへとこなり、三人互に顏見合せ溜息つきし計なり。連の一人ふと思出し、水のかはりの用心にと母者が氣をつけ呉れられし田螺の乾したを取出し、いづれも之を口に入れ、しがみ〱て力草、やう〱三里向ふへ行き、一膳めしの行燈を見て、百兩の突留(富)取つた心地をなし、勇み進んで走入り、汁も菜も何もいらぬ、冷飯でも焼飯でも少々臭のする飯でもだいない〱苦しくないと、急にせがみて冷飯一膳、食ふた其旨さ何に譬へんものもなし。扨貳膳目は菜なしにはどうもいけず、一寸したしものでも拵へて、何ぼ我等がかつへ人でも飯ばかりは何樣もならぬ、と少し腹がようなりや早や不足いふ。扨三膳目には、まだ汁が出來やんせぬか、ひまのいる事じや、其飯の昆布巻こゝへ。四膳目には此當

りは海邊へ近ければ何なりと有りそたものじや、ふたしなみ、たんと六兵衞、米の悪いあたりじやないか。五勝目には、鈍な事した、今壹里向ふへ行けば好い茶屋があるに、といひ、六勝目には、七兵衞、此のマア椀を見や、けしからぬ、何ぼ田舎じやとてあんまりな、これ見たりや巳ヤ腹がふくれてもうトンと食へぬと、道理じや六盃目なこと知らず、段々不足に實が入つて、始めの難儀をトンと忘れ、此茶屋のお影にて命をつなぎしを知らず、暑さ忘れりや蔭忘るゝと、腹が膨れりや不足が出るなり、兎角不足は皆榮耀じや、田螺をしがんだ難儀な時は田螺の味はひ甘露の如く、何にも不足があらばこそ、一盃食へば一盃、貳盃食へば二盃、三盃食へば三盃だけ、腹が膨れりや膨るゝだけづゝ不足は餘計じや、みんな不足は結構過ぎるからじやてに」と云へるやうに鞭辟褻利、情趣善く現はれて人を點頭せしむるに足りてゐる。「田舎莊子」も可なりの著であるが、和莊兵衞以下此書を合せて莊子もどき四部、其中夢想兵衞が一番長篇であるが一番理窟が多くて、鞭辟の自在は長けてゐるが、却つて首庵には數り離く思はれる。教訓中でも此編等の如きは又一ト流れをなしてゐるものである。

莊子もどきの談から思ひ寄れば、寛政十一に出た戲作の「[illegible]子で騷一五巻を、[illegible]行[illegible]館家に至り、[illegible]子の[illegible]となり、[illegible]の[illegible]を盗み、大黠とかりて世界の外へ出て、女護島へ渡り、日本の[illegible]五百餘人を率ゐ、遊女街の如くなる遊男街を造つたが、男共皆腎虚して、それより淫るり世界へ至り、藥師を賴み、療治して淫曲流行の地にとゞまり樂しみ居るといふ談を記してゐるが、これは教訓とも寓言とも云へぬ愚譚で、其中に心學の噂などはあるが、兎角愚にもつかぬ變なもので、安ぼん丹の包書といふものであり、語るにたへぬ。

安本丹、天竺浪人と印文に見えてゐる醉不翁の「當世でこさかし一五巻は其名の示す如くに世態の底を云つたもので、馬鹿者道樂息子の一生を書いてゐるが、世態批評とまでは行かぬ凡作である。

延享五年、知足散人の教訓「しのぶ草」三巻は、教訓とあるが、作そ洛が隣家かなんぞと見えて、食饌の事に關して記した部分が一寸多い。彼の蛇の人を消す草の透山根を食ふた談が、この書では餅を食ふことゝなつてゐる。又鼠の婿撰みの談もあるが、斯様いふ俗談が漸く變形するのも面白い。鐵眼が男根に灸する譚も此書に見えてゐるが、何様も教訓と云つても筋筆くさいものである。

「さとし草」滑稽、寛政十七、竹里の著で、中井竹山先生の序などこのるが、たゞ是一箇老婆心切の話である。其中、田舎の休愚といふものが「ぎゝう」といふ小鮒を男の旅へ、土産に持行く途中、山中に獵師の罠に獵子のかゝつてゐるのを見て、「ぎゝう」と取換へて行つたところ、後に獵師の[illegible]、[illegible]出て來り、其ぎゝうが[illegible]

出來たのを見て、俳優に王宮を燒いた談などを載せ、迷信を破してゐるが、抱朴子の中の飽石の談と同じことで奇妙である。

「日新館童子訓」二卷は享和三年に會津侯の手から出されてゐるが、これは正しい意味で言つての教訓書の佳いものである。經語子說の大道日用に切なるを擧げて曉り易からしめ、善行惡行の勸懲のかんがみたるべきを記し添へて、人をして敦倫向上の心を發し、正大淸和の境地の欣ぶべく樂むべきを思はしめんとしたものである。浮詞冗語なく、實に則きて教を爲す、まことに佩服すべきの良書と云ひたい。立言容疎で、心性を談じ、悟道を說きなどするより、教訓の書は是の如きが功も多く弊も少い。

中村弘毅の「父子訓」二卷、同「女訓三の道」一卷、のやうな平易で日常の教訓書、田中徹儀の「女誡國字解」、橘東海の童諺の俚譯の「すぎはら草」二卷、かういふ種類の書は文化文政天保あたりに澤山出てゐるらしいが、餘り見及ばないから隨つて談じ及べない。石井光政の「修身辯」四卷の如きは、教訓書としては少し衒學的に見えて童蒙には解し難く、さればと云つて儒家の書といふには物足らぬ。教訓書類も文政弘化にわたつての諸願軒の「主從心得草」十卷になつては、心學やうであるが女郎買の噂などもあり、京傳三馬などを引き、種々の詩を並べ淨瑠璃の引用、お道歌、狂句を引き、見る者をして眉をひそましめる。「楠眞田といへどもあまり忠義に溺むかと疑ふ」など、下らない見識立をしてゐる。教訓書も是に於て末である。談ることも亦倦んだ。

藝術の社會的地位に就いて

(游歐雜記の序)

阿部次郎

33

「然しれし浮世の義理の爲には愛着を殺し、厭はずながら只一人突放して追られふか」――これは「五十年忌歌念佛」の中のお夏の言葉である。近松はこの言の中で、西鶴が多く與り知らなかつたもう一本の絃を掻鳴らしてゐる。近松が「義理」に對してより多くの關心を持つてゐることは、おのづから戀愛の葛藤の方面を彼に見せる。從つて又吾々は、彼が戀愛文化に貢獻する程度は、西鶴と異つて、その[illegible]を纏ふに足るものあるべきことを強調するのである。

既に近松の考察に移るに當つて、吾々は小説と浄瑠璃との相違から來る[illegible]に就いて[illegible]を得て置かなければならぬ。[illegible]

[illegible]るやうに持つて行かなければならぬ。故に此處には浄瑠璃文學の特質といふ豫備問題が挿入されるのである。彼はその前半生に於いては又脚本作者でもあるが、以下私の浄瑠璃について云ふところは、大體に於いては又歌舞伎劇にも當嵌るであらう。

近松の藝術觀を明かにするためには、人も知る如く、「浪花土産」の發端に於ける穗積以貫の文章が極めて有力な典據である――「往昔[illegible]近松が許にとむらひける比、近松云けるは、浄るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句みな働を肝要とする活物なり……されば地文句せりふ事はいふに及ばず、道行なんどの風景をのぶる文句も、情をこむるを肝要とせざればかならず感心のうすきもの也。詩人の興象といへるも同事にて、たとへば松島宮島の絶景を詩に[illegible]

を見る如くたらん、この故に文句に情をもとゝすと心得べし」――この文章は淨瑠璃が出發點に於いて既に小說とは別樣の根本條件の下に立つことを明かにする。「人形にかゝる」ことは小說の全然顧慮するを要せぬところであるが、それは淨瑠璃文學にとつては、その死活を決するかなめ處となつてゐるのである。固より人形にかかるためには、文句はあらかじめ音樂となつて來なければならぬ。淨瑠璃文學は、第一には曲節を誘ひ出し、第二にはこの曲節を通して人形に魂を入るるところにその使命を持つ。故にそれは、それ自體だけでは完成せぬ藝術、これを鑑賞批判する者に曲節と人形との理解を要求する藝術である。今日に於いて近松の淨瑠璃文學に作つてゐた曲節と人形とを悉く再現することは不可能であるが、兎に角この豫想を持つて、空想の中で出來るだけそれを補ひつゝ、近松を解釋するのでなければ、それは單に不完全なだけではなくて、解釋の根本方向に誤差を生ずるであらう。例へば心中の道行は、單に主人公の心理とその場の情景とを寫實的に描き出すためにのみあるのではない。それは哀切な音樂の流れを豐かに誘ひ出して、曲節にさま〴〵の變化を喚起す役目をも勤めなければならぬ。又曲節につるゝ人形の身振りを、きまつたときの美しい形、一つの形から他の形に移る間の美しい運動に導いても行かなければならぬ。音樂と身振りとを待つて實現せむとする表現は、單に小說めいた描寫の要求のみを以てこれを讀む人に、無用な引延した舞文と感ぜられるであらう。併し音樂と人形とが正にこの舞文を必要とするのである。この舞文は嚴正な劇に於いても亦要求せらるゝことなきものである。それは半ば敍事詩的な語り物であり、半ば純正な科白劇の要素を持ち、全體を包むに音樂と舞踊とを以てする淨瑠璃と人形芝居とに於いて始めて必要となる。故にこの特殊な形式に對する具體的な親みを持ち、淨瑠璃といふ藝術に眞正な愛を感ずる人でなければ、近松の理解は意外に六かしいであらう。さうして理解の正しい方向を握り得た人にとつても、その曲節と人形との再現が不可能な限りに於いては、十分の理解を望むことが出來ない。吾々の企て得るところは、たゞ淨瑠璃の本質に對する味解を指針として、正本の節附や當時の繪畫や文獻を補助としつゝ、出來得る限り作品の內部に沁み込んで行くことのみである。

更にこれを純正科白劇として見ると假定しても、其處には劇と小說との相異から來る近松と西鶴との開きは猶殘存する。その一つは、人物の內心に行はるゝ一切の過程が、淨瑠璃に於いては、凡て白及科となつて表現せらるべき自然の傾向を持つて來ることである――「淨るりの文句みな實事を有のまゝにうつす內に、又藝になりて實事になきことあり、近くは女形の口上おほく實の女の口上には得いはぬ事多し、

是等は又藝といふものにて、實の女の口より得いはぬ事を打出していふゆへ其實情があらはるゝ也、此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は、女の底意なんどがあらはれずして、却て慰にならぬ故也、……此外敵役の餘りにおく病なる體やどうけ様のおかしみを取る所、實事の外藝に見なすべき所おほし、このゆへに是を見る人其しんしやく有べき事也」——この斟酌は劇に許されても小説には許されない。後者にあつては、地の文が人物の擧動及言語と同様の重さを以て、彼等の内心を内心そのものとして寫すことが出來るからである。さうして第二に、小説が間接に空想の前に提出する視覺表象を、繪畫や彫刻のやうに直接に視覺形象として投げ出すといふ約束は、「よく〳〵理詰の實らしき事」以外により多く「藝」を加味して美化する自由と必要とを、劇や淨瑠璃に感じさせる——「藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也、成程今の世實事によくうつすをこのむ故、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共、さらばとて眞の大名の家老などが立役のごとく顔に紅脂白粉をぬる事ありや、又眞の家老は顔をかざらぬとて、立役がむしやむしやと髭は生たりあたまは禿たりにて舞臺に出て藝をせば、慰になるべきや、皮膜の間といふが此也、虚にして虚にあらず、實にして實にあらず、この間に慰が有たもの也、[illegible]はしけるが……見給ふもたまさかなれば餘りにあこがれたまひて、其男のかたちを木像にきざませ、面體なんども常の人形にかはりて其男に毫ほどもちがはさず、色艶のさいしきはいふに及ばず毛のあな迄をうつさせ、耳鼻の穴も口の内歯の數迄寸分もたがへず作り立させたり、誠に其男を傍に置て是を作りたる故、其男と此人形とは神のあるとなきとの違のみ成しが、かの女中是を近付て見給へば、さりとは生身を直にうつしては興のさめてほろぎたなくこはげの立もの也、さしもの女中の戀もさめて、傍に置給ふもうるさく、やがて捨られたりとかや、是を思へば生身の通りをすぐにうつさば、たとひ楊貴妃なり共あいそのつきる所あるべし。それ故に繪そらごととて、其像をゑがくにも又木にきざむにも、正眞の形を似する内に又大まかなる所あるが結句人の愛する種とはなる也、趣向も此ごとく、本の事に似る内に又大まかなる所あるが結句藝になつて、人の心のなぐさみとなる、文句のせりふなども此こゝろ入れにて見るべき事おほし」——固よりこの「藝といふ物の眞實のいきかた」は淨瑠璃にのみ限つたことではない。[illegible]形像構成の法則と本質強調の法則とは、あらゆる藝術にこの [illegible]

ふもの、特殊の約束を意識してゐたことも明かなりといふべきである。小説はその表現が間接であるだけに、却つてより多く實に即くことが出來る。吾々は西鶴と近松との現實描寫の相違から、直ちに二人の人の現實感の深淺を推論すべきではないのである。

さうして近松が「本の事に似る内に又大まかなる所ある」趣向を推奬する理由を、より多く「人の心のなぐさみとなる」ところに置くことは、彼と西鶴との藝術的志向の差異を示すのみならず、又小説と淨瑠璃との社會的役割の相違を示唆してゐる。それは民衆に對する關心の深さが淨瑠璃に於いては特別に必要であるといふことである。出版が今日のやうに――京傳馬琴等の徳川末期のやうにすら――資本主義化されなかつた時代に於いては、小説の著述及び出版は、利得の意味でも經濟的冒險の意味でも、事業らしい事業ではあり得なかつたであらう。著者も出版者も小説が「當る」ことを歡びとする心理は固より多量に持つてゐたに違ひないが、經濟的事情に制肘される程度が淨瑠璃や芝居に較べてずつと少かつたために、所謂「藝術」の自由は遙かに多く許されてゐた。これに反して仕込みに多額の金錢を必要として、既に當時にあつてすら「芝居の銀主」は鑛山にかゝると同様の冒險と見做されてゐた演劇その他の興業にあつては、「大入り」に無頓着な作者は一日も存立を許されなかつたであらう。娯樂に渇する民衆の趣味を察してこれに慰めを與へることは淨瑠璃作者の重大な責任に屬する。既にこの一點から見ても、彼は須臾も民衆の嗜好と離れることを許されないのである。而も彼と民衆とを特別に結合する綱は決してこれのみではない。直接にその聽衆や觀客と顏を向合せて其處に濃厚な精神的雰圍氣を釀し出さなければならぬ劇や音樂に於いては、前述の經濟的事情を離れても猶、人が往々見忘れてゐるもう一つの大きな動機が――人間の名聲心、喝采を求むるこゝろ、同感を求むるこゝろ、さうしてもつと嚴正に深く人性に根ざして結局あらゆる名聲心の基礎を形成してゐる同類感、孤獨に堪へぬこゝろ、同感による社會的結合を必要とするこゝろ、自己に屬する最良のものを同胞に與へて同胞の共鳴によつて自己のうちにある最良のものに支持を得むとするこゝろが――特別の強さを以て刺戟されるのである。あらゆる藝術家に共通するこの動機が、この場合に於いては、眼前に於けるその効果の享樂によつて倍加されるのである。さうしてこの事情は演劇及びこれに類似する藝術に強みを與へると同時に又弱みを與へる。その強みは常に時代の流れと緊密な接觸を保つて其處から底力を汲み出すところ、自己のうちにある最良のものを民衆に與へむとする熱意が彼の表現の火をはごくむところにある。併し喝采を求めるために自己を枉げるとき、娯樂を與へむがために民衆に媚びるとき、迎合の意志が自己表現

の傳統に夾雜物を與へるとき、其處には爭ふべからざる弛みが生れて來る。近松の淨瑠璃が前の意味の長處を持つてゐることは見遁すべからざる點であるが、同時に後の缺點を持つことも亦拒み難い。民衆に娛樂を與へてその趣味に迎合せむとする意志が、往々にしてその表現を不純にし、その藝術的動機の分裂を惹起する。悲戀に對する同情に誘うて男女の主人公と共に動いて行く高い調子は、時として見物に對する一瞥によつて亂される。見物が退屈してゐさうに見えるとき、又何か下がかりの駄洒落を欲しがつてゐることを看取するとき、作者は急に轉調を試みて、平地に藍染の波瀾を描き出し、心中の道行に八百屋物の「相生の松茸」を轉がして來ることを敢てする。さうしてそれが藝術意志の分裂から生じて來るものだけに、洒落も猥談も說教も同情も兎に角一つの根原から生れて來てゐる西鶴のそれに較べて、殊に更に目立つことを如何ともし難いのである。娛樂の使命を自覺するところから來る藝術的墮落の徵候――德川時代の文壇の道德的傾向とも稱すべきこの徵候は、私の見るところによれば西鶴には未だ殆んどあらはれてゐない。淨瑠璃の藝術にあらはれた戀愛觀や戀愛描寫の態度に如何に非難すべきものがあるとしても、兎に角彼は時流に調子を合せるためには[illegible]一[illegible]これを[illegible]其處に動機の分裂を[illegible]一[illegible]ある。[illegible]に於いては、この徵候が故意に無視し難くあらはれてゐる。觀客の趣味を打算の[illegible]るところから來る藝術意志の不純が既に彼の作品に多少の陰影を[illegible]てゐる。さうして淨瑠璃といふ藝術の社會的地位が、一つには彼を誘惑して此階級に陷らしめたことは何と云つても爭ひ難いのである。私は敢て一つにはと云ふ、それが決して全體ではないからである。其處には猶、藝術の特質のみでは說明し得ぬものが殘存するからである。

然らば近松を誘惑して民衆の趣味に秋波を送らしめ、西鶴をしてこれを超越させたもう一つの力は何であるか。私は茲に再び個性の概念を持ち來すことを餘儀なくされる。吾々が近松の作品を通して推察するを得るものは、彼の人間の善良な心弱さである。彼は一面に於いて殘虐を舞臺の裝飾とするに堪へないほど時代離れのした人間ではないが、一面に於いては、事件の構成が彼自身の意志に從屬する限り、出來るだけ情狀酌量の餘地ある境遇にその人物を置き、これに對してありあまるほどの同情を注ぎかける藝術家であつた（私はこの事をあとで「大經師昔曆」其他について證明しようと思ふ）。さうしてかういふ性格は、その觀客に對しても亦[illegible]れた、自ら高くする態度をとることを許さなかつたであらう。彼は自ら好んで觀客の[illegible]に[illegible]き、[illegible]い[illegible]を持つてゐた[illegible][illegible]

瑠璃作者として成功させた倫理的根據であると見らるべきである。さうしてそれが同時に、彼をして民衆の趣味に同化せしめたのみならず、時としては藝術的分裂の危險を賭してもこれと妥協せしめた理由となるのである。これに反して西鶴は透徹せる理智と共に自己をおし通す强さを持つてゐたやうに見える。外貌の如何に拘らず腹の底に剛愎な意氣を持ち續けて、身を屈して他と妥協するに堪へなかつた性格が――身を高處に置いて、時代の表面を流るゝ倫理意識や、淺薄な一般民衆の好惡を俯瞰してゐた氣位の高さが――彼の作品の底を貫通してゐる。自分の欲するまゝに傍若無人の高笑ひや惡巫山戲をすることはあつても、他人に誘はれて洒落を云ふやうなことは、彼には到底なし得なかつたであらう。彼が自樂の道を踏み、讀者を眼中に置いてこれに働きかけようとするとき、彼の態度は殆んど常に教訓的である。彼に許された途は、「眼光ぬからず」世相の表裏を觀察して、彼自身の信ずる高處を下らずに世間に先驅するところにある。このやうな性格の人は、哀れに氣の毒な世相を描寫して民衆自身の自覺せぬその生活の奥底を探照することは出來ても、民衆に娛樂を提供する淨瑠璃作者となることは極めて困難である。彼が「曆」その他の二三篇で正本の制作を絶つたのは、假に彼の才能に對する問題を除外するも、猶彼の性格に基くところがあつたであらう。私の茲に述べるところは凡て推測に過ぎないが、兩者の性格の相違はその作品の鑑賞から出發して或程度の確實性を以てこれを主張することが出來ると思ふ。近松が淨瑠璃作者となり、西鶴が俳諧師兼小說家となる前に、彼等をしてそれぞれの途を選ばしめる「前世の機緣」が既に彼等の素質の中に熟してゐたのである。これは社會的說明をも美學的說明をも絶する範圍であつて、吾々はたゞ兩者の個性を或程度まで記述し得るに過ぎない。

さうしてこの「前世の機緣」は、彼等の性格に關して云ひ得るのみならず又その才能に就いても認めることが出來る。西鶴が宇治加賀掾のために作つた「曆」(貞享二年刊)と、同時に近松が竹本義太夫のために筆をとつた「賢女手習並新曆」とを比較すれば、淨瑠璃作者としては西鶴が到底近松の敵でなかつたことゝ、假令久しくこの方面に努力するも、前者は遂に後者のやうに新しい道を開拓し得なかつたであらうことは明白である。「賢女手習並新曆」は、この當時の近松としても決して佳作とは云ひ難く、その構造は題名の示す如くちぐはぐなものであるが、併し其處には單に敍事的な古風を脫して既に劇的情景の表現にうつらむとしつゝある濡れ場がある。豐かな聯想からおのづから溢れ出でて、曲節と身振りとの變化を誘ひ出す詞行がある。さうして全篇を通じて音樂的表現の喚起にふさはしき感情の充溢が脈打つてゐる。これに比較すれば「曆」は全體として冷き固さを持

ち、その濡れ場は色氣の少き叙事、その道行は曲節の變化乏しき積重ねであつて、其處には近松の如き獨創の萌芽を見出すことが出來ないのである。西鶴の天才は事件の推移を見るが、その推移の一斷面を舞臺の上に繋ぎとめて其處に描き出される姿勢の配合と動作の發展とを見る力に乏しく、西鶴の文章は事象の叙述に長じてゐるが、それは淨瑠璃の節を誘ひ出すほどな音樂的高翔に堪へないから、「五人女」のやうな彼の散文に見出される美しい柔かさが、此處では却つて固くのろくさく感ぜられる。「操年代記」に、加賀掾と義太夫との競演に於いて、「ついに義太夫淨るりよく嘉太夫かたやみぬ」と書いてあるが、それは決して語り手の勝敗のみを意味するものではないであらう。故に吾々は此處でも亦打超え難き個性の限界に遭遇するのである。さうして一方に近松が和田忍笑に贈つた扇の禮狀のやうな書柬を讀むとき、近松の文章がこの場合にも如何に淨瑠璃向きに出來てゐるか、淨瑠璃の水が如何に近松といふ人間の全體に沁み込んでゐるか、吾々は一驚を喫せざるを得ないであらう。個性の相違が既にそれ/\のディスポジチオンを與へて、これに從つて選ばれた途が、更に彼等を益々それ/\の途にふさはしきものに作りあげて行く。此の如くにして小說家西鶴と淨瑠璃作者近松とは、ほゞ同じ時代に生れて異れる職能を云為するやうになつたのである。さうしてその時代にそれ/\の需要を充したのである。

39

前節の準備を了へて、私は改めて問ふ、近松が國民文化に貢献した點は何處にあるか。若し彼が民衆の趣味に追隨して彼等の嗜求する娛樂を提供した人に過ぎないならば、彼の藝術はたゞ時代の反映として當時の生活と趣味との證券となるのみで、その創造的意義は問題とならないであらう。併し彼の所謂「人の心のなぐさみ」は決して追隨のみを意味するのではなかつた。彼は民衆に何物かを與へむと欲する。さうして彼が積極的に與へむと欲したところのもの、而も彼が又事實與へ得たところのものに着眼することによつて、始めて吾々は吾々の問題に對する正しい解答を發見することが出來るのである。

然らば彼は民衆に何を與へむとしたか。彼が彼等に與へむとしたことは、「浪花土産」の發端によつても極めて明かである。[illegible]實とは確に形ある動作や所作の寫しのみではない、[illegible]「[illegible]なる」ここに[illegible]そ志した「[illegible]」の[illegible]して民衆の[illegible]にして、[illegible]

に集中するとき、それはおのづから感情の深さを劇場內に創造して、其處からこれを全社會に注ぎ出すといふ積極的な役目を果すことになるのである。此處に娯樂の目的と淨化の役目との不思議な結合が生れる。娯樂のために構成された變妙な容器の中に、蒸溜された感情のエッキスがその魅惑的な藥性を濃厚に發揮する。不自然な荒唐な夢幻的な構造と、からくりの見えすいた、あり得ざる因果律とを持つ、場面の變化と色彩の眩惑の劇しい世界は、一面これによつて人目を喜ばしめ、觀客の愛憎に媚びながら、同時に不易の人情をその中に包容する。單に淨瑠璃や人形と云はず、德川時代の歌舞伎芝居が、今日に於いても猶生命があるのは、主としてこの點に基いてゐると云つてもよからう。其處には固より姿勢や運動や色彩の配合から來る魅力と、締めつゆるめつ舞臺の世界を動かして行く劇的構成の巧妙とが重大な役目を勤めてゐるが、結局此等の強味が一括して奉仕させられてゐる人情の深さがなければ、それは繰返しての鑑賞に堪へることが出來ない。例へば不具者の思ひつめた藝術的アスピレーションと、生來の多辯の內容を充たすに夫思ひの眞情を以てする女房の誠とが觀客の心を摑んで、石背に徹する筆力や畫虎に魂が入る趣向のからくりを忘れさせるとき、吃又の淨瑠璃や芝居は本當に「情のこもれる」ものとなるのである。この意味の魔法は自ら情に醉ふことを解するものでなければ行ひ得ない。作者が民衆に先驅して彼等を導く一點が此處に成立する。感情の創造が新しいものとして彼等の鑑賞を捉へる。さうしてそれは彼等に娯樂を與へつつ不知不識彼等を高めて行くのである。

近松がこの意味の魔法の達人であつたことはいふまでもない。彼の「本の事に似る內に又大まかなる所ある」趣向は、吾々の感情に輕い明るい背景を提供する。さうしてこの全體の戲れの中に織り込まれた「情をこめた」情景が、後世の淨瑠璃のやうに理詰めに設計された、不自然にして重苦しい世界に於けるよりも、例へば夢裡に於けるが如く遙かに自然に吾々の心に流れ込むことを覺える。さうして彼が淨瑠璃の傳統に從つて、「憂」にたよつて情の籠つた世界を創り出すとき、彼はこの哀れの主要な源泉を何處に發見したか――「淨るりは憂が肝要也とて多くあはれ也なんといふ文句を書、又は語るにもぶんやぶし樣のごとくに泣が如くかたる事、我作のいきかたにはなき事也。某が憂はみな義理を專らとす、藝のりくぎが義理につまりてあはれなれば、節も文句もきつとしたる程いよいよあはれなるもの也、この故にあはれをあはれ也といふ時は含蓄の意なふしてけつく其情うすく、あはれ也といはずしてひとりあはれなるが肝要也、たとへば松島なんどの風景にても、ア、よき景かなと譽たる時は、一口にて其景象が皆いひ盡されて何の詮なし、其景をほめんとおもはゞ其景のもよう共をよ

そながら數々云立れば、よき景といはずしてその景のおもしろさがおのづからしらるゝ事也、此類萬事にわたる事なるべし」――この一節には手法の問題と題材との問題が併せて含まれてゐる。あはれを表現するには、あはれ也といふだけでは足りない。景を褒める心が「其景の模様どもをよそながら數々云ひ立」ることによつて表現せらるゝが如く、物の哀れを、感ずるこころも亦、哀なる「模様ども」となつて分化し客觀化し、かくて具體的の姿に寓せられるものとならなければいけない。其處に心が姿をとり、人物となり事件となつて、遂に劇的な世界として發展すべき自然の道が開かれる。「此類萬事にわたる」べきこととは云ひながら、純正音樂や抒情詩にあつては、根本心の具體化の經路が必ずしも事柄の描寫によることを必要とせぬことを考へ合せれば、魂の具體化といふ藝術共通の原理を、彼が此處に云ふやうな形に於いて捉へて來たことは、その空想が本來劇的な傾向を持つてゐたことを物語るものと云ふべきである。かく近松のあはれの表現は、あはれを持つ人物と事件との世界として發展して來なければならぬ。この劇的な世界が「打詠めて賞する」心を持つ感情の高潮に表はされ行くとき、それは劇的に豐富に分化發展すればするほど、益々といき〳〵と[illegible]この流れを[illegible]であらう。さうして、この[illegible]の哀れを集めた[illegible]

認めた。「藝の六義が義理に詰りてあはれなれば、節も文句もきつとしたる程愈々あはれなるもの也」――これは彼の藝術を理解する鍵として深く注目を要する言葉である。戀愛變化に對する彼の貢獻も、亦此處にその緒を見せてゐるのである。

たゞ吾々が繰返し記憶して置くことを必要とするところは、戀愛變化に對する彼の貢獻を明かにするためにはその語句を頼りとするだけでは足りないといふことである。彼はその文句によつて曲節に於ける或種の轉調や、身振りに於ける或型のきまり及び動き方に對するキッカケを與へる。これに應じて美しい節と美しい身振を工夫するのは太夫と人形遣ひとの職分であるが、義太夫に於ける音樂と人形に於ける身振とによつてのみ表現せらるる點は、丸本の素讀によつては十分に受取るを得ないのである。而もこの曲節及び身振りを度外視することによつて、藝術的に失はるるものが如何に多いかは、日本に於ける人形淨瑠璃歌舞伎劇淨瑠璃等の特質を知る者にとつては極めて明かである。人形遣ひや歌舞伎役者や淨瑠璃太夫は、その正本に於ける瑣末なる論理に即し、その歌詞に於けるノンセンスに[illegible]移の色合にたよりながら、これ[illegible]な、[illegible]

ば、思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。これ等の藝術はその臺本若くは歌詞の文學的價値を離れても、立派に獨立せる藝術價値を持ち、從つて美的文化（並びに戀愛文化）の進展に參加してゐるのに、吾々がこれを讀み物として取扱ふ限り、この重要な方面をきり捨てなければならないのである。固より此等の動作及び旋律による表現は作曲振付及び演奏藝術家の功績であつて、臺本作者の要求し得る名譽は極めて限られてゐるには違ひないが、併し彼の作品がこのやうな補足を豫想し要求し、更に誘導してさへゐる場合に、猶これを無視して單に讀物として取扱ふのは、重大なる鑑賞の缺陷と云はなければならぬ。

一例を近松の作中にとらう。前に引用した「五十年忌歌念佛」は、讀物としては平凡な作品であると私は考へる。筋は單純である。性格描寫の見るべきものがない。單に戀愛の類型を寫しただけのものと見ても、その痛切の度に於いて、近松の他の作品に比して遜色があると云はなければならぬ。併しこれを淨瑠璃節及び人形芝居の臺本として見るとき、其處に色々の美しい曲節や美しい姿態の要求が隱されてゐて、節とポーズとによる戀愛描寫が純正劇としての缺陷を補足してゐることを發見し得るであらう。例へばお夏と清十郎とが暫くの別れに際して、著物をとり替へて著ることは一場の痴戲である。衣服の交換といふ事柄がこの美男美女の戀愛の深さを描寫するために役立つ必然性は極めて乏しい。併し作者が「……互に隱した身の危險、男のためにはうき苦勞、腰に手ながらたゞ一人突放してやられふか、これ此小袖とぬぎかへて、其布子をあふまでの形見に著んと涙ながら、互に帶解き身を合せ、片袖づゝをぬぎかはす、肌睦しき心ざし、繼路ならずば何故に生れて知らぬ、もめん物、ふくさのきぬと引つめて、顏と顏とを見合せてわつと泣き入る、心底によろづの涙籠るべし」と綴り行くとき、彼の藝術意志を導いてゐるものは、決してこの事柄ではなくて姿勢と動作と情景の變化とである。彼が「互に帶解き身を合せ片袖づゝをぬぎかはす肌睦しき心ざし」とこの交換の順序を強調して詞章を綴けるとき、彼の眼の前に浮んだものは明かに人形の美しいポーズでなければならぬ。彼はこのポーズによつて戀愛の纏綿たる情緒を表現しようとしたのである。さうしてそれが美女の布子姿と美男の女裝といふ眼新しき變化を誘ひ出し、更にそれが兩人をとりちがへる錯誤の原因となつて行くのは、染藍と胡粉との見強き舞臺上の波瀾であるが、兎に角彼が心理的に剔らむとするだけではなくて、人形を使つて舞臺の上に美しい繪を描くことによつても戀愛を描寫せむとしたことは疑ふことが出來ない。この藝術的動機を認容して、更にこの描かれたる繪の美しさが觀客の心に與ふべき陶醉をも計算に入れるとき、吾々は始めて戀愛文化に參與する作者の功績の性質を理解するであらう。

同樣のことは「おなつ笠物狂」の道行についても云はれる。此處に歌はれてゐるものは固より淸十郎に對する狂亂の戀であるが、作者はひたすらにこの戀を描かむと急き込んでゐるのではない。此處に彼の應用し利用しようとしたものは歌念佛の曲節と、おなつ淸十郎を主題とする幾つかの流行唄の旋律である。さうしてかういふ旋律の交錯は、其處にさまざまに調子をかへる歌詞と、緩急いろ〳〵の曲線を描いて渦巻き行く表象の流れとによつて導き出される。私はこの道行をきいたことも見たこともないが、かくて歌はれたり踊られたりする曲節と身振りとの全體の中に柔かに美しい狂女の戀愛が表現され得ることは、ほゞ想見するに足るであらう。此處でも亦純正科白劇ではよくし得ないものが淨瑠璃として補足されてゐるのである。

併し私は以下の考察に於いては、不完全を承知の上でこの方面をきりすてなければならぬ。近松物の曲節と人形とを悉く再現することは、今日にあつては不可能なばかりではなく、又假令それが不可能であるにしても、絵畫と曲譜とを除いた文章のみの力によつてこれを取扱ふことは、言葉といふものの約束をはみ出す事業に相違ないからである。近松の淨瑠璃を讀物として取扱ふとき、戀愛文化の發展に貢獻した彼の事業は如何なるものであるかを整理しようとする私の見方は、その淨瑠璃に於ける彼の戀愛觀念を如何なるものにしたか。

新刊紹介

◆大日本國語辭典（上田萬年・松井簡治兩博士三十六年の努力になる大著・全五卷─本文四卷索引一卷─四六倍判總頁六千頁・定價六十五圓・豫約特價一時拂五十五圓月賦拂五十八圓・東京市九段坂下富山房）

◆(長篇小說)石器時代上卷（井田秀明著・定價二圓・東京市神田區材木町二騷人社）

◆(短篇集)芽（峰專治著・定價八十錢・東京市外西巣鴨堀の内四四　第一藝術社）

◆詩集 冬花帖（百田宗治著。定價壹圓貳拾錢・東京市麴町區下六番町四八・厚生閣書店）

◆野口雨情民謠叢書　第一編（定價六拾錢・東京市外西巣鴨二二一八・民謠詩人社）

◆詩集 荒野の魂（塚原嘉庸著・定價壹圓貳拾錢・東京府王子町新道一三五〇・新樹社）

◆詩集 太陽の頌（宮崎丈二著・定價壹圓・東京府下大井町原五三八二・太虛堂詩書房）

◆詩集 鏡（本田卸男著・七拾錢・東京市外澁谷町上通一ノ二一・さめらう書房）

維新回天史の一面（其十二）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　德富猪一郎

（第九十七）勅諚降下と戊午大獄

水戸及び幕府へ下されたる勅諚のいきさつに就いては、既記の通り、表向は之を以て主上の御讓位を御思ひ止らせ給ふべき方便とし、裏面に於ては、之によつて幕府に一大打擊を與へ、井伊大老の政策を根本的から顚倒へさんとするの企であつた事は明白の事實だ。然るに、これが爲に第一の目的は遂し得たが、第二の目的に至つて全く失敗し、寧ろかへつて逆襲を蒙り、此處に於て所謂安政戊午の大獄を惹起するに至つた。

固より戊午の大獄なるものは、勅諚の有無に關らず、既に井伊が幕政の中樞に立ち、喧嘩腰にて天下の志士を相手とするからには、當然これに對する抵抗運動を激成し、その激成の餘波は井伊派と、否井伊派との間に一大衝突を來し、反對派が勝つも井伊派が勝つも、孰れにしても太平無事にて、その局面を收拾する事の出來ぬのは、必然の勢であるから、必ずしも勅諚降下のみを以て、戊午の大獄の唯一の原因といふ事は出來ない。即ち勅諚あるも大獄を來たし、無きも恐らくは來したであらう。然し一面

諚の降下は、大獄を來たすに就いて、極めて有利なる口實を井伊派に與ふる事になつた。

(第九十八)　水戸を買ひ被る

抑々勅諚降下を主唱し、若くは運動したる仲間に於ての一大失策は、水戸の勢力を買ひ被つた事である。彼等は水戸に勅諚が降れば必ずこの勅諚を眞向に翳して、水戸が改革運動の先導者となり、天下有志の勢力を糾合して、此に政界に一大新局面を打開するであらうと思うたのである。卽ちそれ程迄に思はざる者も、それに近き程の効果が得られるものと考へたらしい。

併しながら水戸は正直の處、斯る勅諚を頂戴して、これを奉持するの實力がなかつた。元來水戸は微弱なる財政状態であつた。この宣傳なるものが、水戸の維新回天の偉業に於ける功績の一と云つて差支へない。併しながら宣傳は宣傳に止つて、實力はそれ程ではなかつた。

其のそれ程でなかつたと云ふ主なる理由の一は、水戸藩それ自身が貧乏であり、しかもその貧乏なる水戸藩の力さへも一致する事を得なかつた。卽ち水戸齊昭は鬪爭の中から生れ出でたる人である。彼はその藩中の有志派、卽ち後に天狗黨と稱せらるゝ者に擁立せられた人である。而してその黨爭の跡は、時に大、時に小、時に顯、時に晦に關らず、未だ曾て根絶したる事がなかつた。しかも天狗派の巨魁とも云ふべき戸田、藤田等の存在中は、内は紛紜する藩論をまとめ、外は天下の志士に周旋して、帷幄の謀を繫ぐ事も出來たが、安政二年十月、江戸大地



朝彦親王御肖像

地震の厄に罹つて逝きたる以來、齊昭は恰も座頭が杖を失ふも同樣となつた。從つて彼は唯だ厄介者の大隱居と認めらるゝに止まり、卽ち島津齊彬、松平慶永、その他の仲間に於てさへも、表には崇敬しつゝも、裏では少からず當惑してゐた程であつた。

然るに井伊一度出て、水戸家の政は、井伊の手中に握らるるに至つた。而して當代の慶篤、卽ち齊昭の長子たる水戸藩主も、寧ろその父とは感情及び意見の上に於て、往々齟齬扞格するものがあつた。要するに水戸家に於ては、隱居、當代父子の間さへも一致し難かつた。況んや一藩の力に於てをや。

（第九十九）所謂る二大惡謀家

斯る次第なれば、水戸の君臣が斯る勅諚を頂戴して、寧ろ甚だ當惑に感じ、露骨に云へば迷惑と思つたのも、無理ならぬ事だ。これといふも京都における勅諚降下運動をなしたる志士連中が、水藩の內情に通じなかつた爲であらう。

併し中には在京都の志士中にも覺束なく思うても、兎も角も斯る果斷の處置をとれば、自ら現狀を打破する導火線ともなるであらうといふ、一六勝負の考もて、しかしたものがあつたかも知れない。

當時幕府に於て、最も危險人物となし、何事にも惡事の本家、陰謀の張本人と看做したものは、二人あつた。その一人は水戸齊昭にして、他の一人は朝彥親王であつた。彼等は齊昭はその子一橋慶喜を西城に入れ、軈て將軍となし、自らは大御所の位置に立ち、幕府の政權を專にせんものと睨んでゐた。卽ち家齊が一橋家から入つて將軍となり、その父民部卿治濟が大御所風を吹かして、幕政に干涉した先例に輪をかけて、斯くなさんと欲するものと睨んでゐた。

×　　×　　×

而して京都に於ては、朝彥親王が、主上に御退位を逼り儲宮を皇位に卽かしめ給ひ、自らその後見人とならんとし給ふとの事であつた。齊昭とてもその子の將軍となる事を好まんではなかつたらうが、それをたゞ自己の威福を逞しくする方便のみと心得る程の俗流政治家ではなかつた事は、たとへ齊昭の人格に全く敬服する事が出來ぬ者と雖も、これを信ずる者はあるまい。まして京都に於ける朝彥親王の御野心なんどといふもの

は、全く痛くもなき腹を探られ給ふ事にて、御氣毒と申さねばなるまい。

即ち朝彦親王に就いての幕府の探偵書は左の通りである。

『青門——即ち青蓮院門跡朝彦親王の事——の御關係、眞實の御意内は、主上御讓位を御進め申し敏宮を御位に即け御自身には桂宮に移轉の御積りの由。但し御讓位の御手段は、外夷打拂の儀强ひて主上に御進め、關東より如何樣仰せ進ぜられ候とも、御承知遊されざる樣にしかけ、つまりは何分叡慮の御趣意を相立てざる上は、御讓位然かる可きとの場に御落し申す御企みの由』

此は京都所司代酒井忠義の用人、三浦七兵衛の所藏文書中の節にして、これを以て幕府方の者共は親王を陷れんとしたものであつたらう。

右に揭げたる敏宮と申すは、孝明天皇の皇姉淑子内親王の事である。これによつてみれば、朝彦親王は極端なる攘夷說を以て、孝明天皇に吹込み、幕府が如何なる對外[illegible]條約を上奏するも、天皇をしてこれを拒絕せしめ、しかも幕府がこれを遂行せざるか、[illegible]によりてその志を逞くせんとするものであるとの事である。

固より親王は才氣煥發の御方にて、機略もあり、權謀も時としてはあらせられたであらうと思はれぬ事もない。併し假初めにも、孝明天皇を御讓位の窮地に陷れ奉り、自ら女帝の後見者となつて、威福を逞くせん抔の野心の露ほどもあらう筈はない。

（第百）戊午大獄の責任者

孝明天皇と朝彦親王とは終始一貫、水魚の交あらせられた。即ち天皇と親王とが、攘夷の意見を持し給ふ事は、何等不自然の事はない。奈良や京都のみに在したる親王である。京都の宮中にのみ在したる天皇である。其の對外の御意見が合致したのは、當然過ぎる程の當然だ。

如何に御聰明に在らせられるといふも、世界の大勢を察ながらに詳にし給ふべき筈はない。[illegible]

されば御二方の攘夷論は、幕府を困らせる爲でもなく、當局者に對する惡意的の御取計ひでもなく、全く社稷を憂ひ、國家を思ひ給うたる御誠意に外ならぬ事は、何人もこれを拜察するに難くない。

然るに、斯る荒唐無稽の事を以て京都に對し、わけて親王に對したるは、如何にも不都合と云はんよりも、餘りに無理解の事と云はねばならぬ。

併し我等は、總ての過は井伊の方に存して、京都及び有志家方面には絕對に是れ無しとは云はない。どうせ人間相互の仕事である。双方にその失策があり、手違ひがあり、誤りがある事は、當然の事と云はねばならぬ。

問題は責任の有無ではない。その多少である。而して孰れか主、孰れか從である。記して此に至れば、その心事はともかくも、その仕打に於ては、此の時節に大老となりたる井伊直弼に對し、多大の遺憾を感ぜざるを得ない。

即ち一言にして云へば、戊午の大獄は被告の連中も、聊か自から求めたるところがないとは限らないが、しかもその大獄をして、彼が如きに至らしめたのは、專ら井伊その人の責任と云はねばならぬ。

× × ×

井伊は固より德川の爲にも、日本の爲にも、惡しかれと思つてしたのではあるまい。彼としても命懸けの仕事であつて、自らその一身を投げ出して懸つたのであらう。

併し彼は踏出しから間違つてゐる。幕府の當局としては、當然新たなる時態に相應すべく、阿部伊勢守によりてその端を發せられたる、公武合體、幕府と諸大名と、且つ京都とを打つて一丸となし、穩當平正なる政策を以て、此の難局を濟はんとしたる政策を擴張し、更に時勢の推移と共に、その政策に新血液、新活力を與ふべきに、それに反して全く復古的の反動政策を勵行した。即ち、漸く新しき革袋に盛りたる酒を、强ひて再び古き革袋に移さんとし、此が袋を失ひ、酒を失ひ、收拾するところ無きに至つたのは、遺憾千萬と云はねばならぬ。

（第百一）朝廷島津氏に依賴し給ふ

朝廷は前にも申した如く、一方に於ては水戶を賴みとせられ、他方に於ては薩摩を賴みとせられた。然るに賴とせられた

る島津齊彬は意外にも病の爲に逝いたが、しかも朝廷は猶ほ薩摩の君臣が、齊彬の遺志を繼紹し、そのまゝこれを行ふものと考へ、安政五年八月十日、卽ち水戸へ内勅を下し給うた三日の後、近衞左大臣忠熈は當時京都にゐたる薩摩の家老鎌田政純に向つて、密かに至尊の思召を奉じ、成就院忍向——卽ち西鄕隆盛と相抱いて薩摩潟に投じたる月照和尙——をして、京都擁護の事に就き、左の如く御依賴あらせられた。

『夷國一條に付、關東の處置何共不レ得二其意一事共に而、今般被二仰出一候御次第も有レ之、若異變の節有レ之候ても、全體朝廷甚だ御手薄の御事故、自然火急之節は、警衞如何と心痛に不レ堪候。外夷も近海へ來る儀も難レ計、何卒急に極密の手當等有レ之、朝廷火急非常之警衞等相願度、其家格別之由緖遊を以て、其方へ密に賴入候條不二日立一樣急に其計有レ之候樣分而賴入候也。

八月十一日　　忠熈

鎌田出雲どのへ』

×　×　×

然るに[illegible]云々とあるは、[illegible]歟

近が關ヶ原戰後近衞家を賴て島津氏の爲に德川氏に釋明運動をした事を申すのである。斯くて鎌田は左の通り請書を奉つた。

『乃今内憂外患至而不二容易一御時節柄に附、極密之事件當二御内命一誠に以武門之冥加難レ有仕合、感佩不レ堪候。尚一非常之儀御到來之節は、朝廷御警衞向は勿論、殊更於二尊殿一も別段之御由緖柄に附御爲筋之儀必死に精忠奉レ盡格護に御座候間、内外無レ疑無レ之樣、平常斟酌を加へ、早々穩便に手當仕、御配慮不レ被レ爲レ在御威光相立候樣、三位殿(齊彬の父齊興)へも遂二披露一、聊以無二手拔一所置仕度、不二取敢一此段乍レ恐御請奉二申上一候。以上』

斯る次第であれば、忠熈は固より、主上に於ても御嘉悦不レ斜、鎌田に向つて御懷中入の御盃一個を下し賜はり、忠熈も亦た賜物を爲し、鎌田は感激の餘晝夜兼行して歸國したが、彼は途中より病を得て遂にその志を果さず、無念の涙を呑んで、やがてその主君齊彬の後を追ひ冥途の旅に逝いた。

而して此の如く折角に[illegible]した努力は、[illegible]の努力を繰り返し、[illegible]の努力も一時に水泡となつた

(第百二) 水戸の内情

扨水戸の方は如何にと云へば、水戸の留守居鵜飼吉左衛門は六十一歳にして、且つ當時病中であつたから長男幸吉をして勅諚を奉護、傳達せしむる事をなした。幸吉は三十二歳の壯者にて、父を扶けて諸有志の間に奔走したる者にて、彼は表向きには、安政五年八月九日卯の半刻——午前七時——中仙道を經て江戸に下ると宣言しつゝ、その實は『大阪藏屋敷の小吏小瀬傳左衛門が江戸に下る』といふ先觸人足狀を伏見驛人馬繼立所に公布し、大地藏を經、大津驛より東海道各驛に發しおき、日下部伊三次と共に見苦しき垂籠に乘り、八日の夜酉の下刻(午後七時頃)京都を出發した。

此の如く鵜飼幸吉は小瀬傳右衛門の名を冒し、日下部はその僕となり、東海道を潛行して十六日に江戸に着いた。これより先き西郷は、密勅降下に就いて、水戸が果してこれを奉戴實行し得るの力があるや否やを調査すべく、八月十日京都より江戸に到着し、取敢へず水戸家の重臣、安島帶刀を訪うて、その旨を訊ねたらば、安島は

『それは大變である、只今のところでは幕府の嫌疑いや增し相募り、三支藩は愚か、紀藩の水野、尾藩の竹腰迄が幕命を奉じ、邸内に立入つて擁衛し、從つて吾黨の有志家迄が腰を拔かしてゐる今日、とても遵奉は出來ない。先づ京都の方は宜しくお斷りを御願ひ申したい』

と云つた。安島は戸田忠太夫の弟にて、齊昭の最も親信したる一人であつて、手腕家と云ふ程ではなかつたが、人物は確かたものであつた。彼は固より京都有志家達の苦心を諒としたるが、今更ら西郷に向つて、その實情を打明けぬわけにはゆかなかつたのである。

西郷はこれを聞いて尤もと思ひ、翌十一日は、有村俊齋——海江田信義——をば晝夜兼行して上京せしめ、勅諚降下の中止を願はんとしたが、有村が十六日に着京して見れば、勅諚は既に一週間以前に發してゐた。

× × ×

扨、鵜飼と日下部は安島を訪うて、勅諚を奉戴して着府した旨を告げた。安島も豫て西郷からこの事を聞いてゐたが、斯迄早急に降下すべきとは、思ひまうけず、頗る當惑したが、側に

忝くも至尊よりの内勅を下し賜はりたるとなれば、此上は萬死を賭しても遵奉するの外なしと覺悟を極め、夜中に關らず幸吉を伴うて水戸の當主慶篤に見えしめた。

斯くて慶篤は駒込に隱居するその父齊昭の旨を乞ひ、慶篤自ら筆を執つて、その請書を認め、幸吉に渡した。その文は左の通りである。

『謹呈二一翰一候。今月八日の勅諚、御別紙共、無二相違一相達謹で奉二拜見一候。被二仰出一候叡慮之趣、深恐入奉レ存候。併不肖之身、右之鳳諾を奉レ受候儀、誠に以一家の面目感激之至、筆紙難レ盡候と奉レ存候。乍レ不レ及幾重にも盡力仕り、成否は兎も角も、追て可レ奉二言上一候。先御請迄、早々申上候間、宜御奏達可レ被二成下一候。恐惶謹言。

八月十八日

水戸中納言慶篤印

廣橋大納言殿

萬里小路大納言殿

× × ×

斯くて幸吉はこれを携へ、再び引返し、二十七日京都に到着し、直ちに萬里小路邸について復命に及んだ。

問題はこれからである。慶篤は當時大名中に於て、必ずしも水平より多く上つてゐるとは云はないが、又た甚だ下つてゐるとも見えない。彼は先づ中主であつたらう。併し彼は幼時より、父が押込隱居となつて、その跡を相續したるが爲に、父の反對黨の爲に指導敎育せられ、且又たその父齊昭も、反對黨の擁立したる一人として、その子を見、從つて反對黨に對する心を以つて、何となくその子を見るの傾向があり、その爲め父子の間は水臭き事がないでもなかつた。

併し彼は何よりもその家が大事であるといふ事を考へ、何れかと云へば一家安全第一主義者であつて、當初はこの勅諚を遵奉するといふ事に就いて、可成り緊張したが、幕府の老中、太田、間部に說かれ、殊に太田は、

『御前がその樣に强情をお張りになると、掃部頭——井伊直弼——は御前をも愼隱居にし、〔支藩高松藩主〕讃岐守殿に水戸家御相續を仰出さるかもわかりませぬぞ』

と脅文句をその耳に近く囁いたから、彼は忽ち軟化し去つたといふ事である。

これは素より私も、齊昭も予て知るは父に聞くになして、この

も出來ようだ、中納言——慶喜——では、とても六ケ敷から
う。』

と云つたが、果してその通りであつた。

斯くてこの勅諚一件は、水戸家に於ける爾後の内訌の原因たらざるも、その爆發の動機となつた。即ち一切幕府の旨を奉じて萬事幕府の申す通りに恭順するといふ仲間は、所謂俗論黨にして、論外とし、即ち正義黨と稱する仲間の中にも、一方は水戸藩三十五萬石を賭しても、是非此の勅諚を諸大名に回達し、聖旨を奉じて爲すところあらんとし、又た他方に於ては、暫く世間の模樣を見て、然る後爲す所あるべしといふ論にて、これが爲に從來の、正黨、奸黨以外に正黨の中にも又た分裂を來し、遂に三黨鼎立、互に相爭ふに至つた。而して後に至つてこの内勅の返上を、幕府より促し來るや、返上論と、非返上論との爭となり、その結果は、やがて櫻田事變となり、流れて筑波の一擧となつた事は、今此處に詳しく語るを要しない。

此の如く　西に[illegible]
議論一定せず、折角、朝廷の綸みと思召したるものは、その中變もなく、今や京都は全く孤立の姿となつた。當時京都を擁護するものとては、唯だ諸藩の有志、若くは京都に集合する浪人者に過ぎず、何れも烏合の衆にて、統一したる大勢力を以つて、これに臨むといふやうな事は出來なかつた。されば、京都の運命は、殆んど幕府の意の儘であつた。幕府と云はんよりも、幕府の執權者たる井伊直弼の意の儘であつた。井伊直弼の意の儘と云はんよりも、井伊直弼の懷刀であつた長野主膳や、九條家諸大夫島田左近等の意の儘であつた。

謂はゞこれからの戊午の大疑獄は、長野主膳對諸有志の決鬪といふも不可なかつた。而して彼等が當初から注意人物として見てゐたのは、即ち朝彦親王であつた。彼等が親王を注意人物として見たのは畢竟するに、有志家が常に親王を元弘建武の間に於ける、大塔宮の如く見てゐたからである。

先づ浪人者に就いては、常に梁川星巖を惡謀の張本人として

ゐたが、雲上の方々に就いては、常に朝彦親王を斯く見てゐた。例へば京都與力渡邊金三郎より、長野主膳に與へたる書翰に、

『一つ近衛殿より水戸御家來、鵜飼吉左衛門へ御直書度々出候由御上は上書、御名は月照と御認め有レ之由。

一つ青蓮院宮よりも、吉左衛門へ度々御直書參り候由。これは御上書は御稱號御表はし有レ之由。

一つ洛東清水寺山内、成就院主の儀、中山家弟の由にて御同所―朝彦親王―の御使にて、鵜飼吉左衛門方へ折々密談に罷越候由』

とある。これによつて見れば、近衛忠熈、朝彦親王、成就院忍向三人の間に於ける關係がよくわかつてゐる。而して彼等が鵜飼とかゝる往復をなしたる事を見れば、如何にこれが内勅降下に關係のあつた事がわかる。

又た梅田源次郎が、安政五年七月十七日附にて、坪田孫兵衛に與へたる書翰の別紙にも、

『御主上と御同意の御面々は、粟田王、近衛左大臣、中山大納[illegible]言、野宮宰相、八條三位、大原三位も、次に名高し。三條内府公これも同斷なり。九條關白殿下、これは彦根侯へ内通なり。鷹司右府公これも隨分よし。御城使―間部下總守詮勝―御上りに相成り候はゞ、又た大もめと存ぜられ候。御殿樣―酒井忠義―如何の御心中にて御上りに候や。御家來衆殿樣を皇國の罪人に致され候てはすみ申さず、一統腹を切りなされ候御覺悟より無レ之候』

とある。

これは既に掲げたる八月八日勅諚の降下の後に梅田が坪田に與へたる書翰以前の書翰であるが、これを見ても朝彦親王が如何に有志家の間に重きをなして在せられたかゞわかる。即ちこれを見ても、反對黨が宮を目の敵としたのは、止むを得ない次第であつたらう。

又た渡邊金三郎より九月三日附の書狀にも、此の如くある。

『此節之御上方之事、兎角御方々内輪種々探索仕候處、當時の所に而は、左府公、[illegible]、[illegible]殿、一[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]人とこ、[illegible]

王陽明風の學者之由にて　相成の[illegible]

とある。これを見ても、親王の御立場が極めて明白にわかつてゐる。

（第百四）九條關白の辭職

水戸へ内勅降下を一大動機として、井伊黨及び否井伊黨の間の衝突は、愈々切迫し來つた。是迄は双方共、手を代へ品を代へ、陰に陽にそれぐ秘術を盡して相爭つたが、内勅降下の事に至つて、その衝突が切迫となり、猛烈となり、露骨となつた。而して井伊側にては、斯る事も畢竟水戸齊昭の惡謀の致す所と判斷し、水戸に向つて一方には當主慶篤に、内勅返還とは云はざるも、少くともそれを封込める事に強制し、而して苟も正義派と目指され、齊昭の意を受けて惡謀に周旋し、若くは加擔したと思はれる者共は、悉くそれぐ蟄居、幽閉その他の手段を以て取締り、水戸邸を全く幕府監視の下に置いた。而して今は愈々間部を上京せしめて、それぐ有志家の處分此上は最後の打擊を試みるの外なしとて、[illegible]があつた。

×　　×　　×

而してその計畫の最も主なる一は、井伊黨の九條[illegible]せしめて、これに代ふるに正義派の近衛忠煕を以てす[illegible]つた。而して此事は九月二日に至つて、愈々成就した。表向き右大臣鷹司輔煕内勅を權大納言二條齊敬に傳へ、[illegible]條尙忠に旨を諭してその職を辭せしむる事となつた。その[illegible]の寫は左の通りである。

『以二別紙一申入候。抑關白追々不審之件々も承[illegible]部書狀並九日添狀等一件以二三條亞相一及二尋問一候[illegible]返答承候趣にては、尤姦計にて無レ之、唯々[illegible]由、左候へば無罪と申物、關東返答穩和之次第故、[illegible]都合之儀にも不レ及哉。併嚴重に申越候へば忽甚不[illegible]之儀、其節如何可二執計一關白所置に候や。其上風說と乍レ申

ゐたが、雲上の方々に就いては、常に朝彦親王を斯く見てゐた。例へば京都與力渡邊金三郎より、長野主膳に與へたる書翰に、

『一つ近衛殿より水戸御家來、鵜飼吉左衛門へ御直書度々出候由御上は上書、御名は月照と御認め有レ之由。

一つ青蓮院宮よりも、吉左衛門へ度々御直書參り候由。これは御上書は御稱號御表はし有レ之由。

一つ洛東清水寺山内、成就院主の儀、中山家弟の由にて御同所―朝彦親王―の御使にて、鵜飼吉左衛門方へ折々密談に罷越候由』

とある。これによつて見れば、近衛忠煕、朝彦親王、成就院忍向三人の間に於ける關係がよくわかつてゐる。而して彼等が鵜飼とかゝる往復をなしたる事を見れば、如何にこれが内勅降下に關係のあつた事がわかる。

又た梅田源次郎が、安政五年七月十七日附にて、坪田孫兵衛に與へたる書翰の別紙にも、

『御主上と御同意の御面々は、粟田宮、近衛左府公、中山大納[illegible]殿下方なり、久我中納言、[illegible]大納言、徳大寺大納言、野宮宰相、八條三位、大原三位も、次に名高し。三條内府公これも同斷なり。九條關白殿下、これは彦根侯へ内通なり。鷹司右府公これも隨分よし。御城使――間部下總守詮勝――御上りに相成り候はゞ、又た大もめと存ぜられ候。殿様――酒井忠義――如何の御心中にて御上りに候や。御家來衆殿様を皇國の罪人に致され候てはすみ申さず、一統腹を切りなされ候御覺悟より無レ之候』

とある。

これは既に掲げたる八月八日勅諚の降下の後に梅田が坪田に與へたる書翰以前の書翰であるが、これを見ても朝彦親王が如何に有志家の間に重きをなして在せられたかゞわかる。即ちこれを見ても、反對黨が宮を目の敵としたのは、止むを得ない次第であつたらう。

又た渡邊金三郎より九月三日附の書状にも、此の如くある。

『此節之堂上方之中、重立ち候方々内密承はり候處、當時の所にては、左の通り發頭の由、青蓮院宮、鷹司殿、一條殿、近衛殿、二條殿、久我殿、中山殿、三條殿、徳大寺殿、兩中納言、[illegible]人とか。[illegible]

に御座候。乍レ去、この分は何れも、譯も無レ之、百姓一揆の如き人物之由。本文久我殿にては春日讃岐と申す家來有レ之、王陽明風の學者之由にて、格別の強情者の由』とある。これを見ても、親王の御立場が極めて明白にわかつてゐる。

（第百四）九條關白の辭職

水戸へ内勅降下を一大動機として、井伊黨及び否井伊黨の間の衝突は、愈々切迫し來つた。是迄は双方共、手を代へ品を代へ、陰に陽にそれ〴〵秘術を盡して相爭つたが、内勅降下の事に至つて、その衝突が切迫となり、猛烈となり、露骨となつた。而して井伊側にては、斯る事も畢竟水戸齊昭の惡謀の致す所と判斷し、水戸に向つて一方には當主慶篤に、内勅返還とは云はざるも、少くともそれを封込める事に強制し、而して苟も正義派と目指され、齊昭の意を受けて惡謀に周旋し、若くは加擔したと思はれる者共は、悉くそれ〴〵蟄居、幽閉その他の手段を以て取締り、水戸邸を全く幕府監視の下に置いた。而して今は愈々間部を上京せしめて、それ〴〵有志家の處分を爲すべく取計つた。

これに反し有志家側に於ては、薩摩は既に齊彬の死によつて、その藩論も一變せんとし、水戸は今申す通りの情態にて、此上は最後の打撃を試みるの外なしとて、それ〴〵計畫する處があつた。

× × ×

而してその計畫の最も主なる一は、井伊黨の九條關白を辭職せしめて、これに代ふるに正義派の近衞忠凞を以てする事であつた。而して此事は九月二日に至つて、愈々成就した。これは表向き右大臣鷹司輔凞内勅を權大納言二條齊敬に傳へ、關白九條尚忠に旨を諭してその職を辭せしむる事となつた。その内勅の寫は左の通りである。

『以二別紙一申入候。抑關白追々不容之件々も承候上、聞部書狀並九日添狀等一件以二條亜相一及二請問一候處、右返答承候趣にては、尤姦計にて無レ之、唯々輕慮之由、左候へば無罪と申物、關東返答穩和之次第故、格別不都合之儀にも不レ及哉。併嚴重に申越候へば忽甚不都合之儀、其節如何可二執計一關白所置に候や。其上風說と乍レ申

大分悪評も追々承重々甚如何敷存候。既に七月十一日差遣候（御名）書状にも申入候通、唯今は何も不承知候間、旁々御辞職抔存念於（御名）無之、乍去有間敷事乍若不忠不埒之所作有之候はば、假令當時為親族共為天下國家被是申間敷も難測候。何分守於正路被盡忠魂候へば、被對家祖長久之基、左候へば御辞職抔令沙汰之無詳合と申入置候事に候。然ば其後は假令ば是迄有心得違筋合も、即今に被改希守官職被盡忠魂且萬事に無隔意事と安心候處、如前文之次第何共不得其意候。此儘にては讒夷之一條は格別萬事に執柄之所置危存候。各如何被存候半哉、乍去盡國忠御所存なれば御辞職之事

これは實に井伊黨に於ては、青天の霹靂であり、井伊は此事に就いて、當時上京中なる間部へ宛、左の書翰を送つた。

『然ば去る二日、一條殿關白殿へ被参、無拠無紙に御拝付無是非御辞職被成候由承知する處、所司代京著以前に、關白殿を抑のけ不申ては、[illegible]之儀に候故、[illegible]事[illegible]候[illegible]

[illegible]

と、主上[illegible]之御氣質を伺、是を非に申成し候様可成行と實に御迷惑之程御察申候。關白殿御辞職御断とは乍申、未御當職中之御儀、天下の安危に拘り候御大切之位に付、殿下を以て關東之御處置分明に申上候様御先代様被仰含候御趣意も御座候事に付、右一條は是非御取扱御座候様相成不申ては、何分御先代様之思召も相立不申、關東にて御國體を厚く被思召候て之御處置も、却て讒夷に被暸朝廷を御蔑視被成候と之御疑念御晴被、折角御國體を思召候難有叡慮も、却て事端之基と可相成に付、如何様にも御丹精、關東之御處置は御國體を厚く思召候處より、剰発も不被済内條約御許しに相成候と申所之御趣意、叡聞に達し候はば、御疑念御晴れ公武御一致にも可至、左無之ては如何之為に御周旋[illegible]、[illegible]御承知之[illegible]淀次に落入候様可成行と歎息仕候。[illegible]之者共[illegible]御吟味[illegible]人御辞職被成候共[illegible]

樣御忠精可レ被レ下候』

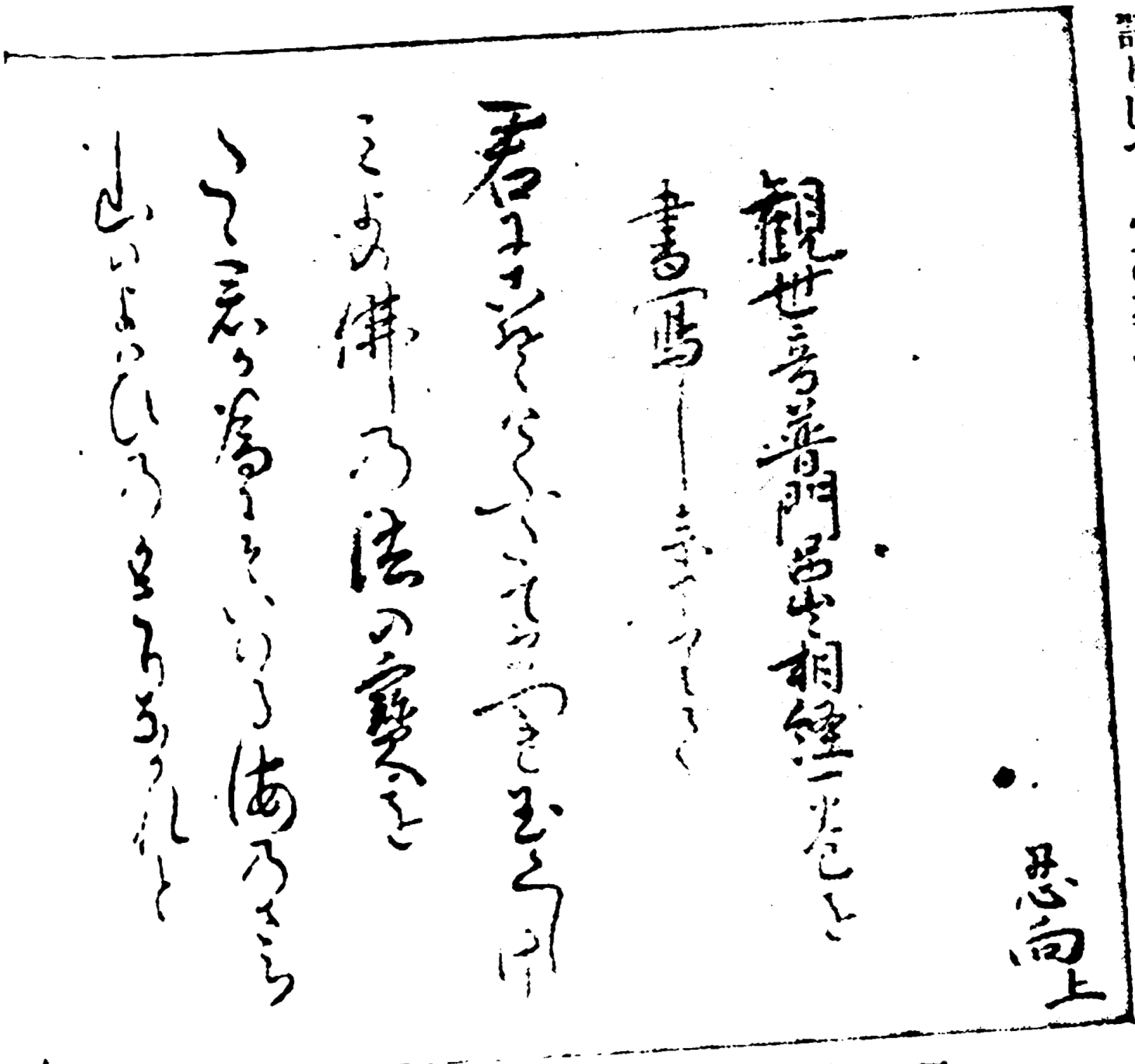
而して此の事件に關し朝彦親王が、至尊の背後に在らせられた事は、固より說く必要もない事だ。

（第百五）有志の決心

當時如何に有志家が最後の決心を爲すに至つたかは、薩摩の有志有馬新七の手記によつて、最も明白である。

『今年安政五年戊午の年の春の頃より、征夷府の政令こよなく淆亂て、醜めき國の夷狄等參來て、大將軍に謁見え、しかのみならず、勅命を背奉り、通商を免許し、條約を定め、彼の邪教寺まで造建る事さへ、夷狄等が心のまゝに成行きぬ。然在るに今掛まくも宸極に照臨坐す、我が天皇命は（御諱を統仁と申し奉る）英明しく、神武く坐て、皇祖神命の御事依しの隨に天地を所知食し、細戈千足國の御威を振ひ、夷狄を掃ひ平げ、浦安の安國と安らけく御代しろしめさむと、綾にかしこき大御心坐しければ、いたく夷狄等の猖獗を憤り、征夷府の暴政を歎息かせ給ひ、再び勅命を下して、征夷府の政の正しからぬを正し給ひ、殊更に水戸中納言にも勅命を下し給ひて、速に國々の國主城主にも叡書を達し、秉政を正し侍る可しと、最と懇に御言依し給ひしかど、中納言果斷なくして、却て奸黨太田（備中守）間部（下總守、兩人共に老中職たり。）が爲に欺罔かれ、勅命を拒み奉り執行ひ奉ることあたはず。征夷府には近江國彦根の城主井伊掃部頭大老職に居て、威權を專にし、異心有りて暴逆を逞うし、彌荒びに荒びなし、恐くも朝廷邊を輕蔑奉り、勅命に背き、種々の曲事をのみ巧みなして、萬の國の秀國祖國なる我が大御國を汚穢し、天皇命の御宸襟を惱し奉れるぞいとゞ無道逆賊なりかし。己れ武滿男道なき身にし有れど、いかで此をよそにのみ見つゝ堪ふ可きかは、甚く切に慷慨み、己が志し同じき友等とかたらひ、武滿都に參上り、征夷府の事情を詳に朝廷邊に奏し奉り、彼奸賊を誅戮ひ、夷狄等を掃ひ平げ、我が故中將君齊彬公の御遺志を繼奉り、（公平常に朝廷を深く崇敬ひ給ひ、夷狄を攘除て皇威を海外に振ひ給はむの御志坐しけるが、今年七月十六日に身退り給ひき、實に天下萬世皇國の不幸とも申し奉る可し。甚と遺憾し）朝廷邊を鎭め奉らむ者ぞと、膽太く思ひ起せるなり。此は秋の半過八月二十九日の夜になむありける。竊に日下部氏（名を伊三治と稱へり。此も今年七月京水戸の殿人鵜飼幸吉が勅書を奉護て關東に下れると同行て伊三治も三條殿の御許にも參て、且別に奉護て下れるもの有り）家に至りて宿

り、水戸の殿人鮎澤伊太夫、征夷府の家人勝野豊作等の人々も集來て、夜もすがら酒飲みかはし、天下の形勢を深切に物語りしつ。寅の刻比宿を立出でぬ。都に疾く行かまほしく』



忍向上人月照筆蹟

これにて彼等の心意氣が察せらるる。斯くて一行は九月七日夜京都の宿屋に着したが、其處には既に西郷隆盛、伊地知季晴、有村俊齋等が先づ在りて出でて迎へた。

西郷は前にも記したる如く、江戸の形勢甚だ不可にして、到底爲す可からざるを見て、この上は京都に出で、有志の諸藩を糾合して朝旨を奉じ、幕府の暴威を制せんと決心し、八月二十四日に江戸を發してゐる。

（第百六）月照和尚

而して彼等の主とするところは固より近衛忠熙であつた。斯くて兎も角も前に記したる如く、九月四日には九條關白その職を辭し、近衛忠熙が關白内覧となつた。我等は此際に於て、如何に月照和尚が有志家の間に立ち、近衛家と有志家の間の連絡を取り、又た[illegible]親王と有志家の連絡をとつたかを考察せねばならぬ。

[illegible]彼は何人であるか。[illegible]は今此處に詳しく[illegible]をする[illegible]

[illegible]

ゐる。これは京都町奉行、小笠原長門守の手にて信海を吟味したるその口書であるが、これにてこの兄弟が如何に働いたといふことの概略が看取せらるゝ。月照和尚忍向は、大阪の町醫者玉井惣榮の子である。彼の名は宗久で、幼年より清水成就院住持藏海和尚の弟子となつた。斯くて忍向はその師の跡を繼ぎ、成就院の住職となつたが、嘉永六年十月寺を出て、行方知れずになつたといふ事だ。その翌安政元年二月弟信海、成就院住持となり、同月忍向も亦た京都に立還つた。これより所々を轉住したが、安政三年より弟と共に成就院に同居する事となつたと云ふ。

斯くて彼等は兄弟共近衞家の歌道の門人となり、詠歌の添削を受け、ゆくりもなく近衞家の祈禱僧となり、やがては國事に就いて彼是の相談相手ともなつたらしい。その弟信海の云ふところによれば、

『去午二月以來左府殿（忠煕）星祭祈禱して日々親敷罷出、蒙二懇命を一、一體左府殿ニ者靜成性質ニ而、忍向儀も性質靜成ものニ有レ之、格別左府殿氣ニ入罷在候趣』

とあれば、如何に彼が近衞忠煕に信任せられたかは、これを以ても知るべきであらう。又た彼が青蓮院宮即ち朝彦親王との關係は、左によつて知る事が出來る。

『青蓮院宮江此者並忍向罷出候儀此者ニ者去午二月右宮自坊に忍ニ而被ニ相越一候節初而面謁いたし夫より三ケ度計罷出候旨忍向者以前成就院住職中、當粟田宮南都一乘院ニ在職被ニ致居一候節、寺務所之譯を以罷出面謁いたし候儀も有レ之候得共、其後青蓮院轉住被レ致候後者絕而不ニ罷在一候處、當一乘院宮ニ者幼年に被レ在レ之候付、青蓮院宮後見被レ致居候儀ニ付、右宮ニ罷出候方萬事之都合可レ然旨、近衞左府殿被ニ心附一候而より、猶又去午二月比宮より旬に罷出候旨』

此處に自坊とあるは、清水成就院の事にて、其處に朝彦親王が微行にて、月照兄弟を御訪問在らせられた事だ。

而してその關係は、朝彦親王が未だ奈良一乘院門跡として在した時に、初まつてゐる。そは成就院は、一乘院の支配下にある關係からである。而して一時宮が一乘院を去つて、青蓮院に轉住遊された後、交通は絕えてゐたが、一乘院後住の宮は幼年にて、青蓮院宮が御後見遊さるゝに就いて、從つて又た忍向との舊き關係が回復せられたといふ意味だ。但しこれは表向きの

事にて、裏には國事が潜んでゐた事は申迄もあるまい。

又た月照和尚が內勅降下に關係ある鵜飼父子との交渉に就いては、左の如く記してある

『同人儀水戸殿御家來鵜飼吉左衞門並同人忰幸吉と懇意にいたし候由、其元ト申者去午七月頃鷹司殿家來小林民部權大輔儀、吉左衞門、幸吉を近衞殿ゟ召連出於ニ同所ニ民部權大輔引合ニ而近附ニ相成候由ニ及レ承居、其後幸吉儀者壹ケ度忍向ゟ面會して、自坊ゟ罷越、其節菓子一箱相贈候由、忍向儀者右近附に相成候後、度々右兩人方ゟ罷越候趣ニ及レ承居候得共、如何樣之川向ニ而罷越候哉談之趣意一向相心得不レ申旨』

斯る次第で現に青蓮院宮は、安政五年三月、月照に向つて、左の通りの御直書を與へ給うた。

『此度墨夷渡來に付、先達而より其一山之大衆丹誠を凝らし祈禱之事神妙之至也。猶此度朝敵佛敵退治祈禱之事賴入存候。依而判金一枚差遣候。可レ然取計賴入候也。

三月廿五日　　　　　　　　尊融』

此處に尊融とあるは、即ち朝彦親王の御名である。

×　　　×　　　×

猶又た有馬の『都日記』にも、如何に月照が近衞家と諸有志の間に立働いてゐたかが記されてある。即ち左の一節を見よ。

『九月八日天氣よく晴れたり。朝疾く起出で、隆盛より月照和尚に余が參上りし由を文以て申しおこせたり。程なく和尚參られき。此の人は近衞殿下の御寵遇深き人にて、人から溫厚にして、愼謹深く、且忠誠の雄心確く、皇威を振起しなん大志を起し、淸水寺の住職を旣く退て、隱居の身となり、此春より此かた一日も安閑に居る事なく、種々に朝廷の御爲に心力を盡したる人なり。如此て關東の事情形勢を詳に語り、且其を巨細に書記したる書をまゐらせければ、和尚即て此を懷にして、近衞殿下の御許に參らる。』

これは西鄕から有馬が京都に到着したる旨を月照に申したるに、月照やがて來りたれば、有馬は關東の事情の報告書を書して月照に與へ、月照はそれを懷にして近衞家に差出したのである。而して一節は次の節を見よ。

『[illegible]

及びき。」彼の事情を書記したる書は、近衞殿下に留置せ給ひ、叡覽に備奉り給ふ可きよしのたまはせたるよし、甚と〲畏くうれしくてこそ侍れ、和尚申の下刻頃歸られたり』

卽ち有馬の書は月照を以て、近衞忠煕の手を經て、やがては乙夜の覽に供へらるゝ事となつたのである。

猶ほ當時の事に就いて、有馬の記したる所は左の如くである。

『此月二日九條殿下御所勞の由にて、關白內覽御辭退坐て、九條殿下關東の奸黨に御內通有りしに依て、御辭退ありしなり。委くは別に記せるものあり。同三日に主上聞食給ひ、卽て近衞殿下に內覽宣下坐て、內外の機務を預聞かせ給ふ。近衞殿下は忠誠の御志し確然坐て、關東の奸賊等さま〲に謀計をめぐらし、賄賂樣の物以て御心を惑し奉らむとすれども、少しも御動搖給はず。殊更主上未だ東宮に御坐し時より、東宮の傅にて忠誠に勤み給ひし故に、主上の思食も他に異にして、かく內覽宣下も坐しけりとぞ。且三條殿下鷹司殿下太閤は志しなき方に坐しけり共に忠誠に坐て、左右の大臣なむ坐しける。親王には青蓮院粟田宮坐て、英邁く絶倫たる御天質に坐て、共に朝廷を輔佐奉り給へる故に其他中山中納言卿、大原三位卿、久我大納言卿、二條大納言卿、阿部宰相卿などの御方を初め、忠義の御志しある御方鮮からざりき。關東の奸賊等忌諱奉ること甚と深し。然ど朝廷正しく、剛健英明に坐ば、彼等いかに暴逆を逞うし、彌荒びに荒びたすとも必ず大直日の神見直し聞直し坐て、卽て奸賊の荒びは止みなむ物ぞ。されば皇道豈に振興せざらめやも』

これを見ても如何に朝彥親王が、有志家の間に推戴せられ給ひ、又たそれに對して反對側より危險人物視され給ひたる事を察すべきであらう。

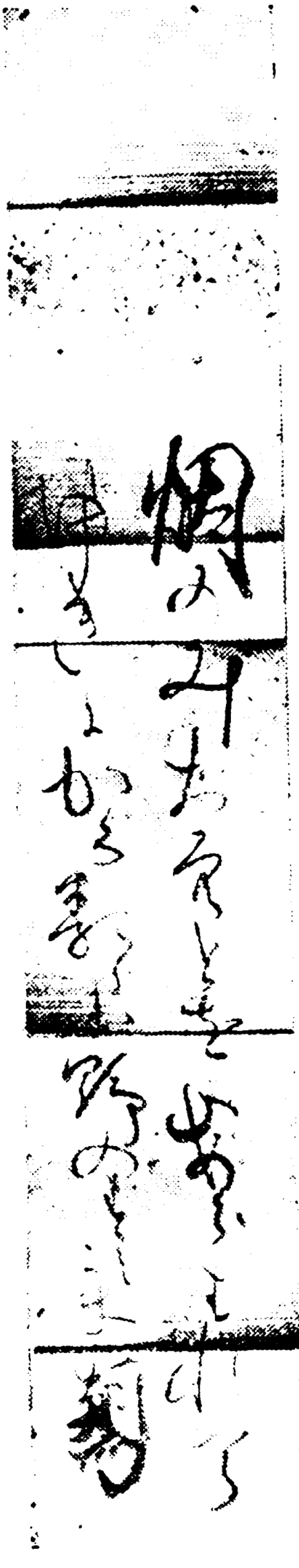
（第百七）井伊黨と有志家との對抗

今や京都は愈ゝ兩黨決鬪の巷となつた。所謂、彼我に先んずる乎、我彼に先んずる乎といふ場合である。幕府側にては、新に所司代となりたる酒井忠義は九月朔日、愈ゝ來着して、親しくその職務を執る事となつた。彼は固より井伊の命を受けて來たものである。而して彼が到着より中二日をおいて、前にも述べたる如く、九條關白は辭官免官となり、近衞忠煕は關白內覽となり、朝廷は全く正義派の手に歸した。酒井としては、恰も是れ足元から鳥が立つた事にて、その當惑知る可きである。

『九日天氣よく晴れたり。朝いまだほのぐらきに和尚參られたり。我黨謀て謂く。世態かく成りし上は、速に有志の國々の國主城主達に再び勅命を下し給ひ、奸賊を征伐せ給はむこそ然らめ。殊に越前土佐等の國主等は、水戸に勅書下れるを聞て、願くは御寫にても拜見奉らんと請望まれたり。然れば此度は斷然と國々に勅命下し給ひなば、長門の萩、因幡の鳥取の城の主等も直に馳參て、勤王せられなむ。さも有らば、東西一時に振興て、奸賊を誅はむに何の難き事有らむや。和尚此を聞て、再び勅命を下し給はむ御事は容易からぬ御事にて、此はとても成難からむ。朝廷の御評議成難き所以も坐すとぞ。下より奉レ窺とはまた格別の御事も坐す事になむ。去八月に水戸に勅命を下し給ひし時に、近衞殿下、三條殿下など御談合坐て、各其が所緣に依て、勅命の御寫を遣し給ひたれば、越前土佐等には三條殿下より遣はし給ひしなるべきを、然は無かりしにや、甚と不審しと申さる。余曰く越前土佐には御遣はしなき事疑ひなし。此は余慥に聞ける所にて、藩侯達も度々此事を申されたりと云へば、[illegible]

にぞ有りける。此月朔日に、三河國吉田の城主本多美濃守が代として都に參上れり。美濃守は脇坂中務大輔の代として去年の夏五月に所司代となりしが、聊か故ありて、所司代を免されて同六月に江戸にかへれるなり。若狹守は天保[illegible]年より所司代を勤め、九ケ年程も都に在し者にて、聊學才有りて山崎闇齋の學流を崇信ひし者にぞ有りける此は余彼が侍讀たりし山口貞一郎重昭號を管山と云ひける人の許に、學問の爲に居たりし事有る故に、委しく其が學風を知れるなり。然るに此度井伊等が奸謀に與して、近衞殿下に内覽宣下在しけるを關東に仰下さるゝ事は暫く御猶豫あらせられ度と、頻に奉レ拒りき。此はいかにもして九條殿下を再び關白内覽に奉レ復らずしては、彼等が奸謀なり難き故なり。尤故事内覽宣下坐しける時は、關東に仰下され、將軍より御請申し給ふことなりとぞ。よつて若狹守は奉レ拒りしとりことなり。然るのみならず、都に有りける忠義勤王の志ありける士を探索て、捕ふること嚴重なり。此時捕はれける人々は梅田源二郎、山本貞一郎、池内大學、等の人々なり。捕はれたるもあり、或は窃に逃れたるもあり。我等をも彼探索ること甚と嚴重なり。若し我が輩を捕へむとせば、いかでやみ〳〵と拱レ手て捕はれには就まじ。刃向ふ奸吏を悉く討取り、切死をこそせめと、悠然にし一酌など飲み、種々の最期に及びけるも勇々しおりきっ[illegible]

三萬兩を與へて都の所司代たらしめたり。因て彼共を厚み忽ち奸黨に與みしけるなり。位官財寶に忽ち本心を失ひ、朝廷を輕蔑しめ奉り、暴逆を恣にせしは、實に禽獸の所行なりけり』



朝彦親王御筆蹟

以上は薩藩の志士有馬新七の所記である。然るに今や有志家の間に周旋したる月照さへも、最早井伊派の毒手に罹らんとするの危險に瀕して來た事情は、左に掲ぐる有馬所記によつても知らるゝ。

『十日天氣よく晴れたり。朝に和尚參らる。越前土佐等の事昨日近衞殿下より三條殿下に御談ひ給ひけるに、いまだ勅書の御寫は遣はし給はざりし由にて、然と御談坐て遣し給へるにり使來りて　隆盛に近衞殿　の御こせられたり。即て隆盛參られき、此時都にもコレラと云ふ病流行て人多く死しぬ、隆盛其が治法を榕仁藏が江戸にて功驗有りしを上梓せしを、別に水間氏なる醫師が治法を一法加へて都にて上梓せるを、都の人々に施行はむと共にかたらひて、其が看板は余筆を執り、文は秀緒みやび文に面白く作られたり。其を鍵屋が店に出しければ集來る人引もきらず、都て千五六百餘人にも及べり。甚とおかしき事にこそ。申刻頃に、隆盛歸られき。然るに和尚も所司代より嫌疑深く、探索ること嚴重なれば、奈良に所縁有れば彼所に赴て難を避なむと思へる由にて、彼是かたらひけるにぞ委しくは別に記せる物あり。且余は勅書の御寫し三條殿下の御直書勅書の御寫といへども實は御内勅の譯なり、其は再び勅命を下し給へる事の容易からぬ故なれば、御寫を遣したまへるなり。を奉護りて、早々關東に下り、土佐守に遣はし、越前宇和島の兩侯には、土佐守より達せらるる樣にいへど、近衞殿下のたま

はせる御言を畏み奉りき。且阿波因幡兩侯の御受書の趣をも詳に土佐守にいへと近衛殿下のたまはせたり。兩侯にも勅書の御寫を遣はし給ひしかば、謹て畏み奉り御受に德川家を御扶助の思食誠に難レ有奉レ存候萬一有レ事時は右の勅書の御寫を捧げ奉りて一番に馳參り忠勤を可レ奉盡云々の趣なり。加賀の御受書も有れど、其は云ふに足らざるものなり。其他朝廷の機密に關係る事共且掛卷も畏き主上の叡慮の程をも竊に拜聞奉れる事も種々ありしかど、恐ければ此に記さず。斯く朝廷の重き機密の御使を余が如き卑賤しき者に命じ給へる御事、時勢とは申ながら、誠に恐き辱きこと何と言擧せん使もあらず。惟泣涕て畏み奉るのみ。たとひ身は碎け、骨は粉に成ぬとも、此御使を首尾能く奉レ勤て、即て擧義の策を決定て、再び都に馳上りなむものぞと思決定たり。季靖と北野の邊に居所をしめて潜居ることなど豫めかたらひき。斯くて今夜の深更に發足を定む。隆盛は今夜の曉天に象俊と共に和尚を送りて、奈良に赴行くに定め、季靖は後にのこりて、都の事情を窺ふになむ定めたる。此の後は阿野宰相卿より近衛殿下には事情を申し給へるに決定れり。此は阿野卿には近衛殿下よりのたまはせ置かせ給へる由になむ有りける。即て酒宴を催して種々の會議に及べり。隆盛象俊は和尚を送り、若し路に[illegible]隊を率[illegible]直に[illegible]死に決定たり。[illegible][illegible]

れを告げ、御靑箱を首にかけ嚴重に奉護りて、驛馬にうち乘り、都を立出でたり』

× × ×

これより以後、西郷、月照の事は詳しく云ふ迄もなく、九月十日、即ち近衛忠煕が關白となつて未だ一週間もたゝない時に、關白の最も愛したる月照は、その身を京都に容るゝ地なく、西郷隆盛、有村俊齊にまもられて、京都を出ねばならぬ仕末となつた。

而して彼はやうやく九月二十四日に安治川口を出帆し、西郷は十月十三日鹿兒島に歸着し、月照は筑前の平野國臣に護送られて、十一月八日鹿兒島に到着し、而して兩人が相抱いて薩摩潟に投じたのは、十一月十五日の夜半であつた。

彼等既に此の如し。即ち一般有志家の事、又た知る可きである。而してこれと同時に、近衛忠煕、更に進んで朝彥親王の御身上が如何に危險に瀕したかは、是亦た必然の勢である。

(一年續稿しました本稿は一先づ本號を以て打切りに致します ― 記者)

文學の一大殿堂

漢文叢書

刊行書目と著作者◁

中…

論語 全一冊 東京高等師範教授文學博士 宇野哲人

孟子 全二冊 東京高等師範教授 内野台嶺

莊子 全二冊 第八高等學校教授文學士 坂井喚三

老子 全一冊 國學院大學教授文學博士 小柳司氣太

韓非子 全二冊 山形高等學校教授文學士 平澤東貫

日本外史 全四冊 東京高等學校教授文學士 賴成一

東京高等師範教授文學博士 中村久四郎

十八史略 全二冊 陸軍教授 鹽野新次郎

文章軌範 全二冊 陸軍教授 高成田忠風

古文眞寶 全一冊 大東文化學院教授 近藤正治

唐詩選 全一冊 東京帝國大學助教授 佐久節

豫約募集 内容見本進呈

▽洋裝四六判總布上製各卷約六百頁
▽配本は昭和四年一月ヨリ向十八ケ月完成
▽申込金貳圓五十錢每月拂貳圓五十錢
▽全額拂込金四十圓(申込金不用)

税料一冊ニ付市内六錢地方金十四錢全額拂ハ書棚無代贈呈ス

振替口座 東京八一一五　**弘道館**　東京神田北神保町　所

石川啄木全集

豫約規定

□體裁　本文四六判九ポイント、パラルビ附、一册紙數平均約五百頁內外、洋裝函入美本。

□頒布方法　全五册、豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日　昭和三年十二月第一卷を刊行し、爾後每月一册づゝを刊行し、昭和四年四月を以て完結す。

□申込　先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戾し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會費　（一）每月拂壹册に付　壹圓。（二）一時拂（全五册）　四圓八十錢。

□送本料　會費の外に、左の送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送料付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市內六錢。書留は六錢增。

□拂込方法　振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやうに御拂込み下さい。但し切手代用は一割增に願ひます。

申込〆切　昭和三年十二月廿五日限　◇發行所　東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

石川啄木全集總内容

(△印はすべて絶對に單行本とならず新らしく本全集に收容さるゝもの。)

第一卷(小說集)

雲は天才である。葬列。△漂泊。病院の窓。△菊池君。二筋の血。天鵞絨。△刑餘の叔父。△その人々。鳥影。葉書。(十一篇)

第二卷(小說・小品集)

(小說)赤痢。足跡。△故鄉に入る。△無題。道。△底。△札幌。△青地君。△不穩。我等の一團と彼。△夫婦づれ。△父と子。△窓。△連想。△宿屋。△酒田川丸の船客。△村長の上京。△古外套。△束縛。△島田君の書簡。△金字塔。△空想。△父の杖。△追想。△エピソオド。△塵の悲み。△無題六篇。

(小品)△あきの愁ひ。△牧舍の賦。△高調。手を見つつ。(三十六篇)

第三卷(詩歌集)

(長詩)あこがれ(第一集)。△秋風高歌。△西伯利亞の歌。あこがれ以後(第二集)。黃草集。ハコダテの歌。△幽思。心の姿の研究。同(補遺)。呼子と口笛。散文集。(百六十一篇)

(短歌)△秋草。△五つ星。△にしき木。△玫瑰。△ほとゝぎす。△雜詠。△綠叢。△明治四十一年の作。△同四十二年の作。△同四十三年の作。補遺。△雜詠。「一握の砂」。「悲しき玩具」(一千五百八十九首)

第四卷(評論・感想集)

△詩談一則。△樗牛會に就て。△漂民村より。△秋草一束。わかば衣。閑天地。△岩手縣師範學校校友會雜誌を讀む。△「小天地」豫告・卷頭言・社告。△古酒新酒。△「紫玉遺稿」序。△林中書。△六月(明治四十年)の雜誌界。秋風記。綱島梁川氏を弔ふ。一握の砂。△初めて見たる小樽。△主筆江東を送る。△超人と凡人。雪中行。△小樽日報と余。△豫算案通過と國民の覺悟。△新時代の婦人。△雲間寸觀。卓上一枝。悲しき思出。△日曜通信。△胃弱通信。△汗に濡れつゝ。△百回通信。△北海の三都。△ヒマナ時。△樗牛死後。△文泉氏に與ふ。△大硯君足下。食ふべき詩。きれ〴〵に心に浮んだ感じと回想。文學と政治。一年間の回顧。我が最近の興味。硝子窓。卷煙草。性急な思想。△文學の値下。△NAKIWARAIを讀む。△吉井君の歌。△窓の内・窓の外。△暗い穴の中へ。△農村の中等階級。一利己主義者と友人との對話。歌のいろ〳〵。△歌集「嘲笑」序。時代閉塞の現狀。郁雨に與ふ。△第十八號室より。△平信。△病室より。△トルストイ翁の論文。△新しい歌の味。(五十九篇)

第五卷(書簡集)

書簡(三百十六通)(内百四十六通未發表)。年譜(金田一京助編)

○各卷詳細なる解說を附す。

上中卷發賣

大佛次郎著

赤穂浪士

忽八十版

價壹圓五拾錢
送料廿四錢

從來のありふれた舊講談はあまりに俗惡で事實に遠い忠臣藏であつた。本書は大衆文學の權威大佛氏が久しく苦心した劃期的の名作。正しく新しき忠臣藏で我國民が必ず讀まなくてはならぬ一書。藝術的香氣高く、識者が見て義士觀の絕對的正當なもの、最も趣味深き一書と激賞措かざるもの、全國各家庭必備の良書。

（本書ほど我國民より熱讀されし一書あるを聞かず。本書ほど賣行きの飛ぶが如き書あるを聞かず。明治より昭和までのうちで本書は慥に大衆文學の大王）

新しく

新刊

マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

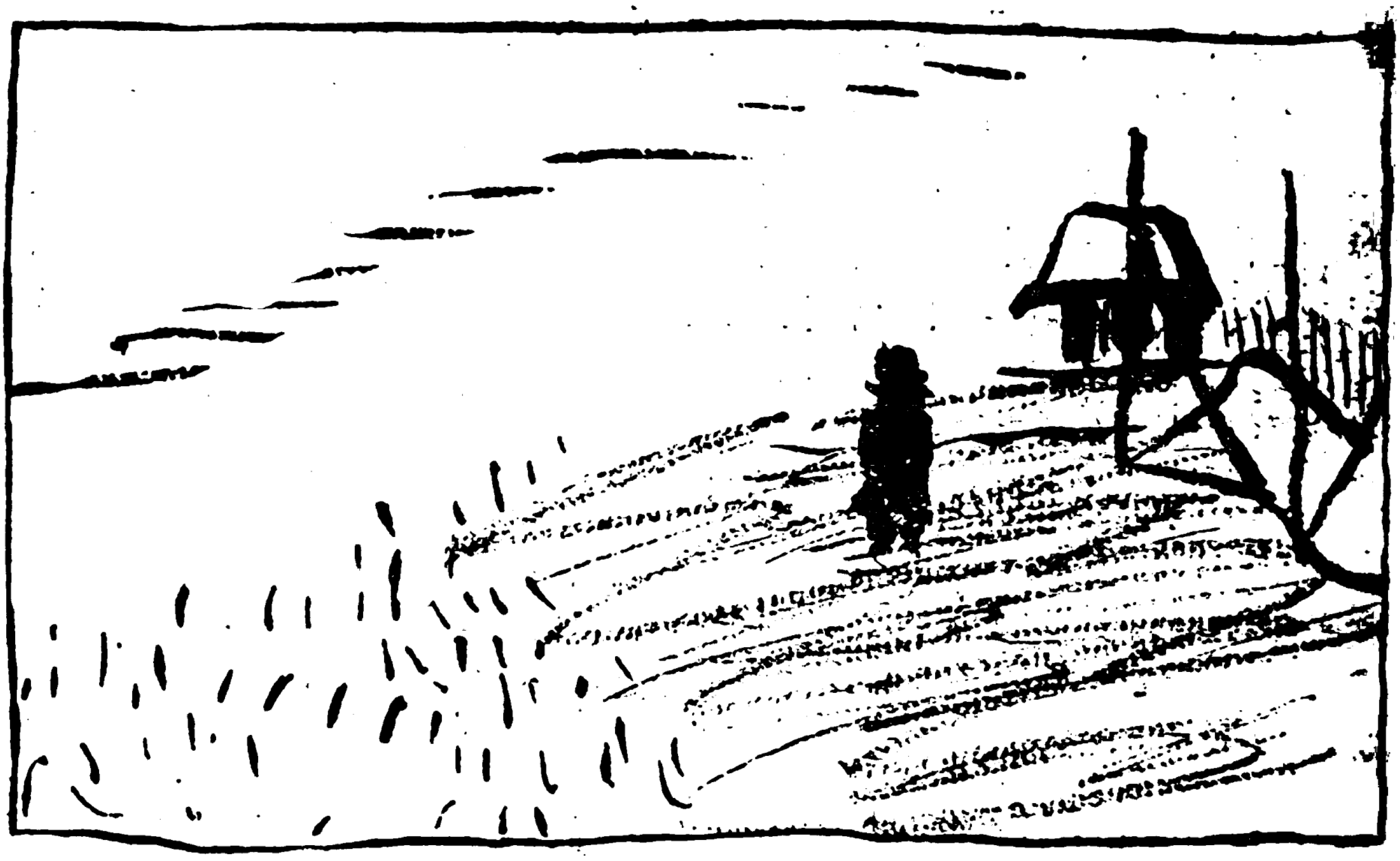
讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそれはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解説はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の内容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る。程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中蒐め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

菊判クロース裝　定價三圓卅錢

四一五頁　索引六頁　送料十八錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪　神戸　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌
東京＝神田・三田・早稲田・丸ビル



赤い湖

金子洋文

一

「今晩はお新さん。」

と、外で呼ぶ聲がした。

「誰け……」

答へがなく、外で躊躇してゐるらしい樣子なので、お新は新聞をほつぽりなげて戸口に行つた。柱に手をかけて半身を突き出して眼を集めると、薄明りの中に、牡丹の前掛が浮いて見えた。

「おや。お房さん、這入つてたんえ。」

「お新さん活動見に行かねすか。」

「活動見に？」

お新は一寸不審に思つた。お房は同じ處女會の會員だつたが、これまで親しく交はつ

たことはないし、こんなことは珍しかつた、が、彼女は深く氣にとめず、一緒に出かけて行つた。

ある新聞社の宣傳と慰安を兼ねた巡回寫眞で、二時間とかゝらなかつた、寫眞も人氣よかつたが、それより髪をきれいにわけて赤いネクタイをした、やゝ小太りの辯士が村の娘たちの心を動かした。

歸途もお房は彼女から離れなかつた。

二三の友達と別れて二人になると、お房が言つた。

「お新さん、今度新しく出來た蕎麥屋さ行つて見ねえすか、東京蕎麥だとえさ。」

お新は更に奇異に思ひながら、

「おらあ、錢こ持つてねえすて。」

「蕎麥位おごるから。」

狹いバラック建の、カフエ兼蕎麥屋の土間に腰かけて二人はかけを一つ宛食べた、お房は更にコーヒーをすゝめたが、お新は斷つた。

お房はコーヒーをふう〳〵すゝりながら言つた。

「さつきの辯士な、お新さん、きれいな男だつたすな。」

「赤いネクタイして、東京でもハイカラの方だすべ。」

「お新さん夢中だつたすて。」

「嘘、[illegible]知れねえから」

お房は聲をあげて笑つたが、それから急に眞面目くなつて、一寸眼色をかへた。

「あの人な、北川の笹さんに似てゐたなんす。」

お新は對手を正視して、

「どの人よ。」

「今晩の辯士えさ。」

「あ、さうか。」

お新はのんきに笑つて言つた。

「さう言へや、何處か似たとこあるすな、どつすも氣障でハイカラなところなぞ、……あの人も口も八丁、手も八丁……。」

笹と言ふのはお新が一年前まで奉公に行つてゐた地主の若い支配人だつた。

「あの人大學出だすべ。」

「嘘、嘘、大倉の商業學校だす、法螺吹きだからねは……。」

「まあ。……」

「どうしてそんなびつくりした顏するのけ。」

「そだつて、お新さんはあの人のお嫁さんになるんだすべ。」

「[illegible]」

「[illegible]」

から。」
お新は空の丼に眼を落してくすりと笑つた。
「さうでねえ………さうだすべ、やつぱりさうだすべ。」
今度はお房の顔をまともに見てやはり無言で微笑ひ續けた。
「おかしいな。お新さん、…………何としたなけ。」
「…………。」
「嫌ひけ、それとも。」
「嫌ひだえ。」
「憎んでるな……あの人お新さんを棄てたのけ。」
「うゝん。」
「それだと、どつちけ。」
「どつちでもない。」
「では、あの人のお嫁にならねえのけ。」
「誰があんなハイカラと………。」
「それでも湖水へ舟で行つたこともあるすべ。」
「おらの本家のお兼さんねは、今、笹さんに首つたけだから。」

二

湖水の上には星が一つぱいきらめいてゐた。

九月のやゝ冷え初めた風が、袂から、彼女の豐かな肌にすべり込んだ。

一人になつて、お新は今夜の不審を漸くとくことが出來た。お房は本家のお兼から唆かされて、笹に對するお新の心をさぐらうとしたのにちがひない——。

お新の心に輕い不快なものが下りて來た、それは戀情と少しもかゝはりない、たゞ漠然とした感情だつた。この説明できない感情は、お新一人のものでなく、お新の一家が、隣り合ふお兼の家にもつ感情だつた。そして、それがお新の家で新しい建築にかゝつてから、はつきり人々の胸にひゞきを傳へ始めた。

路傍にのびてゐるあかしやの枝が、やゝ熟してゐるお新の頬にふれ

た。彼女は立止つて一枚の葉をとつて、それを脣へあてゝ吹いた、すると、不快な感情がやゝ遠のいて、少し前着樂屋でお房に戯れた微笑が自然に浮んで來た。——

——(赤い・青)——

月の美しい夜だつた。

彼女の室は狹くて汚なかつたが、東に面してゐて左右は田家と杉林に遮られてゐたが、窓を開くと少しばかり湖水を見ることが出來た、そして陽も月も林をはなれると、まつさきに彼女の室を訪れた。

すつかり片づけて、お湯にはいつて床にはいつたのは九時過ぎだつた。窓のすり硝子に一めん月光がふり注いで、室は晝のやうに明るかつた。そして蛙の聲にぼんやり耳をかしてゐる間に、彼女はぐつすり寢入つてしまつた。

幾時間か經て、彼女は呼び起されて眼をさました。(もう朝かしら)と狼狽てゝ呼吸を深くのんで眼を開いたが、何も見えなかつた。

「お新……………」

枕に近く男の聲がした。低くふるひを帶びて二度つゞいた、すると彼女の眼は月光に[illegible]みを感じ、、、、、、、、、、、、、、、[illegible]

[illegible]しくふるえた。[illegible]

[illegible]

蒼ざめて歪んで見えた。——暫く經て彼女は漸く男の名を呼んだ。

惚れてゐたんではない、またさうなつてからも強い戀情も起らなかつたが、何かしらお新を樂しませた。そして周圍の總てが新しい鼓動と色彩を帶びて彼女の眼に映つた。

幾日か經て情事に慣れてゐる男は數々の、、を強ひ始めた、それが彼女を苦しめた。男と並んで甘いことを聞されてゐる間は嬉しかつたが、そのことに及ぶと、自分の苦痛と男の醜さを冷やかに客觀するに過ぎなかつた。

「お前は男鹿石だ」と男は言ひ始めた、もう、甘い、優しい言葉を一つも言はなかつた、來てはすぐ歸るやうになつて、自然彼女の心も愛情のない男鹿石と化して行つた、そして男がある女教員と知り合つてから、二人の間は支配人と女中の以前に歸つて行つた。——

その事を思ひ出す度に、快よい微笑が彼女の面に浮んで來た、それは過去と現在の相違からくる微笑だつた、お新には氣障で、ハイカラで、出鱈目の男には少しも惚れなかつたが、彼のはげしい戀情を思ひ浮べると、彼に逆つたのを[illegible]へることが出來なかつた、かつてに苦し[illegible]

[illegible]

潤次郎だつた。——その姿につきあたると、彼女達へ[illegible]

らりとすてゝ急に元氣よく歩き出した。

(早く發て早く起きるんだ。)

三

新しい家の普請にかゝつてからお新一家は五六丁はなれてゐる叔父の家に泊つてゐた。起きて裏の井戸に顏を洗ひに行くと、隣家の[illegible]叔父が田圃から歸つて來た。

「何處へ行つて來たのけおつ父……。」

お新は聲をかけた。

「田圃を見まはつて來たがな。お新ちやん、[illegible]

た。」

「たんしてけ。」

「又、今年もお前とことに[illegible]

も三石はとれるな。」

前とこは……。」

「五六[illegible]」

「へえ、五六[illegible]

ぜいたくに」

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]

重吉のことを話すと金作は讀んでゐた本から眼をはなして笑つた。

「肥料を餘計やつたたけでうまく行くもんか………。」

「それぢや、おつ父の鍬に何か仕掛あるのけ。」

「肥料の按排が大事さ」

　そして金作が堆肥の緊要な所以や、窒素、燐酸、加里の配合を講釋したが、彼女は少しも聞いてゐなかつた、一刻もそこをはなれて普請場へ行きたかつた。お義理に鳴子を二三度ならすと、

「兄ちや、お茶がさめるから普請場へ行つてるすて………。」

　講釋中の金作はあきれて驅けて行くお新の後から聲かけた。

「早く歸つて來いよ、おらあ今日行つて鷄小屋をこしらえるから。」

「あ、すぐ來るす……」

　畦道を踊るやうに急ぎながらお新は振向きもせず叫んだ。

「ほう、ほう、ほう。」

　金作は笑つて彼女に近い鳴子をならしつゞけた。

「ほう、ほう、ほう。」

[illegible]

[illegible]

樂しまなかつた。彼女は四五日前から清次郎が特にちがつた眼で自分を見ることを知つてゐたし、朝屋根で仕事をしてゐる時も、彼女のあらはれる途へ眼を配つてゐることも感づいてゐた。だから、家からすぐに見える途の屈折點までは大急ぎに驅けて行つても、そこから彼女は反對にゆるゆる歩行した、その方が他人に疑はれぬやうなことがなく、男と見合ふ機會が多かつた。

　いつものやうに、お新は途の屈折點で歩行を止めた、そして何か秘密をのぞき込むやうな様子で、前身を屈めて、遠くを眺めた、が、落膽して頭をふつた、新しい屋根には誰の姿も見えなかつた。

　不思議に思ひながらお新は再び途を急いだ、そして家近く來た時、裏の方で罵り騷ぐ人々の聲をきゝつけた。

四

「おい、物事には道筋と言ふものがあるもんだぞ、一言の挨拶もなく原野をとりはらふなんて狂人のすることだべせ。」

「大きなお世話だ、おらあ財産の原野おりぶつこわしたところで誰人から文句言はれることなかべさ。」

「[illegible]」

「おつ父、默つてゐてけれ、お前が善人たもんで高利貸の[illegible]ツ、勝手なことをぬかしやがる……やい源藏、昨日まで瀧次とこの屋敷、どうして急に手前とこの屋敷になつたか、それから先づ說明して見ろ。……」

その他色々な怒り、罵る聲がまぢつてゐた、が、お新の耳には非常にいきりたつてゐる頭梁の聲と、それに應へる隣家の源藏の聲と、頭梁を抑へやうとしてゐる父の聲しかはいらなかつた。と、同時にこの騷ぎの直接の動因は不明たつたが、隣家に對して永い間漠然と感じてゐた不快なものが、初めて形となつてあらはれたことを彼女は知つた。

お新はその場に近づいて人々の肩越にのぞき込んだ、昨日の夕方まで少しも異變のなかつた高い糸柳の垣根がこと〴〵く無殘に切り倒されてゐた、前夜おそく源藏一家が總がゝりでやつた仕事に相違ない、それは彼等が永い間お新一家に抱いてゐた憎しみの多量を示してゐた。彼女は切り倒された垣根を隔てゝ對峙してゐる隣家の人々を見

「おつ父、なんして默つてゐるどこけ、談判しれや、何ぼ高利貸でも他人のもの無斷で切り倒していゝことあるものだこけ。」

それにつゞいて頭梁や大工たちも罵りつゞけた。

「さうだ、さうだ、瀧次さん、お前かあまり善人だからこの惡黨勝手な眞似するのだヤ。」

「まるで强盜だ、强盜でなかつたら、夜、夜中こんな無茶なことをするもんか。おつ父、こんな野郎に話したつて解られえ、駐在所へ訴へ出ろよ。」

「訴へたかつたら何處へでも出て見ろ、おらの方ではちやんと譯へがついてしたことだぞ。」

「そだが源藏さん……」と、瀧次はお新を叱りつけ、頭梁を和めて言つた。「お前さんも知つての通り、おらあの家こゝへ引移つてからもう二十年以上になるすて、その間何でもなかつたのに急にこの垣根をとつぱらふつてどう言ふ理由たす、お前さん、何か證據を持つてゐる

らしい口吻だが、はつきり言つてくれねすか。」
「おらあお前となら對手なつて話してもいゝ、源次さん、おらの方ではこの何十年間十四坪の屋敷をお前とこにとられてゐたのだや。」
「そんな馬鹿なことあるものだてけ。」
「ほら、これが證據だ。」と、源藏は懷から圖面を書いた半紙を取出して言つた。「こりや役場の帳面からうつしたもんだが、お前とこの屋敷は小路からはかつて百坪の筈だすべ。」
「さうだす。」
「ところが實際測つて見ると百十四坪ある、それだけおらの所では今までお前とこにとられてゐたのだす、垣根から約一間おらの方に喰ひ込んでゐるす、そんなら垣根をとつぱらうとどうせうと、おらの勝手だすべ。」
「そんなことわかつてゐたら、普請前になぜ一言注意しなかつたどこか、家が殆んどできかゝつてから言ひ出すなんて、義理も人情も知らねえ奴だ。」
それが源次郎だつたので、お新の胸に嬉しさでどきんと鳴つた。
頭蓋にとなつた。
[illegible]
[illegible]

「さあさあ見やがれ。」
と、源藏の女房が叫んだ。
「鬼婆」
と、お新がどなりかへした。
それから人々は垣根をはなれて憤りながら地面の測量にとりかゝつた。

五

お新が知らしたので兄の金作も作小屋から驅けつけた。家の周圍はこのことを耳にはさんだ部落の人々で黑くたつた、人々は無殘に切り倒されてゐる糸柳を眺めながら、口々に源藏の冷酷を憎んだ。
大工達は拾ひあつめた繩の片を一筋に結んでそれで測量を始めた。先づ小路の溝板から斜に倒された垣根まで測つて見て、それに大工のものさしをあてゝ間數に換算した、八間と一尺あつた、この間數はたしかに登記してゐるものより六尺近く延てゐた、二度測つて見たが、前と五寸の相違しかなかつた。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

で、更に縦の片をつぎたして縦の間數を測つてみたが、不思議なことに縦の間數も登記より八九尺のびてゐた、嚴密に言ふと登記の坪數より二十餘坪多かつた。
　二度、三度測量してみたが數字にかはりはなかつた、或は登記の間違ひぢやあるまいかと金作を役場にやつて調べさせたが無駄だつた。
「どうです瀧次さん。」
　源藏が垣根を越えて消沈してゐる人々の方へ近よりながら意地惡く言つた。
「おらあの言つてること間違つてゐたすか。」
「うゝん……」
　瀧次は頸をふつて蒼白めて答へた。
「登記より二十三四坪多いやうだす。」
「二十三坪……」彼の眼は冷笑のうちに鋭く光つた。「そんなら、おらあの方にもつと喰込んでゐるんだな。」
「…………」
　瀧次が答へる前に測量で苛々してゐた頭梁が、圖面を書いた板つ片をたゝきながらどなつた。
「何言あがる……手前の家數にくひこんでゐるなあ僅た六尺だ、二十餘坪多いのは縦がのびてゐるからだぞ、……縦なら手前とこと關係なかべせ。」
「おい、お前さつきから威張つておらの惡口言つてゐたが、六尺喰込んでゐたこと漸くわかつたか。」
「糞でも喰らへッ、おらあ永い間この黒い眼で見てるんだ、手前がこれまでして來た惡事は、閻魔帳にものせきれねえほどだが、今度のことだつてきつと何か惡だくみがあるにちがひねべせ……」
　そして彼はやにはに持つてゐた板つ片でしたたか源藏の額を毆りつけた。
「殺してしまへッ。」
「ぶち殺せッ。」
　人々は喚き叫んだ、が、瀧次は必死になつてその喧嘩を食ひ止めた、彼が今最も胸を痛めてゐるのは、十餘坪の屋敷を源藏に奪はれることではなかつた、（たとへ十餘坪奪はれても所有の百坪より減るんではない）私慾の深くない彼には、それはあきらめられた、が何よりも苦しいことはそのため折角出來かゝつてゐる家の一部分を壞さねばならぬことだ、それを防ぐには怒りを抑へて、靜かに源藏と話し合はねばならなかつた。
　彼は頭を下げて頭梁の亂暴を詫びた、そして、から皆が氣が立つてゐては話しにくい、今晩行つてよく話合ふから、この場は圓くおさめ

てほしいと願つた。

その場面をお新は涙をのんで眺めてゐた、そして源藏が、勝ちほこつてゐる隣家の人々に迎へられて家に消えてしまふと、彼女は身の處置に困つた、ふと、金作が積んでゐる木材に腰かけて俯向いてゐる姿を見ると、彼女は駈けるやうにその傍へ行つて聲をあげて泣き出した。

六

瀧太が古い家屋付の今の屋敷を買ひ取つたのは二十年前だつた。その時、役場の登記を換へたのみで坪數は測らなかつたが、これは狹い部落の習慣で誰でもさうなのだ。

部落の土地は坪によつて賣買されるのではなくて、宅地全部の價格で賣買されるのだ、だから、代金を拂つて登記をかへるだけで少しも差支へないのだ。

買ひ取つた坪數は百坪である。その後、境の垣根をいぢつたこともなければ部落で道路をかへたこともない、それが百二十餘坪あるとすると、役場の調べの杜撰か、或は以前住んで居た百姓が隣家の屋敷を取つてゐたのかも知れない……人々の疑ひはかうだつた、[illegible]

然し……[illegible]やうとしたが無駄だつた、法律に對して殆んど知識のない人々にはどうすることもできなかつたし、源藏を憎んでゐる人も後難をおそれて深く關らうとはしなかつた、また、ある有力者は、役場の落度が恐れる危惧から、源藏の申出の方が正しいと言つた。最早どうすることもできなかつた、今は源藏に賴み込んで建物にかゝらない土地を取つてもらふより外に途がなかつた。

黄昏近く人々は打沈んで焚火を圍んでゐた、その時ふと、一人の大工がかう言ひ出した。

「すると、おつ父、横の方は六尺延びてゐるから源藏にとられるとして、縱の方はどうなるだす。」

「縱の方つて。」

「縱の方が九尺のびてゐるすべ。」

「こりや理窟だな。」と、頭梁は元氣づいた。

「そだつて縱の方に、表は道路で裏は田圃だから、返さうにも仕方ねえすべ。」

「田圃の持主が源藏のやうに文句[illegible]」

頭梁はますます[illegible]

「その時には、[illegible]」

こんな間違へなど起らねのに。」

「おつ父心配するな、この部落には源蔵のやうな悪黨は外に一人もねえから……。」

人々の疑ひはこれ以上發展せずに再び打沈んだ沈黙に落ちて行つた、が、この疑ひこそ、底にかくれてゐるこの事件の眞相を明らかにし、源蔵の悪事を打砕くことができたのだ。

こゝ數年來源蔵はどうかして部落民から信望篤い隣家をやつつけやうと企んでゐた。この二つの家を染めてゐる善悪の色は、接してゐるだけに際立つて人々の眼に映じた。一方は悪辣な高利貸で、一方は温良篤實な百姓だつた。

彼の憎しみはこの單純な黒白から生じる外に理由がないだけに一層執拗で深かつた。しかし彼の鋭い眼にも瀧次の落度は容易に見つからなかつた、仕方なしに彼はその憎悪を小さい呉服店を出してゐる瀧次の弟に向けた、そして高い金を貸した結果、その弟を自分の手に奪つてしまつた。

彼は[illegible]

「今に貴様の田をとつてやるぞ。」

その夜、瀧次は源蔵の家を訪ねたが、彼の希みは一言のもとにはねつけられた、彼は涙を呑んで新しい家を不具にしなければならなかつた。

七

刈入りがすんで餅をついて祝つた日に、手傳ひに來て居た近所の女房が、流しにならんでゐるお新に言つた。

「なあ、お新ちや、お前は隣同志だから氣がついてゐるすべ。」

「何け？」

お新は強い衝動を受けて顔を向けた。隣家と聞くだけで、いつも何かしら不安を覚え、鼓動が高まつた。

「兼ちや、ことえさ。」

「お絹さん、どうかしたか。」

「それぢや知らねえのけ、……おらあ、一昨日風呂をよばれて暗いとこで見たけど、絹ちや、お腹大きいやうだすて。」

「まあ。」

お新はほつとして、急に笑ひを含んだ聲を出して言つた。

「誰の赤坊だすべ。」

「さあなあ、……、もう四五月らしいから、すると盆踊りの頃だすな、そんなら誰の赤坊だかわからねすべ。」

「まあ、おつ母。」

今度は別の意味でひやりとして顔を眞赤にした、彼女にもその不安があつたのだ。

「利口なお絹さんだもの、そんなことねえすて。」

「でも、これぱつかりはな。」

「お絹さんなら、きつといゝ人を捕まへたにちがひねえから。」

お新は、以前お房からきいたことをふと思ひ出して言つた、若しその[illegible]の[illegible]で、二人が一緒になるやうだつたら、[illegible]

[illegible]

お新は何時か自分のことを考へてゐた、彼女も二月前からいつもの病氣を忘れてゐた、が、そのことはかへつて彼女に限りない甘美な幸福感を呼び起した、二人は双方の親の承諾を得て來年の春に結婚することになつてゐた。

次の日の黄昏、お新が鷄を小屋に入れやうとして裏へ出て行つたら、土藏の蔭でお絹が苦しさうに咽をならしてゐるのを見た。

お新は絹のことを考へると、羨望と、輕い嫉妬を感ぜずにおられなかつた、そして飛ぶ雲に等しかつたが、二つの戀を比べてある寂しさを受けた。

なぜだらう。

彼女の幸福がそれほど大きかつたからである。

處女會のあつた夜、お新は反對に自分の方でお房を誘ひたかつた。

蕎麥屋でお新は言つた。

「お絹さんお腹大きいのを知つてゐる。」

「あ、もうとつくから。」

「誰の赤坊は。」

[illegible]

「お兼さん色文つけたのけ。」

「そうだとえさ……あの人、おらには何でも知らして相談するから。」

「浮氣もんでもお兼さんは幸福だすて、笹は地主の支配人だもの。」

「なんしてけ、」

「支配人のお嫁さんなら……」

「おや、お新さん何も知らねえのけ。」

「うゝん。」

「燈臺下暗し……そのことでお兼さんとこ大變だすて。」

「どうしてけ。」

「笹さん、おらあ知らんと言ふんだすて……おつ父憤つてこの間談判に行つたから。」

「執達吏でもかけるのけ。」

お新は笑つた。

「何を抑へに……。」

にあかした。

お新は一人になつて兩家に對してたにかしら勝利に似た歡びを感じた、そして一方笹の心情を思ふと冷笑とある痛みを感ぜずにゐられなかつた、彼女は近いうち小作料をおさめに北川家に行くことを考へて獨語した。

「あいつの顏なんぞ見たくもない。」

八

冷たい雨の日だつた。

この日は北川家の先代の誕生日で、照つても降つても小作料をおさめる定めになつてゐた。

お新一家が北川家から借りうけてゐる田は一町三反で、小作料は一反歩について一石五斗、四斗俵で五十俵である。

これは湖村一般の習慣で全く苛酷な搾取である。湖村一帯の田地は

凡て土地が痩せてゐる上に濕潤に過ぎ、豐作の年でさえ一反歩の收穫は二石二三斗だつた、それから小作料の一石五斗を差引かされると僅かに七八斗しか小作人の手にのこらない、一町三反歩で約十石、一石の賣値三十五圓として年收三百五十圓……どうして四五人の一家が一年を支へることができやう。苗植の頃には一粒の米さえない小作人が大多數だつた。

日本に於て急激に農村運動が發展した大正九年から十三四年までの、全國を平均した小作料は一反歩について一石一斗弱である、が、かうした時代の動きから全くきりはなされてゐる湖村一帶の農村は、苛酷な血税や物價の騰貴に惱まされながらも、不當な小作料について考へ及ぶ者がなかつた、彼等にとつて地主は、、、、、、、、、、彼等はたゞ漠然とした不景氣と言ふ言葉に惑はされ、やがて好景氣のくるのを夢見ながら、地主に嘆願して借財し、借財し、或者は娘を賣つて生活をつゞけた。

が、お新一家は他の小作人に比べてやゝ樂な生活を送つてゐた、それはしまつのいゝ先代が多少貯めこんでゐたのと、大正四五年の好況時代から、漸次に新しい耕作の仕方を學んで耕作[illegible]の收穫があつたためである。

[illegible]

とたが、肥料が大へんなので、借金に苦しんでゐる貧しい小作人には到底望むことのできないものだつた。第一堆肥にしたところで一反歩に三百五十貫を要する、これは努力によつてできないことはないが、大豆粕の三百八十貫を初めその他二三の肥料を買ふことは、すでに借金に苦しんでゐる極貧の小作人に絶對にできることでない、漸次でさえ、それは不可能だつた、そこで肥料の方は前よりも窒素、燐酸、加里等の配合率に重きを置き、種の選び方、本田の耕し方、苗代の作り方その他種を播いた後の芽干し、床の乾燥、水加減等に、あくまで忠實に新しい耕作法に從つた、その結果毎年反當り三石乃至三石四五斗の收穫を見るやうになつた。今年は幾分肥料をましたせいか三石七斗の收穫があつた、小作料として一石五斗地主に納めても他の小作人に比較して二倍以上のみいりだつた。

當然彼は滿足でなければならぬ筈である。しかも、彼の心は冷たい雨のやうに重く沈み、少しも樂しまなかつた。

荷馬車に積んだ殘りを二晩の[illegible]につけて、漸次、豐作、お新の三人は出發した。

「北川のおにあさまに、[illegible]」[illegible]てくれしや[illegible]」

[illegible]

高い杉林に圍れた美しいNの村落にはいると、美しく飾つた馬が四五頭前方に鈴をならして急いでゐた。やはり北川家の小作人である、そして彼等が着いた時には邸のぐるりが、それ等の荷馬車や馬でうづまつてゐて、祭のやうな賑かさだつた。

從の指揮で大勢の若勢たちが待ち構へてゐて、小作人と一緒になつて俵をどんどん土藏のうちに運び込んだ、それがすむと土藏前の廣い土間に、炭火を中心として用意された席に腰かけて、女たちの酌で酒宴するのがいつもの習慣だつた。

が、今年は少しちがつてゐた、宴酒する廣い土間に莚をひろげて、そこで五六人の若勢が口々に喧しく數へながら桝目の檢査を始めてゐた。而かもその檢査に、今まで少しも賑りのなかつた別家の永吉が、炭火をして眼鏡越しに鋭い眼を光らしてゐた。

遠くから冷たい雨にたゝかれて來た小作人たちは、いつものやうにうまい酒にもありつけず、新しい習慣の前にふるえてゐた、ことに、桝目の少ない俵を選み出された不運な小作人は、嚴しい永吉の詰責と高木を[illegible]して　その[illegible]てゐる筈だ、男の一家は自分の作つた米を食へずに殆んど外國米と稗のまぢつたもので過してゐた。

永吉から田を取り上げると言ひ渡された彼は、何事も言はず悄然として荒れた手で眼をこすつてゐた。

瀧次はさうした冷たい場面を、ある不安をもつてぼんやり眺めてゐた、二人の若勢が彼の小作米の口をひらいてやかましく數へあげた。一俵の方から二合多く他は一升桝たつぷり殘つた。彼はほつとして、初めて新米のいゝ匂ひに心を和げた。

「瀧次……」

永吉が呼んだ。

「はあ。」

「お前は新しいやり方で何年うんと作するさうだが、今年は何うだつた。」

「はあ、今年は肥料を五十貫ほど増したせいか、去年より三四斗多く

とれたやうだす。」

「すると何ぼになる。」

「反當り三石七斗位になるすべ。」

「三石七斗……。」

周圍の人々は眼を丸くしておどろいた。

「それでおらあの方へ何ぼおさめた。」

「一石五斗だす。」

「おいよくきけ、反當り二石しかとれねえものが一石五斗おさめるのに、それぢや理窟に合はねなかべ。」

「はあ。」

この新しい詰問に瀧次は非常に狼狽て出した、彼はかつて一度もさうした理窟なんぞ考へたことはない、たゞ地主の言ひなりに從つて來たに過ぎなかつた。

「來年からお前とこの小作料は變へてもいゝか。」

永吉は言つた。

「はあ。」

「それぢや文句なえなら、今年はかんべんしてやる。」

瀧次は[illegible]ほつとして[illegible]をはずして、[illegible]をつないでゐる[illegible]へ[illegible]

[illegible]

「馬鹿にしてやがる、……あんなこと言つたつて不作の時でも定めの小作料とつてるねえか。」

「こら……」

瀧次が叱つた。

「文句言ひたかつたら、自家へ歸つてから言へッ。」

「面白くねえな、おつ父、だん〳〵面白くなくなつて行くな……」

「………………」

そこへお新がやはり浮ない顏でやつて來た。

「おばあさまと會つたか。」

「おばあさま、風邪ひいて寢てるとえさ。」

「さうか、………」

「旦那やお嫁さんは、娘たちと廣で蓄音器ならしゐたやうだえ。」

「さうか。」

「おつ父、もう歸らう。」

金作が言つた。

「旦那[illegible]……少したつと旦那さんやお嫁さんが出て

[illegible]

[illegible]

北川家はF村二番の資産家だつた、二十町歩に近い田地の外に、呉服の御部、小賣部を持ち、郵便局をも經營してゐた。

當主は由太郎と言つて三十を越してゐたが、やゝ白痴に近く、一切の仕事から遠ざかつて、殆んど無爲に近い生活をしてゐた。彼はよく御部の帳場にすはつてぼんやり白い往來を眺めてゐた。彼はこんな風に考へた。

「この白い道は何處までつゞいてゐるだらう。」

弟の由次郎は静かな好人物だつた。彼は呉服の新柄を觀賞したり、切手の賣高を勘定するにふさはしかつた。だから小作人の貸借、呉服御部の貸借から、複雜な親類縁者の一切の困難な仕事は、七十に近い祖母が一人で裁斷してゐた。彼女は朝夕畑で働く以外、臺所の爐傍に坐り込んで、いゝ聲で叫びつゞけた、彼女の聲は電鈴より活潑で確實だつた。

彼女は人々が言ふやうに北川家の「樫の樹」である、樹のやうに頑健で、聰明で愛情に富んでゐた。

彼女はかつては百姓の娘であり、百姓の女房だつたせゐか、誰よりか、彼女の考へは素朴で正し[illegible]が、その考へは[illegible]ざされてゐた。彼女は自分の無慾の愛情が、外界の空氣に觸れ、[illegible]たちの手にうつゝて、多くの利潤を生み、小作人に對する苛酷な鞭となつてゐるのを知らなかつた。

彼女の心は年と共に小作人の困窮と悲しみの深く、重くなりつゝあることを感じてゐた、が、それが見えない惡辣な組織のためであり、直接には苛酷な小作料のためであることを知らなかつた。彼女はかつて一度も小作米の不足に對して詰責したことがあつたらうか、百姓を疑つて桝目を檢査したことがあつたらうか、またその必要はなかつた。なぜなら、彼女のやり方でも北川家はます／＼肥え太つて行くではないか。

が、「樫の樹」も年には勝つことは出來なかつた。去年の冬から彼女は腰部に輕い疼痛を覺え、梅雨期になつて、晝間はさほどでもなかつたが、夜、眼をさまして寢返りする時は、うめきのために、人々の眠をさまたげるほどだつた。彼女は由次郎に伴はれて一月近く秋田の赤十字に入院し、それから[illegible]の温泉に保養した。それ以來小

作人の一切を別家の永吉に任せることにしたのだ。

永吉は彼女の次男だが、陰険で狡猾な男だつた。彼は三町歩餘の田地を持つてゐたが、主として小作人に高利を貸して、その代償に新米をとつて利殖した。彼は赤ら顔の大きな男で小作人たちは「北川の鬼」と呼んで嫌惡してゐたが、食ふに困ると鬼へも取縋らねばならなかつた。

同じ心の源藏が永吉に取入れることは容易だつた。彼は先づお篠を妊娠させた妻を嫁しつけ、その代償に永吉へ推選することを頼んだ。永吉はうんと言つた。源藏は法律を惡用することに最もたけてゐたし、高利の方を任せるにも最も相應しい人間だつた。

永吉と源藏が會つて飲んだ晩、源藏がまつ先に勸めたのは、瀧次のとる「無盡錢」を差押へることだつた。北川家へまだ支拂つてない弟の葬服代の保證人が瀧次であることを源藏は知つてゐた、そしてその無盡の藏元は永吉たつた。

「さうか。」

永吉は眞赤な顔をふりあげて眼を光らして言つた。

「模範小作人なんて生意氣な……あいつをやつゝけてやるべ。」

十

雪が消えて、湖水に、赤、黄、青等の旗をかざした鰊漁の船が浮ぶやうになつた。

五月上旬の日曜日、例年のやうに模範小作人の表彰式が小學校で行はれた。

その通知をうけ、その式場で新しい耕作について話すやうに、村長から命令されたとき、瀧次の心は暗いものに閉されてしまつた。

彼は昨秋小作米をおさめに行つた時の永吉の言葉を忘れることができなかつた、それがために小作料を多く出すのであつたらさほど憂へることもなかつたが、その言葉のかげに何かしら自分に對する憎惡がひそんでゐるやうに感じられた、そして考へ迷つてゐる十二月下旬、突然永吉の使で弟の葬服代を始末しろ、と誰かやつて來た。彼は高いせりで無盡をとつて支拂ふより途がなかつた。

それ以來、瀧次は見えない憎惡が四方八方から自分を取りまいてゐることをはつきり感じた。何よりも恐ろしいことは生命に等しい田を奪られることだ、それを防ぐには、誰の眼にもつかない普通の小作人に歸へるのが最も安全である、來年から新しい耕作なんてやめてしまはふ…………と、考へるやうになつた。

この憂苦の前に模範小作人の表彰など一片の反古に等しかつた。百姓にとつて命よりも大事なのは田である、[illegible]時に小作人を表彰する[illegible]

に、百姓の耕作權を確立するのが、何より緊急事ではないか、何時惡辣な地主のために、無警告に田をとられるかも知れないのだ、その不安の前に新しい耕作法を説いて何の益になるのだ。

からは考へたが、瀧次の心は弱くやさしかつた、彼は何事にも強く刃向ふことが出來なかつた、彼は内心をかくし、前夜のうち金作に原稿をつくらして、會場へ出かけて行つた。

會場は五百人に近い貧しい顏にうづまつてゐた、ことに、反當り三石七八斗の收穫をあげた、瀧次の新しい耕作法の話があると言ふので、遠くから汽車でやつて來た百姓もゐた。

賞品の授與、殆んど代議士の官吏たちの祝辭があつて後、瀧次が話すことになつた。

彼はやせた、ひよろ長い身體を演壇に運んで和かな顏を娘のやうに眞赤にした、それから暫くもぢ〳〵してゐたが、低いがしかしよくとほる聲で語り出した。

彼はまづこの新しい耕作法には反當り、堆肥三百五十貫、大豆粕三百八十貫、硫酸アンモニア三十貫、強過燐酸石灰十三貫、藁灰四十三貫等約八百貫に近い肥料を必要とするので、貧乏な小作人には殆んど望めないことだ、と言つた。その肥料を買ふためには高利の借金するんでは何んの利益にもならない、だから、前の役人（その男は政府の農村振興策について話した）が言つたやうに、政府がこれを助けてくれるんでなかつたら實行不可能だ、と言つた。

そこで肥料は一番おしまえにまはして、その他の改良すべき點について彼は語り出した。

（先づ種籾については前年苅取る時他より二十四五日早苅すること、それを乾燥する場合に貯へておいて鹽水撰をする、鹽水は淡水一斗に鹽一貫四五百匁、にがりの場合は三升乃至七升を混ぜた鹽水に籾を入れて、手早く攪きまはして浮いた籾をとつて捨てるのである。

次に籾種の浸し方であるが、これは籾種が水分を一つぱい吸へばよいのであるから、今までのやうに長く浸さなくてよい、三四日、長くて一週間を越さないやうにする、その時には籾俵を一尺以上のところに沈ませて日光が直射しないやうに注意し、隔日俵を上下に反覆する必要がある。

苗代に使ふ田は前年苅取後に必ず打起して土壤の風化を行つて、春に中耕する時、一坪につき一貫五百匁内外の堆肥を振り込み、すつかり土が柔かになつたら揚床式短册苗代に作るのである。

揚床式短册苗代とはどんなものか——まづ端から五尺とつて繩を引き、繩の左右五寸づゝを掘つてその土を床面の上に上げ、平面より三四寸高い四尺幅の床を作る、大抵の苗代の缺點は通路も床面も平で排

水がよくできないために、柔弱な苗が出來る、苗代の面積は一反歩に對し、十五坪の床面があれば充分である……）

それから彼は順次に肥料の施し方、播種後の管理等について話して行つた。そして多くの小作人が、その緻密な研究に感嘆して聽き入つてゐた時、不意に會場の後方に誰かを呼ぶけたゝまし 娘の聲をきいた。

「おつ父、おつ父、………兄ちやや。」

人々はおどろいて振向いた。そしてそこに、狂人眼をして父や兄の姿を探し求めてゐる蒼白めたお新の姿を見た。

お新は父の姿を演壇の上に見るとあせつて驅け寄らうとした。が、人垣のためにさえぎられた。彼女はあえぎながら叫んだ。

「おつ父、おつ父………田をとられたぞ、おらあとこ田をとられたぞっ」

そして彼女は周圍をはばからず大聲で泣き出した。

靜かな會場は騷然と沸騰した。

百姓たちは今何を知つたか。

模範小作人として現在縣から表彰されてゐる人間が、何等理由なく田を奪はれたのだ。彼等は今こそ、二つの惡い眼で資本家地主共の詐欺と暴虐とを見たのだ。

多くの收穫を得る、それがなんだ。

模範小作人の表彰、それがなんだ。

何よりも重大なことは、彼等のため田をとられないことだ、耕作の權利を確立することだ。

會場はますく沸騰した。

百姓は手をあげ、唾を吐いて北川家を罵り、、、、、、、、、、を嘲つた。その紛擾の中に新次は原稿を握つたまゝ血を失つて石のやうにつつたつてゐた。

十一

三日間、驅けづりまはつてあらゆる手段を講じたが甲斐なかつた。お新一家が唯一つの力とした北川家の祖母は十日前から縣南の温泉場へ湯治に行つて留守だつた。（勿論永吉等はその留守を狙つたのだ）由次郎は（叔父に話してくれ）と言つて取り合はなかつたし、由太郎は、知らぬ一點張りで十分と話さぬうちに頭が痛み出して醫師を呼ぶ仕末だつた。

不得止新次は弟と二人連で永吉の許を訪れて懇願した。彼は、[illegible]面に膝をついて手を合はす[illegible]

「おれには[illegible]………………百姓に[illegible]

瀧次は涙を呑みながらもはや田を取戻す望みないことを知つた。蛇に等しい隣家の源藏に見込まれたのだ、あきらめて他から田を借り受けるより途がない、小作料を二石出すと言つたら何處の地主でもいやと言ふまい……途々彼は苦悶にうなだれて、さうした地主の姿を探し求めた。

歸つてそのことを一家の者にはかると、まつ先に反對したのは女房とお新だつた、二人の女は隣家に對する憎しみのため理性を失ひ、はげしい爭鬪心に燃え立つてゐた。

「おつ父、かうなりや親子四人監獄へでも何處へでも行かえす、村の人等皆おらあの味方だすて、〻を流しても田を取返せと言つてくれるすて。……おつ父、しつかりしてたんえ、おらあとこで今の田を何十年間耕作して來たと思ふす、それを罪、科もないのにおいそれと奪られて默つてすむもんだてけ、おらあ今日金作、お新とも話したが、こ〻なりや生命なんぞ惜くねえ、田をとるか、とられるか死ぬまで喧嘩しらえす……」

「今晩は、」

四人は何かしら助力を求むる容子で強し足音に[illegible]

に鬚はやした丈の高い頑健な男が障子を開けて顔を出した。

「おや、高梨の若旦那さん、さあ上つてたんえ。」

「おつ父、おらあ今日秋田市から歸つて初めて知つたが、けしからん奴等だ、……おつ父安心しろ、おらあお前の味方になつてあいつ等を徹底的にやつつけてやるぞ。」

高梨はこの近在の資産家の息子で帝大の法科を出てゐた。柔道四段で腕力のある上に荒々しい氣性なので學校を出るとすぐ北海道に飛んで山林の仕事にかゝつた。が、樵夫對手に喧嘩をして、一人を殺し、二三人に重傷を負はせた。裁判の結果無罪になつたが、その後この土地に歸つて生家の田を耕がやしながら、議論の多い生活をしてゐた。彼は新しい農村問題に對して深い知識がなかつた、が、多少法律を知つてゐたし、何よりも正義派だつた。

高梨は潑溂として言つた。

「おつ父、心配することなんぞちつともねえぞ、お前等知るまいが、今の法律から言つたつて、かう言ふ無茶なことはできん筈だ、小作官

と言ふ者もゐるし、小作調停裁判と言ふものまである………第一おつ父考へて見ろ、お前はもう冬中に田へ何百貫といふ肥料を入れてるではないか、それだけで充分お前に耕作する権利があると言ふもんだ、………おらあ、とうから源蔵の奴をやつつけやうと待ち構へてゐたんだ、あいつはこの平和な村に毒をまきちらす黴菌だ、徹底的に撲滅してやらなけりやいかん、………なあに最後には調停裁判と言ふものがある、それへ出るまではあくまで力で争ふんだ。」

この声援はお新一家に力を与へ光をまきちらした、平常人殺しの世評に抱いてゐた軽い不安や警戒など全く忘れて、高梨に一切を任せてあくまで争ふことに一決した、女房やお新は初めて愁をといて酒の用意をした。

十二

学問と腕力と勇気に信頼をもつ部落四十余戸の百姓たちは、高梨の勧めにしたがつて怒り結束した。瀧次の策謀と源蔵に対する憎しみが勿論手伝つてゐたが、高梨の宣伝も巧みだつた。

「黙つてゝ見ろ、これが儂になつて何時田をとられるか知れないぞ、部落に蔓延した[illegible]が如何なものまであるにかゝわらず黙つて田をとられてしまうものか、百姓にとつて生きた[illegible]、[illegible]

永吉や源蔵を徹底的にやつつけるんだ。」

暫くの間何事もなかつた。

が、お新一家がとられた田に鍬を入れ始めたので、永吉や源蔵たちが狼狽て出した。

笹が厳談に来た時、金作は母であしらつた。

「そんなら田に入れた肥料をかへしてもらはえす、おらあとこは反当り五六百貫の肥料を入れてあるから、八千貫の肥料を眼の前に出してたんえ、話はそれからつけるす。」

笹が理窟をならべてゐる所へ、偶然高梨が顔を出した、彼は忽ち笹の襟頸をふんづかまえて外へひつぱり出すと、源蔵の店に向つてつき飛した。戸がはづれて硝子が高い音を立てゝ三四枚こはれた。

これがきつかけで部落はこの争ひのため次第に興味と不安のまちつた緊張にみちびかれて行つた。瀧次の方で苗代に種を蒔くと同時に源蔵の家でも僅か二十間はなれた苗代へ種をまいた。

最も大事なのは植ゑつけだつた。

高梨の選んだ策戦は、その時に部落全部の百姓を動員して敵に一指もふれさせまいとした、[illegible]が一株一株とめたるに[illegible]見えない[illegible]一[illegible]にも[illegible]つた。

てゐる源藏に向つて獅子のやうに飛びかゝつた。
二人は泥田を轉げながら毆り合ひ、蹴り合つた。源藏の二人の息子が左右から金作に組みつき、女房や娘は金切聲で罵りながら手にもつてゐた苗を投げつけた。

この騷ぎをまつ先に見つけたのは軍吉親父だつた。彼は直ちに高梨にその事を知らせ、それから村中を叫びながら驅けまはつた。

忽ち籔、樹、家の陰からまるで土から湧いた黑い獸のやうな勢で百姓たちは畦道を飛んで來た、が、大勢が集つた時には源藏等は高梨の腕力に投げ飛されて泥まみれになつて逃げ出してゐた。

百姓たちは落膽した、怨恨の對象を失つて力の扱ひに困つた。彼等は、まづ源藏等が數時間かゝつて植ゑつけた苗をひつこぬき、それから高梨の發言で新らしく瀧次の苗植にかゝつた。それは實に共同の愛にみちた美しい眺めだつた、人々は唄ひ興じながら仕事を勵んだ、二町三反歩の田はまたゝく間に淸々しい苗の色に彩られて行つた。

が、この美しい百姓の心は、僅か一週間を經て彼等の土足によつて蹂躪られてしまつた。共同の力に色を失つた彼等は終に、、、、、、

た。彼等はどうすることも[illegible]ればならなかつた。が、高梨は尙僅かながらも立派な小作調停裁判に信賴してゐた、翌日、彼は瀧次と一緒に秋田地方裁判所へ出かけて行つた。

申請によつて調停裁判は三度開かれたが、その三度目に無力を示すことによつて、縣が作つてゐる小作調停委員會にうつさねばならなかつた、田地はすでに由太郎の所有をはなれて大屋源藏に讓渡れてゐたのだ。

裁判官は三日間を空費した憤りから荒々しい聲をあげて代理人の永吉にたづねた。

「源藏はそんな大金を持つてゐる筈がないぢやないか。」

「その金は私が貸しました。」

この簡單で明瞭な答辯の前に、永吉を除いた外の人間は全く無能に等しかつた。

小作調停委員會は一月にわたり前後八回開かれた、が、、、、、、

、、

い小作人の主張が通る筈はなかつた。回を重ねる度毎に地主側にのみ有利に展開されて行つた、最終地主側から出された條件は實に極端な彼等の、、を示したもので、瀧次側は殆んど嘆願に等しい哀れな境地に追ひ込められてゐた。

（田を取上げ、爭議費用として五十圓出す）北川家のこの主張に對して瀧次の求めたのは僅かに百五十圓の爭議費用だつた。

この要求さへ、はねつけられ、不調のまゝ瀧次と高梨は裁判所を出た。瀧次は長い心勞と多くの冗費にやせ衰へ、しば〳〵大地が陷沒するやうな眼まひを感じて他人に取縋らねばならなかつた。

十三

「お前さん、もう忘れてしまつたのけ。」

お新が言つた。

「何を……。」

「あの、隣との屋敷の事件えさ。」

「それが、どうしたて。」

淸次郎は偶ぶり〳〵して強く言ひはなつた。

もう既に約束の春も過ぎて夏にはいつてゐる。彼の眉はすつかり[illegible]結婚の仕度も出來、世間へも披露してゐるのに、お新の方はいつもも[illegible]う少し待つてくれと言つてくるばかりで、いつまで待つても安心できる確答を得られなかつた。

その間二人は二度湖水の上で媾曳してゐた。

一度は母親が病氣だから少し待つてくれと言つた。二度目は叔父の家に裁判事件がおこつて紛紜してゐるから、それが片づくまで待つてくれと言つた。

「何の裁判かい。」

「昔、北川から借りた喪服代だとさ……おつ父が保證人になつてゐるのでおらあとこで心配してゐるだえ。」

「北川ではそんな無茶なことするのけ。」

「ばあさま病氣になつてから、惡い永吉がなんでもやつてるからねは。」

「さうか……。」

が、何かしら空漠とした信じられないものゝために彼は苛々しながら強い熱情に走つて行つた。そして、それがすむと、彼はぼんやりし、空虚と滿足とこんがらかつた氣持で有耶無耶に別れてしまつた。

三日間は數行の愉快をひいた事だつた。が、十日經ると彼は再び[illegible]

[illegible]

たまるものか……。

（親がいかんと言つたら飛び出して來い、それが厭なら、おれはもうお前と結婚しない）

男の手紙が屆いた日は八回目の委員會があつた翌日だつた。父の悲嘆と衰へを見るだけで、もはや勝負は明らかだつた、田はとられるのだ、もう清次郎をいつはつて、苦しめることは無用だ、事實をことごとく語つて結婚がのばされないやうならあきらめるより仕方がない。―そして彼女は自分から一日市町へ出かけて行つて清次郎に會つた。

お新から一切を打開けられた時、彼はお新の長い間の僞りを怒つた。しかし、それが自分に心配かけまいとした女の優しい心情であつてみれば深くとがめることも出來なかつた。

彼は泣くお新を抱き寄せて慰めながら、自分の愛の變らないことを誓つた。彼は安心し、悲壯な氣持になり、初めて女を知り合つた時以上の恍惚にしたつた。

が、それがすんで、偸愁ひに沈んでゐる女を見てゐると、彼はその

あ

「なあ、お新ちや、おらの村には小作人のために働いてくれる組合があるどもな。」

「あの怖い組合だすべ。」

「うん、それに頼んで見たらなんとだべ。」

「この上、、、、、れたりすると、おらあのおつ父生命なくするすて。」

「それもさうだな。」

「その人たちひでい亂暴者だつてねは。」

「、、とはしよつちう喧嘩するが……そこの組合長はいゝ人だや、町の財産家の二番目息子で、東京で勉強して來たどもそんなことするので、今家は勘當されてゐるのだや、……おらあこの間そこの事務所をこしらへてやつたが、頭の低い親切な人だや。」

「賃銀拂つてくれたのけ。」

「さうとも、………町の百姓、半分はその組合にはいつてゐるからな。」

「さうけ。」
「さう頼んで見るか。」
「さうだな。」
「お前、今晩歸つたら、おつ父や兄ちやに相談してみねえか。」
「高梁さんなら學問はあるし、腕つぶし強いから、おらあ話してみるべか、……さうだ高梁さんならその人たちどんなことするかよくわかるすな。」
「さうだ、さうだ、おらあもついて行つてよく話して重山さんに願つて見るべ。」
この新たな希望はお新一家を歡ばすに充分だつた、悲哀の底まで落込んだ彼等に、、、、、、、、、も意味がなかつた。何物かに取縋りたかつた。ことに信じてゐた調停裁判や調停委員會に全く裏切られた高梁は、むしろ、、、を歡び迎へた。……その翌日高梁と金作は希望をもつて一日市町に向つた。

十四

部落に新たな鬪争の雰圍氣に包まれた。高梁や金作等は見ちがへるほど元氣になつて百姓たちの團結と、、、に驅け廻つた。
晴れた七日の朝、そのとき草とりのため田に働いてゐた百姓たちは、はるか並木の街道から流れて來る活溌な唱歌の聲に胸おどろかした。彼等が好奇を以て待ち望んでゐた新しい光が進軍して來たのだ。
「それ組合が來たぞ。」
田に働いてゐた男女は、道具を捨てゝ泥のまゝ駈け出した、彼等の胸はおどつた、いよいよ、、が開始されるのだ。歌が次第に近づいて來た、やがて一丁はなれた松並木から赤い組合旗を翻がへした一隊があらはれた。
それはやゝ稚氣を帶びた無邪氣な眺めだつた、先頭に、五尺に足りない背の低い組合長の重山が眞赤な顔で農民歌をうたひながら悠々と歩いてゐた、その次に丈の高い勇猛な顔をした二木が赤旗をかゝげてわれ鐘のやうな聲をあげてゐた。この二人の對照が頗るユウモラスであつたばかりでなく、この意氣揚々とした進軍はその後に五六人の若い指導者や組合員を數へるに過ぎなかつた。
そこへ高梁や金作が飛んで來た、そして一角に萬歳を唱へてこの愉快な進軍を迎へた。進軍は續いた、その後へ大勢の百姓がくつついて忽ち強い流れを形作つた、左右を子供等が駈けながらはやし立てた。
やがて進軍は部落にはいつてますます勢をまし、やがて燈火の前へ廻つた。そして彼等は忽ち上衣をぬぎすてゝ前方にある行動にうつらうとした。

が「、、、、」がズックの學生鞄から出したものは兇器ではなく、意外にも測量に用ふるテープだつた、その先端を一人がもつてするする引張り出すと、そのまゝ歩行をうつして源藏の屋敷を測量し始めた。

「オーライ。」

「いくらだ。」

「十二間四尺。」

「間違ひないな。」

重山が圖面を見ながら言つた。

「間違ひなし。」

「ようし、それぢやすぐ垣根をとつぱらう。」

重山は金作や高梨の傍へ行つて耳うちした。二人はそれと知つて飛上つて歡んだ。忽ち二三人の百姓たちとはかつて鍬や、鉞を借り集めた。

重山は百姓に向つて演説した。

「農民諸君、吾々は對岸の一日市町から來た農民組合の者です、吾々諸君は昨年の秋、隣家の大[illegible]をよく知つてゐることゝ思ふ、それは瀧次君の屋敷が登記よりも十數坪多いといふ理由からである。然らば源藏の屋敷はどうか。只今諸君の眼の前で測量したところによると登記の百五十坪より三十餘坪多いのである、これ明らかに彼が各部落民の所有地が登記より二三割多くあることを知つて、瀧次君を威嚇して十數坪を奪つたのである、その時彼は隣家に對して如何なる處置をとつたか、一言の挨拶もなく無法にも夜中垣根をきり倒したではないか、斯の如く彼等地主や地主の代辯者共は常に、、、、、、に等しい惡事をするのだ。叩きあげたのもこの手である。しかし農民諸君、吾々は彼等のかゝる陋劣無上の手段に屈するものでない、吾々はあくまで團結して彼等と鬪はねばならない、鬪ふことによつてのみ吾々の勝利はあるのだ、吾々はまづ戰鬪の第一歩として無法に奪はれた瀧次君の屋敷を奪ひ返すものである、……」

この屋敷の眞相が知れると、長い間源藏に抱いてゐた百姓等の怨恨は忽ち怒りとなつて爆發した。

「源藏、出て來い。」
「出て來て答辯しろ。」
「惡黨！」
「盜賊！」

そして東山の演說が終らないうち垣根に向つて殺到した。用意した鍬や鉞は要らなかつた。彼等は滿身の力で木を引拔き枝を折つた、しまひに折重つて垣根を押し倒した。

、、、、、が狼狽てゝ驅けつけてとなりまはつたが忽ち二木の腕力に押へつけられてしまつた。昨秋源藏の、、、、、、、、、しなかつた責任者こそ、第一番の責任者だ、どなりつけられてふるひあがつた。

源藏は家にゐたが、それと知つて押入にかくれ込んだ、家内たちは狼狽てゝ店の硝子にカーテンをひき、そのまゝ裏口から畔傳ひにお房の家に逃げ込んだ。

火蓋は切られた。湖水は戰意に湧き立ちその餘波が男鹿全島をおかした。

、、、、、、、、。

十五

、、。

彼等はこの爭議を機會として、、、、しい一日市町の組合をたゝきつぶす策戰を立てた、そして永吉源藏の、、、、、する一方、あらゆる手段を講じて百姓たちを、、、、、、、を剝がうとした。

一方組合側もこの爭議の重大な使命を見逃さなかつた、なぜなら立入禁止による爭議はこれが初めだつた。若しこの新しい爭議に破れるものなら、縣內の地主たちは一齊にこの武器をひつさげて農民陣を攪亂することは明白である。その結果は多年血と汗でつくりあげた組合の後退をやむなくせねばならないだらう。

全縣のあらゆる部門の指導者が8部落にその智囊を集めた。彼等はあくまで、、、、し、間隙を入れない熾烈な鬪爭によつて短かい期間で勝負を決さうと企てた。

交渉委員が每日のやうに北川家に向つたが、永吉はあくまで頑として應じなかつた。委員らは[illegible]なり込んだ。そのため北川家は連日[illegible]のやうな群衆に取圍まれ、[illegible]に置かれた。そして使用人に[illegible]、家族に[illegible]の不安

な村長の家を襲撃の
稲が蒼白めたのだ。常に百姓を奴隷のやうに白眼視してゐた彼も、、、、、に遭つて謝罪しなければならなかつた。その謝罪文が指導者によつて讀上げられたとき、、、熱狂して萬歳を唱へた。

組合側は全智をつくしてあらゆる手段を講じた。ビラは飛散し、演說會はしつきりなしに開かれ、その反響は全縣に及んだ。が、すでに旬日を經たにかゝはらず、永吉等は頑強に抵抗して、一歩も退かうとしなかつた。

組合側にも憂愁が萌し始めた、最う勝つか負けるか最後の戰に迫つてゐることを人々は感じ始めた、指導者たちは夜を徹して熟議した。が、彼等の選擇する、、は一つよりなかつた、更らに廣汎な、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を決することだつた。

その準備に三日間費された、先づ第一に縣南の溫泉に行つてゐる北川家の祖母を呼び出すことだつた。

次に、範圍を廣めて男鹿全島にビラをまくこと、T、F部落の二箇所に立禁反對の演說會を開くこと、一日市町の組合員五十名が、、、

歸宅だつた、その
後の四時近く停車場へ偵察に行つてゐた百姓が吸呼きつて駈けて來た、昂奮した「樫の木」が頑丈な身體を人力車に乘せて自宅に歸つたと言ふのである。

忽ち委員が女たちの集つてゐる瀧次の弟の家に駈けつけてそのことを知らせた、女たちは歡呼して、自分たちの新しい任務を歡び迎へた。

十六

星が消える頃湖水に臨んだ森山の右肩にあつた雲が動き始めた。—東風だつた。

湖水は輕く波立ち腹の白い小鳥が水とすれ／＼に飛びながら嘲をうたつた。

不意に田の一方で鳴子が高く鳴りひゞいた。と、忽ちそれに呼應して廣い田圃のすべての鳴子が不格好に踊り始めた。、、、をさけて前夜から雀小屋に籠り込んでゐた五十餘名の組合員は、（その中に瀧次

郎もあつた）それを合圖に一齊に小屋を飛出して舟のかゝつてゐる小川に走つた。

いゝいゝ

よしきりがけたゝましくないて飛んだ。

七艘の舟は葦をわけて岸をはなれそのまゝ湖水に向つて勢よく滑り出した。

陸から遠ざかるに從つて棹を操つる人々の聲が高まつて行つた、やがて川がつき湖水にはいると人々は棹をすてゝ一齊に帆をあげて風を呼んだ。

陽はすでに森山をはなれてゐた。

湖水は美しく晴れて、、を迎へる對岸の男鹿山は紫紺を帶びて眼に迫つてゐた。

見よ！

先頭に立つ三艘の舳に翻へる紅の組合旗を！

風は爽かに帆に充ち、七艘の舟は歡呼をあげて對岸に突き進んだ。

この湖水の横斷に、、、、、、、、、、、。

彼等は某所の隅に、、、、、、、、、、、、、、、する計畫だつた、そして、、、、、、、、、、、、は三部の自動車に分乘して[illegible]岸に走つたる

、、、、[illegible]

等はすでに、、されてゐるのだ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。その後は湖水に臨んだ旗亭で鰡漁を樂しまうと酒を酌まうと自由である。

車は松露の匂ひにつゝまれた深かい松の並木街道を四里走つた。やがて二田を過ぎた右手に晴れ渡つた紺碧の湖水が點見するやうになつて彼等のドライブは更に興趣を加へた。

彼等は湖水の上を雁行する七艘の白帆を見た。が、それはまるで樂しいレースのやうに彼等の眼を樂しませた。

彼等は長閑に笑ひながら叫んだ。

「ほら、はぢつこの舟がぬきましたよ。」

そして車が長い湖水の橋にかゝつた時、人々は車を止めてこの樂しいレースに見とれた。

が、彼等の歡びは長くつゞかなかつた。その眼が三艘の舳に、、、、、、にとまつた時、、、、、、、、、、、。

やがて橋下に舟が着いた

組合員は橋に並つ、、、、、、、、、、と一齊に、、、、、、、、、、、、、橋をつき抜けやうとした[illegible]

怒り奮つ[illegible]、、、、、[illegible]限る[illegible]中に、、、、、

、、、、[illegible]、、、、、、、、、、

とのへうたひ叫びながら村の第一會場に向つた。

第一會場の瀧次の家は泥によごれたあらはな腕と足にうづまり、更らに、、、、が屋外にあふれてゐた。その中には十里近くある小島の飈から來た、、、、、、、、、、彼等に取つて田は生命である、、、はその生殺の權利を地主に與へるに等しい、一つの決定はやがて百千の決定となる、その憤りと不安から、、、、、、あげて二つの會場に殺到した。

、、、につゞいて赤襷をした四十餘人の女たちも參加して會場はますく熱度を昂めた。やがて、急霰の拍手に迎へられて、高梨が熱した重々しい口調で開會を兼ねて攻擊の火蓋を切つた。

十七

辯士の演説は殆んど同じだつた。

(惡地主を葬れ)

(自覺せよ小作人)

(立禁の惡法を叩きつぶせ)

た。彼等は[illegible]

突如、緊急動議が叫ばれ、演説會が「男鹿地方農民大會」に變更して會場は一層殺氣を帯びて來た。辯士は、、、、、、、、、、、、、、、。そして重山が短軀をひつさげて、湖周一帶の不當な小作料を暴露し、立禁の惡法をたゝきつけ、つゞいて、、、、、、、、、に及んだ時、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

會場は沸騰し混亂した。組合員は一齊に演壇に飛んで重山を、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

はげしい爭奪戰が、、、、、、、、、、、、、との間に起つた、重山を始め二三の幹部たちは、嚙み合ふ双方の齒の中で、無茶苦茶に暴れまはつた。それは悲壯な場面ではあつたが滑稽を抑へることもできなかつた。小さくて身の輕い重山はまるでスポンヂのやうに空中ではねかへり、しかも彼は汚ない泥靴をあげて、、、、、、、、、、、、、、、。

が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、勢を得た組合員は、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。そしてそのまゝ重山の發際で屋外に飛出した。

（デモストレーションだ。）

（北川へ行け。）

（北川へ行け。）

五百餘の大衆は、、を先頭に口々に農民歌をうたひながら村に向つて進軍した。

一里の途はまたたく間に過ぎた。そして先頭が、部落の口にかゝつた時、、、、、、、、、、、、、、、不意にこの強大な鐵の流れが火花を發して駈け出したのだ。それを、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、捨てゝ先頭に向つて駈け出した。そのため群列の最後について來た赤襷をした女群の一隊が右に折れて駈け出した、、、、、、、、、、、それが先頭に立つた指導者たちの策戰だつた。

髮を亂し、赤や白の腰卷をひらめかして女たちは駈けだした。その先頭にお新が立つた。彼女等の任務は北川家の祖母に會つて訴へることだつた。

ワアッと鯨波をあげて彼女等は裏門から殺到した、その喚聲をききつけて驚いて駈けつけた[illegible]

てどなりつけた。

「こらッ、こらッ、小作人のくせに、……貴様まで大恩ある北川家に弓をひく氣か…………。」

そして彼は眼を怒らし、早い口調でお新一家を罵り續けた。

一瞬時、お新は意外な人間の出現に呆然としてゐた、が、彼の双手の力を全身に感じたとき、彼女はふと過ぎた日の戀情を思ひ浮べ、再び怒りに歸つた。

「こん畜生ッ。」

彼女は右手に全身の力をこめて男の顏を横にはらつた、そしてよろつくのをそのまゝつき倒して駈け出した。

五十間に近い土の廊下をお新は夢中で臺所に向つて走つた、それと知つて立騷ぐ男女の聲などお新の耳にはいらなかつた、が、家を包む空氣を身に感じた彼女は眼にうつる祖母の姿にすでに涙をたゝえてゐた、何んと言ふ永い日の苦しみだつたらう、その苦しみ、怨恨を今こそ慈愛に富んだ祖母にうちあけることができるのだ、――さういふ感情で一つぱいだつた。

彼女は立止つて見た、が、涙のために憧にある人々は皆な霞んで眺め[illegible]ることができなかつた、[illegible]で[illegible]をふいたとき、氣がついたそこ

し[illegible]

「ばあさま、おらあとこ田を、田をとられたして…………。」

「お新無理ねえぞ、百姓から田をとりあげるなんてまるで情知らずの畜生共だ、百姓をぶち殺すも同じこつた。」

「ばあさま、ばあさま。」

「お新泣くでねえ、おらあ生きてるうちそんな無慈悲なこと決してしねえから安心しろ、おつ父にもさう言つて安心させろ…………お新おらあお前等の苦勞考へて昨晩一晩泣いて明かしたや。」

お新は一層大きな聲をあげて土間に崩れた。祖母も、駈け集つた女たちも一齊に聲をあげて泣き出した。

十八

祖母の歸宅は永吉等にとつて大きな打撃だつた。彼れや辯護士が如何やうに說いても田を返す考へは絕對的で「樫の木」は頑として聞き入れなかつた。が、それ以外の千二百圓の爭議費用や立入禁止即時撤廢や謝罪文等の要求について彼女は殆んど無智だつた、善良な瀧次

図太い彼等もスパイの刻々の情勢をきいて……れ出した。しかも彼等の唯一の力である、、、、、、、、、、、、、、、、言葉を一つもきくことができなかつた。そこへ不意に裏口から赤襷の女群におそはれたので、彼等は一層狼狽した。

祖母は女たちが立去つた後も家の不名譽を嘆いて泣きやまなかつた、自家がかほどまで多數の怨嗟の的となつてゐることを知らなかつたのだ、彼女は永吉を罵り續け、爭議費用を二千圓だらう三千圓だらうと出して、この問題を今日中に解決しろと迫つた。

T部落の五百の大衆が第二會場に殺到したことが知れると、幹部連は非常に狼狽て出した、、、、、、、、、、、、、、うかつな手段を取ると暴動化することは明らかだ、すると彼等の責任問題となる、それを避ける唯一の手段は穩かに解決するより外はなかつた、彼等は辯護士を呼んでそのことを伴げ、、、、、、第二會場に使ひして重山に仲裁に立つことを申出でた。

この仲裁の申出を、指導者は言ふまでもなくはねつけた。
「おれ等は彼等と同類の仲裁を要しない。」
その事を聽衆に報告すると同時に、五名の交渉委員が指名された、
そして、、、、、、、、それ等の人々は、、、、、、、、、、、拍手におくられて出かけた。
交渉は黄昏がつきても纒まらなかつた。、、は演説の合間々々にきく報告の僅かな進展に齒がみをして苛立つた。そして會場が次第に暗くなつて第三の報告がはいつた時、、、、、、、、、、、、、、、、、。
「永吉を、、、、」
「北川をやつつけろッ」
そして黒い渦は猛然と北川家へ殺到した。
この強大な示威こそ、交渉にある組合員が待ちわびてゐたのだ、その喚聲が聞えた時永吉や辯護士は急に蒼ざめ、、、、、、、、周章てて室から飛び出さうとして老人の、、、、と突きあたつた。
「君等困るぢやないか、困るぢやないか、早く決め給へ、、、、、
と君等の責任だぞ。」
總代は蒼白め、立つてゐる白髪がふるへて見えた。
組合員の一人に答へた。

一この方では一刻も早くきめたい、先方が出ししぶるんだ。」
事務所から組合の聲がひゞいた。
「永吉、千圓でも、二千圓でも言ひなり出してやれてばツ、馬鹿ツ。」
、、が更らに言つた。
「重山君、重山君、君が出て行つて一時止めてくれ給ひ、もうすぐ解決するやうに言つてくれ給へッ。」
重山君が立つて行つた。
が、喚聲は間斷なく爆發して少しも沈まらなかつた。
重山が歸つて來て言つた。
「もう僕等の言葉でも防ぎきれん、…………、、、、、、、とするなら速決するんだ……争議費用の點で僕等の方も讓歩さう、千圓出し給へッ、それ以上は死んでも讓歩せん。…………」
他の一人が言つた。
一それをきかなかつたら、僕等に責任はないぞ。」
「早くしないか。」
、、、、が苛立つて永吉を睨みつけた。
永吉は唇を嚙んで顔をあげ[illegible]なつたが、辯護士にさゝへられ[illegible]
し、顔[illegible]
一、、、」

し、――長くひゞき渡つた

「八時廿分！」

重山は感動にうるんだ眼をあげて柱を見た。

十九

鷄の聲で朝の早いことが知れた。まだ起きたものがゐないらしい、縁側に向いた土間の戸をすつかり明つぱなしてあるのに室内は酒の匂ひと、重く濁つた暑い呼吸で充滿してゐた。

薄い光りで見ると、足も立たぬほどに多くの人間が、半ば裸に寢そべつてゐる。茎を取つた泥大根がころがつてゐるさまだ。

重山はそのさまを見てほゝゑんだ、前夜のさまざまな醉態、狂態が新らしく思ひ出された。二木、金次郎など四五人で一日市名物の三勝（盆踊り）を踊つたことまではぼんやり覺えてゐるが、その後のことはまるでわからなかつた。

彼は頸をもたげて頭の先で鼻のつまつた鼾をかいてゐる男を見た、政治部の執行委員長をしてゐる從兄弟の田谷だつた、と、前夜二人

胸一つぱいの深い呼吸がのぞましかつた。――彼はそつと起きあがつて外へ出た。

朝はまだ水色をしてゐた。濕つてゐる空氣のなかにひどく糞尿の匂ひがした、それがなんのせいかすぐ知れた、前夜人々が、提燈をふりかざし農民歌をうたひながら、源藏の家の周圍をぐるぐるねり歩いたので、源藏の女房や娘が口惜しがつて小路に糞尿をまき散らしたのだ、彼は微笑し、足下に氣をつけながら田を拔けて湖岸に出た。

岸にかゝつてゐる小舟に腰かけて、彼は深い呼吸をした、それから四五丁先の湖面にぼんやり浮いてゐる閣に彼は一寸の間、不思議をおいた。が、それが鰤漁の閣であることが知れると、自分がいつもとちがつた對岸にあることに新鮮なものが感じられた。

バットを一本吸つてゐる間に、湖面をつゝんでゐる乳色の靄が次第にうすれて對岸の村々や、美しい森山の姿が夢のやうに見え始めた、その短かい時の湖水の朦朧ひと吐息は、彼が小さい時から聞かされて來た湖水の傳説――龍の戀物語を思ふにふさはしいミスチックな美し

さだつた、人の生活は渦卷の中に夢のやうに浮き出し、富める者の暴虐も貧しき者の苦惱も、、、、、もこと〴〵く神秘なものにおほひかくされてゐた、そしてまた、湖周一帶の農村はその古びた傳説にふさはしい封建的なさま〴〵の制度や遺風に永い間とざされてゐたのだ。

その神秘をあばき、偶像をたたきつけ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、することにどんなに永い年月と同志の血と涙とが流されたことだらう。

その十年間を思ふと重山はまるで夢のやうな氣がした。彼は地主の田を管理してゐる兄の家を追出され、飢ゑと、町の惡罵を忍びながら闘はねばならなかつた。が、その苦闘は空しくなかつた、やがて組合は組織され、無智だつた農民は幾度かの熾烈な闘爭に訓練され高められて、いつでも、、、、五十、百名と繰出せる強剛なものに成長してゐた。

そのことを想ふと彼はいつも感激して涙ぐまずにゐられなかつた。

もし、彼等の闘爭でも組織を離さつた五十名の、、、がなかつたらあれほど彼等の家族を救ふことは困難であつたらう。

[illegible]

そしてT部落まで歸つたのだが、彼は群集の歡呼連唱の中にありながら、いつもとちがつた、ある寂しさを感じた、それは爭議が具へてゐたさまざまな條件が非常に有利で、かつて經驗がないほどの大きな勝利をかち得たことにあつた。

が、今、彼の心にはさうした詩人めいた感傷は少しもなかつた、彼の心は既に新たな闘爭に用意されてゐた、永い間、遠くはかなく望んでゐた對岸に、今こそ一つの大きな足跡が印されたのだ、やがて湖周一帶を、、をもつて彩る日も遠くないだらう。

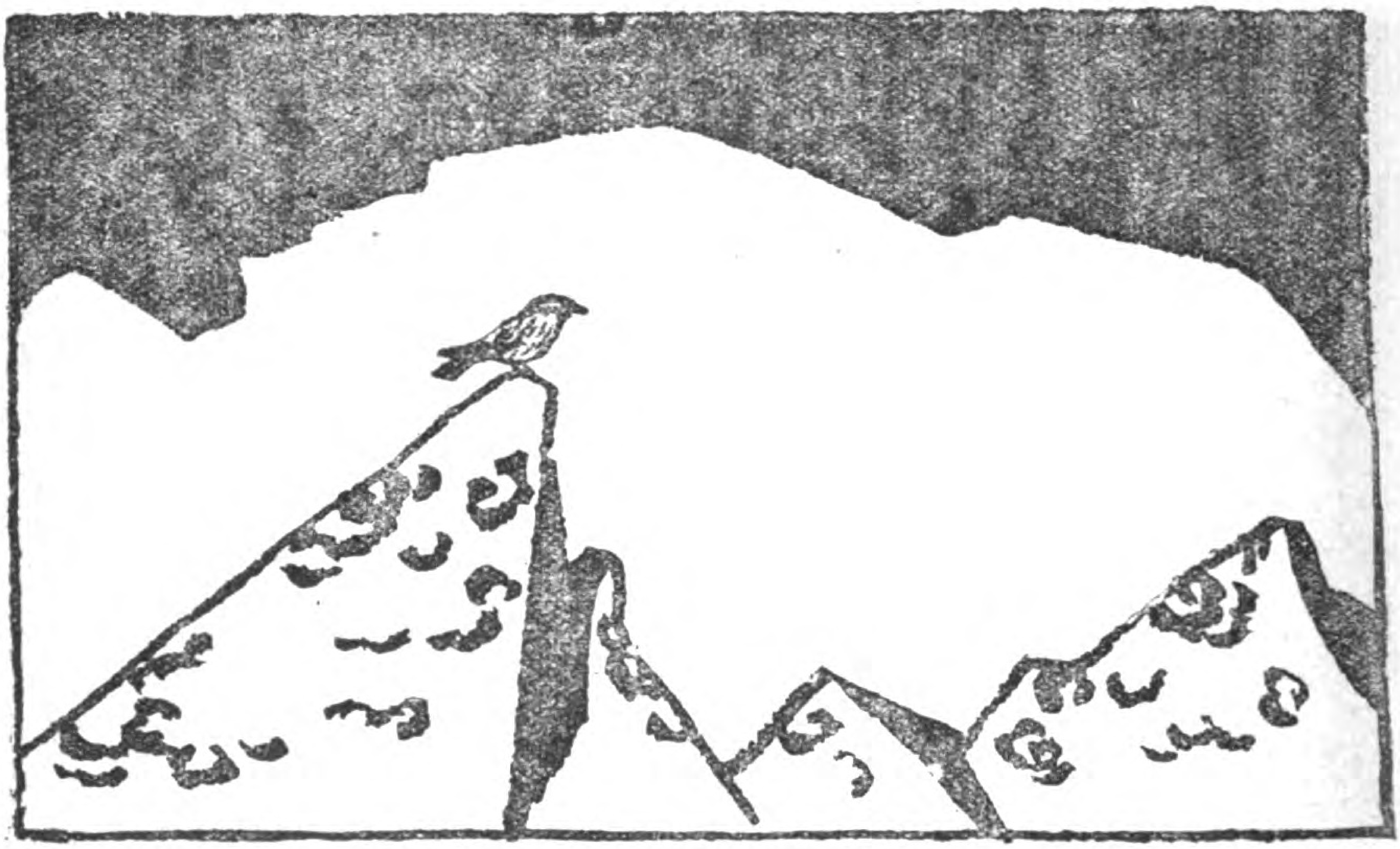
霧は晴れて、森山は鮮かに湖面に浮き出した、そして次第に暗綠色から紫色にかはり、やがて上半身が眞赤な焔をうけてきらめき出した。

その日の出は實にすばらしい眺めだつた。いつも夕日の美しさに見なれてゐる重山には新たな感激をよぶ眺めだつた。

彼は立ちのぼる陽に向つて何かしら叫ばうとした。

が、急に口をつぐんで眼をみはつた。

斷崖の蔭のかげから不意に[illegible]た一艘の小舟が音もなく滑つて來た。（一九二八年九月二十日）



なぜ自殺しないのか

武林無想庵

(日佛評論社のアトリエの隣の、机と椅子一脚のほかには全く何もない納屋の中で、タタキの上へ仰向けにフンぞりかへりつゝ、無想庵はまじ〳〵と考へる。)

生きてゐるのはうるさい。それかと云つて自殺する氣にはどうしてもならない。あの天井の梁へ繩をかけて、そいつへブラさがれば、簡單にそれですむことだが、どうしてもさういふ氣にならないところは不思議だ。

ヴオロノフとかいふ男の説によると、死は生物の本能ではないさうだ。さうしてそれはほとんどすべてアクシダンの結果だといふ。もつともな考へ方だと思ふ。

シヤンゼリゼエを横ぎるのは死を横ぎるのだ。さうして生物は刻々アクシダンを避けて生きてゐる。それが生の營みだ。

生きなければならないと思ふぐらゐ苦痛なことはない。飢渇に追ひ立てられるぐらゐわづらはしいことはない。さうして物を食ふとうまい。物を飲むとうまい。同時にそのうまいと感ずることがわけもなく腹立たしくなる。

なぜ自殺する氣が起つてくれないのかと思ふ。

もう二十年ちかい昔になるが、「家」を讀賣へ書きはじめてゐた忙しい島崎藤村氏を、無理やり深川亭へ招待した中澤臨川が、前後不覺に醉つぱらつた揚句、片手にさしあげた菊正の德利をば、興に乘じて無想庵の頭上からザブリと浴びせかけながら、

「ばかッ！　貴樣はなぜ自殺しないのか？　……ばかッ！」と絶叫した。

臨川のやうな單純なロマンチストの眼から見たら、無想庵はおそらく二十代で自殺してゐて然るべき人間だつたものであらう。するだけの事して臨川は死んだ。さうして何もせぬ無想庵は今もつて生きてゐる。

鵠沼の東屋から、臨川の友と稱する隣室の三田の學生と、喉頭癌で呻吟してゐた小田原の臨川へ宛てゝ、醉餘の心なきよせがきした繪葉書を送つてやつた時、

「君はまだキスキイなんぞ飲んでゐられて羨ましい。」と、心細さうにかすかな鉛筆で返事してよこした。

その臨川と押川春浪と無想庵と、それより以前小石川宮下町の家で、一日快く飲み暮らした事がある。

「貴樣そんなに飲むと、四十にならんうち卒中で死ぬぞ。」と、小笠原島から歸つたばかりの[illegible]

が、それから一週間とはたゝぬうち、春浪はコロリと死んで了つた。さうして無想庵はまだ生きてゐる。五十になんなんとしてまだ生きのこつてゐる。

獨歩の友、臨川の友、さうして無想庵の友であつた紅蓮洞は、世にあるかぎりさぞかしつらい思ひばかりしてゐた事であらうと、かれの一生が無想庵にはしみじみと察することができる。獨歩はいふまでもなく、臨川にも春浪にもそれぞれ多少の世才らしいものはあつたけれど、紅蓮洞にはそれが皆無であつた。さうしてそれゆゑにこそ無想庵には紅蓮洞が一番しのばれる。

辻潤の話によると、紅蓮洞は地震後間もなく聖路加病院で大往生を遂げたといふ。一度見舞にゆかうとして、とうとう果さなかつたと、辻潤はしみじみと述懷した。

その辻潤は巴里にゐる。

辻潤のいふ。――若し君でもゐたかつたら、僕はきッと巴里へなぞ來る氣にはならなかつたらうよ。

さうして、――君が若しその氣になつてくれたら、僕は實は君を日本へつれてかへる考へでゐたものだ。と、附加へた。

――今更かへつたつて、どうにも仕方がないさ……と、無想庵は[illegible]

は忽ち不愉快になる。さうかと云つて、無想庵は日本の生活より歐羅巴の生活の方がそれほど氣に入つてゐるといふわけでもないのだ。

日本でも歐羅巴でも、凡そ地球上のいかなるところでも、どだい生活そのものが無想庵の氣には入らないのだ。從つて生きてゐることが苦痛になる。從つて死にたい〱と念じ暮らしてゐる。さうして思ひきつて自殺のできぬことが、かれには齒痒くて〱たまらなくなる。

二十年前醉つぱらつた臨川にも、おそらくそれが齒痒く思はれたものであらう。

それは恰も或年の正月元日であつた。

吉例の屠蘇を祝ひながら、無想庵の養母は綿帽子を頭へかぶせた生まれて三週間ほどになる乳呑兒を膝の上に抱きかゝへて、いかに嬉しさうにニコ〱してゐた。

無想庵にはそれが苦しかつた。

毎年いちはやく年始に來てくれるのを常としてゐた小學校時代の舊友と飲み暮らして、わづかに陶然となり得たかれは、これから年始ま

く黄影をなげかけて[illegible]

いつの間にか櫟林の中にあつた岩野泡鳴の家の前まで行つた。

泡鳴は清子と共に熱海へ出かけてゐて留守であつた。

「ヤア、、、」

「しばらく、、、」

はしなく門前で邂逅したのは同じ西大久保に住む吉江孤雁であつた。

「君はこれからどこへ？」

「どこへつてアテはない。」

「それぢや僕の家へ來ないか？」

「行かう。」

平生酒を嗜まぬ孤雁も、正月であるかして、何本も〱銚子をかへて無想庵をもてなした。さうして國木田獨歩の話ばかりした。

孤雁の家を出ると、外はまつくらであつた。無想庵は醉歩蹣跚、暗を縫つて、道路から道路へと、足のむくまゝにさまよひ歩いた。

わが家へ立歸ることをば、かれは決して忘れたわけではない。反對に、家のことを思ひ出せば思ひ出すほど、かれはいよ〳〵家へ歸りたくなくなるのであつた。

交番のあかりと、その筋向ふの鳥屋の看板とに見覺えがあつて、無想庵はそこが牛込肴町であることを想ひだした。同時に、

「お幸ちゃん……稻本……」と、たつた二つの固有名詞だけが、千萬無量の記憶の中から、たちまちかれの心頭へこみあがつて來て、い識域の上でパッと火花をちらした。

お幸ちゃんは子供の時分、そこへ尾崎紅葉がしきりに通つては、例の小姓を可愛がるのを常としたといふ、待合稻本の一人娘である。さうして稻本はその鳥屋の路地裏にあつた。無想庵はその路地を折れた。

「嬉しいわ。お正月さう〳〵來て下さつて……」

「なアに、わざ〳〵來たんぢゃない。ひよいと茲へ出て往つたもんだから、フラ〳〵ッと寄つて見たゞけさ。」

「なほ[illegible]だから[illegible]つきない[illegible]だわよ。」

「[illegible]か……」

「[illegible]」

「[illegible]」

——すぐ來ますよ。」

すぐ來た。

抛射する友禪の極彩色にむせびながら、無想庵は醉つた、醉つた。

かれはまだ成熟の途中にある六個の愛くるしい手首に命じて、かはるがはるアブラぎつたかれの面上へ白粉をぬらした。思ひのまゝに臙脂を點じさせた。さうしてかれはエヘラ〳〵と笑つた。

夜があけた。茶室の小障子にポッカリと朝日がさしてゐた。無想庵はとび起きた。さうして外へ出た。

神樂坂を降りた。飯田橋を渡つた。中坂下へ出た。麗らかな日光はかれにはまぶしかつた。

「どこへ行かう？」

行くところはどこにもない。さうして行かずにはゐられないのだ。濠に沿うて歩いた。千鳥が淵もすぎた。半藏門もすぎた……

「さうだ。蒲原君のところへ寄つて見よう。」

詩人蒲原有明の家は隼町にあつた。詩人はしかし留守だつた。

「さア、どこへ行かう？……ウム、臨川の家はこゝから遠い。」

ツルゲニエフの[illegible]に[illegible]つてゐた。

臨川[illegible]にあつた。[illegible]を[illegible]に[illegible]二階で、かれにつきつきさ

[illegible]

傀田の人たつたの……

「滿開の椿が血のやうにポタリく碧潭へ落ちてねえ……」と、眼を細くして、臨川はいかにも嬉しさうに語つた。

茶々が淵――椿――血のやうに――臨川好みのロマンチシズムだ。

二人は醉つた。二人は外へ出た。

「月島の小山内を襲つてやらうぢやないか？」と、臨川は山車人形のやうに釣革へブラさがりながら發議した。

「それがいゝ。」と、無想庵は相槌を打つた。

小山内はしかし青い顏して蒲團にくるまつてゐた。前夜來甚しい下痢を起して、苦しげに醫者の來るのを待ちかねてゐた。

醫者は來た。診察の結果、大した容態でもなかつたけれど、さすがに引張りだすわけにもゆかなかつたので、半ば醉のさめかけた二人は悄然として辭し去つた。

日は暮れかけてゐた。

「島崎さんをよばうぢやないか？　島崎さんはわれくの先生だ。」

と、永代橋の橋畔で、臨川はまた發議した。

臨川に罵られるまでもなく、生きるといふことは……無為に……つらいのだ。さうして死ぬ氣にはならぬのだ。今も昔のとほりだ。さうして昔も今とかはりがない。

正月の事だから、入替り立替り、藝者が何人も來た。さうして來ては間もなく立ち去つた。

三度使を立てゝ、三度目に島崎さんはやうく來てくれた。

「議論より、まア一つ、靜に追分でもきかうぢやありませんか？」

追分を得意とする老妓が恰も一座に侍ンべつてゐたので、臨川と無想庵のデスペラぶりに眉を顰めた島崎藤村氏は、端然と席につくと、まづかう云つた。

老妓は唱ひ出した。

深川亭を引きあげた時は、無想庵の頭の中では、くるくと火輪車が急廻轉をしてゐた。かれの眼には何も見えなかつた。かれの耳には何もきこえなかつた。さうしてチカくと線香花火のやうな火花ばかりが散つた。ジインくと林間の油蟬のやうな小うるさい單調な音響

ばかりきこえた。

とある家の、とある座敷で、

「僕は一體藤村君はきらひだつたが、今夜はどうしたのか急にすきになつた。」と、無想庵は呂列のまはらぬ管を卷いた。

「すきだとか、きらひだとか、そんなことはどうでもいゝぢやありませんか？」と、爰では藤村氏も相貌を崩して、エヘ、エヘと嬉しげに笑ひながら答へた。

「モオパッサンよりチエホフの方がえらい。貴様はまだモオパッサンだ。」と、臨川はグダ〳〵になつて泡を吹いた。

眼がさめて見ると、無想庵はすばらしい、、、、、してゐた。が、それとむづくと、かれは云ひやうのない嫌悪を感じた。

「君、かまはず歸つてもいゝんだぜ。」

「さうですか。それでは勝手ですけれど歸らして頂きます。」

支度して別觀は出て行つた。

一人きりになると、無想庵は層一層の自己嫌惡に陥つた。

「このまゝどこかへ行つて了ひたい……どこかへ……山の中か……はなれ島か……どこでもいゝから、人間のゐないところへ………」

彫刻家の[illegible]……

恰も暗中のフイルムのやうに、かはる〴〵かれの心中へ浮かびあがつて、それがクル〳〵と旋風のやうに目まぐるしく回轉した。

「さうだ、國木田獨歩はよく湯河原へ行つたつけ……行きたいな……いや、行かう……今すぐ、このまゝすぐ……」

かれはガバとはね起きて襖を開いた。階段があつたから階段を下りた。廊下があつたから廊下づたひに行つた。と、廊下のはづれには又一つ階段の降り口があつた。

「フム、するとおれは二階にねてゐたわけか……」と、思ふとたんに、忽ち焦げくさい一種の臭氣が、プンとかれの鼻をついた。

そこで、その臭氣の出どころと思はれる部屋の襖をは、かまはずガラリあけて見ると、丁度その部屋に臨川が臥てゐた。

「ゆうべは君、大變だつたよ。」と、臨川はムックリ身を起して、「これを見たまへ。」と、一隅に積上げた夜具蒲團を指さしながら云つた。

見ると、その蒲團は火事場からでも曳出して來たもののやうに、あさましく燒けくづれてゐた。

「知らずに行火を蹴とばしたものなんだね。君しまひに僕は[illegible]廊下まで運び出してゐたら[illegible]あがつて來てくれた時に、[illegible]

燒け死んで了つたわけだ……」

「フウム。さうかい。」

「君は僕の眞上に臥てゐたんだから、死なば諸共だ。」

「なるほどね。」

「握手しよう……」と、臨川は感極まつたやうな表情をしながら、ふるへる手首をさしのばした。

二人は手を握り合つた。

淺草橋をわたると、二人は立ちどまつた。

「僕はこれから湯河原へゆく。」

「行きたいなア、一緒に……だが、僕はあした會社へ顏を出さなければならないんでねえ……

二人は別々の電車へ乘つた。

門川から歩いて、湯河原の入口へ着いた時は、もう山蔭に日が落ちてゐた。夕もやのたゞよふ冬田、潺湲と淸らかな音を立てる藤木川、鶺鴒が一羽、ギクシヤクと眞黑な枝を張つた柿の木、ヒイヤリとつめたい空氣、無想庵の頭は久しぶりでハツキリした。

伊豆屋の別館から東京へ手紙を出すと、やがて原稿紙と、プリユラリスチツク・ユニヴアスと、カムレエツヅと、ミユツセエのコンフエツシヨンと、それからブラウニング選集とが屆いた。女子學院の寄宿舍から正月休みで宮下町へ泊りに來てゐた彼の妹が送つてくれたものだ。

入浴、散歩、飜譯、讀書――無想庵の心は久しぶりで平衡を得た。が、その平衡は一週間とは續かなかつた。

「フミヤシンダ　スグ　カヘレ」

文哉が死んだ！　家を出る時綿帽子をかぶつて養母の膝に抱かれてゐたあの乳呑兒が死んだ！……無想庵には併しそれが本當とはどうしても信じられなかつた。

「もしかしたら、妹の入智慧で、おれをよびかへすつもりで、こんな電報を打つてよこしたんぢやないかしらん？……が、さうではなくて、本當に死んだものとしたら？……いや、いづれにしても、おれはかへるまい……」

なんといふかれは不人情な男であらう！

無想庵は歸らないといふ電報を打つて、翌朝湯河原を立つて了つた。

ガタクリ驅け下る雨の石原道を、すつかり前胴油をかけた俥の幌の中で、歸らぬとは決したものゝ、それがかれには併し正しい行爲だとは是認がしきれなかつた。

「歸らうか、、、歸るまいか、、、」

歸るのはかれの我を棄てることだ。歸らぬのはかれの我を立てるこ

とだ。さうしてかれの我とは放縦の別名にすぎない。

「さうだ。どつちでも輕便の來てゐた方へ乘らう。」

なんといふかれはでたらめな男であらう。

門川へ着くと、あいにくの事には、小田原行も熱海行も丁度同時に發車する間際であつた。

「旦那、上りですか、下りですか？」と、車夫がきいた。

無想庵は絕對絕命に陷つた。さうして夢のやうに、

「下りだ。」と、絕叫したのは盲目的なかれの我であつた。

我はつねに盲目的だ。さうして一切の利害を超越した未來をば、無想庵の前途に展開する。無想庵はそれゆゑにエゴイストだ。（エゴイストではあるが、しかしガリガリ亡者ではない。）

熱海から下田行の船に乘つた。

風波の後の稻取の落日は、なんとなく無想庵を泣かしました。

そのまへの年、かれは田山、島崎、蒲原の三先輩に隨行して、三四十も森林の立つた峠道をば、恰も凝然たる太古の墓地のやうに、ありさむく對岸の山腹にちらばつた、巨大な無數の倒れ木を眺めたから、船はやく湯ケ島を出發した蒸汽船の中で、

「伊豆丸ですなア！」と、感激した島崎さんの顔に[illegible]して、

「下田へついたら[illegible]」

同じ下田の同じ宿で、同じ女中の給仕する膳へ向ひながら、

「茲から八丈へ行く船があるかネ？」と、無想庵はきいた。

「ありません。」と、女中は答へた。

「すると、八丈へはどこから行くんだらう？」

「横濱からです。」

「さうかい。僕はまた茲から出ると思つた。」

「出ません。」

「しかし外の島へ行く船はあるだらう？」

「あります。」

「どの島へ行くんだい？」

「御藏島へ行くのもありますし、三宅島へ行くのもあります。」

「いつ出るんだネ？」

「きまつてゐません。」

「きまつてゐない？　すると、定期ぢやないんだネ。」

「ええ。」

「近いうちに出る船はないのかい？」

「あさつてあたり御藏島へ行く船があるときいては居ります。」

「[illegible]れるのかネ」

「これも[illegible]」

かれは東京へ手紙を書いた。義母へ宛てゝは、妻と一緒に[illegible]いやだと書いた。妹へ宛てゝは、お前には逢ひたくてたまらないと書いた。

ミュッセエを讀みながら、やんわり朝日に包まるゝ辨天崎の森林を逍遥しつゝ、かうしたところで徳子とたゞ二人、物をも云はずニッコリ手をひき合つて歩いたら、どんなに幸福に感ずるだらうなどゝ空想を恣まゝにし、又宿へかへつては、机へむかつて一心にブリユラリスチック・ユニヴアスを譯したりした。

白々明にすさまじい雷鳴があつて、めづらしく霽などの一過した爽快な日の午後、入港した水雷艇隊の水兵達が、どやどやと階段を轟かして、無想庵の隣室へ集まつた。

酒と女――かれ等にはそのほかに要求するものは何もない。

酒のまはるに從つて、喧噪の度は加速度的に滑大して行つた。

九時すぎると、無想庵は寢床へはいつたが、やかましくて眠られなかつた。

女を抱くべく、水兵は三々五々出て行つた氣勢がしたが、遊廓のな

そのいぢらしい謙遜さには、無想庵もさすがに身も世もあられぬもの狂はしい共鳴を感じた。

「いさなとり」に出て來る蓮華寺村が近いときいて、翌朝かれはそこへ俥をとばした。

花づくりの古色蒼然たる浴室から出て、のんびりと畑へのぞんだ二階座敷で、ものしづかに翻譯の机へ向つてゐると、水兵達の純眞さを失つた、さうしてたゞ徒らに猥褻な放言と無作法な擧動とから成立つた、修羅に慣する若い、、、の亂痴氣騒ぎが、姦しく隣室から響いて來た。

「おれのいふことをきけ。」

「いやよ。」

「いやだ？　色男があるんだらう。」

「そんなもの無いわよ。」

「無いことがあるものか………ばかにするな………ほんとにないか？」

「色男なンて、そんなものはほんとうにないけれど、すきな人はそりやあるわ。」

「それ見ろ！　やつぱりあるぢやないか………どんな男だ？　云つて見ろ。」

「あなた方に云つてきかすのは勿體ないわ。」

「云へ。云はなきや………どうだ？」

「あれエ！　………そんな亂暴しちやいやよ。その手をひツこめて穩しくしてゐたら、云つてきかすわ。」

「さア、云へ。」

「その人はねえ………ホホホ、、、あなた方のやうな亂暴な人達とはまるツきり違ふの。」

「フム、それから？」

「それから、かうして、チヤンと行儀よく、それはしづウかにお机へ向つて、さうして一日御本を讀んだり、おかきものをなさつたりしてお出でになる方よ。」

「ヨウ〳〵。」

どツと囃し立てる笑聲が起つた。

無想庵はゾツとしたと、色の小白い、キメの細かい、すらりと撫[illegible]爪の、一寸[illegible]のした女の姿が、[illegible]にチラつい た。さうしてそれはけさ玄關までかれを出迎へたこの宿の女中であつた。

松葉杖こそついてはゐなかつたが、かの女は足がわるかつた。で、その足のわるいといふことゝ、打見た皮膚の感じと目鼻立のタイプとが、忽ちかれに妹を聯想させたものだ。

その晩かれは酒を命じた。さうしてその女中に酌をさせた。深川[illegible]以來はじめての酒だつたが、その女が日本橋生れの江戸つ子だつたので、妹ばかりか德子のことまでムラ〳〵と思ひ出して、何本も〳〵銚子を代へた。

やがて腰部を引下げて、それから寢床を延べに來た時、無想庵は物をも云はず、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、。指先は幻滅した。無想庵の醉はさめた。

下田へかへると、御[illegible]行の船に丁度その朝まだきに出帆して了つたといふ。

なぜだらうか？　なぜ[illegible]

無想庵は自責の念にたへなかつた。

沼津ゆきの船が夜中の三時に出るときいて、もう一刻も落ちついてゐることのできなくなつたかれは、さつそくその船に乗ることにきめた。さうして沼津から裾野の奥ふかくわけ入つて、そこで禪僧の如く行ひすましたいと願つた。

さう、禪僧の如く！……で、さう思つた混沌たるかれの心理の一角には、まざ〳〵と毛利湛然の四字が明滅してゐた。

湛然居士は京都新聞に於ける無想庵の文章の愛讀者の一人であつた。下加茂小學校の校長で、相國寺の居士林に蟠居しつゝ、そのころ「禪世界」といふ雜誌を發行してゐたが、無想庵も毎月その雜誌の寄贈を受けてゐたものだ。さうして飾らず偽らず率直に書く湛然の文章には、無想庵の方でもひそかに憎からず愛讀してゐたものだ。

遠羅天釜を讀み、闡提紀聞を讀んで、世に文藝以上の文藝あることを知り、無門關、臨濟録に盛られたる天地こそ、やがてラデイカルエゴイズムのそれであることを感じてゐた無想庵には、湛然居士の書いてゐることは、掌をさすやうに悉くよく分つた。

若しシケるといけないと思つて、夕飯は食はずに、まじ〳〵横になつてゐた無想庵は、二時うつと、女中の提灯に照らされながら、まつ暗な波止場へ着いた。

「沼津ですか？　清水ですか？」

切符を買ふ段になつて、さうきかれた。

「清水行の船も出るのですか？」

「えゝ、一緒に出ます。」

「ぢや、清水を下さい。」

無想庵の腦裡には、龍華寺の樗牛の墓が閃めいたのだ。かつて吉田甲と久能山からワグネルを語りながら歩いたことのある、のんびりとした富士見村の、野趣と詩趣との横溢した、嬉しくてたまらぬ景色が浮かんだのだ。

夜明前の海上へ出ると、オリオンの三星が光つてゐた。

海。星。東雲。

バイロン、シエリイではないけれど、無想庵もまた、「おゝ、宇宙よ。」と、一切森羅萬象に向つて、際のかぎりに呼びかけたくなつた。

蓬萊を思はせる伊豆の西浦、富士を中心とした駿河灣の絶勝、無想庵は終日甲板に立ちくらしながら、日蓮と家康と白隱と樗牛との趣味の歸着するところをばしきりと讃嘆した。

が、清見潟へはいると催しはじめた雨が、清水へつくといきなり土砂降りになつた。

この自然の意地わるさは醍醐寺富士見村に對する無想庵の春夢を一掃するにあまりあつた。かれの前にはたゞレアリテの苦々しい陥道のみが殘つた。

警鼠となつて海岸を駈けぬけたかれは、あやふく江尻電車にとびのつて、わづかにホッと息をついた。

「さう、やつぱり江尻から汽車で沼津へゆかう。」

が、上り列車に先立つこと數分、銀箭の如き豪雨をついて、魚津行の列車が到着した。

「米原で乘換へればすぐ京都だ……京都！……京都新聞！……湛然居士！……行きたい！—

突差の間に、無想庵は賃金表を見た。同時に財布の中の在金をしらべた。京都までの汽車賃を拂つて、まだ十錢銀貨一つ殘るだけの金があつた。かれは切符を買つて、その列車に乘込んだ。

午前一時、京都行の列車を待つ間、プラットフォームの寒さにふるへながら、薄暗いベンチの一端に腰かけてゐた無想庵は、ポッポと湯氣を立てゝ賣りあるく、いかにも旨さうな[illegible]をば、羨ましくてたまらない[illegible]にかけた。十錢銀貨たゞ一枚では、その[illegible]でもこの[illegible]一[illegible]は買へなかつたのであつた。

三十[illegible]

神經は怜しく緊張しきつてゐたとしても、かれの胃の腑はしきに腹を愬へつゞけることをやめなかつた。

汽車へのる時、無想庵は一合瓶の牛乳を買つて飲んだ。牛乳は温かかつた。甘露のやうにゴク〳〵と渇きゝつた咽喉元を通つた。さうしてかれは菩提樹下の釋迦を思つた。

四年前、アルフォンス・ドオデエのしたゝるやうな夢のあまさに醉つて、おきんと共に下車したスーヴニールのふかい、鹽小路の七條驛はまだ暗かつたので、その三等待合室のベンチの上へ、恰もモロック神のやうに眞赤な巨口を開いて、熾んにもえあがる大暖爐をそびらにしつゝ、無想庵は身を横たへてトロトロと一睡した。

大佛の鐘に心づいて、ステーション前まで出て見ると、夜はすでに明け放れ、小雨のそぼふる泥濘の路の上をば、人は傘をさし足駄を穿いて往來してゐた。

湯河原の山坂ではきべらした[illegible]のやうな背生下駄をピシャリピシャリ、無想庵はおぼつかなげに[illegible]を横ぎつて、北野行の京電へのつた。さうして殘金の四錢に相當するところまで切符を買つた。

[illegible]小路四條下る——[illegible]をたづねあてた。[illegible]は[illegible]、人は[illegible]

[illegible]

[illegible]の家へ[illegible]と云つて、半狂の宿から無理に無想庵を業[illegible]

[illegible]の飲めない酒舟はなみ〳〵とつかし

[illegible]無想庵もつゞいて飲ん

[illegible]人の如くチユウと[illegible]した

[illegible]

ブラリ〳〵疎水の方へ下つて來た無想庵とそれから野虹。

「君はどこへ歸るのだ？」

「僕には歸るところはありません。」

無想庵はその夜はじめて野虹と知つた

「歸るところがない？」

「ええ、僕は宿無しなんです。」

「宿無しか。ハヽハヽ僕も同[illegible]だね。で、いつもはどこへ[illegible]たんだ

い？」

[illegible]

「宿無しを一人ひつぱつて來たから泊めてやつてくれ。」
「しようもない。が、まア、はいるサ。」
野虹は蘆舟の氣に入らなかつた。が、氣に入らないからと云つて、一夜の宿を吝しむやうな蘆舟ではない。
翌日新聞の挿繪を二三回分かきあげると、
「どうや？　これから三人で叡山へのぼらんか？」と、蘆舟が云つた。
「賛成だ。」と、無想庵は答へた。
行きどころのない野虹に勿論否應のあらう筈はない。
水筒へ酒をつめて、三人はすぐ出かけた。
三年前、無想庵が京都新聞社を辞して東京へかへる時、蘆舟と半狂と瀨太郎と文選の渡邊等が、恰も空に一點の雲もない十六夜に乘じて、白川口から深夜四明の絶頂を極め、さうして曉かけて大津まで無想庵を送つて行つた、蘆舟にとつても、無想庵にとつても、いかにも心地よい思ひでが、いつぱい胸先にこみあげて來てゐたからだ。實際すばらしい明月の一夜には相違なかつた。さうして路なき峰々など這ひのぼつたりした際、磊落の句がプツ〳〵口をついたものだ。
が、それは九月、これは正月、而も比叡山上の四明路まで直上した時に、三人とも漸くに頂へあがつて了つた。と、あたりは暗くなつてた。
「四明の上で夜あかしはかなはん。」と、蘆舟はまづ弱音を吐いた
「さうさなア。こゝでこんなに寒いんだから、頂上は思ひやられるナ。」と、無想庵も二の足をふんだ
「とにかくこゝでたき火でもやらうぢやありませんか？」と、野虹が提議した。
「それがいゝ。」
杉の落葉は無盡藏に山を埋めてゐる季節だ。拾ひあつめた枯枝に一そこらに横たはつた古樹幹まで容赦なく叩きこはして、元氣を恢復した三人は、炎々ともえあがるたき火の前で、山賊の如くどッと笑つた。
「あんたはんだち、何しておゐやす？」
夕暗の底から朦朧と浄土院の坂をのぼつて來た男が、胡散くささうに三人の姿をジロジロ見まはしながら聲をかけた。
「なアにネ、四明の上で野宿するつもりで、はるばる京都からやつて來たんだけれど、あんまり寒いのに辟易されて、かうして爰でたき火しながら、夜あかしと洒落をきめたところなんで。」
「あほらしい。そんなことせんかて、浄土院へいてお泊りやす。」
「浄土院て何です？」
「[illegible]」

提灯に火をともした青年僧は、朴齒をつッかけざま、先に立つて三人を案内した。

セピア色あざやかな玉杉の重なりあつた葉枝の間から、湖水の一部と膳所石山かけて繪のやうに瞰下される、十何疊かの大きな座敷で、無想庵は翌朝目をさました時、床の間の杜かくしの文字がふとぶつかつた視線の中へとび込むと、どうしたわけか知らずそれがヅキンと魂の底まで沁みた。

「是心作佛、是心是佛。」

無想庵は恰も阿片にでも醉つたやうな、ウツトリといゝ心持になつて、云ひやうのない法悦と共に、腦細胞が忽ち水晶にでも化したやうな、スツキリと明暢透徹な、不可思議きはまつた錯覺中に陷つた。

「僕はもうこの山は降りんぜ。」

「なに？　もうこの山は降りん？」

「さうだよ。」

「坊主にでもならういふのか？」

「なアに、坊主になんぞなるつもりはないが、何だか行きつくところへ行きついたやうな氣がするんだ。」

「何かわからんが、それその方がえゝかも知れん……………えゝやろ……

「僕も一緒におりたいな……………さうしてかきたい[illegible]でかきたうてたまらん……………が、さうもいかんのが殘念や……………あ[illegible]は又どうあつても新聞へ插繪を送らんならんのでなア……………」

蘆舟と野虹とは、無想庵一人あとへのこして、一トまづ山を下ることゝなつた。野虹はしかし京都で纒綿した一身上の處置をつけた後、栗田口へ置いた無想庵の原稿と書物をもつて、必ず山へ戾つて來ると約束した。

その晩無想庵はつれ〴〵に事務室へ話しに出かけた時、

「本が讀みたいんですが、何か貸して頂けますまいか？」と、三分心のランプのかげに、圍爐裏を隔てゝ相對した、うすよごれた白布子の齋木、山の內兩師に向つて云つた。

「どういふ御本が御所望で？」と、若々しいテキパキした聲で、山の內師がきゝかへした。

「摩訶止觀が拜借したいので。」と、無想庵は無造作に答へた。

齋木師と山の內師とは苦笑と共に顏を見合はした。

「摩訶止觀はあいにく山には厶いません。が、法華經ぐらゐでおよろしかつたら、どうぞお持ち下さいまし。」と、いんぎんな齋木師はつゝましやかに云つた。

無想庵は法華經を借りて歸つた。さうして[illegible]と聲をはりあげて、[illegible]

て本當の自分の故郷を發見したやうな心持がした。

「摩訶止觀といふ本が見たいんだけれど……」と、大黑堂の智明さんをたづねた時、火燵にもたれてさし向ひながら、無想庵は話のつひでに云つた。大黑堂の靑年僧は草梁生まれの朝鮮人であつた。

「摩訶止觀？ 天台宗で一番むづかしい本です。山でわかる人たつた一人しきやありません。」と、智明さんは蒼白い顏に一層眉をクリクリとかゞやかして答へた。

「その人に會へないでせうか？」

「そら會へます。」

「これから連れてつてくれませんか？」

「えゝ。よろしいです。」

シンとして全く人香のない北谷敎王院の、杉の枯葉のしきりに匂ふ無氣味に廣い庫裏からはいる。で、すゝけきつた障子をあけると、そこに雨月の靑頭巾を思はせる、甚だ憔悴した僧が一人、火燵の上へ板を置いて、その上でしきりと鳴鶴の千字文など習つてゐた。

智明さんは無想庵を紹介した。さうして來意を告げた。と、敎王院九才の時山へ登つたきり、二十何年ズッと籠りとほして、その間一歩も文殊樓から下へ降りた事はなかつたといふ、さうして日淸日露の兩戰役をば全く知らずに過して了つたといふ、これが飛田孝正師での人であつた。

無想庵はこの人のそばにゐたくなつた。

で、

「お弟子になつて、摩訶止觀を勉强したいと存じますが……」と云ふと、

「はア、それはかまひません。隣の三疊があいてゐますから、いつからでもお出で下さい。寺男の部屋ですが、この寺には五十年以來寺男といふものはゐたことがないのです。たゞし食事はお互に面倒ですから、わたしとは全然關係なく、あなた御自身で勝手に自炊して下さるやうに。それさへ御承知なら……」

と、敎王院さんは口の內で答へた。

毎日坂本から山上へ荷を運ぶ、顏立から聲から體格から、一見女裝した男かと思はれる、いかにも凜々しげな女にたのんで、無想庵は炭

一俵、米五升、それから鹽五合、とりあへず教王院までかつぎあげてもらつた。」

雪が降りはじめた。

土間の一隅へ山と積上げられた杉の枯枝をつかみとつて、庫裏の大爐へ押込みざま、點火すると、その中へ堅炭をぶち込み、さて、さうして置いて、飛田さんの貸してくれた古土鍋へ米をいれると、無想庵はそいつをかゝへて、水口から雪に蔽はれた脊戸の菜園へ出る。と、黒板塀の下に青銅の大水盤があつて、その中へチョロ〱と筧の水が落ちてゐる。無想庵は水盤の前へしやがんで、サラサラと米をといだ。ちぎれるばかり指先がつめたかつた。

庫裏へかへつて、すでに灼熱してゐた堅炭をば三疊間の囲爐裡へうつす。五徳の上へ土鍋を安置する。

むかし心火逆上し肺金いたみかしげた白隱が、かの白川の白幽山人に教へられたといふ、その遠羅天釜の中で無想庵がはじめて書名とその書の存在とを知つた摩訶止觀とは、要するに天台學の三大部の重要なる一部であつて、さうして北宋禪の枯座默照的修禪要旨にすぎなかつた。

が、たま〱讀んだ智者その人の座右銘にそゝのかされて、無想庵はその日から絶對に衣帶を解いて横臥することをやめた。

白粥をすゝりをはると、かれは克明に小止觀の記述に從つて、安によりつゝ、瑩の如く結跏趺座をつゞけた。半眼を瞑ちて見つめるともなく見つめた鼻端と臍と[illegible]に、默々とわきのぼる八萬四千のあらゆる念頭をば、所謂臍下の丹田へ悉く驅逐しつゝ、かろく結んだ兩掌の大日印中へと、刹那々々に溶かし込むことに努めた。

無想庵の五體は震へた。さながら悪寒にでも襲はれたやうに、プルプルガタ〱と震へた。さうしてまたゝく間に全身汗でビッショリとなつた。と、やがて震へのとまる頃となると、規則正しい數息法はいつの間にか寄せては返へす潮騒の如く、鼻端をすべる半眼の視線には、未だかつて見たことのない、たゞ一面に金色燦爛たる、無邊際空に陸離とした、一大彩光が横たはつた。

夜がふけた證據であらう。あらゆる寺中を騒がして、無數の鼠が荒れまはつた。と、雨戸のない廣縁からは、ビッと吹き落す朔風と共に、廊下を横ぎつて、パラ〱と障子の紙に吹付けした。さうして魂切る聲をたてゝ、折々悲しげに暗中をつんざくのは、陸梁の火焔にもたれた飛田さんのコシマアであつた。

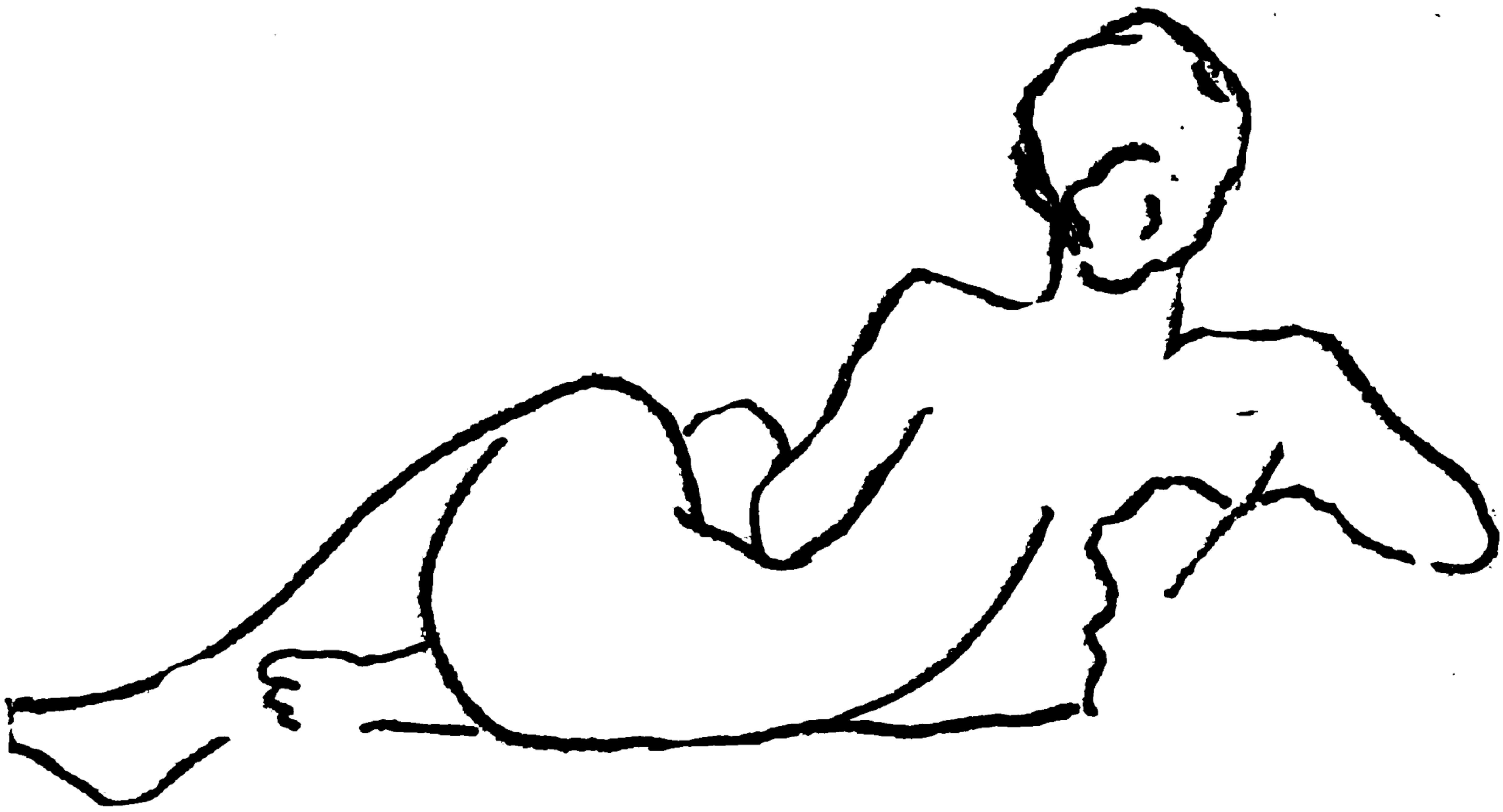
無想庵には自殺ができなかつた。

妻の里から乞はるゝまゝに、かれに教王院から離縁状を書いて送つた。

粟田口へ殘した無想庵の[illegible]、野良に[illegible]とはり山へ歸つて來た[illegible]

ファウ[illegible]

た[illegible]……



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十

「そんなこと今迄に何べんくらゐあつた？」「何べん云ひましても、とても勘定しきれしめエん。今日はお茶のお稽古や、今日は柿内さんとこや云やはりやして出かけはりまんのんで、そのつもりでお供して行きますと、あのなあ、あてちよつと用事あんねん云やはりまして、えらいそはそはしやはりまして、ひとりで何處ぞへ行つてしまひはりますねん。」「それほんまに違ひないなあ？」「なんで私がうそ云ひまツしやろ。――奥様ちつとも氣ィおつきやあれしめエなんだんでつか？　何ぞ今迄にけつたいやなあお思ひになりやしたとこありめエんでしたか？」「そらもう、うちは馬鹿やよつて、そない散散利用されて、道具に使はれて、踏みつけにされてながら、今の今まで此處から先も氣ィついたとあれへなんだ。それにしてもまあ何ちふ阿呆やろ。――」「ほんまに、わたいとこのというちやん恐ろしい人だすよつてなあ。……私いつかて奥様の顏を見るたんびにえらい済まんやうな氣がして、お氣の毒でお氣の毒で、……」と、心から同情したやうに云うてくれますのんで、そんなお梅どんみたいなもん相手にしたかつてしやうむないのんです

けど、あんまり口惜しいてお腹の中が引つくりかへるやうになつてましたよつて、何でも彼んでも思うたことを云ふ氣になつて、「なあ、お梅どん、あんたかつて察してくれるやろ。うちはそんなこと夢にも知らんと、こなひだからうちの人と喧嘩してまで光ちやんのために盡してるねん。うちかつてこないにまで上つてエへなんだら、なんぼ腦味噌が足らん云うたかつて氣ィついてたに違ひないわ。まあそれもええけど、今夜みたいな電話かけて來るなんて、いつたい何ちふ氣ィやろ？ 人を馬鹿にするのんも程があるのに。」「ほんまに何ちふ氣でゐやはりまんねんやろなあ？ よつぽど困りはりましたん違ひまッしやろか？」「なんぼ困つた云うたかつて、好きな男と料理屋へ行つてるやのお風呂へ這入つたやのと、そんなことうちに云へた義理かいな、あんたまあ考へてみて欲し！」「それもさうでおまッけど、着物盗まれてしまひはつたんでは裸で歸りはることも出來しめへんしなあ。……」「うちやつたら裸で歸る。あんな恥知らずな電話かけるぐらゐやつたら、裸で歸る。」「こんな時に花坊に遇ふなんぞ、惡いこと出來まへんもんだんなあ。」「やつぱり罰やわ。それもお銀だけと違て、二人とも素ッ裸にされてしもて、襦袢から足袋までもないやうになるなんぞ、……」「さうでおます、さうでおます、さうと聞いておまッさ」「ああ、ああ、こんな事に氣を配つて[illegible]……[illegible]

處まで馬鹿にされてるねんやろか。」「とうちやんは又、今日あの帶を着て行きはつた云ふのんはほんまに運が强おまんなあ。奥様が遊びに行つたげへん、どうなと勝手にせエお云やして構はんとお置きやしたら、どないなりましたやろか？」「うちかつてよつぽどそないしてやろと思てんけど、最初はさつぱり何のこッちや樣子が分れへんし、電話口で泣き聲出してはあはあ云うてやよつて、ただもうびッくりしてしもてん。それになんぼ憎たらし思てもやつぱり心から憎む氣になられへんさかい、裸でふるへてやる姿が眼の前にチラついて、可哀さうで可哀さうで居ても立つてもゐられへんやうになつて、……そらお梅どん、ハタから見たら阿呆らしやろけど、戀云うたらそんなもんやし。」「そらなあ、さうでおまッしやろとも。………」「それにどうやろ、自分のもんばつかりか男のもんまで持つて來い云うたり、電話口でこそこそ相談し合うたり、まるで人に見せつけるやうな眞似シて、どんな顏してそんなことが云へるのんやろか。人の前では『姉ちやん姉ちやん』云うて、『あて姉ちやんより外に自分の肌見せたことない』云うてたくせに、男と二人裸にされてる恰好見てやりたいわ。」「もうその時は氣も無中でいろんなことをしやべつてましたよつて、何處を云うてたのかも忘れてしまひましたが、最前から[illegible]を[illegible]思つ[illegible]、[illegible]にお梅どんの大體の[illegible]と思た

その騒動の際に光子さんは隠れてたんに違ひないのです。………
その晩のことをそんなふうに一一詳しう云ひましたらえらい長うなりますんですが、私はその場合、脱けるもんは脱けてしもたし、それに男がゐるんやつたら會うてもしやうがない思て、お金を三十圓紙に包んで、「先ィ歸りますよつて此れを光子さんに上げて下さい」云うたんですが、「まあ何卒さうお云ひにならんで待つてて下さい、今に光子さんも出て來られますから」云うて、無理にその男が引き留めるんです。さうして改まつて私の前へ据わり直しながら、「實は此の事は、ほんとは光子さんから申さんならんのですが、僕は僕の立ち場として說明せんならん思ひますので、一應聞いて下さいませんか」云うて、――つまり光子さんは自分でやと云ひにくいもんですよつて、着物を着換へてる間にその男が代つて話するやうに、段取りがきまつてたらしいんです。そんでその男、――ああ、さうさう、男はその時「財布を取られてしもたんで名刺がありませんけれど、僕は船場の絲光さんの店の近所に居ります綿貫榮次郎云ふもんです」と云ひました。――その綿貫云ふ男の話を聞いてみますと、その人と光子さんとは、また光子さんが船場の方に住んでなさる時分、去年の暮れ頃から愛し合ふやうになつて結婚の約束までした云ふんです。ところが今年の春になつてMの方との縁談が持ち上つて來て、とても二人は結婚出來さうにもないやうになつたんですが、それが同性愛の噂のためにええあんばいに破談になつた。――まあさう云ふ意味のことを云うて、しかし決して自分たちは奥様を利用したんと違ふ、初めは利用したやうな形になつたけど、光子さんはだんだん奥様の情熱に動かされて、自分を愛するよりももつと熱烈に奥様を愛するやうになつたよつて、自分の方がどれくらゐ嫉妬を感じたか分れへん、利用されたとすると自分の方がされてるぐらゐや云ふんです。そんで自分はお目にかかるのは始めてですが、奥様のことはしよつちゆう光子さんから聞いてゐた。同じ戀愛でも同性の愛と異性の愛とはまるきり性質が違ふよつて、奥様との仲は許して貰はんと、自分との仲も續けて行く譯にゆかん風に光子さんが云ひますのんで、自分も近頃は諒解してゐた。「あての姉ちやんかつて夫があるねんもん、あてもあんたと結婚することはするけど、夫婦の愛は夫婦の愛、同性の愛は同性の愛やよつて、姉ちやんのことは一生よう思ひ切らんさかいそのつもりでゐてて頂戴。それがイヤやつたらなんぼ好きな男とかつて結婚せえへん」と、いつでも光子さんはそない云うてる云ひまして、「そら光子さんの奥様に對する氣持ち云うたら、全く崇拜してなさる」云うたりして、えらい人を馬鹿にしてる思ひましたけど、その男の云ひやう云うたら實に丁寧で、五分の隙もないやうなんですし、それに自分は光子さんとの關係をいつまでも祕

に隠しとくのんはええことない思て、自分も諒解してるねんよつて私にも諒解して貰ふやう光子さんに話してたんですが、光子さんかつて勿論その方がええことは分つてながら、今更私の顔を見ると切り出しにくうなつて「折があつたら折があつたら」思てるうちに、とうとう今夜のやうなことが出來てしもた。さうしてさつきの電話では盗難に遇うたやうに云うたけど、實はただの盗難ではない、着物を取つたんは泥坊と違うて博奕打ちや云ふんです。それがだんだん聞いてみますと、ほんまに惡いことは出來へんもんで、その晩その宿屋の別の座敷で博奕をしてるもんがあつて不意に手が這つたんやさうですが、刑事がどやどやと蹈み込んで來たんで、二人はびつくりして夢中で部屋を跳び出して、光子さんは長襦袢のまま、男は寢間着のまま、屋根から隣りの家へ逃げて物干しの床の下へもぐり込んでた。博奕打つてた連中も我先にバラバラ逃げ出して、大抵上手に逃げてしもたところが、その中に逃げおくれた夫婦もんがあつて、廊下をうろうろしてるうちに光子さんの部屋が開いてたんで、そこへ逃げ込んでみると、ちやうど二人が抜けて出たあとの布團が敷いてあつた。そんで此れはしめた思て、今度はその夫婦もんが布團へ這入つて密會者みたいに装うてた。と云ふのんは、同じ刑事でも博奕打ちを検擧するのんと密會者を検擧するのんとは係りが違てるんやさうで、その人たちはそれを心得てたらしいんです。けど刑事かつてそれくらゐなこと分つてますよつて、その夫婦もんを怪しいと睨んで勾引したんやさうですが、その時枕もとの亂れ籠に入れてあつた光子さんと綿貫云ふ男の着物を着て、そのまま警察へ連れて行かれた。なんでか云ふと、夫婦は宿屋の浴衣を借つて博奕打つてたところへさう云ふ騒ぎになつたんで、自分等の着物は向うの部屋にありますねんけど、何處までも密會者として通さうとするんで、枕もとにあるのんを着て行かんならんかつたんです。そんで光子さんたちはやつとのことで逃れたものの、戻つて來てみると着物がない、財布や手提げぐらゐそうツと置いといてくれたらええのに、それもない、宿屋の主人まで擧げられてしもてて誰に相談しやうもないし、歸るにも歸られへんし、それにもう一つ心配なんは、光子さんの手提げの中には阪急の定期券が這入つてましたし、男の方も名刺を入れてあつたんで、警察から家の方へ電話がかかつたらえらいこツちや云ふんで、どうにもかうにも思案に暮れて私を呼び出したんです。で、どうせ此處まで來てくれはる親切あるねんやつたら、奥様かつて光子さんのため思てくれはるねんやろよつて、御迷惑でも此れから蘆屋まで光子さんを送つて行つたげて、今夜一緒に活動でも見てたやうに云うて、萬一警察から電話がかかつてても、そこを何ぞうまいこと云うといてくれなされへんか云ふんです。（つづく）

社告

改造社特派員　久米正雄

常に時代の先頭を切つて進みつつある文壇の寵兒久米正雄氏が、本社特派員として、年來の宿望を提げて歐米漫遊の途に上る。その廣汎なる理解力と、新鮮なる感受力に於て、新しき世界の觀察者として、現文壇誰しも氏を以て最適任者となすであらう。我社は、明年度の本誌上に於て、氏の水水しき世界縱横談を次ぎ次ぎに百萬大衆諸氏の前に展開することの出來ることを發表して、その絶大なる欣びを頒つものである。氏の巡る國々は、英、米、獨、佛、伊、露――氏の圓らかなる眼鏡に映るものは、社會、文藝、スポオツ、演劇、キネマ、賭博場、その他萬般の社會事象である。これらの國々の、この多面的なる社會相は、我我に新世界觀を教へ、世界への興味を立て直さしめるであらう。

最後に我我は、氏の旅程の恙なく多幸なるを祈ると共に、氏が彼地一流の人々と握手してゐる姿を想望し、一日も早くその名文に接し度いものである。敢へて讀者諸賢の愛顧を乞ふ。



黄昏の殺人

（映畫の爲めのストオリイ）

佐藤春夫

一

朝吹夫婦と伊上とは銀座を散歩した。途中、××の階上で歐洲美術愛玩品展覽會といふものを見た。朝吹はそこでルイ十五世時代と稱する劍と楯とを買ふ約束をした。外にも小さなテラコツタを二點とマヂヨリカ皿を一枚——この皿の方は、朝吹の細君のイレエヌが選擇したのだ。

四日ほどすると會期がすんで、それらの品物は朝吹の新らしいアトリヱへとゞけられた。さうしてその夕方、朝吹はその劍でイレエヌを刺し殺してしまつたのだ。

二

朝吹のアトリヱには女中として婆さんがひとり使つてゐた。こんな不祥事が起つたのもこの婆さんの仕業かと思はれるほど醜惡な外貌で、その上、魯鈍に近い性質だつた。

この婆さんは、朝吹がイレエヌを殺すところをまのあたり見物してゐたのだ。

殺す者と殺される者とは、その前に半時間ほどフランス語で言ひ合ひをしてゐた。何故

の事だかわからないけれども、聲がだん／＼大きくなるので、臺所にゐた婆さんがのぞきに行つてみると、朝吹は右手に細長い劍をかまへ、左手には圓い楯を自分の胸にあてて、ぢり／＼とイレエヌの方へ迫つてゐた。イレエヌは一足づゝあとすざりをしてた。婆さんは本當に殺すだらうと思はなかつた。イレエヌは壁まで追ひすくめられた。ほんの一瞬間の出來事で、それに朝吹の體に遮られてゐて、刺した時の動作は見えなかつた。

急にイレエヌの聲でけたたましく何か叫び出した。

朝吹はその場からとび退いたが、手は劍を持つてゐなかつた。楯の方は持つてゐたが、それをいきなり床の上へたたきつけ、それがカラカラ音を立てゝころがるのを見てゐたが、婆やはかけつけて彼の腕へつかまると、彼はそれを振り放して、外へかけ出した。

婆やが叫び出したので、近所の人が集つた。

三

まるでピンで刺された標本の蝶のやうにイレエヌは心臟を細身の劍で刺し通され、劍の穂尖は壁までとほつてゐた。それでイレエヌは壁へもたれかゝつたまゝ立つて死んでゐた。[illegible]と[illegible]くなつた[illegible]に、イレエヌ[illegible]は、朝吹が巴里のアカデミイへ出品した事のあるイレエヌの立像である。

近くにあるカソリック僧院からアヹ・マリアの鐘がひびいて來て、氣味の悪いこの靜かな部屋の空氣をゆすぶつたが、やがてとつぷりと日がくれた。かういふ月並のロマンテックのなかへ警官と外科醫とが侵入して、家中へありつたけのあかりをともした。

四

自動車で逃げ込んで來た朝吹を伊上もどうすることも出來なかつた。自首することをすすめて、伊上は朝吹について行く途中、氣が違つたのだらうと何度も同じことを言つた。氣が違つたことになるより外、罪の逃れ方がないのを暗示したつもりであつた。伊上は參考人としての申立にも、朝吹が巴里でかつてノスタルヂヤにかかつた時には氣違ひ同様だつたことを指摘した。その當時の朝吹を慰めて、その氣氣をなほしたのがイレエヌで、彼女と彼とは日本へ歸つてからも、とんだ時にだつて一人でなければ外出しないほど仲がよかつた事を證言した。

五

[illegible]

一滴も見當らなかつた。近所の人々や、變を聞き知つた三四人の友人などが集つて、イレエヌの通夜をしてゐた。血はただその黄色い着物や肌着などへにじんでゐただけで、イレエヌの體から劍を拔き出すまでは殆んど大して流れ出さなかつた。經驗のあるらしい醫者は、彼女の創口をたらひの上へ置いて、劍を拔き出すと、血は創口から一度に溢れ出たさうである。イレエヌは普通の病人か何かのやうにベッドの上へ横へられてゐた。胸にはまた普通の傷のやうに繃帶が卷かれてあつた。電燈をかざして死顔を見ると物すごい感じなどは少しもなく、口を少しあけてゐるのが安らかな寢息を洩してゐるやうな氣がした。希臘型の鼻の目頭と接したところが、いつもよりもきわ立つて青く靜脈が透いて見えた。小柄な女だつたがつくづく見ると、兩手でかくしてしまへさうな可憐な顔だ。伊上は四年ほど前に、この女のことで朝吹を嫉んだことを今はつきりと思ひ出すと同時に、女の死顔を見ながらへんに情慾のやうなものを感じ、それで急いで顔の上に巾をかけ、そこから立ち退いた。

露西亞人を父にして、伊太利人を母にして、母方の方には近東人の血があるとかいふことであつたが、それが露西亞革命の後で巴里に流れて來て、最後に日本でこんな死に方をするこの女の、數奇な運命を皆は口々に弔ひ、それ以上にこんな事件の起りを怪しまないものはなかつた。

伊上は何かその理由を朝吹から聞て解つたやうな氣がしたくせに、實際はただ「不愉快だから殺した」とだけで、ちつとも解つてはゐなかつた。

六

婆やはただ氣の利かない手眞似まぢりに、その時の事を話しては「旦那はまあ魔がさしたのでせう。あんなものを買つてお出でになるなんて法はない」とばかり繰り返してゐる。何を言ひ合つたかわからないのは仕方がなかつたが、どんな事がその爭の起りであつたかも氣づかないらしい。ただその不吉な買ひ物をとどけた使がかへるとすぐにその言ひ合が始まつたといふことが、いろいろ尋ねてゐるうちにわかつた。しかもその使といふのがごく若い娘で、それが一時間ばかりも話してかへつたといふのであつた。伊上はそこで、やつとほんとうに解つたやうな氣がした。

七

イレエヌは確に嫉妬深い女だつた。さういふ生れつきであつたかどうかは知らないが、そんなあり樣にはなつてゐた。最初に來た若い女

中は二日目に追ひ返してしまつた。さうして顔にひつかゝりのあるその上馬鹿な年寄の女中を使つてゐた理由もそれだ。不愉快だね、あんな女中を何故置くのだと、たづねた時には、朝吹はただ苦笑して答へなかつたけれども。女體を好きな彼が歸朝して一年半にもなるのに、男ばかりで女のモデルは一度も傭はなかつた。「イレエヌがヒステリックになつてゐて、俺をひとりでは散歩にも出さない。」とこぼしたことが一度あつた。「それはやはり、お互におぼえのあるノスタルヂヤに罹つてゐるのだ――それに言葉がわからないとなほのけ者にされてゐる氣がするものだから、早く日本語を教へようではないか。」と、その時にはそんな話をしたつけが。

「不憫だから」――「不憫だから」？　なるほど愛してゐる女が理由のない嫉妬に陷込つてゐるのを見るのは、腹も立つだらうが、不憫であらう。――嫉妬は地獄だといふが、それが殊に異境へ來てゐるのだから。

これだけでは何だかまた理由は不充分であつたが、でも外には思ひ當る節もない。

「朝吹もきつと[illegible]になつてゐたのだね――朝吹[illegible]

[illegible]

八

翌日の午後になつて婆やが玄關で誰か若い女と應對してゐるのを聞きつけた伊上はのぞいて見た。覺えのある顔だつた。伊上はその女を思ひ出した。それは××の路上で朝吹に劍を賣つた女であつた。彼女は婆やに向つてしきりに弔辭を述べては、突發事を且つ悲しみ且つ怪しんでゐるのであつた。彼女も參考人として呼び出され聞取書をとられた歸りがけにここに立寄つたといふのであつた。伊上はその娘の前に出ながら言つた。

「あなたですか。きのふあの品物をとどけたお使ひといふのは？」

若い女は伊上の現れたのとその言葉とに愕いたらしかつたが、すぐに彼を認めて、もう一度丁寧に弔ひと愕きと悲しみとの言葉を繰り返し出した。目を伏せ、言葉をはずませてゐた。伊上は彼女を室のなかへ招じた。彼女はためらはずに上つて來た。さうして伊上の問ひに答へて、朝吹の昨日の様子を話した。

「いろいろな人の名前などお聞きして來ましたので、よくは覺えては居りませんけれども、[illegible]上手な人があつたのですつてね。それから[illegible]

[illegible]

した。鋏を使ふ身ぶりなどもして見せて下さいましたが、ひとりでそんなに面白さうに語りつゞけてゐるといふことはへんでない事もなかつたが、人によつてはこれも格別變つた事ではないかも知れない。

「でもわたし、今日さつき訊ねられた時には、やつぱり少しはへんであつたと答へましたわ。きつとさうに極つてゐますもの」

女はてきぱきと要領よく言つた。朝吹はその間、彫刻家の目で彼女を正面からも側面からもまた背面からさへも見た。若さより外には格別に美しいとも思はなかつた。年は十九でもあらうか。

突然、彼女は話し終つて目を上げた。伊上は何ものよりも美しい目を發見した。まるでそれは秋の空である。最も深い心の底からのぞき出してゐる。――聰明と純潔と切願と悲哀と希望と驚歎と……何もかも一ぺんに溶かし込んである。

「有難たう。あなたのその證言はきつと朝吹の爲めになりますよ」

彼女はイレエヌの葬ひの日をたづねて歸つた。

九

朝吹は殆んど一晝夜の間、口を利かなかつたが、夕方になつてから、流麗なフランス語で喋り出した。通辯人が必要であつたが、通辯人はそれを聞いて、三十册ほどの現代及び十八世紀の小説本のめちやくちやになつた頁が一册に製本されてゐるやうな印象の外には、要領といふものをつかむことが出來なかつた。

朝吹の父の兄弟九人のうちには狂人がひとりゐた。それから彼のアトリエの棚には、醫者や司法官の目にはまるで無意味な物品があまりに澤山羅列されてゐた。朝吹には監獄よりは精神病院の方が適當らしいと判斷された。實際、さういふ論者もあるのだが、すべての殺人者には死刑臺よりも病院の方が適するし、すべての藝術家の血統のなかには多分きつと一人以上の狂人がゐるだらう。

一〇

伊上は朝吹のアトリエを留守することになつた。さうして仕事に沒頭しながらも、ふと時折、彫刻は果して美しい瞳の色を表現することが出來るかといふやうな馬鹿々々しい問題を考へたり、大理石へ黒曜石を嵌入してみたらなどといふそれこそ愚にもつかない手段を眞面目に考へてみてゐることがあつた。この瞳の主の身元は無論すぐに知り得たが、それは××の店の賣子ではなかつた。××の二階に會場を借りた美術商人の姪であつた。伊上は美術商へ熱心に出入することになつた。さうして朝吹のやうには自由の利かない懐から、度々大して

氣に入つたのでもない品物を買ひ入れることがある。叔父の「商賣」の手つたひをしてゐる彼女は、その品物をとどけた

一

彼女が最初に伊上のところへ來た時には、アトリヱの隅にあつたイレエヌの立像をつくづくと見た。さうして伊上とこんな會話をした。

「この方は誰方ですの」

「朝吹の細君です」

「まあ、こんなお綺麗な方でしたの！」

第二度目に彼女が來た時には、伊上とこんな會話をした。

「先生、あんな事があつてもこのお家、さびしい事はございませんの」

「いいや、僕はこのうちよりあの婆さんの方が氣味が惡かつたので彼奴に出てもらひましたよ」

「それではおひとりなの？」

「え。實に不自由でね―」

三度目に彼女が來た時には、伊上とこんな會話をした。

「朝吹さんは病院に居らつしやるのですつて？　まあお氣の毒ですわ」

ね――わたし、[illegible]病院の[illegible]ことがありますの。そこをとほると、いつも或る人の聲で五千圓、五千圓、[illegible]ん、すみません」てさう云つてゐるのよ。あんまりいつも聞くので、わたし耳についてしまつて困つたのよ。――さう十二三の時よ。」

「朝吹はあの日、ほんとうに女の劍術使ひの話などしたのですか、一時間も。」

「え。どうして？」

「きつとあなたが好きだつたのだ。――無理もない事だ――あなたは、ほんとに可愛いのだから――朝吹と僕とは殆んど何もかも共通の感じを持つてゐる」

彼女は耳まで赤くしてうつむいてしまつた。

二

伊上は決してさういふ男ではなかつたが、彼女があまりしほらしいので、とても口では言へないと思つた。そこで彼は手紙を書いた。

一生ボヘミヤンで暮さうと思つたこの男も、彼女を見て人並な願ひを持つたのが不思議と言へば言へる。彼女からは何の返事もなかつた。

その代りに彼女の叔父である骨董商人が伊上に面會を求めた。伊上は自分の作品が[illegible]されるものと期待をかけてゐると、この上なく意外にも、伊上の[illegible]を、彼女の叔父が[illegible]してゐるのであつた。こ[illegible]

家を以て自任してゐた。さうして伊上の製作品を見てこの未完成の大家を認めた。彼は伊上を祝福した。と云ふのは彼の姪は孤兒でほんの少しだが遺產を持つてゐたし、そんな事よりも彼女は模範的な性質の娘だといふのであつた。先づ第一に、今時の世間の若い女なら男からの戀文を保護者に披露する筈がない。それも彼女は決して伊上を嫌つてゐたのではないらしいからなほ珍重なのだなどと、叔父は頗る滿悅してゐるので、伊上はかへつて恐縮した程である。

一三

彼がそれほど嫉妬深い男であつた事を知つて驚いたのは、先づ彼自身であつた。彼の妻がどうしても朝吹を戀してゐるに違ひないやうな氣がする。試みに朝吹の話をしてみると彼女は必ず深い悲歎の顏色に變る。溜息をする。——彼女の氣持は判らないにしても尠くとも、朝吹は一目で彼女を愛したにちがひない。愛したとまでは言へなくとも興味を持つた。やつぱり彼女の瞳が氣に入つたに違ひない。だが彼女がそんな瞳を朝吹に向けたとすれば、やつぱり朝吹に歎美の視線を注いだのだ。朝吹は美丈夫に違ひない！　あの日、劍を買つた日、朝吹と彼女とは應對した。朝吹は異常に機嫌がよかつた。氣に入つた品物を見つけた時の興奮とばかり思つてゐたのに、氣に入つたのは品物ではなくつて彼女であつたのかも知れない。きつとさうだ——あんなくだらない劍と盾とが朝吹の好奇心をひく筈がないでは無いか。——朝吹が一時間ばかりも女劍士の話をする。そんな話題が朝吹の頭のどんな隅にあつたらうか。朝吹が劍を操る眞似をしてみせる。そんな型を朝吹がいつどこで覺えてゐるだらう。さうだ、彼女は出鱈目を言つてゐる。彼と彼女とは何かもつと別の話に耽つてゐたのだ。別の話？柔かにその肩に手を置いて、彼が彼女に囁いてゐるのをイレエヌは見たのだ。その翌日の彼女のあの意味の深い瞳。それは朝吹に對する無限に複雜な感情を表はしてゐるものだつた。おれは何といふ馬鹿だらう。彼女が朝吹に示してゐる熱情を今まで氣づかずにゐた……

一四

朝吹は卑怯な奴だ。イレエヌを殺して置きながら罪の裁きを受ける勇氣がないから、にせ氣違ひになつてゐる、と言つてやつたら、妻の奴は強い反抗するやうな目つきでおれを見つめたが、すぐに切なさうに目をおとした。あいつは今に病院へ朝吹に逢ひに出かけるかも知れない。めつたにはひとり外出はさせられない。しかしおれは女ではないから、嫉妬の感情などは一言も外に洩してはならない。ただ、彼女が朝吹に對して抱いてゐる感情だけはどうしてもすつかり浚ひ出して

しまはずには措かない……

一五

伊上の妻は女中に話してゐる。

「旦那さまはこのごろお仕事が少しも出來ないのと、それに二年ほど前に氣が違つたお友達のことを案じて、いつもあんなに默つてゐらつしやる。でも、ほんとうはあんな氣むづかしい時ばかりでもない。元氣ないきさくな方なのだから、きつとそのうちには直りますよ。氣が腐るだらうけれど、どうぞ我慢をしてここにゐて頂戴ね。わたしはもしや、あんたにでも行つてしまはれると淋しくつて困るのだからね」

「大丈夫でございますよ、奥さま。」女中は答へた「わたしはいつまでも奥さまのお傍に置いて頂きます。わたしはいつも田舍へさう申してやりますのですよ、旦那さまは少しお氣むづかしいけれど、奥さまはそれこそ優しいお方なのだから、わたしは奉公をしてゐるやうな氣がしませんつて……」

二十ぐらゐにもなつてもう人妻には浮世の浪に押流されたと見える女中は、まだ年の若い自分の女主人をほんとうに同情し信愛してゐるらしい。伊上の妻がどれだけ動的な女かを理解する者がここに一人ゐるのだ。やさしい事を言はれた主人の方は、そのためであるかどうか、涙をこぼしてゐる。

「奥さま。旦那さまよりももつと困るのは」女中はわざとへうきんに言つた「あの床でございますよ。あちからもこちからも木屑がむく／＼と湧いて來まして、まるで錐でもんでゐるやうなあんばいなのですもの」

女中はアトリエの床をいふのだ。ラワンといふ南洋材を用ゐてあるが、それは表面は塗料のため大した破傷とも見えないのに、昨日掃除の時偶然發見したところでは、その板の内部はまるですつかり虫に食はれ、それが最も細かい木屑になつてしまつてゐる。紙のやうにうすいしかしそこだけは虫に侵されない表面を偶然に壓すと、そこから木屑は燐のやうに四方へ散ばつた。ハミガキ粉の紙袋を引き裂いたやうであつた。

「本當にあの虫はどうにかしなければならないわね」

一六

あいつはたしかに一つの秘密を握いてゐる。それに[illegible]たには、あれは[illegible]のうちに十分[illegible]七の[illegible]を、今[illegible]に一[illegible]

のです。あなたはどうしても女剣士の話を一時間ぐらゐはきけれ
ば御承知をなさらない。——でも、私は思ひ出すことなど出來ないのですもの。わたしはお友達にお願ひして、本をしらべていたゞいたのです。——尼寺から逃げ出して、男裝してゐるスペインの女の劍士の話。マドモアゼル・ド・モオパンといふ小說の筋書。その小說のモデルになつた本當のモオパンの話。十九の少女で立派な劍術の先生を打ち敗したヂカン・ルイの娘の話。何もかもみんな、本當に朝吹さんがあの時にお話なすつたこととは違ひます。でも、あなたがお氣が濟むやうにと思つて、わたしは女劍士の話をたくさんしらべて貰つたのです。わたしがあなたにおかくしした長い手紙といふのは、女劍士の話より外には何も書いてはゐないのです」

「それならば、その手紙を見せろ」

「ああ、どうしませう。それは破いてすててしまつたのです」

伊上は何か叫びながら突然妻君の片腕をつかむと、力まかせに突きのけた。彼女は二三步よろめいたが、物につまづいて後ざまに打倒れた。その彼女の上に、どつしりと落ちかかつたものは重い大理石のイ

んだ。晩秋の黄昏の光のなかに。眞白い鬼に組み敷かれたやうに。

編輯だより

◇黄菊白菊が一杯咲いたと思つたらもうことしの終刊のことばをかかなくてはならぬ。ジャーナリズムはこうした不自然さがときどきいやになる。

◇いつも明年からは！と誰でも力む。しかし總ての欄を通して明年からは内容に一大英斷を斷行する。潑溂として清新の水を漲らせる。いままでは新進を拔擢するに躊躇の氣味があつたが、正月號からはグイ／＼各方面からの俊材を牛蒡ぬきする。

◇久米正雄君は本社特派員として十一月下旬渡歐する。

◇本誌の懸賞創作の締切は十一月卅日迄である。

◇「石川啄木」全集は從來の全集の縮刷と云ふのではない。今回新に各方面から發見された三十餘篇の創作五百餘首の短歌四十餘篇の評論百數十通の書翰等を從來の全集に加へたのであるから全くその面目を一新した。それに土岐、金田一兩氏の熱心なる監修と啄木研究の權威吉田孤羊君が永い間苦心編輯に當つたのであるから、これこそ完璧無比な全集だ。全五卷で十一月下旬第一回配本を刊行する。

◇改造社版經濟學全集は福田博士の第一回配本といひ、河上博士の第二回配本といひ、その内容の堂々たる他に比儔がないので、申込者は大喜びである。今、尙ほ依然として追加申込殺到の狀勢にあるが、本社は出來るかぎりその要求に應じつゝある。第三回配本は本庄榮治郎博士の「日本社會經濟史」でこれまた讀者の期待にそむかぬことゝ信じている。

◇我經濟學界の權威であつた堀江歸一博士が逝れてから既に滿一年となる。我社はその全集編輯を思ひ立ち十二月二日その滿一周忌を期して第一卷を出版する。全部で八冊である。

◇「現代日本文學全集」の十二月配本は「高山樗牛」集である。小說、隨筆、評論、小品全部の代表作を悉く掲出した。樗牛の名作として嘖々の好評あつた、瀧口入道、月夜の美感、平家雜感、平相國、釋迦、淸見瀉日記、わが袖の記皆收錄した。

◇マルクス、エンゲルス全集第三回配本は既に發送した。內容の主なるものは新ライン新聞、新ライン評論、ドイツ農民戰爭、ドイツの帝國憲法戰役、賃銀勞働と資本等である。第四回配本は十一月廿七八日で、第五回配本は十二月十日の豫定。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和三年十一月十八日 印刷納本
昭和三年十二月一日 發行

定價 五拾錢（郵稅三錢）

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝 43 [illegible]

A-KU, TOKIO.

豫約募集

石川啄木全集

啄木の夭折は萬人をして愛惜せし[illegible]、[illegible]作品は全大衆の胸奥を衝いてやます。詩人として詩又一個敏感なる社

東京・芝・愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番